

遊戯王 振り子使いの
少年と連鎖使いの少女
～番外編～

DICHI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは主人公、遠藤遊輝とその仲間たちの生活を記録したものである……
私が執筆している『遊戯王 振り子使いの少年と連鎖使いの少女』の番外編です。更新ペースはかなり遅いです。

*2020年2月14日、新小説の番外編の投稿に伴いタイトルを変えました。
旧タイトル『遊戯王5D's 転生者と未来のカードたち』〈番外編〉

目次

オリカ集	1
人物設定	45
オリキャラ設定	精霊編 66
クリスマス番外編	クリスマスコン
サート	73
1周年特別企画	人気ランキング&
質問コーナー	94
コラボ	遊戯王5D's チー
ム・シグルス	167
コラボ	遊戯王 CROSS HE
RO	前編 212
コラボ	遊戯王CROSS HER

〇	後編	264
コスプレした3人の生活		318
番外編	軽音部のハロウィン	
	366	
4周年記念特別企画	第2回質問	
コーナー&人気ランキング		380
設定雑談集	キャラクター編	
part1		436
設定雑談集	キャラクター編	
art2		468
設定雑談集	用語設定&構成設定など	
	497	
番外編	新年デユエル初め	

- クリスマス番外編 シークレットライ
 者 前編
 コラボ 遊戯王 伝説を受け継いだ兄妹 697
- ブ in Merry Chris
 コラボ 遊戯王 伝説を受け継いだ兄妹
 者 中編
 コラボ 遊戯王 GX 後編 734
- t mas
 突発企画 忍風!シークレットシ
 コラボ 遊戯王 伝説を受け継いだ兄妹
 者 後編 756
- グナー(+a) ツボを取り返すの巻
 コラボ 遊戯王 GX 前編
- 563
 コラボ 遊戯王 A R C I V 夜天の来訪 795
- 者 前編
 コラボ 遊戯王 GX 中編 607
- コラボ 遊戯王 A R C I V 夜天の来訪
 者 中編
 コラボ 遊戯王 GX 後編 821
- コラボ 遊戯王 A R C I V 夜天の来訪
 者 後編
 エイプリルフル 怪盗アリアと遊輝 844 666

	の物語	867
	番外編 バレンタイン	912
	エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の	
物語	part 2	925
	エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の	
物語	part 3 前編	977
	エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の	
物語	part 3 中編	1012
	エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の	
物語	part 3 後編	1035

オリカ集

・遠藤 遊輝

ホワイト・サン・ドラゴン ★6

光属性 ドラゴン族 攻2400 守1500

☆6 モンスター×2

このカードの②の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードにX素材が存在する場合、このカードはカード効果では破壊されない。

②このカードのX素材を1つ取り除き自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは、このターン、相手に直接攻撃ができる。

選択した以外のモンスターは、このターン、攻撃できない。

③このカードが破壊され墓地へ送られた時、墓地に存在するSモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ブラック・サン・ドラゴン ☆8

闇属性 ドラゴン族 攻1000 守2100

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

①このカードの特殊召喚成功時、自分の墓地に存在するXモンスター1体を選択して、装備カードとしてこのカードに装備する。

②このカードの攻撃力は装備したXモンスターの攻撃力分アップする。

③このカードが破壊される時、代わりにこのカードに装備した装備カードを墓地に送る事で破壊されない。

④このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するXモンスター1体を特殊召喚して、このカードをX素材として下に重ねる事ができる。

CXホワイト・ゴッド・ドラゴン ★7

光属性 ドラゴン族 攻3000 守2100

☆7モンスター×3

「CXホワイト・ゴッド・ドラゴン」の③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードにX素材が存在する場合、このカードは1ターンに2度まで、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。

②このカードが破壊され墓地に送られた時、自分の墓地に存在するSモンスター1体を特殊召喚する。

③このカードは「ホワイト・サン・ドラゴン」をX素材としている場合、以下の効果を得る。

・このカードのX素材を1つ取り除き発動する。

相手フィールド上に存在する表側表示モンスターを全て破壊する。

ブラック・サン・ドラゴン／バスター

☆10

闇属性 ドラゴン族

攻1500

守2600

①このカードは通常召喚できない。

②このカードは「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚できる。

③このカードの特殊召喚成功時、自分の墓地に存在するXモンスター1体を選択し

て、装備カードとしてこのカードに装備する。

④このカードの攻撃力は装備したXモンスターの元々の攻撃力の倍の数値分だけアップする。

⑤このカードは装備カードを装備している時、相手のカード効果によって破壊されない。

⑥フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する「ブラック・サン・ドラゴン」1体を特殊召喚することができる。

白銀太陽神

ホワイト・アマテラス・ドラゴン ★12

光属性

ドラゴン族

攻4000

守4000

光属性☆12モンスター×5

自分フィールド上に「暗黒太陽神 ブラック・スサノオ・ドラゴン」が存在しない

場合、このカードの②③④の効果は無効になる。

①このカードはX召喚及び「未来へと登りし太陽」の効果でしか特殊召喚出来ない。

②このカードは魔法・罫・モンスター効果の対象にはならず、カード効果では破壊されない。

③このカードの特殊召喚成功時、このカードと「暗黒太陽神 ブラック・スサノオ・ドラゴン」以外の表側表示で存在するカードの効果を全て無効にする。

④このカードにX素材が存在する場合、このカードは以下の効果を得る。

・このカードがフィールド上に存在する限り、相手は1ターンのに1度しか魔法・罫・効果モンスターの効果を使用できない。

・このカードがフィールド上に存在する限り、相手は1ターンのに1度しかモンスターを召喚・特殊召喚・反転召喚できない。

暗黒太陽神 ブラック・スサノオ・ドラゴン ☆12

闇属性 ドラゴン族 攻4000 守4000

闇属性チューナー2体+闇属性モンスター3体

自分フィールド上に「白銀太陽神 ホワイト・アマテラス・ドラゴン」が存在しない場合、このカードの②③④の効果は無効になる。

①このカードはS召喚及び「未来へと登りし太陽」の効果でしか特殊召喚出来ない。

②このカードは魔法・罫・モンスター効果の対象にならず、カード効果では破壊されない。

③このカードは1ターンのに2度まで攻撃することが出来る。

④このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

不死鳥龍フェニックス・ドラゴン ★8 〈DDさん投稿〉

光属性 ドラゴン族 攻3600 守1000

☆8 モンスター×2

「不死鳥龍フェニックス・ドラゴン」の②の効果はデュエル中に1回しか使用できない。
 ①1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。相手フィールドのカードを2枚まで持ち主の手札に戻す。

②このカードが墓地に存在する場合、お互いのエンドフェイズ時に発動できる。

自分の墓地のこのカード以外のモンスターを全てゲームから除外してこのカードを特殊召喚する。

この方法で特殊召喚した場合、相手のフィールドのカード3枚まで持ち主のデッキに戻す事が出来る。

この効果発動に対し相手は魔法、罫カードを発動できない。

ガガガレディ ☆7 〈光さん投稿〉

闇属性 魔法使い族 攻2300 守2000

チューナー1体+「ガガガール」

このカードは墓地から特殊召喚出来ない。

①1ターンに1度、特殊召喚されたモンスター1体を選択し、選択したモンスターの攻撃力を0にする。

この効果は相手ターンにも使用することができる。

②このカードが除外されたとき、デッキ・墓地から「ガガガガール」1体を特殊召喚する。

ガガガマザー

★6

〈追中命さん

投稿〉

闇属性

魔法使い族

攻撃力?

守備力?

闇属性・魔法使い族☆6モンスター×3

①このカードの攻撃力・守備力は自分フィールド・墓地・除外されている魔法使い族モンスターの数×1000ポイントアップする。

②この効果は以下のモンスターをX素材にした場合のみ発動する。

・ガガガマジシャン・・・このカードは戦闘及びカード効果では破壊されない。

③この効果は以下のモンスターをX素材にした場合のみ発動できる。

ガガガガール・・・1ターンに1度、自分のメインフェイズに発動できる。

相手は自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送らなければならない。

④この効果は以下のモンスターをX素材にした場合のみ発動できる。
 ガガガシスター・・・1ターンに1度、相手がモンスターを特殊召喚した場合にこのカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。その特殊召喚を無効にして持ち主のデッキに戻す。

XNo, 39 希望太陽龍 ソル・ホープ ☆10 へSD・クロニクルさ
 ん 投稿へ

光属性 ドラゴン族 攻4000 守4000

No, 39 希望皇ホープ+ブラック・サン・ドラゴン+ホワイト・サン・ドラゴン

このカードは闇属性モンスターとしても扱う。

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

①このカードが融合召喚に成功した場合、自分の墓地に存在するXまたはSモンスター1体を対象にして発動する。

そのカードを装備カードとしてこのカードに装備する。

②このカードの攻撃力と守備力は装備したモンスターの攻撃力、守備力分アップして、装備モンスターの効果を得る。

③このカードに装備カードが装備されている場合、このカードは相手の魔法・罠・モンスター効果を受けない。

④このカードがフィールドに存在する限り、このカード以外のフィールドの魔法・罠・モンスターの効果は全て無効になる。

魔の革命 デス・ザ・ロスト ☆8 〈メタルダイナスさん 投稿〉

闇属性 悪魔族 攻3000 守0

このカードを特殊召喚するターン、自分はこのカード以外のモンスターを特殊召喚することが出来ず、このカードを特殊召喚したターン、このカード以外のモンスターは攻撃出来ない。

「魔の革命 デス・ザ・ロスト」はデュエル中に1度しか出せない。

①このカードは自分フィールド上の闇属性モンスター1体をゲームから除外した場合のみ、手札から特殊召喚が出来る。

②このカードとの戦闘によって破壊したモンスターは墓地には行かず、ゲームから除外される。

③自分のライフが1000以下の時、このカードは相手モンスターに1回ずつ攻撃出来る。

④自分のライフが500以下の時、このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与える。

⑤エンドフェイズ時、この効果で特殊召喚したこのカードはゲームから除外する。

ガガガゲット

通常魔法

〈祝札さん投稿〉

①デッキから「ガガガ」と名のつくモンスター1体をデッキから特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

聖なる呪術の宝札

通常魔法

〈龍南さん投稿〉

①自分の墓地の罨カードを3枚除外して発動する。
デッキから2枚ドローする。

未来へと登りし太陽

通常魔法

このカードの発動に対して魔法・罨・モンスター効果は発動できない。

①自分フィールド上に「ホワイト・サン・ドラゴン」と「ブラック・サン・ドラゴン」が存在して、自分のライフポイントが1000ポイント以下の時のみ発動できる。

自分のフィールド・墓地のカードを全てゲームから除外して、自分のエクストラデッキ

キから「白銀太陽神　ホワイト・アマテラス・ドラゴン」と「暗黒太陽神　ブラック・スサノオ・ドラゴン」2体を特殊召喚する。その後、このカードを「白銀太陽神　ホワイト・アマテラス・ドラゴン」のエクシーズ素材として下に重ねる。

バーニング・サン　速攻魔法　〈SD・クロニクルさん投稿〉

①このカードを発動したフェイズによって以下の効果を発動する。

・自分のメインフェイズ：デッキの上からカードを5枚見て、その中から2枚を選んで手札に加える。

それ以外のカードをデッキに戻してシャッフルする。

この効果を使用したターン、モンスターの召喚・特殊召喚できない。

・互いのバトルフェイズ：自分のモンスター1体の攻撃力をダメージステップ終了時まで倍にする。

その後、次の自分のメインフェイズ2まで攻撃力・守備力は0になり、効果を無効にする。

・相手のメインフェイズ：相手の魔法・罠ゾーンのカードを全て破壊する。

この効果の発動に対して、魔法、罠、効果モンスターの効果を発動することはできない。

この効果を使用したターン、このカード以外の魔法・罫を発動することができない。

ルナティック・レイン

永続魔法

〈SD・クロニクルさん投稿〉

①自分または相手がモンスター効果を発動するたびにこのカードにルナカウンターが1つ乗せる。

このカードにルナカウンターが8つある時、このカードを墓地に送って、デッキから3枚カードをドロウする。

このカードが自身の効果で墓地へ送られたターン、自分はLv5以上のモンスターを召喚・特殊召喚できない

・龍亞

D・ソードン

☆4

〈無零武さん

投稿〉

地属性

機械族

攻1200

守800

このカードの②の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このモンスターがフィールドに存在する場合、装備魔法扱いとして「パワー・ツール・ドラゴン」に装備する事ができ、攻撃力が1200ポイントアップする。

②このカードを装備したモンスターがフィールド上に存在する場合、表側表示のカードを1枚破壊する事ができる。

③このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

・攻撃表示：自分フィールド上に存在する「D」と名のついたモンスター1体をリリースし、自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップさせる。
「D・ソードン」のこの効果は1ターンに1度しか使えない。

・守備表示：このモンスター以外の「D」をリリースし、デッキから「D・シールドン」を特殊召喚する。

D・シールドン

☆3

〈無零武さん

投稿〉

地属性

機械族

攻3000

守1800

①このモンスターがフィールドに存在する場合、装備魔法扱いとして「パワー・ツール・ドラゴン」に装備する事ができ、守備力が1500ポイントアップする。

②このカードを装備したモンスターがフィールド上に存在する場合、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならない。

③このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

・攻撃表示：このモンスター以外の「D」をリリースし、デッキから「D・ソードン」

を特殊召喚する。

・守備表示：相手モンスターが攻撃宣言した時、このモンスターを攻撃対象に変更することが出来る。

パワー・ツール・ドラゴン／バスター

☆9

〈祝札さん投稿〉

地属性

機械族

攻2800

守3000

このカードの③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードは通常召喚できない。

②このカードは「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚ができる。

③デッキから装備魔法を1枚手札に加えることができる。

④このカードは装備魔法を装備している時、カード効果では破壊されない。

⑤このカードを対象とするカード効果が発動した時、このカードに装備されている装備カードを1枚墓地に送ることにより、そのカードの発動と効果を無効にして、破壊することができる。

⑥このカードが破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する「パワー・ツール・ドラゴン」を特殊召喚できる。

表裏の解放者リベレイター ゼネディクル ☆10 〈忍丸さん投稿〉

光属性 戦士族 攻2500 守1500

チユナー+チユナー以外の☆4以下のモンスター2体以上

「表裏の解放者 ゼネディクル」の②と③の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

①このカードは攻撃できない。

この効果は無効にされない。

②このカードがS召喚に成功した場合、デッキの上から五枚を確認する。

その中に存在するレベル4以下のモンスターを召喚条件を無視して可能な限り特殊召喚できる。

残りはデッキに戻してシャッフルする。

この効果で特殊召喚したモンスターの戦闘ダメージは0となる。

③このカードが墓地に送られた場合、自分の手札・墓地からレベル4以下のモンスターを可能な限り特殊召喚できる。

ツール・アタッチメント 装備魔法 〈s u r aさん投稿〉

「ツール・アタッチメント」の①の効果は1ターンに1度しか発動できない。

① デッキから装備魔法を墓地へ送り発動する。

このカードは次の自分のスタンバイフェイズまで墓地へ送ったカードと同名カードとなり墓地へ送ったカードと同じ効果になる。

メタルジェノサイダー 通常罠 〈SD・クロニクルさん投稿〉

① 自分フィールド上の機械族モンスターを対象にして発動する。

このカードを攻撃力1000ポイントアップする装備カードとしてそのモンスターに装備する。

② 装備モンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手に自分の手札の枚数×300のダメージを与える（最大1500まで）。

・龍可

ライトロード・スネーク キラー ☆3 チューナー

光属性 爬虫類族 攻600 守1100

① このカードはデッキから墓地に送られた時、墓地から特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚したこのカードがフィールドから離れる時、ゲームから除外す

る。

②このカードをS素材とする場合、他のS素材は「ライトロード」と名のついたモンスターでならなければならない。

ライトロード・バタフライ ファルファツラ ☆1 チューナー

光属性 昆虫族 攻0 守0

①このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを墓地から特殊召喚する。

ライトロード・シャーク スクアルス ☆3 チューナー

光属性 魚族 攻300 守300

このカードは通常召喚出来ない。

①このカードはデッキから墓地に送られた場合、特殊召喚できる。
②1ターンに1度、このカードは戦闘では破壊されない。

ライトロード・オラクル ゼウス ☆12

光属性 雷族 攻4000 守4000

「ライトロード・オラクル　ゼウス」の②の効果は1ターンに1度しか発動できない。
また、このカードは通常召喚できない。

①自分フィールド上の「裁きの龍」が破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時のみ手札から特殊召喚できる。

②自分のライフを半分払って発動できる。

このカード以外のフィールド上に存在するカードとお互いの手札を全て墓地に送る。
この効果の発動に対して、相手は魔法・罠・効果モンスターの効果を発動出来ない。
この効果を使ったターンのエンドフェイズ時、このカードをゲームから除外する。

エンシエント・コメット・ドラゴン

☆8

光属性　ドラゴン族

攻0　守4000

チューナー+エンシエント・フェアリー・ドラゴン

このカードの③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードはカード効果では破壊されない。

②このカードが戦闘で破壊されたエンドフェイズ時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、墓地に存在する「エンシエント・フェアリー・ドラゴン」1

体を特殊召喚することができる。

③フィールド上のカードを1枚選択して破壊することができる。

この時、破壊したカードの種類によって以下の効果を得る。

・モンスター：このカードの攻撃力は、破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする。エンドフェイズ時、このカードの攻撃力を0にして、このカードを守備表示にする。

・魔法：デッキからカードを1枚ドロウする。そのカードが、魔法カードだった場合、相手に見せることでもう一枚ドロウ出来る。

・罫：自分の墓地に存在するカードを1枚選択して手札に加える。

ジャステイス・ロード

フィールド魔法

〈祝札さん投稿〉

このカードの②の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードがデッキから墓地に送られた時、墓地からこのカードを発動する。

②手札の「ライトロード」と名のついたモンスター1体を墓地に送る事で、デッキから「ライトロード」と名のついたモンスター1体を墓地に送る事ができる。

③このカードが破壊された時、デッキからカードを2枚墓地に送る。

・ 葵 レミ

ドラグニティーバツカー

☆1

チューナー

風属性

ドラゴン族

攻200

守800

①このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターが魔法・罠カードの対象になった時、装備されているこのカードを墓地に送る事で、そのターン、装備モンスターは魔法・罠カードの効果の対象にはならない。

フエザー・ウイング・ドラゴン

☆8

風属性 ドラゴン族

攻撃力2800

守備力1500

風属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードがS召喚に成功した時、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し、このカードに装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

②このカードに装備された装備カードを墓地に送る事でこのカードは破壊されない。

③墓地の風属性モンスター1体をデッキに戻すことで、フィールド上のカード1枚を

手札に戻す。

風玉霊 エメラルド・クロック・ドラゴン ☆10

風属性 ドラゴン族 攻3000 守1700

風属性チューナー＋フェザー・ウイング・ドラゴン

「風玉霊 エメラルド・クロック・ドラゴン」の④の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードはS召喚でしか特殊召喚できない。

②このカードがS召喚に成功した時、墓地に存在するドラゴン族モンスターを任意の数だけ装備カードとしてこのカードに装備する。

③このカードの攻撃力はこのカードに装備されている装備カードの数1枚につき100ポイントアップする。

④このカードに装備されている装備カードを1枚墓地に送る事で、相手フィールド上の表側表示のモンスター1体の効果を無効にして攻撃力と守備力を0にする。この効果を使用したターン、このカード以外の自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。

⑤このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する「フェザー・

ウイング・ドラゴン」を特殊召喚できる。

聖なる呪術の宝札 通常魔法 〈龍南さん投稿〉

①自分の墓地の罫カードを3枚除外して発動する。
デツキから2枚ドローする。

・ 遊城 スバル

E・HERO マツハ・ウインド ☆2 チューナー

風属性 戦士族 攻300 守300

①自分フィールド上に「E・HERO」と名のついた融合モンスターが2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

E・HERO ダーク・ネオ ☆3 チューナー

闇属性 戦士族 攻0 守0

①このカードが召喚に成功した時、手札の「融合」または「フュージョン」と名のついたカードを1枚墓地に送る事で、自分の墓地に存在する「HERO」と名のついた融

合モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターのレベルは1つ下がる。

また、攻撃力は0になり、効果は無効化になる。

エンドフェイズ時にこの効果で特殊召喚したモンスターは破壊する。

E・HERO グランドマン ☆2 チューナー

地属性 戦士族 攻 100 守 100

このカードは特殊召喚できない。

「E・HERO グランドマン」はデュエル中に1度しか使用できず、またこのカードを召喚ターン、自分はこのカードをS素材としたSモンスターのS召喚での特殊召喚し
かできない。

①このカードをS素材とする場合、他のS素材モンスターは墓地の融合またはSモンスター1体でなければならない。その際、このカードとS素材にしたモンスターはゲムから除外する。

E・HERO マジカル・ウィッチ ☆4 〈龍南さん投稿〉

闇属性 魔法使い族 攻1400 守1000

①このカードの召喚に成功した時、自分フィールド上にこのカード以外の「HERO」と名のつくモンスターがいる場合、自分のデッキから魔法カードを1枚手札に加えることができる。

E・HERO スピリット・ドラゴン ☆8

地属性 ドラゴン族 攻撃力 2200 守備力 200

0

チューナー+チューナー以外の戦士族モンスター1体以上

このカードの①の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①自分の墓地の「HERO」と名のつく融合モンスターを除外する事で次の相手ターンのエンドフェイズまで、除外したモンスターの元々の攻撃力の半分の攻撃力を加え、除外したモンスターと同じ効果を得る。

②このカードが破壊された時、この効果で除外した「HERO」と名のつく融合モンスター1体を特殊召喚する。この特殊召喚は融合召喚扱いとする。

地玉霊 クリスタル・アース・ドラゴン ☆10

地属性 ドラゴン族 攻2500 守2400

戦士族チューナー+E・HERO スピリット・ドラゴン

「地玉霊 クリスタル・アース・ドラゴン」の③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードはS召喚でしか特殊召喚できない。

②このカードのS召喚成功時、ゲームから除外されている「HERO」と名のついたモンスターを全て墓地に戻す事ができる。

③墓地に存在する「HERO」と名のついた融合モンスターを選択して発動する。

次の相手のエンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力はこの効果で選択したモンスターの攻撃力分アップして、同じ効果を得る。

④このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「E・HERO スピリット・ドラゴン」を特殊召喚できる。

エレメンタル・トリック

速攻魔法

①自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついた融合モンスター1体リリースして発動する。

墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。

この効果で手札に加えたカードはこのターン発動できない。

摩天楼3ーミラージュタウン

フィールド魔法

〈龍南さん

投稿〉

「摩天楼3ーミラージュ・タウン」の①②の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使えない。

①1ターンに1度、「HERO」と名のついたモンスターを1体墓地から除外することでカードを1枚ドロワーできる。

②1ターンに1度、①の効果で除外した「E・HERO」融合モンスターカードによって決められた自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

ヒーロー工場 フィールド魔法

〈追中命さん

投稿〉

「ヒーロー工場」の①の効果は1ターンに1度しか使えない。

①このカードの発動時の効果処理として、手札を1枚捨てることでデッキから「HERO」と名のついたモンスターを1枚手札に加える。

①自分フィールド上の「HERO」と名のついたモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

・小野寺 響

氷結界の龍 ロンギヌス ☆10

水属性 ドラゴン族 攻2300 守1900

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

①このカードがS召喚に成功した時、このカードのS素材となったモンスターの数まで相手フィールド上に存在するカードを選択して墓地に送る。

氷結界の神龍 ヴオルガルス ☆12 〈メタルダイナスさん 投稿〉

水属性 ドラゴン族 攻3000 守2000

チューナー+チューナー以外のSモンスター1体以上

①このカードがシンクロ召喚に成功した場合、相手のフィールド上のカードを全て除外する。

②このカードがフィールド上に存在する限り、このカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターは戦闘及び相手の効果では破壊されない。

氷結界の魔法使い エターナル・マジシャン ☆12 〈雷影さん 投

稿

水属性

魔法使い族

攻3300

守2800

「氷結界」と名のついたチューナー+チューナー以外の「氷結界」モンスター2体以上？
 ①このカードがシンクロ召喚に成功した場合、このカードのチューナー以外のシンクロ素材に使用したモンスターの数まで相手の手札・フィールド・墓地の中からそれぞれ選んでゲームから除外する。

? ②このカードがフィールドから離れた場合、エクストラデッキから「氷結界」と名のついたSモンスター1体をS召喚扱いで特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。

アイス・スプラッシュ・ドラゴン

☆7

水属性

ドラゴン族

攻撃力

2500

守2500

チューナー+チューナー以外の水属性モンスター1体以上

「アイス・スプラッシュ・ドラゴン」の②の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードがS召喚に成功した時、相手の手札をランダムに1枚墓地に送る事が出来る。

②自分フィールド上の水属性モンスター1体を選択して、そのモンスターのレベル×

2000ポイントのダメージを与える。この効果を使ったターン、自分は攻撃出来ない。

水玉霊 サファイア・アイス・ドラゴン ☆10

水属性 ドラゴン族 攻2800 守2600

水属性チューナー+アイス・スプラッシュ・ドラゴン

「水玉霊 サファイア・アイス・ドラゴン」の③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードはS召喚でしか特殊召喚できない。

②このカードのS召喚時に発動出来る。相手フィールド上のカード1枚をゲームから除外する。

③自分フィールド上に存在する水属性モンスター1体を選択し、そのモンスターのLV×300ポイントのダメージを与える。

この効果を使ったターン、自分は攻撃出来ない。

④このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する「アイス・スプラッシュ・ドラゴン」を特殊召喚できる。

氷結界の意志

魔法

①自分の墓地に存在するLv4以下の「氷結界」と名のついたモンスター1体をゲムから除外して発動する。

除外したモンスターと同じレベルの「氷結界」と名のついたモンスター1体をデツキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力と守備力は0になり、効果は無効になる。

聖なる呪術の宝札 通常魔法 へ 龍南さん投稿

①自分の墓地の罨カードを3枚除外して発動する。

デツキから2枚ドロローする。

・ 水野 奏

共鳴の代行者 ネプチューン ☆3 チューナー

光属性 天使族 攻1100 守500

①1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の「代行者」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルをこのカードと同じレベルにする。

②「天空の聖域」が存在する場合、このカードは手札の天使族・光属性モンスター体とS召喚する事ができる。

この方法でS召喚したシンクロモンスターはエンドフェイズ時、墓地に送る。

導きの代行者 プルート ☆2 チューナー

光属性 天使族 攻300 守300

①このカードがS素材としたSモンスターがS召喚に成功した時、エンドフェイズまでSモンスターの攻撃力を300ポイントアップする。

②フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、自分は通常召喚に加えて「代行者」と名のついたモンスター1体を召喚できる。

堕天使リリス ☆6 〈フュージョニストさん投稿〉

闇属性 天使族 攻2450 守1000

①このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、エンドフェイズまで攻撃力を1000ポイントダウンする。

墮天使クリスティア ☆8 〈龍南さん投稿〉

闇属性 天使族 攻2800 守2300

①このカードはデッキから「大天使クリスティア」を除外した場合のみ手札から特殊召喚できる。

②このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はモンスターを特殊召喚できない。

③このカードがフィールド上から墓地に送られる場合、墓地へはいかずゲームから除外される。

輝く聖皇 アリエース ☆7 〈メタルダイナスさん投稿〉

光属性 天使族 攻2400 守1000

このカードは通常召喚できず、このカードの効果でしか特殊召喚できない。

「輝く聖皇 アリエース」はフィールドに一体しか存在できず、S素材とX素材にはできない。

①自分フィールドの天使族モンスターの攻撃宣言した場合に発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にして、そのモンスターをリリースし、手札のこのカードを特殊召喚する。

②このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。デッキからカウンター罠1枚を手札に加えることができる。

③このカードがフィールドを離れる場合、墓地のカウンター罠をゲームから除外できる。

時の革命 ミラダンテ ☆8

光属性 ドラゴン族 攻3000 守2800

このカードは通常召喚できず、このカードの効果でしか特殊召喚できない。

「時の革命 ミラダンテ」は自分フィールド上に1体しか存在できない。

①自分の墓地の光属性・天使族モンスターを3種類除外してこのカードを特殊召喚する。

このカードが特殊召喚したターン、自分はこのカード以外のモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚はできない。

②このカードの特殊召喚成功時、相手フィールド上の全てのモンスターを守備表示にする。

この効果で守備表示になったモンスターは次の相手ターンのエンドフェイズまで表示形式を変更できない。

③自分のライフポイントが500以下の場合、相手はモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚・セットはできない。

ライトニング・エンジェル・ドラゴン ☆6

光属性 ドラゴン族 攻2300 守1600

光属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの③の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードがS召喚に成功した時、自分の墓地のカウンター罫を1枚を手札に加えることができる。

②このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罫以外の罫カードを発動する事はできない。

③手札のカウンター罫を墓地に送る事で、デッキからレベル4以下の天使族モンスター1体を手札に加える。

光玉霊 トパーズ・ライト・ドラゴン ☆8

光属性 ドラゴン族 攻2600 守2000

光属性チューナー+ライトニング・エンジェル・ドラゴン

「光玉霊 トパーズ・ドラゴン」の②の効果は1ターンに1度しか使用出来ない。

①このカードはS召喚でしか特殊召喚出来ない。

②相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にして破壊することができる。この効果は相手ターンでも使える。

③このカードの攻撃宣言時、このカードが攻撃する相手モンスターの攻撃力と守備力をバトルフェイズ終了時まで入れ替える。

④このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する「ライトニング・エンジェル・ドラゴン」を墓地から特殊召喚できる。

神殿に眠る天使

通常魔法

①自分の墓地に存在する「神の居城ーヴァルハラ」をゲームから除外して、自分フィールドの天使族モンスターと墓地の天使族モンスターを1体ずつ選択して発動する。

選択したモンスターを破壊して、墓地から選択したモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、攻撃できない。

雷の矢 カウンター罠

①自分フィールド上に「ライトニング・エンジェル・ドラゴン」が表側表示で存在す

る時発動できる。相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

・櫻井 祈

ジェムナイト・クォーツ ☆4 〈フュージョニストさん 投稿〉

光属性 岩石族 攻1500 守1500 (通常モンスター)

ジェムナイト・マジシャン ☆3 〈龍南さん〉

光属性 魔法使い族 攻1000 守1000

①1ターンに1度、手札の「ジェムナイト・フュージョン」を1枚を捨てることで、除外されている「ジェムナイト」と名のついた融合モンスターカードによって決められた自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

②このカード以外の「ジェムナイト」と名のついたモンスターが自分の場に存在する限り、相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。

ジェムナイト・クンツァイト ☆8 へフュージヨニストさん 投稿

光属性 天使族 攻2000 守1800

『ジェムナイト・クォーツ』+『ジェムナイト』と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

①このカードの融合召喚に成功したとき、墓地の『ジェムナイト』と名のついたモンスターを5枚までゲームから除外するが出来る。

②このカードの攻撃力と守備力は、それぞれ除外したカードの枚数×300ポイントアップする。

③このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する限り、罨の効果を受けない。

ジェムナイト・ダークパール ☆9 へフュージヨニストさん 投稿

地属性 岩石族 攻3300 守2200

『ジェムナイト』と名のついたモンスター×3

このカードは融合召喚およびこのカードの効果でのみ特殊召喚できる。

『ジェムナイト・ダークパール』の①②の効果は、1ターンに1度どちらかしか発動でき

ない。

『ジエムナイト・ダークパール』はフィールド上に1体しか存在できない。

①このカードの融合召喚成功時、自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない場合、相手フィールド上のカードを2枚まで選び破壊する事ができる。

②このカードが墓地に存在する時、自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、手札の『ジエム』と名のついたモンスターを2体ゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事が出来る。

・成田恭輔

星輝士 ミルキー・ウェイ

★4

〈ドロイデンさん投稿〉

光属性 戦士族

攻1000

守3000

☆4 「テラナイト」モンスター×2

①このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果でフィールドから離れる代わりに、このカードのエクシーズ素材を一つ取り除く。

②このモンスターが墓地に送られた場合、デッキから「テラナイト」モンスターを1体特殊召喚する。

・十六夜 アキ

フレア・ローズ・ドラゴン ☆8 〈忍丸さん投稿〉

炎属性 ドラゴン族 攻3000 守1500

植物族チューナー+ブラック・ローズ・ドラゴン

このモンスターはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

「フレア・ローズ・ドラゴン」の①と③の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

①このカードがS召喚に成功した場合に発動できる。フィールド上のカードを任意の枚数選択して持ち主のデッキに戻す。

②このモンスターの攻撃宣言時、自分のライフが相手よりも低い場合、このカードの攻撃力はダメージステップ終了時まで倍になる。

③自分のスタンバイフェイズ時、墓地からレベル5以上の植物族またはドラゴン族モンスター1体を特殊召喚できる。

・鬼柳 京介

インフェルニティ・デス・リーパー ☆1

閻属性 悪魔族 攻0 守0

「インフェルニティ・デス・リーパー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

①自分の手札が0枚の時に相手が「自分フィールドのモンスターを破壊する」効果を持つ魔法・罠・モンスター効果が発動した場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動できる。

その発動を無効にする。

その後、相手は以下の効果から一つを選択する。

・相手はデッキからカードを1枚ドロウする。

そのカードがモンスターカードだった場合、自分フィールドのモンスター1体を選んで破壊し、1000ポイントのダメージを受ける。自分フィールド状にモンスターがない場合、自分は1500ポイントのダメージを受ける。

モンスターカード以外だった場合、相手フィールド・手札・墓地のカードを全てゲームから除外して、除外したカードの数×500ポイントのダメージを相手に与える。

・このターン、相手フィールドのカードは破壊されない。

・ハンス

カラクリ天魔王 無頼

☆10?

〈ドロイデンさん

投稿〉

地属性

機械族

攻3100

守1500

? 地属性チューナー+チューナー以外の機械族モンスター2体以上?

① このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキから『カラクリ』と名のつくモンスターを1体特殊召喚する。

? ② 1ターンに1度、このカード以外のフィールドの『カラクリ』モンスター1体と手札の『カラクリ』チューナーモンスター1体を墓地へ送ることで、そのモンスターのレベルの合計と同じレベルのチューナー以外の地属性SモンスターをS召喚扱いでエクストラデッキから特殊召喚する。

・ S P

S P シンクロ・リフト

① S P C が6つ以上ある時、墓地のSモンスター1体をゲームから除外して発動する。

除外したモンスターよりもレベルが高いSモンスター1体を選択して墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化となり、エンドフェイズ時にゲームから除外する。

SP—エレメンタルチェンジ

自分のSPCが3つ以上ある時に発動出来る。

自分フィールド上のモンスター1体を選択して、選択したモンスターの属性をこのターンのエンドフェイズまで自分が宣言した属性にする。

SP—ガガガリベンジ

装備魔法

自分のスピードカウンターが6つ以上ある場合、自分の墓地の「ガガガ」と名のついたモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターを破壊する。

また、装備モンスターがエクシーズ素材になる事によってこのカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上の全てのエクシーズモンスターの攻撃力を300ポイントアツ

プする。

SPーマジック・プランター 通常魔法

自分のスピードカウンターが4つ以上存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在する永続罫を1枚墓地に送って発動する。

デッキからカードを2枚ドロウする。

SPIRUMバリエアンズ・フォース 通常魔法

自分のスピードカウンターが3つ以上ある場合、自分フィールド上のエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターと同じ種族でランクが1つ高い「CNo.」または「CX」と名をついたモンスター1体を、選択したモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

その後、相手フィールド上にエクシーズ素材が存在する場合、相手フィールド上のエクシーズ素材1つを、この効果で特殊召喚したエクシーズモンスターの下に重ねてエクシーズ素材とする。

S P I マスク・チェンジ 速攻魔法

①自分のスピードカウンターが3つ以上ある場合、自分フィールドの「HERO」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを墓地へ送り、そのモンスターと同じ属性の「M・HERO」モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

人物設定

遠藤 遊輝

前世 17歳 現在 12歳↓14歳

誕生日： 12月12日

シグナーの痣：太陽

外見：腰までの黒髪、大きな目で見た目は女性、身長が150手前しかないので女子小学生と間違える事も、緑色のチェニツクに水色のシャツを重ね着、シャツは半分折つてある。(ようは見た目は女の子な男の娘なのだ)

(イメーヅはリトルバスターズ!の直枝理樹)

トレードマーク：赤のカチューシャ

デツキ

1・・・ガガガエクシーズ↓ガガガ魔術師

2・・・聖刻龍

3・・・マドルチェ(女装した(させられた)時のみ使用)

その他、海馬コーポレーションのテストプレイヤーとして色々なデツキを作っているが基本的にも上3つが主流。

精霊

- ・ダイヤ（ガガガマジシャン）
- ・パール（ガガガガール）
- ・プラチナ（銀河眼の光子竜）
- ・ブラック（ブラック・サン・ドラゴン）
- ・ホワイト（ホワイト・サン・ドラゴン）
- ・サファイア（ガガガシスター）

担当：ギター・ヴォーカル・（ベース）

突然死んで5D'sの世界にきたこの小説の主人公で、アカデミア五剣士。

決闘は前世でもやっておりますが好きだが、いわゆるファンデツキなので、大会では良くて

3 回戦まで。

使っているデッキは、初期はZ E A X Lの遊馬をモチーフにしたデッキだが、途中から《ガガガ》を中心にしたエクシーズデッキになっていき、色んなエクシーズモンスターを出せる。(この世界のルールでは危ないため、マッシュ||マツクは禁じ手として余程の事がない限り使わない)

自分の身を守るためといって空手・柔道・剣道を習ってた。剣道の腕前は異常によく、習って4年で全国優勝した。そのためリアルファイトで負けたことが滅多にない。中学時代はよく不良に絡まれたいじめっ子を助けるために一人で果敢に挑んでいた。

身体の治癒力は異常なまでに良く、骨折が一晩寝たら治ってしまう。

幽霊とか怪談は苦手で、しょっちゅう気絶している。

恋愛感情は鈍感。同い年の女子と寝ても何も思わないほど。それ以前に見た目が可愛い女の子みたいな感じなので「恋愛対象」ではなく「お人形」と見られる事も重なっている。

上記の通り、見た目が見た目なのに普段は男にしか見えない。理由は本人がクールな振る舞いと「俺」口調をしているため。しかし、前世の学園祭の劇の時に無理矢理女装

させられた結果、とてつもない美人になる事が判明。劇終了後、教室に帰るまでに10近くの男子生徒に告られたという伝説（という名の黒歴史）を持っている（笑）

そして、とにかく料理がうまい。中学校卒業のとき、海外の三ツ星レストランからスカウトがくるほど。本人曰く「家族で作れるのが俺だけだから」。幼少期に外食ばかりしていた母親に「料理を作って」と言われて出された料理を食べた後、原因不明の病気で3日ほど入院されられて、それ以来自分で料理をするようになった。ヒマさえあれば、料理研究や市場にいつて珍しい食材を探す。

アカデミア編入の次の日に、軽音部にほぼ強制的に入部させられて、しかも1ヶ月後に文化祭のコンサートがあったため、レミ達のスパルタ指導によりわずか1ヶ月弱でギター・ベース・ヴォーカルが出来るようになった。ただ、奏がヴォーカルに専念し、レミがベースになったのでギターを弾く事が多い。

転生した先の文化祭で女装させたらかなりの美女だということを皆に暴露てしまい、

よくレミに捕まり、コスプレをやらされてしまう。最近、感想内でも「主人公ではなくヒロインではないか」とか「性別絶対に変えるべきだ」とか「性別偽っているんじゃないか?」と、まあ色々言われている。(笑)

(メイド服・ウインダ・マジョレーヌ etc. . . .)

他にも、電気が流れる伊達メガネをかけられて執事になって面倒事の解決を任されてしまうなど、確実に苦労人の道を辿っている。

海外公演後、シグナーの能力覚醒で新たに生命を司る能力を得た。自分や相手の怪我・体力などを回復したり神経を操って潜在能力向上・ヒト特有の神経を変えたりすることが出来る。ただし、あまり使い過ぎると自分自身の生命力が落ちてしまい、3日間くらい寝続けたり、もつと酷い事になるため使い過ぎないようにしている。

海外のファッションショー後、モデル事務所からオフアアが来てしまったが、茜のお母さんが勝手にモデル契約をしてしまった。レミが電話すればいつでも女装モデルとして働く運命になってしまい、レミに逆らえなくなってしまうた。

葵 レミ

13歳↓15歳

誕生日：7月12日

シグナーの痣：羽

外見：大きな茶色の髪にポニーテールをして纏めている。赤のカチューシャをして大きな目をしている。ワンピースを着ている（イメージは……考えてない。一応、響ミソラ）

トレードマーク：緑のバレッタ

デツキ ： ドラグニティ

精霊

・ドラグニティーフアランクス

・フェザー・ウイング・ドラゴン

担当：ベース・ハーモニカ・ギター・（コーラス・ヴォーカル・etc……）

アカデミア軽音部のリーダーで、アカデミア五剣士の1人。

別名、龍の姫。

響・奏・スバルとは小等部からの幼馴染で仲が凄く良い。そのため、バンドでは息が
あい、かなりのレベルである。

父親が楽器の製造会社に関わっていたため、幼い頃から楽器にはたくさん触れてお

り、響たちに「バンドをやろう！」と言ったのもレミが始まり。

デュエルの腕前は中等部1位を争うほどあるのだが、突発して掛けている物が無いので、スバルとやるとチートドロで負ける。

決断力が早く、行動力があるため、バンドのリーダーを務め、レミが仕切った公演は全て大成功と収めている。

手先も器用で、現在までにある程度までなら全ての楽器を弾くことが出来る。が、本人が「ベースの方が得意からベース」とベースを務めている。

だが、料理は下手。遊輝曰く、「これ……俺では教えられない……」

遊輝を女装させたら美女だということを知っているから、何かに目覚めてしまい、今まで以上に暴走するようになり、暴走したら誰も止められず、寧ろ返り討ちにあつて巻き添いを喰らう。

過去に他の作者方のキャラを数人メイド服や執事服・コスプレをさせた凄い人物。

海外公演後、シグナーの能力が覚醒して時を操ることが出来た。自分自身の意思で時間を止めたり、動かしたりする事が出来る（過去にいつたり未来にいつたりすることは出来ない）。そのため、時を止めている間に色々準備をするようになったため、1日が実質30時間以上感じることがあり、最近良く欠伸をする機会が増えている。

遊城 スバル

12歳↓14歳

誕生日： 1月12日

シグナーの痣： 剣

外見：肩に届きそうで届かない黒髪に大きな黒目、首には緑色のネックレスをかけていて、赤のチュニツクを着ている。(イメージは遊城十代の髪を黒髪)

トレードマーク：オレンジのバンダナ

デツキ

1・・・属性ヒーロー

2・・・M・HERO

精霊

・ハネクリボー

担当：ドラム・(コーラス)

アカデミア五剣士の1人で、GXの十代の子孫。

別名、大地の戦士

十代同様デュエル馬鹿で、勉強の方はダメだけど「楽しいデュエル」をモツ等にして
いる。

それでも、部内だとまだしつかりしていてデュエル以外の事になれば、奏についての
常識人。

デュエルの腕前は言うこともなく、五剣士の中で1番を争うほど強く、十代譲りの
チートドロロー持ちでここぞの場面でキーカードを引く。そのためか、龍可と何故か話が
合う。(それでも、龍可に負け越している)

ドラムは中等部進学時にレミに誘われて(脅されて)始めた。レミや奏たちの指導を
うけ、みるみるうちに上達していき、遊輝が入った時には、皆が認める程上手になっ
ていた。

意外や意外に、機械に強い。デュエルデスクの修理ならお手の物で、車を分解・組み
立てが出来る。

そこで、家に居るときは修理屋として小遣い稼ぎをしている。

上記のように、機械に強く本人が「大きな発明をしたい！」と言って、レミから頼ま

れた全自動着替えマシンを開発した。(ただ、どうしても着替えが出来なくなるボタンを付けないと、上手くいかないらしい。この辺がまだまだな所)

肝心の機械はレミが持っているので、開発した本人でもレミの暴走は止められない。

海外公演後、シグナーの能力が覚醒、地面だけでなく植物や木々などの地球上に生息する生命を持つものを操る事ができるようになった。そのためか、植物の状態などに詳しくなってしまう、どのようにすれば元気になるかなどの知識も勝手に習得してしまっ

小野寺 響

13歳↓15歳

誕生日： 5月16日

シグナーの痣：水

外見：赤茶色の髪をツインテールにして、それでも腰より上まで伸びている。黄色のリボンカチューシャをしている。普段はTシャツにノースリーブのパーカー、キュロットと男っぽい服装(イメージは北条響)

トレードマーク：水色のシユシユ

デツキ：氷結界↓氷結ヒーロー↓氷結界

精霊

・ブリザード・プリンセス

担当：キーボード・（コーラス）

アカデミア五剣士の1人。

別名、水の先導者

両親が有名な音楽家でピアノを弾いていたが、父親と些細なことでケンカをしてしまいピアノをやめてしまう。

そこからは音楽と離れていたが、レミに「もう一度やろう!」と言われピアノを再び始め、父親とも仲直りする。

それからは、レミと奏、中等部から入ったスバルと共にバンドをする。

明るく奔放な性格で、人一倍正義感が強いが、寂しがり屋でおちよこちよい。（本編にはそんな仕草がほとんど無いが）

デュエルの腕前は、なかなかの物でレミやスバルと対等に戦える。最近、スバルからヒーロー関係のカードを譲って貰い、試行錯誤しているが、それでも良い勝負。

大の甘い物好きで、奏の作るカップケーキを毎日食べている。

そんな訳で普通は太っても良いんだが、本人は運動好きで毎朝ジョギングをしている。そして部活が無い日は、運動部の助っ人で試合に出させてもらっている。

運動能力が鬼畜過ぎて、男子プロ選手と同レベルのスキルがあり、助っ人に入ったチームを優勝・準優勝に導く。

(どれくらい凄いかと言うと、硬球を投げさせた時、サイドスローで平気で150km/h越え、テニスのサーブで200km/h近く出る)

海外公演後、シグナーの能力が覚醒。水だけでなく、氷を扱う事もできるようになった。そのため、夏でも簡単に雪を降らす事ができ、よく近所の子供たちの奉仕作業で雪や氷を作っている。

水野 奏

13歳↓15歳

誕生日： 6月8日

シグナーの痣：雷

外見：亜麻色の髪をポニーテール、ピンク色のリボンで結んでいる。大きな目で黒

目のところが緑色の目をしている。淡いピンク色のチュニツクを着ている。（イメージは南野奏）

トレードマーク：黄色の伊達眼鏡

デツキ

1・・・代行者パーミッション

2・・・終世↓墮天使

精霊

・神秘の代行者　アース

担当：ヴォーカル・ギター

アカデミア軽音部のメインヴォーカルを務める。

家業がカツプケーキ屋でケーキ作りが得意で、部の中で一番勉強ができる。

しっかりとした性格で芯が強く、相手にしっかりと本音を言える。（作者が受験勉強の時に預かってもらっている間に性格が変わっている気もするが・・・）

可愛いもの好きで、たくさんのぬいぐるみみが部屋に飾ってある。

また最近、ぬいぐるみ以外にも目を行き始め、可愛い物ならなんでも抱きつこうとしてしまう。

アカデミア入学時は、デュエルの腕はあまり良くなかったが、レミやスバルたちと触れ合う内に強くなっていき、後に途中編入の遊輝と加わり、アカデミア五剣士となった。

別名、雷の天使

ギターは小等部にレミの勧めで始め、ヴォーカルは自分から務めると言った。

(ヴォーカルの技術もバンド結成当初では、4人の中で1番だったということもある)

家業がカップケーキ屋という事もあり、ケーキ作りは遊輝よりも上手。ただ、本人は「これでもまだまだ納得していない」とさらに向上を目指す。暇な時には店の手伝いでケーキを作る。

海外公演後、シグナーの能力が覚醒。光を操る事ができるようになった。周りの明るさで自身の身体を光彩によって見えなくしたり、光になって光速移動する事も出来る。シグナーの能力だけで見れば、他の4人よりもかなり強いのだが、何せ本人の身体能力が高くないため部内でやるリアルファイトではまだ能力を上手く使いこなせず負けてしまう事がある。

櫻井 祈

10歳↓12歳

誕生日： 12月8日

外見：赤のカチューシャを着けた少し赤に近い茶色の髪、タレ目をしている。赤のジーパンコートに白のTシャツを着て、淡いピンクのスカート（イメージは調辺リコ）
デッキ：ジエムナイト

龍亞と龍可の同じクラスにいる小等部の女の子。

龍亞と龍可達に出会う前から人見知りの性格で、いつもおどおどとした話し方をして
いる。そのためデュエルでも積極性を欠いてしまい、チャンスの場面でもなかなか攻
めていなかった。

しかし、アカデミアデュエル大会の決勝戦でスバルとのデュエルをきっかけに積極性
が着いてきて、本人もデュエルを楽しめて、明るくなった。

（それでも、デュエル以外はおどおどしているが・・・）

龍亞と龍可がない時に一度だけ、実技の部門で小等部1位まで登り詰めた経験があ
り。

なお、アカデミアデュエル大会の事がありスバルに恋心を抱くが、ここにも積極性を
欠いてしまう。龍亞と龍可が軽音部の部室に遊びに行く機会があるので、ほとんど付き

人みたいな感じで付いていき、世間話をするのが限界。

新学期明けに異世界から来た奈津芽凜というデュエリストと遊輝のデュエルに凄い感銘を受け、またその時に凜からカードを貰った。そこから、いつの日か本当のデュエリストになり、凜とデュエルして勝利を得るために、また、スバルに告白するためにデュエルの練習を説教的にすることが多くなった。

成田 恭輔

11歳↓13歳

誕生日： 4月16日

外見：明るい茶色髪、細縁のメガネを掛けていて緑色の瞳、Tシャツの上に水色のシャツみたいなものの前を開いてきている。(イメージはヒーローバンクの天野ナガレ)

デッキ：ヒロイツク軸戦士ビート↓テラナイト

龍亞・龍可と同じ小等部5年の男の子。クラスは5-2。

保健室でため息ばかりついていたところを遊輝が目をつけて、デッキを改造し、アカデミア小等部初の本格的にエクシーズモンスターを主力として戦うデュエリストへと

成長した。

自分の運の無さを嘆いていたが、遊輝から色々と教わり、逆に師匠と仰ぐようになる。師匠のためならと、何でも遊輝の手伝いをしていき、気づいたら軽音部のスタッフみたいな立場になった。軽音部がコンサートを開催する時には、陰で色々サポートしている。(もちろん、コンサートを見る事も多いが)

また、遊輝の手伝いをしていったら自然と料理することにも興味も持ち、料理の研究もし始めた。(腕はまだまだ)

新年明けに龍亞・龍可・祈、天兵たちとお年玉で買ったパックでエクシーズモンスターを引き当てて、龍亞たちから譲り受けたパーツで「テナイト」を構築。すぐに小等部実技1位まで上り詰めて、三学期の間は1位を守り続けたが最終日に龍亞に負けてしまい、最後の最後で2位に落ちてしまう。プロレマイオスが現役だった頃は誰も恭輔には勝てず、無双状態だった。

栗城 茜

12歳↓14歳

誕生日： 2月4日

外見：ピンク色の長い髪を伸ばさずにそのまましている。パッチリ目であり、服は赤のコートでその下には普通のTシャツ、下はスカートをはいており、白色のマフラーをしている。（イメージは黒川エレン）

トレードマーク：紫のクリップ

デツキ：ヴェルズ（除外軸）

精霊：ヴェルズ・ケルキオン

担当：ギター・パーカッション・サブヴォーカル

レミの友達で、母親の仕事の関係で小等部2年の時にパリに引っ越した。それでも、メールのやりとりなので交流は続いている。レミの教えで、ギターをやっており、とある事からパーカッションも担当する事になった。

口癖は「くっつち」

雑誌モデルの時に「何か特徴がある方が良いわよ」と母親に勧められて始めた口癖だが、今では完全に定着している。

母親が有名ファッションデザイナーでその関係でファッションモデルをやっており、昔レミも誘って人気者だった。

柔道二段・空手三段・合気道初段のかなりの武道派。理由はパリで柔道が流行っていたこともあるけど、自分自身の護身のため。

デッキは遊輝が海馬コーポレーションにエクシースモンスターを提供した1ヶ月後の先行販売で、唯一売られていたエクシース主体のデッキを母親が買って貰って、それ以来そのデッキを使っている。

デッキがデッキだけにかなり強く、さらに自分から除外関係のカードを入れて、進化していった。

栗城 すみれ

36歳↓38歳

誕生日：6月24日

外見：茜と同じピンク色に髪をポニーテール、目はキリツとしていてかなり細め

茜のお母さん。

世界的ファッションデザイナーで下積み時代にはデザイナーだけでなくヘアリストとしても勉強していた。業界内では知らない人はいない。

少し思考回路がおか・・・ゲフンゲフン、少し変わった人で、良いと思った人は容赦なくモデルとして勧誘（強制）させる。（例えそれが男の娘でも・・・）。また、レミ以上のある意味ヤバイ人で人を拘束する癖があり、自分の娘にはやらないが対象と決めたモデルには朝からドツキリとか言って部屋に侵入して、縛って撮影場所に無理矢理連れて行く。ようはS。

アリア・リユーベック

19歳

誕生日：8月20日

外見：透き通った青い髪の毛が腰近くまで伸びて、水色の目をしている。小顔でキリツとしていて手足は華奢。（イメージはとあるの佐天涙子）

デツキ：様々なデツキを使用

輪廻転生でこの世界にきた人物。元の世界は遊輝と同じ世界。

名前の通り、日本人ではなくヨーロッパ系に住んでいた。生まれた直後から親に捨てられたため、物心ついたときにすでに孤児院にいた。小学校では孤児院出身ということはいじめられてしまい、すぐに行けなくなり、さらには孤児院も潰れてしまつて路頭で

ハイエナのように回っていた。死因は雨の日から続いた風邪から重い病になってしまったこと。

この世界にきてからも親に捨てられたがツールモンドに救われて、精霊世界の街グリモワールで魔法使いとして育てられる。魔法学校に入学してから、魔法を使えないことから劣等生として先生や生徒から扱われ、家から飛び出す。そこで手に入れた禁断の書で魔法使いとしての才能が開花、2年間の修行を積み魔法使いとして戻ってきた。しかし、今度は逆に凄くなりすぎて、周りが離れてしまい、結局孤独な人生を送ることになってしまい、機械的な感情を持ち始めた。

遊輝と出会い、始めて人の温もり・優しさなどを感じて、機械的な感情が徐々になくなっていき、人間的な感情を覚えていった。

遊輝には龍可という彼女がいることを知っているがそんな事御構い無しに『一夫多妻制』を宣言して遊輝に好き放題したり、甘えたりするようにしている。

趣味は裁縫、アニメ・ライトノベル。そのため、コスプレ衣装の腕前はプロ級。すみれさんにスカウトされて今はすみれさんの事務所で唯一の裁縫担当をしている。

オリキャラ設定

精霊編

・ダイヤ (ガガガマジシャン)

遊輝の精霊の1人で、ガガガマジシャンの精霊

パール・サファイアの3人兄弟の一番上の長男。しつかり物の性格で、遊輝に一番頼りにされている。

精霊世界でエンディミオンの魔法学校を首席で卒業したため、見た目と違ってかなり頭は賢い。ちなみに専門は魔法薬と魔法術。

遊輝がボケた時のツツコミ担当でもある。

・パール (ガガガガール)

遊輝の精霊の1人でガガガガールの精霊。

ダイヤ・サファイアの3人兄弟の真ん中の長女であり、一番上の女性と言うこともありプラチナと良くブラックとホワイトの子守を担当する。

見た目と違って、ギャル語は使わない。だが、頭は決して良い方ではない。

精霊世界の魔法学校で卒業したが、その時も実は単位ストレスだった。ちなみに専門は教養。ただし、本人のレベルで一番通れそうな所だったため、誰にも勉強を教えるつもりはないらしい。

・サファイア (ガガガシスター)

最近、魔法学校を飛び級で卒業した遊輝の精霊で、ガガガシスターの精霊。

ダイヤ・パールの3人兄弟の一番の末っ子で、年齢は15。だが、見た目が見た目なのでよく子供と勘違いされる。また、年頃の女の子なので、結構遊んだり、甘えたりなど一番手前がかかったりもする。

ブラックとホワイトの良き遊び相手。魔法学校から帰ってきた日から3人で外に出掛けては1日中駆け回ることもしばしば。

専門はダイヤと同じく魔法薬と何故か地理。本人の得意分野らしいが、魔法と関係あるのか？

・プラチナ (銀河眼の光子竜)

遊輝の精霊の1人で、銀河眼の光子竜の精霊。

生まれて10年の時に、広い世界に憧れて1人で故郷（宇宙）から離れこの世界で旅をしていた。雨宿りで困った時にダイヤ達の家泊めてもらい、何故かそのまま住み続ける事になった。

この中でドラゴンということもあり、擬人化ができる。擬人化した時は女の子。

働かないとダイヤ達に迷惑をかけると思って、たまたま広告にあつた芸能人のオーディションに行った所、一発で合格。そのまま芸能界の世界に入っていく、そこそこの有名人となった。

・ブラック

（ブラック・サン・ドラゴン）

遊輝の精霊の1人で、遊輝のシグナーの龍であるブラック・サン・ドラゴンの精霊。

ホワイトと双子の赤ちゃん。容姿はポケモンのマナフィを黒くすれば一発である。モンスター状態はポケモンのゼクロムに青いタスキ。声は『きやつ』

遊輝がシグナーと分かったその日、ダイヤが見つけた古い箱を開けると見つかりそのまま遊輝が子守をすることになった。遊輝がアカデミアにいる時は、パールとプラチナが子守を担当する。

上級魔法使い族でも無いのに、実体化の能力を持っている。

遊輝が親バカであるため、かなりの甘えん坊。好物はビーフシチュー。

・ホワイト (ホワイト・サン・ドラゴン)

遊輝の精霊の1人で、遊輝のシグナーの龍であるホワイト・サン・ドラゴンの精霊。ブラックとは双子の赤ちゃん。容姿はポケモンのマナフィを白くすれば一発である。モンスター状態はポケモンのレシラムに赤いリボン。声は『キャッ』

ブラックと同じく、遊輝がシグナーとなったその日に見つかり、遊輝がお世話する事になる。

またブラックと同様に、実体化の能力持ちでよく勝手に実体化しては甘えてくる。好物はグラタン。

・ファランクス (ドラグニティーファランクス)

レミの精霊の1人で、ドラグニティーファランクスの精霊。

とにかく無口。何を考えているのかレミさえも分からない。ドラグニティのエンジンになるため、かなり過労死組に入るが、もしかしたら余計な事で体力を使いたくない

のかもしれない。

・フェザー (フェザー・ウィング・ドラゴン)

レミの精霊の1人で、レミのシグナーの龍であるフェザー・ウィング・ドラゴンの精霊。

レミが幼い頃に一度だけ夢の中で会い、フォーチュン・カップの時に再会した。そこからはレミの頼れる相棒。

フアランクスが無口なので、レミとの喋り相手になることもしばしば。また、遊輝以外の他のシークレットシグナーのメンバーの龍が精霊では無いので、移動手段でもある。

・ハネクリボー

スバルの精霊で、良き相棒。GXの十代から受け継がれてきた。

スバルの隣にすることが多いのだが、奏が勝手に実体化させて抱きしめられる事もし

ばしば。

・プリンセス (ブリザード・プリンセス)

響の精霊で、ブリザード・プリンセスの精霊。

その名の通り、とある氷の世界の姫だが好奇心旺盛・天真爛漫な性格のため、城から抜け出してダイヤ達の街に遊びに行く事が多い。つまり、姫様の業務をサボる事が多い。

響の精霊だということもあり、どんどん運動神経は良くなっていく一方。姫様らしい姿が消えていく。

・アース (神秘の代行者 アース)

奏の精霊で、神秘の代行者 アースの精霊。

天空の聖域を拠点に各地で起こる犯罪を裁く裁判官……。の補佐を一応勤めている。(本人的にはやめたいらしい)

凄く眠たがりで、しょっちゅう寝てる。1日中寝ているということも……。奏のカップケーキを食べる事が日課。まあ、これ1食という日が多いけど……。

・ケルキオン (ヴェルズ・ケルキオン)

茜の精霊で、ヴェルズ・ケルキオンの精霊。

元の世界で、創星神をセイクリッド・ソンプレスと共に倒した後、1人気ままに精霊世界を旅していた。(まんま、マスターガイドと同じです)

茜がヴェルズのデッキを手に入れた時に、こっちの世界に現れた。

茜との生活に満足し、楽しんでる。

ちなみに言葉は片言でしか喋られない。元々、喋れなかったのを茜の日本語で少し学んだみたいだ。

クリスマス番外編

クリスマスコンサート

遊輝 side

「さあ、明日のコンサートに向けて色々準備するわよ！」

アカデミアの食堂で張り切るレミ。

「そんな大声を出して明日喉を潰しても知らないよ〜」

「大丈夫！その時はサブヴォーカルを全て遊輝に任すから！」

「おい！何勝手に決めてるんだよ！」

「そんな事しないで早くクリスマス料理を作りましょう」

「明日までにケーキとか作らないといけないんだからな」

既にエプロン姿の奏とスバルが言うと、レミや響もエプロンを着たので、俺もエプロンを着てケーキ作りをする。

ここで、皆に説明しよう。

明日はクリスマス。皆がプレゼントや家族と楽しむ季節にアカデミアのホールを借りて、コンサートをしようと言う事になった。これは数ヶ月前から決まっていたライブに向けて練習したのだが、突然レミが「料理を作って皆に振舞おう！」と言って、他の

皆が賛成してしまったので、前日のこの日に食堂を借りて料理を作るといふ訳だ。

「えくと、まずはスポンジからだな」

「そのボウルに卵を割って、砂糖をその中にいれ泡立てて」

奏の指示通りに卵を割り、砂糖をいれる。

ボウルの底に湯を当てると、卵液が人肌くらいの温度になって泡立ちやすいよ。

「ところで……卵の量が異常なくらい多いのだけど？」

「ホールのケーキを10個くらい作るからね。これでも足りるかどうかだよ」

「誰がそんなに食うんだよ……」

「少なくとも、響で1つはいけるでしょうね」

「納得……」

この前、奏と一緒に作ったカップケーキを1人で10個くらい食べていたから
な……

「それで、ある程度泡立てたら粉をふるいにかけて牛乳をいれるんだね？」

「そうそう、その時に粉が混ざりきらないように注意してね」

この後、別のボウルで粉とバター、牛乳を混ぜた物と合わせ、型に入れてオーブンで
焼けばスポンジは出来上がり。

「ああ……！また失敗した……！」

「だからこうすればよかつたんだよ！」

向こうから声が響いてきたから振り向くと、黒焦げに焦げた何かの物質があり、それを巡つて響とレミが大声で言い合いをした。スバルは2人の間に入って止めている。

「……………やっぱり俺、あつちにいつといた方がよかつたな」

「ここからは私一人で何とかなるから、遊輝は料理の方を見てきて。いえ、作つてきて」

「頼むわ」

ケーキ作りを奏に任せて、料理している組に入る。

「スバル、状況を教えて」

「えつとな……………唐揚げを作ろうとしたのだけど、鶏肉のサイズがバラバラだったり、揚げるのが長過ぎて黒焦げになったり……………」

「……………こんな調子で明日、みんなに料理を振る舞えるのかな？」

遊輝

side

龍可

side

「龍可ー！早く遊星たちを誘って、アカデミアに行こうよ！」

「ちよつと待ってよ龍亞！それに、コンサートまでまだ2時間あるのよ！」

今日はクリスマス、いつもなら龍亞と二人で過ごしていたけど、今年は遊輝が軽音部のライブに誘われたから、遊星やアキさん達と一緒にアカデミアに行くの。

せつかくの機会だから、オシャレして行こうと決めていたのに、龍亞に急かされてしまった。

遊輝は先にアカデミアに行つて、準備をしている。

うーん、この服にしようかな？

服を着替え部屋を出ると、急かしていた龍亞が待っていた。

「お、おう……なかなか似合っているじゃん」

「そうかしら？」

龍亞が後ろに向き、バタバタとしている。

私の格好はいつもの服と違い、淡い赤のトップスに白の上着を羽織つて、スカートを着ている。

「そ、それより早く行こう！」

「待つてよ！」

龍亞が走り出したから、その後を追い家を出る。

「遊星！ジャック！クロウ！みんないる？」

噴水広場のガレージについて、龍亞が遊星たちがいるか確認している。

「龍亞、心配しなくてもみんないるぞ」

「どっかの誰かさんが、コーヒーを飲みに行こうとしていけどな」

「それを言うな！」

ジャックとクロウがまた口喧嘩を始めて遊星と龍亞、私も一緒にため息をつく。

なんでいつもこんな事で喧嘩をするの？

「……遊星も大変だね、あんな口喧嘩に毎日付き合って」

「いつもの事だからな」

「それよりも早くアカデミアに行こうよ。アキ姉ちゃんも先に行っているみたいだし」

「そうだな。そろそろ行こうか」

遊星がジャックとクロウの喧嘩を止めて、準備を始める。

ー（アカデミア）ー

「メリークリスマス!!みんな来てくれてありがとう!!」

遊星たちの準備が終わり、アカデミアでコンサートの受け付けにレミさんと響さん、スバルさんがサンタの格好でいた。

「軽音部の演奏は文化祭の時に凄く盛り上がったから楽しみだよ!」

「ありがとう龍亞君!招待状を見さしてくれる?」

龍亞が響さんにみんなの招待状を出す。

「はい、どうぞ。中に遊輝の料理と奏のケーキがあるから好きなだけ食べるよ!」

「よっしゃ!食うぞ!」

スバルさんが料理があると言った瞬間に、クロウと龍亞が走って入っていった。

龍亞がこれが目的だったのね……

私たちも中に入ると、コンサート会場になっている会場には、すでに多くのアカデミアの生徒やその家族が来ていて、たくさんのケーキと料理が並んでいた。

「これ、本当に二人で作ったのかしら？」

「確かに二人で作るには量が多いな」

会場の片方の壁に料理が並んでいて、その反対側には料理の数に負けないくらいにホールケーキが十数個並んでいた。ちなみに、真ん中には白いテーブルクロスを引いた机と椅子があり、そこでコンサートを観るらしい。

「あつ、アキさん！」

前の方にアキさんがお父さんとお母さんと一緒に座っているのを見つけたので、アキさんの所に行く。

「龍可、あなた一人なの？」

「いいえ、龍可とクロウは料理を食べていて、遊星たちは座って待っているの」
「そう……」

アキさん、遊星の行動を聞いてホッとしたみたい。

「それで、龍可は予定があるの？」

「予定？」

「遊輝と過ごさないの？コンサート後はいけるでしょう？」

「／／／／／ア、アキさん！」

顔が真っ赤になり、顔を隠す。

「／／／／／そ、そう言うアキさんも、遊星との予定はないの!？」

「わ、私!?!私は一応、あるけど．．．．．」

アキさんはあるんだ．．．．．

予定か．．．．．せつかくのクリスマスだし、二人つきりで遊輝と．．．．．

「でも、遊輝はコンサートの後に打ち上げがあるって．．．．．」

「その後でもいいじゃない。せつかくだし、二人で楽しんで来たら？」

「．．．．．はい、ところで、遊輝と奏さんの姿が見えないのだけど？」

「あの二人はね．．．．．控室で倒れているわよ」

「ど、どうして!?!何かあったの!?!」

「この料理は本当は軽音部全員で作る予定だったみたいだけど、遊輝と奏以外は戦力外だったらしくてほとんどあの二人で作ったのよ」

確かに、スバルさんは料理のイメージがないし、響さんとレミさんは「壊滅的だ．．．．．」って遊輝が呟いていたわね。

「それで、昨日の内に料理を作り終えたのだけど、当日になって料理とケーキが足りな

くなったから、二人がついさっきまで作っていたのよ。6時間かけて」

「ろ、6時間……」

だから朝早くに大慌てで出て行ったのね。

「でもよくそんな情報を知りましたね？」

「受け付けをした時にレミが話していたのよ。私たちが来た時は少ししか料理が並んでいなかったからね」

レミさん……少しは手伝ってあげたら？

そう思っていたら、ブザーの音が会場に響く。

「もうすぐ始まるよ。そろそろ席に座ったら？」

「そうだね。ありがとうアキさん」

私はアキさんから離れて、龍亞や遊星たちがいる席に座る。龍亞とクロウはまだ料理を食べていた。



照明が消え幕が開くと、サンタの格好をした響さんがピアノを弾き始めた。いつも練習している私を知るような曲ではなく、オーケストラで弾きそうな曲だ。演奏が終わると、みんなが拍手をして、響さんがマイクを持って前に出る。

「メリークリスマス!!今日はアカデミア軽音部のクリスマスコンサートに来てくれてありがとう!最初は私が独奏でベートーベンの『喜びの歌』でした!それでは!軽音部主催!クリスマスコンサートを開催します!!」

周りから紙テープが飛び出して、観客が一気に盛り上がる。龍亞やクロウたちも、箸を止めて、盛り上がる。

でも、響さん以外の姿が何処にも見当たらない。

「それよりみんな何処にいるの!?!始まってしまったよ!」

「響!ピアノの演奏良かったよ!練習してきた甲斐があるね!」

何処からか奏さんの声が聞こえてきた。さっきまで倒れていたって聞いたけど大丈夫なのかな?

「奏!何処にいるの!?!」

「一人での独奏は正解ね!」

「レミも何処にいるのよ!そして遊輝もスバルも!」

「スバルはお前の後ろにいるぞ」

「みんな!メリークリスマス!」

響さんの後ろからサンタ姿のスバルさんが現れた。

「スバル!?!いつの間に来たの!?!」

「響の演奏が終わると同時に来たよ！少しは気付けよ！」

「私一人で、てんばっているのよ！みんなは何処なの!？」

「ちゃんといるから、みんなー！！そろそろヴォーカル組を呼ぶかー！！」

『呼んでー！！！』

「おっしや！響！次の曲のスタンバイ！」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だって、早くスタンバイして」

スバルさんと響さんが、それぞれドラムとピアノの前に座った。

「行くぞ！みんなも一緒に！」

ドラムとピアノのセッションが始まって、響さんとスバルさんが手を上げる。

『1・2・1・2・3・4！』

ドオーーーーーン!!!

♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

ドラムが叩き始めるとギターの音がなり始め、それと同時に後ろと両側にあつた白い箱からサンタ姿の遊輝とレミさんがギターを、奏さんがマイクを持って飛び出した。

「行くよー！」

ここから軽音部のコンサートがはじまった。

ちなみに演奏している曲はこれ、受け付けでもらった紙に書いてあったのよ。全部有名みたいだけど、たまに私には分からない曲がある。

1 シーソーゲーム 勇敢な恋の歌 〔Mr. Childr

en〕

2 クリスマス 〔JUDY AND MARY〕

3 冬がはじまるよ 〔榎原敬之〕

4 Loves Again 〔EXILE〕

5 ポーイフレンド 〔aikō〕

6 気まぐれロマンティック 〔いきものがかり〕

7 白い恋人達 〔桑田佳祐〕

8 愛でした 〔関ジャニ∞〕

9 ワイルド アット ハート 〔嵐〕

10 Your Best Friend 〔倉木麻衣〕

11 心 color 〔a song for wonderf

ul year〕 〔福山雅治〕

12 アゲハ蝶 〔ポルノグラフィティ〕

そして、数曲歌ったところで30分の休憩が入った。

その間も遊輝たちは、今日来ているみんなにクリスマスプレゼントとして何かを配り
回る。

「メリークリスマス！みんな、コンサートに来てくれてありがとう！」

遊輝が私たちのところに回ってきた。

「遊輝！今回は伊達メガネを掛けないの？」

「止めてくれ、龍亞。この場で文化祭みたいな事をしたくない」

「あれは面白かったからね！ねえ、龍可お嬢様！」

「／／／／それは言わないで！」

龍亞にお嬢様と言われ、顔を赤くする。

あれは、少し嬉しかったけど物凄く恥ずかしかったんだから！！

「はい、クリスマスプレゼント。遊星たちも」

「ありがとう」

「ふん、もらっておくか」

「何が入っているの？」

龍亞とクロウが袋を開ける。中にはクッキーとマシユマロが入っていた。

「材料が余っていたからクッキーを作ったんだ。あと、マシユマロは後で関係があるからね。それじゃ……」

「待つて遊輝！」

遊輝が他の席に行くのを止める。

今日の事を言わなくちゃ……

「どうしたの？」

「今日の夜……行きたい所があるの。ついて来てくれる？」

「良いよ。打ち上げの後になるけど」

「それでもかなわないわ」

「じゃあ、夜ね」

そう言つて、遊輝は他の席も周り始めた。そして後半が始まった。後半の曲はこれ。

13 Fragile Little

Thing

14 何度でも [DREAMS COME T

RU E]

15 いちご

【ゆず】

16 チェリー [スピッツ]

17 CHE. R. RY [YUI]

18 オレンジ [SMA P]

19 M [プリンセスプリンセス]

20 星に願いを [flom pool]

21 OZONE [v i s t l i p]

22 SEASONS [浜崎あゆみ]

「みんなー！盛り上がってる？」

『イエエー！！！！！』

「良いわね！それじゃ、最後の曲に行こうか！」

『えええー！！！！！』

「ええって言わないでよ！準備をした曲がこれだけなんだから！！その代わりにもっと盛り上がってくれろ？」

『もちろん！』

「じゃあ遊輝！頼むね！」

「俺かよ！まあいいや、みんなー！マシユマ口は好きか!？」

『好きー！！！！！』

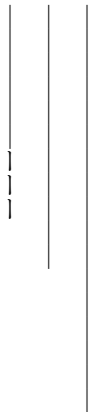
「チューインガムも好きか!？」

『好きー!ー!ー!』

「マシュマロみたいなカラフルな恋をしてみたいか!？」

『イエエー!ー!ー!』

「それでは行きましょう!! Mr. Children! 《Marshmallow Day》!!」



ピアノとギターで余韻を残し、最後はスバルさんがドラムをたたいて終わった。

観客はこれ以上ないくらいに盛り上がっている。私も立ち上がって拍手をしている。

さつきプレゼントで貰ったマシュマロがこんなに盛り上がるなんて……

遊輝たちが前に出て挨拶をする。

「それでは、軽音部主催のクリスマスコンサートを終了します！」

「「「「ありがとうございました!!!」」」」

みんなが頭を下げ、幕が閉じる。もう一度拍手が沸き起こる。

「凄く盛り上がったね龍可！」

「そうね。文化祭の時も思ってたけど、あんなに難しい曲をたくさん用意できるのが凄いわ」

「ほんとだよ、俺たちには無理だね。料理やケーキも美味しかったし、大満足だよ！帰ろうか」

「あつ、私ちよつと寄り道するから先に遊星たちと帰って」

「そうなんだ。じゃあ先に帰るよ」

龍可と遊星たち、アキさんも会場を出て行った。

さてと、せっかく遊輝と二人つきりなんだから今度はこっちがプレゼントを準備しよう

龍可

side

out

遊輝

side

「「「かんばーい!!」」」

観客が帰っていた会場で、みんなで打ち上げを始める。

料理とケーキはたくさん作ったから、俺たちの分も嫌っていう程残っている。

「コンサート、無事に成功したな!」

「最初は（どうしよう）と思ったよ!みんな何処にいるか分からなかったから!」

「演出も成功したし、料理も大成功ね!」

「そのために、俺と奏は地獄だったけどな」

「突然「料理が足りない!」って電話で聞いた時は何事かと思ったよ」

「まあまあ!成功したからいいじゃない!ケーキも美味しいし!」

響の周りには、色んな種類のケーキが並んでいる。本当に甘い物好きだな、虫歯にならないのか?

その後、みんなでドンチャン騒ぎ。

ギターを引いたり、色んな事を話したり、最終的には伊達メガネを掛けさせられてしまった……

何で伊達メガネを掛けるのを嫌がるって?文化祭の時に嫌な思いがあったと言っ

ておこう。

そして、打ち上げもお開きになり家に帰ると、既にコートを着た龍可が準備をしていた。

「遅くなってごめん。直ぐ準備するよ」

「急がなくていいわよ。私もさつき帰ってきたから」

「そうなんだ」

俺は部屋に入って直ぐに着替えて準備をすます。

「これで良いかな？それじゃ行こうか」

「うん」

「いってらっしゃーい！」

Dホイルで龍可に案内されて着いたのは、シテイを一望できる高台だった。

「ここから見る景色はいつも綺麗ね」

「そうだな」

夜は、シテイのライトアップがあり幻想的な雰囲気を漂わせる。

「それで、何でここに来たの？」

「……遊輝と二人つきりで来たかったの」

「俺と？何で？」

「べ、別に良いでしょ！」

龍可が顔を赤くする。

なんか俺、怒らせる事を言ったかな？

「あ、あと、これ……」

龍可から包装紙で包まれた箱を渡された。

「これは何？」

「私からのクリスマスプレゼント！遊輝から貰うだけだと悪い気がしたの」

「へえ、ありがとう！開けてもいい？」

「良いよ！」

包んでいる包装紙を取って箱を開けると、赤いマフラーが入っていた。

「遊輝は太陽のシグナーだから赤いマフラーを選んでみたけどどうかかな？」

「凄く嬉しいよ！マフラーは持っていなかったから、ありがとう」

龍可から貰ったマフラーを首に巻いて、龍可の頭を撫でる。

頭を撫でてもらった龍可はまた顔を赤くする。

「あつ、雪だ」

龍可が雪が気付く。

クリスマスの夜に雪か……これまた幻想的だな。

「……………俺、今日の事は忘れないよ。今までで一番のクリスマスだったよ」

「……………私も」

自然と俺たちは近づいていく。

何だろう？胸がドキドキするこの感じは……………

「さてと、雪が積もる前に帰るか」

「そうね。遊輝！」

Dホイールを起動させたところで龍可に呼ばれ、振り向く。

「メリークリスマス！」

「メリークリスマス！」

俺たちはDホイールに乗って、家に帰る

これが、俺がこの世界に来て最初のクリスマスだった……………

1周年特別企画

人気ランキング&質問コーナー

1周年特別企画 人気ランキング&質問コーナー

コホン、ああ、ただいまマイクのテスト中

遊輝「そんな前振りいらんからさっさと始めろ！」

わ、分かったよ………それでは！1周年特別企画！人気ランキング&質問コーナーを始めます！！

「「「「「いええええいーいーいーいー」」」」」

司会進行はこの小説の作者である私、D I C H I がお送りします！

レミ「みなさんのおかげで、駄作者のこの小説が続いている事に感謝します！」

遊輝「そこで今回は普段は聞けないこの小説への質問とメインキャラの人気ランキングを行います！」

龍亞「とうとう始まったね！1周年特別企画！」

龍可「なろう時代から数えてだけだね。でもよくやろうとしたわね？」

だつて俺、受験生だぜ。こんな企画来年出来ないんだから、やれる時にやっておかないと。

スバル「勉強なんか詰め込んだらなんとかなるのに」

響「そうだよね！若い時は遊ばないと！」

奏「響はもうちよつと勉強しないといけないね。毎回補習ギリギリだから」

響「うっ……言わないでよ」

遊輝「ところで遊星は？」

龍亞「ジャックやクロウ、アキ姉ちゃんもいないよ」

あの4人は他の用事があるから後で来るよ。

レミ「……怪しいわね」

龍可「一応、そう言う事にしておきましょう」

スバル「この小説が初投稿して約1年になるのか、色々あったな」

龍亞「初投稿からわずかに2ヶ月でなろうが二次創作を禁止になったね」

修学旅行が終わって、早速なろうのページを開いたらいきなり二次創作禁止だから、放心状態だったよ。

祝札さんのおかげで、こうしてすびばるで執筆活動が続ける事が出来ます。祝札さ

ん！ありがとございました！

奏「今さらお礼を言っただうするのよ！」

響「その次にあったのが、作者の消去事件ね。あれはどういう事？」

あれは、部活帰りにすぴぼるのページを開いたら何故かこの小説が2つあったんだよ。

遊輝「2つ？何でそんな事になるんだ？」

俺が聞きたいよ！んで、1つを消去したら、何故かこの小説が消えてしまったと……レミ「ちゃんと調べなかつたあんたが悪い」

響「おかげで、私たちの出番が遅れたじゃない！」

すいません……

奏「響、そこまでしてあげようよ」

龍亞「この駄作者、ちよつとした失敗でも結構引きずるタイプなんだから」

スバル「龍亞、フォローになつてない」

遊輝「こんなグダグダした事をしてないで、さつさと質問コーナーに行こうぜ」

それでは質問コーナー!!

「「「「「イエーイー!!」「」」」」

龍可「このコーナーは普段読者が気になっていたこの小説への疑問・質問などに全部答えて行きます！」

スバル「たくさんの質問ありがとう!!」

まずは龍南さんの小説《遊戯王〜CROSS HERO〜》のキャラから!

レミ「まずはあつちの龍可ちゃんから遊輝に質問ね。【その治癒力はどうなったらそうなるんですか?】」

遊輝「えっ、あの治癒力は普通じゃないの?」

「【普通じゃない!!!】」

レミ「どう考えても、骨折が一晩で治るはずがないでしょうが!」

龍亞「おまけに頭からの出血を、何とも無かったように言うし!」

龍可「最後!レミさんと一緒だけど、複数の骨を折ってそんな簡単に治らないでしょう!」

スバル「……………マジかよ」

響「骨折が一晩で治るの?」

奏「化け物だね……………」

遊輝「みんなに言われたくない!!」

「【【【遊輝が一番言えない!!!】】】」

遊輝「……………」↑『の』の字を書いている。

響「そんな所で凹んでないでさつきと答えてよ!」

遊輝「は〜い……………まあ、気づいたらこんな治癒力になっていた、としか言えないな」

龍亞「そんな事で納得をしてと？」

龍可「最初からそんな治癒力だったの？」

遊輝「いや、最初からこんな治癒力じゃなかったよ。骨折して全治数週間とか当たり前だったから」

スバル「それが普通だな」

遊輝「でもそれじゃ間に合わなくてさ」

奏「間に合わない？」

遊輝「俺、毎日のように不良と戦っていたから」

レミ「・・・やんちゃしてたの？」

遊輝「そうじゃなくて、不良に絡まれた奴を助けるために戦っていたから。最初は圧倒してただけど不良も脳はあるから、数で押ししたり、鉄バットを使ったり・・・」

スバル「よくそんな奴ら相手に戦ったな」

遊輝「ストレス発散」

響「ストレス発散?!?!」

レミ「そんな理由で相手してたの!?!」

遊輝「まあな。んで、勝つには勝つんだけど骨折したりとかして入院したんだけど、不良が俺がいらないと言って派手な事をするから、骨折してても毎日戦っていた訳。そした

ら、いつの間にか骨折の痛みが消えていって、医者に診て貰ったら一日で回復してたと」

龍亞「そんな事で!？」

龍可「理由になつてないよ!」

遊輝「理由になつてないじゃなくて、理由がこれしかない」

スバル「ちなみに聞くけどさ、一番やばいと思つた時は?」

遊輝「不良の一人が銃を撃つた時」

奏「銃?!?!」

遊輝「あれはマジでやばかつたな。右腕の被害が尋常じゃなかつたよ」

レミ「それで、その時はどうなつたの?」

遊輝「直ぐ入院したけど、次の日に皮膚だけは全回復して、二日後に完璧に回復した

から退院」

龍可「・・・・・・・・・・」

スバル「おかしいだろ・・・・・・・・」

レミ「と、とりあえず龍可ちゃん、これで納得してね」

奏「次は主人公の駆さんの質問ね。【今までで一番楽しかったデュエルはどれですか

?】」

龍亞「作者、これはどうするの？」

未公開の事も言つて良いよ。

響「じゃあ私から！私は中等部に上がった時の奏とのデュエル!!」

奏「あつ！それは私も一緒！」

レミ「あの時は少し喧嘩をしたのだったけ？」

響「そうそう！ちよつとした勘違いから犬猿の仲になりかけた所をスバルが『デュエルしたら？』」つて言つてくれてデュエルをしたんだ！」

遊輝「この世界は何でもデュエルなんだね・・・」

スバル「その時に奏が始めて裏のデツキを使つたんだよな？」

奏「そうよ！あの時はデュエルの腕前はそんなに良くなかつたけど、本気でぶつかつてデュエルをしたから、その後には仲直りをしたんだ！」

響「お互いにデュエルで色んな思いをぶつけてスッキリしたわ！」

スバル「響の場合、アイス・スプラッシュの効果も3回も使つたからスッキリしたんだろ？」

遊輝「・・・あのずぶ濡れになる効果を3回も食らつたの？」

奏「酷い目にあつたよ！入学式初日で新調した制服がもうビショビショよ！」

龍亞「ねえ、さつきから濡れるつて言っているけど、どう言う事？」

響「こういう事！アイズ・スプラッシュの効果！ウォーターフォール！」

ザバーバーン！！！！

龍亞「……………！！」↑びしょ濡れ

レミ「響!!何やってるのよ!!」

響「実際に体験した方が分かりやすいでしょ!!」

遊輝「お前鬼だろ！」

龍可「だ、大丈夫？」

龍亞「だ、大丈夫だ……………ハックション!!!」

スバル「早く着替えてこいよ。風邪を引くぞ」

龍亞「う、うん、そうするわ」↑退出

龍可「……………確かに酷いわね」

レミ「これを私たちは数回は受けているからね……………」

奏「次はスバル」

スバル「俺か！俺はだな……………じいちゃんとデュエルした時だな！」

遊輝「じいちゃんってことは十代とのデュエルか？」

スバル「ああ！と言っても、俺はその時、まだデュエルを始めたばかりだから、全然

じいちゃんにかなわなかったけど。もう一回やりたいぜ！」

龍可「次は私！私は始めてライトロードを使った龍亞とのデュエル！四苦八苦しただ、楽しかったわ！」

遊輝「（まだこの時は1k1111やオーバーキルが無かったから良かったよ。1ヶ月経ったら・・・龍亞が可哀想にしか思えない）」

レミ「龍亞君がまだ着替えているから、先に私ね。小等部でやったみんなとのサバイバルデュエル！」

響「あれか！確か奏がデュエルできるようになって、みんなでデュエルするのを早くするために、やり始めたよね！」

奏「今考えたら、みんな私を攻めてきたわね」

レミ「あれは奏しか攻められなかったんだよ。結局いつも奏が最初に負けていたわね」

遊輝「その時に勝ったのは？」

響「スバルよ！何か追い詰めたらと思ったら、いつの間にか逆転されてしまっているのよ！」

レミ「あれはおかしいよ！手札0から、スピリットにアブソルート、ノヴァマスターが並んだのよ！」

スバル&龍可「普通じゃねえの（じゃない）??」

「！！！！普通じゃない！！！！」

遊輝「どこから普通だっと思って思うんだ!!」

龍亞「そうだそうだ!」

響「龍亞君、いつの間に帰って来たの?」

奏「忍者みたいね……」

レミ「それより、次は龍亞君の番だよ」

龍亞「俺?俺はだな……. やっぱ最初に遊輝とデュエルした時かな。あの時から変わって行っただよ」

龍亞「遊輝とのデュエルの後、死ぬ思いで勉強させられたんでしょ?」

龍亞「怖かったよ……. デュエルの事であんなに勉強するなんて……. . .」

レミ「でもそのおかげで、強くなっていったんでしょ?良かったじゃない!」

龍亞「うん!今では、良い経験だと思っているよ!」

奏「最後は遊輝。誰とのデュエル?」

遊輝「この世界に来てからだったら、やっぱり遊星とのデュエル!一番ワクワクしたし、楽しかった!」

レミ「1回目のデュエルは凄かったわね。一方が攻めたらもう一方が攻め返す。まさに気が緩めないデュエルだったわね」

遊輝「でも遊星は強いよ。いつかは遊星に勝ちたいな〜」

響「こんな物かな？じゃあ次！《CROSS HERO》のアカデミア四天王の1人！留姫さんからの質問よ！「みんなのお気に入りのカードはどれ？」」

龍亞「俺から行く！もちろんエースの《パワー・ツール・ドラゴン》！そしてその進化した《ライフ・ストリーム・ドラゴン》！それと遊輝から貰った《パワー・ツール・ドラゴン／バスター》と《機械竜 パワー・ツール》！」

レミ「それじゃ私ね。エースである《フェザー・ウイング・ドラゴン》。そして精霊の《ドラグニティーファランクス》よ！」

ファランクス『……………』

フェザー『ありがとうございます』

奏「ファランクスが喋っているところ見た事が無いわね」

レミ「無口なんだよ。だから私もあまり喋らないんだ」

スバル「次は俺だ！もちろんHEROはお気に入りだけど、《E・HERO スピリット・ドラゴン》は特別に思いが強いな！後は、じいちゃんから貰った《ハネクリボー》ハネクリボー『クリクリ！』」

奏「ほんとに可愛いね！いつ見ても癒されるよ！」↑強く抱いている。

ハネクリボー『クリクリ♪』

響「奏がこんな状態だから先に私が行くね。私も《アイス・スプラッシュ・ドラゴン》と《ブリザード・プリンセス》!!」

プリンセス『響が始めて手にしたカードが私だからね!今でも使ってくれてありがとう!』

響「こちらこそ!これからもよろしくね!」

奏「それじゃ私の出番ね。私は《ライトニング・エンジェル・ドラゴン》と《神秘の代行者 アース》。それと個人的には《アテナ》もお気に入りカードだね」

アース『ふわあ〜、呼んだ?』

奏「また寝ていたの? 一体いつまで寝ているの?」

アース『だって眠いんだもん。用が無いなら、寝るよ〜』

遊輝「アースは相変わらずだな」

奏「もうちよつとしっかりしてくれれば、嬉しいんだけどね」

龍可「次は私!私は《エンシエント・フェアリー・ドラゴン》と進化した《エンシエント・コメット・ドラゴン》!」

エンシエント『選ばれて嬉しいです』

龍可「後は、遊輝から貰った《裁きの龍》と《カオス・ソルジャー》、開闢の使者

♪！そして《妖精竜 エンシエント》！」

レミ「あのデツキ遊輝から貰ったんだ」

遊輝「正確にはパーツを挙げただけで、俺はデツキ構築を少し手伝っただけだよ」

龍可「でも遊輝のおかげで今のデツキを作れたわ！ありがとう！」

遊輝「どういたしまして（ニコッ♪）」

龍可「／／／／／／／／／／／／／／／／」

スバル「最後は遊輝だぜ！」

遊輝「俺は………今までサポートしてくれたダイヤとパール、プラチナ」

ダイヤ『マスター、ありがとうございます』

パール『ありがとう！』

プラチナ『パール、もう少し丁寧に敬礼を言いなさい』

遊輝「あとは、エースとして支えてくれるブラックとホワイト」

ブラック『きゃっ♪』 ホワイト『キャッ♪』

遊輝「そしてこの世界に来て最初のエース、《No. 39 希望皇ホープ》だな」

龍亞「最初のデュエルからフォーチュン・カップまでずっとホープが出ていたよね」

龍可「最近の出番が減っているけど………」

龍亞「早く答えてよ！今日は全部答えたていく日なんだから！」

龍可「／／／／／／／／／／／／／／．．．．．気づいたら、遊輝の事が頭から離れずに、ずっと考えていたの。最初は不思議な人だなど思っていただけなんだけど、一緒にご飯を作ったり、デツキを作るのを手伝ってくれたりして、優しかったの．．．．．」

レミ「本当に恋と気づいたのは？」

龍可「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／．．．．．あの時にボロボロになりながらも、アキさんに訴えかけていた遊輝がかっこよく見えて．．．．．それにあのデュエルで倒れた後、物凄く心配で．．．．．その時に始めて、自分にとって大切な人って思ってた．．．．．」

奏「そうなんだ。確かにあの時の遊輝はかっこよかったわね。みんながアキさんを攻めていたのに、逆に助けていたから」

響「どんなどころに惚れたの!？」

龍可「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／．．．．．お姫様抱っこをしてくれた時．．．．．」

龍亞「嬉しかったんだね！あのお姫様抱っこ!!」

龍可「／／／／／／／／／／うん」

レミ「じゃあ、今後もお姫様抱っこをしてもらおうようにしないとね！」

レミ「誰に迷惑を掛けているのよ!？」

遊輝「俺だよ!無理矢理部活に入れさせられるは、メイド服を着せられるわ!」

スバル「そこをもうちょっと大人しくしてくれば良いんだか」

奏「次はスバルね。スバルは勉強は駄目だけど、響やレミがこんな調子だから、常識を持って行動してくれる事が長所になるかな?」

レミ&響「「どういう事よ!」」

遊輝「それに、まだ話には出てないけど、めちやくちや機械に強いんだ。決闘デスクの修理とかならスバルが簡単に直してくれるから助かるよ」

スバル「遊星ほどじゃないけど。遊星はすごいぜ!Dホイールを組み立てられるんだから!俺もいつかはあんな大きな物を組み立ててみたいぜ!」

レミ「短所は……龍可ちゃんと同じく、チートドロードと言う事を認識しない」

龍可「何で私が出てくるの!？」

龍亞「チートドロードよ!毎回毎回裁きの龍とカオス・ソルジャーを出してこつちが大変だよ!」

スバル「普通だろ?」

遊輝「何回も言わせるな!普通じゃない!」

奏「次は響ね。響はおっちょこちよいだけど、人一倍正義感が強い事だね」

レミ「それと運動神経が凄すぎるよ。毎朝のジョギングに、軽音部の練習が無かったら、運動系のクラブの助っ人にも行っているよ」

龍亞「あつ！それ俺も見た！野球部のレギュラー相手に三振の山を築いていたよ！」

響「若い時に身体を動かしておかないと！人生楽しんだ方が良いんだよ！」

遊輝「そのおかげで勉強が全く駄目だけどな」

奏「中等部に上がってから、補習を受けずに済んだ事は一度も無いわね」

スバル「もう少し頭を賢くしないと」

響「うっ……」

レミ「最後は奏ね！」

龍可「奏さんは勉強が出来る、ケーキ作りがとても上手！」

レミ「それに軽音部のヴォーカルを務めてくれて、こっちでも助けて貰っているよ！」

スバル「デュエルの腕前も上がっているし、そのうち俺たちを追い抜かす時が来るかもな」

奏「やめてよ。私はそんな柄じゃないわ」

龍亞「こう見たら、奏さんに短所なんかなさそうに見えるけど……」

響「奏も短所はあるわよ！人にはつきりと言える事は良いけど、少スキつすぎる発言

があるの！」

レミ「入学式の喧嘩もそれが原因だったわね」

遊輝「後は、かわいい物に異常な反応を示す事」

奏「良いじゃない！かわいい物を抱きつくぐらい！」

スバル「反応が異常なんだよ。ハネクリボーが一時期引いていたんだぞ」

奏「それは……すいません」

ハネクリボー『クリクリー！』

スバル「許してあげるだつて」

奏「じゃあ!!」↑抱きつく。

龍亞「……人間誰でも短所はあるんだね」

遊輝「次は同じくアカデミア四天王の隆さん！スバルに質問、「スバルは十代の子孫と
いうことだが、その関係で困った事はあるか？」」

スバル「困った事？」

龍可「隆さんはカイザーである丸藤亮さんと比較される事が嫌だったみたいなの。ス
バルさんはそんな事が無いの？」

スバル「考えた事も無かったな。周りがそんな事を言っても気にして無かったから」

響「スバルが分からなくても、十代さんの子孫って聞けば誰もが気になるわよ」

スバル「それでも俺は俺！俺らしくデュエルすれば良いんだから！隆さんも隆さんらしく!!」

レミ「スバルらしいわね」

龍亞「そしてアカデミア四天王最後の一人！美菜さんからシークレットシグナーのみに質問！【そのシグナーの龍はどういう経緯で手に入ったの？】」

これは話に出ている遊輝は分かるから、それ以外の人が話して。

レミ「私は？私も話に出ているのだけど」

あゝ、じゃあ、レミはフェザーとの始めての接触の時の事を話して。

レミ「分かったわ。最初にフェザーに会ったのは忘れもしない、去年の冬だわ。突然夢の中にフェザーが出てきたの」

龍可「夢の中ですか？」

レミ「ええ、その時は何を言っているのか分からず、その夢もそれっきりだから忘れ

かけた頃に、あのフォーチュン・カップの出来事だわ。あれで始めて、夢のドラゴンがフエザーだと言う事に気づいたわ」

龍可「そうなんですか」

響「次は私ね！何かスバルが先に話しているような気がするから！」

遊輝「どんな理由だよ……」

響「私ほね……パックで当てたの」

龍亞「えっ!? シグナーの龍をパックで当てたの!？」

響「そうよ。ちょうどその時に氷結界のデッキを作り出した頃だから、水属性専用のパックを買っていた時に、最初の一パック目が入っていたの。かなりのレアカードって言われたから、その時からプリンセスと一緒に大事にしたの」

龍可「そんな風にシグナーの龍を手に入れるなんて……。奏さんはどうやって手に入れたのですか？」

奏「私は、小等部の5年の時かな？あるデュエル大会に参加して、優勝した副賞としてシグナーの龍を受け取ったわ」

遊輝「シグナーの龍って、一般に出回っているのか……」

レミ「そんなはず無いでしょ！現に今まで響と奏以外にアイス・スプラッシュとかライトニング・エンジェルを使っているデュエリストを見ていないんだから！」

龍亞「最後はスバルさん！スバルさんはどうやってシグナーの龍を受け取ったの？」

スバル「俺はじいちゃんからハネクリボーと一緒に譲ってくれたんだ。じいちゃんが「俺は必要ないから、お前が持っておけ！」って言うから、ずっと俺が持っているんだ」
レミ「十代さんは世界中を旅していたんだっけ？」

スバル「そう！その時に何処かの町で手に入れたみたいなんだ。その時はまだシンク口が出たばかりだから、じいちゃんもあまり使わなかったんだろうな」

龍亞「へえ〜」

遊輝「美菜さん、これで大丈夫ですか？」

レミ「大丈夫よ！次に行きましょう！」

続いては祝札さんの作品、《遊戯王5D's チーム・シグルス》と《遊戯王GX SD ー アナザー・ワールド》から！

スバル「まずは《遊戯王5D's チーム・シグルス》からエミさんから！【龍可のデッキレシピを教えてください！】

龍可「私のデッキレシピ？」

レミ「エミさんが「どうやってたらあんなオーバーキルができるのか、そのデッキの秘

密を知りたいわ」と来ているのよ」

龍可「俺も気になる！毎回ワンキルとオーバーキルの餌食になっているから、今後龍可とデュエルする時の参考になるよ！」

龍可「何でそうなるわけ……」

遊輝「じゃあ龍可、この場で公開しなよ」

龍可「そうね。これが今現在、私の使っている《カオス・ライトロード》よ！」

ちなみにオリカには、名前の横に☆マークを付けてます。そして、めんどくさいので、《ライトロード》は省きます。なお、このレシピはあくまで一例です。ここに入っていないカードを使う事があります。ご了承ください。

【2013年5月18日当時の禁止・制限リストを元に、当時のカードプールで構成。今は全然違うということをご理解ください】

最上級モンスター

計 7枚

・オラクル

ゼウス

☆

・裁きの龍

×3

・カオス・ソルジャー

・冥府の使者 ゴーズ

・ダーク・アームド・ドラゴン

上級モンスター 計 1枚

・カオス・ソーサラー

下級モンスター 計 21枚

・ネクロ・ガードナー ×3

・ハンター ライコウ ×2

・マジシャン ライラ ×2

・スネーク キラー ×2 ☆

・輝白竜 ワイバー スター×2

・暗黒竜 コラプサーペント ×2

・サモナー ルミナス ×2

・ビースト ウォルフ ×2

・バタフライ ファルファツラ ☆

・ドルイド オルクス

・パラディン ジェイン

・モンク エイリン

魔法

11枚

・ジャスティス・ロード ×3

・ソーラー・エクステンジ ×3

・サイクロン

・大嵐

・光の援軍

・死者蘇生

・貪欲な壺

☆

エクストラデツキ

計

11枚

・エンシエント・フェアリー・ドラゴン

・エンシエント・コメット・ドラゴン

☆

・妖精竜 エンシエント

・菅魔人メロメロメロディ

・弦魔人ムズムズリズム

・交響魔人マエストローク

- ・ 太鼓魔人テンテンテンポ
- ・ 輝光子パラディオス
- ・ ダイガスタ・エメラル
- ・ セイクリッド・オメガ
- ・
- ?????

響「……………典型的なカオス・ライトロードだね。少しライトロードの種類が多いけど」

レミ「閻属性モンスターが8体だけだね。よくカオス・ソルジャーとか出せるよね？」

龍可「これでも出す回数は減っているわ。何でクリッターが禁止カードに行くのよ！」

遊輝「魔界発現世行きデスガイドとの相性の良さだよ。それに新作にクレインクレインがまさにクリッターのためのようなカードだからな」

龍亞「魔界発現世行きデスガイドって、海外先行のカードだよな？」

遊輝「そつ、そこからすぐに準制限にいったカードだよ。閻属性モンスターがもう少し欲しいって言って来たから、輝白龍と暗黒竜だけは龍可に上げたな。さすがに魔界発現世行きバスガイドは合わないし」

スバル「逆に絶対に渡せないカードは？」

遊輝「チエイン!!あれだけは絶対にダメ!俺も使わないし、龍可に渡したら、絶対に悪い事しかないよ!」

奏「どんなカードなの？」

遊輝「これだよ」↑みんなにチエインを見せる。

響「……何このカード?墓地にカードを落とせるし、デッキトップにモンスターを置ける?」

龍亞「物凄く悪いカードだね……」

遊輝「コンボの始まりは全部これ!って言うくらい悪いカードだよ」

龍可「遊輝!これ頂戴!」

遊輝「絶対にダメ!!!」

龍可「……けち……」

奏「エ、エクストラデッキに行きましよう」

スバル「てか、シンクロモンスターが3体だけか。ライトロードにシンクロモンスターをあまり入れないし、妥当か」

レミ「龍可ちゃん、こんなにエクシーズモンスターを貫つていたのね」

龍可「どれもこれも強いよ!魔人達はそれぞれをカバー出来るし、それぞれでも効果

で使えるんだ」

スバル「このパラディオスってカードも強いな。相手モンスターの攻撃力を0にして、破壊されたら1枚ドロウか」

龍亞「ところで、この????って何？」

それは、文化祭で手に入れたカードなんだけど、まだ案が思い浮かんでないんだよ

レミ「まだ考えていないの！」

どうしようかな〜〜〜と思って。エクシーズモンスターでライトロードなんかあまり使わないし、

龍亞「話には出てないけど、龍可普通にアカデミアでエクシーズモンスターを使いまくっているよ」

龍可「フィールドが埋まる事が多々あるから、エクシーズモンスターでフィールドを開けてさらに展開していくの」

遊輝「まあ、龍可のデッキレシピはこれくらいかな？」

レミ「次は《遊戯王GX SD 一 一 アナザー・ワールド》から友梨さんの

質問！【レミって何キャラ？】？何これ？」

これは質問を始めた当時に遊輝とレミの絡みが多かったから、レミのポジションって何?っていう質問だよ。

遊輝「あの時はダークシグナーとの戦いとかシークレットシグナーの試練とかで、割りとレミと一緒に行動する事が多かったからな」

レミ「それで私が龍可ちゃんの恋のライバルと・・・」

遊輝「????? どういう事?」

響「鈍感は黙って!!バブル・キャッチ!」

遊輝「わつつ!?な、何で泡に閉じ込められるの!」

響「これで遊輝には何も聞こえないわ!」

レミ「これは作者から答えてもらうわ」

えくとですね・・・当時はまだレミの設定を考えてなかった上に、シークレットシグナーにしたので、どうしても遊輝と一緒に行動する機会が多かったわけです。レミは、龍可の恋を応援する立場です。

レミ「私も人の彼氏を強奪する悪い女じゃないわよ」

龍可「(良かった・・・)」

遊輝「お〜い、さつきから何を話しているの?」

レミ「私はまだ恋を経験してないから、これから愛しい王子様でも探すわ」

こんなもんでどうでしょう？

スバル「良いんじゃないのか？設定も言ったし」

響「じゃあ遊輝を解放するわよ！」↑泡を割る。

遊輝「痛っ!!!」↑地面にダイブ。

龍亞「次も友梨さんから！【No, のオリカを出さないの?】」

奏「これも作者から答えてもらわないと」

現状ではNo, のオリカは出しません。今後のアニメの展開が分かりませんので。

一応、設定は《5D'sの世界にエクシーズモンスターを入れる》という設定ですの
で、よほどの事がない限りは今後作る予定はありません。

遊輝「例外が《CX ホワイイト・ゴッド・ドラゴン》だな」

あれは遊輝のシグナーの龍を進化させようと思って作ったからね。まあどうやって
進化させようと思っていた頃に《バリアンズ・フォース》が出てくれたから、助かるよ。

もし、No, やCNo, のオリカを作るのでしたら、《バリアンズ・フォース》や《ヌ
メロン・フォース》を使っただカードになります。

続きましてゼクスユイ先生の作品! 《遊戯王5D's 娘たちの物語》!!

遊輝「主人公の奈美さんの父、輝さんから!」みんなはどれくらい料理はうまい? う

まい・ふつう・まずい・死んだ方がマシの4段階で!

龍亞「これで言ったら、遊輝は絶対にうまいだよ!」

スバル「三ツ星からスカウトが来るほどの腕前だからな!」

響「龍亞君たちが羨ましいよ。毎日三ツ星のシェフの料理を食べれるんだから!」

遊輝「響、その言い方は語弊があるぞ!」

龍亞「俺は料理ができないから判定は無理だね。龍可は……ふつうになるのか

な?」

龍可「遊輝と比べてしまったら絶対にふつうになるわね!」

レミ「奏もふつうだね。ケーキ作りは間違はなくうまいだよ!」

スバル「俺は料理をあまりしないからまずいだな。レミと響は……」

奏「まずいと死んだ方がマシの間、どっちかというと、死んだ方がマシよりね!」

レミ「それ酷くない!」

遊輝「最初の料理を見た時、えげつなかった。砂糖と塩化ナトリウムを間違えるし、何の根拠もなく河豚を調理しようとしたし!」

響「……良いんだよ。遊輝の方が綺麗だし、モテるし、料理も出来るんだよ。私たちより女性的なんだよ」

グサツ！グサツ！グサツ！

遊輝「……↑『の』の字を書く。」

スバル「おーい?!?!しっかりしろ!!」

龍亞「否定できないのが悲しいね……」

スバル「次は作者であるゼクスユイさんから、「本文が台本形式だと見づらいつと思う時があります。本文を通常の小説形式にする考えはありますか?」

龍可「これは今は小説形式だね。どうしてなの?」

小説を書き始める前に1年ぐらいなろうで色んな小説を見てきたんだけど、その時に誰が言っているのか分からない時があったんだ。だから、最初小説を書いた時は台本形式だったんだよ。

でも、色んな人から見づらいつと言われたから、小説形式に変えたんだ。

レミ「普通小説って言ったら、名前がないのが当たり前だからね」

今後は小説形式で書いていきます。

遊輝 「いよいよ最後の質問だよ！匿名希望で、「オリキャラのメンバーは何故そのデッキを使うようになったのか？」」

龍亞 「これも作者が答えてくれないと」

まずは遊輝だな。この小説を書き始める時にどんなテーマで行こうか考えていたら、「GXでシンクロとエクシーズが出ていのに、何で5D，sでエクシーズモンスターを出さないの？」って思ったから、主人公のデッキはエクシーズモンスター主体のデッキになったんだ。そして、「エクシーズモンスターがたくさん出るデッキと言えば、ZEXALの遊馬デッキだ！」と思って、遊輝のデッキは《遊馬》デッキになったんだ。

龍可 「《聖刻》デッキは？」

単純にLkierのしやすさと、当時《聖刻》デッキを作っていたから。

龍亞 「そんな理由!？」

レミ 「次は私たちね！」

シークレットシグナーはそれぞれのテーマを決めた時に、その痣にあう属性のデッキを使おうと決めたんだ。

レミは風属性で直ぐに《ドラグニティ》。

響「作者が使っているデッキだよね？」

そう！だから使いやすくて、色んなコンボも生まれやすかった！

スバルは地だったけど、十代の子孫って設定だから直ぐに《E・HERO》デッキになった。

響は、水属性で5D，sの世代で有名なカテゴリーが《リチュア》か《氷結界》。でも、色んな所で《リチュア》が出ていたし、リチュアでシンクロは少し難しいから、《氷結界》にしたんだ。

響「その時はブリューナクは禁止カードじゃなかったの!!!」

奏「あのカードは悪い事しか使われないからね。今までよく制限カードでいられたわね」

レミ「奏は？」

奏の痣が雷だから光属性にしようと、その時に真つ先に思い浮かんだのが、《ヴァルハラ》。

遊輝「裏デッキだな。なんで採用しなかったんだ？」

これも色んな所で出ていたから。そしてたどり着いたのが、パーミッションに《代行者》の動きを入れた《代行者パーミッション》だよ。

スバル「これは《代行者》であって、パーミッションでもあるからな。動き方が少し

難しいんだよ」

それでも、面白いなと思って、奏のメインデッキにしたんだ。

奏「パーミツシヨンの動きがあるから、相手を止められるけど、手札切れが問題なのよね」

そうそう。これ実際に作ったけど、モンスターに偏ったり、罠に偏ったりと大変なんだよ。

龍可「最後は色々なオリキャラたちのデッキね」

Wikiのデッキレシピで面白いテーマのデッキを採用してます。

レミ「……………それだけ？」

それだけ。何か言いたい事でも？

レミ「……………無いわ」

遊輝「これで質問コーナーを終わります！」

さて、次は人気ランキングなんだけど……………

龍可「なんだけど？」

まだ遊星たちが来てないんだよ。

遊輝「そう言えば、ジャックやクロウにアキさんも見えないな」

奏「どうするのよ？」

適当に何かゲームでもしといて

スバル「おい!!面倒くさい事を俺たちに投げるなよ！」

レミ「じゃあ・・・皆で王様ゲームをしましょう!!」

響「良いね!!やろうやろう!!」

奏「レミ!何で勝手に決めるのよ!?それにカードは!？」

レミ「ここにあるわよ!!」

龍可「いつのまに・・・」

遊輝「ご都合主義だな」

響「じゃあみんなでやろう!カードの中身は「王様」と書かれているカードと数字の

1〜6だよ！」

スバル「しゃあねえか・・・」

龍亞「遊輝も龍可も早く来なよ！」

遊輝「はいはい、今行くよ」

龍可「仕方ないわね・・・」

レミ「先ずは一回戦!!」

龍亞「誰が引き当てたの？」

スバル「あつ、俺だ」

響「スバルかゝゝ、残念」

スバル「つて言つても、何も思いつかないし……じゃあ、1番、ジュース持つてきて」

奏「1番は誰？」

龍亞「俺だよ。どんなジュースが欲しい？」

スバル「何でも良いぜ」

龍亞「(ニヤリツ)分かった!!」

ゝゝゝ数分後ゝゝゝ

龍亞「お待たせ！」

龍可「ずいぶん遅かったわね」

スバル「じゃあ、ジュースを飲も」

プシューーーーーー!!!!

スバル「……………↑顔がコーラまみれ

龍亞「アハハハハ!!!」

遊輝「龍亞!? コーラをふりやがったな!」

龍亞「だつてただ渡すだけでもつまらないもん!!」

スバル「……………龍亞! 覚悟しろ!!」

龍亞「へっ?」

スバル「スパイラル・グラウンド〜蟻地獄く!!!」

ドオオオオオオオ……………

レミ「えっ!? な、何!? 地面が揺れているけど!」

龍亞「う、うわあーーーーー!!!」

龍可「見て! 龍亞の足元が!」

奏「蟻地獄ができている!」

響「吸い込まれるよ!」

スバル「そのまま永遠に地面に沈め!!」

龍可「スバルさん! それ、逝くのと同じ発言ですよ!」

龍亞「ごめんなさい! 許してください!」

遊輝「ちよっ!?マジでやばい!!プロミネンス・チェーン!!」↑プロミネンスで龍亞を引っ張り出す。

龍亞「あつついーろーろーろー!!!」

レミ「スバル、逝かせるのはさすがにまずいよ……」

スバル「ちえっ、もうするなよ」

龍亞「う、うん(熱い……)」

響「それじゃ2回戦!」

奏「今度は私ね。そうね……6番!新作のケーキを味見して!」

響「やった!!私だ!」

遊輝「良かったな。奏が優しくて」

奏「はい、これが新作のケーキだよ」

響「いただきます!!」

レミ「どう?美味しい?」

響「すっごく美味しい!!これ今まで食べた中で一番美味しいよ!」

奏「ありがとう!」

レミ「それじゃゲームに戻って、3回戦!」

龍可「私……って言っても何も無いのだけど……」

レミ「何か疲れている所とかないの？誰かがマツサージでもしてあげるよ」

龍可「そんな事はないですけど……じゃあ3番、肩を揉んで」

レミ「つて私だ。よし……どう、気持ちいい？」

龍可「うん！すつごく気持ちいい！」

奏「レミって手先器用だね」

遊輝「そんな奴が何で料理になったら、あんなに失敗するんだ？」

レミ「そこ！うるさいわよ！」

龍可「すぐく肩が軽くなった！レミさんありがとう！」

レミ「どういたしまして」

響「どんどん行くよ！4回戦！」

響「やっと私が王様になった!!じゃあ5番!!何か歌って！」

龍可「誰？5番？」

奏「私だ……じゃあ、十八番の浜崎あゆみで《SEASONS》」

レミ「おお！本当にすごい奴だね！」

――

――

――

奏「……僕らは今生きていて　そして何を見つけるだろう」

パチパチパチパチパチパチ！！

龍可「綺麗な声……」

龍亞「クリスマスコンサートで聞いたけど、やっぱり一番感動するよ!!」

奏「／あ、ありがとう」

レミ「何で顔を赤くするのよ？」

奏「／いつもはみんなと一緒にだけど、こうして一人で歌うとなんか恥ずかしい……」

響「そんな事ないよ!!めちやくちや上手だよ！」

レミ「今度から奏のソロで歌う事もありね！」

奏「レ、レミ!!」

遊輝「こういう所が迷惑をかけているんだよね」

レミ「よし！次行くよ！」

遊輝「俺か、うくん……2番、料理の材料を自腹で買ってきて」

スバル「げっ……俺だ」

龍可「何で料理の材料を買ってきてもらうの？」

遊輝「この後の打ち上げの時に料理を作るから。ついでだから、奏のケーキの材料も買ってきて。これ、食材のメモ」

スバル「……ちよつと待て！これいくらかかるんだ!?鳥肉10kgに卵150個！その他諸々！」

遊輝「ざつと10万はいると思う」

龍可「じゅ、10万!?!?!」

遊輝「それくらいかかるよ。今回は人数も多いし」

レミ「スバル！王様の命令は絶対だよ！」

スバル「……分かったよ……」↑買い出しに出かける。

レミ「スバルがいなくなったから、6のカードを抜くよ」

響「それじゃ6回戦！」

龍亞「やっと俺が王様だ!!えつとえつと……」

遊輝「何も考えて無かったのかよ！」

龍亞「えっと……1番と3番！ポツキーゲームをして!!」

レミ「ちよっ!?龍亞君!」

奏「何を言っているのよ!」

龍可「1番は私だ……相手は？」

遊輝「俺だ」

龍可「///／／えっ!?(よりによって遊輝と?!?)」

レミ「何というグッドコンビ!!」

龍亞「(どう！俺もたまには役に立つでしょ!)」

響「(まあ……良しとしよう)」

奏「(そんな事より龍可ちゃんの頭がショート寸前だよ)」

レミ「(大丈夫よ。王様の命令は絶対だから、どんなに赤くなくてもやるから)」

奏「(それ関係ないでしょ!!)」

龍亞「(どうしたの!?!王様の命令は絶対だよ!!早くやってよ!!)」

遊輝「……ほい龍可」↑ポツキーを口に加える。

龍可「///／／(な、何で遊輝は平然とやってるのよ!!)は、はい」↑口に加える。

サクサクサクサク……

レミ「(おうくく、どんだん口が近づいていくよ)」

響「(そのままキス!そのままキス!!!)」

龍亞「……………(ワクワク!)」

ポキッ

遊輝「あつ、折れたな」

龍可「//////そ、そうね!!」

遊輝「何でそんなに顔が赤いんだ？」

龍可「/////////////////////べ、別に良いでしょ!!!」

遊輝「……………俺、怒らすような事を言った？」

レミ「言ったよ!! (鈍感め!!)」

響「(あとちよつとで何で折れるのよ?!)」

奏「はいこれでおしまい。次に行きましょう」

あつ、遊星たちから連絡があってもうすぐ着くつてよ。

響「じゃあ次が最後ね!」

レミ「最後の王様は私!!そうね……………まずはこの番号が誰か知りたいわ。4番

は誰？」

遊輝「また俺か、何をすればいいの？」

レミ「遊輝……（ニヤリッ）じゃあ遊輝に命令!!この1周年企画が終わるまで、

メイド服を着て、化粧もして、完璧な女装をする!!」

遊輝「……………はあああああ!!」

レミ「さあ早く着替えてきて!!王様の命令は絶対よ!!!」

遊輝「誰がそんな事するか!!!」

レミ「そう……ならこれよ!」↑銃口を向け、遊輝に撃つ。

遊輝「そう何度も同じ手には掛からないよ!炎斬!大文字!」

レミ「(かかった!)大いなる風よ!遊輝を包み込み、私の操り人形となれ!!ウイング・パペット!!」

遊輝「えっ!?ちよっ!?うわっ!!」↑風に囲まれて、関節を捕まえられる。

レミ「後は……………これの出番!!」

スバル「ただい……………何しているんだ?」

レミ「スバル!!この機械使うわよ!!」

スバル「あつ、分かった」

レミ「そりゃ!」

遊輝「へぶっ!!」↑謎の機械に入れられ、閉じ込められる。

レミ「えっと、ああして、こうして……スイッチオン!!」

ブォーン……

奏「……ねえスバル、あの大型の機械は何なの？」

スバル「レミに頼まれて作った、全自動の着替えマシン。始めて作った大型の機械だよ」

龍可「……聞くのが怖いですけど、大丈夫ですか？」

スバル「大丈夫だよ。レミがどんな設定をしても、壊れないようにだけはある」
響「どんな格好で出てくるかな!かな!」

くくく数分後くくく

チーン

スバル「どうやら着替え終わったみたいだぞ」

遊輝「／＼／＼／＼／＼／＼は、恥ずかしい……」

響「ニヤ／＼って言って!!ニヤ／＼って!!」

遊輝「／＼／＼／＼／＼／＼ニ、ニヤ／＼?!?……」↑猫の真似をする。

龍亞「(遊輝が壊れたー!ー!ー!?)」

奏「可愛い!!」↑抱きつく。

遊輝「／＼／＼／＼ちよっ!?奏!!」

龍可「奏さん!!何で抱きつくのですか!?!」

レミ「(奏!!駄目だよ!!龍可ちゃんが嫉妬するよ!!)」

奏「(うう／＼、ものすごく抱きつきたい!!)」

レミ「(龍可ちゃん!思いつきり抱きついて来なよ!)」

龍可「／＼／＼／＼(えっ?!?えっ?!?)」

レミ「(私が王様だから、遊輝は私の命令に従うから!と言うより今はどんな人でも言う事を聞くから!)」

龍可「／＼／＼／＼／＼／＼(……は、はい)ゆ、遊輝」↑強く抱きつく。

遊輝「／＼／＼／＼／＼／＼ちよっ?!?!?、龍可!?!?何をしているの?!?!?」

龍可「／＼／＼／＼／＼し、しばらくこのままでいてもいい?」↑上目使い。

遊輝「／＼／＼／＼／＼うっ!(な、何でだろう!?!女の子のこの目線は断れない!!それに胸

がドキドキする!!!) い、良いよ。好きただけ抱きついて……

龍可「//////////// (本当に可愛い。人形を抱いているみたい……)」
↑さらに強く抱きつく。

スバル「……………作者はこの二人に何を求めているんだ？」

奏「分からないけど、私からはこう読めるわ。早く結ばせたい」

スバル「同感……………」

パカッ

クロウ「よおく待たせ……………」

遊星「どうしたクロウ？中に入らないのか？」

クロウ「ゆ、遊星…………しばらく外にいようぜ。どうやら場違いのようだ」

遊星「???」

ジャック「あのコスプレした奴、誰だ？」

アキ「龍可は何で抱きついているの……………」

スバル「ゆ、遊星さん!!」

奏「も、もう少しで終わりますから、待っていてください!」

遊星「あ、ああ……………」

~~~~~数十分後~~~~~

遊星「…………大丈夫か？」

遊輝「……………全然大丈夫じゃない……………早く着替えたいよ」

レミ「さすがに可哀想だから、猫耳だけ取っていいよ」

遊輝「……………と、取れない……………」

レミ「えっ!？」

スバル「……………おいレミ!!余計なボタンを押しただろ!!」

レミ「そ、そう言えば、赤いボタンを……………」

スバル「馬鹿野郎!!あれは着替えが出来なくなるボタンだ!!」

レミ「ええええ……………!!!」

アキ「何でそんなボタンなんかをつけたわけ!？」

スバル「設計上、どうしてもそうしないと上手く出来なかつたんですよ!!」

龍亞「遊輝はどうなるの!？」

スバル「修理はするけど、3日間はそのままの格好だ!!」

龍可「み、3日間!?!」

遊輝「……………!?!……………!?!……………!?!……………!?!……………!?!……………!?!……………」

レミ「……すいませんでした!!」

アキ「何でもかんでもボタンを押すからでしょ……」

遊星「俺も手伝おうか?」

スバル「いえっ、俺が作った機械ですので、俺が責任をもつて修理します!」

遊輝「//////た、頼むから早くしてね。スカートでいるから、下がスウスウして

感覚が変なんだよ……。それにこの格好、凄く寒いから……」

響「(それだけ露出度があれば、寒いだろうね……)」

じゃあ人気ランキングの方に行くよ〜。

遊輝「//////ちよつと待って!!俺このままの格好で行くの!!」

レミ「そこは王様の命令だからね」

遊輝「//////うう〜、恥ずかしいよ……」

スバル「(気のせいかな?女言葉が増えたような気がするが?)」

アキ「(そんな事は無い……って言い切れないわね……)」

それでは、人気ランキング!!

レミ「今回はメインキャラ14人の人気ランキングを発表して行きます！」  
まずは・・・同率で12位が3人!!

響「いきなり3人も被っているの!?!」

ちなみに言つとくが、今回は被りが多かったぞ。

遊輝「マジかよ!!」

じゃあ12位の発表!!12位は・・・

龍亞、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガン  
(1票)

龍亞「俺だ！もう出ちやっただ！」

クロウ「やったぜ！出番が余り無いのに、1票を勝ち取ったぜ！」

アキ「喜んで良い所？」

ジャック「キングであるこの俺が最下位だど!？」

遊輝「クロウと一緒に出番があまりなかったからね」

レミ「猫姿のメイド服に慣れた？」

遊輝「／／／／／言わないで・・・」

奏「出来れば、そのまま過ぐして欲しい！ものすごく可愛いから!!」



では、選んでくれた読者に一言。

龍亞「俺を選んでくれてありがとう！龍可ばっかり目立っているけど、これから俺もいたずらかしてどんどん目立っていくからよろしく!!」

クロウ「出番が無いのに選んでくれた読者!!ほんとにありがとう!!正直、誰も来ないと覚悟していたから、助かるぜ！」

ジャック「ふん、ありがとうとだけ言ってやろう」

アキ「素直じゃないわね」

次行こう！次は11位!!

葵

レミ

(2票)

レミ「私だ!!」

スバル「結構早くから出ているのに、以外と早くに出たな」

遊輝「暴走するから、この順位になるんだよ」

レミ「・・・スバル、あの機械、ぶっ壊しても良い?」

スバル「壊したら、一生遊輝はその姿だな。設計図無しで作ったから、二度と同じのは作れないだろう」

遊輝「すいませんでした!!!」 ↑土下座

レミ「よろしい」

レミには一言メツセージが来てるよ。

レミはなんがかんらで目立っていたから

(祝札さん)

龍亞「確かにすごく目立っていたね」

龍可「今でも十分目立っているけど」

響「今は遊輝が一番目立っているよ！」

遊輝「／／／恥ずかしいから言わないで……」

じゃあ、レミ、選んでくれた読者に一言。

レミ「私を選んでありがとう!!これからも応援よろしくね!軽音部のライブも応援よろしく!!」

じゃあ次!次は同率で9位が2人いるよ!9位は……

遊城スバル、十六夜アキ

(4票)

スバル「俺が入った！」

アキ「私も入ったわね」

遊星「良かったなアキ」

アキ「／／あ、ありがとう」

響「スバルもレミより上で良かったわね！」

レミ「さりげなく酷い事を言ったわね！」

クロウ「良いじゃねえか。最下位よりマシだぜ」

じゃあ2人共、選んでくれた読者に一言。

スバル「俺を選んでくれてありがとう!!これからどんどん楽しいデュエルをして行くから宜しくな！」

アキ「選んでくれてとても嬉しいわ。私の出番もこれから増えてくるからよろしくね」

どんどん行くぞ!!次も同率で7位!!

小野寺

響、ダイヤ

(5票)

響「私だ!」

ダイヤ『私もランクインですか』

ダイヤは精霊のメインキャラとして、遊輝をサポートしてくれているからな。

遊輝「ダイヤは知識面で助けられるからほんとにありがたいよ」

スバル「遊輝の精霊たちのリーダー格だな!」

奏「アースもあれくらいしっかりして欲しいよ」

アース『ふわあ、また呼んだ?』

レミ「アースって本当に寝ているの？なんか奏がアースと言う度に来ているけど」  
アース『こつちも眠いんだよ〜。お休み〜（ムニヤムニヤ）』

奏「アース!!そんな所で寝ないで!」

クロウ「・・・こりや駄目だ。爆睡してやがる」

龍亞「いつでもどこでも寝ているよね」

奏「はあ〜〜・・・」

じゃあ響とダイヤ!読者に一言!!

響「読者のみんな!私への投票ありがとう!!これからも応援よろしくね!!」

ダイヤ『投票していただき光栄です。これからもマスターの影で支えていきます』

遊輝「よろしく頼む」

では6位!!!

プラチナ

(6票)

プラチナ『私ですか』

奏「プラチナも遊輝を支えてくれたわね。主に移動面で」

レミ「後は……知っていたらかなり読み込んでいると思うけど、女の子だね……」

龍亞「えっ!?! プラチナって女の子?」



プラチナ『はい、精霊世界で擬人化している時は女性の姿で過ごしています』  
アキ「以外ね・・・」

プラチナ！一言よろしく！

プラチナ『私を選んでくれてありがとうございます。ダイヤと同じく、これからも主を影から支えていきます』

さあ次!!次は同率で4位!!4位に入ったのは・・・

水野 奏、パール

(7票)

奏「私?!みんなより好順位なんて!」

パール『私も入った♪』

奏にはメッセージが来てます。

女子のオリキャラの中で一番可愛いと思う。

(龍南さん)

奏「か、可愛いなんて・・・。///」

響「奏く顔が赤いよく(ニヤニヤ)」

奏「///ゆ、遊輝には負けるよ・・・。」

遊輝「・・・。俺、性別変えようかな?」

スバル「おーーーーーい?!?!?!?気を強く持て!!!」

龍可「大丈夫よ!!遊輝は男性として良い所がいっぱいあるから!」

レミ「(男じゃないと龍可ちゃん、結婚できないからね)」  
ジャック「精神が弱いな」

遊星「あんな格好でずつといるからだろ」

龍亞「遊輝がもつと壊れてしまうよ・・・」

レミ「パールが精霊の中で一番順位が上だね！」

パール『嬉しいよ♪お兄さんに勝って♪』

それじゃ2人共、一言どうぞ!!

奏「私に投票してくれてありがとうございます!!デュエルはまだまだですが、これからも頑張っていくしますので、応援よろしくお願いします!!」

パール『選んでくれてありがとう♪凄く嬉しいよ♪これからもよろしくね♪』

いよいよベスト3だ!!まずは3位!!

不動

遊星

(8票)

遊星「俺か」

遊輝「原作主人公だからね。やつは強いよな」

アキ「おめでとう遊星」

遊星「ありがとう」

レミ「(この2人ももうちよつと積極的だったらなく、特にアキさん)龍亞「レミさん、変な事を考えていない?」

レミ「何も考えていないわよ!!」

遊星!!読者のみなさんに一言!!

遊星「俺を選んでくれてありがとう。これからもよろしくな」

さあ残るは1位と2位なんだけど……

響「なんだけど?」

まさかの同率……

奏「1位まで同率なの!?!」

これはさすがに驚いた。こんな結果になるとは思わなかった。

クロウ「早く発表しようぜ!」

龍亞&レミ「(誰がどう考えてもあのカップルしかないんだけど)」

じゃあ最後の発表!!同率1位で入ったのは……

遠藤 遊輝、龍可

(20票)

遊輝「俺だ!!」

龍可「私も!!1位だ!」

人気キャラ1位は遊輝と龍可!!!

ジャック「当たり前と言えば当たり前だな」

スバル「てか、3位と10票近く離れているな」

レミ「同率1位だったとはね、どっちかが1位、2位とは思っていたけど」

遊輝と龍可にはコメントが来ているよ！まずは龍可！

こちらの話と合わせて、面白かったので1番に

(祝札さん)

やっぱり可愛いから！

(龍南さん)

龍可「面白いつて……」

レミ「祝札さんの龍可ちゃんも結構目立つけど、こっちの龍可ちゃんもかなり目立っていたからわね」

龍亞「多分何処の異世界を探しても、元気いっぱい積極的に、カオス・ライトロードでIKILLとオーバーキルを狙いに行く龍可はいないと思うよ」

そうしたら面白いと思って、俺がしたからね。次は遊輝!!

主人公だから

(祝札さん)

主人公だから、いろいろ苦労が絶えないが頑張れ

(龍南さん)

響「主人公だからって言うのは鉄板ね」

遊輝「……俺、いつから苦労人になったんだ？」↑猫姿のメイド服

スバル「その格好でいて苦労人と思わない人がいるのかよ」

ちなみに遊輝の苦労した歴史を少しまとめてみました。

・龍可のオーバーキル (数回)

・骨折3回

・龍可からのありがたいお話

・響にずぶ濡れ (計2回)

・無理矢理、軽音部に入れられる。

・精霊世界でみんなのご飯や入場料、お土産代を一人で払う

・文化祭でメイド服を着せられる↑47人アタック!

・龍可の執事

・クリスマスコンサートの料理

・今現在のメイド服



龍可「こんなにあるの!?!?」

クロウ「ある意味俺以上に苦労しているな……」

スバル「これの半分がレミが絡んでいるけどな」

レミ「いや〜面白いなくと思つてやったからね。全部成功しているから良いでしょ!」

龍可「(そのうち本当に壊れてしまうよ……)」

それとカミングアウトするけど、締め切りギリギリまで、遊輝は2位だったから。

遊輝「なん……だと……!?!?」

ほんとほんと。メールで着たランキングが3つあったけど、そのうち2つは龍可が1位だったからな。最後の投票でギリギリ追いついた。

遊輝「この小説の主人公で、こんなに苦労して、こんなに辱めを受けて2位だったら……」

スバル「ドンマイ……としか言えないな」

アキ「結果的に1位になったから良いでしょう」

それじゃお二人さん!選んでくれた読者に一言!!

龍可「みんな!!投票ありがとう!!みんなのおかげで1位になれたよ!!これからも元気いっぱいデュエルをしていくからよろしくね!!」

遊輝「えくと・・・投票ありがとう!!一応1位になる事が出来ました!!これから  
も主人公として頑張っていくますので応援よろしくお願いします!!」

龍亞「猫姿のメイド服で言っても説得力がないね」

遊輝「・・・頼むからもう言わないでくれ」

これにて人気ランキングは終了します!!

さてと、後はコラボの事なんだけど・・・

レミ「コラボはどうなったの?」

正直、来るとしても2、3件だと思つてたら、7件も応募が来たんだ!!

奏「7件!!凄いいじゃない!!」

いや〜そこなんだけどさ、俺、最初にも言つたけど、今年受験生だろ。

2、3件の応募だったら、全部コラボしていたんだけど、7件も書くのはちよつと時

間が・・・

遊輝「勉強しないといけないからな」

と言う訳で、誠に申し上げありませんが、こちらが勝手にクジをしてコラボをする方

を2人までにしました！

レミ「既にコラボする方には、設定とかの関係でメールを送った時に分かっていると  
思うわ」

今回この小説にコラボをしてくださろうとした、ゼクスユイ先生・アトランさん・  
フュージョニストさん・竜羽さん・mayuge3さん、本当に申し訳ございません!!!  
今回はコラボがないという事になってしまいます。

奏「応募してくださいだった皆さん、本当にすいません。作者が大学受験が終わり、ひと  
段落した所で、こちらからもう一度お願いします」

そして今回、コラボをするのは、祝札さんの小説、《遊戯王5D's チーム・シグ  
ルス》と龍南さんの小説、《遊戯王 CROSS HERO》です。

遊輝「まずは祝札さんの小説、《遊戯王5D's チーム・シグルス》からコラボを  
します。そちらの世界に俺が行きます」

レミ「そのネコ姿のメイド服で行くの？」  
遊輝「んなわけねえだろ!!!」

コラボは微調整とかがありますので、少し期間があくかもしれません。

そして、コラボを書き上げたら、受験勉強に集中するため、しばらくこの小説の更新  
をストップします。

響 「みなさんの小説の感想はギリギリまでやっていきます」

それでは、この小説、《遊戯王5D's 転生者と未来のカードたち》をこれからもよろしくお願いします!!!

龍可&龍亞 「それでは、さようなら!!!」

## コラボ　　〈遊戯王5D's〉　　チーム・シグルス〈

遊輝　　side

今日もアカデミアで皆と練習してその帰り、一人で今日演奏した曲を音楽プレイヤーで流しながら夕飯のメニューを考えている。

『きゃっ♪』　『キャッツ♪』

「はは、相変わらず甘えん坊だな。頭の上に乗っていいよ」  
そう言って、ブラックとホワイトが頭の上に乗った。

赤ちゃんだから、どうしても俺と一緒にいたいらしく、毎日こうして実体化しては甘えてくる。

できる限りは面倒を見てやっている。一種の親バカだな。

『マスター、よろしいですか?』

「どうしたの?」

突然ダイヤが横に現れたので、イヤフォンを外し話を聞く。

『この近くで次元の歪みが起きています』

「次元の歪み?」

『この付近の次元が不安定な状態になっており、何処か別の世界に繋がっています。おそらくこのまま道を歩いて、この先へは進めないでしょう』

「それは厄介だね」

でも別の世界か……行ってみたいな。

色んな出会いがあるだろうし、良い経験にもなるから。

「ダイヤ、その次元の歪みに入る事は出来るの？」

『はい、ですが帰って来る保証はありませんよ』

「その時はその時だ！」

『……マスターらしいですね。分かりました。こつちです』

ダイヤが先行して、近くの空き地に来た。

その真ん中にはいかにもそれらしき、空間が歪み壁にヒビが入っているような物が開いてあった。

「こいつだな？」

『はい、間違いありません』

「おつしや！ いつちよ異世界に旅立ってみるか！ 行くぞブラック！ ホワイト！」

『きゃっ！』 『キャッ！』

頭の上に乗っているブラックとホワイトを抱えて、俺は次元の歪みに飛び込んだ。

遊輝

side

out

カイ side (ミステイの家)

「はいギン、この工具であっているよね？」

「ああ、ありがとな。カイ！ちよつとDホイールの整備に手伝ってくれ！」

「えつと……………ごめんギン、今は無理」

「無理って……………なるほど」

龍亞がギンに工具を渡した所で、Dホイールの整備に手伝ってくれと言われたのだが、今の状況だと手伝うことができないから、無理と答えた。

「……………良い加減カイから離れたら？龍可」

「／／／嫌」

昨日から龍可が離れてくれず、こうしてずっと僕にくっ付いているんだ。だから身動き一つも取れない状態なんだ。

でも、昨日のあれは僕が悪いからどうしようもないのだけど……………

「カイに迷惑がかかるだけなんだから離れなさい！」

「／／／嫌」

「龍可を攻めなくていいよ。昨日、僕が龍可にあんな事をしたのがいけないんだよ」  
いつまでも龍可が離れなさい事に腹を立て、エミが詰め寄って来たから、龍可のせい  
じゃないとエミを止める。

その時………

「うわっ！」

「何!?!急に光って!」

「ま、眩しいよ!」

突然、部屋の中央で光りが放れた。あまりにも眩しいから目を閉じてしまう。

作業していたギンと龍亞、僕に引っ付いている龍可も目を塞いでしまう強い光だ。や  
がて、光が収まり塞いでいた目を開ける。そこには………

「着いた—————!!」

『きやつ!』 『キャッ!』

白と黒の可愛いらしい人形(?)らしきものを抱いた、アカデミアの制服を着た男の  
子がいいた。

ギンもエミも何が起こったのか分からず固まっているが、今の僕の状況もきつと同じ



だろう。

えつと……この人はどうやってこの場に現れたの？さっきの光の間に出てきたみたいだけど……

「さてと、ここは何処かな？」

『マスター、周りに人がいる事に気づいて無いのですか？』

「……あつ、いたんだ」

その人の後ろに学ランを着て、鎖を持つている精霊のような人物が、周りを見るように話して始めて僕たちの存在に気づいた。

この人、天然かな？こんなすぐ近くに5人も人がいるのに全く気づかないとは……

「えつと、どうしようかな？固まっているからこのまま逃げて」

「させねえぞ」

一番近くにいたギンが、男の人の腕を掴み、さらに足で相手の両足を止めて攻撃させない体制にする。

「ですよねえ。そんな目をしなくても大丈夫ですよ、抵抗しませんから」

「じゃあ、どうやってここに来た？あの光の間に来たとは思えないが」

「話せば長くなるんだけど……」

「………つまり、遊輝君はこことは違う別の世界から来たんだね」

「そうだよ。もつとも、こうやって飛ばされるのは2回目だけど」

「二度死んで転生したなんて………漫画みたいな話があるんだね」

突然この場に現れた人、遊輝君の事情をここにいる全員が聞いた。

何でも次元の歪みという物から飛び込んでこの世界に来たみたい。さらにすごい事にこの人、一度死んで、別の世界に生き返ったって言っている。

「しかし………」

遊輝君が龍亞と龍可を見つめる。

「な、何だよ！さつきから俺と龍可ばかり見て！」

「いや、異世界の龍亞と龍可はこんなにも違うんだな〜と思ってさ」

「そつちの世界に龍亞と龍可がいるの!？」

遊輝君の世界にも龍亞と龍可がいるんだ。

「そつちの俺はどんな性格？」

「呑気でお調子者、まだまだ子供だな。こつちの龍亞は何か大人びいた感じがするよ」

「そんな事ないよ。俺も子供だし、まだまだ学ぶ事がいっぱいあるよ」

「そこそこ、そこが大人びている感じがするよ」

「じゃあ、そつちの龍可の性格は？」

エミが未だに後ろに隠れている龍可を見ながら、遊輝君に聞いた。

「簡単に言ったら・・・・・・弾けてるね」

「は、弾けてる？」

「えつとな、こつちの世界の龍可とは正反対で、俺の世界の龍可は元気いっぱいでも積極的にガンガン行く」

「わ、私が、元気いっぱい、積極的」

「こつちの龍可と全然違う・・・・・・」

元気いっぱいなの龍可か、一度見てみたいな。

「だからデュエルもえげつない事になった」

「えげつない事？」

ギンが？マークを浮かべる。

「俺の世界の龍可のデッキはカオス・ライトロード。しかも思った通りにカードを引いたり落したりするから、龍亞相手に毎回ワンキルとオーバーキルの繰り返し。ここ最近では龍亞も勝ちだしてきたけど」

「……」

ギンもエミも龍亞も龍可も、そして僕も啞然として聞いた。

何だろう……。勝てる要素が一つも見つからない。ライトロードってあの裁きの龍が出るカテゴリだろ。しかも、カオスという事は、閥属性モンスターを入れている。そんなデッキで勝てるその龍亞凄いや……

「そ、それは、私じゃない」

「確かに違いすぎる……」

「遊星も1回は負けているし、ある意味最強の決闘者だね」

「遊星にも勝てるなんて……」

「そ、そう言えばさ、遊輝が抱いているのは人形？」

話題を変えようと、龍亞が遊輝君がずっと抱いている白と黒の人形について聞いた。

「あ、えつと………精霊って分かる？」

「精霊？」

「僕は分かるよ。精霊が見えるから」

「わ、私も」

実際に精霊が見える僕と龍可、龍亞が遊輝君の質問に答えた。

「じゃあ話が早くすみそうだ。この2人は俺の精霊なんだ」

「ちよ、ちよつと待つて。精霊が見えるカイ達が見えるのは分かるが、何で俺も見えるんだ？」

「2人が実体化してるから」

「「実体化？」」

「簡単に言ったら、精霊が現実世界に出てくること。だから普段精霊が見えない人でも見えるんだ」

「へえ、これが精霊なんだ」

精霊が見えないエミとギンが興味深そうに遊輝君の精霊を見る。

「なんなら抱いてみる？赤ちゃんだから慎重にしてくれたら、喜ぶよ」

『きやつ♪』

『キャツ♪』

「じゃあこっちの白い方を……」

エミが遊輝君から、白い身体の精霊を受け取った。

「この精霊、すごく温かいね。しかも身体がモフモフしているから、気持ち良いよ！」

「ほんとだな。精霊ってこんなに温かいものか？」

「それは2人が特別なだけだよ」

『マスター、そんな事よりもこれからどうするのですか？』

遊輝君の後ろからさつきと同じ鎖を持った精霊が出てきた。

「そう言えばそうだ。どうしようかな？」

『折角ですから、デュエルはどうですか？』

「デュエルか、良いかもな。つうことで、誰かデュエルする？」

な、なんか軽い感じがする……

でも異世界の人とデュエルが出来るのか、やりたいな。

「遊輝君！俺としましょう！」

「カイさんか、良いぜ！何処でする？」

「近くに広場があるからそこでしたらどうだ？」

「そうだね。早速移動しようか」

―〈近くの広場〉―

ミステイさんの家から出て、遊輝君と俺は決闘デスクをセットする。

エミと龍可は遊輝君の精霊であるホワイトとブラックを抱いたままだ。「この子たちがいなくて大丈夫なの？」とエミが質問したら、「使う時に呼ぶから、抱いていてもいいよ」と返されたので、そのまま抱いている。

「それじゃやろうか！」

「はいー！」

「デュエル!!」

「デュエル!!」

遊輝

LP

4000

カイ

LP

40

00

「先行はそつちで良いよ。お邪魔しているし」

「それじゃ俺のターン！」

カイ

手札

6枚

まずは遊輝君がどんなデッキか様子をみないと……

「ガスタ・ガルドを守備表示で通常召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

カイ 手札 4枚

LP 4000

【モンスターゾーン】

ガスタ・ガルド 守500

【魔法・罾ゾーン】

伏せカード 1枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

遊輝さんはどんなデツキなんだ？

「(ガスタか……て事はまだ出さない方が良いかもな) ガガガマジシヤンを召喚  
！」

ガガガマジシヤン 攻1500

遊輝君の横に鎖を振り回し、学生服を着たモンスターが現れた。あのモンス  
ター……

「そのモンスター、さっきの……」

「あつ、見えていたんだ。そうだよ。ガガガマジシヤンの精霊、名前はダイヤ」

『初めましてカイさん』



遊輝君の精霊、ダイヤが丁寧に頭を下げた。

「さてと結局呼ばれてしまうけど……バトル！ガガガマジシャンでガスタ・ガルドに攻撃！」

ガガガマジシャンが鎖を振り回して、ガルドは破壊されてしまう。

「ガスタ・ガルドの効果！フィールドから墓地へ送られた時、デッキからガスタの巫女 ウィンダを特殊召喚！」

ガスタの巫女 ウィンダ 攻1000

「まあ、そう来るよね。カードを2枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

ガガガマジシャン 攻1500

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 2枚

「俺のターン！」

カイ 手札 5枚

「罨カード発動！リミット・リバーズ！墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する！ガスタ・ガルドを特殊召喚！Lv2のウインダにLv3のガルドをチューニング！」

☆2

+

☆3

||

☆5

「導きの風よ！さまよう者達を導く道を示せ！シンクロ召喚！こい！ダイガスタ・ガルド ス！」

ダイガスタ・ガルドス

攻2200

「ダイガスタ・ガルドスの効果！墓地のウインダとガルドをデッキに戻して、ガガガマジシャンを破壊！」

ガルドスが竜巻を起こし、ダイヤを破壊する。

「くっ！ダイヤが破壊されてしまった！」

「そして俺の墓地にモンスターがいないことでこいつを特殊召喚する！来てくれッ！ガーディアン・エアトス！」

ガーディアン・エアトス

攻2500

大きな鷹のような翼、茶色の変わった服を着て、右手には剣を持つモンスターが現れた。

凄く目をキラキラさせているけど……

『カイ!! あそこにある人形たちは何!? 凄く抱きたい!!』

「あれは……」

「……もしかして精霊?」

遊輝君が俺たちの会話を聞いて精霊かどうか尋ねてきた。

「そう。俺の精霊、ガーディアン・エアトスだよ」

『ねえカイ!! 今すぐにあの人形たちを抱いてきて良い!?』

「ダメだよ!! 今はデュエル中だよ!! それにあれは今戦っている遊輝君の精霊だから  
!」

『精霊!? 人形にしか見えないよ!! ああ〜、エミやギンたちが羨ましいよ〜』

「……何でそんなに反応するの?」

『だって凄くモフモフして気持ち良さそうなんだから!』

「そ、そう(奏みみたいな精霊だね……)」

「ねえ、早くデュエルを進めてよ。さつきから何を話しているの?」

エアトスや遊輝君との会話で止まっているデュエルをエミから早く進めるように言われた。

「デュエルが終わったら、抱いていいから」

『やった!! カイ! 早く終わらせよう!』

「はいはい……バトル！ダイガスタ・ガルドスで攻撃！」

「リバースカードオープン！罨カード、和睦の使者！このターンに受ける戦闘ダメージを全て0にする！」

遊輝君の前に女神が現れ、ダイガスタ・ガルドスの攻撃を止めさせる。

「そう簡単には終わらないか。モンスターをセットしてターンエンド！」

カイ 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

ダイガスタ・ガルドス 攻2200

ガーディアン・エアトス 攻2500

裏守備モンスター 1体

【魔法・罨ゾーン】

リミット・リバース (使用済み)

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 4枚

「……じゃあそろそろ行きますか。今から面白い物を見せてあげるよ」

「面白い物？」

「まずはゴゴゴゴーレムを召喚！」

ゴゴゴゴーレム 攻1800

遊輝君の前に岩で出来たモンスターが現れる。

「何？あのモンスター？」

「さっきのマジシャンと言い、見た事がないモンスターを使うな……」

「そしてカゲトカゲを特殊召喚！」

カゲトカゲ 攻1100

岩で出来たモンスターの影から黒いトカゲが現れる。

「カゲトカゲはLv4のモンスターの召喚に成功した時、手札から特殊召喚できる。

その代わり、シンクロ素材にはできないけど」

「シンクロ素材にできないモンスターをわざわざフィールドに出す？」

「この世界の常識なら入れないカードだよ。言つたよ。俺は異世界から来た転生者つて」

「どういう事だ？」

「じゃあ今から面白い物を見せてあげるよ！Lv4のゴゴゴゴーレムとカゲトカゲでオーバーレイ！」

「「「オ、オーバーレイ!?!?」」」」

遊輝君のモンスター達が小さな球体になり、突如現れた謎の穴に吸い込まれる。

☆4

×

☆4

||

★4

「な、何が起きているの!?!」

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築! エクシーズ召喚! 交響魔人マエストローク!」

交響魔人マエストローク

攻1800

謎の穴が爆発して目を瞑る。光が収まり目を開けると、右手に剣を持ち、英国の騎士のような服装を身につけた人が出ている。そのモンスターの周りにはさっきの球体が浮かんでいる。

「な、何これ……」

「え、エクシーズ召喚?!?!」

「これが俺の転生する前の世界で、シンクロモンスターの次に出たエクシーズモンスターだよ」

「シ、シンクロモンスターの次のモンスター……」

「エクシーズモンスターは、自分フィールド上の同じLvのモンスターを2体以上存在する時、素材となるモンスターを重ねることでエクストラデッキから特殊召喚出来

る」

「Lvが同じモンスターを揃えるだけ!？」

「チューナーも無しに呼べるモンスターだと・・・」

「そして、素材となったモンスターは、墓地にはいかずオーバーレイユニットとしてエクシーズモンスターをサポートする」

「オーバーレイ・ユニット?」

龍亞が遊輝君に疑問を投げかけたので、遊輝君はさつき出たモンスターの球体に指を指す。

「これがオーバーレイ・ユニット。エクシーズモンスターはこのオーバーレイ・ユニットを使って、始めて効果が使えるんだ」

「て事は、オーバーレイ・ユニットが無くなったら効果が使えないの?」

「良い所目をつけたな。エクシーズモンスターはオーバーレイ・ユニットが切れたら、普通のモンスターになるんだ」

「つまりあのモンスターは2回しか効果が使えないのか」

「もう一つ、エクシーズモンスターにはLvが存在せず、代わりにランクという物があるんだ」

「ランク?」

「ああ、だからLvに関する効果は一切受け付けないんだ。その代わりにシンクロ素材にも出来ないけどね。こんな物でどう?」

「大丈夫だよ。それにそのエクシーズモンスターがどんなカードが興味があるね」

「私も!どんな効果を持つのか楽しみ!」

「俺も!」

「俺もだな」

「わ、私も」

皆、遊輝君が出したエクシーズモンスターに興味を持っているみたい。

そうだよ。俺たちの世界には無いカードがどんなカードなのか、デュエリストなら気になって当然だな!

「それじゃ、マエストロークの効果!オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドの攻撃表示のモンスター1体を裏守備にする!ダイガスタ・ガルドスを裏守備に変更!」

交響魔人マエストローク      OVR      2↓1

ダイガスタ・ガルドス      攻2200      ↓↓裏守備

遊輝君のエクシーズモンスターが浮かんでいた球体を1つ斬り、剣を使い指揮者のように振る。



これを見たガルドスのカードが裏守備に変わる。

「ガルドス！」

「バトル！マエストロークで裏守備になったガルドスに攻撃！」

交響魔人マエストローク 攻1800

裏守備モンスター↓ダイガスタ・ガルドス 守800

マエストロークの攻撃をガルドスは無抵抗のまま破壊される。

「ガルドスをあんなにも簡単に破壊するなんて……」

「あのエクシーズモンスターは少し厄介だな」

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

交響魔人マエストローク 攻1800

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 2枚

エクシーズモンスター……俺たちの世界には無いカードを持つデュエリスト……

燃えてきたぜ!!

「俺のターン!」

カイ 手札 4枚

あのエクシーズモンスターの効果は少し厄介だけど、攻撃力は1800。このままエアトスで倒せる。

「エアトスで交響魔人マエストロークに攻撃!」

『フォビドウン・ゴスペル!!』

「リバースカードオープン!次元幽閉!エアトスの攻撃を無効にしてゲームから除外する!」

エアトスの目の前に次元の穴が開き、吸い込まれて行く。

『えっ!?私の出番これだけ!?』

そのままエアトスは吸い込まれてしまった。

「エアトス!!くっ……ガスタ・イグルを守備表示で召喚!これでターンエンド!」

カイ 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

伏せモンスター 1体

ガスタ・イグル 守400

【魔法・罨ゾーン】

リミット・リバース (使用済み)

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 2枚

「このまま押すぜ！ゴゴゴジャイアントを召喚して効果発動！召喚に成功した時、墓  
地から《ゴゴゴ》と名のついたモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！」

「遊輝の墓地に《ゴゴゴ》なんてつくモンスターって」

「忘れてないか？あのエクシーズモンスターの効果だ！」

「そう！ゴゴゴゴレムを特殊召喚！その後、ゴゴゴジャイアントは守備表示になる」

「でも、またLv4のモンスターが2体・・・」

「今度はどんなモンスターが出てくるの!?!」

「Lv4のゴゴゴジャイアントとゴゴゴゴレムでオーバーレイ！」

さつきと同じ謎の穴に2体の岩石でできたモンスターが吸い込まられていく。

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！フォトン・バタフライ・アサシン！」

フォトン・バタフライ・アサシン 攻2100

地面に出来た穴から出てきたのは、黒い羽の真ん中にピンクの模様が入っている人型の蝶。

「フォトン・バタフライ・アサシンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて、守備表示モンスターを攻撃表示にして、その攻撃力を600ポイントダウンさせる！エキサイト・スケールス！」

「させない！手札のエフェクト・ヴェーラーを墓地に送って、フォトン・バタフライ・アサシンの効果を無効にする！」

フォトン・バタフライ・アサシン OVR 2↓1

アサシンがオーバーレイ・ユニットを吸収した所で、エフェクト・ヴェーラーが現れて、アサシンの効果を止めた。

「あつちやく止められたかく、しようがない！バトル！アサシンで伏せモンスターに攻撃！バタフライ・デス・ランス！」

アサシンからたたくさんの色鮮やか蝶が出てきて、セットしたモンスター・・・墓守の偵察者を破壊する。

フォトン・バタフライ・アサシン

攻2100

裏側守備モンスター↓墓守の偵察者

守2000

「墓守の偵察者のリバーブス効果！デツキからもう1体の偵察者を守備表示で特殊召喚！」

「は、墓守!?!(ガスタだけじゃないのかよ!!参ったな……マエストロークで突破出来ない……)マエストロークでイグルに攻撃！」

「イグルの効果！戦闘で破壊された時、デツキからガスタの静寂　カームを特殊召喚！」

イグルの破壊された所から風が吹き、杖を持った女性が出てきた。

「魔法カード、エクシーズ・トレジャー！フィールド上のエクシーズモンスター1体につき、カードを1枚ドロウする！フィールドにはマエストロークとアサシンの2体！デツキからカードを2枚ドロウ！」

遊輝　手札　0枚↓2枚

ドロウしたカードを見て、遊輝君が苦い顔をする。

あまり良いカードじゃないみたいだな。

「(これは……少しやばいんじゃないかねえの?)カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝

手札

1枚

LP

4000

【モンスターゾーン】

交響魔人マエストローク

攻1800

フォトン・バタフライ・アサシン

攻2100

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード

2枚

「俺のターン！」

カイ

手札

3枚

・・・違う。このカードだと突破できない。だけど・・・

「カームの効果！墓地のイグルとガルドスをデッキに戻して、1枚ドローする！」

カイ

手札

3枚↓4枚

・・・来た!!

「ジャンク・シンクロンを通常召喚！」

ジャンク・シンクロン

攻1300

「ジャンク・シンクロンの効果！墓地からエフェクト・ヴェーラーを特殊召喚！」

「チューナー・・・攻めにきたか」

「Lv4の偵察者にLv3のジャンク・シンクロンをチューニング!」

☆4

+

☆3

||

☆7

「導きの風よ!飛び散る力を、結晶として集めよ!シンクロ召喚!現れよ!アーカナイト・マジシャン!」

アーカナイト・マジシャン 守1800

「げっ!?アーカナイト・マジシャン!」

「アーカナイトの効果!シンクロ召喚時、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる!このカードの攻撃力は魔力カウンターの数×1000ポイントアップ!」

アーカナイト・マジシャン 攻400↓2400

MC

0↓2

「そしてアーカナイトは魔力カウンターを取り除く事で、相手フィールドのカードを破壊出来る!2つ取り除いて、マエストロークとアサシンを破壊する!」

アーカナイト・マジシャン 攻2400↓400

MC

2↓0

アーカナイトが魔導波を2つ作り、それで攻撃する。アサシンの方はそのまま破壊されたが、マエストロークはオーバーレイ・ユニットを吸収して耐えた。

「ぐっ!マエストロークがフィールドに存在する時、《魔人》と名のついたモンスター

が破壊される代わりに、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて破壊から免れる！」

「でもこれでマエストロークのオーバーレイ・ユニットは無くなった！Lv7のアーカナイトにLv1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

「またシンクロ召喚!?今度は・・・8!!」

頼むよ・・・ストーム!!

☆7

+

☆1

||

☆8

「導きの風よ！吹き荒れる嵐を、一翼の羽に宿せ！シンクロ召喚！吹き荒らせ！ストーム・ウイン・ドラグーン！」

ストーム・ウイン・ドラグーン

攻2500

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!』

七つの星と一つの輪がひとつに集まり、緑色の翼を持ち鷹のような鋭い目を持った龍が上空から舞い降りてきた。

そして何かに共鳴するかのよう!!!!にストーム・ウイン・ドラグーンが轟く。それと同時に右腕の痣が光る。

「うっ!?な、何で痣が!?!」

「・・・もしかしてカイさん、シグナーですか?」

!?!?!遊輝君も!?!」



「あ、ああ、俺も一応シグナーだ」

遊輝君がアカデミアの制服の右腕を捲り上げ、みんなに痣を見せた。遊輝君が……シグナー？

「まさか異世界の痣で共鳴するとはな……」

「みんなはどう？」

「俺も反応ありだ。痣が光っている」

「私も」

デュエルを見ているギンやエミたちの痣も赤く光っていた。

「ま、まあ、原因がわからないから取り敢えず再開しようぜ」

「そ、そうだね。ストーム・ウイン・ドラグーンの効果！墓地のモンスターを3体選択して、デッキに戻しシャッフル。その後、カードを1枚ドロウする！墓地の《ジャンク・シンクロン》・《アーカナイト・マジシャン》・《エフェクト・ヴェーラー》をデッキに戻して、1枚ドロウ！」

墓地から出てきたカードのうち、シンクロモンスターのアーカナイト・マジシャンだけをエクストラデッキに戻し、残りのカードをデッキに入れる。オートシャッフルによりシャッフルされたデッキからカードを1枚ドロウする。

……よし！

「そしてストーム・ウイン・ドラグーンはこの効果でドロートしたカードを互いに確認して、カードの種類によって効果が変わる！俺が引いたのはモンスターカード、《カオス・ソーサラー》！モンスターをドロートした時、ストーム・ウイン・ドラグーンの攻撃力はそのモンスターへの攻撃力を加える！」

ストーム・ウイン・ドラグーン

攻2500↓4800

「こ、攻撃力4800!?(エンシエント・コメントとほぼ同じ効果かよ!!)」

この攻撃が全て通つたら、俺の勝ちだ!!

「ストーム・ウイン・ドラグーンでマエストロークに攻撃！テンペスト・ウインド！」  
ストーム・ウイン・ドラグーンが翼で竜巻を起こし、マエストロークの身体を飲み込んで粉々にする。

ストーム・ウイン・ドラグーン

攻4800

交響魔人マエストローク

攻1800

遊輝

LP

4000↓2500

!?!半分しか減ってない!?!

「な、何で遊輝のライフが半分しか減ってないんだ!?!」

「……ふう、罨カード、ダメージ・ダイエットを発動した」

「だ、ダメージ・ダイエット?」

「このターンに俺が受ける全てのダメージを半分にする！」

「なっ!?だ、だけどまだカームの攻撃が残っている!!カームでダイレクトアタック！」

遊輝            LP            2500↓1650    (ダメージ・ダイエツト    効果)

遊輝君がカームの攻撃を受けた後、残り1枚の伏せカードをオープンした。

「リバースカードオープン!罠カード、ショック・ドロロー!このターンに受けたダメージ1000ポイントにつきカードを1枚ドロローする!2350のダメージを受けたから2枚ドロロー!」

「この状況でドロローソース!」

遊輝            手札            1枚↓3枚

一気に手札が3枚……次のドロローで4枚、何か仕掛けてもおかしくはない。

「カードを1枚伏せてターンエンド!そしてエンドフェイズ時に、ストーム・ウイン・ドラグーンの攻撃力は元に戻る」

カイ            手札            2枚            LP            4000

【モンスターゾーン】

ストーム・ウイン・ドラグーン            攻2500

ガスタの静寂            カーム            攻1700

## 【魔法・罨ゾーン】

リミット・リバース (使用済み)

伏せカード 1枚

カイ side out

遊輝 side

危なかつたらしく、ダメージ・ダイエツトが無かつたら、負けていたよ。

えっと、こっちは手札が次のドロローで4枚だけど、フィールドはガラ空き。

カイさんは、あのドラゴンとカーム、そして1枚のリバースカード……この手札だと、あいつは呼べる。ただ、それだけだと足りない。このドロローでキーパーツを引けば……行くぞ!!

「俺のターン!!ドロロー!!」

遊輝 手札 4枚

……来た!

ドロローしたカードを確認した後、エミさん達に預けているホワイトとブラックにアイ

コンタクトを取る。それを見た2人は頷く。

「カイさん、それがあなたのシグナーの龍ですか？」

「い、いきなりどうしたんだよ……確かにストーム・ウイン・ドラグーンは俺のシグナーの龍だよ」

「じゃあシグナーの龍を倒すには、シグナーの龍がふさわしいですね」

「遊輝のシグナーの龍!？」

「どんなモンスター何だろう?」

「太陽風帆船を特殊召喚!」

太陽風帆船　攻/守　800/2400↓400/1200

「太陽風帆船は自分フィールドにモンスターが存在しない時、攻撃力と守備力を半分して特殊召喚できる!」

「バイス・ドラゴンみたいなモンスターだな」

「その通りだね。続いて、チューナーモンスター、ヴァイロン・ステラを召喚!」

ヴァイロン・ステラ　攻1400

「チューナーモンスター!!」

「これでシンクロ召喚が出来る!」

「その前に、ブラック!!」

『きゃっ！』

ギンさんに抱かれていたブラックが精霊の状態となり、カードに戻っていく。

「えっ？もしかして……」

「Lv5の太陽風帆船にLv3のヴァイロン・ステラをチューニング！」

太陽風帆船が5つの星となり、ステラが形成した3つの輪に入り、ひとつの光となる。

☆5

+

☆3

＝

☆8

「極夜の地に潜む漆黒の太陽よ！暗黒の世界から舞い降りて、この世界の闇の神となれ！シンクロ召喚！染まれ！ブラック・サン・ドラゴン！」

ブラック・サン・ドラゴン

攻1000

ひとつに結束した光が黒く染まり、やがて空をも漆黒に包み込む。そして雲の切れ目から、漆黒の太陽がゆっくりと降りてきて、ブラックが姿を現した。

「これが……遊輝君のシグナーの龍……」

「凄い……なんかこう……言葉に表すのが難しいけど……」

「漆黒の太陽だからか、迫力があるな」

「ブラックの効果！特殊召喚時、墓地のエクシーズモンスター1体を装備カードとして装備する！それにチェーンでヴァイロン・ステラの効果！500ポイント払って、装備カード扱いとしてブラックに装備！そしてブラックの効果で、墓地のフォトン・パタ

フライ・アサシンを装備！」

遊輝           LP       1650↓1150

ステラがブラックの額部分に合体し、ブラックが咆哮を挙げ、地面からアサシンを引き上げ吸収する。

「ブラックは装備したエクシーズモンスター攻撃力分、攻撃力をアップさせる！」

ブラック・サン・ドラゴン           攻1000↓3100

「攻撃力3100!？」

「あつという間にストーム・ウイン・ドラゴンの攻撃力を抜いただど!？」

「そして………装備魔法、ガガガリベンジ!墓地のダイヤを特殊召喚して、このカードに装備する!」

地面に穴が開いて、ダイヤが鎖を振り回しながらポーズを決める。

『私を呼ぶという事は………』

「もちろん。これが俺のスタイルなんだから。魔法カード、ガガガ・ゲット!デツキから《ガガガ》と名のついたモンスターを特殊召喚する!」

「まさか2体目のダイヤを!？」

「いや、ダイヤは自身の効果でフィールドに1体しか存在できない。俺が出すのは、ガガガール!」

ガガガガール 攻1000

いつも通り、骸骨のストラップを付けた携帯の番号を押しながら、ガガガガールが出てきた。

『マスター！私を出すのが遅いよ！』

「だってドローできなかつたんだもん」

『そんな事で誤魔化さないでよ！』

「……そのモンスターも精霊？」

「あつ、紹介しなきゃ。ガガガガールの精霊、名前はパールだよ。パール、カイさんだよ」

『始めまして♪よろしくね♪』

右手でカイさんに手を振るパール。その姿に少しカイさんは戸惑っているようだ。

「なんかこう……ダイヤと違って、少し軽い感じが……」

『気にしない♪気にしない♪』

「はあ……ダイヤの効果！1ターンに1度、Lvを1〜8まで好きなLvにする！Lv6を選択！」

ガガガマジシャン ☆4↓☆6

「レ、レベル変換能力モンスター!?!」



「も、もしかしてパールも？」

「その通り、パールはフィールドのダイヤを選択して同じLvにする！」

ガガガガール

☆3↓☆6

「これでLv6が2体……」

「エクシーズ召喚をする前に、ひとつ質問してみるか。シグナーの龍は一人何体？」

「な、何なのその質問？」

「いいから答えてみて」

「シグナーの龍って……一人1体……だよな？」

「そ、そうだね。私もエンシエント・フェアリー・ドラゴンだけだから」

「俺もブラッド・ファン・ドラゴンだけだな」

「それが質問の答えだね。確かにシグナーの龍は1体だよ。普通はね」

「普通？」

「ホワイト!!行くぞ!!」

『キャット!』

今度はエミさんに抱かれていたホワイトが実体化をやめ、カードに戻る。

「ま、まさか……」

「そのまさかだ!!Lv6になったダイヤとパールでオーバーレイ！」

地面に出来たブラックホールにダイヤとパールが黒い球体になって吸い込まられて、爆発した。

☆6

×

☆6

||

★6

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！白夜の地に輝く純白の太陽よ。天空の世界から降臨して、この世界の光の神となれ！エクシーズ召喚！輝け！ホワイト・サン・ドラゴン！」

ホワイト・サン・ドラゴン

攻2400

爆発したブラック・ホールから今度は眩しく輝く白い太陽が登ってきて、ホワイトが姿を現した。

「に、2体目のシグナーの龍<sup>?!?!?</sup>」

「遊輝はシグナーの龍を2体も持っているの!?!」

「これが太陽のシグナーの龍！ブラック・サン・ドラゴンとホワイト・サン・ドラゴンだ!!まずは、ガガガリベンジの効果からだ！装備モンスターがエクシーズ召喚されこのカードが墓地に送られた時、フィールドのエクシーズモンスターの攻撃力を300ポイントアップする！」

ホワイト・サン・ドラゴン

攻2400↓2700

「さらにエクシーズ素材になったパールの効果！このカードと《ガガガ》と名のついた

モンスターのみでエクシース召喚に成功した時、そのエクシースモンスターの効果を追加させる！」

「効果の追加!?!」

「一体どんな効果なんだ?」

「エクシース召喚に成功した時、相手フィールドの特殊召喚したモンスター1体の攻撃力を0にする!!」

「なっ?!」

「対象はストーム・ウイン・ドラグーン!!頼むぜパール!ゼロゼロコール!!」  
オーバーレイ・ユニットのパールが携帯の番号を押し、画面をストーム・ウイン・ドラグーンに向ける。

携帯から0の形をした何かがストームに向かって行き、ストームが跪いた。

ストーム・ウイン・ドラグーン      攻2500↓0

「ス、ストーム・ウイン・ドラグーンが……」

「攻撃力0になっただ!?!」

「バトル!ブラック・サン・ドラゴンでストーム・ウイン・ドラグーンに攻撃!」

「まだ終わらせないよ!罨カード、聖なるバリアくミラーフォーアス!」

「良し!これで遊輝のモンスターは全滅だ!」

ブラックの攻撃がミラーフォースに跳ね返り、自分自身に直撃して爆発する。

「これで遊輝君のモンスター……?!?!」

爆発が収まり煙がはれると、遊輝の両隣にはシグナーの龍が悠然と構えていた。

「残念。ホワイトはオーバレイ・ユニットがある限り、カード効果で破壊されず、ブラックは装備カードを墓地に送る事で破壊から免れる！この効果でヴァイロン・ステラを墓地に送ったよ」

「破壊態勢持ち!!」

「てか、あのエクシーズモンスター強くねえか!!」

ギャラリーがいろいろ意見を言っているが、カイさんは何処か吹っ切れた感じがした。

「……僕の負けだね。来なよ」

「ああ、ブラック・サン・ドラゴンでストーム・ウイン・ドラグリーンに攻撃！ダークネス・ブラスト！」

ブラックが黒いエネルギーを貯め、ストームに放つ。攻撃力が0になったストームは何の抵抗もせずに破壊されてしまった。

ブラック・サン・ドラゴン 攻3100

ストーム・ウイン・ドラグリーン 攻0

カイ LP 4000↓900

「ラスト！ホワイト・サン・ドラゴンでカームに攻撃！サンシャイン・パティズム！」

ホワイト・サン・ドラゴン 攻2700

ガスタの静寂 カーム 攻1700

カイ LP 900↓0

WIN 遊輝 LOS カイ

「強いですね遊輝君」

「カイさんの方こそ。一回追い詰められたからね」

デュエルが終わった俺たちは先ほどのデュエルの感想を皆で話している。

「でもシグナーの龍が2体いたのは驚いたな」

「ほんとだねギン。しかもそのうちの1体がエクシーズモンスターって言うんだから」

「俺も最初は驚いたよ。まさか2体いるなんて」

「と、所で、あれは……」

龍可が指を指す方には、何かのリミットが外れたみたいに満面の笑みを浮かべてホワイトとブラックを抱く実体化したエアトス。

「……約束してしまったからな」

「大分我慢していたみたいだね。あそこまで強く抱いているのは始めてだよ」

『可愛い!!!フワフワしていてポカポカしていて!!!ずっと抱いてられるよ!!!』

『キャツ……』 『きやつ……』

「ブラックとホワイトが引いているよ……」

「あんなに抱かれて平気でいられる方が可笑しいだらろ」

色々とはなしていた時……

「あれっ?皆見て!上空から何か落ちて来るよ!」

エミさんが何かを見つけて、みんなに上を向くように指示する。そこには白く光る物質が俺の手に落ちて一枚のカードに変化した。

「ダイヤ、これは?」

『おそらく次元の歪みで生じた物だと思います。デュエルで使っても何の問題もないでしょう』

「ふくん、これは……うん!!カイさんに挙げるよ!」

「えっ? 良いのですか?」

「良いよ良いよ! このカード、何かカイさんに使つて欲しいみたいなんだ。それにこのカードはカイさんが持つべきものだよ。俺からの友情の証!!」

空から落ちてきた1枚のカードをカイさんに渡す。最初はカードを見て、少し驚いたけど、直ぐにこつちも向く。

「ありがとう! 大事にするよ!」

『マスター、先ほどの光の場所から次元の歪みが出来ました。どうやら元の世界に戻るみたいですよ』

ダイヤが次元の歪みを見つけ、後ろにこの世界に来た歪みと同じ歪みが出来ている。

「……お別れの時だな」

「そうだね」

『ええー?!?!? もっと抱きたいよ!!』

「エアトス。それは遊輝さんの精霊なんだから、遊輝さんに返してあげなきゃ」

『うう〜』

エアトスがブラックとホワイトを離し、俺の元に来る。

「遊輝! 今度はそつちの俺と龍可を連れて来てよ! そつちの俺たちを一回見てみたい

!」

「わ、私は良いです。何か疲れますから……」

「今度は俺とデュエルしような！」

「ギン!!それは私のセリフよ!!また会いましょうね!!」

「ああ、それじゃ……」

俺はブラックとホワイトを抱え、次元の歪みに飛び込んだ。

「……行つてしまったな」

「凄く短い時間だったけど、楽しかったわね」

「また会えるかな？」

「きつと会えるさ。さあ!!Dホイールの整備に戻ろう！」

元気な声を出し、カイ達はガレージに戻っていった。

-----

空き地に再び次元の歪みが開き、中から遊輝がブラックとホワイトを抱えて出てき



た。

「異世界か………楽しかったな」

『きゃっ♪』 『キャッ♪』

「………そうだよな!!生きている内にまた会えるよな!!」

再びブラックとホワイトを強く抱き、遊輝は空き地を出る。その入り口で後ろに振り向き………

「じゃあカイさん、みんな。また会おうな!!」

そう言い残して、帰宅の道へとついた。

編  
コラボ  
～遊戯王  
CROSS  
HERO  
～前

遊輝 side

「遊輝、次の曲の楽譜は何処にあるの？」

「えくと……はいこれ」

「ありがとう」

現在、放課後、つまり部活の時間だ。

次のコンサートで弾く曲を決めて今は個人練習。響とスバルはそれぞれ楽譜を見てリズムを合わせている。

俺はレミと奏のリードに合わせて、エレキギターの練習をしている。

「でも本当に上手になつたね。文化祭とクリスマスコンサート、海外公演と重ねるたびに上手になっているね」

「普通なら、エレキとベースとクラシックの3種類で半年ぐらいはかかるわよ」

「お前らが鬼の形相で無理矢理一ヶ月で弾けるようにしたんだろ！」

ほんとに死ぬ思いだったんだから！ギターを弾けるようになったのは嬉しいけど、あ

そこまでする必要はなかっただろ！

「はいはい、その話は置いて、コードが違うよ。そこはFじゃなくてGだよ」  
『マスター、よろしいでしょうか？』

レミにコードの間違えを指摘された時、ダイヤが実体化して現れた。

「ダイヤ、珍しいわね。実体化をして出てくるなんて。何かトラブルでもあったの？」

『はい、マスターは知っているとと思いますが、次元の歪みが再び現れたのです』

「またかよ……」

「ねえ、その次元の歪みって何？」

響の質問にダイヤがみんなに答える。これを聞いてスバルは立ち上がった。

「すげえ！異世界の奴とデュエル出来るのか！」

「あれはたまたまだよ。それに帰って来れるのか分からないんだよ」

「でも、ダイヤの言い方だとそこまで問題視する必要はないでしょ？」

『今回は問題があるのです。この部屋の扉を開くと異世界に行ってしまうのです』

「それは問題ありね……」

つまり、この部屋から出ようとしたら、必然的に異世界に行ってしまうのか。

どうしようもないのか、まあしゃあないか、ギターを立てかけ決闘デスクをカバンに

詰め込み背負う。

「みんなも行く?」

「もちろんだせ! 異世界の奴とデュエルが出来るんだから!」

「私も行く! どうせここを出ても異世界に行くんだから!」

「私も!」

「みんなが行くのに、私一人行かないなんて言わないわ!」

みんなも楽器も置いて、カバンを持つ。

「よし! 行くぞ!」

俺は部屋の扉を開け、中にはいる。みんなも続いて入っていった。そして出てきた場

所は………

「いらっしやいませ」

小さな喫茶店だった。

遊輝

side

out

駆

side

今日は留姫の親が経営している喫茶店で、留姫と色んな世間話している。アカデミア

杯も終わって、束の間の休息を楽しんでいるよ。

「……へえ、そうなんだ」

「そうなんだよ。あれは香澄の両親に呼ばれていたただだよ」

「でも、あの時の龍可ちゃんがそんな話を聞き入れるなんて思いもしないけど」

「帰った後が大変だったよ……ずっと抱きしめられた上にその日は一緒に寝るって言われたから」

「次の日も抱きついていたわね」

先日の香澄の家に訪問した時の話題になったから、留姫にあの日の真実を話していたんだ。

でもあの日は家に帰った後はほんとに大変だったよ。

チラリ〜ン♪

「いらっしやいませ」

お店の扉が開く音が聞こえたから、どうやらお客さんが来たみたいだね。

「……駆、見て」

「?..どうして?」

「いいから」

お客さんの見える位置に座っていた留姫が、お客さんを見てと言われたからそっちの

方に向く。

「あら、アカデミアの生徒さん？」

「あつ……は、はい」

「うふふ、随分可愛い顔ね。どうぞ」

留姫の母親、文子さんが俺と同じぐらいのアカデミアの生徒5人を中に案内した。

先頭に立っていた男の人について順々と席に座る。

「……今日、アカデミアは休みよ」

「確かに。何で制服を着ているのかな？」

「……部活帰り？」

「アカデミアに部活があるの？」

「……ある」

留姫と小さな声で色々と推測をします。

「お嬢ちゃんたち、初めて見るけど中等部の生徒さん？」

「はい！中等部……です！」

「響！大きな声で話さないでよ！」

「へえくうちの娘と同じクラスの子ね」

「娘さんがいるのですか？」

「ええ、ちようど奥の席で座っているわ。ほら、あそこで男の子と一緒にいるでしょ」  
文子さんが俺たちの方に手を向けて、その5人組は一斉にこつちを見る。

「……今の聞いた？」

「聞いたよ。1-1は俺たちと同じクラスだ」

「……私あんな生徒見た事がない」

「俺も」

「……怪しい」

「だね。色々と確認する必要があるね」

「……行ってみる？」

「もう少し様子を見よう」

俺と留姫はお店の奥のテーブルから、5人の監視を始めて、数分たった時……

チラリン♪

「いらつしや「ここか」？」

再びお店の扉が開き、新たなお客さんが入ってきた。

「駆、あの人たちは……」

「アカデミア杯で人質をとった不良の生徒だ」

「いたぜ」

不良グループが俺たちを見つけ、席まで走ってくる。

「何の用？俺と留姫は今、世間話をしている途中なんだけど」

「お前たちのせいで俺らは「すみません!!ケーキおかわり!」 あったんだ!」

「反省「早っ!?!それにまたケーキを食べるの?」されるわ!」

「そして!て「甘い物はいくらでもいけるよ!」

うん、見事にセリフが被っているから何を言っているのか分からない。

「だから「そんなに食べてよく太らないな?」に来たんだ!」

「外「毎日運動しているから大丈夫だよ!」ろ!っつてうるさい!」

「あんたたちの方がうるさいよ!!さっきから大声で喋って!」

不良よりも大きな声で、一人の女の人が立ち上がり不良に負けない大きな声を出す。

あまりの大きさに俺と留姫は耳を塞いでしまう。

あなたの方が十分うるさいと思いますか?」

「何だと!!やるって言うのか!!」

「おっ?喧嘩?どんだんやれ」

「呑気に言っていないでよ!レミが男数人相手に戦うのよ!」

「大丈夫。レミの事だから能力を使うと思うから。レミ、店だけは壊すなよ」

「くらえ!」



「危ない！」

何ともなく話している5人組に向かい、一人が立っている女の人に向かい殴りかかる。

「はくい♪フェザー・バインド！」

「うっ!? な、何だ!?!」

不良が殴りかかる寸前に、突如たくさんの羽が出て来て、不良の前に大きな壁として現れる。

「な、何あれ?」

「サ、サイコパワー? それにしては何かが違う?」

「ねえ、店の中じゃ無理だし、外でやろうよ」

「じゃあ俺も暴れるか」

「今回は俺も参戦するぜ！」

「じゃあその弱い男の方たち、外でやりましょう」

「あつ、これ代金です」

5人組がお金を払って、お店から出る。一方、弱いと言われた不良グループも物凄く憤慨して外に出ていった。

「……………どうする?」

「俺たちも後を追ってみよう」

そう言つて、留姫のお店を出て、物陰に隠れる。直ぐ目の前で5人組の内、男の人2人だけが色々グチを言いながら構えていた。のだがその構え方がちよつと、いや凄くおかしかった。

「……ねえ、奥の人、火の玉を持っているのだけど」

「ああ、俺もよく見えている。手前も手前でなんか地面を盛り上げていているけど……」  
奥の人は右手で炎の玉を作つて、それを左手にある2本の竹刀に当てた。当然竹刀は燃え上がる。

が、この人、平気で持っているんですけど？手前の人も地面から剣らしきものを2本出したのですけど？

「……私の目、どうかしたのかな？」

「大丈夫だ、俺も見えるから」

「そ、そんなこけおどしに通じると思うか！」

不良グループの1人が前に突っ込み、赤く燃え上がる竹刀を持った男子に突進する。

「……それじゃ行くか。炎斬!!十ノ字切り！」

その人は落ち着いて不良の動きを見て、攻撃する寸前に左の竹刀で不良の攻撃を止め、そのまま不良の身体を上下に切り裂いた。

「あ、あちちちちち!!」

「あつ、言うの忘れてた。それ、太陽だから直ぐに冷やさないと重度の火傷、最悪死ぬから直ぐに水で冷やしてね。あつ、水じゃダメか。氷の中に突っ込んでね」

「あちちちち!!」

身体が燃えている不良に対して、燃え上がる竹刀を持った人は結構重要な事をさらつと言つて、他の不良の方に目を向けた。ちなみにもう一人は……

「地斬!! ロックファイアイン!!」

「ぐおおおおおー………!!!」

不良をクロスに斬った後に、周りに浮いていた大きめな岩を不良の身体に磁石のようにくっつけさせる。岩の重さに耐えられず、不良は倒れてしまう。

「遊輝、こっちは終わったぞ」

「んじや、レミたちの方に行こうか」

『ゆうき』と呼ばれた人が、もう一人の男の人と一緒に後ろで戦っている女の人3人の方へ移動した。その途中、大きな雷が落ちたみたいけど、何もなかったように走っていく。

「……とどめ! アイス・マジック2! ブリザード!」

2人が着いた先に、一人の女の人が両手を前に降り出すと、不良たちの周りに突然吹雪が吹き荒れて、不良の身体が雪だるまのように凍り付けにされてしまった。

「終わった？」

「ええ、みんな一発で倒したわ」

「奏も酷いよね。1人の人相手に雷を落とすなんて」

「さっきの雷はやっぱ奏が落としたのか」

「レミも散々攻撃した後に銃で撃ったじゃない！」

「凍り付けにした響が言える事かよ」

「何気なく会話している5人だけど……」

「……私たち、あまり人の事は言えないけど」

「ああ、化け物だな」

燃え上がった竹刀を平気で持つ人、地面から何処からもなく現れた剣、雷や吹雪を作る人に銃を撃つ人……

普通だったら考えられないだろ。どうやったらそんな能力が身につく？

「それよりこの後どうするの？何処にも行くあてが無いでしょ」

「その前に……出て来なよ。そこに隠れてる奴！」

先ほど『ゆうき』と呼ばれた人がこつちをみながら出てくるように言われ、俺と留姫は電柱から身体を出した。

「何で俺たちの事が分かったんだ？」

「スバルの方に向いた時に少し見えた……かな？」

「疑問形にするな！はつきりとした証拠は無いのかよ！」

「無い。一つ言えるなら、あの店で中等部1-1と響が言った時に少し反応があったからね」

「……随分こつちの事を観察しているわね」

「前に何も考えずに突っ込んで酷い目にあつたからね。さてと、聞きたい事があるんでしょ？」

「あなたたちは何者ですか？俺たちのクラスにあなたたちを見た事がないのだが……」

「響、あまり大声で喋らないでよ」

「ごめんごめん」

「はあく、もう良いよな。全部話しても」

「良いぜ。いつかはバレるだろうし」

「私も良いよ」

「じゃあ俺たちの事を話すぜ。俺たちは……」

「……えーと、遊輝さんたちはここから違う別の世界から来た人たちで、遊輝さんは俺と同じくそっちの世界に来た転生者、で良いですね？」

「そう言う事」

「駆以外に転生者がいるなんて……」

近くの公園で、遊輝さんと言う人からこの世界とは別の異世界から来た事、遊輝さんが俺と同じ転生者である事を聞かされた。

「遊輝以外に転生者がいるなんてね」

「別にいてもおかしくはないだろ」

「それもそうかもしれないですね」

「ねえ、私たちまだ自己紹介をしていないわよ」

遊城さんの後ろに立っている、少し薄い黄色の髪をしている女の人が自己紹介を持ち

掛けてきた。

「そう言えばそうだな。改めて自己紹介をさせてもらうか。俺は遠藤遊輝」

「私は葵レミ！レミって呼んで！」

「私が小野寺響！隣が幼馴染の」

「水野奏です」

「俺は遊城スバル！宜しくな！えっと……」

「俺は山岸駆です」

「加藤留姫……」

「おう！宜しくな！駆！留姫！」

最後に遊輝さんの隣に座っているスバルさんが手をあげた。

「それにしても、さっきのは何ですか？地面が盛り上がった、火の玉が出来た

り……」

「あれはね……駆さんは転生者だから分かると思うけど、留姫さんはシグナーの事が分かる？」

「……駆から聞いた」

「なら大丈夫だ。俺たちはシークレットシグナーというシグナーなんだよ」

「シークレットシグナー？」

「文字通り秘密のシグナー。まあ、赤き龍と関わっている事は間違いないですよ」  
「私たちは、シークレットシグナーの能力を普通に使っただけ」

「へえ、そんなシグナーがあるのですか。どんな能力ですか？」  
そう言うと、みんなが右腕を捲り、痣を見せてくれた。

「俺は太陽のシグナー。太陽を作り、操る能力」

「私はね、風のシグナーよ。風を操る事が出来るの！」

「俺は地面だ」

「私は水のシグナーよ！」

「私が雷。雷を操る事が出来るの」

「……じゃあさっきの雷は……」

「私がああ不良に向けて落としたの」

「あんな大きな雷を作る事が出来るのか……」

「それにしても、どうしてこの世界に来たのですか？」

「次元の歪みに巻き込まれてしまったのよ」

「次元の歪み？」

「異世界同士の間にある次元が何らかの理由で繋がってしまう現象だよ！私たちの部屋がそれに囲まれたみたいなの！」



「……………部室、つてことはあなた達は部活を」

「してるぜ。俺たちは軽音部として活動しているんだ」

「と言つても、私達しか部員がいないから実質、バンドという形でやっているわ」

「へえ〜」

それは一回聞いてみたいな。

「それより駆も留姫もデュエルするだろ!？」

「するけど……………」

「じゃあデュエルしようぜ!!」

「……………はっ?」

えくと……………

異世界から来た。

← 自己紹介

← デュエル!!!

「………何これ？一体どうやってデュエルしようと繋がるの？」

「(凄い発想だろ)」

遊輝さんが俺の耳元でささやいてきた。

「(え、ええ、この世界だと良くある事ですけど……)」

「(本人は言つて無いけど、スバルは十代の子孫なんだよ)」

「(!!それ本当ですか!!)」

「(ほんとほんと。だから発想も十代と一緒になんだよ。何でも直ぐデュエルに結びつけるんだ)」

十代の子孫………そうか、だから名字も遊城なんだ。言われたら、髪型とか顔つきが似ているな。別の世界にも子孫はいるんだな。

「なあ！デュエルしようぜ!!」

「どうする留姫？」

「………異世界の人のデュエル。やりたい」

「じゃあやりましょう。そちらは誰が出ますか？」

「ここは転生者同士の対決って事で、遊輝と駆さんがデュエルするべきでしょ！」

「駆さん、俺とデュエルします？」

「良いですよ。留姫の相手は誰が……」

「俺だ！」

「待った!!私がデュエルする!!」

「俺が一番最初にデュエルしようつと言ったから、俺が優先権があるだろ！」

「そんなの関係ないでしょ!ここはレディ・ファーストよ！」

「じゃあ、間をとって私が……」

「何でそこでレミと奏が手を挙げるんだよ!!」

「そこは○チョウ倶楽部的なノリで《どうぞどうぞ!!》でしょ！」

「私だって異世界に来たんだからデュエルぐらいしていいでしょ！」

「……ジャンケンで決めろよ」

公園の真ん中で言い争っている4人を見かねた遊輝さんが、ため息をつきながらみんなにジャンケンを提案する。

「良い?最初はグーだよ！」

「「最初はグー!ジャンケンポン!!あいこでしょ!!」」

「……大変ですね」

「これくらい日常茶飯事だよ。いつも振り回されているから」

「……私、あの勢いに着いていけない」

大人しい留姫にはあんなグループに入るのは難しいだろうな。

「やった!!私が勝った!!」

「ちくしょう……」

「と言うわけで留姫さん!私とやろう!」

ジャンケンに勝った響さんが決闘デスクを付けて、留姫にデュエルを申し込む。それを見た留姫もデスクを腕にセットする。

「まずは響と留姫さんのデュエルからね」

「デュエル!!」 「デュエル!!」

駆 side out

留姫 side

響 LP 4000 留姫 LP 4000

異世界から来た人とデュエル。顔には出てないけど、内心は凄く楽しみ。

「先行・後攻はどうする?」

「……そつちから始めていいよ」

「じゃあ私から！ドロー！」

響 手札 6枚

「うーん……氷結界の術者を召喚！」

氷結界の術者 攻1300

氷の槍を持った白い服を着たモンスターが出てきた。

氷結界……相手の行動を妨害するモンスター達……

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

響 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

氷結界の術者 攻1300

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

無難な立ち上がりね。

「……私のターン」

留姫 手札 6枚

・・・手札交換カード。少し悪かったから助かる。

「魔法カード、手札抹殺。お互いに手札を全て墓地に送り、送った枚数分、デッキからカードをドローする」

「うっ・・・いきなり手札交換はきついよ・・・」

どうやら良い手札だったみたいだね。最良の一手だったみたい。

留姫 墓地に捨てたカード

・ワイト

・ライトロード・ハンター ライコウ

・生者の書 ↳ 禁断の呪術↳

・ワイト夫人

・ジャンク・シンクロン

響 墓地に捨てたカード

・死者蘇生

・氷結界の破術師

・融合

「……ドローカード。どんどん手札が良くなってくれるわ。」

「魔法カード、闇の誘惑。カードを2枚ドローして、その後に手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。その代わり、闇属性モンスターが無ければ手札を全て墓地に送る」

「……ふつ、なかなか良い手札ね。今日は良く回ってくれるわ。」

「闇の誘惑の効果で手札のワイトキングをゲームから除外するわ」

「ワ、ワイトキング!?!」

「ワワワワワイト……ワイト……（プルプル）」

ゲームから除外されたカードを聞かされた響は驚いた。私のデッキがワイトだって知れば驚くわね。それにしても……

「うわ〜ワイトか……攻撃力で押されたらおしまいだよ（涙）」

「ワワワワワイト……（プルプル）」

「……何で遊輝は震えているの?」

「えっ? あ〜、遊輝はね、お化けとか幽霊が駄目なんだよ。その類でアンデット族のモンスターも駄目みたいなの」

「アンデット族モンスターが駄目……」





「そのハリセンは何処から……」

「カバンの中に入れていたのよ。騒いだ人を黙らすために」

「……あんな超人的な能力を持っているのに、ハリセンが必要なのか？」

「少し黙れよ！良い所なんだぜ!!」

「だって骸骨が出て来たんだよ!!お化けだよ!!」

「……うるさいわね。」

「留姫さん、留姫さん」

大声ではしゃいでいる遊輝を無視して響が私の所に近づいてきた。

「(どうしたの?)」

「(遊輝を先に黙らせよう。あれ以上騒いだら迷惑だよ)」

「(どうやって?)」

「(あのね……)」

「(……面白そう)」

「(じゃあ、早速行動開始!)」

響さんが遊輝の近くまで歩く。

「遊輝!うるさいよ!デュエル中なんだから少し黙りなさい!」

「お化けやゾンビが出てきたんだよ!?!俺にとっては無理な事だよ!!」

「あれはモンスターでしょ!!そんな所で驚く必要は無いわよ!!」

「モンスターでも骸骨は……」

ここで遊輝が固まった。肩が何かに掴まれたようだ。

「誰だ……よ……」

怒った遊輝が振り向くと、バァーと顔を前に出したワイトキングが遊輝の目の前にいた。

「……ヒュ~~~~」

ドスン!!!

「えっ!?ゆ、遊輝さん!!しっかりしてください!!!」

「やった!!!大成功!!!」

「……いい気味」

「ははくん、ワイトキングを遊輝の近くに連れてきて、気絶させたわけね」

「だってこのままほっておけば、うるさいだけでもん!」

「ちようど良いかもね。騒がしい人がいなくなるし」

「後は起きないように……バブル・キャッチ!」

響が気絶している遊輝の周りに水の泡を作り、その中に閉じ込めた。

「これで大丈夫!デュエルに戻ろう!」

「……………本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。もしかた騒いだら、奏が雷を落とすわ」

「……………(なかなか酷いですね)」

遊輝を黙らせて、お互いデュエルする体制に戻る。

「ワイトキングの攻撃力は墓地のワイト・ワイトキングの数×1000ポイントになる。私の墓地にはワイトが2体にワイトキング、そしてワイトメアとワイト夫人は墓地に存在する限り、ワイトとしてカード名を扱うから計5体。よってワイトキングの攻撃力は5000」

ワイトキング                      攻? ↓ 5000

「わく…いきなり攻撃力5000のワイトキング…どうしよう」

「すげえな!! あんな簡単にワイトキングの攻撃力を上げる事ができるなんて!」

「そう簡単に1ターン目からあんなに攻撃力を上げれないよ」

スバルは目を輝き、響はどうやって対処するか考えている。

それなら……………

「……………みんなは私がワイトを使う事をどう思っているの?」

「はい? どういう事?」

「留姫、またその質問……………」

「私と始めてデュエルした人は大抵ワイトを馬鹿にするの。『そんな雑魚モンスター使っているのかよ』って」

「うーん……じゃあ逆に聞くけど、留姫さんはワイトの事をどう思っているの？」

「私？私にとってワイトは大切なモンスター……」

レミが私の質問の答えを聞くと、スバルと奏の肩を掴んで前にのめりだした。

「そうでしょ!!留姫さんが大事なモンスターなら、誰が何を言っても大切にするんだよ!!」

「そうだぜ!!それにワイトは強いじゃねえか!!現に1ターンで攻撃力5000を叩き出しているじゃんか!!」

「私たちはどれだけ弱いカードでも雑魚なんて言わないわ。そこで気絶している遊輝は特にな」

「カードを雑魚って言う人は、カードを大事にしない証拠よ!」

みんな………異世界でもそんな事を思っている人はいるのね」

「留姫さん!!デュエルを続けよう!この楽しいデュエルを!!」

「ええ、バトル。ダーク・グレフアーで氷結界の術者を攻撃」

ダーク・グレフアー

攻1700

氷結界の術者

攻1300

響

LP

4000↓3600

「(っ)ほっ!」

「ワイトキングでダイレクトアタック」

「通すわけないでしょ! 罠カード、ガード・ブロック! この戦闘ダメージ0にしてカー

ドを1枚ドロロー!」

響

手札

3枚↓4枚

「簡単に終わらせたらつまらないでしょ?」

「そうね。カードを1枚伏せてターンエンド」

留姫

手札

1枚

LP

4000

【モンスターゾーン】

ダーク・グレフアー

攻1700

ワイトキング

攻5000

【魔法・罠ゾーン】

伏せカード

1枚

留姫                    s i d e                    o u t

響                    s i d e

いや〜、いきなり攻撃力5000はビックリしたね。あんなに簡単にワイトキングの攻撃力を上げてくるんだから。

「う、う〜ん……」

あつ、遊輝が目覚めたみたいね。

「あ、あれ？俺、確か異世界に飛んで……って!?なんで泡の中に入っているの!?」

「あんたがワイトキングを見て大声で叫ぶから閉じ込めてもらったのよー」

「えっ!?あああー!!!まだ骸骨がいる!!」

「だからうるさい!!黙りなさいよ!!」

「骸骨を見て平気でいられる方が異常だよ!!」

「モンスターでこんなに叫ぶお前の方が異常だろ!!」

「黙りなさい!さもなければ、雷を落とすわよ!!」

奏が遊輝の上空に雷雲を作る。ゴロゴロツとなるその音はどんどん大きくなってい

き、今直ぐにでも遊輝に落ちるような雰囲気である。

「わあ!!! またまたまた!!! それはストップ!!! 命が無くなるよ!!!」

「じゃあ黙る!? 黙ってくれるんなら、その泡を割ってあげるよ!」

「黙ります!! 黙りますから雷だけは勘弁を!」

泡の中で土下座をして謝る。あまりにも惨めな感じがするわね……はあ、

指をパチン! と鳴らし、遊輝を捕まえていた泡が割れる。上空に浮いていた遊輝は重  
力に逆らう事も出来ず……

「へブツ!!」

地面に垂直に落ちていった。

「……なかなか酷いですね」

「私は間違った事を言っていないよ。ちゃんと『泡を割る』って言ったよ」

「それはそうですけど……」

「止めてごめんね。デュエルを続けるよ! 私のターン! ドロー!」

響 手札 5枚

あつ!! プリンセス!!

『異世界に来たのでしょ!! 私を出してよ!!』

分かったわ。直ぐに出してあげるよ! でもその前に……

「魔法カード、天の落とし物！互いのプレイヤーはカードを3枚ドロワーして、その後カードを2枚捨てる！」

響 手札 7枚↓5枚 留姫 手札 4枚↓2枚

「私の捨てたカードの1枚はワイトメア。よってワイトキングの攻撃力はさらに1000ポイントアップする」

ワイトキング 攻50000↓60000

うっ!?手札にあつたんだ・・・攻撃力60000・・・どうしよう!!

・・・考えてもしようがない!ここはダメーჯ優先で行こう!

「魔法カード、<r二重召喚:デュアル・サモン>!このターン、私は通常召喚を2回行える!まずは、氷結界の舞姫を召喚!」

氷結界の舞姫 攻1700

「そして氷結界の舞姫をリリース!プリザード・プリンセスをアドバンス召喚!」

プリザード・プリンセス 攻2800

舞姫が消えて、青い髪に冠を乗せた白を基本として青のラインが入った服を着たプリンセスがいつもの氷の巨大な玉を振り回しながらやってきた。

『異世界で私、参上!!』

「何処ぞの仮面ライダーのネタを使わない!!てか、どの小説でもやっているでしょ!!」



『一度言ってみたかったのよね、これ!』

「えっ………モンスターが喋った!？」

プリンセスのボケを突っ込んでいた所に、留姫さんが目玉が飛び出しそうな勢いでプリンセスを見てきた。

「あれ？留姫は精霊が見えたっけ？」

「せ、精霊？」

「………プリンセス!!さては勝手に実体化の能力を使ったわね!？」

『だってせっかくの異世界よ!精霊の状態にいるより、外に出たいよ!!』

「えっ?えっ?」

「留姫さん、早い話がモンスターには精霊が宿っているのよ!」

『はくい♪留姫さん。よろしくね♪』

「………気になっているけどさ、性格がパールに似てきたよね」

「パール？」

「俺の精霊だよ。ついだから、パール・ダイヤ。出てきて」

遊輝の隣に学生服を着て鎖を巻きつけた不良の学生みたいな魔法使いと、骸骨のキーホルダーを付けた携帯電話を片手に持ち、先ほどのモンスターと同じ制服でミニスカートの女の子の魔法使いが出てきた。

『パール！ダイヤ！久しぶり！』

『久しぶりプリンセス♪』

『パール。今はそっちではないでしょう』

『これが俺の精霊、ダイヤとパールだよ』

『留姫ちゃん、よろしく♪』

『よろしくお願いします』

『あ、あ……』

「いきなり精霊を見て驚いているのか。俺も最初は驚いたな。いきなり宙にハネクリボーが浮いていたんだもん」

「スバルさんの精霊はハネクリボーですか!？」

「えっ、そうだけでもしかして……」

「はい。俺もハネクリボーが精霊です」

『『クリクリー!!』』

スバルのハネクリボーと駆さんのハネクリボーが出てきて、お互いに近寄ってハイタッチをする。それを見て、いつものようにあの人が飛び出した。

「可愛いー……!!!まさかここでハネクリボーを2匹を抱けるなんて!!!」

『『クリッ……』』

「奏……皆が引いているよ」

レミが奏に言つて、奏の顔が赤くなる。

あの可愛い物を見ると直ぐに飛びつく性格は何とかならないかな〜

「でも、何でモンスターを実体化させる事が出来るのですか？」

「俺たちシークレットシグナーのもう一つの能力だよ。モンスターだけなら、精霊が宿つてなくても現実世界に実体化させる事が出来るんだ」

「さっきのワイトキングも実はこつそりと実体化させたの!!」

「……だからいつもより迫力があつたのね」

「おくい、そろそろデュエル始めろよ。何回止めているんだ？」

「あつそうだった。プリンセスの召喚が成功した所からだね。プリンセスの効果でこのターン、魔法・罫は発動出来ないよ」

「……知ってる」

「それじゃバトル！プリンセスでダーク・グレファアーに攻撃！ヘイル・ブリザード！」

ブリザード・プリンセス 攻2800

ダーク・グレファアー 攻1700

留姫 LP 4000↓2900

よし！ダメージは与えられた！後はあのワイトキングを対処するだけ！

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

響 手札 0枚 LP 3600

【モンスターゾーン】

ブリザード・プリンセス 攻2800

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

「私のターン」

留姫 手札 3枚

「リバースカードオープン、エンジェル・リフト。墓地のレベル2以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。墓地から2体目のワイトキングを特殊召喚」

「えっ!?!」

そのリバースカード蘇生カードだったの!?!プリンセスの効果が無意味じゃん!!

「ワイトキングが蘇生された事により、フィールドのワイトキングの攻撃力は1000ポイント下がる」

ワイトキング 攻6000↓5000

攻0↓5000

いやいやいや!!それでも攻撃力5000もあるよ!!どうやって対処するの!?

「ジャンク・シンクロンを通常召喚」

ジャンク・シンクロン 攻2300

あれつて遊星さんが使っていたチューナーモンスター!!確か効果は……

「ジャンク・シンクロンの効果。召喚に成功した時、墓地のLv2以下のモンスターを  
守備表示で特殊召喚する。ライトロード・ハンター ライコウを特殊召喚」

ライトロード・ハンター ライコウ 守100

あく、そんな効果だったわね……そんな呑気に言っている場合じゃなかった  
!これつてまさか……

「Lv2のハンター ライコウにLv3のジャンク・シンクロンをチューニング」

☆2 + ☆3 || ☆5

「集いし願いが新たな力を呼び起こす。光差す道となれ!シンク口召喚!相手を打ち  
破つて!ジャンク・ウオリアー!」

ジャンク・ウオリアー 攻2300

アハハハ、ここでジャンク・ウオリアーが出てきたよ。

「アハハハ……攻撃力はいくら?」

「ジャンク・ウオリアーの効果で、フィールドのワイトキング2体の攻撃力分、攻撃力をアップする。パワー・オブ・フェローズ」

ジャンク・ウオリアー 攻2300↓12300

ワイイ、攻撃力が10000を超えちゃったよ！こんな攻撃力を持つモンスター私のデッキには1枚も無いよ！アハハハハ！！！！

「バトル。ジャンク・ウオリアーでブリザード・プリンセスに攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウオリアーが飛び上がり、プリンセスに向かって巨体な拳を向ける。

『ちよつ、ちよつと?!私あんなの受け止められないよ!!』

「リバースカードオープン！攻撃の無敵化！このカードは2つ効果があつて、1つは私のモンスターは戦闘で破壊されない。もう一つはこのターンの私へのダメージを全て0にする。私は2つ目の効果を選択！」

『えっ?!私見捨てられるの?!助けて!!』

「ごめん！無理!!」

『うわー!!響の裏切り者!!』

ジャンク・ウオリアーの攻撃がプリンセスに当たって、プリンセスは何の抵抗も無くぺったんことなり破壊される。

「この後の攻撃は無意味ね。魔法カード、埋葬呪文の宝札。墓地の、聖者の書々禁断の呪術・手札抹殺・闇の誘惑の3枚をゲームから除外してカードを2枚ドロウする」

留姫 手札 0枚↓2枚

「カードを1枚伏せてターンエンド」

留姫 手札 1枚 LP 2900

【モンスターゾーン】

ワイトキング ×2 攻5000

ジャンク・ウオリアー 攻12300

【魔法・罨ゾーン】

エンジェル・リフト (ワイトキング)

伏せカード 1枚

アハハハハ!!!これどうやって突破しろと!?私のデッキであんな攻撃力を持ったモンスターを対処出来るのなんてモンスター破壊カードぐらいだよ!!

.....ここであれこれ言ってもしょうがないよね。このドロウにかけてみるか

!!

「私のターン!!ドロー!!」

響 手札 1枚

・・・!!壺の中の魔術書!

「魔術カード、壺の中の魔術書!お互いにカードを3枚ドローする!」

響 手札 0枚↓3枚 留姫 手札 1枚↓4枚

・・・うわつ、この状況でこれ引くんだ・・・

「魔法カード、ブラック・ホール!」

「この状況でブラック・ホール!?!」

「フィールドのモンスターを全て破壊する!」

上空にブラック・ホールが出来て、ワイトキングとジャンク・ウォリアーが吸い込まれいった。

「・・・響、この状況でそれは無いでしょ」

「だってこうしないとワイトキングを破壊出来ないもん!」

「あそこまで攻撃力を上げられたらきついけど・・・」

「まあ、そこはおいといて。チューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚!」

デブリ・ドラゴン 攻1000

薄青色の身体をした角が特徴的なドラゴンが現れた。



「デブリ・ドラゴンの効果発動！召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスタ―を効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚する！墓地から氷結界の破術師を特殊召喚！」

氷結界の破術師 攻400

紫のマフラーで顔を隠した髪が白い男の人がデブリ・ドラゴンの隣に出てきた。

「……………手札抹殺の時ね」

「そうよ。そして……………」

私は制服の右袖を捲り、シグナーの痣を留姫さんに見せる。

「今度は私のシグナーの龍を見上げてあげるよ！Lv3の破術師にLv4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

☆3

+

☆4

||

☆7

デブリ・ドラゴンが4つの輪になり、その中に破術師が入って3つの星へと変わる。次の瞬間、輪と星が一つとなって、空にオーロラが舞う。

「クレパスの奥地に眠る水の龍がオーロラの光で蘇る。永遠に降り積もる雪を降らせ！シンクロ召喚！放て！アイス・スプラッシュ・ドラゴン！」

アイス・スプラッシュ・ドラゴン 攻2500

空に出来たオーロラの輝きが強くなり、その光に共鳴してオーロラの下に巨体な氷の

張った湖が浮かび上がる。オーロラが湖を照らすと、身体が氷で出来た透き通ったドラゴン……私のシグナーの龍、アイス・スプラッシュ・ドラゴンが悠然と登場した。  
「……………綺麗」

「これが響さんのシグナーの龍……………」

2人がアイス・スプラッシュ・ドラゴンに魅入られている。

このドラゴン本当に綺麗だね。オーロラが見れるし、神秘的な感じがして。

「アイス・スプラッシュの効果発動！シンクロ召喚に成功した時、相手の手札1枚をランダムに墓地へと送る！」

「ハンデス!」

「このシグナーの龍はハンデス付きなの!」

アイス・スプラッシュが水の球を放って、留姫さんの真ん中の手札1枚を撃ち抜いた。  
「くっ」

「リバースカードオープン！リビングデッドの呼び声！墓地からブリザード・プリンセスを特殊召喚！」

ブリザード・プリンセス

攻2800

守2100

アイス・スプラッシュ・ドラゴンの隣に穴が空いてプリンセスが出てきたけど、留姫さんを見ずに私の事を睨んでいた。

「……まだ恨んでいるの？」

『だつてペしやんにされたんだよ!!』

「ごめんつて! ああしないと負けていたんだもん!」

『はあく……良いよ。その代わりに勝つてよ!』

「もちろん! バトル! ブリザード・プリンセスで……」

「リバースカードオープン。和睦の使者。このターン、私は戦闘ダメージを受けない」  
留姫さんの前に女神が祈りを捧げられた。うくん、戦闘ダメージが無効にされたのか  
くくじゃあ!

「よし!! アイス・スプラッシュの……」

「ちよくと待った!!!」

アイス・スプラッシュの効果を使おうとした時、奏達が大声で何かを止めた。

「響! まさかあの効果を使うのか!」

「使う!」

「あれはダメだよ! あれだけは使ってはダメ!!」

「それでも使う!」

「留姫さんに迷惑がかかるのよ!!」

「私はデュエリストよ!! 絶対に使う! アイス・スプラッシュ・ドラゴンの効果発動!」

「ダメーリーー!!」

「……さつきから何を叫んでいるのですか? そんなにまずい効果なのですか?」  
「見たら分かるよ! あれだけは絶対にやっつてはダメな効果だよ!!」

「このターンの攻撃を放棄して、自分フィールドの水属性モンスター1体を選択。そのモンスターのLv×200ポイントのダメージを与える! 選択するのは、ブリザード・プリンセス!! 頼むよ! ウォーターフォール!!」

アイス・スプラッシュ・ドラゴンがプリンセスの持っていた氷の球を空に打ち上げた。そして、その氷の球が留姫さんの上空に行き……

ザバーン!!!!

ものすごい勢いで空から水が落ちてきた。その量はプリンセスに聞いたたら、毎時20リットルの割合だって。

留姫 LP 2900↓1300

暫くして水の勢いが弱まって、服が濡れた留姫さんの姿が見えた。

「……ビショビショ」

「あつちやくく……」

「……もしかして、アイス・スプラッシュの効果は……」

「効果のバーン自体はそこまでなんですが、あの効果を使ったら何故か濡れるんです

よ

「私達全員がああの被害を受けているので、何とか阻止したかったのですが……」

「止められなかった……」

「留姫、大丈夫？」

「……大丈夫。後で着替える」

「響！一言謝りなさい！」

「ええ、何で？」

「良いから謝れ!!」

「は、いい、すいませんでした」

「……いいよ」

「そう!!じゃあ、カードを1枚伏せてターンエンド!」

響 手札 0枚 LP 3600

【モンスターゾーン】

アイス・スプラッシュ・ドラゴン 攻2500

ブリザード・プリンセス 攻2800

【魔法・罠ゾーン】

リビングデットの呼び声 (ブリザード)

伏せカード 1枚

「私のターン」

留姫 手札 4枚

私の伏せカードが1枚。このカードでワイトキングを止められるのは1体が限界。このターンの留姫さんの行動で全てが決まる。

「……魔法カード、生者の書と禁断の呪術。墓地からアンデット族モンスターを特殊召喚して、相手の墓地のモンスターをゲームから除外する。ワイトキングを再び特殊召喚、そして……氷結界の破壊師を除外して」

「させないよ！カウンタース、神の警告！LPを2000払って、生者の書の発動を無効にして破壊する！」

響 LP 3600↓1600

これが私が出る最後の事。あの手札にまだ可能性が残っているなら、私は負け。

「……魔法カード、ワン・フォー・ワン。手札のライトロード・ハンターライコウを墓地に送って、デッキから3体目のワイトキングを特殊召喚」

ワイトキング 攻0↓7000

やっぱり持っていたのね。壺の中の魔術書でカードを引いていた時、少し微笑んでいるように見えたから。

「私の負けね。最後の最後で手が尽きたわ」

「……楽しかった」

「私もだよ!!最後の攻撃、受け止めてあげるよ!!」

「ええ、バトル。ワイトキングでアイス・スプラッシュ・ドラゴンに攻撃」

ワイトキング 攻7000

アイス・スプラッシュ・ドラゴン 攻2500

響 LP 1600↓0

WIN 留姫 LOS 響

響 side out

駆 side

「うーん、やっぱパワー勝負だと氷結界は負けてしまうな〜」

「でも、テクニカルに動く氷結界であそこまで力勝負で行けるのは凄いよ」

「デュエルはやっぱぶつけ合いよ！氷結界のロック効果はその戦術を補助する役割で考えているの」

「へえ〜」

「デュエルお疲れ様」

さっきのデュエルを響さんと留姫が感想言っている間に、レミさん達と俺は留姬たちに近寄っていく。

うん？ちよつと待つてよ？

「ねえ、遊輝は？」

「あそこ」

レミさんが指をさした所には、直立不動で立っている遊輝さんだった。

「俺、気になったのですけど、遊輝さんは何で動かないのですか？」

「気絶しているのよ」

「……………器用に気絶しているわね」

「それより留姫、服を着替えないといけないんじゃないか？」

「……………クシュン！」



「やっぱり濡れた服をずっと着ていたら、風邪を引くわね」

「……家に帰って着替えてくる」

「……そうだ！遊輝!!!」

レミさんが大声で遊輝さんの耳元を叫ぶ。耳元で叫ばれた遊輝さんは飛び上がって驚く。

「わわ!!……あれ？骸骨は？」

「もう終わっているわよ!!それより留姫さんを家まで連れて行きなさい!!」

「はっ？何で？」

「見りや分かるでしょ！響がアイス・スプラッシュの効果を使ったのよ!!」

「それはご愁傷様で」

「今から留姫さんが着替えに行くから、あんたが事情を説明して来てよ！」

「いやっ!?!何で俺何だよ!?!」

「あんたが一番円満に解決するから!!」

「何だよその理由!!」

「そんな事で留姫と一緒に行けと……」

「……私一人で大丈夫よ」

「でも、事情を知っている奴が必要だろ？」

「いたら嬉しいけど・・・」

「だから遊輝に頼んでいるのよ!!」

「だから俺じゃなくて響が行くべきだろ!!」

「いいから行きなさい!!!」

レミさんがポケットから眼鏡（いやあれは伊達眼鏡か）を取り出して、遊輝さんにかけた。

「・・・。。。。。。かしこまりました、レミ様」

「えっ?」

「レ、レミ様?」

伊達眼鏡を掛けられた遊輝さんは両手を前で組んで、レミさんに軽く一例した。

「良い? 留姫さんの家に言っ事情を説明してくるのよ」

「かしこまりました。では留姫様。私がエスコートをして差し上げます」

「えっ?! えっ?!」

戸惑っている留姫の手を遊輝さんが優しく差し伸べてそのまま何処かへ行つた。

「えっ、えつと・・・皆さん、あれは?」

「あの伊達眼鏡な、少し細工してあつてボタンを押せば電流が流れる設計になつているんだよ」

「あれを遊輝が罰ゲームでかけて、執事をやる事になったんだけど・・・」

「その時に私が『執事なんだから敬語で話す!!』って言ったのよ。反抗したら、その電流を流す」

「そんな事してたら、遊輝はあの伊達眼鏡を掛けている間は、執事として動くのよ」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何だそれ？伊達眼鏡を掛けただけでそこまで頭が代わるのか？って言うかそんな伊達眼鏡を何で作ったんだよ・・・

「ちなみに誰の執事ですか？」

「龍可ちゃんよ！だから龍可ちゃんだけには『お嬢様』って呼んでいるのよ」  
「る、龍可が!？」

「龍可ちゃんを知っているの？」

「え、ええ、一応今は龍可の家に居候していますので・・・」  
「遊輝と同じなのね」

遊輝さんも龍可の家に居候しているのか・・・・・・・・  
しかしあの龍可がお嬢様・・・・・・・・とても想像がつかない・・・

（数十分後）

「帰って来たわよ！」

留姫と遊輝さんが帰って来るまで、色んな話を話していた。留姫は先ほどと違う格好で、遊輝さんは伊達眼鏡を掛けたまま公園に帰ってきた。

「ちゃんと円満に話してくれた？」

「大丈夫でございませす」

「ご苦勞様」

ゴム手袋を付けた手でレミさんが遊輝さんに掛けていた伊達眼鏡を取る。

「……………これさく、止めてくれない」

あつ、元通りになった。

「留姫、大丈夫だった？」

遊輝さんがレミさんと言いつ争っているの、留姫に執事の遊輝さんについて聞いてみた。

「……………／／／／恥ずかしかった。お客さんや母さんの前であんな話し方をして。

母さんに《あの執事はどうしたの?》って聞かれて答えられなかった」

「ですよね」

あんな事されたら逆に目立って嫌だよね。

「そんな所で言い争ってないで、さっさとデュエルしてくれよ!! 転生者同士のデュエルを見てみたいぜ!!」

いつまでも言い争っているレミさんと遊輝さんを見兼ねて、スバルさんが止めに入っ  
た。

「……ハア、もういいや。駆さん、デュエルしましょうか」

「もう大丈夫ですか？」

「全然大丈夫じゃない。でも、負ける未来が見えてくるし」

「………苦労してますね」

「もう慣れたよ。じゃあやりましょうか!!」

「ええ!!」

「デュエル!!」

「デュエル!!」

# コラボ 遊戯王CROSS HERO 後編

駆 side

「デュエル!!」 「デュエル!!」

駆 LP 4000 遊輝 LP 4000

二戦目は俺と遊輝さんの転生者同士の戦い、

こんな経験、これから先に出来るか分からないし、楽しまないよ!

「先行はそつちで良いよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて、俺のターン、ドロ」

駆 手札 6枚

まずは様子見かな?

「E・HERO エアーマンを召喚」

E・HERO エアーマン 攻1800

「おつ!俺と同じヒーローだ!」

「駆さんはヒーロー使いなのね」

スバルさんもヒーロー使いか、十代の子孫って言うていたからやっぱりヒーローなん

だね。

「エアーマンの効果発動。召喚に成功した時、デッキから《HERO》と名のついたモンスターを手札に加える。俺はデッキからフェザーマンを加える。そしてカードを1枚伏せてターンエンド」

駆 手札 5枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

E・HERO エアーマン 攻1800

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

「そっちが飛ばささないなら、こっちから飛ばす！ゴブリンドバグを召喚！」

ゴブリンドバグ 攻1400

「ゴブリンドバグの効果！召喚に成功した時、手札からLv4以下のモンスターを特殊召喚する！ダイヤを特殊召喚！」

ガガガマジシャン 攻1500

鎖を回しながら遊輝さんの精霊、ダイヤがトランクの中から出てきた。

「……………見た事ないモンスターたち」

留姫が呟いた。

確かにこのモンスターたちはあまり見た事がない。でも何処だった？何処かで見  
事があるぞ。

「いきなりLv4のモンスターを2体！」

「行けー！遊輝！」

「分かってるよ。その前に、駆さんはこの状況で俺が次にする行動が分かる？」

「つ、次にする事？」

「……………チューナーがいらないからシンクロ召喚が出来ない」

留姫の言う通り、遊輝さんのフィールドにはチューナーモンスターがおらず、Lv4  
のモンスターが2体……………

!!Lv4のモンスターが2体!?それにあのモンスターたちは!!

「ま、まさか遊輝さん、あのモンスター群を……………」

「そう。それじゃ!!Lv4のゴブリンドバードとガガガマジシャンをオーバーレイ  
！」



「オ、オーバーレイ!?!」

留姫が何が起こっているのか驚いてしまう。まさか遊輝さんのデッキは本当に……

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れろ！No, 39 希望皇ホープ！」

No, 39

希望皇ホープ

攻2500

遊輝さんの目の前にブラックホールが出来て、2体のモンスターが吸い込まられ、左肩に39と刻まれた戦士がブラックホールから出てきた。

エクシーズ召喚!?! 転生前のアニメでかろうじて覚えているけど、まさか遊輝さんがエクシーズモンスターを使ってくるなんて！でもこうして実際に戦うのは久しぶりだな……燃えてきたぜ！

「な、何!?! エクシーズ召喚って何なの!?!」

「留姫さんには説明しないと。これは前世でシンクロモンスターの次に出たエクシーズモンスターなんだ」

「シンクロモンスターの次……前世と言う事は駆はもしかして知っているの?」

「うん。でも、ほんのちよつとしか見ていないけどね」

「自分フィールド上の同じLvのモンスターを2体以上存在する時、素材となるモンスターを重ねることでエクストラデッキから特殊召喚出来るモンスター、それがエクシーズモンスターだよ。最大の利点はシンクロモンスターと違って、チューナーモンスターを必要とせず、Lvが同じモンスターを揃えればOKって所だよ」

「チューナーも無しに呼べるモンスター……」

「そして素材となったモンスターは、墓地にはいかずオーバーレイユニットとしてエクシーズモンスターをサポートするんだ」

「オーバーレイユニット?」

遊輝さんの代わりに響さんが、ホープの周りに回っている球体に指をさした。

「エクシーズモンスターはね、この回っている球体、オーバーレイ・ユニットを使っ  
て始めて効果を使えるんだよ。逆に言えば、オーバーレイ・ユニットが無かったら普通のモンスターと一緒に」

「それ、俺のセリフ!!」

「良いじゃん!誰が言っても変わらないでしょ!」

「はあく、あとエクシーズモンスターはLvっていうものが存在しないんだ」

「Lvが存在しない?」

「代わりにランクって物があって、簡単に言ったらLvの代わりかな?だから、Lvに

関するカードの効果……グラビティバインドとか受けないんだ。その代わりに、リンク素材に出来ないけど。それくらいかな」

「なるほど。だから、遊輝は自分が転生者って先に公開したのね」

「まあそうだね。俺のデッキはエクシーズモンスターを使うデッキだから。早速、バトル！ホープでエアーマンに攻撃！ホープ剣・スラッシュユ！」

ホープが2本の大剣を構え、エアーマンを斬りつけた。

No, 39 希望皇ホープ 攻2500

E・HERO エアーマン 攻1800

駆 LP 4000↓3300

「くっ！でもたたじややられない！罠カード、ヒーローシグナル！自分のモンスターが戦闘で破壊された時、デッキもしくは手札からLv4以下の《E・HERO》を特殊召喚する！E・HERO フォレストマンを守備表示で特殊召喚！」

E・HERO フォレストマン 守2000

「ここぞいつか。嫌なモンスター残してしまったな……ターンエンド！」

遊輝 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

No, 39

希望皇ホープ

攻2500

【魔法・罨ゾーン】

無し

遊輝さんがエクシーズモンスターを使って来るのは驚いたけど、こっちもこれからだ

！

「俺のターン」

駆 手札

6枚

「スタンバイフェイズにフォレストマンの効果でデッキから《融合》を手札に加える  
！」

さっきのドローで良いカードを引いたからまずはこっちな。

「魔法カード、天の落とし物。互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドローして、その後手札を2枚捨てる」

「ドローカード……こっちとしてもありがたいけど」

駆 手札

9枚↓7枚

遊輝

手札

7枚↓5枚

「そして手札から融合！フェザーマンとバースト・レディを融合！E・HERO フ  
レイム・ウィングマンを融合召喚！」

E・HERO フレイム・ウイングマン

攻2100

「フレイム・ウイングマン!! かつけええ!!」

「うるさいよ!!!」

「だって俺、使った無いんだからこうやって見るのは始めてなんだよ!!」

「スバルさんはフレイム・ウイングマンを使わないのですか?」

「使いたいけど、エクストラの枠に入らないし、俺、フェザーマンとバースト・レディをデッキに入れてないんだよ」

「……なるほど」

ヒーロー使いにとつて、エクストラデッキの制限は致命傷だよ。俺もどれだけ悩まされた事か……」

「そして魔法カード、ミラクル・フュージョン!」

「うっそ!? ミラクル・フュージョンも持ってたの!?!」

「手札にあったので、墓地のフェザーマンとエアーマンを除外して、E・HERO Great TORNADOを融合召喚!」

E・HERO Great TORNADO

攻2800

墓地にあったフェザーマンとバースト・レディが渦に入つて、黒いマントを付けた身体が黄色と緑の縞模様で彩られたヒーローが出てきた。

「Great TORNADOの融合召喚時、相手フィールドの全てのモンスター  
の攻撃力と守備力を半分にする！タウン・バースト！」

TORNADOがマントをはらい、フィールドに強烈な風が舞い上がってホープが両腕を使い、必死に飛ばされないと耐えている。

No, 39

希望皇ホープ

攻2500 ↓ 1250

守2000

↓1000

「くっ！ホープが！」

「このままバトル！フレイム・ウィングマンで希望皇ホープに攻撃！」

「ホープの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、この攻撃を無効にする！」

ムーン・バリア！」

No, 39

希望皇ホープ

OVR

2 ↓ 1

フレイム・ウィングマンがホープに攻撃するが、ホープが背中にある盾を構え、フレイム・ウィングマンの攻撃を受け止めた。そう言えばそんな効果だったな……。でも、オーバーレイ・ユニットが無い状態で攻撃したら破壊できたはず。

「Great TORNADOでホープに攻撃！」

「もう一度ホープの効果発動！ムーン・バリア！」

No, 39

希望皇ホープ

OVR

1 ↓ 0

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

駆 手札 1枚 LP 3300

【モンスターゾーン】

E・HERO フォレストマン 守2000

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻2100

E・HERO Great TORNADO 攻2800

【魔法・罠ゾーン】

伏せカード 2枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

「（良いカード引いた！）魔法カード、大嵐！フィールドの魔法・罠カードを全て破壊する！」

ここで大嵐?!でも……

「リバースカードオープン！エレメンタルチャージ！自分の場の《E・HERO》1体につき1000ポイントライフを回復する！俺の場には3体！3000ポイント回復

する」

駆 LP 3300↓6300

「じゃあもう一枚だけでも……」

「伏せていたのはヒーロー・メダル！このカードは相手によって破壊され墓地へ送られた時、このカードをデッキに戻してシャッフルして、カードを1枚ドローする」

駆 手札 1枚↓2枚

「……大嵐うったのに損しかしてねえ。ライフを回復させてしまおうし、ドローさせるし……」

「ドンマイ」

「ついてない時はこんな物ですよ」

「はあく、気を取り直して………召喚僧サモンプリーストを召喚！」

召喚僧サモンプリースト 守1600

「さらに手札のカゲトカゲを特殊召喚！」

カゲトカゲ 攻1100

サモンプリーストの後ろから黒いトカゲが出てきた。

「カゲトカゲはLv4のモンスター召喚に成功した時、手札から特殊召喚できる！  
そしてサモンプリーストの効果発動！手札の魔法カード……ガガガボルトを墓地に捨



て、デッキからLv4のモンスターを特殊召喚する！ゴゴゴゴレムを特殊召喚！」

ゴゴゴゴレム 攻1800

サモンプリーストが何かを唱えて遊輝さんのデッキが光り、岩でできたモンスターが現れた。

「これでLv4が3体……また来る！」

「Lv4のサモンプリーストとカゲトカゲ、ゴゴゴゴレムでオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

×

☆4

||

★4

「3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！来い！」

No, 32 海咬龍 シャーク・ドレイク！」

No, 32 海咬龍 シャーク・ドレイク 攻2800

次にブラックホールから出てきたのは、少し黒が掛かった赤の身体で4本のヒレが特徴的なサメ？見たいなモンスターだった。身体の胴体には『32』という数字が浮かび上がる。

これは……俺が知らないエクシーズモンスターだ。ここからは、未知のモンスター達と戦うという事か……がぜん燃えてきた!!

「今度は32……Noは何枚あるのかしら？」

「一応、100枚……のはずなんだけど……」

「何だけど？」

「もう一つのデッキに107のNoを入れてるんだよ」

「……結局分らないのね」

「その通りです」

「……Noが100枚以上？最初のアニメの設定はどうしたんだよ？確か100枚集めてどうかなるんだろ？」

「このままバトル！シャーク・ドレイクでフォレストマンに攻撃！デプス・バイト！」

No, 32 海咬龍 シャーク・ドレイク 攻2800

E・HERO フォレストマン 守2000

「これくらいなら……」

「シャーク・ドレイクの効果発動！戦闘で相手モンスターを破壊した時、オーバレイ・ユニットを1つ取り除いて、戦闘で破壊したモンスターの攻撃力を1000ポイント下げて、相手フィールドに特殊召喚する！」

「えっ!?俺のフィールドに!?!」

No, 32 海咬龍 シャーク・ドレイク OVR 3↓2

E・HERO フォレストマン 攻1000↓0

フィールドに穴が空いて、シャーク・ドレイクがその中に入り、フォレストマンを引きずり出した。

何でわざわざ相手のモンスターを復活させる効果なんかを……

「そしてシャーク・ドレイクはこの効果を使った時、もう一度攻撃できる！」

「も、もう一回攻撃!?!」

だからフォレストマンを復活させたのか!

「シャーク・ドレイクで再びフォレストマンに攻撃! デプス・バイト!」

シャーク・ドレイクがボロボロの身体のフォレストマンを噛みさいていく。

No, 32                   海蛟龍                   シャーク・ドレイク                   攻2800

E・HERO                   フォレストマン                   攻0

駆                   LP                   6300↓3500

「ぐわあああ!!」

くっ、エレメンタルチャージで回復したライフが一気にもっていかれたな……

「魔法カード、エクシーズ・トレジャー! フィールドのエクシーズモンスター1体につ

き、カードを1枚ドローする! 今フィールドにはホープとシャーク・ドレイクの2体!

2枚ドローする!」

遊輝                   手札                   1枚↓3枚

エクシーズモンスター専用のドローカード!? そんなカードまで出ているのか!  
 「……………ホープを準備表示に変更!」

No, 39 希望皇ホープ 攻1250 ↓ 守1000

「カードを3枚伏せてターンエンド!」

遊輝 手札 0枚 LP4000

【モンスターゾーン】

No, 39 希望皇ホープ 守1000

No, 32 海咬龍 シャーク・ドレイク 攻2800

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 3枚

さっきの2枚のドローしたカードも伏せた? ブラフなのか、それとも……………とりあえずドローしてみるか。

「俺のターン、ドロー」

駆 手札 3枚

「魔法カード、融合回収。墓地から、融合とバースト・レディを手札に戻すよ」

駆 手札 2枚↓4枚

さてと、さっきのドローで良いカードを引いたカードから、これを使うか。

「E・HERO マジカル・ウィッチを召喚」

E・HERO マジカル・ウィッチ ☆4

攻1400

「マジカル・ウィッチ？見た事がないヒーローだね」

「精霊世界で手に入れたカードなんです」

「へえ、それでどんな効果なんですか？」

「こんな効果ですよ！マジカル・ウィッチは召喚に成功した時、自分の場に他の《HE RO》がいる場合、デッキから魔法カードを1枚手札に加える事ができる！」

「強つ!?てか何!?ヒーローで魔法持って来れるのは強すぎでしょ!!」

「良いなく。俺も欲しいぜ!!」

「スバルはやめて!!いつもいつもここでキーカードを引いて逆転するんだから!!」

「普通だろ？」

「「普通じゃない!!」」

「こつちが有利な場面でも逆転してるでしょうが!!」

「あのね!!手札0からどうやって逆転勝ち出来るのわけ!!」

「しかも平然とやってのけるし!!」

「……………それは駆もやったわね」

「駆さんですか？」

「一応、一回だけ」

「ヒーロー使いつてみんなチートドロージャー持ちか？」

「あはは……………」

「何とも言えない……………」

「マジカル・ウィッチの効果でデッキから、2枚目のミラクル・フュージョンを手札に加える。そして融合！フィールドのマジカル・ウィッチとバースト・レディを融合！現れる！E・HERO　ライトニング・プリンセス！」

E・HERO　ライトニング・プリンセス　攻2500

「可愛い……………何あれ!?等身大の人形みたい!!」

プリンセスをフィールドに出したのと同時に、大きな声で奏さんが声を上げた。

「奏、ポリウムポリウム。それと最近、人形にも目を向けているよね？」

「あれは可愛いよ!!!あんな人形家になれば良いのにな!!!」

「……………それは嬉しいですね」

「えっ!?!精霊だったの!?!」

『はい、E・HERO　ライトニング・プリンセス。みなさんからプリンセスと呼ばれ

ています』

プリンセスが奏さんの方に向けて、スカートを持ち上げてお姫様の様に頭を下げた。

「へえ、駆さんも色んな精霊がいますね」

「ええ、他にもいますがそれはまた」

「……さつきからみんな何を話しているの?」

精霊が全く見えない留姫が寂しそうな目で俺たちに言ってきた。

「………仕方ない。ちよつと中断して近くに寄りますよ」

「?どうしてですか?」

「留姫さんにも精霊を見えるようにします。駆さん、ちよつと動かないでください」

手札のカードを一時的にポケットに入れて、遊輝さんが俺の額に右手をあてる。直ぐに、右手が光りはじめ俺の身体の中に入っていった。

「それで、駆さんも精霊を実体化する事ができます。レミ!! やった?」

「OKよ!」

「じゃあ駆さん、もう一回プリンセスをデュエルデスクにセットしてください」

遊輝さんの言う通り、一度、プリンセスのカードをデスクから外し、もう一度セットをする。

「じゃあ、プリンセス。何か留姫さんに喋って」

『初めまして留姫さん。私はE・HERO ライトニング・プリンセスです』

「……プリンセスが喋っている」

「これで、留姫さんも精霊が見える」

「すいません。わざわざこんな事してもらって……」

「いいよいいよ。留姫さんだけが精霊が見えないってのは、ちよつと不公平だしね。じゃあデュエルを続けよう！」

「はい！ライトニング・プリンセスの効果！1ターンに1度、相手フィールド上に存在する魔法か罫カードを1枚破壊する！その代わり、この効果を使ったら攻撃出来ませんが」

「魔法と罫の除去能力持ちか。また強いモンスターだね」

「どうも。一番左端のカードを破壊する！ライトニング・クラッシュュー！」

杖に電気を貯めたプリンセスが遊輝さんの伏せカード目掛けて一直線に貫く。

「（破壊されたのは攻撃の無力化か、結構痛いな）」

あの伏せカードは攻撃の無力化だったのか。これで少し安心して攻撃ができる。と、その前に……

「魔法カード、ミラクル・フュージョン！墓地のボルテックとフィールドのフレイルム・ウィングマンを除外して融合！E・HERO The シャイニング！」



E・HERO           The           シャイニング           攻2600

異次元の穴が開き、マジカル・ウィッチとフレイルム・ウィングマンが吸い込まれ、シャイニングが光り輝きながら現れた。

「げっ!?ここでシャイニング!?!」

「ボルテックは天の落し物ね」

「はい、シャイニングは除外されている《HERO》1体につき、攻撃力が300ポイントアップします。除外されているHEROは4体!」

E・HERO           THE           シャイニング           攻2600↓3800

「バトル!シャイニングでホープに攻撃!俺の記憶が正しければ、ホープは自身の効果で破壊されますよね?」

「その通り。ホープはオーバレイ・ユニットが無い状態で攻撃対象になったら、破壊される」

シャイニングの攻撃が通る前に、ホープの身体が光り爆発した。

「対象がいなくなったからシャイニングでシャーク・ドレイクに攻撃!オプティカル・ストーム!」

E・HERO           The           シャイニング           攻3800

No, 32           海咬龍           シャーク・ドレイク           攻2800

遊輝 LP 4000↓3000

「ぐっ！今のは聞いたな！」

「TORNADOでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！ガード・ブロック！この戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドローする！」

遊輝 手札 0枚↓1枚

防がれたか。仕方ない、

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

駆 手札 0枚 LP 3500

【モンスターゾーン】

E・HERO Great TORNADO 攻2800

E・HERO The シャイニング 攻3800

E・HERO ライトニング・プリンセス 攻2500

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚

「これは駆が大分有利ね」

「遊輝のエクシーズモンスターを全滅させたからね。しかも融合モンスター3体を並べたか」

「でも、遊輝がこんな所で終わるはずが無いでしょ」

「もちろん！こんな所で諦めるはずがないだろ！俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 2枚

「魔法カード、壺の中の魔術書！互いのプレイヤーはカードを3枚ドロー！」

「(こ)でドローカード!？」

確かに諦めなかった結果だけど、ここでドローカードを引く!？」

遊輝 手札 1枚↓4枚 駆 手札 0枚↓3枚

「(え)く、こいつが来た・・・うん?もしかしたら・・・(こ)これは行ける!」

「えっ!?!このターンで行けるの!？」

「このターンは無理だけど、次の駆さんのターンでこの状況をひっくり返せる!」  
この状況を、しかも俺のターンで突破する?一体どうやって・・・

「まずは、限界竜シュヴァルツシルトを特殊召喚!」

限界竜シュヴァルツシルト 攻2000

空から茶色のドラゴンがクネクネと身体を回しながら降りてきた。

「このカードは相手フィールドに攻撃力2000以上のモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる!」

「Lv8のモンスターをノーコストで特殊召喚!」

「そしてリバースカードオープン!リビングゲッドの呼び声!墓地からダイヤを特殊召喚!ダイヤの効果!1ターンに1度、Lvを1〜8まで好きなLvに変更できる!」

「Lv変更能力!?これじゃ色んなランクのエクシーズモンスターを呼べるわけ!」

「そういえばそんな効果だったな」

「ダイヤのLvを8にする!」

ガガガマジシャン ☆4↓☆8

これでLv8が2体、今度は大型のエクシーズモンスターが来る!

「Lv8になったダイヤと限界竜シユヴァルツシルトでオーバーレイ!」

☆8 × ☆8 || ★8

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!エクシーズ召喚!運命の糸を操れ!No, 40 ギミック・パペットヘブンズ・ストリングス!」

No, 40 ギミック・パペットヘブンズ・ストリングス 攻3000

ダイヤとさっきの竜がブラックホールに入り、緑色の骨組みと白い羽を剥き出しにした紫色の球体に変形して、上半身の左半分がハープみたいになっていて、赤いスカート

をはいており、右手に巨大な剣を持った機械でできたモンスターが出てきた。左目は長い髪で隠れている。羽には『40』と刻まれている。

「これは……不気味なモンスターね」

「こんなN0は私達も始めてだね」

「こいつを出す機会が無いんだよ。今回は頼らないといけないから出したんだ」

「ランク8……ですが、攻撃力がシャイニングより下ですよ。どうするのですか？」

「まずはバトル！ヘブンズ・ストリングスでライトニング・プリンセスに攻撃！ヘブンズ・ブレード！」

「墓地のネクロ・ガードナーの効果！このカードをゲームから除外して、ヘブンズ・ストリングスの攻撃を無効にする！」

ヘブンズ・ストリングスがプリンセスに斬りつけるところを、ネクロ・ガードナーが現れてプリンセスを守った。

「……天の落とし物のときか」

『ありがとうございます』

「どうも。でも、まだ油断できないよ。おそらくこれで終わりじゃないから」

「バトルフェイズを終了して、ヘブンズ・ストリングスの効果発動！オーバーレイ・ユ

ニットを1つ取り除き、このカード以外の全てのモンスターにストリングカウンターを載せる！運命の曲を奏でろ！へブンズ・メロディ！」

No, 40 ギミック・パペットーへブンズ・ストリングス OVR 2

↓1

E・HERO Great TORNADO SRC 0↓1

E・HERO The シャイニング SRC 0↓1

E・HERO ライトニング・プリンセス SRC 0↓1

へブンズ・ストリングスが胸のハープみたいな弦に、剣を弓のように弾く。ハープの音色がフィールドに奏でられ隠れていた左目が赤く光り不気味に笑う。そして空の雲が黒くなり大量の赤い糸が俺のモンスター達の周りに囲んで行く。

「何………これ？」

『不気味な音色ですね。それにこの赤い糸もあまりよくないように……』

「効果は後のお楽しみに。カードを2枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 1枚 LP 3000

【モンスターゾーン】

No, 40 ギミック・パペットーへブンズ・ストリングス 攻3000

【魔法・罨ゾーン】

リビンググデッドの呼び声 (使用済み)

伏せカード 2枚

このターンで何も起こらなかつた……遊輝さんが「次の俺のターン」って言うていた事は、エンドフェイズかその辺に発動する効果なのか？ だったらこのターンで倒さないと！

「俺のターン。ドロー！」

駆 手札 4枚

このターンで倒すと言っても、攻撃力3000はやっぱりでかいな……ここは安全策で伏せカードを1枚だけでも破壊するか。

「プリンセスの効果！ 今度は右端のカードを破壊する！ ライトニング・クラッシュユー！」  
 「チェーンでリバースカードオープン！ エクシーズ・リボーン！ 墓地のエクシーズモンスターを1体選択して特殊召喚する！ 墓地のホープを特殊召喚！ そしてエクシーズ・リボーンはこの効果で特殊召喚したエクシーズモンスターのオーバーレイ・ユニットとなる！」

No, 39

希望皇ホープ

OVR

0↓1

「かわされたか！ だったらバトル！ シャイニングでヘブンズ・ストリングスに攻撃！ オプティカル・ストーム！」

「リバーズカードオープン！ ハーフ・ストップ！ 相手は〔自分フィールドの全てのモンスターの攻撃力を半分にする〕か〔バトルフェイズを終了する〕のどちらを選択しなければならぬ！ さて、どっちを選ぶ？」

「こんなところでハーフ・ストップだと!? シャイニングの攻撃力が半分になったら、ヘブンズ・ストリングスに太刀打ちできない！」

「くっ……バトルフェイズを終了するを選択する！」

俺の声を聞いて、シャイニングが攻撃をやめた。まずい……。このままエンドフェイズに行くのはほんとにまずい気がする。幸いな事に手札にモンスターがいるから、こいつを守備表示で出して耐えるしかない。

「E・HERO クレイマンを守備表示で召喚！ カードを1枚伏せてターン」

「そのエンドフェイズ時、ヘブンズ・ストリングスの効果発動！」

!! やっぱりエンドフェイズに発動する効果だったか！

「ストリングカウンターを載せたターンの次の相手ターンのエンドフェイズ時、この効果でストリングカウンターを載せたモンスターを全て破壊する!!」

「す、全て破壊!!」



「自身以外のブラック・ホール付きのモンスター!？」

「運命の響きが負の響きへと変わる!奏でろ!」

ヘブンズ・ストリングスが再び胸のハープを弾き、今度は不快なハープの音が響き渡る。あまりに不快な音色に俺とプリンセス、周りで見てた留姫たちも耳を塞ぐ。

「ハ、この嫌な音は!？」

『黒板を爪で引つ掻いたような嫌な音!!』

「いけ!メロディ・オブ・メイヘム!」

ヘブンズ・ストリングスが不気味な笑顔になり、上空に垂れ下がっていた赤い糸を引つ張る。

プリンセスやシャイニング達が赤い糸に絡まり、それがどんどんきつく縛っていく。

『く、苦しい……きやああああ!!』

「プリンセス!!」

縛られる糸に耐えられず、クレイマン以外の俺のモンスターが破壊されていく。

「そしてこの効果で破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを与える!」

「バーンも持っているの!？」

プリンセス達を破壊した赤い糸が数本にまとまり、矢のように空から降り注いだ。

「ぐわわああああ!!!」

駆 LP 3500→2000

「な、なんて残酷なモンスター……」

「フィールドのモンスターを全て破壊する上にバーンつき……」

「ランク8の大型モンスターだけに強力な効果だわ」

「(ジャイアントキラーより演出がマシだけど、結構えげつないな……さすがファ  
ンサービスをしてくれるギミック・パペット……)」

ぐっ……今のはかなり効いたな……あれだけ展開したモンスターが一瞬に  
して破壊されてしまった……

「破壊されたシャイニングの効果！除外されている《HERO》を2体まで手札に加え  
る！エアーマンとボルテックを手札に！これでターンエンド！」

駆 手札 4枚 LP 2000

【モンスターゾーン】

E・HERO クレイマン 守2000

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 2枚

「……駆が一気にピンチになった」

「次の遊輝の攻撃が決まれば勝ちだけど……」

「そんな簡単に決まるはずが無いよね！」

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 2枚

「確かにこのまま終わるはずが無いだろう。かと言って、除去カードが来ないし……」バトル！ホープでクレイマンに攻撃！ホープ剣・スラッシュユ！」

No, 39 希望皇ホープ 攻2500

E・HERO クレイマン 守2000

「クレイマン！」

「ラスト！ヘブンス・ストリングスでダイレクトアタック！ヘブンス・ブレード！」  
ヘブンス・ストリングスが俺に向かって、大剣を振り落とした。

駆 LP 2000↓0

「……えっ？」

「何も発動しない……」

「遊輝の勝ちなの!?!」

「……いや！あのカードがある！」  
何かをひらめいたかのように、スバルさんが立ち上がった。どうやらスバルさんが俺の伏せカードを分かったみたい。

駆

LP

0↓100

「ライフが100!？」

「……ヒーロー・ソウルか」

「はい、《HERO》が破壊されたターンにプレイヤーのライフが0になった時、俺のライフを100にします」

「まいったな。やっぱ除去カードを引くべきだったな」

頭をかきながら遊輝さんが苦笑いした。

「これで終わりじゃありませんよ！リバースカードオープン！シヨック・ドロー！このターンに受けたダメージ1000ポイントにつき、カードを1枚ドローする！2000ポイント以上のダメージを受けたので、2枚ドロー！」

駆 手札 4枚↓6枚

「さて、この後はどうしますか？」

「どうしようもねえ、手札も増やしてしまったしな。こいつ先に打てば良かったよ。魔法カード、マジック・プランター！永続罠のリビングゲッドの呼び声を墓地に送って、カードを2枚ドロー！」

遊輝 手札 1枚↓3枚

「(うーん、一応伏せておくか)カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 2枚 LP 3000

## 【モンスターゾーン】

No, 39 希望皇ホープ 攻2500

No, 40 ギミック・パペット・ヘブンス・ストリングス 攻3000

## 【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

何とか防いだけど、ピンチなものには変わりがない。

このドローに全てがかかっている。せっかく楽しいデュエルをしているんだ。勝つて終わりたい！頼むよ……俺の仲間達!!!

「俺の……ター……ン……!!!」

駆 手札 7枚

………良し!!

「魔法カード、埋葬呪文の宝札！」

「ここでドローカード!?!」

「墓地の融合回収、ミラクル・フージョン、天の落とし物の3枚をゲームから除外して、カードを2枚ドロー!!」

駆 手札 6枚↓8枚

．．．．シヤイア!

『駆! 楽しいデュエルをしているじゃん!』

「異世界の人、しかも俺と同じ転生者なんだよ」

『へえ、じゃあ、私も、あのカードも出すよね?』

「ああ! こんな楽しいデュエルをしているんだ! 出さないはずがないよ! まずは魔法カード、融合回収! 墓地の融合とE・HERO　フォレストマンを手札に! そして手札に加えた融合を発動! 手札のフォレストマンとバブルマンを融合! E・HERO　アブソルートZero!」

E・HERO　アブソルートZero　攻2500

「Zero?!?ここでZeroが出るの!?!」

「．．．．駆、やっぱりヒーロー使いはチート?」

「半分当たっているかもね、あはは．．．．」

もう何も言い返せない．．．．

「魔法カード、死者蘇生! 遊輝さんの墓地から限界竜シユヴァルツシルトを特殊召喚!」

限界竜シユヴァルツシルト　攻2000

遊輝さんの墓地が光り、先ほどの茶色の竜が今度は俺の所にくる。

「(ヒーローじゃない?何を狙っているんだ?)」

「チューナーモンスター、E・HERO エンジェル・シャイアを召喚!」

E・HERO エンジェル・シャイア 攻100

黄色の髪をした妖精が出てきた。

「俺の知らないチューナーのヒーローだ?!」

「この世界でもヒーローのチューナーがあるんですね」

『そうだよ!』

「しゃ、喋った!?そのモンスターも精霊なの!」

「はい、俺の精霊の1体です」

『みんなくよろしく』

シャイアが精霊が見える響さん達に手を振る。

「チューナー……て事はシンクロモンスターか」

「そうです。そして……」

前のデュエルで響さんが腕をめくったように、俺も右袖をめくり、遊輝さんに痣を見せる

「見せてあげます。俺のシグナーの龍を!Lv8の限界竜シュヴァルトにLv



1のエンジェル・シャイアをチューニング！」

☆8

+

☆1

||

☆9

「月より舞い降りる龍がその光で大地を照らす。暗闇を照らす光となれ！シンクロ召喚！輝け！ムーン・ライト・ドラゴン！」

ムーン・ライト・ドラゴン 攻2700

一つに集まった光から、満月ができたくましく輝く。その中からムーン・ライト・ドラゴンが舞い降りてきた。

「き、綺麗………」

「わ、私のアイス・スプラッシュ・ドラゴンより輝いている………」

「ほんとだね。まさに月光の龍………」

響さんやレミさん、それに奏さんはムーン・ライトで見とれている。

「す、すげえ………」

「みんな見とれているわね」

「だってこんな綺麗なモンスターなかなか見れないんだよ！」

「そうだよ。ムーン・ライト」

『私もありがたい限りです』

「………精霊なの？」

「駆、一体精霊を何体持っているの？」

「えっと……まあそれなりに」

ハネクリボーにシャイア、ウイングとアルド、そしてムーン・ライトとプリンセスにこの前仲間になったサキ……

「と、とりあえず、シンクロ素材になったシャイアの効果！このカードが融合素材、もしくはシンクロ素材となった場合、このカード以外の融合素材となったモンスターのLV×100ポイントライフを回復する！」

駆 LP 100↓900

「そして魔法カード、受け継がれる力！フィールドのZeroを墓地に送り、自分フィールドのモンスター1体……ムーン・ライト・ドラゴンの攻撃力をエンドフェイズまでZeroの攻撃力分アップする！」

ムーン・ライト・ドラゴン 攻2700↓5200

「攻撃力5200!？」

「そして墓地に送られたZeroの効果！Zeroがフィールドから離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」

Zeroによって遊輝さんのモンスターが氷りついて碎けていった。

「これで遊輝のフィールドはガラ空き!!」

「ムーン・ライト・ドラゴンでダイレクトアタック！ムーン・ライト・ウェーブ！」  
ムーン・ライトが遊輝さんに向かい攻撃する。これで……

遊輝                    LP                    3000↓400

!?ライフが残っている!?

「危ねえ……罨カード、ダメージ・ダイエツトを発動した。このカードの効果により、このターンに俺が受けるダメージは全て半分となる！」

「そんな!？」

ダメージを半分にするカード!?

・・・このターンに決められなかったか。仕方ない。  
 「カードを1枚伏せてターンエンド！エンドフェイズ時にムーン・ライトの攻撃力は元に戻る」

駆 手札 2枚 LP 900

【モンスターゾーン】

ムーン・ライト・ドラゴン 攻5200↓2700

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

もしムーン・ライトが除去される事があっても自身の効果で守れる。そして遊輝さんがムーン・ライト以上の攻撃力を持ったモンスターを出してもくず鉄のかかしで俺のターンまで耐える事が出来る！

駆 side out

遊輝 side

ほんつと危なかった．．．．．ダメージ・ダイエツトで助けられたのはこれで何回目だ？

さてと．．．．．今度こそ大ピンチだな。俺の手札は次のドロローで3枚。フィールドは何もない。このドロローで全てが決まるな。

「俺のターン!!!ドロロー!!!」

遊輝 手札 3枚

．．．．．!貪欲な壺!

「魔法カード、貪欲な壺!墓地のサモン・プリースト、カゲトカゲ、ゴゴゴゴーレム、ゴブリンドバグ、そして限界竜シユヴァルツシルトをデッキにもどしてシヤツフル!そしてデッキからカードを2枚ドロローする!」

選択した5枚のカードをデッキに入れ、オートシヤツフルされる。そして、手を右手にかける。

「ドロロー!!!」

遊輝 手札 2枚↓4枚

．．．．．良し!!

「遊輝!!!」

レミが大声で呼んだので、レミのいる方に向く。

「駆さんがシグナーの龍を出したんだから、あんたも出しなさいよ!!」

「言われなくても、今しようと思っただけだ所だ!」

「今度は遊輝のシグナーの龍……」

「まずは、ゴブリンドバーグを召喚!」

ゴブリンドバーグ

攻1400

「さつきデッキに戻したモンスターが手札に来たの!?!」

「いや、このカード三積みだから」

「それできたのか……」

「ゴブリンドバーグの効果!手札からチューナーモンスター、ミスト・バレーのせんし霞の谷の戦士を特殊召喚!」

喚!

霞の谷の戦士

攻1700

「チューナーモンスター、遂に出すんですね」

「ああ」

今度は俺がアカデミアの制服の右袖をめくり、自分の痣を見せる。

「行くぞ!Lv4のゴブリンドバーグにLv4の霞の谷の戦士をチューニング!」

☆4

+

☆4

||

☆8

「極夜の地に潜む漆黒の太陽よ！暗黒の世界から舞い降りて、この世界の闇の神となれ！シンクロ召喚！染まれ！ブラック・サン・ドラゴン！」

ブラック・サン・ドラゴン

攻1000

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

星と輪が一つに、上空から漆黒の太陽が降りてきて、青いタスキを巻いたブラックが変形してきた。駆さんのムーン・ライトと違って、こっちは黒い日の光を照らしている。

「これが遊輝のシグナーの龍……」

「圧倒されて吸い込まれる感じがしますね」

「いや〜こいつ、まだ精霊の赤ちゃんなんだけど……」

「あ、赤ちゃん?!?!」

「今は出しているけど、普段は勝手に実体化して俺に甘えてくるんだ」

「し、信じられねえ……」

「シグナーの龍が赤ちゃんだなんて……」

ブラックが赤ちゃんだという事に驚く駆さんと留姫さん。そりやシグナーの龍が赤ちゃんならね、だからお世話がもう大変だよ……

「ブラック・サン・ドラゴンの効果発動！特殊召喚に成功した時、墓地のエクシーズモンスター体をこのカードの装備カードとして装備する！墓地のヘブنز・ストリング

スを選択してブラックに装備！」

ヘブンス・ストリングスが下から出てきて、ブラックがそれを吸収した。

「そしてこの効果で装備したモンスターの攻撃力分、ブラックは攻撃力がアップする！」

ブラック・サン・ドラゴン

攻1000↓4000

「攻撃力4000!?!」

「魔法カード、死者蘇生!墓地からダイヤを特殊召喚!」

死者蘇生が発動されて遊輝さんの前に再びダイヤが現れる。あのモンスターは大変だな……。おそらくあんな感じですつと回されているんだろな……

「魔法カード、ガガガ・ゲット!デッキから《ガガガ》と名のついたモンスターを特殊召喚する!」

「えっ?ダイヤは自身の効果で自分フィールド上に1体しか存在出来ないはず」

「そうだよ。駆さん、前世には新しく《ガガガ》ってカテゴリができています。

つまり、俺が呼ぶモンスターはダイヤではありません。ガガガガールを特殊召喚!」

ガガガガール

攻1000

ふくれっ面になりながら、パールがダイヤの隣に現れた。

『マスター!また私を最後にした!』



「だから手札に來なかつたらどうしようもないって」

『そんな理由をつけないでよ!!』

「……パール、で会っているよね?」

「そうです。一応、こいつらのアニメの設定は先輩、後輩関係なんですが……」

『私達は兄弟なのよ!』

パールがエヘンっ!と言うばかりに仁王立ちをした。

「へえ。あと、遊輝も精霊が多いわね」

「駆さんが精霊が多いって言われていた時、心の中で同情してたんだよ。きっと苦労しているなって」

「それはこつちも言えますね」

「精霊の話はこれまでで、ダイヤの効果!今度はLvを6にする!」

ガガガマジシャン

☆4↓☆6

「次!パールの効果!自分フィールドの《ガガガマジシャン》を選択して同じLvにする!」

ガガガガール

☆3↓☆6

「コレでLv6が2体か……」

「ところで駆さん、シグナーの龍は普通1人につき何体だと思う?」

「な、何その質問……そうだな、1人1体が普通だな」

「じゃあその考えを覆してみせるよ！」

「えっ!？」

「Lv6になったダイヤとパールでオーバーレイ！」

☆6

×

☆6

||

★6

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！白夜の地に輝く純白の太陽よ。天空の世界から降臨して、この世界の光の神となれ！エクシーズ召喚！輝け！ホワイト・サン・ドラゴン！」

ホワイト・サン・ドラゴン

攻2400

『ギヤアアアアア!!』

ブラックの時とは違い、下から純白の太陽が昇ってきて、ホワイトが姿を現した。ここで、俺と駆さんの痣が光り始める。

「ま、まさか……2体目のシグナーの龍!?!?」

「シグナーの龍が2体も居るの!?!?」

「その通り！これが太陽のシグナーの龍だ!!エクシーズ素材となったパールの効果!《ガガガ》と名のついたモンスターのみでエクシーズモンスターの召喚に成功した時、エクシーズモンスターの効果を1つ追加させる！」

「効果の追加？」

「その効果は……相手フィールドの特殊召喚したモンスター1体の攻撃力を0にする!!」

「なっ!!」

「攻撃力を0にする効果!?!」

「対象はムーン・ライト・ドラゴン!頼むぜパール!ゼロゼロコール!!」

オーバレイ・ユニットにいるパールが携帯電話の番号を押し、ムーン・ライトに画面を向けると0の光線がムーン・ライトに向けられる。

『ち、力が、抜けていく……』

ムーン・ライト・ドラゴン      攻2700↓0

「そ、そんな……」

「ムーン・ライト・ドラゴンの攻撃力が……0!?!」

「バトル!ホワイト・サン・ドラゴンでムーン・ライト・ドラゴンに攻撃!サンシャイン・パティズム!」

ホワイトが太陽の力を溜めて、白い日の光がレーザーとなりムーン・ライトに攻撃する。

「リバースカードオープン!くず鉄のかかし!ホワイト・サン・ドラゴンの攻撃を無効

にする！」

ムーン・ライトの前にあのかかしが出てきて、ホワイトの攻撃を防いだ。

「でも、これは止めれまい！ラスト！ブラック・サン・ドラゴンでムーン・ライト・ドラゴンに攻撃！ダークネス・ブラスト！」

今度はブラックがホワイトの使った太陽を黒く染めて、漆黒の日光をムーン・ライトに攻撃する。何も無い駆さんは静かに下を向く。

ブラック・サン・ドラゴン 攻4000

ムーン・ライト・ドラゴン 攻0

駆 LP 900↓0

WIN 遊輝 LOS 駆

遊輝 side out

駆 side

「はい、これがさつきデュエルで出ていた俺のシグナーの龍、ブラックとホワイトだよ」

デュエルが終わりデスクを直したところで、遊輝さんがぬいぐるみみたいな精霊を抱きかかえて俺と留姫に渡してくれた。

『きゃっ♪』 『キャッツ♪』

「ほんとに赤ちゃんなんだ」

「……………可愛い」

「そうだね。それになんかポカポカしていて気持ちいいよ」

「太陽の龍だからね。身体が太陽みたいに暖かくなるんだよ」

「へえ〜」

「遊輝！私も抱いていい？」

「奏は実体化する度に抱いているだろうが!!優先権つてもんがあるだろ!!」  
奏さんが目を輝きながら遊輝さんに聞いてきた。

「奏さんは可愛い物が好きなのですか？」

「そう！部屋にたくさんぬいぐるみが飾ってあるわよ！」

「一回奏の部屋に入らせたけど、凄いやつだったよ」

「響は小等部の時、毎日遊びに来てくれたからね」

「遊輝さんはこの精霊をお世話しているってさつき言っていましたよね？」

なんか女性陣が勝手に色々喋り出したので、遊輝さんに質問を試してみた。

「そうだよ。精霊の赤ちゃんだけど、お世話の仕方は人間の赤ちゃんと一緒に」

「なにか精霊を育てるコツみたいなのってあるんですか?」

「うくん、普通に接しているだけだと思うな。周りから見りや「親バカ」って思われるけど」

「それは言えるな。いつも甘えてくるブラックとホワイトの言ってきた事をやっているから」

「遊輝さんは凄いですね。子育てをしながらアカデミアに通っているなんて」

「アカデミアにいる時はダイヤ達に任せているんだよ」

「だから授業の時は出てこないんか」

その後、留姫たち女性陣は、留姫が精霊を見たいって事もあり、シークレットシグナーの力を借りて色んなモンスターを実体化していき、俺と遊輝さんで一戦交える事にした。さすがに、シークレットシグナーの能力は使わないように頼んだ。それで構えていたら……

「……誰これ?」

留姫の言葉を聞いて、遊輝さんの耳がピクリと動いた。

「遊輝よ!」

「えっ!?このメイド服を着た女の子が遊輝!」

「なに—————?!?!?!」

留姫の口から出た「メイド服」という単語を耳にした遊輝さんは、竹刀を放り投げて女性陣の方に突っ込む。

「ちよっ！お前ら！何見せてるんだ?!?!」

「文化祭の時の遊輝」

「そんな写真いつ撮ったんだ?!?!」

「知らなかったの？あの出し物の時、色んな所で隠し撮りをされていたんだよ。既にアカデミアで出回っているわよ」

「／／／／／なに—————?!?!?!」

「……………駈、これ見て」

顔を赤くして、頭を抑えている遊輝さんを無視して、留姫が一枚の写真を差し出した。そこには、白黒のスタンダードのメイド服を着て化粧をしている、顔を赤くしたツインテールの女の子が写っていた。

「まさか……………」

「そう、これが遊輝らしい」

「嘘だろ……………面影とか全く見られない。女装の域を超えてるだろ……………てか遊輝さん、何でメイド服なんか着ているんだ？」

「駆は伊達眼鏡の話聞いた？」

「ああ、確か罰ゲームであるの伊達眼鏡をかけたって」

「そのゲームが《逃亡する遊輝を捕まえてメイド服を着させる》だったのよ」

「何でそんなゲームが・・・」

「看板娘をスバルと二人でやる事が、クラスのホームルームで決まったって言ってたわ」

「・・・・・・・・何だそれ」

てかスバルさんもメイド服を着たんだ・・・・・・・・しかし、これは・・・

「私、これを見たら女として生きていく自身が無くなった・・・・・・・・」

「男がこんな女装したら、誰だって自身なくすだろ」

さつきまで、一線交えていた遊輝さんのイメージが根本から覆させられたよ・・・

「…………その写真今すぐに捨てる………………」  
!!!!

「嫌だ♪」

「こんな所で捨てても、アカデミアで広まっているから遅いわよ」

「……………うわあああああ!!!!」

声を張り上げ地面に崩れる遊輝さん。

「ん？あれ何だ？」



スバルさんが上空に出来た渦みたいな物を見つけた。

それが白く光り、2枚のカードとなつて、遊輝さんの近くに落ちていった。

『マスター、次元の歪みからまたカードが生まれましたよ』

「そんなことより俺は今、何もかもが崩落していつとるんだ……」

「ほら！シャキツとしなさい！どんなカードが落ちてきたか教えなさいよ！」

「いやいやレミさん。今の遊輝さんはそんな状態じゃありませんよ。」

「……これは」

「駆さんと留姫さんにピツタリのカードじゃねえか！」

「遊輝！2人に渡しなよ！」

「……そうだね。はい、駆さん、留姫さん」

遊輝さんが手にしたカードを俺とレミに差し出してくれた。

「良いのですか？」

「良いんだよ。これは……」

「……俺たち（私たち）の友情の証だ（よ）!!」

遊輝さんを囲むようにみんなが言った。

「……では」

俺と留姫は遊輝さんからカードをもらった。

これは……. . . . . なかなか強いね。

『マスター、次元の歪みが開きました』

「……お別れだな」

「また会いましょう！」

「今度は俺とヒーロー同士のデュエルをしような！」

「じゃあね！」

遊輝さん達が次元の歪みの中へと入っていった。

「……. . . . . 不思議な体験だったね」

「俺はこれが2度目なんだけど。でも、何度やっても慣れないもんだな」

「私達も帰りましょうか」

「そうだね」

留姫と一緒に家へと帰路する。

駆

side

out

遊輝

side

〈軽音部

部室〉

先ほどまで無人だった部屋に次元の歪みが開き、軽音部のメンバーが帰ってきた。

「良い体験だったわね！」

「響はデュエルをしたからでしょ」

「俺もデュエルしたかったな」

「出来るさ」

「えっ、でも……」

「会えるさ、いつかまた、生きている間に」

「……そうだね」

「それじゃ！練習を再開するわよ！」

「おい、もう6時だぞ」

「今日の練習はこれまでね」

「じゃあ片付けて帰りますか！」

俺たちは出しっ放しの楽器を片付けて、部室から出た。

# コスプレした3人の生活

遊輝                          side

ジリジリ……ポチツ

目覚ましの音を止め、ベッドから降りる。そして普段の癖で右側に向き、鏡を見る  
と……

「……  
ていないんだ」

自分の姿……マドルチェ・マジョレーヌのコスプレをした姿を  
見る。

俺の借りている部屋には右側に等身大の鏡が置いてあり、いつもはそこで寝癖を直している。だから、いつもの癖で鏡の方に向いてしまうが、今の俺の服はパジャマじゃない。

紫色の魔法使いみたいなどと帽子に白いリボン、まるでお姫様が着ているかのような紫色のあちらこちらに白いリボンがついていて真ん中は5本のひだがある大きな

ドレス、同じく紫色の長く、ドレスまで伸びている靴下と少しかかどが高い靴……。モンスターカード、マドルチェ・マジョレーヌのコスプレだ。

「何で俺だけ女装させるんだよ……俺は男なのに……」

もちろん、好きでこんなコスプレをしている訳じゃない。原因は……

「レミ……奏……」

苦虫を噛むような顔が写るのが自分でも分かる。

この前、奏を見捨てて逃げたのが罰となって仕返しされてしまった……コスプレだけならともかく……

後ろについてあるチャックに手を伸ばし、服を脱ごうと試みるが……

「やっぱり動かないよね……」

着替えられない、これが一番の地獄だ。服が着替えられず、3週間もの間、ずくとこの姿で過ごさないといけないと思うと本当に恥ずかしくなる。

はあ……とりあえず……

「おい、起きろよ。もう朝だぞ」

部屋の真ん中に2つ敷いてある布団に寝ている同じ犠牲者を起こす。

「う、う……」

「ふわぁ〜．．．．．／／／／／／夢か．．．．．」  
 布団に包んで抵抗する甲冑を着たスバルと、欠伸をして、周りを見て顔を赤くする着物を着た響。

「／／／／あゝあ、夢の中で私服で楽しく遊んでいたのに〜」

「そんな夢の話を言わないでくれよ。折角この甲冑を忘れていたのに．．．．．重いぜ」

ガチャガチャと音を鳴らしながら、スバルが立ち上げる。

甲冑で生活とか地獄だな．．．．．

ここで言うと、スバルはカオス・ソルジャー〜開關の使者〜、響は氷結界の風水師のコスプレをされている。

響は氷結界のデツキ、スバルはE・HEROだけど、良いのがいないって言って、戦士族繋がりでカオス・ソルジャーにされた。

二人はまだ良い．．．．．俺なんかマドルチエだけど．．．．．何でマドルチエ何だよ．．．．．いやつ、理由はあるんだけど．．．．．

「遊輝〜。起きているなら朝ごはん作つてよ」

ノックもせず、龍亞がドアを開けて朝ごはんの催促をしてきた。朝ごはん．．．．．この格好で作りたくないけど．．．．．

「わかったよ……」

「流石マドルチェ・マジヨレーヌ!!!メイドみたいで助かるよ!!!」

「……ううう、反論できないよ（涙）」

「……ほらっ、飯作ってこいよ」

「部屋の片付けは私達がするから」

スバルと響に背中を押され、自分の部屋から出る。

そういえば、何でスバルと響が俺の部屋にいるか話してなかったな。あのマシンの餌食の後、へ恥をかくならみんなでかこう〜という結論に至ったので、この中で一番家が大きく、世間にバレにくい龍亞達の家で3週間居候する事になった。もちろん、アカデミアには行かない。こんな格好で行けない。

そうして、今日も地獄の1日が始まるのだった……

「……いただきます」

朝起きて1時間……

龍可も手伝ってもらって、簡単な朝食を作る事は出来た。さすがに5人だといつもの調子で作ったら材料があつという間に無くなってしまうからな。

「あのマシンで無理矢理着せられてから、唯一の楽しみが遊輝の料理とデュエルだけだもんな」

「ほんつとそうだよ。レミは何をを考えて、私達をこんな格好にするんだろうか?」

「……………頼む、今はデュエルの事は触れないでくれ」

「あつ……………ごめん」

「そうだったね……………今の遊輝のデッキって女装した時の」

「龍可、傷口を広げないでくれ……………」

あのマシンで女装されられた後、レミに普通のデッキを2つとも取られてしまった。今は龍亞と龍可が保有している。

じゃあデュエルはどうするんだって?一応、3つ目の(というより女装されられた時の)デッキがあるにはあるんだが:最初のデュエルの時にインパクトが強すぎて、「もう女装した時はこれ!!」って勝手に決められたんだよ……………

「(ち)ちそうさま〜」

箸を放り投げて、龍亞がソファへと飛び込もうとしている。

「龍亞! 食器は台所に持って行きなさいよ!!」



「え〜いいじゃん。いつも遊輝が運んでいるのに〜」

「今の遊輝の状況を見なさいよ!! 普段の生活も大変なのよ!!」

龍可、フオローはありがたいけど、服の事は触れないでくれ……………

「……………分かったよ。俺も手伝う!!」

いやに声を出して龍亞が食器を片付けをし始めた。

あれって……………なんかやばい予感が……………とりあえず俺も片付けをしな  
いと……………

「はあ……………今日は何する?」

「毎日デュエルだけだしな……………飽きたらゲームだけど、遊び尽くしたし……………」

「あくあ! 着物だから身体も動かせないよ!! じれったい!!」

今日も何をするか考えるスバルと響。1週間近くも同じ部屋に缶詰めなんかされたら何もする事ないよな……………

そんな事を思いながら皿洗いをしている。

「あつ!」

「へっ?」

龍亞が何かを滑ったかのような声を出したので、そっちの方に向くと……………

バチャツ  
!!!!

「あー!!!」

何故か龍亞が今開けたばかりの牛乳パック（しかもハサミで開けた）のを、こつちに放り投げていた。

「アハハハハ!!!」

「お前何しやがるんだ!!!」

「あくあ、牛乳まみれだよ……」

「くっさ……牛乳臭いよ」

「どうしたの？つてキヤツ!!」

ガチャツ!!!バチャツ!!!

様子を見にきた龍可と慌てていた俺がぶつかってしまった。その時に何かが割れた音がして……

「あく……服に醤油が……」

「うわっ……俺もついてしまったよ……」

さっきの衝撃で醤油瓶が割れてしまったらしく、俺と龍可の服が醤油の染みが吐いてしまった。

これどうしよう……結構目立つ所に来ただけど……着替えられないし……

「フウーフウー!!! 熱いねお二人さん!!!」

「//////////る、龍亞!!!」

「(本当にあの二人、息ピッタリだよな)」

「(まあ一緒に5日間、メイド服で過ごしたらそうなるよね)」

「(俺、絶対あんな事出来ないわ)」

「(私も。レミと龍亞君の仕掛けとは言え、メイド服で外に出るなんて出来ないよね)」  
「//////////わ、私、着替えてくるね」

顔を赤くしながら龍可が自分の部屋に戻って行った。それよりこれ

ピンポーン

「あつ、誰か来たぞ」

「俺見てくる!!」

インターホンが鳴り、龍亞が玄関まで走って行く。誰だ? 日曜の朝早くから家に来る奴って……まさか……(汗)

「みんなー!!! 元気にしてる!?!」

「出つた……」

やっぱりレミだった……日曜の、しかもこんな朝早くから良く来るよ……

「今日は何の用事で来たんだよ……」

「いやつ、実はさく、みんなに頼み……あれ？遊輝？その服にある染み、どうしたの？しかもせつかくの衣装が濡れているじゃん！」

何かを言おうとしたレミが俺の服（俺の服じゃないけど）についてある染みを見つけ、聞いてきた。

「さつき、龍亞君が牛乳パックを遊輝に投げつけていたわよ」

「で、そこに醤油瓶を直そうとした龍可とぶつかってしまつて……」

「こういう状況になりました……」

「ふん」

レミが服に出来た醤油の染みと牛乳をじくを見る。そして、手をポンとたたき、

「ちよつと待つてね」

と言つて、ベランダに出て行つた。

……そういえば、あつこつてベランダつて言うのか？庭では無いし、バルコニーでも無いし、でも、屋上にプールとか付けて、その上でデュエル出来るスペースあるんだろ？こう考えたら、龍亞と龍可の両親つて結構稼いでいるな……

ドシン!!!

「!?な、何だ!?!」

「何!?!今の音!?!」

いつの間にか着替え終わった龍可と龍亞も驚く。そりやそうだろ！何だ今の音!?!結構重たい物だったよな!!

「みんな、こつち来て〜」

レミが部屋にちよつと顔を出し、手を使ってベランダに出るように招く。

「……………どうする?」

「私、既にヤバイ気がして仕方ないんだけど……………」

「それは俺も一緒。でも……………逃げられないし……………」

「……………覚悟を決めていきますか」

「……………はあ〜」

ため息をつくスバルと響の背中を押しながら、ベランダに足を出す。龍可も龍亞も興味心身でベランダ俺たちのあとを追うように外に出る。

「ジャジャ〜ン!!!」

レミの口で作る効果音はさておき、外にあったのは、これまた全自動着替えマシン並みとは言わないがそれでも結構大きな物体だった。

「……………スバル、説明」

「レミに頼まれて全自動着替えマシンと同時並行で作った洗濯機だ……………」

「えっ!?!洗濯機!?!あのバカデカイ物体が!?!」

「…………お前は一体そんな物作って、何を目指すんだ？」

「頼まれたからさ……………」

「すっげ〜!!!遊星も凄いいけど、こんな機械を作れるスバルも凄いいよ!!!」

目を輝かせながら龍亞がマジマジとその機械を見つめる。

……………うん？ちよつと待てよ。洗濯機？

「なあレミ、今から何を洗濯するんだ？」

「決まっているでしょ!!遊輝の衣装よ!!」

「えっ!?!いやつ、服が脱げないんだよ!!」

「でも洗濯出来るんだ!!」

……………まさか、俺の思っている事が起ころうとしていないだろう

な……………(汗)

いや!そんなはずは無いと信じたい!!あの洗濯機の中に入ら!嵐風術くウイング・パ

ヘットく!!!」

「つてうわっ!!」

「そりやつ!!!」

「ゆ、遊輝!!!」

油断していた所をレミに捕まえられて、洗濯機の中に放り込まれた。て言うか!!!

「冷たっ!!!それになんかネバネバしているんだけど!!!」

「当たり前だよ。水温が5°Cで、ちよつと特別などんな汚れも取れる液体を入れてい  
るからネバネバしているんだよ」

「お前は俺を殺す気か!!!何で俺を洗濯機に入れるんだ!!!」

「決まっているじゃん!!!遊輝ごとその汚れた衣装を洗濯する!!!」

「本気で殺す気か!!!」

「さてと………スバルも響も1週間近くは着替えて無いんでしょ?」

「無視するな!!蓋をするな!!!」

大きな蓋をボタンツツと閉められて、外にいるスバルと響達の方に向くレミ。

「頼むから開けてくれ!!凍え死ぬ!!!服が水に染みてくる!!ネバネバとして気持ち悪い

!!!」

「(ギクツ!)」

そんな中で抵抗している遊輝を無視して、外でレミによる脅しが今始められてようと  
している。

「響もスバルも同じ服を着て洗濯してないから気持ち悪いでしょ?それに、お風  
呂も入っていないから身体も不衛生だよね?だからさく洗濯は大事だよね?」

「ま、待ったレミ!!!俺は甲冑だぞ!!!」

「下は布じゃん。と言う事で……」

「逃げるぞ!!!」

「う、うん!!!」

「嵐風術くストーム・バインドゥ!!!」

外で一体起こっているんだ!? て言うか、新しい技を覚えた!?

「ちよい!? ああ!!!」

「た、助けて!!!」

「蓋を開けて♪2名様ご案内♪」

ザボン! ザボン!

真つ逆さまに落ちるスバルと響。

「冷たっ!!!」

「ハックション!! 風邪引くぞ!!」

「えくと、この特別な洗剤を5kg入れて、柔軟剤を2kg入れて……」

ドボボ……

洗剤と柔軟剤を一変に入れて、俺たちの身体がどんどん沈んで底なし沼のように抜け出せなくなっていく。

「や、止めて!!!」





「何？」

「(いつつも思う事だけどき、レミ姉ちゃんってあんな重い機械をどうやって運んでい  
るのだろうか?)」

「(・・・・・・・・私に聞かれても分からないわよ・・・・・・・・)」

「(レミ姉ちゃんって・・・・・・・・こういう所が謎なんだよね)」

「(同感・・・・・・・・)」

「れ、レミ姉ちゃん。それっていつ終わるの？」

永遠の謎であろう話題を忘れようとして、龍亞がレミさんに質問した。

「うゝん・・・・・・・・洗濯してすすぎして、脱水・乾燥もするから・・・・・・・・」

1時間は回りっぱなしだね」

「・・・・・・・・」

3人とも、生きて帰れるかな・・・・・・・・

「・・・・・・・・龍可、部屋に戻って掃除しよう」

「・・・・・・・・そうだね。私も服の洗濯とかしないと」

くそんなこんなで1時間後く

「は〜い♪みんな綺麗になりました！」  
ひと段落して龍亞と机でデュエルしていたら、レミさんが洗濯を終わったつと云ってきた。

「~~~~~」

「~~~~ど、どつちが前だ~~~~」

「あ、脚が~~~~ふらつく~~~~」

フラフラの足取りでレミさんの後ろから3人が部屋に戻ってきた。洗濯された服は染み一つなく、文字通りピカピカに光っているという言葉がふさわしいぐらい綺麗になっっていた。

「.....ご愁傷様です」

「龍亞~~~~、それ言うんだった止めてくれよ~~~~」

「無理です」

プルプル♪

「あつ、私だ」

携帯が鳴ったのでレミさんが相手と連絡する。

「もしも『レミ!!!何しているのよ!!!もうお店がオープンする時間だよ!!!』あつ!ごめん!!祈ちゃんは?!」

『もうこっちに来て手伝ってもらっている!!早く来て!!お客さんの数が物凄いいから!!』

「分かった!!」

「どうしたんだ?」

携帯を切ったレミさんにスバルさんが何があつたのか聞いた。

「今日、奏の店、特売セールの日だよ!!」

「あつ、だから昨日、遊輝が出掛けていたのね」

「／／／／恥ずかしかつたよ．．．．みんなにこんな格好見られてさ」

「あとは今日は売るだけなんだけど、奏の両親が風邪で寝込んでしまったのよ」

「じゃあ店を休めばいいじゃん!!」

「龍亞君、カップケーキは消費期限がすごく短いよ。特売で大量に作ったカップケーキを今日売らなかつたら奏の店が上がったりよ」

「おいちよつと待てよ、まさか．．．．．」

「そう!みんなも手伝って欲しいの!!!」

「ええ!!!また!?!」

またつて言うの?前はレミさんが暴走して、レミさん以外がメイド服になって働いて．．．．．

／／／／／ダメ．．．私もメイド服を着せられたから、だんだん恥ずかしくなってきた。

「と言うわけで、みんな行くぞ!!」

「おお!!」

「こんな格好で行けるかよ!!」

「そうだそうだ!!」

「．．．．．延長したい?」

「行きます!!」

「すいませんでした!!」

レミさんの脅しに全力で土下座する3人。もう哀れにしか見えない．．．．．でも、逆らったら私も着せられるから助けられないんだよね．．．．．

龍可                    side                    out

遊輝                    side                    | (奏の店                    裏口) |

「／／／／／恥ずかしかったよ．．．．．」

「／／／俺、これで恥をかくの何度目だ？」

レミが大通りを通って奏の店に行くから、途中で通行人がこつちを良く見る。しかも陰口で「あのドレスを着た女の子は誰だ？」とか「あのメイド服みたいな服を着た女の子、可愛いね」とかいろいろ言われた。もう嫌……………

「奏!!開けて!!」

裏口の扉をどんと叩くレミ。直ぐに鍵が開く音が聞こえ、順々と中へ入っていく。

「遅いよ!!何していたのよ!!」

「洗濯していた!!」

「???洗濯って、そんなに量が多かったの?」

「……………奏さん、何も知らない方が良いですよ」

龍可が奏の耳元で囁く。そうだ……………あれを知ったら地獄だぞ……………

「そう?それより早くしてよね!!」

「じゃあ響と遊輝はカウンターで接待!!」

「また?!?!メイド服の時も私接待したじゃん!!」

「インパクトは大事だからね!!スバルと龍亞君はビラ配りよろしく!!」

「俺また大通りに行くのか?!?!」

「目立つのが一人いるよ!!あとは私と龍可ちゃんと祈ちちゃん、奏のお手伝いね」  
 「みんな!!持ち場に行つて!!」

裏口からビラを持った龍亞と、かなり足取りが重そうなスバルが大通りを目指して歩き、奏達は作業場に行く。

となるともう……………

「……………行くか」

「……………はあくカウンターなんか嫌だよ」

俺たちは作業場の隣の廊下を渡り、そのまま店のカウンター前に行く。

カウンターにはショーケースがあるんだが、既に半分ぐらいのカップケーキがなくなっていた。

「//////お、お待たせしました」

「おお!!!君はメイド服で働いていたいつかの女の子!!!」

「何!?!」 「あの子が来たのか!?!」 「早く店に入れさせてくれ!!」

……………こうなるんだから嫌なんだよ(涙)。誰一人、俺を男として見てくれない……………

「今日は紫色のメイド服みたいなドレス!?なかなか似合うね!!」

「おまけに帽子もかぶって、魔法使いみたいだな!!」

「／／／／／す、すみませんが、後ろのお客様がお待ちですので、ご注文をお早めにして欲しいのですが……」

「そうだそうだ!!」 「お前一人の物じゃないぞ!!」

「……いつから俺は物になったんだよ……」

「／／／あ、ありがとうございます」

「君も着物美人だね!!また来るね!!」

「……響も響で大変だな……」

「お嬢さん!!このカップケーキ5つ!!」

「……遊輝もでしょ……」

「はあ……」

遊輝 side out

龍亞 side

うくん、お店に残っているいろいろイタズラしたかったなく。小麦粉と砂糖を遊輝の服に掛けたら、また洗濯出来たのにく。店帰ったら考えるか!

「龍亞、何しているんだよ……早くピラ配れよ!」

「あっそうだった」



色々考えたたらスバルに注意されたよ〜。スバルにも何かイタズラしたいな〜。と、仕事仕事。

「どうぞ〜。今日は特売ですよ」

「あらそう。後で立ち寄ってみようかしら？」

「ありがとうございませ〜」

「君、その被り物どこで買ったの？」

「いや、これは………(汗)」

まさかの被り物を聞いてくる人がいるとは………

そんな事思っていたら………

「ほら！さっさと渡しやがれ!!」

「うわっ!!」

後ろで大きな男の人が男の子を飛ばして行った。

何あれ!?!酷い!!

「だいたいお前みたいなのがこの店の超限定のプリンを買うなんて100年早いんだ

よ!!」

「うわあああ!!!」

「………龍亞、今の見たな？」

「見たよ。放っておけないよ」

「よし、行くか」

ピラをそこらへんに置いて、男の子を泣かせた不良の元に行く。

「おい」

「ああ?」

ボカッ!!!

スバルが振り向いてきた不良の顔面に一発殴る。突然の事できに反応出来ず、素直に受けた不良は、身体を飛び跳ねて鼻を抑えて痛がる。

いたそうだな・・・手も甲冑で覆われているから余計だよ・・・

「くそっ!!てめえ!!何をしやがる!」

「それはこっちのセリフだ!!こんな小さな男の子を泣かすな!!」

「こいつがさつきと動かずにいるから動かしたただけだ!!」

「じゅ、順番通りに並んでいただけだよ!!」

「順番通りに並んでたく?元々、俺が先に並んでいただろうが!!」

「そ、その後何処か行つたじゃん!!」

「はっ、関係無いな!!」

「・・・だつたらデュエルで決めよう」

俺はたまたま持ってきてたデュエルデスクをセットする。

「俺が勝ったら、この子に謝る。お前が勝ったらどうする?」

「ふん!じゃあプリンを買えなかった弁償代でも払って貰おうか!!」

「龍亞、大丈夫なのか?」

「大丈夫。直ぐに決める」

「デュエル!!」

「デュエル!!」

不良

LP

4000

龍亞

LP

4000

「先行は貰うぜ!!ドロロー!」

不良

手札

6枚

「重層武者ーベン・ケイを召喚!さらにカードを1枚伏せて魔導師の力、デーモンの斧、アサルト・アーマーをベン・ケイに装備!」

重層武者ーベン・ケイ 攻5000↓3800

「こ、攻撃力3800・・・」

「これでターンエンド!」

不良

手札

1枚

LP

4000

【モンスターゾーン】

重層武者ーベン・ケイ 攻3800

〔魔法・罨ゾーン〕

伏せカード 1枚

魔導師の力 (ベン・ケイ)

デーモンの斧 (ベン・ケイ)

アサルト・アーマー (ベン・ケイ)

「(奴がベン・ケイより攻撃力を高いモンスターを出せば、ミラーフォースで返り討ち！逆に守備表示で出せば手札の流星の弓ーシールでダイレクトアタックを決める！俺の勝ち揺るぎないぜ!!)」

「俺のターン！ドロー！」

龍亞 手札 6枚

あつ、決まった。本当にこのデッキってパーツが揃えば1k1111出来るよね。

「魔法カード、召集の聖刻刻！デッキから聖刻龍ートフェニドラゴンを手札に加えて、そのまま特殊召喚！さらにトフェニドラゴンをリリースして、聖刻龍ーシユウドラゴンを特殊召喚！リリースされたトフェニドラゴンの効果で、デッキからエレキテルドラゴンを守備表示で特殊召喚し、シユウドラゴンの効果！手札の聖刻龍ーアセットドラゴンを

リリースして、伏せカードを破壊！そしてリリースされたアセットドラゴンの効果で2体目のエレキテルドラゴンを特殊召喚！」

エレキテルドラゴン × 2 攻／守 2500／1000 ↓ 0／0

「間違いだつたな！伏せカードを破壊するんじゃないやなくて、魔導師の力を破壊するべきだろう!!攻撃力0じゃ、ベン・ケイに勝てないぜ!!」

「Lv6のエレキテルドラゴン2体でオーバーレイ！」

「なっ!?エクシーズモンスターだど!?!」

☆6 × ☆6 || ☆6

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！聖刻龍王ーアトウムス!!アトウムスの効果！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて、デッキから銀河眼の光子竜を攻撃力と守備力を0にして特殊召喚！」

聖刻龍王ーアトウムス OVR 2 ↓ 1

銀河眼の光子竜 攻／守 3000／2500 ↓ 0／0

空の間に銀河が出来て、その中からプラチナがゆつくりと舞い降りてきた。

『……………』

何かプラチナが物凄く言いたそうな顔つきをしている。

ごめん。俺、精霊が見えないからプラチナが言いたい事が分からない。

「さらにアトウムスをゲームから除外して、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン  
を特殊召喚！」

えっと、今の俺のフィールドはさつき出したレッドアイズ、攻撃力0のプラチナにシ  
ユウドラゴンか。うんもう良いか。龍可と違って、俺はオーバーキルを狙いには行かな  
いから。

「ど、どれだけお前がモンスターを並べても俺のベン・ケイには叶わないぜ！」

あれ？プラチナの効果知らな・・・あつ、そうか。プラチナは一般ではまだ出  
回っていないから、遊輝しか持っていないんだ。

「バトル！銀河眼の光子竜でベン・ケイの攻撃！この瞬間、銀河眼の効果発動！この  
カードがバトルする時、このカードとバトルするモンスターをバトルフェイズ終了まで  
ゲームから除外する！」

「な、何だ?!？」

プラチナがベン・ケイに近づいたところで、ベン・ケイとプラチナが消えて行く。

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンとシユウドラゴンでダイレクトアタック  
だ!!！」

不良

LP

4000↓0

WIN

龍亞

LOS

不良

「勝ったよ。約束は守ってもらおうよ」

デュエルデスクを直して不良に詰め寄る。もちろん、泣かされたあの子も一緒に。

「く、くそ………覚えて」

「グラビティロック！」

「ゴホツ!!」

「たく………謝れって言っているだろ」

「か、身体が重い………」

「お前が謝るまで身体はその場所から一生動かせないぞ」

身体の周りに大きな岩で動きを防がれた不良にスバルが持っていた大剣を首に突きつける。

「ぐ………す、すいませんでした」

「よし………」

指をパチンと鳴らして、不良の周りにある岩が消えていく。不良は「覚えていろよ!!」とか言っただっか行ってしまった。

「ふう、龍亞、ご苦労様」

「スバルもありがとう！俺一人だったら、絶対逃げられていたよ！」

「あ、あの……」

「うん？どうしたの？お礼なら良いよ」

「い、いえ、その、あなた……」

「？俺？」

俺たちが助けた男の子がスバルをじつと見る。

「……」

「??あ、この格好か？ちよつと訳ありだな。カオス・ソルジャーの」

「やっぱりそうだ!!カオス・ソルジャーだ!!」

「へっ？」

「みんな!!!ここにカオス・ソルジャーがいるよ!!!」

その男の子は後ろに振り向き声を張り上げて、男の子の友達らしい子達が一斉にこつちに振り向いた。

「ほんとに!?!」

「あのカオス・ソルジャーがいるの!?!」

「うわあ!!!本物だ!!!」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ!!!」



何が起きたのか良く分からないスバルはテンパる。そんなのをおお構いなしに、スバルの周りにどんどん男の子を中心に集まってきた。

「……………あゝ分かった。」

「スバル、多分この子達、アカデミアの小等部の生徒だよ」

「しよ、小等部?」

「うん。確か小等部の低学年のクラスを中心にカオス・ソルジャーがブームになっていたんだよ」

「な、何でカオス・ソルジャーがブームになるんだ!?!」

「龍可がカオス・ソルジャーを中心に使ったデッキで、低学年の子達にデュエルを教えたのがきっかけだよ」

アカデミアの小等部の授業でたまに、上級生が下級生にデュエルを教える交流会みたいな物があるんだけど、その時に龍可が珍しくオーバーキルもl k i l l も狙わずにカオス・ソルジャーばっか使っていた。最後の方になったら、カオス・ソルジャーもかなり息が上がっていたけど。

それで、小等部のそれも男子を中心にカオス・ソルジャーがかなりのブームになったんだよ。カオス・ソルジャー自体はとても高価なカードだから、龍可は低学年の憧れの的になったんだ。

「わああ!!!本物だ!!!」

「握手してください!!!」

「ねえ!!その大剣で何か切って!!」

「と、とりあえず龍亞!!助けてくれ!!」

「さうとと、俺はビラ配りをしないと!」

「る、龍亞!!!」

「カオス・ソルジャーさん!!僕とデュエルしてください!!」

子供達に人気のカオス・ソルジャーは置いといて、ビラ配りするぞ!!!

龍亞

side

out

龍可

side

「はい龍可ちゃん!このケーキをショーケースに入れて!」

「分かりました」

「祈ちゃんはこのケーキをあそこに!」

「は、はい!」

「レミ!!クッキーが焼き上がるまで後何分!？」

「あと2分だよ!!」

奏さんのお店の作業場で私たちは慌ただしく動く。

予定していたクッキーの量があつという間に完売してしまつて、奏さんが大急ぎで次のクッキーを作つたり、ショーケースにケーキを並べたりする。

「遊輝、ちよつとごめん」

「あつ、どうぞ」

お客さんの接待している遊輝に少し立ち退いてもらつて、ショーケースにカップケーキを並べる。

やっぱり奏さんところのカップケーキっていつ見ても美味しそうだよね。作業場にいたら甘い香りがすうくと鼻に抜けていくもの。

「奏さん。このケーキ入れました」

「は〜い。じゃあ次に祈ちゃんと一緒にこのクッキーの包装をお願い!作業用の手袋を付けてクッキーを入れてね」

「分かりました」

作業場の奥でキッチンから出た美味しそうな臭いするクッキーを祈ちゃんに入れていく。

「奏さんのクツキーって本当に美味しそうですね」

「そうだよ。でも、これで本人が納得しないのが凄いや」

「そうだ「誰か!!ちよつと来て!!」?何かあったのでしょうか?」

「奏さん、見に行つても良いですか?」

「お願い!私もレミも今、手が離せないから!!」

「分かりました。祈、行こう」

「はい」

手札を外して、お店の入り口に見にいくと、遊輝とお客さんさんが何か揉めていた。

「だから僕と一緒にデートに行こう!!」

「だから行きません!!それに俺は」

「そんな事別にいいじゃないか!!ほら!!君と一緒に出掛けたい人がこんなにもいるよ

!!

「.....」

また.....これで何回目なのよ?

「あつ!龍可ちゃん!祈ちゃん!遊輝を連れ戻して!!」

「ひ、響さん一人で無理なですか?」

「私一人で出来たら、既に解決しているよ!!だからお願い!」

「さあ!!これから二人一緒にドライブに行こう!!そして、このまま僕と結婚しよう!!」  
 ブチツ!!!私の何かが切れた.....

「.....祈」

「は、はい!!」

「この件は私一人で解決するから仕事に戻って」

「えっ、で「いいから.....」は、はい!!」

祈が作業場に戻った事を確認して、遊輝を連れ出そうとしているお客さんの所にいく。

「すみませんが、お店の店員を連れて行かないでください。もし連れて行くな  
 ら.....」

私はデツキをデスクにセットした、デスクを起動する。

「良いだろう!君に勝てば、この子と一緒にドライブ出来るんだ!!」

「デュエル!!」

「デュエル!!」

龍可

LP

4000

男

LP

4000

「僕のターン、ドロー!」

男

手札

6枚

「僕は切り込み隊長を召喚!切り込み隊長の効果で、僕は手札からチューナーモンズ

ター、ソード・マスターを特殊召喚する！Lv3の切り込み隊長にLv3のソード・マスターをチューニング！シンクロ召喚！C・ドラゴン！」

C・ドラゴン 攻2500

「僕はおろかな埋葬を発動して、デッキからネクロ・ガードナーを墓地に送り、ターンエンド！」

男 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

C・ドラゴン 攻2500

【魔法・罨ゾーン】

なし

えっと、奏さんとレミさんが言ってたわね。「店員（女装した遊輝）を連れて帰ろうとする愚か者は制裁を加えよ」って……じゃあ殺っちゃおう！」

「私のターン！ドロー！」

龍可 手札 6枚

「魔法カード、ガガガ・ゲット！デッキからガガガマジシャンを特殊召喚！さらにガガ

ガガールを召喚！」

ガガガマジシャン 攻1500

ガガガガール 攻1000

『龍可ちゃん……まさかあのコンボ決めるつもり？』

手札から出てきたパールが何かを決めていた。

「うん。決める」

『あれはあまりにも酷いのでマスターが封印しているのですが……』

「私はね……遊輝を連れ去ろうとしている馬鹿が許せないの（二

コツッ）」

『(?!?!?)お、怒っている!?!もしかして彼氏が誘拐されそうになって怒ったの!?!』

『(パール、誘拐は違うぞ……)』

「!!! (る、龍可(ちゃん)の後ろに三幻神がいる!!!)」

「な、何だ……この圧倒的なプレッシャーは……」

どうやら店員2人、そしてデュエルしている男も野次馬も龍可が怒っている事に気づいた。野次馬の中には逃げ出す物もいる。それだけ今の龍可は怒っているのだ。それもそうだ。大好きな彼氏が女装しているとは言え、見知らぬ人にいきなり結婚なんて言われたら、誰だって理性はぶっ飛ぶだろう。

「ガガガマジシャンの効果でレベルを5、ガガガガールの効果でガガガマジシャンと同じレベルにするね(ニコッ♪)」

ガガガマジシャン ☆4↓☆5

ガガガガール ☆3↓☆5

「Lv5のガガガマジシャンとガガガガールでオーバーレイ(ニコッ♪)」

☆5 × ☆5 || ★5

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築して、No, 33 先史遺産―超兵器マシユ―マックをエクシ―ズ召喚(ニコッ♪)」

No, 33 先史遺産―超兵器マシユ―マック 攻2400

「まずは素材となったガガガガールの効果で相手の特殊召喚したモンスターの攻撃力を0にするよ(ニコッ♪)」

「何だと?!?!?」

C・ドラゴン 攻2500↓0

「マシユ―マックの効果発動(ニコッ♪)オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて、モンスター1体の今の攻撃力と元々の攻撃力の差だけ、相手にダメージを与えてこのカードの攻撃力を与えるよ(ニコッ♪)」

「なっ?!?ダメージと攻撃力上昇だと?!?」



No, 33 先史遺産―超兵器マシユ||マツク OVR 2↓1

男 LP 4000↓1500

No, 33 先史遺産―超兵器マシユ||マツク 攻2400↓4900

「ぎゃあああ!!!」

「まだだよ(ニコツ♪) 装備魔法、エクシーズ・ユニットをマシユ||マツクに装備して  
攻撃力を1000ポイント上げるよ(ニコツ♪)」

No, 33 先史遺産―超兵器マシユ||マツク 攻4900↓5900

「速攻魔法、リミッター解除を発動(ニコツ♪ニコツ♪) マシユ||マツクの攻撃力を2  
倍にするよ(ニコツ♪ニコツ♪)」

No, 33 先史遺産―超兵器マシユ||マツク 攻5900↓11800

「こゝ、攻撃力11800?!?!」

完全に狂気とかした龍可。女装した彼氏を連れ去ろうとした馬鹿を徹底的に殺ろうとする。

「バトルでマシユ||マツクでC・ドラゴンに攻撃(ニコツ♪ニコツ♪)」

「ぼ、墓地のネクロ・ガードナーの効果発動!!このカードをゲームから除外して、この  
攻撃を無効にする!」

遊輝を連れ去ろうとした馬鹿はこの攻撃を無効にして安心する。これでもうこのモ

ンスターは破壊されるだろうと。

だが………これが自分の首をさらに締める事になると直ぐに分かる。

「速攻魔法、ダブル・アップ・チャンス（ニコツ♪ニコツ♪）モンスター1体の攻撃が無効になった時、そのモンスターの攻撃力を2倍にして、もう1度だけバトル出来るよ（ニコツ♪ニコツ♪）」

「?!?!」

「さらにおまけで速攻魔法、バイテンション（ニコツ♪ニコツ♪）モンスター1体が2回目のバトルをする時、攻撃力をさらに2倍に出来るよ（ニコツ♪ニコツ♪）さあ、マシユマツクの攻撃力はいくらかな〜♪♪??」

No, 33 先史遺産―超兵器マシユマツク 攻11800↓23600  
↓47200

「あつ………あつ………」

「マシユマツク!! 大事な人を奪おうとした馬鹿に攻撃!! ヴリルの火!!」

それはそれはもうとてつもなくでかい巨大な火の玉が攻撃力0のC・ドラゴンに落ちたとき。

No, 33 先史遺産―超兵器マシユマツク 攻47200

C・ドラゴン 攻0  
 男 LP 1500↓45700

WIN 龍可 LOS 男

【この小説の最高攻撃力、オーバーキルをこの子はまた更新しました】

龍可 side out

遊輝 side

「これで私の勝ちね（ニコツ♪土コツ♪）」

「(ぎ)、(ぎ)(ぎ)(ぎ)、ごめんなさい!!!!」

俺を連れ去ろうとした男は龍可に!!!!土毛座して、直ぐに店から立ち去った。これを見た野次馬共もついでにいなくなる。

・・・・・・・・・・・・・・・・怖かった・・・・・・・・

「あゝ・・・・・・・・龍可ちゃん・・・・・・・・」

「なくに?」

「……………いつの間にか元通りになっている。」

「店員を連れ去ろうとした愚か者には制裁を加えよって言ったけど、お客さんまで帰したらダメだよ」

「えっ?」

そう、さっきの龍可のオーバーキルのデュエルを見たお客さんさんが龍可に恐れ帰ってしまったのだ。これだと昨日作ったケーキヤクツキーがまだそれなり残っている、奏としてはかなり困る。

「……………お客さん呼んできましようか?」

「良いよ。もうすぐ龍亞君とスバルが帰ってくるからその時にお客さんを呼んでもらうよ」

「たっただいま〜!」

ピラ配りを終えた龍亞がタイミング良く帰ってきた。うん?スバルは?

「龍亞君、スバルはどうしたの?」

「カオス・ソルジャーならもうすぐ子供達を連れて来るよ!」

「……へっ?」

何を言っているのか分からず、俺たちは情けない声を出す。その時……………

「た、助けてくれ〜」

「待つてカオス・ソルジャー！」

「僕とデュエルしてよ！」

スバルがたくさんの子供達を引き連れて帰ってきた。

「?!?!スバル!!これ何?!」

「あ、アカデミアの小等部の子達だよ」

「あつ、もしかして、みんな低学年の」

「あつ!!龍可さんだ!!!」

「ちよつ、ちよつと!!!」

スバルに群がついていた子供達が今度は龍可の方に集まる。一体、何が起こっているんだ?

「俺、休憩に戻るね」

「ちよ、ちよつと龍亞君!!説明して!!」

「いいじゃん!!お客さん連れて来たんだし!!」

「この子達ケーキ買うの!?どう考えてもスバルと龍可にしか群がつて無いんだけど!!」

「大丈夫。さつきこの子達に、『ケーキ買ったら、カオス・ソルジャーと一回デュエル

出来るよ』って言ったたら、みんな着いてきたよ!!」

「……こいつは商売上手なのか、ただのイタズラ好きなのかどっちなんだ……」

「あつ!」

「うん?」

「お姉さん、すつごく美人だね!!」

グサツ!!!

遊輝 LP (精神) 4000↓2500

「ほんとだね!!それにこのドレスも可愛いね!!」

「こんな綺麗な人。私初めてみたよ」

グサツ!!!グサツ!!!

遊輝 LP (精神) 2500↓100

「お姉さんってファッションモデルとかしているの?」

「し、していな「してるよ!!」る、龍亞!!」

龍亞が何か雑誌を持って出てきた。

ま、まずい!!!あれはダメだ!!!

「ほら!!このページにお姉さんがいるよ!!」

「すつごい!!!これ、超有名ファッションデザイナー監修の雑誌だよ!!!」

「お姉さんって世界的に有名なモデルさんなんだね!!!」

ドカーカーカーン!!!

遊輝 LP (精神) 100↓110000

「う、うう~~~~ (涙)」

「……………やっぱり最後は龍亞君がとどめをさすのね……………」

もう俺、完全に女としか見られてない……………」

「お姉さん!!どうやったたらファッションモデルになれるか教えて!!」

「ご、ごめん!!このお姉さん、ちよつと疲れているから、奥の部屋で休憩させてくるね

!!」

奏に引つ張られ、奥の作業場に連れ戻されました……………」

純粋な子供の発言は心に響く……………もう俺の男のプライドが粉々に散ってしまったよ……………」

ー (その日の夜) ー

「みんなありがとう!おかげで助かったよ!!」

無事にお店が終わり (俺の精神は崩壊しているが) みんなで夕ご飯を食べている。

「久しぶりに売り上げが伸びたよ!!」

「やっぱり女装した遊輝の力は偉大だね!!」

「う、うううううううう(涙)」

「龍亞、今それを言うのはやめよう……」

「遊輝が哀れだよ……」

響が背中をなすつてくれる。その時……

「あつ!」

バシャーン!!!

「あつ……」

「ご、ごめんなさい!!足がつまずいてしまつて」

祈が近くのロープに足をつまずいて、手に持っていたコーラが背中を中心に濡れてしまった。

「……これって(汗)」

「あくあく♪まくた汚れちやつた♪」

「!!俺帰るね!!」

危機感を感じ、即刻店の浦口から出て、ダツシユで帰る。もう恥ずかしいなんて言つてられない!!あれに入るなんて絶対に嫌だ!!!



「嵐風術くストーム・バインドく!!」

「えっ!?ちよっ!?ちよっと待って!!」

突然上から風の竜が出てきて、俺を飲み込もうとする。

一度目は避けただけど……

「無駄よ!!ストーム・バインド!!」

「!?っ、追尾!」

「それだけじゃないよ!!」

「?!?足拘束されている!!」

追尾機能じゃなくて、拘束機能もあるだど!?

そのまま飲み込まれて、捕まえられました。

「さくてと♪洗濯の準備をするか!」

家に連れ帰られ、まだあった巨大な洗濯機に怯える。

「ねえレミ」

「何?」

「ちよっと鬱憤ばらしして良い?最近身体動かさなくてイライラしているの?」

「良いよ。どうせ濡れるし!!」

「やった!!じゃあ」

「ま、待て響!!」

「アイスフオール!!!」

上空に大量の雪が降ってきて、そのまま俺の身体中心に積もっていく。やめてくれ!!  
死ぬ!!!

「出来た!!!雪だるま!!!」

「すっげえ……こんな時期に雪だるまなんて出来るんだ……」

【※アイスフオール……ウオーターフオールをさらに進化したバージョン。今回はなかったが、足を先に凍らし、その上から大量の水分を含んだなかなか溶けにくい雪を降らせ、対象の相手を雪だるまにする。ちなみに、溶けるか炎を当てて溶かせば良  
いが……】

「さぶ!!で、でもこれくらいなら太陽で……」

身体の体温を上げて、手の部分を先に溶かし、太陽を作って溶かしていく。

ちくしょう……本気で雪だるまにされたよ……

「あつ、遊輝の雪だるまが溶けてきたよ」

「追撃のウオーターフオール!!!」

ザバーン!!!

【このように、溶かしていても追撃が来るといふ恐ろしい技だ】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何で俺は今日、こんなに濡れるんだよ・・・

「あくあ。ビショビショだよ」

「よし、洗濯するぞ!!」

!!!!  
忘れてた!!!

「そりゃ!!」

「うわっ!!」

「洗剤と柔軟剤を入れて♪スイッチオン!!!」

ウーン・・・・・・・・ガガガガガ  
!!!!!!!

「わあああああ!!!」

!!!!!!!

そうして、今日も地獄の1日が終わる・・・・・・・・

## 番外編 軽音部のハロウィン

遊輝 side

「トリックオアトリート!!」

「はくい、今あげるからね」

アカデミアに来たモンスターやお化けなどに仮装した小等部の子達が俺たちにそう言ってきたので、響が奥から準備をしていたお菓子を用意する。

「どうぞ。軽音部は奏と遊輝が作ったカップケーキよ」

「うわぁ・・・美味しそう・・・」

「ありがとう!!」

カップケーキを貰った小等部の子達はみんな笑顔を作り、手を振って別のクラブのところまでいく。

本日、10月31日はハロウィン。元々はケルト人が秋の収穫を祝って、悪霊などを追い出す儀式的な行事だが、いつの間にかアメリカ発の年間行事みたいなことで定着していった。この日はヴァンパイアや魔女に仮装した子供達が色々な家に回って「トリッ

クオアトリート！（お菓子をくれなきやイタズラするぞ！）と言ってお菓子を貰ったり、カボチャをくり抜いてランタンを作ったりしてみんなで祝う。

んでもって、本日は土曜日。授業はないのだが、せつかくのハロウィンなのでみんなで祝おうという校長の発案の元、小等部は色んな部活を回ってお菓子をもらい、中等部や高等部は部活動を中心にしてお菓子をあげたり何か催し物をする、「第2の文化祭」みたいなノリで皆やっている。俺たち、軽音部も午後からハロウィンパーティーと題してコンサートをやろうとしている。

「茜く、遊輝く。そろそろ交代してよ。私も準備したいんだから」

お菓子を配っていた響が練習するために交代を要求してきた。だが……

「嫌だ!!」

「なんでよ!?!私朝からずつとお菓子配ってたのよ!?!」

開口一番、俺が響に言ったのは「嫌だ」という3文字。理由?そんなの決まってるじゃん……

「/////////こんな恥ずかしい格好で出られるわけねえだろ!!!」

俺が表に出るのを躊躇ってる理由……竹箒に濃い赤色でデザインされた黒い魔女帽子、裏地がピンク色の黒色のマントと同じく裏地はピンクで黒色のスカートとワンピースみたいな衣装に臍あたりに赤いリボン……俺が仮装しているのはゴース

トリックの魔女の衣装だからだ／／／／．．．．．なんでだよ!!!俺は男だぞ!!!スバルはゴーストリック・アルカードを着てるのになんで俺は魔女なんだよ!!!!!!  
「うるさいよ遊輝っち!!さっきまで練習していたんだから早く出ようよ!!」  
そう言ってゴーストリックの猫娘に仮装している茜は俺の服の襟を掴む。さらに後ろからきたゴーストリックの堕天使に仮装したレミとゴーストリックの人形に仮装した奏までもが何事かと思つてこつちに来た。

【皆の仮装した衣装を纏めると以下の感じ】

遊輝↓ゴーストリックの魔女

レミ↓ゴーストリックの堕天使

スバル↓ゴーストリック・アルカード

響↓ゴーストリックの雪女

奏↓ゴーストリックの人形

茜↓ゴーストリックの猫娘

「何してるの?」

「遊輝っちが外に出ようとしななんだよ」

「はぁ……順番ぐらい守りなさいよ。たった1時間ほどでしょ？」

「……………何言ってるんだよ!?! 1時間も立たされるんだよ!?! 恥ずかしいったらありやしない!!」

「うるさい!! そんなに文句言うならライブもその衣装で上がってもらおうよ!!」

「……………そんなの嫌だ!!」

「じゃあ行きなさい!!」

「……………うう……………」

レミに脅されてしまい、仕方なく茜と一緒に表に出る。響が裏に回って少し時間が経ったのだろう、すでにかなりの行列が出来ていた。

「トリックオアトリート!!……………って遊輝じゃん!!」

「……………る、龍亞!! 大声で叫ぶな!!」

しかも運悪く、その行列の先頭にいたのはガガキツドの仮装をした龍亞とガガガシスターの仮装をした龍可、調律の魔術師に仮装している祈、慧眼の魔術師に仮装していた恭輔たちだった。

「……………師匠、相変わらず女装した時は凄いですね、才能ですか?」

「……………そんな才能いらんないよ!! ていうか恭輔、痛い目で見ないで!!」

「ゆ、遊輝……………でも可愛いと思っちゃう……………」

「さ、さすがすみれさんですね……」

「祈つち、衣装を褒めたいのは分かるけど、今はその言葉慰めになってないよ（汗）これ、軽音部からね」

顔を赤くして、背中を丸めている俺の代わりに茜がカップケーキを龍可たちに渡す。すぐに龍亞の「あ〜ん」という声とカップケーキを頬張る音が聞こえてくる。

「やつぱりこの2人が作るケーキはいつ食べても美味しいな!!」

「そうね。カボチャの風味は残ってるのにそんなにカボチャ感を出してないあたりが凄いわ」

「お、美味しいです」

「ありがとうね。それで悪いのだけど、早く次に行つてくれない? 後ろが……」

「あつ……」

「早くしてよ!!」

「ケーキ食べたい!!」

後ろから小等部のヤジが飛び出してきたので、急いで別の場所へと向かっていった龍亞達。俺もこのまま「遊輝つち! 早く手伝つてよ!!」……出来なかった（涙）

（数時間後）

アカデミア・ホール会場）



．．．．俺、結局あの後一回も休憩させてくれなかった（涙）噂を聞きつけた中部・高等部の人達にも相手をするはめになった（涙）後ろで茜が「これで告られた回数は16回目．．．．」とかボソボソと呟いてきたのが心にグサグサと刺さった（涙）。

「何そこでコソコソとしてるのよ!!もうすぐ始まるよ!あんた、開幕ナンバーを歌うんでしょうが!!」

「．．．．俺の傷ついた心はまだ治ってない」

「何バカなことをいってるのよ!!早くマイクと旗を持って!!」

レミに急かされてしまい、「はぁ」とため息をついて壁にかけていた大きな旗を手に取る。今の衣装は軽音部の衣装．．．黒のTシャツにアカデミアの制服を腰あたりで袖の部分をつんだラフな格好だ。

『お待たせしました。15時開演の中部部軽音部によるコンサート、《LIVE FE  
S in Halloween》を開催いたします』

《ワアアアア!!!》

．．．．!!..♪♪~~~~~

ホールの幕が上がるのと同時に響のキーボードから響くピアノ音がホール全体を包む。それを聞いた観客はさらに盛り上がる。幕上がりきると開幕のヴォーカルを担当

した俺は旗を左手に持ち、肩にかけて前に出る。

- 1 Dragon night [SEKAI NO OWARI]  
 2 愛が叫ぶ方へ 【ポルノグラフィティ】  
 3 今夜月の見える丘に 【B'z】

「えく・・・今日は！」

《こんにちは!!!》

後ろでみんなが色々と準備をしている間に俺はマイクを持って観客とのMCを始める。

「今日は軽音部のライブに来てくれてありがとう!!開幕ナンバーを歌ったヴォーカル & ギターの遠藤遊輝です!!」

《イエエエエ!!!》

「開幕ナンバーは歌いましたが、こつから先はメインヴォーカルに任せますので、奏



- 6 たとえ どんなに 【西野カナ】
- 7 茜色の約束 【いきものがかり】
- 8 奏 【スキマスイッチ】
- 9 ダイバー 【KAN A BOON】
- 10 キミシダイ列車 【ONE OK ROCK】
- 11 Hello world 【BUNP OF CHICKEN】
- 12 オレンジ 【GREEN】

「えく．．．次の曲は、初めてのトライですが．．．まあぶっちゃけるとボーカロイドの曲です！」

《イエエエエエ》

スタンドからマイクを手にとって観客の歓声に伝えるようにMCを始める。その間に俺と響で次の曲の入りを確認する。

「とりあえず何から歌う？というところから始まって、えく．．．まあ結論を言うonyappari有名ところから歌おうと決まりました！」

《イエエエエエ!!!》

「それじゃ行くよ! 初音ミク!! 『千本桜』!!」

《オオオオ!!!》

.....!!

13 千本桜 【初音ミク】

14 マンピーのGスポット 【サザンオールスターズ】

15 空も飛べるはず 【スピッツ】

16 やさしいキスをして 【DREAMS COME TRUE】

17 Forever Love 【X JAPAN】

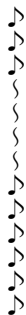
18 にじいろ 【絢香】

19 Dear WOMAN 【SMAP】

「それでは本日最後の曲です」

本日、ラストの曲の前に奏がマイクを持って1人で前に出る。俺もエレキからギターに持ち替えて奏のところにスタンドマイクを置く。

「季節的には少し早いですけど、星が綺麗に輝き、流れる季節です。まあ、それだけの理由で選びました。アーティストがデュエットなので、遊輝と2人で歌います。コブクロ、【流星】」



20 流星 【コブクロ】

『……僕たちは同じ星座だと 信じてるから』



最後の部分をレミと考えたアレンジでアコギを弾き終わり、観客の拍手に応え手を振る。

「以上、アカデミア中等部軽音部のコンサート、『LIVE FES in Hallween』でした!!ありがとうございます!!」

みんなが前に出てきて、肩を組み頭を下げる。観客の拍手が巻き起こり、その喝采の

まま幕が下りてくる。

（その夜 軽音部部室）

「「「「カンパ〜イ!!!」」」」

無事にライブも終わり、部室で成功を祝うのとハロウインを祝うためのパーティが始まる。みんな、オレンジジュースを片手に取って、ライブの時と同じ以上で乾杯をする。後ろには今日のために作っておいた料理も並べている。

「今日も無事に終わってよかったよかった」

「久しぶりに大人しくライブをした感じで新鮮だったよ」

「ここ最近は観客が多すぎたもんな。肩を凝るようなライブじゃなくてよかったよ」

「まあまあ、そんな話は置いといて、料理を食べるよ!!」

バンツ!!!

「みんな!!お疲れ!!」

「(ボボツ!) ゲホツ、ゲホツ・・・龍亞!?!何でいるんだ!?!帰ってたんじゃないのか!?!」

突然ドアが開いたことに驚いて飲んでいたオレンジジュースが気管に入ってゲホツ

ゲホツと咳き込んでしまう。部屋に入ってきたのはまだ仮装している龍亞たちだった。

「みんないるよ!!」

「遊輝、お疲れ様」

「師匠、今日も良かったです」

「ス、スバルさん」

「おう、祈も来たか。一緒に食べようぜ」

かぼちゃのスープを手にしたスバルが祈を呼ぶ。龍亞と龍可も後ろに並べてあるおかずを取りに行き、恭輔はレミたちと話し始めた。

「(ハロウィンか・・・俺が小さい時はここまで盛り上がらなかったけど、これはこれで楽しいなあ)」

「遊輝!!また仮装するよ!!」

「おう・・・?!?!?まさかまたアレ!?」

「あつたりまえじゃない!!みんな写真撮るよ!」

「嫌だ!!!何で自分から女物を着ないといけないんだよ!!」

「つべこべ言わずに着替えなさい!!!」

パチン!!!

「・・・つてああああ!!!勝手に着替えられてる!?!?」



「ほら!!写真撮るからみんな並んで並んで!!」

いつの間にかあのゴーストリックの魔女の衣装に着せられていた。他のみんなもあの一瞬の間に着せ替えられたみたいで仮装した衣装になっている。レミは手にしているカメラをカメラスタンドに立てて、俺たち全員を呼び集める。俺以外のみんなは皿を置いて写真の前に集まる。俺も諦めてみんなの輪の中に入る。

「はい行くよ!!」

写真のボタンを押して、レミがダツシユでみんなの輪の中に入る。数秒経った後、シャッターの切れる音が聞こえた。

後日貰ったその写真には仮装したらみんなの笑顔が写っていた。

## 4周年記念特別企画

## 第2回質問コーナー&amp;人気ラ

## ンキング

コホン、ええ〜では始めましょうか

遊輝「《遊戯王5D's 転生者と未来のカードたち》4周年特別企画!!」

龍可「質問コーナー&人気ランキング!!」

「「「「「いえええええええい!!!」」」」

レミ「何だかんだもう4年が経つのね・・・」

これやった時は高校3年で受験真っ只中だったのに、今は就活の準備真っ只中ですよ奥さん。

レミ「誰が奥さんよ!」

スバル「その間もいっぱい色んなことあったな・・・」

大抵がこことは関係ないことじゃん(汗)。俺のリアルが忙しい時とそうでない時の差が激しすぎるけど。

響「でも皆のおかげでここまで来れたじゃん!!」

正直、ハーメルンの読者様にこんなに読まれるとは思ってなかった。現時点(8月1

4日時点）でお気に入りが276件、UVが103、221だなんて……1年でここまで来るとは思わなかった。

奏「だからこそ、今回は久しぶりにやるのでしょ？」

新しいオリキャラも増えだし、龍亞・龍可も完全にこの小説ではレギュラー化したし。

祈「は、はい」

恭輔「僕たちは少ししかデュエルできてないですけど」

茜「ほんつとそう!!私なんかまだ3回よ!!」

文句言うな!!

龍可「でも最近、龍亞のデュエルが多い気がするの……」

龍亞「それは思うな。龍可のデュエル、ここ最近こそあったけど、第3章の後半、そ

こまで多くなかったし」

あれは……設定上仕方ないじゃん。

龍亞「まあそうだけだな」

遊輝「とにかく、1周年から4周年にかけて、またハーメルンに投稿を始めて1年、色々な方が質問を頂いたので一個ずつ答えたいと思います」

なお、人数の関係でアニメのレギュラーメンバーはその質問の時に呼びたいと思います。それでは始めましょう!!!

恭輔「今回の読み役は僕、成田恭輔がやります。まずはドロイデンさんから、2つ質問を頂きました。最初の質問はバンドメンバー全員に質問、『それぞれ一番トラウマなモンスターは?』」

遊輝「トラウマなモンスター?」

奏「一択」

「「「「アイズ・スプラッシュとサファイア・ドラゴン!!!」」」」

響「酷い!!!」

レミ「酷いも何も、あれが一番のトラウトよ!!」

茜「何で響つち戦ったら毎回濡れたり雪だるまにされるの!?!」

奏「風邪どころじゃ済まない時があるんだよ!!」

響「だつてくくく……自然となるんだし……」

龍亞「そういう響さんのトラウマモンスターって何?」

響「私？うくん……Zeroかな」

スバル「お前も使っているだろ」

響「使っているからこそだよ。スバルのZeroがどれだけ厄介な存在か……あつ!!、あと、ダーク・ロウ!!」

龍可「……確かにトラウマ級ですな」

龍亞「あれは酷かった……あのカード1枚でことごとく戦術を壊されていった」  
スバル「……まあ否定はしないな」

奏「それじゃ次！」

恭輔「続いてもドロイデンさんから、師匠と龍可さんのカップルに質問、『お互いこれだけは勘弁してほしい、もしくはこうして欲しい所はありますか？』」

「遊輝（龍可）の勘弁してほしいところ？」

龍可「うくん……私はこれかな？趣味の話を延々と続けないでほしい」

龍亞「分かる！遊輝ってあんまりしないけど、趣味の話をしだしたら本当に止まらな  
い！」

祈「そ、そうなんですか？」

遊輝「そんなに長いかな？」

レミ「長いというより・・・熱い（汗）」

奏「うん・・・」

遊輝「なんで!？」

スバル「この前のさ、ミスチルの話もスツゲエ長かったし」

遊輝「何を言うか!!あれはまだ続きがあるんだぞ!!脳梗塞になつてから」

くく（長いので割愛） くく

遊輝「・・・つてあつて」

バチコーン!!!!

遊輝「・・・」↑悶絶している。

レミ「長い!!!」↑ハリセン持ち

龍可「・・・ねっ?（汗）」

恭輔「た、確かに……(汗)」

茜「じゃあ遊輝つちが龍可つちに勘弁してほしいところは？」

遊輝「……O☆H A☆N A☆S H I (ボソツ)」

スバル「?何て？」

遊輝「O☆H A☆N A☆S H I……」

龍可「何で!？」

遊輝「もう……いつもいっしょにそうなんです(汗)」

レミ「いや、それは半分遊輝の自業自得みたいなどころあるわよ(汗)」

スバル「女はこういう所が怖いんだから言うことできるだけ聞いておいたほうが良い

ぞ(汗)」

遊輝「(ええく……何か俺が悪いみたいになってる(汗))」

龍可「次行こう！」

恭輔「次はメタルダイナスさんから全員に、『パックで当てて一番嬉しかったモンスターは?』」

奏「全員つて……どこまで?」

これが良く分からないんだよな……全員つて言つて、遊星たちを含めるのか……遊輝「別に含めたら良いんじゃないかね?」

まあ……いいか。じゃあ呼んでくるから先に答えておいて。

スバル「俺はそうだな……初めて当てたレアカードの『ギルフォード・ザ・ライトニング』」

遊輝「しつぷ……」

スバル「渋くて悪かったな!初めてレアカード当てた時は本当に嬉しかったんだぞ!」

レミ「そういう遊輝は?」

遊輝「えつと……この世界のパックは一つも買ってないから前世のパックでいったら、『調律』」

奏「ちよ、調律?」



遊輝「《シンクロン》とついたカードを持ってくるんだよ。あれはマジで嬉しかった、その時はシングル買いなんてしてなかったから」

龍亞「調律って……レアカードなの？」

遊輝「調律の当時の価値は……多分1000円近くいつてた気が……」

龍亞「マジで!？」

レミ「小等部の4人は？」

龍亞「俺は初めてのシンクロモンスター、『デスカイザー・ドラゴン』! デッキの関係上、使い道がなかったけど」

恭輔「僕も同じ理由で『大地の騎士 ガイアナイト』ですね」

祈「わ、私は『ジエムナイト・フュージョン』。このカードをきっかけにジエムナイトデッキを作りましたので」

龍可「私は『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』かな、初めてエースと言えるモンスターだったから」

レミ「皆、自分のデッキを作るきっかけになったカードが多いね。私は『ドラグニティ ナイトーガジャルグ』。あれだけなかなか当たらずに困っていたのよね!」

響「私は『ブリザード・プリンセス』かな、最初に当てた時から今もお世話になってるし!」

奏「私は『マスター・ヒュペリオン』。これが代行者パーミッションを組むきっかけになったわね」

茜「私は今のデツキの前のエースモンスター、『ダーク・クリエイター』。あれが当たった時は本当に嬉しかったなあ……」

呼んできたぞ。

遊星「待たせたな。質問は？」

恭輔「『パックで当てる一番嬉しかったモンスターは？』」

遊星「まずパックを買ったことがない」

クロウ「俺も、基本的に落ちていたカードでデツキを組んでいたな」

ジャック「俺もそうだな」

遊輝「……あく、この3人、サテライト出身だったわ(汗)」

アキ「私しか答えがないじゃない(汗)。そうね……『ギガプラント』かしら。あれのおかげで私のデツキは一気に強くなった感じがするわ」

遊輝「あく……トラウマカード……(汗)」

龍亞「遊輝はアキさんのギガプラントにことごとく苦しめられていたな」

レミ「じゃあ次行こう！」

恭輔「次もメタルダイナスさんから、シークレットシグナー全員に質問、『自分のエースモンスター以外で使ってみたい他のキャラのエースモンスターは?』」

レミ「これも範囲どこまでよ?」

さあ……とりあえず遊戯王シリーズに出てくるキャラだったら誰でもいいよ。

スバル「じゃあ俺から、俺は『E・HERO　ネオス』!」

茜「ネオスってスバルっちのお爺ちゃんのお切り札?」

スバル「そう!一回だけでも言って言っても使わしてくれなかった」

響「じゃあ次私!私は『スターダスト・ドラゴン!』」

奏「遊星さんのエース?何でまた」

響「あんなカッコいいモンスター、一度は使ってみたいじゃん!」

恭輔「分かります。遊星さんのスターダスト・ドラゴンはカッコイイし、見惚れます」

レミ「じゃあ私、私は『青眼の白龍』。一回でいいから使ってみたいわ……」

遊輝「何お前、『粉碎☆玉砕☆大喝采!』って叫びたいのか?」

レミ「そんな事は言わないよ（汗）」

奏「私は『ブラック・マジシャン』かな。あれも伝説で憧れのモンスターだね」

龍亞「ブラック・マジシャンはいいよね！」

恭輔「僕もあれは使ってみたいです！」

茜「遊輝っちは？どんなエースモンスターを使ってみたいの？」

遊輝「俺？うん……俺結構使ってるから……そう考えると『スターヴ・

ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』かな。あれだけはまだ使ったことがないから」

スバル「スターヴ・ヴェノムって最近出たあの融合のドラゴン？」

遊輝「そうそう、見た目も悪くはないし使ってみたいなと思うけど」

恭輔「では次、次もメタルダイナスさんから今度は師匠に。『原作またはアニメ以外でこれはダメだろうというオリカは？』」

遊輝「原作またはアニメ以外？難しいな……まずは『E・HERO マジカル・

ウイツチ』」

スバル「何でだ!？」

遊輝「魔法カードサーチは不味いだろ……。あとは使っているけど『壺の中の魔術書』かな。相手に引かせているけどやっぱりノーコスト3枚ドロローはダメだ」

レミ「ドロローカードはどこまでいっても強いからね……。」

遊輝「今パツと思いつくのはそれくらいかな……。もしかしたら思い出して「ああこいつも!」ってなるかもしれないけど」

茜「それじゃ次!」

恭輔「次は廻してさんから頂きました。シグナー全員に質問、『このメンバーで対戦する際にシグナー同士のデッキでやってみたい人はいますか?』」

「もしかしたら答えの解釈が間違っているかもしれないかも!」

遊輝「シグナー同士のデッキでやってみたい人?」

龍亞「俺は遊輝のデッキで遊星とデュエルしてみたい！シンクロとエクシーズのデュエルをしてみたい！」

奏「私は……響のデッキで響とかな」

茜「その心は？」

奏「普段の恨みを倍返ししたい」

響「ひどい!!」

レミ「私も右に同じく……」

スバル「俺は遊星さんのデッキで遊輝とかな。普段、シンクロなんて滅多に使わないから」

茜「響っちは？」

響「私はジャックで遊星さんだね！あのレッド・デーモンズを使ってみたいよ！」

ほい、遊星達連れてきたよ。

クロウ「シグナー同士でやってみたい人？そうだな……龍可のデッキを使ってみたいな。対戦相手はジャックで」

遊輝「以外々、何でまた？」

クロウ「あのデッキを回せるようになったら誰にも負けない気がする」

ジャック「おいクロウ!!それはつまり俺をボコボコにしたいということか!!」

クロウ「ああそうだけ。毎日毎日、仕事もつかずにコーヒーばかり飲んでる元キングをフルボッコにしたいぜ！」

ジャック「何だと!?!」

アキ「また……(汗)」

奏「アキさんは?」

アキ「私は……遊星のデツキを使って遊輝とかな。龍亞と一緒に考えただけど、私は慣れ親しんだシンクロで戦ってみたいわ」

レミ「違う違う。本当は大好きな遊星さんのデツキを使って、でしょ?」

アキ「／／／／れ、レミ!!な、何訳の分からないことを言い出すのよ!!」

茜「へえく……そういう関係だったんだ。これは恋のキューピッドの異名の持つ私の出番ね!」

恭輔「遊星さんは?」

遊星「遊輝のデツキは一時期借りていたからな……借りたいデツキならスバルだな。デュエルする相手はジャック」

祈「ス、スバルさんですか?」

遊星「普段はシンクロ召喚を軸にしたデツキだから、シンクロ以外のデツキでどこまでジャックに通用するかなと思ってな」

ジャック「同じ理由で俺は遊輝のデッキで遊星だな。スバルのデッキでも良かったが、俺は少し融合召喚を使っているから」

恭輔「最後は師匠と龍可さんですね」

遊輝「う〜ん・・・龍可のデッキで龍可かな？」

龍可「私は・・・遊輝のデッキで遊輝」

「えっ？」

龍亞「Wow・・・こんなところまでこのバカップルは一緒だよ」

「バカップルって言うな!!（言わないで!!）」

恭輔「次はsuraさんから頂きました。シークレットシグナーに質問、『自分が所持しているデッキ以外で使ってみたいカテゴリは?』」



レミ「じゃあ私から。私は同じ風属性でシンクロをテーマにしている『スピードロイド』！あれは一度使ってみたいね！」

遊輝「『スピードロイド』と言えば色んなところに出張して規制の噂が絶えないベイゴマックスさんがいますか？」

レミ「……早く次の新規カードを出してください」

スバル「次は俺だな！俺は戦士族テーマの『幻影騎士団』！普段融合ばかりだし、こういうところでもエクシーズモンスターとか使いたいしな！」

響「私は……憧れの『ブルーアイズ』とか『ブラック・マジシャン』だね」  
奏「私は『墮天使』かな。今の『終世』だと墮天使の要素は少ないから」

遊輝「ラストは俺か……色んなテーマ使ってるけどな……やっぱ新しい弾のカードを使いたいな。『水晶機巧』とかカードプールが増えたら『捕食植物』とか使ってみたいな」

恭輔「それでは次、龍南さんのキャラからたくさん頂きました。まずは主人公、駆さん、全員に質問、『無印、GXまでで対戦したいキャラは?』」

遊輝「無印、GX?」

スバル「俺は爺ちゃん!!全盛期の爺ちゃんとデュエルしたいぜ!」

祈「わ、私も十代さんです」

レミ「私はやっぱり遊戯さんだね。勝ち負けじゃなくて、どこまで自分のデュエルが通用するのか試してみたい」

茜「みたいモンスターはブルーアイズなの?」

レミ「やるんだったらやっぱり決闘王でしょ!」

龍亞「俺も遊戯さん!!決闘王と一度でも良いからデュエルしてみたいぜ!」

恭輔「僕もデュエルモンスターズの創始者、ペガサスさんです!」

響「私は海馬社長!!ブルーアイズを生でみたい!」

奏「私は・・・城之内さんかな、ブルーアイズばかり話題に上がってるけど、レッツ  
ドアイズも見てみたい気がする」

茜「私は丸藤亮さんかな。サイバー・ドラゴンってどれだけ凄いかこの身をもって  
知りたい」

龍可「……………私は天上院明日香さん。あの人の『機械天使』というテーマに興味があるわ」

ほい、連れてきました。

アキ「質問は聞いているわ。私はエド・フェニックス」

スバル「エドって……………D・HERO使いで爺ちやんのライバル？何で？」

アキ「単純にプロデュエリストって理由ね。私の実力試しつてところよ」

クロウ「俺はもちろん初代決闘王、武藤遊戯!!」

遊星「俺も遊戯さんだな。一度会った時はデュエルをしている余裕がなかったけど、もし今度会う機会があるならお手合わせをしてもらいたい」

ジャック「俺も決闘王、武藤遊戯だな。キングと名乗っていた以上、一度はデュエルしてみたい相手だな」

遊輝「(こう考えたら……………周りはデュエルバカばっか(汗))」

レミ「で、遊輝は？」

遊輝「えっ？うん……………タイタン」

龍可「……………誰？」

龍亞「知らない……………何でその人なの？」

遊輝「声を聞いてみたい」

龍亞「それだけ!？」

恭輔「それじゃ次、駆さんの恋人、留姫さんから全員に、『奏のお店のメニューの中で一番美味しいと思うメニューは?』」

奏「これ私パス」

祈「な、何ですか?」

奏「毎日のように試食させられているから飽き飽きしちゃう」

遊輝「正直、俺もパスしたいな……新作の度に味見をするからなんか『これが一番!』っていうのが決めづらい……」

響「じゃあ私から!! やっぱ定番のイチゴのカップケーキ!! カップケーキなのにイチゴの量がふんだんに使われているから!!」

レミ「私は……期間限定で販売してくれた夏みかなかな? あれはサツパリしていて

好きだったな」

スバル「俺はベターなチョコだな。奏の店のチョコのカップケーキはビター系が強いから。ああいうタイプのチョコのケーキはそんなに見かけないし」

恭輔「僕は生地がミルフィーユみたいな層になってサクサクしていたベリーのケーキです。あれは好きです」

祈「わ、私はブドウを使ったカップケーキです」

アキ「奏のお店のカップケーキって普通のカップケーキじゃないよね。普通のカップケーキはクリームとかで味付けしてあるけど、果物とか、普通のケーキと変わらない」  
奏「そこはお父さんのこだわりよ。『出来る限り、自然の物を取り入れたカップケーキを作ろうと』っていう主義だから」

茜「それが良いんだよ。砂糖の甘ったるいのより果物の甘さの方が断然美味しいよ！私は桃のカップケーキだね！」

アキ「私はあんまり行かないけど・・・チーズケーキかな？チーズのカップケーキなんて初めてみたわ」

遊輝「それじゃ・・・遊星さんたちは？」

遊星「行ったことないから分からない」

クロウ「毎日働いていてそんな贅沢してられない」

ジャック「ブルーアイズ・マウンテンだけで十分だ」  
遊輝「……………振った僕が悪かったです」

恭輔「次は駆さんの義妹、遙さんから、皆さんに。『自分自身にとってのヒーローは誰ですか?』」

祈「ヒ、ヒーローですか?」

スバル「俺は爺ちゃんだな。爺ちゃんの活躍もそうだったけど、小さい時も何度か助けてくれてザ・ヒーローって感じだった」

レミ「ヒーロー?呼べるような人いるかな……………」

響「ヒーローというより相棒ならいるんだけど……………」

レミ「私も……………」

遊輝「誰だよ?」

レミ「茜」

響「奏」

奏「相棒だったら私も響かな」

茜「あく、わかる気がする。レミっちは付き合い長いし」

レミ「でもヒーローって呼べるような人・・・いないな」

奏「私も・・・この人カッコいいとは思う時があるけど、この人がヒーローになつたと思つた事はないかな・・・遙ちゃんには悪いけど、これが私たち4人の回答だね」

恭輔「僕は師匠ですね」

龍亞「俺も遊輝！デュエルしている時はヒーローだよ！」

遊輝「時つてどういうことだよ!?時つて!？」

龍亞「だつてそれ以外は女らしい仕事」

ガゴン!!!

龍亞「・・・!!!」↑頭にコブ

レミ「(うんまあ、龍亞君の気持ちはよくわかる)」

奏「(部のメンバーの中で一番女子力高いからね)」

響「(掃除・洗濯・炊事・家事・子育て、何でもしているからね)」

スバル「んで、祈と龍可は？」

茜「龍可っちは聞かなくても分かるでしょ」

龍可「ヒーローでしょ……ヒーローだったら龍亞かな……」  
茜「えっ!!」

レミ「意外、何で？」

龍可「やっぱりダークシグナーの時かな。それと……」

レミ「それと？」

龍可「龍亞じゃないけど、遊輝ってヒーローというよりどっちかというとな、何でもこなせる人ってイメージの方が強い……」

遊輝「何で!？」

レミ「(……やっぱり皆そう思うんだな)」

祈「わ、私は……スバルさんです」

スバル「ふ……俺!？」

祈「や、やっぱり、色々と助けてもらったり教えてもらったりしたので……」  
響「それ分かるわ……、スバル時々良いことしてくれるし」

奏「この中で一番ヒーローっぽいのはスバルかもね」

龍可「最後は遊輝だけ……」

遊輝「う……ん……やっぱりあの人かな……?」

龍亞「誰々？」



遊輝「俺に剣道を教えてくれた師匠。結構若かったし、顔立ちも良かったし、優しかったし、色んな所で役に立つことを教えてくれたし、俺にとってはヒーローかな」

恭輔「では次、駆さんの同級生、香澄さんから皆さんに、『デュエルを始めたキツカケは?』」

龍亞「俺はやっぱテレビを見て!!デュエルってカッコ良いって思った!!」

龍可「私は龍亞に吊られてかな・・・」

スバル「俺、これも爺ちゃんだな。爺ちゃんの影響をめっちゃ受けているよ」

レミ「私はアカデミアの小等部に上がる前の誕生日プレゼントでお父さんからデッキリとデュエルディスクをプレゼントしてくれたことかな。今までは見てるだけだったけどそこからは自分でデュエルをやり始めたから」

奏「私は小等部に入った時かな。やっぱアカデミアに入った以上、デュエルはしなくちゃいけなかったし」

響「私も奏と一緒にかな。その時はまだお父さんと喧嘩してなかったから、ずっとピア

ノをしていたよ」

茜「私もアカデミアに入った時だね。入学する前からモデルとして仕事をしていました」

祈「わ、私は・・・何ていうか周りがやっていたから私もやろうって・・・」

恭輔「僕もそうですね。周りがデュエルをしていたので、自然と僕もその仲間に参加していききました」

遊輝「皆ちゃんとした理由があるんだな・・・」

龍亞「そういう遊輝は？」

遊輝「何だろうな・・・気づいていたら友達と遊んでいたし・・・俺は転生してきたものだから、やっぱりアニメに憧れてやったという記憶があるな」

龍可「テレビの影響って大きいわね・・・」

恭輔「それでは次、駆さんの親友、弘美さんから皆さんに、『麻醉銃でコナンの小五郎

「みたいなのをしたいなら誰？」

遊輝「アニメの質問来るとは思わなかった・・・(汗)」

スバル「誰だろうな・・・」

龍亞「俺は遊星かな。遊輝よりも遊星の方が楽しそうな気がする」

レミ「性格的にはそうかもね」

師匠「僕は師匠ですね。師匠みたいな声で歌ってみたいです」

レミ「私なら・・・何となくですけどすみれさんかな」

茜「お母さん？そんなにいいとは思わないけど・・・」

レミ「いや、声じゃなくて性格的に・・・」

茜「うちのお母さん、Sだからね」

奏「声か・・・楽しみたいんだったら男性の声がいいなあ・・・私、男性の力強い

歌を歌うと喉がやられてしまうから」

響「例えば？」

奏「最近だと・・・B' zばかり聴いているから稲葉さんかな？」

響「そう言えば最近やけにB' zの曲ばかりだね・・・私だったら逆に美しい

声の方がいいな・・・でも誰だろう・・・」

遊輝「美しい声ってまた難しいな」

響「楽しむんだったら龍亞君だけど」

龍亞「えっ!?俺!」

響「うん、あの声だったたら誰にイタズラしても龍亞君が全てしつぺ返しを受けるから」

龍亞「ひどい!!」

スバル「歌で言うんだったら俺は奏か遊輝だな。バンドのヴォーカルだけあって、歌うの上手いし」

茜「私もそうかな。普段はコーラスで2人のサポートしているだけだから」

スバル「んで、祈は?」

祈「わ、私は……アキさんかな?大人びた雰囲気の声を出してみたいです……」

茜「へえ……じゃあ最後は龍可つちと遊輝つちね」

龍可「私は……歌が上手い人がいいかな……部活の体験会でヴォーカルを経験したけど、そういう思いが強くなってきたわ」

レミ「ヴォーカルをやったらそう思うよね。んで、遊輝は?」

遊輝「ミスチルの桜井さん」

レミ「……あんだ、ほんつと好きね(汗)」

恭輔「次は駆さんの親友、翔太さんから皆さんに、『みんなのお気に入りのセリフ、または決め台詞は?』」

レミ「これはスバル、あれしかないでしょ?」

スバル「もちろん、『ガツチャ!楽しいデュエルだったな!』」

遊輝「スバルはそれだよな。俺は……デュエルを決めるときに言うセリフかな、『ラスト!○○○で攻撃!』。決めセリフっていったらこれしかない」

龍亞「俺は……何だろうなあ……決め台詞っていうのはないからお気に入りで『遊輝と龍可を……守ってみせる!!』」

遊輝「あく、あれか、デイヴァイン戦か」

響「それよりさくく、前にこういう時、私たち元ネタのセリフだったよね」

奏「そう言えばそうね……決め台詞みたいな物無かったし」

茜「今はあるの?」

「……ない……ね」

茜「……ダメじゃない(汗)」

レミ「茜は？」

茜「私はやっぱり口癖になった『○○つち』かな？キャラ作りのために使っていたけど、自分でもこんなに浸透するとは思わなかったよ。レミっちは？」

レミ「私はお気に入りかな。『諦めないことを知ったんだから!!絶対の前に進む!!』」

祈「そ、それはいつ・・・」

レミ「海外でブラック事務所に乗り込んでデュエルした時」

スバル「それは誰も知らん」

恭輔「僕は・・・師匠とあつた時に言ったセリフですね。『ぼ、僕は・・・デツキを信じます!』。これから僕の人生は大きく変わりました」

龍亞「確かに変わったなく。その日を境に恭輔の実技ランキングがうなぎのぼりだったよ」

祈「わ、私はスバルさんとデュエルした時です。『失敗しても、防がれても、今を楽しめばいいんだ!』です」

龍可「祈もそこから意志が強くなってきたから実技ランキングが安定してきたよね」

レミ「龍可ちゃんは？決め台詞とか」

龍可「私、決め台詞なんてないんですけど・・・」

レミ「いやいやあるでしょ・・・『O☆HA☆NA☆SHIしよう』とか」

龍可「それは決め台詞じゃないです……(汗) そうですね……奪われたエンシエント・フェアリーを取り戻した時かな、『返してもらおうわよ……私の仲間を!』」

遊輝「あの時か〜、そう言えばあの時にエンシエント・コメットも出たんだったな」  
スバル「じゃあその2人、決まったか?」

響「まあ一応……」

奏「私も」

恭輔「では響さんから」

響「『永遠に降り積もる雪に埋もれなさい! アイスフォール!』」

遊輝「よりによってそれかよ!」

響「良いじゃん!! これしか良いのが無かったんだから!!」

茜「奏つちは?」

奏「『私には……信賴している仲間、結束を固めた親友ともがいる!』」

龍亞「それいつ言ったの?」

奏「レミと一緒に海外の時……」

スバル「だからその時は皆わからないって……」

恭輔「次は駆さんの同級生、涼太さんから、小等部の4人に質問。『この人を兄または姉になつて欲しいなあと思う人は?』。これは他作者様のキャラでも大丈夫です」

龍可「他作者のキャラOKって言われても……」

祈「パツと思いつきませんね……」

龍亞「俺は遊星かな〜。遊星が一番しつかりしているし、困った時に手伝ってくれそう」

恭輔「僕はお姉さんみたいな存在が良いですね。でも誰が良いでしょうかね……」

レミ「お姉さんって雰囲気ならアキさんが一番じゃない?」

恭輔「アキさんは何ていうか……ちよつと違うような……歳が離れてますから。他作者のキャラで良いんだったら留姫さんですかね」

龍可「私も龍亞が兄だから姉がいいわね。姉らしいキャラだったら……霊夢さんかな。しつかりしてそう」

遊輝「しつかりしているっていうか……あいつはこういうの面倒くさがるぞ(汗)」

祈「わ、私はお兄さんって呼べる人がいいです。えくと……漫画の方の榊遊矢さん」



スバル「今の主人公の漫画版か。アニメ版はお兄さんっていうより何というか……」  
奏「漫画の方は楽しくしてくれそうだよ。芯もすっかりしているし」

恭輔「次は龍南さんの龍可さんから、作者も含めて全員です。『今行きたい都道府県は

？』

北海道!!

遊輝「うわ!!急にでてくるな!!」

北海道!!北海道に行きたい!!

レミ「それ高校の時から言っているよね(汗)」

遊輝「俺は大阪だな。大阪で暮らしていた記憶があんまりないから」

レミ「私も大阪行きたい!食倒れを経験したい!」

奏「私は……沖繩かな。ああいう自然に癒されたい」

茜「私も沖繩!!仕事疲れがあるからああいうところで癒されたい!!」

響「私は広島県、というよりそこにあるしまなみ街道というサイクリングスポットでサイクリングしたい」

恭輔「僕は京都とか奈良です。歴史ある街並みを見てみたいです」

龍可「私も京都かな」

祈「わ、私は長崎県に、西洋系の建物とか多いので」

スバル「行きたい都道府県だろ？ だったら鉄工所とかで支えた福岡だな。正確には北九州なんだろうけど」

龍亞「俺は鹿児島かな。作者の話聞いて鹿児島に行きたくなってきたよ」

はい、連れてきたよ。

アキ「今行きたい都道府県？ それだったら三重県ね。伊勢神宮とか1度行ってみたいわ」

クロウ「行きたい都道府県か・・・いつもいつもクツタクタまで働くから、有名温泉地がいいな。熱海とかだから静岡か」

ジャック「俺は・・・山を登ってみたいな。富士山だったら静岡か山梨か」

遊星「ふむ・・・目を酷使するから自然の風景でも見てみたいな。青森の白神山地とか」

遊輝「皆行きたい都道府県というより行きたい場所だな・・・」

恭輔「次は別の作品の中の主人公、浩さんから皆さんに、『お願い事を1つ叶えろ』とやらどんな願いを叶えたい?』」

遊輝「背が大きくなりたい」

スバル「早っ!?!」

遊輝「だって前世で高2の測定時に160ギリギリだったんだもん……」

レミ「遊輝が背を大きくする? そんな事いったらすみれさんが許さないだろうね」

茜「お母さん、そういうのには凄く敏感だから」

奏「私は『ケーキ作りをもっと上手になりたい』かな。やつぱりああいう世界に入っちゃうと、自分の技術はまだまだだなくっていつも感じちやう」

恭輔「僕は『師匠みたいに料理作りが上手になりたい』です。師匠の横で見ているら興味湧いてきました」

祈「わ、私も似たようなものかな……『ファッションデザイナーになりたい』です」

茜「ファツションデザイナーだったらうちのお母さんについても相談すれば、私はそうね……『ギターの腕前をよくしたい』だね。6年のスランプはやっぱり大きかったよ……」

響「復帰曲をB、Zのリードギターで弾けてたじゃない」

茜「あれも結構ギリギリだよ」

響「それでも凄いつて。私は『ピアノが上手になりたい』だね。バンドのキーボードやつてクラシックに戻ると、なかなか感が戻らないのよね」

遊輝「お前の場合、『頭を良くする』の方がいいだろ」

響「いやだ!!絶対に勉強はしたくない!!」

遊輝「……そこは頑固だなあ(汗)」

スバル「俺は『爺ちゃんと本気でデュエルしたい』。とにかく一度でもいいから爺ちゃんの本気をみたい」

龍亞「俺は『美味しいものをたくさん食べたい』だね!やっぱり一生に一度だけ、美味しいものを好きなだけ食べたいよ!」

龍可「私は『体力をもっとつけたい』かな?遊輝とあつて大分身体の調子は良くなつたけど、やっぱり体力はあんまり無いから」

レミ「最後は私か、私は『今のこのバンドが仲の良いまま末長く愛されるように』だ

ね。やっぱり皆でこうして活動するのは楽しいよ」

恭輔「最後は龍南さんのもう一つ別の作品の主人公、ヒロムさんから、皆さんに『好きな歌は何ですか?』」

遊輝「これ、作者の影響をモロに受けるな・・・」

レミ「まあ良いじゃない? 私から行くよ。私は My Little Lvoer  
の《Hello again 昔からある場所》」

スバル「俺はファンモンの《ちっぽけな勇氣》。落ち込んだ時に聴くと励まされるんだよな」

茜「私は宇多田ヒカルの《Automatic》だね」

響「私はジャニーズをよく聞くからな・・・嵐の《ワイルドアットハート》とか好きだね」

龍亞「俺と龍可は遊輝の影響でミスチルを良く聞いているからな・・・《終わりなき

旅》が好きだな」

龍可「私は《365日》。毎日ずっと愛しているっていう思いが伝わってくるわ」

恭輔「僕はZARDの《負けないで》です。ああいうストレートな応援歌が一番元気をもらえます」

祈「わ、私は西野カナさんの《トリセツ》です」

恭輔「ラストは奏さんと遊輝さんですね」

レミ「この2人はねえ・・・ヴォーカルだから残していたけど、何というか止まらないのよ(汗)。特に遊輝」

響「聞いたらわかるよ、奏から行こう」

奏「私は最近、B、zを聞き始めたけど、皆が知っている有名どころで好きなのは『ZERO』とか『BLOWIN』、『LOVE PHANTOM』、年代が上がったら『愛のバクダン』『BURN』、フメツノフェイス、『juice』だね。B面だったら『恋心(KOII GOGOKO)』も好きね。アルバム曲も入れて良いんだったら『あいかわらずな僕ら』『アラクレ』『グロリーデイズ』『Cmon』、最近だと『Las Vegas』とか『純情ACTION』『Brotherhood』『消えない虹』『RUN』だね。でも私は本当にかじり立てだからこれからどんどん聞いていこうと思うわ」

レミ「・・・ね、これまだ初心者だよ(汗)。次の遊輝はもつとヤバイから(汗)」

恭輔「次、師匠です」

遊輝「好きな曲はやっぱリミスチルが多いな。シングルだと『抱きしめたい』『シューゲーム』『勇敢な恋の歌』とか『Everything (it's you)』『マシガンをつつ放せ』、『蘇生』、あとは『花々M・mento』Moris』とか『終わりになき旅』は龍亜が言ったから『口笛』『箒星』・・・数え切れないな。俺はミスチルを聴きだしたのはつい最近のアルバムで、昔のアルバムを持ってないからアルバム曲自体はそんなに詳しくないけど、昔だったら『CHILDREN』、『WORLD』やB面の『旅人』、ちよつと前だったら『エソラ』や『彩り』、『SUNRISE』、『Marshmallow day』、『Simple』、『シーラカンス』、つい最近のアルバムだったら『忘れ得ぬ人』、『運命』、『進化論』、『Fantasy』、『Starting Over』・・・ていうか『RELECTION』は最高傑作だと思ふな。でも『シフクノオト』と『HOME』をまだ借りてないし・・・そう思ってくる『深海』も聴きたくなってきたな。『DISCOVER』とか『Q』とか『IT'S A WONDERFUL WORLD』とか・・・今度借りて」

レミ「ストロープ!!!!」

遊輝「何だよ!」

!!!!

レミ「それ以上はミスチルを知らない読者が付いていけない!!」

遊輝「ええ……」

スバル「……とまあ、こいつらは『ファンなら当たり前だろ?』だろうけど、全く知らない人なら??と付けたくなるような曲を言ってくるから最後にしたんだよ(汗)」

遊輝「まだ全然喋り足りないんだけど……」

恭輔「以上、質問コーナーでした!」

恭輔「続いて人気投票のコーナー!!」

スバル「前回は遊輝と龍可が圧勝で同率1位だったな」

茜「今回はキャラが増えたから1票も無いキャラがそこそこいるという……」

恭輔「それでは発表して行きます!まずは同率で第14位!14位は2人います!14位に選ばれたのは……」



「票を獲得したダイヤさんとすみれさんです！」

茜「お母さん!？」

ダイヤ『私ですか、ありがとうございます』

レミ「ちよつと・・・すみれさん呼んでないよ（汗）」

いや・・・まさか入るとは思わなかったから（汗）挨拶はダイヤ1人だけにして。

恭輔「あとは、応募はしていなかったのですがダイヤさんにコメントが来てます」

龍南さん「過労枠だよね・・・毎度毎度おつかれ様です」

ウイング「毎回でてきついかもしれないけど、その分出れない人もいるからその人の分まで頑張つて！」

スバル「この「出れない人もいるから」って絶対にあいつだろ」

奏「間違いないわね」

遊輝「……すみません(汗)」

恭輔「ではダイヤさん、一言お願いします」

ダイヤ『私を選んでいただき、ありがとうございます。今後マスターとともに精進していきます』

恭輔「ありがとうございます。では次は第12位、第12位も同率で2人います。

第12位は……」

2票を獲得したレミさんとジャックさんです!」

レミ「私だ!」

ジャック「また俺はこの底辺な順位なのか!」

遊輝「そりゃ出番が少ないから……」

スバル「それだったら出番の多いレミはどうなるんだよ……」

レミ「うるさいわね!! 票を貰えるだけでもありがたいんだからね!!」

恭輔「では、お二人とも、挨拶をお願いします」

レミ「選んでくれてありがとうね! 前回と同じで変わってないけど、私は嬉しいよ!」  
ジャック「ふん……ありがとう」

恭輔「ありがとうございます。では次、次も同率で第9位! 3人います! 第9位に入ったのは……」

3票を獲得した龍亞さんと茜さんとパールさんです!

龍亞「やったぜ!! 前回から票が増えた!!」

茜「私もランクインしたよ!! とりあえずよかったです!!」

パール『私も入った〜!!』

龍可「龍亞は前は1票だけだったけど、3票もあるなんてね・・・」

遊輝「あんなイタズラ好きに入れる物好きがいるんだな・・・」

響「茜は初登場でレミを抜くなんてね」

奏「ていうかパール、前回私と同率で4位だったのに・・・」

パール『マスターが私を使わないから!!』

遊輝「いやだって、使いづらいんだもん・・・」

恭輔「パールさんにはコメントが来てます。」

ヒカリ「半分同情票に近いかな・・・遊輝に見捨てられても頑張つて!」

パール『わ、私、同情票なんだ・・・』

祈「わ、私もあんまりデュエルで見ないような・・・」

龍亞「俺も最近見てないな・・・」

龍可「私も・・・終盤にチラツと出たのは覚えているけど・・・」

パール『・・・』

恭輔「ではお三人とも、挨拶をお願いします」

龍亞「俺に投票してくれてありがとう!!前回よりも順位や票が上がって嬉しいよ!」  
茜「ありがとうございます!!これからまだまだ出番があるから活躍見えてよね!」

パール『私を投票してくれてありがとうね!同情票でも嬉しいや!』

恭輔「ありがとうございます。続いて第7位の発表です。第7位も同率で2人いました。第7位は……」

4票の響さんと僕です!」

響「やったぜ!!」

奏「やったぜって……前回と順位変わらないじゃない(汗)」

龍可「しかも票は減っているし……」

スバル「今回はすびばるのアンケート票は無くなっているからその影響じゃね？」

遊輝「それはあり得るかもな・・・」

茜「恭輔つちも入ったね」

恭輔「ありがとうございます。司会業任されたので、ランクに入っていないと思ってましたよ」

レミ「そんな恭輔君にはコメントが来てます」

涼香「デツキがあれじゃなかったらトップだったけどね・・・」

遊輝「あれって・・・テラナイト別にそこまで強くないだろ(汗)」

スバル「十分強いだろう!!」

レミ「世界チャンピオンになったテーマだよ!!弱い訳ないじゃん!!」

恭輔「では響さん、挨拶をお願いします」

響「私を選んでくれてありがとうございます!!これからも頑張るから応援よろしく!」

恭輔「ありがとうございます。そして、僕を投票してくれてありがとうございます。」

これからも師匠と頑張つてデュエルの腕を磨いていきます。では、第6位です。第6位は……

7票の遊星さんです！」

遊星「俺か……」

遊輝「遊星さん、あんまり出番がないのに人気だな……やっぱり主人公なんだな。それに比べて……」

クロウ「なっ、何でこっち見るんだよ遊輝!？」

遊輝「あんな性格じゃ出番は増えないな……」

クロウ「んだとおお!!!」

スバル「そうやってすぐに怒るから……」

恭輔「では遊星さん、挨拶をお願いします」

遊星「俺を選んでくれてありがとうな」

恭輔「ありがとうございました。では次は第4位です。第4位は同率で2人います。

第4位は………

10票のスバルさんと祈さんです！」

スバル「俺か！嬉しいぜ！」

祈「わ、私ですか!?!」

レミ「スバルも人気だよね」

茜「主人公勢の勢いってすごいわね……」

龍亞「祈がここか……もうちよい上かな〜と思ったけど」



恭輔 「ちなみに祈さん、1位の指名投票はトップですよ」

遊輝 「マジで!？」

スバル 「凄いじゃないかよ祈！」

祈 「あ、ありがとうございます」

恭輔 「スバルさんと祈さんにもコメントがきてます」

スバル

龍南さん 「地味にカッコイイ場面を作ってたと思う」

涼太 「今度、機械操作教えてくれると助かります。WRGP頑張ってください」

祈

リンネ 「・・・唯一の常識人」

龍南さん 「1番可愛いから」

遥 「恋もデュエルも頑張ろう！」

スバル「おう！今度教えてやるぜ！」

龍亞「スバルの機械の腕前は凄いしな……」

レミ「恋、ねえ……」

スバル「？何だ？何で俺を見るんだ？」

恭輔「ではスバルさんと祈さん、挨拶をお願いします」

スバル「選んでくれてありがとうな！スツゲエ嬉しいぜ！これからも頑張っていくからよろしく！」

祈「あ、ありがとうございます。これからもデュエルなど頑張っていくしますので、応援よろしくお願いします」

恭輔「ありがとうございます。それではトップ3の発表です」

レミ「呼ばれてないのは……遊輝と奏とと龍可ちやんと……」

アキ「私とクロウね」

恭輔「では第3位の発表です。第3位は……」

13票の奏さんです！」

奏「やった!!」

龍可「奏さん、前回から上がりましたね」

響「奏の人気って凄いんだなあ・・・」

恭輔「奏さんにもコメントがきてます」

龍南さん「祈に抜かれたけども、可愛さはいまだ健在」

留姫「互いに店のことで苦労するけど、頑張りましょう」

奏「ありがとうね」

遊輝「響とレミに差があるんだから・・・やっぱり元のモデルに影響あるんじゃないかな？」

茜「そんな事知らないわよ(汗)」

恭輔「では奏さん、挨拶をお願いします」

奏「皆ありがとうね！皆のおかげでトップ3に入れたよ！これからもデュエルにケキ作り、ヴォーカルと頑張っていくからよろしくね！」

恭輔「ありがとうございます。次は第2位です」

スバル「前回は同率1位で遊輝と龍可何だろ？」

アキ「前回の結果を引っ張るとおそらくこの2人が争うんでしょうね……」  
恭輔「では、第2位の発表です。第2位は……」

15票の龍可さんです！」

龍可「私だ！」

龍亞「あゝ、龍可がここか〜」

祈「お、惜しかったですね、1位」

響「龍可ちゃん人気だよね〜。前回1位で今回も2位か」

恭輔「ちなみに龍可さん、総投票数は2位ですけど、1位の指名投票でしたら祈さんと並んでトップでしたよ」

レミ「そうなの!？」

アキ「龍可は人気ね」

恭輔「龍可さんにもコメントが来てます」

空「まあ、見てる方からしたら気持ちいいデュエルしてるしね・・・相手は知らないけど」

龍亞「それは言える。見てる方は楽しい。やられる方はたまったもんじやない」

龍可「どういうことよ!!」

恭輔「では龍可さん、挨拶をお願いします」

龍可「皆、私を選んでくれてありがとう!皆のおかげで沢山の得票と高い順位になり

ました！これからも応援お願いします！」

恭輔「ありがとうございます。では、お待たせしました。第1位の発表です」  
クロウ「ここで大逆転で俺とか・・・」

スバル「絶対に無い無い（汗）」

龍亞「マジでクロウだったらビックリだよ（汗）」

レミ「主人公がランク外ってどうなのよ（汗）」

恭輔「では第1位の発表です。第1位は・・・」

18票を獲得した師匠です！」

遊輝「やったぜ！」

響「それ、私が言った!!」

茜「まあそうだよね」

龍亞「主人公がランク外だったら、主人公（笑）が付くところだったよ。あつ、今も主人公（笑）が付くか」

遊輝「どういう事だ龍亞!!」

龍亞「だって遊輝って主人公じゃなくてヒロインでしょ（笑）」

遊輝「おいこら!!!」

レミ「でも否定は出来ないよね」

奏「女子力高いし・・・身体細いし・・・」

茜「髪の毛も優秀、女性にとっては文句の付け所がない髪の毛の質だよ」

響「結論、遊輝は主人公じゃなくてヒロイン」

グサツ!!!

遊輝「・・・・・・・・・・・・・・・・」↑部屋の隅でしゃがみ込んで『の』の字を書いている。

恭輔「え、えつと・・・師匠にもコメントが来ています（汗）」

龍南さん「すごく苦労しているよね・・・めげずに頑張つて!」

駆「互いに苦労していることいっぱいあると思いますけど、互いに頑張りましょう」

京「なんていったってメインヒロインだしね!・・・えっ?遊輝って主人公?そん

な人いなかった」

武「いや、いるから!」

(光さんは女装した時の優姫で投票ww)

スバル「おい、コメントのお礼ぐらい言えよ」

遊輝「…………俺は男じゃあああああ!!!」

レミ「こらっ!!」

アキ「ハア…………相変わらずね(汗)」

クロウ「その内、豆腐メンタルとか振り子メンタルとか言われるぞ」

ジャック「フン、意思が弱いのは己が弱い証だ」

アキ「(それはそれでちよつと違うでしょ(汗))」

恭輔「師匠く、挨拶をお願いします」

遊輝「ハア…………俺を選んでくれてありがとうね。これからも主人公として引っ張っていくから、応援よろしく」

恭輔「ありがとうございました!これにて、人気ランキングを終了して、今回の記念話を終了したいと思います!」



龍亞「4年間、この小説を見てくれてありがとうね！」

龍可「作者はこれから忙しくなってくるけど、この小説は完結させるからそれまで付き合ってくれと嬉しいですよ」

レミ「ここまで読んで頂き、ありがとうございました！」

## 設定雑談集

## キャラクター編

## part 1

どうも、作者のD I C H Iです。

遊輝「主人公の遠藤遊輝です」

というわけでハーメルンでのU A 1 0万突破特別企画、設定雑談集をこれから数回に分けてしていきたいと思います。今回は私の小説に出てくる10人のメインキャラクター設定（龍亞・龍可も含む）のうち、5人を軽いプロフィールに載せての紹介です。残りの5人は次回となります。

遊輝「気ままに話していく感じだから、ちよつとした事に関するツツコミは無しで、前書き長くするのもあれなので早速行きましょうか。まずは主人公から、あつ、ちなみに年齢は遊輝の中等部2年の文化祭時（2学期）とします。

遠藤 遊輝

年齢：17歳（転生前）↓12歳（初登場時）↓13歳

シグナーの痣：太陽

トレードマーク：赤のカチューシャ

担当：ギター・ヴォーカル・（ベース・ブルースハープ（ハーモニカ）  
デツキ

1・・・シンクロ対応ガガガ

2・・・聖刻

3・・・マドルチエ

遊輝「おい、3のデツキ紹介はいらん」

一応、女装した時のメインデツキだから

遊輝「もう女装とか言うな!!おかげで色んなところから間違った情報だけ飛び交うんだよ!!」

しょうがないじゃん。だって男の娘なんだから。

遊輝「言うなああああ!!!」

せつかくだし、この男の娘関連でも行くか。

実は、この小説を上げる前にあったネタとしては今のコンセプトの「5D's」でエクスーツ」とは別に「サテライト出身のドラッグニテイ使い」という設定があったんだ。

遊輝「それは聞いたな・・・でもネタ被りが激しいかったんだな」

これを投稿していた時期、『小説家になろう』がまだ二次創作を許していた時期なんだけど、その1年前から色んな二次創作を見て、その結果、出てきたコンセプトが上の2つなんだ。でも、当時は多かつたんだよね。サテライトで遊星と一緒に物語を進めるの。そして、意外かもしれないけど、当時、5D'sの世界でエクシイズモンスターを使う小説が私が見た限り1つも無かつたんだ。

遊輝「その当時はエクシイズモンスターの初期時代からインゼクター・聖刻龍時代に入ろうとしていた時期で、まだエクシイズモンスターが今の時代ほど強くは無かつたんだ。だからこの小説のコンセプトは「5D'sでエクシイズモンスターを使おう」ってなつたつて・・・で、それが俺の設定とどう変わるんだ？」

もし、「サテライトのドラグニティ使い」だったら間違いなく男の娘設定はなかつたな。

遊輝「なん・・・だと!？」

さらにもつと言えば、最初から男の娘設定じゃなかつたんだよな。中世的な設定である事には間違いなかつたけど。

遊輝「じゃあなんで男の娘設定にしたんだよ!!おかげで俺が大変な目にあつたんだぞ!!」

最初の文化祭の設定で困ってな〜。学生生活、しかも2学期だから文化祭か運動会を入れなくちゃだけど、運動会なんかネタにならないから問題外、文化祭を何にしようかな〜って思った時にピンと『うちのメインメンバーの男2人をメイド服着せたら面白くね?』っていう発想から、『じゃあ十代の子孫のスバルは無理だけど、主人公なら男の娘でも良いんじゃない?容姿の設定を詳しく載せてなかつたし』と結論付けて、男の娘設定にしました。

遊輝「迷惑じゃこらああああ!!!」

ってな感じで主人公の遊輝君はツツコミとボケを担当してもらってます。

遊輝「人の話を聞けええ!!!」

そういえば遊輝君、アニメキャラのイメージ言っただけな。一番近いのは……『リトルバスターズ』の主人公、『直枝理樹』だね。遊輝君はそれにプラスして赤の力チューシャがある。

遊輝「……確かに似ているから文句も言えねえ……」

あとはそうだな……シークレットシグナーの設定に関してはまた別の所で話すので、遊輝君の治癒力の設定を話しましょうか。

遊輝「(くそツ……終わったら覚えておけよ)」

最近リアルフアイトのシーンはありませんが、遊輝君の治癒力は私の小説をよく読

んでいる方はご存知でしょうが、人間じゃありません。

遊輝「ひでえな!!普通だろ!!」

普通じゃなねえって。この設定は初期からありました。「こんな主人公だったらいいなあ・・・」という思いの一つ、というか初期設定で貫いたのはこれくらいじゃないかな?」

遊輝「鉄の意志や鋼の固さも感じられんな・・・」

うるせえ。ああでも、剣道の設定は受け継がれているのな。あれはリアルファイトに特徴持たせようと思いついたのが剣道だから。

遊輝「他にも柔道と空手をやってはいたけど、段位取る前にやめてしまったもんな。

剣道一本に絞った」

遊輝君、剣道をやる時は珍しい二刀流を採用してます。

遊輝「何だろうな、遊びで二刀流をしたら凄いしつくりきたんだよな。そこからずっと、二刀流だよ」

んで、海外編で漆黒の日本刀を3本譲り受けました。そしてもちろん・・・

遊輝「三刀流練習しましたよ・・・某海賊アニメみたいに、おかげで最初の方は歯がヤバかった」

今では十分に習得してますがな。

あと、受け継がれているとはお化けや幽霊などのオカルト系がダメな事と料理が超一流という事だ。

遊輝「(ビクッ!) そ、そのオカルト系は触れないでくれ・・・(ブルブル)」

遊輝君、最初の設定だと弱点が皆無に等しかったので何か弱点を付けようと。それで、作者もそういう系が苦手だったので、遊輝君もお化けや幽霊は全くダメという設定になりました。さすがに作者はアンデット族モンスターは大丈夫です。

遊輝「アンデット族モンスターもダメ!! なんてあんなお化けのデツキを平気で使えるの!？」

お前、そういう事を言うな。

あとは料理の設定だな。料理の設定自体、俺が料理や食べ物好きだから、こういうのを乗せたいと思って載せました。ちなみに作者、ちらほら言ってますが、大学は農学部で野菜と果物の研究をしているので、なんだかんだ食べ物と関わってます。

遊輝「俺の場合、母さんが料理が壊滅的だったからな・・・」

俺の場合はそんなことないけど、遊輝君が小学生から家族を代表して料理を作っているんで、何かしら大きな理由が必要だと思ひ、こういう設定をしました。ちなみに、中華料理が得意なのは私も一緒・・・かな？

遊輝「和食は基本が難しいな・・・」

ああそうそう、デツキのことについてふれてなかったな。

遊輝「そういえばそうだな。俺のメインデツキは作者のコンセプト通り、【5D'sでエクシーズモンスターを使ったら】というコンセプトだから、基本的にはエクシーズモンスターを主体としたデツキ構築だな」

エクシーズモンスター主体と言えば、当時のアニメの主人公、遊馬君のデツキ、最初はだから遊馬君のデツキ構築に少しガチ構成にしたんだけど、【ガガガ】がのちに色んなランク体のエクシーズモンスターを出せるようになったから、ガガガ軸になったんだよね。

遊輝「初期の精霊もガガガマジシャンとかガガガガールだしな」

あとともう一つ、【聖刻】。これは当時、作者が作ろうとしていた理想系の構築だね。

遊輝「当時は色々とパーツが高かったんもな・・・」

当時、増殖するGは再販されてなかったらシングルで買うと高騰していて、仕方なく速攻のかかしだけという構築だったもんな。

遊輝「一時休戦もいわば増殖するGの代わりみたいなもんだ」

一時休戦は【聖刻】には相性良いと思ったんだよね。当時の聖刻は★6軸で手札にパーツが揃ったら1kilerで、そのための待ちとして増殖するGや速攻のかかしがあっただけど、一時休戦の1ターン待つてくれる効果は俺としてはありがたい効果だった



んだよね。

あとは・・・【マドルチエ】か。

遊輝「使っている方はアイドルとして大人気だが、対戦相手からしてみれば『脳筋鬼畜菓子軍団』だな」

ファンは多いよ。俺も【マドルチエ】のファン、どこかメインキャラでマドルチエを使わせたかった。ちなみに嫁はマジョレーヌ。

遊輝「そこがあれだよな、お姫様ファンに喧嘩売っているよな」

何でだよ!? 姫様よりも強いし、事故らないんぞ!! 俺のマドルチエには姫様なんていないカードなんだよ!!

遊輝「あくハイソウデスカ」

そう、最近ニコ動で見たマドルチエの派生もムカつく。確かに強い、そこは認めよう、だが!! なぜマジョレーヌが入らない!! あれはサーチとして優秀なんだぞ!!

遊輝「マジョレーヌはな：：特殊召喚にも対応していたら必須になったんけどな：：。そんな事したらエアーマンの再来で制限行きだっただろうけど」

それは・・・困る(汗)

遊輝「だったら良いじゃねえか」

まあ・・・そうですね。

あとは……名前の由来行ってなかったな。

遊輝「ああ、そう言えばそうだな。でも俺の名前の由来とかあるんか？」  
ない。

遊輝「……………」

正直、遠藤はマジで思いつき、今思えばもうちよい捻れば良かったと思ってる。遊輝の方は、とりあえず遊戯王だから『遊』だけは入れたかった。あとどうしようかなくと思つた時に、『輝』という字を見て、これで遊輝ならカッコいいなと思つて遊輝にした。

遊輝「……………もうちよつとちゃんとした理由があると思つたら僕が馬鹿でした」

そうだな、残り振るネタといえは……そういえば、時々遊輝君のコンプレックスである身長の高さも触れる時があつたな。

遊輝「それマジでやめて!!!中性的な顔と同じくらいにマジでコンプレックスだから!!!」

身長が小さいネタも男の娘設定の時に浮かび上がりました。あんな規則悪い生活をするからね。ちなみに、メインキャラの身長がどんな感じかと言うと……

遊輝「やめろーーーー!!!」

|     |       |
|-----|-------|
| 遊輝  | 148cm |
| レミ  | 156cm |
| スバル | 164cm |
| 響   | 157cm |
| 奏   | 160cm |
| 祈   | 142cm |
| 恭輔  | 147cm |
| 茜   | 157cm |
| 龍亞  | 145cm |
| 龍可  | 146cm |

(漫画参照)

(漫画参照)

こんな感じ。あれ、龍亞って龍可よりも身長低いんだ。そりや龍亞君、PixivでR18の魔法少女ネタにされたり、女装されたり、龍亞きゅんとか言われたりするわな。響と奏は元ネタがあるけど、元ネタの身長が不明なので、まあそこまで元ネタのネタを採用していないけど。

ちなみに、中学生2年男子平均が159.5cm、中学生2年女子平均が154.8

c m。うちの女性陣は高い方、奏に至っては160cmです。

小学生6年男子平均が145.0cm、小学生6年女子平均が146.8cm。祈は平均より低い方、恭輔は高く、双子は平均的です。

この結果から言えること、時々ネタにしますが遊輝は時々、女子小学生と本気で間違えられる時があるww。前世の中学1年、2年辺りだったら本気で間違えられたかもww

遊輝「……もう嫌だ(涙)」

ちなみに作者の身長は中学時代は平均よりも高く、高校に入って成長期が止まって平均的になりました。

続いてはバンドのリーダー、軽音部部長のレミ。

葵  
レミ

年齢：13歳(初登場時) ↓ 14歳

シグナーの痣：羽

トリードマーク：緑のバレッタ

担当：ベース・ブルースハーブ（ハーモニカ）・ギター・（コーラス・サクセス・etc.）  
デツキ

1・・・ドラグニティ

まずはレミの名前の由来だな。

遊輝「葵も思いつきだろ？」

葵はそうだね。もつと言えればレミも思いつきだよ。

遊輝「マジで？」

マジマジ。あの当時はとにかく、はやく話を出したかったから、とりあえず適当でも思いついた名前を書け！って出てきたのが葵レミだった。

遊輝「レミの由来も酷いな・・・（汗）」

ちゃんとした理由を持ってつけたのは余裕を持ち出した辺りからかな？まずはレミの音楽性から。

遊輝「レミって手先器用だから何でも出来るよな・・・」

バンド結成を呼びかけたのはレミ、レミのお父さんが音楽楽器を取り扱う、製造して

いるメーカーに所属しているから物心ついた時から楽器と触れ合っている設定、そして手先が器用なので、弾けない・吹けない楽器は無いというほどの音楽的なセンスを持ったんだ。

遊輝「ホント不思議なのは、あれで部内で一番音痴なことと料理が下手くそなことだよな」

まずは音痴設定から行こうか。初期バンドメンバーの4人で誰がヴォーカルを務めるかという時に、レミは色々と出来るから足りない所を補って貰わないといけなかったからヴォーカルを外そうと思って、それだったら音痴という設定でいいじゃんという。

遊輝「あいつ、自分から音痴音痴って言ってるけど、普通にカラオケで80点後半出すし、時々90点行くからな・・・部内で一番下手のは下手だけど・・・」

いや、でも実際問題、バンドのリーダーとしてメインヴォーカルを張って、尚且つ音楽的に才能があるなんて設定をしたら、何処かで音楽的なことで躓くことがあるぞ。そんなに沢山のことをしていたら精神的にしんどいし。

遊輝「そうだな・・・奏がメインでヴォーカル張ってるけど、それだけでも結構辛いから俺に振ったんだから」

じゃあレミには何してもらおうかなと思ったけど、空いているところがベースだったのよね。何となく遊輝とヴォーカルの奏はギター、響はキーボード、スバルはドラムつ

ておくと、ベースしか空き枠無くて。

遊輝「ベースがヴォーカルってグルーブが少数だからな。多分、ギターの方が見慣れているんだと思うぞ」

レミの音楽才能ネタはこれまでにして、次は料理ネタ。

遊輝「あれは……まあやってない下手だからまだ良い方だけど、他作者のキャラみたいな暗黒物質ばかり作るあれよりましだな」

さすがに欠点なしはちよつとあれだからね。料理をするのが苦手という設定にしています。

次はデツキについて触れようか。

遊輝「レミはドラグニティ、もう一つの小説の方のコンセプトのデツキだな」

【サテライトのドラグニティ使い】は諦めたけど、やっぱり誰か、欲をいえばメインキャラにドラグニティを使って欲しかったからね。レミは一番最初に出てきたオリキャラのメインキャラだから、手っ取り早くレミにドラグニティを使ってもらったんだ。

遊輝「当時のドラグニティはもう……最高に強かつたもんな」

【征竜ドラグニティ】、あれは強かった。当時は作者はお金なんて無かったから、白い紙に名前を書いて、プロキシとして使っていたのを覚えているよ。

遊輝「そして世界大会が終わって約1年後、ドラグニティ使いにとつては悪夢の禁止・

制限改訂が」

・・・・なぜ、征竜を制限にしたのに竜の溪谷を制限にしたんだ!! 答えろ!!! KO  
NAMI!!! (涙)

遊輝「当時は確かに征竜の息の根を止めたいという意思があるのは分かるんだけど、今制限でいる必要があるのか?」

今はもうドラグニティは崩れてしまったけど、噂によるとテラフオまで規制されると言われているし、そんなことされたらマジでドラグニティお終い。

遊輝「それ以前でテラフオの規制は色々マズいだろ・・・色んなデツキ死んでしま  
うぞ」

まあ話はズレてしまいましたが・・・という感じでレミにはドラグニティを使ってもらいました。今ではこの小説も色んなメインキャラが2つ以上デツキを持つか、大幅改造しているかのどちらかですが、レミに関しては数少ない1つのデツキで勝負をしているデュエリストです。もちろん、デツキ調整をしているため、カードの取捨選択をしています。

遊輝「初期と比べると、ドラグニティとは関係のなかったカードが抜けた感じかな? ゴツドバード・アタックを入れていて、その関係でシールド・ウィングを入れていたけど、今は見かけないな」



ドラグニティって鳥獣族あるからゴトバ入れたくなるけど、最終的に鳥獣族がいらないからゴトバ腐るんだよね。むしろ本当は王宮のお触れを入れたいくらい、溪谷が3枚あればな……

遊輝「……溪谷の恨みはもういいだろ(汗)」

あとはこのキャラはイメージが無かったですよね。後付けで雰囲気似ているのでイメージを『流星のロククマン』のヒロイン、『響ミソラ』にしましたが。

遊輝「作者はあんまりアニメを見ないから参考となるアニメのキャラを使っていないだよな」

オリジナリティがあるというメリットはあるものの、読者には想像し辛いというデメリットはあるから、ある程度大まかなイメージキャラは付けようかなと、それで後付けでミソラちゃんにしました。

遊輝「性格はミソラとは全くかけ離れているけどな……」

あれはね……何だろう、最初はあるな感じじゃなくて真面目な性格にするつもりだったんだよ。ツッコミ担当として

遊輝「まあ確かにツッコミ担当でボケているところを見たことは無いが……」

ところがね、遊輝君の男の娘設定の時に、誰か1人でもこういう事を強制的にやるキャラクターが必要だなくって。それでレミに目をつけて、龍南さんのコラボの時

に覚醒した。

遊輝「ここ最近は大人数しくまたツツコミだけになったと思っただけど、2回目の文化祭でまたあれだしな・・・(汗)」

作者も正直、なぜあんな性格になったのか分からないです(汗)

次は人気投票でもトップ5に入ったスバル。

遊城           スバル

年齢：12歳(初登場時) ↓13歳

シグナーの痣：剣

トレードマーク：オレンジのバンダナ

担当：ドラム・コーラス

デツキ

1・・・属性HERO

2・・・M・HERO

遊輝「これはキャラ設定楽そうだったな」

G Xの『遊城十代』の子孫だからね、ある程度キャラを固定しやすかったよ。変えたところは……

・徹夜付けをすれば十代みたいに赤点を取ることはない

・部内で奏に次ぐ常識人

・機械にめちやくちや強い。

かな？

遊輝「十代ほどではないけど、運動能力は高いもんな。ていうか響が鬼畜すぎてスバルの運動能力が低く感じる」

遊輝も足は速く、そこは響と争うけど持久力の面で劣るよな。

遊輝「響の話は回すとしてスバルって話すことは機械ぐらいじゃね？」

まあそうかもな。スバルの機械弄りは初期設定と言えば初期設定だな。あの5人でDホイールのチーム組んだ時にメカニックいな事に気がついて、遊輝がDホイールの整備をできるけど、そこまで本格的には出来ないし。

遊輝「遊輝さんに教えてもらったけど、やっぱり何処か調子悪いつて調べるのはまだまだだな」

そう考えて、誰をメカニックにしようかなと思つた時にスバルだつたんだよね。スバルって名前の由来、流星のロックマンの主人公から取つたんだよ。

遊輝「あの時、作者流星のロックマンやってたもんな」

めっちゃやっていたよ。その主人公がスバルって名前だけど、その子がまあ望遠鏡関係とか宇宙関係になるけど機械弄りに強かつたんだよね。だからスバルにしたんだ。結果的に言えば正解だつたよ。

遊輝「あいつ以外がメカニックなんて想像がつかないもんな・・・」

他の奴らの性格や特性がメカニックとはいえがたいもんな。んで、メカニックとして活躍するんだつたら、機械に強くないと務まらないから、機械弄りが得意という設定にしたんだよ。

遊輝「あいつ、Dホイール以外にも修理を受け付けているし、時々自分で物を発明するし」

その代表作が全自動着替えマシンだな。

遊輝「あれは……何故作った(汗)。もう嫌な思い出しかない……」

いや、真面目にさ、そんな突然コスプレとか着替えとか出来ると思う？

遊輝「そりゃ出来んけど……」

だから全自動着替えマシンを発明した。あんなに大活躍するとは思わなかったけど。

ドラマの話は基本的に本編で話したから大丈夫か。

遊輝「確かに、スバルのドラマの話は本編の第93話をご確認ください」

となるとやっぱりデツキの事かな。恐らく、殆どの人が何で分けたんだ？って思っている人が多いだろうし

遊輝「確かにそうだろうな。十代は結局、ネオスもE・HEROも混ぜてやっていたし。エクストラの問題か？」

それも一理あるけど、実際はメインデツキに問題があるんだ。

遊輝「メインデツキ？」

属性HEROとM・HEROでデツキ構成がめちやくちや変わるんだよ。正直、属性HEROだとシャドー・ミストとかサモンブリーストは要らないし、M・HEROだと

オーシャンとかアナザー・ネオスはいらないんだよね。

遊輝「確かに……」

そうなる魔法や罫の構成も多少変わってくるから、ごちゃ混ぜしちゃうと何かなく  
くと思つて、それだったら分けようという結論になったんだ。

遊輝「そう考えるんだったら分けたほうがいいかもな……」

じゃあ最後、この2人は幼馴染のため、2人いっぺんに紹介した方がしやすいから2  
人いっぺんに紹介するぞ。

小野寺 響

年齢：13歳（初登場時） ↓ 14歳

シグナーの痣：水

トレードマーク：水色のシユシユ

担当：キーボード・コーラス・（アコーデイオン）

デッキ

1・・・氷結HERO↓氷結界？

水野 奏

年齢：13歳（初登場時）↓14歳

シグナーの字：雷

トレードマーク：黄色の伊達眼鏡

担当：ヴォーカル・ギター・ブルースハープ（ハーモニカ）・タンバリン

デッキ

1・・・代行者。パーミッション

2・・・終生↓墮天使

この2人の元ネタ、人物集見てくれた人なら知っているけど、プリキュアシリーズから『スイートプリキュア♪』から頂いたんだよね。苗字までかぶるとマズいから、響の方の小野寺はプロ野球の埼玉西武ライオンズにいた小野寺投手、奏の方の水野は俺の高

校の後輩の名前を借りました。

遊輝 「後輩の方は分かるけど、何で小野寺投手？」

いや……響の苗字を考えた時、パツと思い浮かんだのが小野寺投手だから。

遊輝 「あつ、そうですか……」

ちなみにその小野寺投手、今は埼玉西武ライオンズで投手コーチをやっております。

じゃあこの2人は……何で元ネタをここにしたかという話からやっけていきましようか。

遊輝 「そうだな。多分気になる人はいると思うぞ」

遊輝がアカデミアに編入する時に3人〜4人ほど仲間がいるなと思いました。理由はバンドネタもやりたいというのとWRGPでチームを組むために必要だと思われています。最初はレミ含めて3人のオリキャラで良いかなと思っただけ、当時の俺にとっては遊輝含めて4人だと変な感じがしたので、もう1人追加で遊輝含めて5人のグループにしました。

遊輝 「バンドの構成でおかしくなったんだろ？」

そう、まず、遊輝が最初からヴォーカルはマズかった、途中加入だから。スバルはドラム担当、響の方のポジションはキーボードって決めていたけど、ここでヴォーカルの問題がでて……レミは最初からヴォーカルを外していて、そうだったら遊輝が歌う



ことになるじゃん。

遊輝「そうなったら最初のコンセプト台無しだな」

かといってキーボードやドラムにメインヴォーカルさせるのも変だし、そう考えるとこのバンドグループは5人必要だな……って。

遊輝「それで、何で元ネタはあれにしたんだ？」

ヴォーカルをさ、後々遊輝がやるとしたら、もう1人は女性ヴォーカルが良かったんだよね、女性の高くて美しい声はなかなか出せないだろう？

遊輝「確かに……裏声でも出来ねえな」

んで、それだったらキーボードも何となくだけど女性で良いかと思って、けどイメージが思い浮かばなくてどうしようかなくとネットサーフィンをしていたら、この2人に出会ったんだよね。元ネタは2人とも主人公で、しかも1人はピアノ経験者、何という好都合。しかも奏の方の声優さんは歌が上手いと。

遊輝「都合良すぎだろ(汗)」

これはマジで俺もビックリ。それで、元ネタを借りることにしたんだ。奏の方は弟が1人いたんだけど、当時は弟の順番はあんまり無いだろうなと思うって不採用にしました。

遊輝「奏の弟さん、元ネタだと確か奏が中等部2年の時に小学3年か4年という設定

だろ？」

龍亞・龍可たちとも離れすぎていたからな。今となつては年齢一緒にすれば恭輔の枠は埋まつたんじゃないかなとは思っている。

遊輝「まあつまるところ、もしかしたら恭輔は奏の弟になつていたかもしれない、ということだな」

そうだね。あとはどこまで元ネタ借りようかなと、最初は性格もかなと思つたけどすぐ挫折。よつて借りた元ネタをまとめると・・・

### 響

- ・ピアノ経験者
- ・部活の助っ人
- ・甘い物好きで奏のケーキを盗み食い

### 奏

- ・家はカップケーキ屋
- ・自身も菓子作りが得意
- ・可愛い物好き（この小説ではぬいぐるみ中心）

こんなところかな？あとはそこを伸ばしたり、元ネタにはなかったところを追加していったんだ。

遊輝「響の鬼畜運動神経とか部活の助っ人設定からだったな」

どうせなら尖らせようと思ってね。元ネタの方は勉強は普通だけど、こっちは毎回のテストの補修常連、その代わりに運動神経は抜群。

遊輝「抜群の問題じゃないだろ・・・あいつ10回に1回の割合で男子の世界記録とか出さず。陸上・水泳・球速とか色々・・・」

奏は逆に足した設定が多いかな。元ネタだと運動についてはあんまり触れてなかったような気がしたから、運動神経はまるつきりダメ。勉強の方は優秀だなくというのをちよつと上にしたぐらいだけ。

じゃあ次はデツキについて語りますか。

遊輝「響のさく、氷結HEROは本当に謎なんだけど。あと、氷結界？ってなんだよ」  
まあまずは氷結界から。5D'sの時代に出た水属性のカテゴリで有名な所は「リチュア」か「氷結界」だったんだよ。

遊輝「その後は知っているぞ、リチュアだとシンクロに対応し辛い上に、当時リチュアは色んな小説で使われていたって」

そう。だから氷結界にしたんだよ。ところがね、氷結界で書いていた時にトリシューラとブリュが禁止になった時期があつてき。

遊輝「あつたな。トリシューラは割と早くに帰ってきたけど」

グングニールとアイス・スプラッシュだけだとエースとは呼べるけど、切り札とは行かないんだよね。それで Wiki を見たら、HERO と混ぜる構築が合つてね。それだつたら面白そうになつて。

遊輝「まあ Z E R O がいるしな」

でもねえ、その後に氷結界のオリカとか作つたり頂いたりしたら HERO が邪魔になつてきて。

遊輝「おい……(汗)」

そう、だから響はそのうちまた氷結界単体に戻すかなつて。

遊輝「でも氷結界単体だと割とキツイところがあるぞ」

そうなんだよね。だから、最悪響はエクシースモンスターを使う時が来るかも……

遊輝「マジかよ……採用候補は？」

バハムート餅。

遊輝「……マジ勘弁(汗)」

次、奏。奏のデッキに関しては昔作っていたんだよ。

遊輝「『パーミッションって打点とか除去とかサーチに弱い？ だったら代行者混ぜたら強くない？』という安易な発想で作ったあれ？」

いや、まあ、割と回ってはいたよ。俺の構築の場合、ドローをアルテミスに頼る構築だったけど、あれを魔法のドローカードに変えたらファンレベルとしては強い方だよ。

遊輝「まあそうだよな・・・こつちだと壺の中の魔術書とかオリジナルのドローカードもあるし」

カウンタ―罫が今ひとつ多いっていう悩みも最近は解決してきたし。ただ、LP4000の世界だと「神のくく」系が使いにくいんだよね。

遊輝「それわかる。俺も通告入れようと思っただけど、ライフコストが重すぎて、ブレイクスルーとかデモチエ採用しているから」

まあでも、そこを克服すれば代行者パーミッションは強いよ。もう一つは終生だね。遊輝「奏のあの性格からとても使うとは思えない上級天使軍団・・・(汗)」

いや・・・さすが昔のガチデツキ、誰かが「このデツキの相手は相手プレイヤーじゃない。自分の運だ」って言っていたのも納得だわ。

遊輝「あれ、回ったらもう手がつけられないもんな・・・でも、変えるんだろ？」  
ええ、終生から墮天使にね。墮天使の方が面白そうじゃん。

遊輝「まあ終生ほどの制圧力は無くなったけど、1ショットの率と事故率は緩和され

たと思うよ」

属性が統一したから闇の誘惑が入るし、ドロソースを入れたから結構回る回る。個人的には天の落とし物が欲しい。

遊輝「そんな壊れカード販売されたら環境ぶっ壊れる」

ゴードンで十分壊れているだろ。ていうか一定のドロカードはあつてもいいと思うんだ。それこそ、1ドロの逆転率が上がって、面白いデュエルが出来そうなんだけど。

遊輝「一理あるけど、あんまりドロカード増やすとまた大変なことになるぞ」

そうだけどさ……

堕天使に関しては漫画版のオリカ罫を使う時があると思います。そうしないと蘇生手段とか今ひとつなので。

遊輝「そんなに蘇生カードいるか？」

あのライフ半分削って、墓地の堕天使を好きなだけ呼べるやつは欲しいだろ？

遊輝「いや、微妙だろ？ 回していたら以外と邪魔だぞ」

まあそんなこんなで漫画版のオリカを使う時がくると思います。

遊輝「あとは……奏人気だよね。あれ何でだろう？」

デュエルの比率的には高い方だよ。今回のメインキャラの今までのデュエル回数と

かまとめると・・・

遊輝

回数：33回

勝敗：26勝6敗（中断1回）

勝率：78.8%

レミ

回数：15回

勝敗：10勝5敗

勝率：66.7%

スバル

回数：13回

勝敗：9勝4敗

勝率：69.2%

響

回数：11回

勝敗：7勝4敗

勝率：63.6%

奏

回数：14回

勝敗：11勝3敗

勝率：78.6%

（カウントした話は第1話〜第110話までの本編のみ、デュエルスタートからデュエル終わりまで、しっかりと描写しているところだけカウント）

遊輝「奏勝率高っ!?俺たちとやる時は5く6割ぐらいなのに!」

奏さん、もう少しやって勝っていたら遊輝君の勝率を抜いていました。

個人的には遊輝君、33回しかやってないんだなあくという感覚と、もうちよつと負けても良かったかなくと。大事なデュエルが多いのでそういう訳にもいきませんが。ていうか遊輝君、勝つイメージよりも負けているイメージの方が強いんだよ。

遊輝「はっ?何で?」

負けて罰ゲームを食らいまくっているから。

遊輝「こらあああ!!」

ちなみに遊輝君、緊迫した重要な場面(世界崩壊等)では勝ちますが、自身の進退(部活強制参加・女装・罰ゲーム等)などのプライドや生活に関わるデュエルではめっぽう弱いです。(描写してないところでも負けまくっている)。

遊輝「それ言うな!!!」

いや、だから遊輝の勝率が高い事に俺は疑問を持っている。

しかし奏、20話先に出たレミとほぼ同じ回数デュエルしていたんだな。

遊輝「やつぱりあれかな・・・バイト先で奏のお店をよく使うからかな」

あとは単純に可愛いつて言っている人たちも多みたい。元ネタが響よりも奏の方が好きな人が多いんかな?



遊輝「それにしても、結構分散しているんだな。もうちよい偏っているかと思つていたよ」

俺も正直、奏の方がデュエル回数少ないと思つていたから、こんなに平等にやつているとは思わなかった。

響の方はデッキがあれだから少ないけど、次に少ないのがスバルとはね・・・

遊輝「スバルの場合、記憶に残りやすいデュエルをするからだろ。レミつて所々で決着を早く着けるし」

それはあるかもな。

以上、今回はメインキャラ5人の設定集でした。

遊輝「次回は残りの5人を紹介していくよ。もちろん、龍亞と龍可も含めて」  
ここまでご視聴、ありがとうございました。

## 設定雑談集

## キャラクター編

## part 2

はいどうも、作者のD I C H Iと、

遊輝「この小説の主人公、遠藤遊輝です」

では、今回はメインキャラの紹介part 2です。まずは祈から  
(小等部4人の担当は体験入部の時のを載せてます)

櫻井 祈

年齢：10歳(初登場時) ↓11歳

担当：ドラマ

デツキ

1・・・ジエムナイト(複数所持)

遊輝「祈も好きな読者さんは本当に好きだよな」

この前の人気投票、祈は1位の票2つだけだからね。好きな人は好きなんだろうな。遊輝「祈ってさ元ネタの設定ないんだろ？」

ないよ。アカデミアデュエル大会の時にルール上、龍亞と龍可のクラスにもう1人強い子がいる必要があるから設定したんだ。だからイメージというイメージはないんだけど……そうだな、敢えていうんだったら。

遊輝「敢えていうんだったら？」

響・奏と同じ元ネタのプリキユアシリーズ、『スイートプリキユア♪』に小学校3年の子が1人、メインでいてね。その子から強気な性格と伊達眼鏡を引き算して、髪の色が元ネタは明るい茶色だけど、それを茶色が少し入った黒髪をイメージしてくれたらいいかな。詳しくは『調辺アコ』ってググってね。

遊輝「……またそのネタ？」

いや、何か被るんだよね。

響と奏を使ってさ、祈とこの後紹介する茜も何かあのシリーズのメインキャラに被るんだよ。

遊輝「茜は何となくわからない気もするが、祈はとてもそんな風には思えないな」  
イメージにした元ネタの子が凄い強気な性格だからね。人見知り設定の祈とは相反する性格だから。個人的にはあの4人で、あの衣装で歌歌って踊ってほしいなあと思っ

ている。

遊輝 「変態だあああああ!!!」

こら待て!!!確かに俺は紫BBAみたいな年上じゃなくてフランちゃんみたいなロリ派だけど、そんなやらしい事を思っ言ってるんじゃない!!それに同年代も大丈夫だ!!遊輝 「聞きました奥さん!?!この人、堂々とロリ派と宣言しましたよ!?!」

それ以上広めるな!!何だったらお前が祈の変わりにコスプレしても良いんだぞ!!身長的に女子小学生と間違えられるお前に!!

遊輝 「やめろ!!!」

とまあ・・・そんな感じで、あの4人に関してはそんなイメージを最近は持つてます。響と奏に関しては、『SPLATTON』の『シオカラーズ』でもやっていけると思う。う。

遊輝 「性格ドンピシャに近いもんな。一回、2人で踊って、俺たちでバック演奏しているところを龍亞たちに見せたけど、受けが凄いい良かったもんな」

・・・で、何の話してたっけ?

遊輝 「(ズカッ!) 祈の話だろ!」

ああそうだそうだ。それで名前の由来なんだけど、確かこの時、ミスチルにハマりだした頃でさ〜。

遊輝「……苗字の櫻井はミスチルの桜井さんの本名、祈は当時出たシングル名から取ったんだろ」

その通り!!よく分かってるね遊輝君!!

遊輝「今まで名前つけられたやつの中で一番可哀想だと思うわ……」

何だよ!!お前もファンだろ!!

遊輝「確かにファンだけどき、そういう系の名前の決め方って最近流行りのキラキラネームと同じ発想じゃん。そういう発想が嫌なんだよ」

失礼だな!!別に良いじゃんか!!櫻井も祈も普通にいるだろ!!

遊輝「アーハイソウデスネ」

つたく……祈の人見知り性格については前からこんなキャラ欲しいなと思っていたんだよ。キャラのバランス確保のために。

遊輝「んまあ確かに……弾けている奴多いからな」

少し控え目な性格でも良かったかもしれないけど、それだったら影が薄くなる可能性があつたかもしれないから、人見知りにしたんだよ。

遊輝「デュエルの時は豹変するくせに……」

あれもスバルと当たった後だぞ。スバルと当たる前はアカデミアデュエル杯のように消極的なデュエルだったんだから。

遊輝「俺は知らないぞ（汗）。小等部のことなんてこれっぽちも」

まあ確かに、小等部のデュエル戦績を中等部や高等部が知る必要なんて全くないからな。

遊輝「そうだな・・・そう言えば祈ってファッションデザイナー目指しているとか言っていたな」

あゝ、その設定？大した理由じゃないよ。ただ、やっぱり女の子の憧れを持たせるべきだなと、モデルでも良かったけどファッションデザイナーになりたいという方が希少価値があるし、服に関してはモデルよりも詳しく覚えていくでしょ？

遊輝「確かにそうだな」

そうだね・・・あつ、デツキのことを言ってなかった。祈のジエムナイトって実は2.パターソンあるんだよ。

遊輝「えっ？そうなの？」

1つは罫を入れた万能型、もう一つは完全に尖らせた1k111型。ただ、これは今はちよつと崩しているけど。

遊輝「チェインか？」

そう。ジエムナイトのチェインの依存率がヤバかった。あれ1枚あるだけで、1ター目にジエムナイト・フュージョンを加えられる確率が体感2割ぐらい違った。

遊輝「チエインってさ、ガチ・ファンとわずに色んなデツキに入ったもんな」

あれは優秀なコンボの起点要因だったからね。だからコナミさん、ステイラーとテラフォはマジで勘弁してください。

遊輝「テラフォはともかく、ステイラーの噂は消えないからな……」

正直、悪いのはステイラーじゃなくてΩなんだけど。

遊輝「それは言える」

……ああ、そうだ。何でドラムをやってるんだって言ってなかったな。

遊輝「確かに」

えくとな、小等部4人で持ち担当を想像した時、祈が最後にドラムとして残ったんだよ。

遊輝「またかいな……」

うるさい。龍亞はレミと気があうからベース、恭輔は遊輝の事を師匠って言うしギター、残りは龍可と祈だけど、祈の性格でヴォーカルは重すぎるから龍可にヴォーカルとギター、となると残ったのがドラムってわけ。

遊輝「キーボードって選択肢は無かったのか？」

あるにはあるけど、メロディよりもリズムの方が大事でしょ。

遊輝「……そうだな」

次は恭輔行こうか。

成田 恭輔

年齢：11歳（初登場時）↓12歳

担当：ギター

デツキ

1・・・テラナイト

遊輝「あれだな、part1でもしかしたら奏の実弟になっていた可能性があったって」

それはまあ結果的に奏を出した後の話だよ。確かに、奏の元ネタには実弟がいるけど、なんか恭輔のイメージにはそぐわないんだ。

遊輝「恭輔がメガネを掛けているからだろ」



恭輔のイメージがね……元ネタになりそうなキャラがないんだよ、ちよつとググつてくる。

遊輝「今やるのかよ……」

〃〃検索中〃〃

あつたあつた、見た目が近いのがいたよ。

遊輝「で、誰？」

『ヒーローバンク』というアニメの『天野ナガレ』っていうキャラ。あの子の髪の毛は黄色だけど、それを黒髪にして、メガネをかけているときに恭輔に近いイメージを持てるな。

遊輝「……ああ、そうだな。確かに恭輔に近いな」

イメージはこんな感じ、恭輔の誕生秘話なんだけど、恭輔って実は登場する予定がまるつきり無かつたんだよ。

遊輝「へえ」

(ちなみにこの元ネタの子、女装が完璧だったというのは内緒だぞ)

祈をアカデミアデュエル大会で出して、海外編で茜を出す予定だったからこれ以上は

メインキャラは良いかな?と思った時に、男女比がヤバいことに気づいたんだよ。

遊輝 「男女比?」

もし、恭輔がいなかったなら男女比は男：女 $\parallel$ 3：6になるんだよ。

遊輝 「男1に対して女が2か・・・」

そうなんだよ。さすがに会話するときのバランスが悪くなるから1：1にしようと思つて。6：6はできなくても、4：6ならぎり1：1になるだろうと思つて、恭輔を足したんだ。

遊輝 「それとか、デツキが少し迷走していたのは」

そうなんだよね・・・折角だし、エクシーズ主体にしてやろうと、んで戦士族好きの設定だからどんなテーマにしてやろうかなと・・・確か、当時はまだ「テラナイト」が無かったんだよね。

遊輝 「『ヒロイック』があつたけど、ヒロイックつて色んなカテゴリーと混ぜつていたしな」

だからとりあえず戦士ビートにしていたんだ。それで、ちょうど軽音部が海外旅行で恭輔が行かない時に、さあデツキどうしようかと思つて考えていたら「テラナイト」が出たんだよ。

遊輝 「当時の『テラナイト』は『光天使』を入れた方だけど、作者が組みだした頃は

そこから先のプロトレマイオス時代」

だから、恭輔にはプロトレマイオスを使いまくっていようとした。初戦やる前に禁止になっただけ。

遊輝「いや、当たり前だろ（汗）」

そりゃまあ、なんで縛り付けなかった？という疑問は未だに残ってるけど。マジでテラナイト縛りというエラツタつけて帰ってこないかな。個人的には好きなカードなんだけど。

遊輝「あんなカード、帰ってきたら誰も恭輔には勝てないぞ（汗）」

さすがに対策はするでしょう。

遊輝「まあ・・・そうだな。うさぎは使わないにしても、ブレスルとかデモチェは皆入れるし」

そんな訳で、恭輔君は作者も愛用している「テラナイト」を使っています。

遊輝「恭輔って運良いよな。テラナイト関連のエクシーズモンスター、ほとんど自力で当てたんだから」

恭輔君、最初の頃は運に嘆いていたけど、遊輝と出会ってから明るくなりましたね、ポジティブ思考になって、その結果運勢もぐんぐん良くなりました。

遊輝「最初に保健室であいつにあった時とは思えないほど、今じゃポジティブだよな」

あとは絶対にボケないツツコミ役であること。これ、大事。

遊輝「……………確かにそうだけど(汗)」

そうだな……………恭輔の名前の由来を言っただけでなかったな。

遊輝「恭輔って名前の由来あったか？」

成田はね、確か「逃亡弁護士」って原作があつて、その主人公の名前が成田だったからそこからとった。恭輔の方はね……………自分で作ったんかな？ 適当に文字を打って行ったらこんな感じで恭輔って字が出たんだよね。

遊輝「よくもまあ、キャラ付けを適当に……………(汗)」

そんな細かい設定を最初からしたら途中で路線変更出来ないじゃん。大まかな設定だけはちゃんとして、細かい設定は物語が進んでいくにつれて分かっていくのが一番だよ。

次は海外編から登場、レミの大親友、茜です。

栗城 茜

年齢：12歳（初登場時）↓13歳

トレードマーク：紫のクリップ

担当：ギター・パーカッション・コーラス

デツキ

1・・・ヴェルズ

茜のイメージは祈の時にもいったけど、『スイートプリキュアの♪』メインキャラ、『黒川エレン』の髪をピンクに近い赤にしてクールを取り除いて、元気っ子になったってイメージかな？

遊輝 「なんとなくく見た目は似ているけど、やっぱり性格のところで元ネタと違うんだよな」

茜もね、イメージなんか作らずに作ったキャラだから。最初に決めたことは口癖を付けようと思ったぐらいかな？

遊輝 「あの〇〇っちなか？」

そう。さすがに毎回毎回口癖を付けるのは面倒くさいから名前を呼ぶときでいいや  
と思つて、それで思いついたのがその口癖。

遊輝「最初、マジで戸惑つた・・・(汗)。あんなことを言う奴がいるんだ・・・つて」  
初めて会う人は戸惑うけど、慣れてきたら別にどうつてことないだろ？

遊輝「まあそうだな。今じゃ普通に返事しているし」

あとは、茜のファッションモデルという設定なんだけど、これ実はパリで何かしらの  
イベントを起こそうと思つた時に先にファッションショーが思いついたんだよね。

遊輝「俺はもう黒歴史にしかならなかつたけどな・・・なぜファッションショー  
？」

パリは有名なブランドが多いつていうことだね。とにかく、パリで世界中から注目を  
集めるようなイベントつてやっぱり何かのフェスかファッションショーぐらいだなつ  
て。それだつたらそれで、身内にファッションモデルかファッションデザイナーが必要  
だなと。

遊輝「ああ、まあそうだな。関係者なしでどうやってファッションショーに出るんだ  
だし」

というわけで茜の初期設定には口癖とファッションモデルという二つの設定がつい  
たんだ。あとはレミと仲良しだからどっちかといつたら活発的な性格ぐらいかな。

遊輝「そう考えたら茜は初期設定でほぼ決まっていたんだな」

なんかね、茜はスツと形が決まったんだよ。イメージは相変わらずどうしようか悩んだけど。

遊輝「初期設定と言えればあいつ、なんであんな武闘派なんだ？」

ああ、柔道・空手・合気道の段所有？単純に自分自身の身は自分で守れという考えと、パリで柔道とかそういうのは大流行しているからさ、

遊輝「フランスって確かに柔道強いよな・・・今回のリオではあんまり見てないけど」  
ありや、夜中にやるから詳しい結果分からんよ。

遊輝「うん、正直、俺も寝ている」

じゃあ次は楽器だね。・・・ああ、その前にレミと茜が仲良しという設定から話さないよ。

遊輝「そういえば俺も聞いてなかったな」

もともと、あの二人は響や奏と一緒に幼地味なんだよ。響や奏たちとは別のグループで、あの二人とは小等部の時に仲良くなったんだよ。

遊輝「へえ〜」

幼稚園の年齢の時からすみれさんが茜とレミをファッションモデルとして拉致っていたから。

遊輝「……どこでも絡んでくるな、すみれさん(汗)」

ちなみに、小等部の時に仲良くなった響や奏もその時からすみれさんに拉致られてフアッションモデルをやっていたぞ。

遊輝「……(汗)」

というわけで、レミと茜は幼稚園時代からの幼地味で、レミがギターを弾いて、茜もそれを見てギターを弾きだしたってわけ。

遊輝「それであいつ、ギターの技術が高いんだな……あれがサブなんだから」

あとはパーカッションだね。パーカッションはね、楽器の構成を考えた時に欲しい曲とツインギターの曲があつてね。パーカッションが欲しいな」と。

遊輝「それで茜に？」

そう、メインは遊輝に任せて茜はパーカッションも練習すれば何とかなるかなうつて。

遊輝「パーカッションって簡単そうに見えるけど、結構むずいぞ。色んな楽器の音の出し方を学ばないと行けないし、どのパートにどの楽器を鳴らさなくちやいけないのかつて」

キーボードとパーカッションは楽譜置いているでしょう？

遊輝「まあそうだけど……茜って楽譜置いていたか？」



置いていたよ。両刀でやっているから、どっちかは楽譜を見ないと分からなくなるぞ。

遊輝「俺、パーカッションの楽譜を置いているのとかわざわざ見てない(汗)」

まあ遊輝君はキーボードの前に立つことがほとんどだからな。

ああそうそう、茜の名前の由来をいってなかったな。

遊輝「どうせまた、適当に打ったら出てきたとかだろ？」

栗城はそうだけど、茜は最初から決めていたな。確か、俺の母さんの実家に今は潰れてしまったけど洋食屋があつて、それがアカネって店名だから。

遊輝「……どうでも良かった(汗)」

最後にデツキについて話すか。

遊輝「〔ヴェルズ〕だろ？最初見たときはマジかと思つた」

ヴェルズ自体は遊輝君監修の元、制作されているので完成度は高い方です。その分、エクストラもしっかりしているのべらぼうに高いのですが……

遊輝「それを買つたというすみれさん……(汗)」

まあ実は、本当は茜のデツキ、〔ヴェルズ〕にするつもりじゃなかったんだよ。

遊輝「えっ？」

最初はもっと酷いデツキで行こうかな〜と思つて、それで遊輝君の心をズタボロにし

てやろうと思った。

遊輝「何だ？」

審判入り【魔導】。

遊輝「……………そんな物、勝ち目ねえ……………(汗)」

茜の初デュエルを執筆した段階ではまだ審判は使えた頃でね。でも審判が禁止になって、さすがに禁止カードを使うわけにも行かないから、代用どうしようかな〜と考えて【ヴェルズ】にしたんだ。ヴェルズだと魔導と同等で強いからね。

遊輝「シンクロ・融合しか存在しないこの世界だとオピオンは破格の性能だからな……………」

俺も最初、オピオンはマジで苦勞した。今は大してそんな苦勞しないけど。

遊輝「やっぱりモンスター効果による除去が増えたのが大きいよな」

極め付けはエキセントリック・デーモンだろうな。

遊輝「ああ、分かる。サイクロンと毎ターンならずものは強いもんな」

あれはペンデュラム系のデッキだったら間違いない採育候補にしていると思うな。もちろん、スケールの関係で出ないんだったら論外だけど。

遊輝「最近では低スケール、高スケールで優秀なカード増えてきたけどな」

……………俺たち、何の話からこんな話になったっけ？

遊輝「(ガクツ) 茜がオピオンを使っていたところからだよ!!」  
ああ、そうだったそうだった。

んじゃあ最後・・・どうする？分けた方がいいか？

遊輝「響と奏は元ネタが一緒という理由があつたけど、あの双子ってそこまで一緒じゃないだろ？性格もアニメ本編と大分変わったし」

そうだね。じゃあまずは龍亞君からいくか。

龍亞

年齢：11歳(初登場時) ↓12歳

シグナーの痣：龍の心臓

トレードマーク：黄緑のゴム

担当：ベース

デツキ

1・・・デイフオーマー（複数所持）

遊輝君と会って、原作とは180度人生が変わった子の一人。

遊輝「原作とは違って、より活発、そして何故かすごいイタズラ好きになった。何かしらイタズラされた時の99%原因はコイツ」

え〜とですね、最近は出番は全くないですが龍亞君の覚醒は一気に早めてフォーチュン・カップの時にしました。

遊輝「これの執筆開始した2011年頃、それはそれはこの小説を見ていた読者の方は物凄い驚いてました。『何でコイツ、こんなに早く覚醒したんだよ!?』って」

やつぱり、原作みたいに最終回手前で覚醒とかちよつと可哀想じゃない。ライフ・ストリームなんか出番2回しか無かったんだぞ。

遊輝「内でも出番は少ないじゃないか」

うん、まあ・・・あのカード、「デイフオーマー」には不要だから。

遊輝「言ったああああ!!!はつきり言ったああああ!!!」

さすがにこの世界の「デイフオーマー」にクリスタルとかスターダストとかΩとか入

れないからさ、そのための☆8シンクロで入れているけど、正直、ライフの強制効果が邪魔な時があるんだよね。

遊輝「あの効果、アニメ版だと相手にも影響を及ぼしてしまうからな」

それにね、ライフ・ストリーム出さなくても「デIFOオーマー」の展開力ならLP4 000だとあつという間に持つていけるから。

遊輝「確かに・・・」

ちなみに、龍亞君の「デIFOオーマー」の複数所持ですが、基本的には「シンクロ型デIFOオーマー」と「ボードン装備型デIFOオーマー」の2パターンが基本です。

遊輝「俺がモバホンとスマホンの展開力を教えたら2つ目を作つて、龍可みたいなソリティアを覚えました(汗)」

ちよつと「デIFOオーマー」の話になつちやつたから、話を戻すけど、フォーチュン・カップの地点で龍亞君のデュエルのレベルは既にアニメを超えたという設定でやりました。

遊輝「アニメの龍亞はあんなソリティアをしません(汗)」

すごいだろ・・・これで原作主人公に「未熟者」つて言われるんだぜ・・・

遊輝「こつちの遊星はそんなこと言つてないからな(汗)」

それと、龍亞君にも龍可ちゃんみたいな何か特徴があればいいなと思つて、付けたの

がイタズラ好きです。

遊輝「マジ困る……(汗)」

結果的には結構インパクトは残っていると思うよ？デュエルの技術力上昇して、イタズラが好きだから。

遊輝「インパクトはあるけど、龍可が凄すぎるからな……」

あと、個人的に思うことなただけ。

遊輝「？何だ？」

龍亞君つてさ、絶対に男の娘キャラだよね？

遊輝「……強く否定は出来ないな」

妹と双子だろ？しかもアニメ本編だと無茶苦茶だけど自分から龍可として変装したりさ。

遊輝「いや、あれは化粧濃すぎだ……」

まあ確かに……でも瓜二つだぞ？なのに何で男の娘キャラにならないんだろ？

遊輝「(そんな事知りたくもねえし、知るつもりもないわ……(汗))」

やっぱり他の作品のキャラの方が男の娘としてインパクトあるからかな？ラリーは男の娘キャラとして認められているし。

遊輝「知らねえ……(汗)」

だつてさ、Pixivで魔法少女ネタ扱いされるんだぞ。  
遊輝「それこそ知らねえわ!!!」

んじゃあ、最後に龍可を紹介しましょうか。

龍可

年齢：11歳（初登場時）↓12歳

シグナーの痣：龍の腕

トレードマーク：黄緑のゴム

担当：ヴォーカル&ギター

デツキ

1・・・ライトロード（複数所持）

はい、この小説で一番原作とはかけ離れた皆大好き龍可ちゃんです。

遊輝「他の5D'sの二次創作の小説でもここまで変わってしまった龍可はいないだろうな・・・」

元凶が何を言ってるんだよ。

遊輝「いや・・・目についたのが【ライトロード】だったから（汗）」

まあそうなんだよね。知っている人も多いけど、原作の龍可のデツキって謎だらけなんだよね。

遊輝「妖精デツキとは言っていたけど、さすがにあのままじゃキュアバーンとしてやるしかないのがな・・・」

キュアバーンは事故率が他のコンボデツキと比べて高くなってしまうので、どうしても敬遠したくて・・・

遊輝「んじゃあ、デツキ変えようかと思つた時に最初に思い浮かんだのが【獣族ビート】と【天使ビート】だったな」

ところが【天使ビート】はよく使われて、獣ビートは切り札という切り札がねえ・・・遊輝「グリーンバブーンはもう裁定変わってしまったし・・・」



ボツになってね、じゃあどうしようというときにWikiを見ていたら「ライトロード」に目をつけて、あ〜と思つて。それだったら毎回毎回笑顔でlikerを決める龍可なんて面白そうだな〜、それじゃ、元氣いっぱい龍可君とは言わないけど、そうみたい龍可なんて面白そうだな〜と。

遊輝「これ、龍可が初めて使つた話で、なろうで驚きの感想が多数来たもんな」

うん、まあ・・・驚きしかなかったな。あの龍可がカオスライクを使つて、しかも笑顔で平気にlikerを決めるから、誰もが驚きの声をあげてました。

遊輝「ねえ・・・龍可にはもうボツロボに負けているイメージしかねえ」というわけで今回もメインキャラの戦績を載せてみました。

祈

回数：4回 勝敗：2勝2敗 勝率：50%

恭輔

回数：4回 勝敗：2勝2敗 勝率：50%

茜

回数：3回 勝敗：1勝2敗 勝率：33.3%

龍可

回数：11回

勝敗：6勝5敗

勝率：54.5%

龍可

回数：11回

勝敗：5勝6敗

勝率：45.5%

(カウントした話は第1話〜第110話までの本編のみ、デュエルスタートからデュエル終わりまで、しっかりと描写しているところだけカウント)

遊輝「えっ!? 龍可負け越し!?!」

ちゃんとした話だね、後半、負けが混んでいるなと思ったけど。龍可ちゃん、遊輝や遊星などの主人公キャラとか小説の主要キャラと当たりすぎて負けているんだよね。

遊輝「・・・小説の関係で?」

小説の関係で。だから、個人的にアカデミアデュエル大会の決勝、龍可に勝たせても良かったかもしれないなと思うて。

遊輝「それはそれで大波乱だぞ・・・(汗)」

ちなみに多分、遊輝たち2年の大会は多分、このクラス優勝だと思うぞ。

遊輝「だろうなあ、俺たち出れないし」

先にここでネタバレしますが今回はアカデミアデュエル大会は書きません。これは決定事項です。

遊輝「小説進めるといふ結論に至ったんだ。こっちの小説のアカデミアは基本的にクラスはエレベーター方式で上がっていくから、「アカデミアデュエル大会で優勝したメンバーはその次の年には出れない」という規程（という名の設定）があるんだ」

だから今回は遊輝たちが出れない。同じクラスに茜がいるけど、正直、茜一人でも勝ち上がるのはせいぜい決勝トーナメントまでだよ。

遊輝「基本的に高等部の方がしつかりとした戦術が練られているからな・・・」

でも龍可ちゃん、オーバーキルばかりしているから勝っているイメージしか読者にも与えてないんだよね。

遊輝「それは言える」

龍可ちゃん、遊輝や龍亞の身内での戦績は大体以下の通りかな？（小説外のデュエルも含める）

龍亞：176勝50敗

遊輝：92勝39敗

遊輝「……戦績おかしい(汗)」

いや、しかし龍可ちゃん、喝入れないとダメだな。最近、ちよつと負け過ぎているし。

遊輝「台本書いているのお前だろ(汗)」

フリー対戦は基本的に流れて任せているよ。小等部の4人のライディングデュエルとか、何なら定期テストのデュエルとか。それを見たらやつぱり龍可ちゃん負け過ぎだな。その内龍可ちゃんのフリーデュエルを書くかもしれないけど、こりゃ誰かに喝を入れてもらわないとな。

遊輝「(何だその振り……(汗))」

そうだな……何で龍可ちゃんをここまでメインに押し上げようか話そうか。龍可ちゃんは個人的にすごい好きなキャラの一人だね。

遊輝「やつぱりロリじゃん」

うるせえ、お前もロリコンだろ。精神年齢だと7歳も離れているじゃねえか。小学生と高校生だぞ。

遊輝「……」

その好きなキャラを何とかして活躍させようと思って、そうすると根本的な内向きになると性格を治さないと始まらないと思って、こうやって活発的でI k i i i をかます

龍可ちゃんを思いつきました。

遊輝「まあでも、アニメを見ていた俺は元気になって本当に良かったと思うよ」

龍可ちゃんが頑張って主役級の活躍をするから、人気ランキングも2位と高いし、以外と龍亞の知名度アップにも一役買ってるんだよね。あの双子、やっぱり二人一緒にいることが多いし。

遊輝「そうだな〜」

そのおかげで恋にも積極的に仕掛けることも出来て、無事に二人をカップルに出来ました。バツチリ龍亞君に盗撮されましたが。

遊輝「／／／／お、思い出されるな!!」

ああ、そうそう。カップルと言えばヤンデレ設定を言っておかないと。

遊輝「ヤンデレ・・・うん、ヤンデレだな(汗)」

なんかね・・・遊輝君、無茶することが多いのでストッパー役を付けようと思つて。最初はレミにやつてもらつつもりだったし、今でも時々ストッパー役をやつてもらつているよ。

遊輝「そうだな。最終的にレミがストッパー役だな」

でもね、アルカディア・ムーブメントでレミは出番がないので、誰にストッパー役をさせようかなくと。龍亞君なんか論外だし、やっぱり龍可ちゃんしかいないなくと。そ

うしたら何かしらの特徴がいるなあと。それだつたらニッコニコ笑顔でO☆H A☆N A☆S H Iなんかしたら面白いなあと、それで龍可ちゃんはヤンデレ設定が付きました。

遊輝「O☆H A☆N A☆S H Iはもう・・・嫌だ（ブルブル）」

というわけでキャラクター編はこれで以上です。

遊輝「次が多分最後かな？用語設定や構成設定について話していきます」

もし、何か話忘れがあれば活動報告・メッセージ等でお願ひします。（感想は消される可能性あります）

次回の用語設定と構成設定はまだ執筆中ですので、気長にお待ちください。

遊輝「次回もよろしくお願ひします」

## 設定雑談集

## 用語設定&amp;構成設定など

どうも、作者のD I C H Iです。

遊輝「主人公の遠藤遊輝です」

色々とありました設定雑談集ですが、今回で最終回、用語設定と構成設定について語りたいと思います。

遊輝「まずは構成設定から、今回は大きな構成である「5D'sでエクシーズ」について語っていききたいと思います」

細かな設定もありますがこちらは用語設定で語っていききたいと思います。

さて・・・構成設定と言っても結構喋ってきたからな・・・

遊輝「作者がどうして書き始めたことについての経緯がまだまだだからそこから語ったら良いんじゃない？」

そうだね。まず、作者が二次創作と出会ったキッカケから。

作者が最初に出会ったのは高1の時だね。ちょうどiPodを買ってもらって、一人でネットを気軽に触れるようになった時だな。

遊輝「確かその時「流星のロックマン」にはまっていたんだな」

そうそう。結構やり込んだなく、昔からロックマンをやっている人たちにとつてら流星のロックマンはイマイチというイメージらしいけど、作者は流星のロックマンからやり始めたからこつちの方が思い入れがあるんだよね。一度だけ「ロックマンエグゼ」の作品をやったけど、しつくり来なかつたんだよね。

遊輝「バトルのシステムが違うからだろ」

そうかもな。それで、薄々だけど流星のロックマンの次回作出ないかな〜と期待していたんだ。当時、全く世間知らずの作者でも100%無いだろうなと思っていたけど。

遊輝「それでネットでググったら小説家になろうに流星のロックマンの二次創作と出会ったんだな」

そう。だから私の最初に見た二次創作の作品は遊戯王じゃなくて流星のロックマンなんだよね。「へえ〜、こんな物があるんだ〜」と

遊輝「そこからなろうで流星のロックマンから見始めたな。遊戯王は？」

流星のロックマンを見ていた時にとある作者さんが遊戯王の作品もやっていて、確かコンセプトが「転生者がGXの世界でシンクロ」で、「こんなこともありなんだな〜」と思つて、そこから遊戯王の二次創作も見だしたな。

遊輝「そこから色んな小説を見ていたな」

そう、それで二次創作をみて半年ぐらいして、「俺もやりたいな〜」と思つてきて。



遊輝 「また安易な発想だな（汗）」

うるさい、でも最初は大学入ってからやろうとしたんだよ。入試があつたから。

遊輝 「でも我慢できなかったと・・・」

それでも1年くらいは独学で勉強したよ。コンセプトを練って、他の作者様の作品を見て骨組みや肉つけのやり方、文章の書き方など。

遊輝 「そんなもってやり始めた時がまた唐突だったんだよな」

確か・・・高2の遠足の日だったはず、作者は関西圏に住んでいて、京都の遠足に行った帰りに始めたはずだから。

遊輝 「ほんつと唐突だよな・・・（汗）」

まあ・・・腰は重い方だけど、やる時は本当に唐突だと思ってます（汗）。そんな、やろうと思つて、

遊輝 「あとはもう、俺の紹介の時に行ったな。〔5D, sでエクシース〕って」

作者が見始めた頃はZEXALが始まってエクシース創世記でまだまだシンクロが強かった時代だな。

遊輝 「その時の環境が〔ジャンド〕とか〔ラヴァル〕かな？」

そうそう。まだエクシースが弱いと言われていた時期だから、〔GXでシンクロ〕とかはあつたけど、〔5D, sでエクシース〕は無かつたんだよね。もちろん、5D, sやZ

EXALの二次創作もあったけど、融合・シンクロ・儀式が中心だったな。

遊輝「まあだからほぼ先駆者みたいな感じで始めたんだよ」

今では強いエクシーズモンスターもいっぱい出てきて、色んな作品に出てきてますけど。

あとはもう細かい構成は一章ごとに作ってます。大きな骨組みから始まって話が近づくにつれて細かい骨組み・肉付けという作業をしています。

次は用語設定、先にシークレットシグナーから

・シークレットシグナー

5000年前、赤き竜と共に邪神に立ち向かった5人の異端な能力者。邪神との戦いのあと、赤き竜と共に封印されたが3000年前に星の民にシグナーとしては拜められたのは赤き竜のシグナーのみだった。そのため、歴史の表舞台から消えて、人々の記憶からも消えた。シークレットシグナーはダイヤが命名。

5人の能力者はそれぞれ、太陽を操る力、風を操る力を、大地を操る力、水を操る力、

雷を操る力を手にかけていた。

遊輝「わりとちゃんとした設定だ・・・(汗)」

お前、俺が適当にシグナーの設定を作ったと思っていたのかよ!!!

遊輝「だってその場のノリと雰囲気で物事を決める作者がここまでしつかりとした設定を作ったところ見たことが無いんだもん」

そりゃ・・・そうだけど。

とりあえず、5D'sを元ネタにしたんだからやはりシグナーとの絡みが必要だと思っ  
て、赤き竜のシグナーを追加するか、オリジナルを作るかのどっちかだったんだよ  
ね。

遊輝「あの状況で赤き竜の追加のシグナーは難しいな・・・」

そう、というわけでオリジナルのシグナーにしようと思っただけど、どんなネタで行  
うかなと思っ  
て、何となく自然の力を使おうかなと

遊輝「自然の力？」

何となくだけど、自然の力を身につけたよあという何か分からない魅力に惹かれて  
ね。

遊輝「……なんじゃそりや(汗)」

正確には太陽が先かな？遊輝が太陽の力を付けたら面白いなくと思つて、すぐに出てきたレミは風の力で、それだったら自然の力を身につけたシグナーつていいんじゃないかな？つて思つたんだよ。

遊輝「ふくん。そういうえばシークレットシグナーの名前の由来は？」

とりあえず、初期設定には名前の設定が無いというのは決まっていた。最初は赤き竜と一緒に戦つたシグナーというところからだな。そこから封印が解かれて、久しぶりに表舞台に立つたから、封印されたシグナー＝隠されたシグナー＝秘密のシグナー＝シークレットシグナーつてなつていった。

遊輝「また発想が安易……(汗)」

それがね、何かしつくり来たんだよ。何でか分からないけど、これ以上考える必要が無いくらいに。

遊輝「そうやってあんまり考えようとしなからダメなんだろうが」

うるさい！

次はシークレットシグナー関連で宝石と覚醒

## ・宝石と覚醒

シークレットシグナーの5人には胸に宝石があり、それぞれ能力が覚醒する時に輝く。太陽の能力者は生命の力、風の能力者は時間ときの力、大地の能力者は植物の力、水の能力者は氷の力、雷の能力者は光の力を手に入れた。

遊輝「これ、本当に唐突だったよな」

すびばるで「シグナーの龍の進化」っていうオリカについてアンケート取ったところ、「出して欲しい」っていう意見が多数頂いたから、「覚醒するんだったら、ついでだから能力も覚醒させようか」と思ってる。

遊輝「いや、いらんだろ？」

あつても良かったし、無くて良かった……どっちもどっちだね。

遊輝「アツハイ……」

といつてもお前が東方に行く時にもう決まった設定だぞ。

遊輝「えっ？結構早いな」

確かに生命の力で神経を変えたりするネタはあったけど、実はあれ、原案違ってたんだよね。

遊輝「?何だよ?」

お前、フランちゃんと一対一で戦っただろ?

遊輝「そうだな。確か俺が生命の力で神経を強化させて勝ったという話」

あれ、本当の原案はもつとグロかったぞ。

遊輝「何だ?」

お前の片腕、身体と真つ二つ。

遊輝「………マジで? (汗)」

マジで。

遊輝「そんなことされたら俺、発狂していたわ…… (汗)」

台本は発狂せんとそのままフランを説得するということ設定だからそのままやってもらうつもりだったぞ。

遊輝「(マジでか…… (汗) 台本違って良かった……)」

んで、そのままだとマズイから遊輝自身の治癒力も生命の力、霊力を使って1ヶ月くらいで腕もどきに再生させようという原案だったけど、さすがに現実的じゃないからボツになりました。

遊輝「そんな事になったらマジヤバイ…… (汗)」

まあそんなわけで遊輝君だけじゃマズイだろうと思って、そこからは早かったな。響

は水だけじゃ無くて氷もいるだろうと氷、奏も雷が行けるんだったら光が行けるだろうと光、レミは最初は植物にしようと思ったけど、咲夜さんの影響で時間に、スバルはその余った植物にしました。

遊輝「早い早い早い」

じゃあ次、バンドグループ、SECRET

・SECRET

デュエルアカデミアネオドミノシティ校の中等部軽音楽部のバンド名。リーダーはレミ。

ボーカロイド全盛期の時代に、昔ながらの楽器を使った演奏で世界中の音楽ファンを虜にした。また、メンバーの技術も高く、音楽関係者も一目置いている。

遊輝「なあ、何でもここまで大きくなったんだ？（汗）一部活動の活動なんだぞ」  
まあまあ、これは小説なんだから。

遊輝「その小説で生活している俺らにとっては大迷惑なだけで（汗）」

いいじゃんいいじゃん。バンド結成については第93話をご覧ください。

じゃあまず、何で部活をしようと思った経緯から入るか。

2章でアカデミア編に入る時にWRGPの関係でオリキャラを出そうと思った、これは前にもチラッと言ったな。

遊輝「そうだな。それでレミやスバル達が出てきたんだな」

ところがな、それだけにすると「影の薄い人」とか「グループに割れる」という問題点が出てくるんだよな。

遊輝「ああ、そうかもな。俺の場合、バイトの関係で奏と一緒にいることが多いし」  
そう考えたらさ、読者の立場的には「このキャラ、必要なの？」という疑問点がでてくるんだ。

「何とかして空気にならず、グループ分けもなくて、グループとして大きく活動できることはないかな？」と考えた時に、「だったら部活をやればいいんじゃないか？」と思って。

遊輝「部活はネタにしやすいし、よほどのことがない限り、サボることもないから全員で活動することが基本となって、誰かが空気になったり、グループ分けも無くなるか



らな」

人気ランキングでも、票の差が出るのは分かっていたけど、全員に投票されたのは嬉しかったな。こういう面で成果が出たから。

遊輝「まあそれは良かったけど、何で軽音楽部？」

部活をネタにするにあたって、まずは運動系を外そうと思った。細かいルールは知らないし、描写力もない。何より、運動系の部活は特性上、人数が多いから余計にオリキャラを作る必要があったんだよ。

遊輝「ああ、なるほどね。それだったらさっきの「こいつ、必要？」と繋がるのか」そうそう。もちろん、少数の運動系の部活もあるけど、基本的には無いからね。そうになると文化系になって、何しようかなと、文化系だけど校外でも目立つような部活は・・・と思ったのが軽音部なんだよね。ちょうど、「けいおん！」に興味を持ち始めた時だったし。

遊輝「本当の理由はそれじゃね？」

まあ「けいおん！」自体、結局見ませんでした、

遊輝「(ガクツ!) 見ていないんかい・・・」

そうだな・・・セトリリストについても少し説明するか。これに関しては作者の興味などが入ってしまうから大きくは言えないけれど。セトリリストは基本的に大衆が

知っていいそうな有名アーティストの有名な曲を中心に作ってます。知らないアーティスト、またら有名アーティストでも知らない曲となると、イメージがしづらいので。

それじゃ、奏のお店についても語っていきますか。

・奏のカップケーキ屋

元ネタから借りた。

元ネタのお店の構成などがよく分かってないので、お店の構成・メニューは変えていく。小さな個人経営のお店で中に小さな円形のテーブル2つとその周りに椅子が2〜3脚ある。日本では珍しいカップケーキ屋なので雑誌の取材などを受けてそこそ有名。奏のお父さんはパリやロンドンで修行をしているので腕は確か。

遊輝「これ、ほとんど元ネタから借りたんだろ？」

設定だけかな？俺、そこまで元ネタを見ていないから元ネタがどんなお店か知らないんだよね。だからお店の構成・メニューとかはオリジナル。基本的にシヨーケースの中に15〜20種ぐらい並べてあって、日替わりが5種、季節限定のメニューもあって、総数は80手前かな？

遊輝「このさあ、新作が出る度に味見をさせられるの何とかならないかな？（汗）。毎回毎回3〜5個ぐらい食べさせられて腹いっぱいになるんだが」

知らんがな、奏のお父さんに言え。

あと、読者の方がどれだけカップケーキのイメージを持つているか知りませんが、奏のお店のコンセプトは「人工系の調味料を使わずに果物や自然界の砂糖などでほのかな甘さを出すカップケーキ」をモットーにしています。

遊輝「これ、作者が大学の英語の先生がドイツに言った話を聞いたんだけど、ヨーロツパって砂糖を大量に使うんだよ。代表的なのがチョコレートケーキ。日本だとビターなチョコレートケーキが多いけど、ヨーロツパだとチョコレートケーキにも大量の砂糖が使われるんだ」

だから、ヨーロツパよチョコレートケーキには横に生クリームが添えられているんだ。「何で生クリーム？」って思うかもしれないけれど、生クリーム自体は全然甘くなくて、チョコレートケーキの口直しで食べるんだよ。そうしないと、余りにも甘すぎて全

部食べられないらしい。

遊輝「そんな感じでヨーロッパやアメリカのカップケーキは砂糖を大量に使ったりして、何ていうか生地を中心としたカップケーキなんだけど、奏のお店のカップケーキはどっちかと言ったら日本向けで果物とかデコレーションされているんだ」

やっぱり日本人相手に売っているから日本向けにしないかね。

遊輝「そうだな」

以上で用語設定と構成設定について終わります。

遊輝「これにてU A 1 0 万突破記念の雑談集を終わりたいと思います。ここまで読んで頂きありがとうございます。これからもよろしく願います」

## 番外編

## 新年デュエル初め

龍可

side

「というわけで新年最初のデュエル初めをやるわよ!!」

「「「いええええええい!!!」」」

「皆さん、うるさいですよ(汗)。今、夜中の2時ですよ」

「細かいことを気にするな恭輔!!今日は元旦だぜ!!パ〜と叫ぼうぜ!!Happy new year!!」

現在、1月1日の午前2時・・・

司会となつているレミさんの掛け声で響さんとスバルさん、龍亞はハイテンションになった。

新年になつてから2時間経つた。今年の正月は遊輝が精霊世界でやらなくちゃいけないことがあるらしく、暫く帰つてこれないと言つて残念な気持ちだったけど、帰つてからしばらくは好きなことをさせてくれると言つてくれたので、その時にも思いつき甘えよう。

今は遊輝を抜いた軽音部の皆さんに祈と恭輔、すみれさんも来て私の家で大晦日の日の入りから元旦の日の出までずっとパーティーをしている。もし寝たら、すみれさんのドツキリグッズによって強制的に起こされてしまう（そもそも、わさびを鼻に突っ込むと言われた時点で、みんな恐ろしくて眠気なんか吹っ飛んだと思う）。

「つていうわけで今年最初のデュエルは誰がやる?」

「はいはいはい!!!俺!!俺がやりたい!!」

「対戦相手は?」

「龍可!!!」

「えっ?私?」

「今年の初デュエルで勝って、今年こそ龍可に年間で勝ちたい!!」

「!!!絶対に無理だな(だね)(ね)!!!」

「みんな酷い!!やってみないとわからないでしょ!?!」

「大体結果見えているわよ」

「そういうのをフラグというのよ」

「俺は遊輝と違ってフラグクラッシュャーだから大丈夫!!」

「まくたフラグを建ててる・・・(汗)」

「というわけで龍可!!やるぞ!!」

「ハア・・・ちよつと待つて」

やる気満々の龍亞はいつのまにかデュエルディスクを腕につけて起動している。しょうがないので私も一度、部屋に戻ってデュエルディスクを取りに行き、ベランダに戻って龍亞と対峙する。

「いづくぞー！」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

龍亞                   LP                   4000                   龍可                   LP                   4000

「先行は私、ドロー」

手札                   6枚

「・・・強つ!？」

「えっ?」

「て、手札が強すぎる・・・(汗)。まずは魔法カード、隣の芝刈りを発動」

「あゝ!!!」

「・・・これは龍亞君、終わったわね(汗)」

「デッキ枚数教えて、私54枚」

「・・・35枚(汗)」

「じゃあ私は龍亞のデッキ枚数と同じになるようにデッキの上からカードを墓地に落と

すわね」

「悪いけど俺も一緒に確認していい？せめてもの抵抗を……」

「まあいいわよ」

そう言つて私のデュエルデスクが動いて、デッキの上から19枚のカードが少し飛び出す。それを私は抜き取つて、龍亞の所に近づく。お互いに1枚ずつ確認して、私の墓地に落としていく。

「これでいいわよね。戻るわよ」

「……」

「る、龍亞さん、顔が青ざめていますよ(汗)」

「どうしたんだよ龍亞」

「……もう勝てる見込みがない(涙)」

「墓地に落ちたライトロード・ビースト ウォルフ2体とEmトリック・クラウン、ライトロード・メイデン ミネルバ、エクリップス・ワイバーンの効果発動！ビースト2体とトリック・クラウンを特殊召喚、ミネルバはデッキトップを墓地に送るわよ。そしてエクリップス・ワイバーンの効果で裁きの龍を除外！」

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100 ×2

Em トリック・クラウン 攻1600↓0



墓地に落ちたカード

・ギヤラクシー・サイクロン

「その後、トリック・クラウンの効果で私は1000ポイントのダメージを受けて、墓地のサウザンド・ブレードの効果発動！ダメージを受けた時、このカードを攻撃表示で特殊召喚する！」

龍可 LP 4000↓3000

H・C サウザンド・ブレード 攻1300

「……レミツチ、私は夢を見ているのかな？ たった1枚のカードで4体のモンスターがでてきたのだけど」

「大丈夫、これは現実だから」

「これはどつちを先に使おうかな……強欲で貪欲な壺。デッキの上から10枚を外して2枚ドロ」

龍可 手札 5枚↓7枚

「あつ、いいの引いた。魔法カード、光の援軍！ デッキの上から3枚を墓地に送ってルミナスをサーチ！ Lv4のトリック・クラウンとサウザンド・ブレードでオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ 光の聖者が人々の女神とな

る！エクシーズ召喚！ライトロード・セイント ミネルバー！

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

「ミネルバの効果発動！オーバーレイ・ユニットを取り除いてデッキの上から3枚を墓地に送り、その中の《ライトロード》の枚数ドロウできる！」

墓地に落ちたカード

・仁王立ち

・妖精伝姫フェアリーテイルーシラクキ

・ソーラー・エクステンジ

「さすがになかった・・・」

「いやいやいや!?なにこの落ち方!?!」

「ライトロード・サモナー ルミナスを召喚！」

ライトロード・サモナー ルミナス 攻1000

「ルミナスの効果発動！手札のライトロード・アーチャー フェリスを墓地に送ってライトロード・アサシン ライデンを特殊召喚！」

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700

「ライデンの効果発動！デッキの上から2枚を墓地に送る！」

墓地に落ちたカード

・左腕の代償

・グローアツプ・バルブ

「Lv3のルミナスにLv4のライトデンをチューニング！」

☆3

+

☆4

||

☆7

「聖なる光の守護者 正義の心を龍に宿り永遠となれ！シンクロ召喚！ライトロード・アーク ミカエル！」

ライトロード・アーク

ミカエル

攻2600

「墓地のグローアツプ・バルブの効果！デッキの一番上のカードを墓地に送り特殊召喚！」

墓地に落ちたカード

・D・D・R

グローアツプ・バルブ

攻1000

「Lv7のミカエルにLv1のグローアツプ・バルブをチューニング！」

☆7

+

☆1

||

☆8

「聖なる古の超能力者 今交わりてこの地に蘇る！シンクロ召喚！PSYフレームロード・Ω！」

PSYフレームロード・Ω

攻2800

「カードを1枚伏せてターンエンド!」

龍可 手札 4枚 LP 3000 デッキ残り枚数 11枚

【モンスターゾーン】

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100 ×2

ライトロード セイント ミネルバ 攻2000

PSYフレーム・ロード Ω 攻2800

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「……デツキの残り枚数、何枚?」

「11枚」

「おかしいな……龍可のデツキ枚数60枚のはずなのに、なんで残り枚数が1/6まで減ってるんだ……」

「龍亞君、分数できたんだね」

「俺のことをバカにしすぎでしょ響さん!!! ああもう!! 俺のターン!!!」

龍亞 手札 6枚

「スタンバイフェイズ、PSYフレームロード・Ωの効果。裏側で除外されている超電磁タートルを墓地に、さらに墓地の仁王立ちの効果。このカードをゲームから除外してPSYフレームロード・Ωを選択。さらにPSYフレーム・Ωの効果。このカードと右側から2番目のカードを私のスタンバイフェイズまで除外」

「ああああ!!!モバホンが!!!」

「モバホンは痛いなあ……しかも仁王立ちの効果を受けたΩが除外されたし……」  
 「ううう……仕方ない……チューナーモンスター・D・スコープンを召喚!」

D・スコープン 攻800

「スコープンの効果発動!」

「良いわよ。シンクロ召喚の時にシラユキで止めるから」

「う、うわあ……予告シラユキ……(汗)」

「……D・ステープランを守備表示で特殊召喚」

D・ステープラン 守1400

「どうするの?」

「……どつちにしろ俺の負けじゃん!!カードを2枚伏せてターンエンド!!」

「エンドフェイズ時、墓地のシラユキの効果発動。墓地の魔法カード6枚とエクリプス・ワイバーンを除外してこのカードを特殊召喚」

妖精伝姫ーシラユキ 攻1850

「シラユキの特殊召喚成功時、フィールドのモンスターを裏側守備表示にできる。ステープランを裏側守備表示ね。除外されたエクリプス・ワイバーンの効果で除外されている裁きの龍を手札に。さらに同じエンドフェイズ、速攻魔法、ツインツイスター。ハーピィの羽根箒を捨てて、伏せカード2枚を破壊」

「オウフ……」

龍亞 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

D・スコープン 攻800

裏側守備モンスター (スコープン)

【魔法・罨ゾーン】

なし

「私のターン、ドロー！」

龍可 手札 5枚

「スタンバイフェイズに除外されているΩとモバホンは元に戻る。うくん……ミネル

バ使うのな・・・まずはLv4のウォルフとシラユキでオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！恐牙狼  
ダイヤウルフ！」

恐牙狼ダイヤウルフ 攻2000

「恐牙狼ダイヤウルフの効果発動！オーバーレイ・ユニットを取り除いて自身と裏側守  
備のステープランを破壊！墓地のジェット・シンクロンの効果発動！手札のソーラー・  
エクステンションを捨てて、墓地からこのカードを特殊召喚！」

ジェット・シンクロン 攻500

「Lv4のウォルフにLv1のジェット・シンクロンをチューニング！」

☆4

+

☆1

||

☆5

「聖なる幻想の守り人 生命の危機を感じ争いに終結を告げる！シンクロ召喚！生誕  
せよ！幻層の守護者 アルマデス！」

幻層の守護者 アルマデス 攻2300

「墓地のシラユキ2体の効果発動！墓地のカードを14枚除外して、墓地からこのカ  
ード達を特殊召喚！Lv4のシラユキ2体でオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！交響魔人マエストローク！」

交響魔人マエストローク 攻1800

「ねえ龍可ちゃん、なんで打点の低いマエストロークなんか出したの？」

「場を開けたかったからです」

「だったらミネルバ使ってクラウンブレードを使えば良かったんじゃないの？」

「いえ、このカードがあつたので。紅蓮魔獣ダ・イーザを召喚」

紅蓮魔獣ダ・イーザ 攻？

「あつ……………」

「紅蓮魔獣ダ・イーザの攻撃力は除外されているカードの枚数×400ポイントアップするー！」

「ちよ、ちよつと待てよ!?!ゴードンにシラクキ3回……………」

「仁王立ちとかジェット・シンクロンも除外されていますよね……………」

「……………除外されているカードの枚数は32枚」

紅蓮魔獣ダ・イーザ 攻?↓12800

「……………」

「バトル！全てのモンスターでダイレクトアタック！」



龍亞 LP 4000↓1200↓1800↓3100↓4900↓1  
7600

WIN 龍可 LOS 龍亞

「……酷いよ、俺、何もしていないのにサンドバッグ状態でボコボコにされたよ（涙）」  
「る、龍亞さん!!しつかりしてください!!（汗）」

「こ、こういう時もありますよ!!僕たちだってやられるんですから!!（汗）」

「……去年から同じような負け方で15連敗している（涙）。おかしいだろう……  
何で毎回毎回、隣の芝刈りを初手に引いているんだよ……」

「ドローカードで引きまくっているからよ（汗）」

「何枚ドローカード入っているの?」

「強欲で貪欲な壺が2枚、埋葬呪文の宝札と壺の中の魔術書、天の落とし物で1枚ずつに手札抹殺も1枚、成金ゴブリン3枚にソーラー・エクステンジ3枚、そこから隣の芝刈り3枚とそれをサーチする左腕の代償を3枚手札に引き込みます」

「ドローカード11枚に墓地肥やしカードがそれプラス光の援軍とおろかな埋葬……  
それだけあれば60枚でも回るわね」

「それに龍可ちゃん、初ターンに何が何でもミネルバを出す構築をしているからそれを考えても回るわね……」

「結果的に60枚でもちちゃんとした構築なら回るってことよ」

「じゃあ次は誰がやる？」

「俺がやるぜ!!相手は誰がやる!?!」

「それじゃ僕がやりますよ。じゃあ……いつもと違うデッキにしてみますか」

「いつもと違うって……テラナイト以外何かあったの？」

「授業の時に使ったデッキが中々の完成度でして、サブデッキとして崩さずに持つようになつたのです。ただ、プレイングが凄いですけど……」

「……ああ、あの害悪デッキね」

「龍可さん!!害悪は酷いですよ!」

「いや、あのエースモンスターは害悪でしょ(汗)」

私の気持ちを言ったら龍亞と祈が大きくうなづいた。だって恭輔君のサブデッキ、もしかしたらテラナイト以上にメタ要素があるからかもしれない……私たちが脇に移動して今度はスバルさんと恭輔君が対峙する。

「いくぞ恭輔!」

「はい!」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

スバル LP 4000 恭輔 LP 4000

「じゃあ僕から行きますね。ドロー」

恭輔 手札 6枚

「う〜ん……………キーバーツが来なかった(汗)」

「ありやく、事故?」

「いや、事故じゃないのですが……………時間かかりそうですね。豪雨の結界像を召喚」

豪雨の結界像 攻1000

「ご、豪雨の結界像?」

「ええ、このモンスターがいる限りお互いに水属性モンスター以外は特殊召喚できません」

ん

「……………最近、俺に対するメタが酷すぎじゃないか」

「カードを4枚伏せてターンエンド」

恭輔 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

豪雨の結界像 攻1000

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 4枚

「もう、スバルを妨害する気満々ね」

「どう突破しようか・・・ドロロー！」

スバル 手札 6枚

「スタンバイフェイズ、永続魔法、魔封じの芳香」

「オウフ!?」

「このカードがある限り、お互いに魔法カードは罨カードのように1度伏せて、次のターン以降しか使えません」

「ひ、HEROメタ・・・(汗)」

「仕方ねえ・・・E・HERO エアーマンを召喚！」

E・HERO エアーマン 攻1800

「エアーマンの効果発動！デツキからアナザー・ネオスを手札に加えて、バトル！エアーマンで豪雨の結界像に攻撃！」

「リバースカードオープン！罨カード、パージエストマ・カナディア！相手のモンスター1体を裏側守備表示にします！」

エアーマンが攻撃をしかけたけど、その前に何かの化石みたいな物が現れてエアーマンを裏側守備表示にした。

「くう……あいつは処理しなかったな……カードを5枚伏せてターンエンド」

「5伏せ!？」

「いや、響つち。魔封じの芳香がある以上、そうせざるうえないよ(汗)」

「じゃあエンドフェイズ時、罨カード、針虫の巣窟! その発動にチェーンして墓地のパージェストマ・カナディアの効果発動!」

「ハッ!? さつき発動した罨!？」

「《パージェストマ》は共通効果で、罨カードが発動した時、墓地のこのカードを水属性・水族・攻撃力1200・守備力0の通常モンスターとして墓地から特殊召喚できます!」

パージェストマ・カナディア 攻1200

「この効果で特殊召喚したモンスターはフィールドから離れたら除外されます! まあエクスリーブ召喚すれば関係ありませんが」

「……嫌な予感しかしねえな(汗)」

「そして針虫の巣窟の効果でデッキの上から5枚を墓地に送ります!」

墓地に落ちたカード

- ・ パージエストマ・オレノイデス
- ・ 和睦の使者
- ・ パージエストマ・ピカイア
- ・ パージエストマ・オレノイデス
- ・ 粹カエル

「……なあ、怪しいカードしか落ちてないんだが（汗）」  
 「そういうデッキですから」

スバル 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

裏側守備モンスター (エアーマン)

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 5枚

「僕のターン、ドロー！」

恭輔 手札 2枚

「・・・強っ!? 鬼ガエルを召喚」

鬼ガエル 攻1000

「うわっ!? 《カエル》!?」

「鬼ガエルの効果、デッキから2枚目の鬼ガエルを墓地に送ります。そうですね・・・鬼ガエルの効果! 自身を手札に戻してこのターン、鬼ガエル以外の《ガエル》モンスターをもう一度通常召喚できます! まあ手札にこのカード以外のカエルはいませんが」

「そんな事より鬼ガエルが手札に戻ったことがまずいわね・・・」

「墓地の粹カエルの効果発動! 墓地の鬼ガエルを除外して、このカードを特殊召喚します!」

粹カエル 攻100

「Lv2のパージエストマ・カナディアと粹カエルでオーバーレイ!」

☆2 × ☆2 || ★2

「2体の水族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築! エクシーズ召喚! 餅カエル!」

餅カエル 攻2200

「出た!!! 害悪モンスター!!!」

「害悪って言わないでください!! バトル! 豪雨の結界像で裏側守備のエアーマンを攻撃

！」

「リバースカードオープン！罨カード、次元幽閉！」

「どうせ除去されるならこうします！餅カエルの効果発動！1ターンに1度、相手が魔法・罨・モンスター効果をを使用した場合、自分フィールドの水族モンスター1体を墓地に送って無効にします！」

豪雨の結果像が裏側守備のモンスターを攻撃しようとしたが、その前に次元幽閉が現れる。吸い込まれそうになったけど餅カエルによって豪雨の結果像が消えて次元幽閉が消えた。

「その後、この効果で無効にしたカードを僕の場合にセットします！」

「ハッ!?」

「次元幽閉は僕のフィールドにセットされます！」

餅カエルが無効にした次元幽閉のカードを持ち帰って恭輔の場にセットされた。

「うっわく・・・(汗)」

「あれが害悪と言われる所以よね・・・(汗)」

「バトル続行！餅カエルで裏側守備モンスターを攻撃！」

「ぐうう!!エアーマンが!!」

「カードを1枚伏せてターンエンド！」



恭輔 手札 1枚（鬼ガエル）

LP 4000

【モンスターゾーン】

餅カエル 攻2200

【魔法・罨ゾーン】

魔封じの芳香

伏せカード 3枚

「どんどんと圧倒していくわね……」

「俺のターン！ドロー！」

スバル 手札 2枚

「スタンバイフェイズ、餅カエルの効果発動！自分・相手のスタンバイフェイズにオーバレイ・ユニットを1つ使って、デッキから《ガエル》モンスターを特殊召喚します！魔知ガエルを守備表示で特殊召喚！」

餅カエル OVR 2↓1

魔知ガエル 守2000

「どんどん制圧されていくぜ……E・HERO アナザー・ネオスを召喚！」

E・HERO      アナザー・ネオス      攻1900

「そしてこのカードは手札が1枚の時、手札から特殊召喚できる！E・HERO      バブルマンを特殊召喚！」

E・HERO      バブルマン      守1200

「リバースカードオープン！ミラクル・フュージョン！」

「……良いですよ」

「フィールドのバブルマンと墓地のエアーマンで融合！E・HERO      アブソルート

Zeroを融合召喚！」

E・HERO      アブソルートZero      攻2500

「これまた強いモンスターを……」

「バトル！Zeroで魔知ガエルに攻撃！」

「リバースカードオープン！神風のバリアーエア！フォーサー！相手の攻撃宣言時、相手の攻撃表示モンスターを全て手札に戻します！」

「なっ!？」

「さらにチェーンで墓地のパージエストマ・オレノイデスの効果！このカードを特殊召喚します！」

パージエストマ・オレノイデス      攻1200

アブソルートZeroが攻撃しようとしたが、恭輔の場にバリアが張られてその攻撃が跳ね返りスバルのフィールドのモンスターを全てバウンスした。

「クソツ……Zeroの効果発動！」

「餅カエルの効果発動！」

「あああ?!?!忘れてた!!!」

「スバル……(汗)」

「魔知ガエルをリリースしてZeroの効果を無効にします！」

餅カエルが魔知ガエルをリリースされて、Zeroが吹雪を出そうとしたが無効にされてしまう。

「ぐうう……た、ターンエンド……」

スバル 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

なし

【魔法・罠ゾーン】

伏せカード 3枚

「僕のターン、ドロロー！」

恭輔 手札 2枚

「スタンバイフェイズに餅カエルのオーバーレイ・ユニットを1つ使って、デッキから鬼ガエルを特殊召喚！鬼ガエルの効果でデッキから2枚目の魔知ガエルを墓地に送ります！メインフェイズに入って、手札の鬼ガエルを召喚！効果で2体目の粋カエルを墓地に送ります！Lv2の鬼ガエル2体とパージェストマ・オレノイデスでオーバーレイ！」

☆2

×

☆2

×

☆2

||

★2

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！パージェストマ・アノマロカリス!!」

パージェストマ・アノマロカリス 攻2400

「アノマロカリスの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使って、真ん中の伏せカードを破壊します！」

「……ガード・ブロックだ」

「リバースカードオープン！強欲な瓶！さらに墓地のパージェストマ・ピカイアの効果！墓地から特殊召喚します！」

パージェストマ・ピカイア 攻1200

「強欲な瓶で1枚ドロー!」

恭輔 手札 1枚↓2枚

「パージエストマ・アノマロカリスの効果!自分の罨カードが魔法・罨ゾーンから墓地に送られた時、デッキの一番上をめくってそれが罨カードの場合手札に加えます!デッキの上は……シエイプシスター!罨カードですので手札に加わります!墓地の粹カエルの効果!鬼ガエルを除外して特殊召喚!Lv2の粹カエルとパージエストマ・ピカイアでオーバーレイ!」

☆2 × ☆2 || ★2

「2体の水族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!エクシーズ召喚!餅カエル!」

「うわく……(汗)」

「絶望の2体目……(汗)」

「これでバトル!餅カエルからダイレクトアタック!」

「何も無い!!!」

スバル LP 4000↓0

WIN 恭輔 LOS スバル

「何だったの伏せカード？」

「融合とヒーローの遺産……墓地にいないから使えない」

「そりゃ災難だったわね。トップは？」

「……壺の中の魔術書、次が」

「魔封じがあるから使えませんよ」

「……やばい、魔封じの芳香に対するヘイトが上がっていく」

「私も堕天使使っている身として、魔封じは嫌なカードね……(汗)」

「じゃあ次誰がやる!？」

「私!! 私やりたい!!」

「響つちかく、じゃあ誰がやる?」

「私が相手してあげるわ」

「レミね。今年も新年早々アイス・スプラッシュを食らわせてあげるわ!」

「返り討ちしてやるわよ」

恭輔君とスバルさんが変わって、今度はレミさんと響さんが対峙してデュエルデイスクを起動させる。

「いくわよ!」

「デュエル!!?」 「デュエル!!?」

響 LP 4000 レミ LP 4000

「先行は私!ドロー!」

響 LP 4000

「うーんと・・・そうだな・・・魔法カード、氷結界の紋章!デッキから氷結界の軍師を手札に加えてそのまま召喚!」

氷結界の軍師 攻1600

「軍師の効果発動!手札の氷結界の破術士を墓地に送って1枚ドロー!」

「あくもう、デブリの布石ね」

「カードを2枚伏せてターンエンド!」

響 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

氷結界の軍師 攻1600

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

「めんどくさいわね・・・ドロー！」

レミ 手札 6枚

「・・・微妙ね」

「そのままターンエンドでもいいわよ」

「絶対にしないわよ！うくん・・・まあこれからだよ。速攻魔法、サイクロン。左側の伏せカードを破壊」

「あゝ、奈落が・・・」

「それと魔法カード、テラ・フォーミング」

「どこが微妙なのよ!？」

「デツキから竜の渓谷を持ってきてそのまま発動！手札のアキュリスを捨ててフアランクスをサーチ！魔法カード、調和の宝札！手札のフアランクスを捨てて2枚ドロー！ドラグニティーレギオンを召喚！」

ドラグニティーレギオン 攻1200

「それ今一番困るやつ！」

「レギオンの効果で墓地のLv3以下の《ドラグニティ》ドラゴン族モンスターを装備する！アキュリスを装備して、レギオンのさらなる効果！装備カードを墓地に送って氷結



界の軍師を破壊！さらにアキュリスの効果で残りの伏せカードを破壊！」

「うわ……激流蘇生も……」

「これ……レミミ下手したら勝つんじゃない？」

「で、でもレミさん、レギオンを通常召喚した以上、これ以上展開出来ないのでは？」

「フィールドのレギオンを墓地に送り、ドラグニティアームズミスティルを特殊召喚  
！」

ドラグニティアームズミスティル 攻2100

「あつ、すみません。私訂正します。これ終わりですね」

「祈ちゃん!!」

「ミスティルの効果で墓地のファランクスを装備！ファランクスの効果で自身を特殊召喚！」

ドラグニティファランクス 攻500

「Lv3のレギオンにLv2のファランクスをチューニング！」

☆3

+

☆2

||

☆5

「未知の土地を侵掠するための最終兵器が地上に降臨する！シンクロ召喚！カモン！」

A・O・J カタストル！」

A・O・J カタストル 攻2200

「……おい、微妙って言いながら私負ける未来しか見えないけど（汗）」  
「バトル！全てのモンスターでダイレクトアタック！」

響 LP 4000↓0

WIN レミ LOS 響

「レミ……、それは無いわよ……!!!」

「いや、まさか行けるとは思わなかった。調和の宝札のおかげだね」

「やつぱりドロカードとサーチカードは重要ね……」

「それは龍可さんのデュエルで身に染みるほど理解しました」

「恭輔のテラナイトだってほとんどドロとサーチのカードだらけじゃないか!!」

奏さんの見解に恭輔君が例を付けて返事したがそれに対して龍可は大きく突っ込んだ。恭輔君のデッキも確かにドロやサーチカードは多いけど、どっちかと言ったら相手を妨害するカードが多い気がするのだけどね……

「じゃあ次!!!奏つちと祈つちやったら!!?」

「わ、私ですか!!?」

「ちようどいいわね。私もやりたくなってきたところよ」

茜さんに指名された奏さんは同じくやる気満々でデュエルディスクを起動させる。祈の方も少し驚いた様子だったが、すぐにカバンからデュエルディスクを取り出した。

「行くわよ!」

「デュエル!!?」

「デュエル!!?」

こうして、元旦の夜は更けていった……

## クリスマス番外編      シークレットライブ      in

## Merry Christmas

## No      side

「とういわけで遊輝ちゃん!!!次はこのお店に行こう!!」

「ま、待てこら……」

精霊世界……魔法都市グリモワール、12月24日、世間で言うクリスマスイブで行き降るこの街。さながらホワイトクリスマスだ。

その繁華街の一つにあるお店から二人組の若い人間の女の子が現れる。女性の方は両手を伸ばして元気よく声を上げるが、後ろにいる女性はそうはいかない。なぜなら、大量の荷物を持たされて、積まれている。顔が見えないほど高く積み上げられた箱をフランスよく持ちながからお店の中から出てきたのだ。

「こら魔法少女遊輝ちゃん!!女の子が『待てこら』なんて下品な言葉を使ったらダメでしょ!!」

「お、俺は男だ……っっていうか荷物多すぎ……」

「んんん、確かにちよつと調子乗りすぎたわねえ。いくら何でも買ひすぎたか。ちよつとそのベンチに移動して整理しよう」

荷物を持っていない女性は荷物を持っている女性を見て、さすがに同情をしたのか近くにあるベンチを見つけてそこに荷物を持っている女性を誘導させる。その女性……いや、同伴している女性よりも小さい少女みたいな女の子はベンチに荷物を置いて、「ふう〜」と息を吐いて座った。

「さすがに買ひすぎたわね……アリアさんの財布が軽くなってきたよ、ねえ魔法少女遊輝ちゃん」

「／／／た、頼むからその魔法少女って言うのはやめてくれ……」

「何言ってるのよ……今日はその可愛い魔法少女の服でアリアさんに付き合ってもらうっていったでしょ?」

『アリア』と言う背の高い方の女性は背の小さい『遊輝』という見た目が少女の子に耳元で呟く。この小さな少女、先ほど本人が口にしたが実は男性である。アリアという女性に無理矢理、女物の服を着せられて買ひ物に付き合わされているみたいだ。

「／／／クソツ……何でこんな目に……」

「昨日デュエルで負けた遊輝ちゃんが悪い。3回もやってあげたのに1勝もしなかったんだから」

「／／／んやろう・・・十二獣召喚獣とか岩石コアキメイルとか芝刈りインフェルノイドとか対策せずに勝てるかよ・・・」

「でも良い勝負はしていたじゃない。というわけで荷物は全部この中に放り込んで・・・」  
「アリアは雪が降る何もない所に左手をかざし小言で何か喋る。すると摩訶不思議なことに空間の亀裂が出来て、その中に遊輝が運んだ荷物をゴミ箱に入れるようにポイポイと全て放り投げる。」

「・・・よし、これで最後。この空間を閉じてつと・・・じゃあこれでお買い物はお終い」

「や、やっと終わったよ・・・」

「つていうわけで今度はケーキ食べに行くわよ!!」

「・・・エツ?」

「ほら魔法少女遊輝ちゃん!!人間世界に戻ってケーキ食べに行こう!!」

「／／／嫌だよ!!買い物付き合うだけだろ!?!それにこんな格好で行けるかよ!!」

「別に良いじゃない、ケーキはアリアさんのクリスマスプレゼントだよ。ほら!!行くわよ!!」

「／／／嫌だああああ!!!」

少女(笑)の声はグリモワールの街に響き、それを見ていた周りの人たちはクスクス

と笑い声が聞こえてくる。

龍可

side

（翌日）

「ふう〜．．．．．こんな物でいいんじゃないでしょうか？」

「俺たちが作ったにしては上出来でしょ!!」

「龍亞はほとんど見ていただけじゃない」

「ケ、ケーキ作りって．．．．．難しいですね．．．．」

奏さんのカップケーキショップの調理場を貸してもらい、私たち4人で12人分のケーキを作った。軽音部の皆はクリスマススライブ、アリアお姉さんはすみれさんのお手伝いで全員出かけてしまっているので私たちで皆の分のクリスマスケーキを作ることにしてあげた。

「あら、皆上手に作れたじゃない」

「あつ、おばさん。調理場を貸していただきありがとうございます」

「良いのよ。今日はうちのお父さんがぎっくり腰になっちゃってね。全く、稼ぎ時だつて言うのに、昨日調子に乗って仕事が終わった後にゴルフの打ちっぱなしになんか行つて」

「ア、アハハハ……（汗）」

まあ……はい、そういう訳です（汗）。普段はクリスマスなので奏さんのお店はすごい忙しいはずなのに店主のお父さんがぎっくり腰になったみたいでお店を開けない状態なので、貸してくれた。

「じゃあそのケーキ、保冷用のケースに入れてあげるから持って行きなさいよ。あと2時間で始まるのでしょ？」

「そうですね、そろそろいかないと。入場も始まってますし」

「だ、誰が関係者用のパスを持っているのですか？」

「私が出る前に龍亞に渡したけど……」

「心配しなくてもちゃんここにあるよ！」

龍亞の方をチラツと見ると、ポケットの中から一枚の折りたたんだ紙を取り出す龍亞。これは今日のライブの関係者用のパス。これがないと遊輝たちのところに行けない。

「それじゃ皆、行つてらっしゃい」

「じゃあ皆!!アカデミアに行こうぜ!!」

奏さんのお母さんに私たちが作ったカップケーキを保冷剤の入った冷蔵用のケースに入れてもらつて、恭輔が代表してそれを受け取る。一番乗りで龍亞が外に飛び出て、



それを追いかけるように私たちも後を追う。

～～（数十分後）～～

「皆!!メリークリスマスマス!!」

「・・・つてな感じ」

「ふむふむ・・・」

「あゝあゝ～～・・・」

「・・・メリークリスマスマス!!!」

「!?び、ビックリした!?!」

「やつと気づいたよ!!」

「こんばんは」

「お、お邪魔します・・・」

アカデミアについて、関係者用のパスを龍亞が見せて関係者専用の通路に入った後、軽音部の控えとなっている部室に入る。最初、龍亞が大声で声を上げたのに全く気づかなかつたので、もう一度大声を上げたところで気づいてくれたみたいだ。中にはメンバー全員とすみれさん、アリアお姉さんがいる。

「あれ？何で二人はいるのですか？」

「単純に衣装の打ち合わせよ。今日は途中から私がデザインした服を着ることになって  
いるから」

「そうなのですか？」

「師匠は何していたのですか？」

「最後の打ち合わせつてやつ。だからあんまり部外者には入ってほしくないんだが」

「部外者扱いは酷いでしょ!!こっちは差し入れ持ってきたんだから!!」

「差し入れ？」

「これ、僕たちが作ったカップケーキです。皆さんで食べてください」

「おお!!!ありがとうございます」

恭輔がカップケーキの入った箱を差し出すと響さんがすぐに食いついて箱を受け取り、机の上に置いて開ける。その中にあるカップケーキ一つを取り出してパクつと一口食べる。

「うくん!!美味しい!!」

「どれどれ・・・うん、上手いな。これ、本当に祈たち？」

「は、はい!!」

「にしても数が中途半端じゃね？俺たち8人に対して何で12個なんだ？」

「それは残りの4個を私が・・・」

「響つち!! 食べ過ぎだよ!!」

「私たち含めて全員で1個ずつです・・・」

「ええく!!!」

「そりやそうだろ、常識的に考えて・・・」

「皆さくん!! 最終ミーティングを行います!!」

「あつ、はくい。というわけで関係者以外の人たちは出て行つてね」

「差し入れ持つてきたというのに、冷たいな」

「うるさいわね!! 早く出て行きなさい!!」

龍亞が食い下がろうとしたけど、レミさんがすぐにキレたので龍亞は渋々のような感じで部屋から出た。私たちもこれ以上おいとまするのはマズイので外に出ておこう。

「ちえつ、もうちよつとくらい付き合えばいいじゃん」

「そんな事言つたつて、僕たち本当は部外者なんですから。こうやって入れる事自体珍しいですよ」

「そ、それもそうですよね・・・」

「この後どうする?」

「せっかくだし売店巡りしようぜ!! 今日美味しいものたくさん食べるぞ!!」

「ちよ!?る、龍亞!!」

売店巡りとか言って走り出した龍亞。私たちはその龍亞の後を慌てて追いかけていく。

～（1時間半後）～

ガヤガヤ……

「……1万3000人ほどだよね？」

「外でやるよりは少ないですが、この講堂の限界人数ギリギリまで入れていますから結構な人数が入っている気がしますね」

今回のライブの舞台はアカデミアの講堂。普段は机などがあるのだけど、今回は全て撤去されたみたい。外でやるライブとは違って人数はそこまで入らないけど、密集されているので結構な人数がいるように見える。

『お待たせしました。SECRET Live in Merry Christmas  
asを開演いたします』

パチパチパチパチ

……ウイーン



《オオオオ!!!》

講堂のステージの幕が上がるのと同時に軽快な音楽とともに奏さんが歌い始める。アイドル系のポップソングだけど、少しスロー気味のアップテンポで観客の手拍子がリズムを付けて心地よい。

- 1 ARK of Smile! [BOYS AND MENS]  
 2 ちっぼけな勇氣 [FUNKY MONKEY BABYS]  
 3 完全感覚Dreamer [ONE OK ROCK]  
 4 evolution [浜崎あゆみ]

『えく．．．メリークリスマス!!!』

《メリークリスマス!!!》

『というわけで、えく．．．2年ぶりのクリスマスライブっていうことでね、バンド名通りシークレットライブにしようとしたのよ。アカデミアの講堂に集まってもらってたね』



- 6 ハダシの未来 【嵐】  
 7 One Night Carnival 【氣志團】

・・・・♪♪♪♪!!!

《イエエエエ!!!》

『どう? 身体暖まった?』

《暖まった!!!》 《最高!!!》

『ありがとね!! こっちもポカポカになってきて、暑いくらいだよ!! それじゃ暖まったことだし、本題の冬ソング、クリスマスソングを歌っていくよ!』

《オオオオオオ!!!》

『・・・ララララ~~~~』

・・・・♪♪♪♪

バックソングが流れ始めると、奏さん以外のメンバーが「ラララ」と歌い出す。

8 ハピネス 【A I】

9 運命 【Mr. Children】

10 もう恋なんてしない 【槇原敬之】

11 White Love [SPEED]

12 Ti amo [EXILE]

13 いつかのメリークリスマス [BOX]

14 クリスマスソング [back number]

15 スノーマジックファンタジー [SEKAI NO OWARI]

16 WHITE BREATH [T.M.Revolution]

17 ロマンズの神様 [広瀬香美]

18 Winter , again [GLAY]

『・・・フウ、大丈夫？暑さや寒さで倒れてない？』

《イエエエエ!!!》

奏さんのMCが始まり、観客たちは声を出す。終盤の方に差し掛かっているがお客さんたちはまだまだ元気だ。

『元気な掛け声をもらって悪いけど次が最後だからね』

《エエエエエ!!!》

『だからそのエエエって言うのやめてくれない(汗)?割とマジで困るのよ』

《もつと聞きたい!!》

《遊輝さんは!?!》



『まあまあ……最後の曲の紹介をしたいから少し静かにしてもらえるかしら?』  
観客たちが色々と声を出す、奏さんがなだめて最後のMCを始める。

『最後の曲も冬の曲で行くんだけどね、その曲はね、過去の自分達が今の自分達を想像していたのかな〜って曲なの。あの頃、想像していた自分達は今の自分達と重ねることができのかな……そんな想いがこもった名曲です……夜空ノムコウ』

・・・♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アコースティックギターに持ち替えた遊輝と茜さんの弾き語りから始まり、そのリズムに乗るように響さんのピアノが合わさる。ゆつくりとしたメロデイの中、奏さんが歌い始めた。

19

夜空ノムコウ 【S M A P】

~~~~~♪♪♪♪♪♪♪♪♪

パチパチパチパチ!!!!!!

最後の曲の演奏が観客から拍手が巻き起こる。演奏を終えたメンバーは座っていた人たちは立ち上がり、ギターやベースを弾いていた遊輝とレミさん、茜さんは楽器をスタツフに渡した。

『OH YEARRRRRRRRRRR
 』
 !!!!!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

『ウウ~~~~!!!!』

遊輝の長いシャウトから奏さんのギター音が入り、そのままアンコールの曲が始まった。ドラムとギターが激しい、ロック調の曲だ。

20 BURN ♪フメツノフェイス ♪ [B Z]

21 ないものねだり [KANABOON]

22 Merry Christmas [BUMP OF CHICKEN]

N

~~~~~♪♪♪♪♪

パチパチパチパチ

『ありがとうございます!!』

アコースティックギターをスタッフから受け取った遊輝がマイクスタンドにセット

されているマイクを使い、観客に挨拶をする。

《可愛いよ!!!》

『ありがとうございませす。一昨年はね、こんなに大きく無かつたからメンバー全員で最初から最後までこの衣装着て、途中でお菓子とか配っていたりしたのですよ』

《今もして!!!》

『無理無理!!こんなギウギウウの中どうやっていくんだよ!!・・・とまあ、最初の2曲の方は盛り上がっていたために冬とは関係のない曲をお送りしましたけど、先ほどの曲はまあ・・・題名通り、12月2・・・4日なるのかな?ええ、まあそれは置いて、次が最後の曲です。と言ってもこれも恋人の想いを描いた曲なんですが・・・抱きしめたい』

♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

23 抱きしめたい [Mr. Children]

~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

パチパチパチパチ!!!!!!

最初の曲を演奏した後、メンバー全員が前に出る。マイクスタンドからマイクを取つ

た遊輝が最後の挨拶をする。

『ええ・・・以上を持ちましてSECRET Liveの方は終了させていただきます』

「「「「ありがとうございますございまして!!!」」」」

《ワアアアアア》

『メリークリスマス!!!そして良いお年を!!!』

挨拶を終えて、全員で肩を組んで頭を下げた後、ステージ裏へと下がっていった。その後、講堂に照明が点いたので観客たちはゆっくりと帰りだす。

「いや・・・疲れた」

「さすがに講堂の中は暑苦しかったですね・・・」

「で、でも外は寒いですし仕方ない事じゃないのですか?」

「それもそうよね・・・どうする?先に帰るの?」

「僕とそうします。時間的にも家に帰るのは8時ごろですからそこから夕飯を食べます」

「わ、私も」

「じゃあ俺たちだけで遊輝たちの所に行こうぜ!」

「そうね・・・」

「それじゃ龍亞さん龍可さん」

「バイバイ!!」

恭輔と祈は家族とのご飯があるので人混みが多い講堂の出口を目指す。私たちは講堂とは反対側にある関係者用の通路に行き、パスを見せて関係者用の通路に入る。そのまま講堂からアカデミアの中を通って軽音部の部室に入る。

「ヤッホー!!」

「あっ!!それ私のローストビーフ!!」

「ん〜まい!!遊輝ちゃんの角煮はいつ食べても絶品だね!!」

「お前は角煮ばっか食わんと他の物も食え」

「ピザピザピザ・・・」

部室に入ると、いつもと変わらないライブが終わった後の光景が広がっていた。皆でワイワイとご飯を食べている。

「俺も飯いい!!」

「あれ?二人ともいつ来たの?」

「さっき来ました・・・」

「そのフライドチキン頂戴!!」

「あっ!?!私のフライドチキンが!!」

「お前ら大人気ないだろ・・・龍亞も中学生なんだからそれくらいの常識はわきまえろ

「よ」

「いいじゃん別に!!」

「ハア……こつちが恥ずかしいわ……」

「……龍可、龍可」

「ん?」

「ちよつと、こつちこつち」

いつの間にか部屋の外に出ている、扉を少し開けて私を呼ぶように手招きをしている。私はそれを見て、部屋の外に出る。

「何?」

「これ、クリスマスプレゼント」

「えっ?」

遊輝が後ろから緑色のリボンで結ばれた赤い箱を出して、私に渡した。私はそれを受け取ってじいくと見つめた。

「こ、これ……」

「まあ……開けなよ」

遊輝に催促されて私はリボンをほどいて箱を開ける。その箱の中には銀のペンダントが2つあった。

「これって……」

「ほら、夏休みの時、水族館で欲しいって言っていただろ？あれと同じのは用意できなかったけど、まあ……似たような物が店にあったからさ」

「でも……なんで2つ？」

「それ、パールツクだって。だから2つ買った」

「えっ？」

「だから、その……それ……1つ俺に欲しいんだけど……」

少しモジモジとしながら遊輝が催促をして来た。もう一回ペンダントを見て、少し考えた後、2つあるうちの1つを手にとって遊輝に渡した。

「はい。これ、遊輝にあげる」

「あ、ありがとう……」

「おおい!!遊輝ちゃん!!そんな所で彼女と何してるの!?!ビング大会が始まるよ!!」
「うるせえな……分かったよ!!今行くから!!」

アリアお姉さんに急かされるように私と遊輝は部室に戻っていった。

突発企画

忍風！シークレットシグナー（+α）

ツボを取り返すの巻

時は室町時代、まだ豊臣秀吉が木下藤吉郎だった頃……………

將軍、足利家に伝わる黄金のツボが何者かによつて盗まれた……………

ツボに秘められし魔力を使い日本征服を企む悪の軍団の仕業である……………

藤吉郎はツボを取り戻すべく、伊賀国から忍法、彩りの術で全国の忍びから恐れられている影の軍団、その名も忍風、シークレットシグナーを呼びだした……………

レミ「おはようございます!!」

「「「「」」」」」

レミ「何でそんな不満顔なの!？」

遊輝 「いや・・・逆に何でお前は仕切ってるの?俺たち、訳わかめの状態なんだよ?」

レミ 「とりあえずカメラ来たたら挨拶しろってそのカンペが」

茜 「カンペって言わないの」

スバル 「今何時だと思ってるんだ・・・朝の5時だぞ・・・ねっみい・・・」

奏 「夜中の2時に叩き起こされて、全身黒タイツの人に連れて行かれて、この忍者の服に変えられて・・・」

レミ 「それ、私もだから」

やあ諸君、おはよう。

響 「あつ、天の声」

遊輝 「もとい、作者の声」

こら遊輝!!天の声をバラすな!!

遊輝 「ええ・・・」

というわけで君たちには突発企画、「色とり忍者」をやってもらう。

茜 「ああ!!アレね!!それで忍者の格好を!」

スバル 「アレやるくらいなら数取団の方が人気あるんじゃない?」

数取団はここ最近の情勢によりできませんでした。

スバル「アツハイ」

というわけで君たちはこれから色取りゲームを行ってもらおう。もちろん、詰まったり、意味不明なお題を出したり、世間一般的ではないものを言ったらアウト。その者は城内に法螺貝が吹き荒れるからツボを盗んで城外から脱出せよ。

奏「・・・これアレでしょ？確かツボ押しが来る」

それは後のお楽しみだ・・・

遊輝「うわぁ・・・嫌な声・・・」

~~~~~

ここは悪の軍団の城内……………

6人の忍者の前には盗まれたツボがある。

レミ「皆のもの・・・今宵は激しい戦いになるでござる・・・大丈夫でござるか!?!」

「「「「「だいいじょぶ」」」」」

レミ「本当に大丈夫でござるか!?!」

「「「「「だいいじょぶ」」」」」

レミ「行くよ!!せつの」

シュツシュツシュシュシュシュツ!!!

レミ「赤い果物」

シュツシュツ

遊輝「苺!!」

シュツシュツ

遊輝「緑の野菜!!」

シュツシュツ

奏「ほうれん草!」

シュツシュツ

奏「青い景色!!」

シュツシュツ

スバル「海」

シュツシュツ

スバル「茶色の食べ物!」

シュツシュツ

響「えっ!?!えつと・・・」

ブブー!!!

茜「響つち!!」

ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪

法螺貝響渡るは敵に見つかった証、急いでツボを持って城の外へ。

遊輝「ほらっ響!!ツボ持って逃げろ!!」

響「わ、分かったわよ!」

ツボを抱えた響はそのまま部屋から飛び出す。すると城門の扉が開いて10人のハゲの軍団が。

響「いい!?ちよちよちよ!?多すぎ!!」

『やああああああ!!!』

響「いたたたたたたた!!!」

ハゲの軍団はツボを取り返そうとした響を捕まえてツボを押しまくる。

スバル「うつわあ・・・キツツ」

響「いてててて!!!そ、そこ!!コメカミ!!」

遊輝「・・・なあ、後ろの5人何で動いてないんだ?」

レミ「さ、さあ?」

奏「あつ、動いた」

響「えっ!?ちよっ!?な、何してるの!」

ハゲの軍団のうち、ツボ押しをした5人がツボを持って退き、残りの5人が響を取り囲む。数十秒後、ハゲの軍団は響の何かをして帰っていった

響「いったああ・・・」

レミ「大丈夫響?」

遊輝「つてかお前、頭・・・ブフッ!」

響「えっ?・・・!?何でネコミミ!」

響の頭には被っていた黒の頭巾が外されてネコミミが付けられていた。

奏「えっ?まさか失敗したらツボ押されて変な格好させられるわけ?」

スバル「あの作者、本当変人だな・・・」

響「つていうか茶色の食べ物って何!」

スバル「普通にカレーとか焼きそばでいいだろ?」

茜「ホットケーキとか」

響「ああああ!?!」

レミ「普通に考えたらいっぱいあるわよ」

響「いったああ・・・」

遊輝「しかし実際に見ると怖いなあ・・・」

奏「下手したらトラウマねえ」

響「あとさ・・・耳元でうるさい」

レミ「なんて言ってるの？」

響「『どうやったら落差のあるフオーク投げられますか』」

スバル「ブツ!？」

遊輝「アハハハハ!!!」

茜「自分で調べなさいよ・・・」

潜入其二

茜「せめて私に回してよね」

レミ「最低限1周はしよう、じゃないと全員バカって思われるから」

響「いてて・・・まだ痛いよ・・・もう負けたくない」

スバル「そりゃそんなものつけられたらな」

響「はあ・・・皆の者、大丈夫でござるか？」

「「「「「だいたいじょくぶ」」」」」

響 「せつの!」

シユツシユツシユシユシユツ

響 「緑の食べ物!」

シユツシユツ

茜 「グリーンカレー!」

シユツシユツ

茜 「緑の食べ物」

シユツシユツ

レミ 「グリーンカレー」

シユツシユツ

レミ 「緑の飲み物」

シユツシユツ

遊輝 「青汁!」

シユツシユツ

遊輝 「赤い飲み物!」

シユツシユツ

奏 「トマトジュース!」



シュツシュツ

奏「赤い車！」

シュツシュツ

スバル「・・・消防車！」

シュツシュツ

スバル「赤い車！」

シュツシュツ

響「消防車！」

シュツシュツ

響「ピンクの果物！」

シュツシュツ

茜「桃！」

シュツシュツ

茜「緑の花！」

シュツシュツ

レミ「・・・ない！」

ブブー!!!

奏「無いは無いでしょ!」

ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

レミ「ああ!!もう嫌だ!!」

遊輝「ほら行けっ!!」

ツボを持つて逃げるレミ、すでにハゲの軍団は待ち構えていた。

レミ「とう!」

レミはステップを使って逃げようとしたが人数が多いハゲの軍団はそんな軽い脅しなど効かず、捕まってしまった。

レミ「痛い痛い痛い痛い痛い!!!!頭と首マッサージしないで!!」

最近、寝不足だと言うレミには快眠になるツボをサービスで押す。ツボ押しが終わると、ハゲの軍団第二陣がレミに襲いかかる。

レミ「ちよっ!?まっ!?そ、そこダメ!!」

ハゲの軍団はレミから何かを盗み、逆に何かを付けた。

奏「大丈夫レミ?」

レミ「い、いたたたた・・・頭と首を同時になるのはダメ!」

遊輝「いや、そんなことよりお前・・・」

レミ「そう！あいつら私の足袋取っていて変なもの履かされて！」

レミの足には足袋から犬の肉球がついた本格的な犬そっくりなブーツを履いていた。

レミ「何これ!? 凄い歩きにくいんだけど!？」

スバル「キッツ・・・」

レミ「それで緑の花って？」

茜「本家で言えばガーベラだけど」

レミ「知らないわよそんなの」

### 潜入其三

レミ「あゝ・・・てっぺんハゲにならなきゃいいけど」

響「頭は嫌だなあ・・・」

遊輝「そんな所にツボあるのか？」

スバル「あるからやるんだろ」

レミ「皆の者、今度こそツボを取り返すぞ」

「「「「「だいじくぶ」」」」」

レミ「せえの！」

シユツシユツシユシユシユ

レミ「赤い顔！」

シユツシユツ

遊輝「うえっ!?お、鬼！」

シユツシユツ

遊輝「赤い顔！」

シユツシユツ

奏「鬼」

シユツシユツ

奏「赤いきつね」

シユツシユツ

スバル「緑のためき！」

ブブー!!!

スバル「ああ!!しまった!!」

ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪

赤いきつねを緑のためきと答える、とんでもない凡ミスをしたスバル。そんなスバル

にハゲの軍団はサービスオポジションを付けた。

スバル「いたたたたた!!!」

響「ハハハハハッ!!!」

奏「で、電気あんま・・・ブフツ!!」

スバル「っ！テメエ！」

あまりにもムカついたスバルはハゲの軍団の帰り際に電気あんましたハゲ一人を叩いた。だがしかし、まだ第二陣がいた。

スバル「お前から来るな！頭引っ張るな！」

スバルから何かを奪ったハゲの軍団は代わりにスバルにあるものをつけていった。

スバル「いつてえ・・・あいつらベルト奪っていつて」

茜「ああ、ベルト代わりに猫の尻尾ね」

スバル「それとあいつら何言ってるんだよ・・・」

レミ「何言われたのよ？」

スバル『お前じゃねえ、もう一人の野郎だせ』って」

遊輝「えっ、俺!？」

奏「まあでもこのあたりの分野は遊輝の」

遊輝「ちよまま!?!俺、コスプレしたくてしているんじゃないからな!?!」

レミ「得意分野でしょ？」

遊輝「得意分野じゃねえよ！」

#### 潜入其四

スバル「皆の者、赤いきつねはうどん、緑のたぬきはそばで大丈夫でござるか？」

「「「「だいいじよ〜ぶ」」」」

スバル「ハゲの軍団から遊輝というリクエストがあったのでバンバン裏切っていくが、大丈夫でござるか？」

「「「「だいいじよ〜ぶ」」」」

スバル「せえ〜の！」

シュツシュツシュツシュツ

スバル「緑のたぬき！」

シュツシュツ

響「そば！」

シュツシュツ

響「赤いきつね！」

シュツシュツ

茜「うどん」

シュツシュツ

茜「赤いスイートピー！」

シュツシュツ

レミ「松田聖子！」

シュツシュツ

レミ「赤いスイートピー」

シュツシュツ

遊輝「松田聖子」

シュツシュツ

遊輝「青い稲妻」

シュツシュツ

奏「S M A P！」

シュツシュツ

奏「黄色の調味料！」

シュツシュツ

スバル「カレー粉」

シュツシュツ

スバル「黄色の調味料」

シュツシュツ

響「カレー粉」

シュツシュツ

響「黄色の料理!」

シュツシュツ

茜「卵焼き!」

シュツシュツ

茜「き、黄色の卵!」

ブブー!!!

奏「嘘んだらダメでしょ茜!」

ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

遊輝「ほらっ行け!」

茜「人使い荒いんだから!」



ツボを持って逃げる茜、しかし待ち構えていたハゲの軍団は茜を捕まえてツボ押しマツサージをする。

茜「痛い痛い痛い痛い!!! コメカミ押さないで!!」

スバル「あいつらおでこ押しているぞ」

奏「なんかまた囁いているし」

茜「痛い痛い痛い!!!」

レミ「第二陣来たわよ」

茜「ちよっ!? あんた達どこ触ってるのよ!? そこお尻!!」

遊輝「平気でセクハラかましてやがる……」

スバル「あつ、帰って行った」

茜「いった……あいつら私のお尻と胸を触っていったわよ!」

響「平気でセクハラやっていったわね」

スバル「ところで茜、それなんだよ?」

皆の服は脱ぐのが手間かかるので、茜の首に鈴付きの首輪が付けられた。

茜「最悪!」

レミ「あいつら本当になに考えてるのよ?」

奏「それとき、なに言われていたの?」

茜「えっ?・・・『娘を事務所に入れてください』」

遊輝「ブツ!」

スバル「そういうことは社長に言えよ・・・」

レミ「あと負けてないのって・・・遊輝と奏?」

スバル「ヴォーカル組強いなあ・・・」

遊輝「あんなん見たら絶対に負けたくねえよ」

奏「でもあんたは向こうから注文きているわよ」

遊輝「だからこそ絶対に負けられねえんだよ!」

潜入其五

茜「ああもう・・・嫌だ」

レミ「切実ねえ・・・」

スバル「何とかしてこの二人に土つけようぜ」

遊輝「レミこええよ・・・何言ってくるか予想つかねえ」

茜「皆の者、大丈夫でござるか?」

「「「だじよ〜ぶ」」」

茜「せえの!」

シユツシユツシユシユシユ

茜「青い飲み物」

シユツシユツ

レミ「ブルーハワイ」

シユツシユツ

レミ「ブルーな気持ち！」

シユツシユツ

遊輝「コスプレさせられている時に後輩の男から告られた時！」

シユツシユツ

遊輝「ブルーな気持ち！」

シユツシユツ

奏「親に「いつになったらお金返すの？」って言われた時！」

シユツシユツ

奏「ブルーな気持ち！」

シユツシユツ

スバル「物置が崩れて電子ドラムがぺちちゃんこになった時！」

シユツシユツ

スバル「ブルーな気持ち!」

シュツシュツ

響「お母さんに赤点のテストバレた時!」

シュツシュツ

響「ブルーな気持ち!」

シュツシュツ

茜「寝起きでお母さんにイタズラチューブを鼻に突っ込まれた時!」

シュツシュツ

茜「ブルーな気持ち!」

シュツシュツ

レミ「アルバイトあるって行って行ったら役員会議に出席させられた時!」

シュツシュツ

レミ「ブルーな気持ち!」

シュツシュツ

遊輝「朝起きたらアリアに襲われていた時!」

響「ブツ!?!」

シュツシュツ

遊輝「ブルーな景色！」

シュツシュツ

奏「空！」

シュツシュツ

奏「赤い景色！」

シュツシュツ

スバル「夕焼け！」

シュツシュツ

スバル「赤いお寿司！」

シュツシュツ

響「マ<sup>グ</sup>ロ！」

シュツシュツ

響「肌色の調味料！」

シュツシュツ

茜「なに!?!肌色の調味料って!?!」

ブブー!!!

ブオオオン!!

♪♪~~~~♪♪~~~~

茜「もう嫌々!!」

2回目となる茜、しかしハゲの軍団は決して手を抜かない。

茜「いたたたたたた!!」

レミ「うわ・・・空中に持ち上げられているし・・・」

遊輝「しかもあいつ、両足開いて大事なところが・・・」

茜「いたたたた!!!」

2回目となる茜にはオプションサービスもスペシャルな内容となっていた。

茜「ちよっ!?スカート取らないで!」

奏「長いわね」

スバル「何してるんだ?」

響「あつ、帰って行った」

茜「!!人のスカート取らないでよね!!」

遊輝「ブツ!」

ハゲの軍団が帰った後の茜の姿は上半身は黒い忍者の格好だが下半身は下着の上から廻しをはかされた。

スバル「ダ、ダツセエ・・・ブフツ」

レミ「に、人気モデルじゃないわね・・・」

響「ハハハハハッ!!アハハハッ!!」

茜「もう最悪!!肌色の調味料って?」

響「マヨネーズ」

茜「ああ、やられた・・・」

遊輝「調味料かどうかって言われたら微妙なところだけど、まあ正解だろうな」

潜入其六

スバル「もう一周ブルーな気持ち入れてみる?」

響「そ、そう!遊輝!!アリアに襲われたってマジ?」

遊輝「・・・マジ、本気で命の危険を感じた」

レミ「笑えないわね・・・」

茜「じゃあもう一周だけブルーな気持ちで行くわよ」

「「「「だこじょうぶ」」」」

茜「せえの!!」

シユツシユツシユシユシユ

茜「ブルーな魚!」

シユツシユツ

レミ「えっ!?何それ!」

ブブー!!!ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪

奏「うわあ・・・すごい裏切り・・・」

レミ「最悪!!」

一発目から裏切られたレミ、そのままツボを持って城外に出ようとするがハゲの軍団にあっけなく捕まってしまう。

レミ「痛い痛い痛い!!!!!!」

響「うわっ、持ち上げられて腹筋させられてる」

茜「器用なことするわね、あの桃ハゲ」

遊輝「絶対骨やるぞ」

レミ「痛い痛い痛い!!背中痛い痛い!!!」

ツボ押しが終えたハゲの軍団、そして第二陣がレミの懐に巻物らしきものを入れた。

スバル「あれ?なんかいつもと様子が違う」

奏「いわゆる世間には見せられないってやつ?」



レミ「いったあああい!!!」

響「大丈夫？」

レミ「大丈夫じゃないよ！最初から裏切られた!!」

遊輝「いや、マジで青い魚って何？」

茜「ナンヨウハギ、二〇の映画に出てきた青い魚」

スバル「ああ、いたな。あれナンヨウハギなんだ」

レミ「やられた・・・」

奏「ところでその巻物、何書いてあるの？」

レミ「これでしょ？何これ？」

遊輝「とりあえずお前一人で見ろよ。こういうのってマジであかん奴だから」

懐に入れられた巻物を手にとって、レミはみんなから離れて一人、巻物を開いて恐る

恐るみる。

レミ「・・・!!?これ誰が告ったの!？」

そこにはレミが小等部時代、勘違いをして恥ずかしい思いをした写真が撮られていた。

遊輝「マジ!?そんなあかんやつ!？」

レミ「えっと・・・茜だけ、茜だけなら事情がわかるから」

茜「私？」

レミに呼ばれた茜はみんなから離れてこっそりと巻物を見る。

茜「……ああ！これはダメだ！っていうかよくこんな写真残ってたわね！」

スバル「マジで？」

レミ「マジでダメ！響や奏もダメ！」

潜入其七

レミ「そろそろこの二人に土つきたいわね」

奏「絶対に負けられない」

遊輝「俺も……何させられるか分からない」

スバル「とりあえず凡ミス無くして長くしよう。まだ2周もしていないぜ」

レミ「そうだね……いくわよ！」

シユツシユツシユシユ

レミ「青い魚！」

シユツシユツ

遊輝「ナンヨウハギ！」

シュツシュツ

遊輝「青い魚」

シュツシュツ

奏「ナンヨウハギ」

シュツシュツ

奏「赤い魚」

シュツシュツ

スバル「金魚」

シュツシュツ

スバル「赤い野菜」

シュツシュツ

響「赤カブ！」

シュツシュツ

響「青い山！」

シュツシュツ

茜「……ふ、富士山！」

シユツシユツ

茜「ブルーな気持ち!」

シユツシユツ

レミ「さつき幼少の頃の写真を見せられた時!」

シユツシユツ

レミ「ブルーな気持ち!」

シユツシユツ

遊輝「すみれさんに嵌められた時!」

シユツシユツ

遊輝「ブルーな気持ち!」

シユツシユツ

奏「お父さんがお客の前でお母さんに頭を下げていた時!」

シユツシユツ

奏「ブルーな気持ち!」

シユツシユツ

スバル「足の小指をダンスの角にぶつけた時!」

シユツシユツ

スバル「ブルーな気持ち！」

シュツシュツ

響「財布忘れた時！」

シュツシュツ

響「ブルーな気持ち！」

シュツシュツ

茜「ウォーターフオールを食らった時！」

シュツシュツ

茜「ゴールドのお寿司！」

シュツシュツ

レミ「数の子！」

シュツシュツ

レミ「緑のお寿司！」

シュツシュツ

遊輝「かつば巻き！」

シュツシュツ

遊輝「オレンジのお寿司！」

シユツシユツ

奏「・・・ああああ!!!」

ブブー!!!ブオオオン!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪

遊輝「やったぜ!!」

ついに負けてしまった奏、ツボを持って逃げるが初めてのお客さんにハゲの軍団大喜び。元氣よく奏を捕まえた。

奏「痛い痛い痛い!!!肩押さないで!!」

ヴォーカルの奏には喉の痛みが緩和されるツボをサービス。

奏「の、喉、喉潰れるから!!痛い痛い!!!」

遊輝「キツツ・・・」

そしてツボ押しが終わるとハゲの軍団第二陣、こちらも初めてのお客さんということ  
で大喜び。

奏「いや、ちよつと!!髪の毛触らないで!!」

スバル「・・・あれ完全に訴えられるだろ」

レミ「まあ確かに・・・奏、ヴォーカルで人気あるから」

奏「いやああ!!!」

大興奮のハゲの軍団、悠々と帰って行った。一方、取り残された奏は放心状態  
奏「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スバル「おい大丈夫か？」

奏「・・・・・・・・・・もう私、お嫁に行けない」

響「大袈裟すぎるでしょ」

茜「つてか頭・・・・・・・・アフロヘアじゃん」

奏「もう何これ!？」

スバル「あと負けてないのお前だけか」

レミ「大トリが残ってるわね」

遊輝「大トリ言うな!」

奏「何である時出なかったんだろう、オレンジのお寿司」

茜「わかるの？」

奏「サーモン」

遊輝「正解」

スバル「あくそうだ。俺も分からなかった」

奏「悔しい・・・・・・・・本気で悔しい・・・・・・・・」

## 潜入其八

奏「本気で悔しい……」

遊輝「まだ言うのか」

奏「答え知ってて答えられなかったんだから余計に悔しい……」

茜「次裏切ったら？」

スバル「ちよちよちよ!?!」

奏「そうしようか……」

スバル「怖つ……何来るんだ……」

奏「いくよ……せえの!」

シュツシュツシュツシュツ

奏「赤い建物!」

シュツシュツ

スバル「と、東京タワー!」

シュツシュツ

スバル「赤い建物!」

シュツシュツ



響「東京タワー！」

シュツシュツ

響「赤い建物！」

シュツシュツ

茜「東京タワー！」

シュツシュツ

茜「青い洋服！」

シュツシュツ

レミ「ジーパン！」

シュツシュツ

レミ「黒いサングラス！」

シュツシュツ

遊輝「タモリさん！」

シュツシュツ

遊輝「黄色のメガネ！」

シュツシュツ

奏「鶴瓶さん！」

シュツシュツ

奏「黄色のメガネ!」

シュツシュツ

スバル「鶴瓶さん!」

シュツシュツ

スバル「黄色い野菜!」

シュツシュツ

響「黄色のカブ!!」

ブフー!!

遊輝「そんなもんねえよ!!」

ブオオオン!!

♪♪~~~~♪♪~~~~

響「ああもう!!私ネコミミさせられてるのよ!」

レミ「文句言っていないでさつさと行きなさいよ!」

本日2度目の響、大量のハゲの軍団はもちろなりピート客が来たと大喜び。患者にあつたツボをサービスでいつもより多く押す。

響「痛い痛い痛い痛い!!!」

奏「あんな耳の横と手の甲にツボなんてあるの？」

レミ「あるんじゃないの？」

響「痛い痛い痛い痛い痛い!!!」

ツボ押しが終わったハゲの軍団、第二陣は響の首元に何かを巻いていった。

遊輝「帰っていった帰っていった」

響「いったあ・・・最初の頃よりパワー上がってるんだけど!」

スバル「温まってきたってことだな。んなことよりお前、涎掛けとかかけて赤ちゃんかよ」

奏「ブフツ!」

レミ「うわあ・・・お似合い」

響「お似合いってどう言う意味よ!」

遊輝「いやだって、黄色の野菜を答えられないんだぜ?」

響「何よ黄色の野菜って!」

スバル「パプリカ」

響「あああ!?!」

奏「やっぱお似合いね」

## 潜入其九

響「ほんつと、もう負けられない」

スバル「2敗しているのがレミと響と茜か」

レミ「遊輝にそろそろ土つきたいわね」

遊輝「怖いこと言うな・・・」

響「いくよ!せえの!」

シュツシュツシュツシュツ

響「赤い魚!」

シュツシュツ

茜「金魚」

シュツシュツ

茜「赤い魚」

シュツシュツ

レミ「金魚」

シュツシュツ

レミ「銀色のアクセサリー!」

シュツシュツ

遊輝「・・・えっ!?」

ブブー!!!

レミ「やったああ!!!」

スバル「ついに遊輝が負けたぞ！」

ブオオオン!!!!

♪♪♪♪♪♪♪♪

遊輝「もう行きたくねえ!!!」

奏「行きなさい!! 指名かかっているんだから!!」

ついに最後の砦、遊輝がハゲの軍団に挑む。が、ハゲの軍団は呆気なく遊輝を捕まえ

る。忍者、全滅。

遊輝「いててててててて!!!!」

スバル「うわあ・・・強烈!」

遊輝「そこ骨!! 骨しかねえから!!」

奏「あれ、関節技決めてるわね」

ハゲの軍団から指名されていた遊輝、ハゲの軍団の気合の入りようは並大抵じゃな

かった。



レミ「えっ？次最後？」

スバル「やつと終わりか……」

レミ「あつ、もう一枚カンペきた。何々……『最後に負けた者はお年玉になつてもらいます』」

奏「？どう言う意味？」

遊輝「わかんねえけど嫌な予感しかしねえ……負けたくねえ……」

響「とりあえず勝ちやいいんだね……」

遊輝「最後だ、いくぞ……せえの！」

シュツシュツシュツ!!

遊輝「銀色のアクセサリー！」

シュツシュツ

奏「クロムハーツ！」

シュツシュツ

奏「金色のお寿司！」

シュツシュツ

スバル「数の子！」

シュツシュツ

スバル「緑の電車!」

シュツシュツ

響「山手線!」

シュツシュツ

響「緑の果物!」

シュツシュツ

茜「メロン」

シュツシュツ

茜「緑の果物」

シュツシュツ

レミ「メロン」

シュツシュツ

レミ「黒いチーム!」

シュツシュツ

遊輝「はっ!?!なにそれ!?!」

ブブー!!



レミ「嵌めた!!」

遊輝「何だよ黒いチームって!？」

レミ「ラグビーのニュージランド代表!」

遊輝「・・・ああああ!!!」

ブオオオン!!!

♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

響「ほら! さつさと行きなさい!」

遊輝「ちきしょー!!!」

奏「派手にやられてきなさいよ」

最後の大事な事を任された遊輝、しかしいつまで経ってもハゲの軍団が来なかった。

遊輝「あれ?」

スバル「なんか様子が変だな」

茜「ハゲの軍団じゃないとなると、誰がくる「私だ!!」?今の声って・・・」

遊輝「!?ま、まさか・・・」

遊輝が今までハゲの軍団が出てきていた方向に目を向ける。そこにいたのは・・・

アリア「はっはっは!!! 2時間も待ってようやく出番が来た!!!」

遊輝「げえ!？」

レミ「アリアさん……いつのまに……」

アリア「セツト裏で全部見ていたわよ!私に襲われてブルーな気持ちってどういうこと!？」

遊輝「朝起きていきなり俺の貞操が奪われたら誰だってブルーになるわ!!」

アリア「まあいい!あとでお話をしてあげる!さあ罰ゲームだよ!」

スバル「そうそう、お年玉になるって何だ?」

アリア「その名の通りお年玉としてすみれさんに献上するのよ!」

遊輝「げえ!？」

茜「あくまずい……お母さんの作品、今溜まりに溜まってるから返してくれないんだよね」

遊輝「何で娘のお前がそれをやらないんだよ!？」

茜「私がやっても終わらないくらい量の量が今ある」

レミ「私も今、ツアーとアルバムの関係で無理」

奏「お父さんのお店のお手伝い。この時期は書き入れ時だし」

響「私は大晦日と元旦は家でゆつくり」

アリア「というわけで遊輝ちゃんがすみれさんへのお年玉!」

遊輝「絶対に嫌だ!!!」

アリア「あつ、逃げれないから」

遊輝「あいてっ!？」

アリア「ほいよ」

遊輝「なっ!?! なっ!?!」

スバル「おおく浮いてる浮いてる。さすが魔法使いだな」

アリア「遊輝ちゃんをこのお手製のお年玉袋に入れてっど……じゃあまたね。私お年玉渡してくるから」

奏「は、は、はい……」

すたこらとアリアが巨大なお年玉袋を浮かせてセットから帰っていった。残りのメンバーはシーンとしている。

レミ「……何これ？」

奏「さ、さあ……」

スバル「とりあえず終わりだな……」

響「あつ、レミ。カンペ」

レミ「えっ? えくと……『好評だったら続く……』」

茜「続くの!？」

みんなも久しぶりにだいじょぶぶぶぶ!!!

## コラボく遊戯王ARC-V 夜天の来訪者く 前編

これはチーム5D's、ラストランが行われる1ヶ月前、まだまだ肌寒い時期に精霊世界で起こった異変に出くわした魔法少女3人組の記録である……

遊輝 side

「というわけで、魔法少女3人組再結成!!今回はジュノン様の依頼を解決するわよ!」

「……………」

「返事は?!」

「……………はい」

1人声を張り上げている魔法使い姿のエリアに同じく魔法使い姿に服を変えさせられた俺と龍可は気だるそうに返事を返した。

ここは精霊世界の都市の一つ、グリモワール。ジュノンの洗脳事件とエリアの事件で壊滅的な被害を2回も受けた街だが、着々と復興して活気のある街に戻ってきた。

「何でわざわざ俺たちまで……しかもまた変な格好」

「変な格好とはどういう意味よ魔法少女遊輝ちゃん？ちゃんとアリアさんが作ったお手製の服です」

「だって……だって……何でまた女物の服を／＼／＼」

現在、俺はアリアに嵌められて女物を服を、龍可とアリアとお揃いで色違いの女物を服を……着ている。(魔法少女チノ、帽子は三角帽子でマントを羽織っている。遊輝は赤・龍可はピンク・アリアは水色)

「／＼／＼何で……何で……」

「諦めよう遊輝……デュエルに負けちゃったし」

「ふんふくん!!あんな状態でアリアさんに勝とうとするなんて1万年早いわ!!」

「アリアお姉さん……話進めましょうよ。私たち、着替えさせられて、腕輪と首輪をさせられて、何も知らないんですから」

「おっと、そうだね。今回の依頼はジュノン様から直々のお依頼だね。郊外にいる怪しい物体の調査を頼まれたのよ」

「んなもんお前1人でいけるだろ……」

「それがさ、話を聞く限り妙な物体だね……人数多い方が便利かと思ったのよ」

「妙な物体、ですか？」

「そうなんだよ、何かこう口にし辛いんだけど、ラグビーボール状でさ……とにかく」

早く行こう！見たほうが早い！というわけで2人も飛んだ行くわよ！」

「あつ?!ちよつ?!待てよ!!」

「ま、待つて!!置いていかないで!!」

いきなり箒に跨いで飛んで行ったアリアを見て俺と龍可も慌てて箒に跨いで追いかける。

~~~~~

「着いた着いた、これよこれ」

「は、早いんだよ・・・」

「・・・な、何ですかこれ?」

飛び始めてから30分、目的地となる場所の上空についた。目線の先には確かに意味不明な、説明しづらい物体がある。黒いラグビーボール状の形をして、一面が何かに覆われているような感じだ。

「こいつの調査を任されたのだけどねえ、どこから手を付けようかしら」

「周りを見たのか?」

「360度どこ見ても一緒よ。とりあえず降りましょうか」

アリアを先頭に謎の物体の前に降りる。うえから見て光沢を放っていた壁みたいなものは近くで見ると鏡のように反射して自分の等身大の姿見が映る。

「なんか……きみ悪いわ、Gみたいで」

「あー、うん、気持ちは分かる。色といい、形といい、Gに近いな」

「言われたらこの物体、Gにしか見えなくなっただわね。とりあえずこれ、材質何かな？」
そう言つてアリアが近づいてコンコンと叩く。すると、黒い光沢を放っていた壁みたいなものがいきなり光り出した。

「な、何!？」

「な、なんだ!?!何したんだ!?!」

『……キドウ、キドウ、コレヨリワープソウチキドウシマス』

……グイイイイン!!!!

「きゃあああ!!!」

「る、龍可!？」

「いやあああああ!!」

「ちよつ!?!ア、アリアまで!?!ぐうう!!」

突如、目の前の黒い物体から謎の空間が現れて、吸い込み始める。突然すぎたので龍可、続いてアリアが吸い込まれていき、俺も庄に負けて引つ張られて行く。

「ぐっ!? こ、この!?」

グイグイグイ!!!

「ちよ!!? パワー上がった!!? ああああ!!!」

遊輝 side out

はやて side

「はやて、この食材は?」

「ああ、それ? それは冷蔵庫に入れといて。それ以外は……魚は冷凍に」

『主ははやて、今日はやけに食材を買って来たのですね』

『アインス、今日は特売なんだよ。母親にとつて特売とはとても大事な「ナハト」、それ以上喋るようだったたらその口を縫い合わすわよ」……』

『(……余計なことを言うからです)』

「はやてちゃん、今日は止めてくれてありがとうね」

「気にしなくていいんですよ、こういう女子会みたいな事は私もした事ないし」

スーパーから買ってきた食材たちはユートや隼に任せて片付けてもらい、私はアリシ

アちゃんとお話を始める。

私は八神はやて、もともとは親友のなのはちゃんやフェイトちゃんと一緒に魔法使いとして過ごしていたけど、今は訳あってこのARC-Vの世界で過ごしている。ユートや隼とはこの世界に来てからすぐの頃に出会って、こうして同居している。私の精霊にはナハトとリインフォースがいて、今日の前にいるアリシアちゃんとも仲が良い。

「ねえまずは何する?」

「そうやなく・・・まずは普通にゲームして遊ぼうか」

「良いね!」

『・・・!!主!!』

『!!主はやて!!』

「!?な、何や急に!」

「おいユート・・・」

「ああ・・・」

「ど、どうしたんや2人とも、いきなり目つきが変わって」

「今、外で何か変な空気を感じた」

『しかも強烈な反応だ。もしかしたら闇の欠片と関わりのあることかもしれない』

「な、なんやて!」

「外に出るぞ！すぐ目の前だ！」

デュエルディスクをセットしたユートが先にリビングを飛び出した。その後を追うように隼、アリシアと続いて少し遅れるように私も追いかける。玄関を飛び出すと、後ろに黒色の妙な物体があつて、その物体の前に3人の魔法少女が尻餅をついていた。

「い、いてててて……大丈夫か？」

「な、何とか……」

「あいててて……ここどこ？」

「何者だ貴様ら!!一体どうやってここに来た!?!」

真つ先に隼が飛び出して3人の前に立つ。それに気づいた水色の服を来た魔法少女がこつちに顔を向けた。

「いててて……!!マジ!?!八神はやて!?!」

「えっ!?!」

その水色の魔法少女は私と目を合わせた途端、立ち上がって私の目の前に移動、無理矢理手を掴んできた。

『主!?!』

「本物!?!本物の八神はやて!?!コスプレじゃなくて!?!やった!!私ついてる!!これ、これにサインして!!」

「えっ?・・・あ、サ、サイン?それくらいだったらナンボでも」

『・・・?あいつ、もしかして』

『?ナハト、どうしたのですか?』

すごく推してくる魔法少女の庄に負けて、私はその魔法少女から色紙とマジックを手にして簡単なサインを書く。その間、ナハトは1人、未だにキヨロキヨロとしている2人の魔法少女のうち、赤色の服を来た魔法少女の方に向かって顔を見る。

『・・・やっぱり!!お前遊輝だな!!』

「えっ!?何で俺の名前・・・あああ!!!ナハトさん!!」

『?ナハト、知り合いですか?』

『ずっと前に俺が異世界の奴と会ったって話したじゃんか!そいつだよ!』

「?ちよつと待て。確かにその話は俺も聞いたが、そいつは男って言うていただろ?そ

の子はどう見ても女の子『残念ながらユート、こいつ男だ』・・・ハツ?」

「・・・本当か?」

『ビックリする気持ちはわかるぜ隼、でもこいつ、男だ』

『・・・きみ、良い趣味してますね』

『／／／／違う!!なんかすごい勘違いされている気がするけど、違うから!!』

「やった!!八神はやてからサイン貰った!!私のコレクション増えた!!」

「……誰かこの状況をまとめて」

「ア、アリシアちゃん、アハハハ……（汗）」

~~~~~

「……つまり、君たちの世界に現れたその後ろの奇妙な物体を調査しようとしたところ、誤作動でその物体が作動してこっちの世界に飛ばされた」と

「つまるところそういうことです、ユートさん……」

「あのアリアという女性がはやてに飛びついていたのは、はやてがそっちの世界ではアニメのキャラクターだったからか、かくいう俺たちもそっちの世界ではアニメのキャラクターというんだから」

「わ、私は全く知らないんですけど、遊輝は……」

「ユートさんや隼さんは分かるのですが、『なのは』系列の作品は見たことがなくて……すっごい!!ナハトやリインフォースとかアリシアとか主要キャラもいるなんて!!サイン頂戴!!」

ナハトの知り合い、遊輝ちゃん……間違えた、遊輝君の話を聞くと、後ろの妙な物体が誤作動して私たちの世界に飛ばされた見たい。赤色の魔法少女の服を着た遊輝君、そ

して彼女の龍可ちゃん、そしてもう1人、さつきからサインをねだっている水色のアリアちゃんの3人や。

『でも遊輝、お前が前にここに来た時は変な腕輪で帰れたじゃないか』

「今日はないんだよ・・・そいつを直すしか」

『どうやら異空間物質転送装置のようです。しかも未完成の、おそらくアリアさんの魔力に反応して誤作動を起こしたのだとお考えられます』

「遊輝たちは帰れるんか？」

『どのように設計したのか分からないですから、今はエネルギー充填中ですが行き先は恐らくランダムかと・・・』

「その・・・エネルギーが溜まるにはどれくらい」

『1日は少なくともかかります。下手に触ってしまうと壊れてしまいますし、自然回復を待つしか』

「はあ・・・待つかないのか、しかも帰れるか分からない」

「災難ですね、遊輝ちゃん」

「だから俺は男です、アリアさん」

アリアちゃんは遊輝君のことを未だに女の子としか見ていない。まあ私も、正直本当に男の子か信用していないけど・・・

「アリアく、どうするよ。止まることころ探さないと。つてか普段着返してくれよ。流石に目立つ……」

「ええ良いじゃん。異世界人みたいな格好でさ、それにはやてだつて魔法少女だからみんな気にしないでしょ、魔法少女遊輝ちゃん」

「／／／／だから俺は男だああ!!!」

『説得力無いんだよな、前に一緒にいた遊夜とアルフも同じような男の娘だったし、あいつらと合わせて男の娘3人衆』

『ナハトがそう言うほどですからよほど可愛い男の娘なんですな』

「リインフォース……変な方向に走らないでよね？」

「同意見やな……」

ナハトの話聞いたアリシアちゃんが苦笑いをして返す。ここで変な趣味を作らんといて欲しいなあ……

「とりあえず泊まることころに困っているならこの家に泊まっていけばいい。構わないだろはやて」

「あ、うん、部屋は余っているし。私も似たような境遇だから、こういう人達はほっとけないよ」

「助かります……」

そう言つて遊輝ちゃ・：もういいや、遊輝ちゃんは頭を下げた。この人は律儀やなあ  
と感心してアリアちゃんの方を見る。

「・・・む、今誰かが私をバカにしたような感じがした」

「気のせいじゃないのですか？」

「アリアさんのセンサーが反応している。絶対に誰かがバカにした」

「・・・この人は敏感やなあ。」

「まあまあ、せつかくこうやつて何かの縁で会つたのですし、少しお茶をしてお話ししま  
しょう」

「えっ!? いいの? やつた!!」

「はやて、いいよね?」

「私も大丈夫やで、今紅茶とお菓子を持って来たるで」

『主、私も手伝います』

「ありがとうリインフォース」

ソファから立ち上がつてキッチンに向かい、ティーバックの紅茶とお菓子を出す。  
ポッドのお湯は・・・ないか、仕方ない。やかんで沸かそう。

「へえ、アリアは魔法使いなんだね」

「そうだよ。ここまで来るには大変だったけど」



「魔法使いになる子はみんな苦勞するわね、はやても苦勞していたし」

『主も大変だからね、足のことも』

『ナハト!!』

「ええんやリインフォース、事実なんだし」

ナハトが私の足のことに触れて、リインフォースが大声を上げたけど私はそれを止めた。確かに未だに足の後遺症は残っているけど、それでも、ずっと楽しい生活を送ることが出来ている。

『主はやて……』

「リインフォースは先にお菓子を持って行って、私はみんなの分の紅茶を淹れるから」

『……はい』

お盆に置いたお菓子をリインフォースに預けて、私はお湯が沸くのを待つ。

はやて            s i d e            o u t

アインス            s i d e

「……へえ、遊輝ちゃんの彼女がこの2人」

「違う!! 違うから!! 龍可とは正式に付き合っているけど、アリアは勝手に言っているだけだから!!」

「……お前、大変だな」

「分かってくれますかユートさん、あなただけが俺の心の友です……」

『皆さん、先にお菓子をどうぞ。紅茶は主が後で持ってきます』

「ありがとうございますリインフォースさん」

『アインスで良いです。リインフォースは長いですから』

「は、はい」

「良いお菓子ねえ、紅茶と合うってすぐにわかるわ」

私がテーブルの上にお菓子の入ったお皿を乗せるとすぐにアリアさんは手を伸ばした。遊輝さんはそれを見て「礼儀がなっていない」って小声で言ったけどアリアさんはそんな事御構いなしのようだ。

「お前たち、これからどうする? 明日までとなるとかなりの時間があるが」

「うくん……せっかく異世界に来たんだし観光と言いたいけど、あんまり派手な事をするとな面倒臭くなるからね……」

「同感だな、必要最低限の事でしか外には出たくない。というかこの格好で外を歩きたくない」

「何だよ、別に良いじゃない。魔法少女遊輝ちゃんは元の世界では大人気なんだから」

「／／／／／そ、それを口にするな！」

「人気って・・・キャラ的な意味？」

「そんな感じ、大人気よ」

『お前、やっぱモテるな、男から』

「うるせえナハト!!!」

「・・・ああ、多分この子、人からかわれやすいタイプですね。色んな意味で災難です。」

「みんなお待ち、お茶持ってきたで。ゆっくりどうぞ」

「ありがとうはやて」

「いただきます！」

お礼を言つて紅茶を受け取るユート、そしてアリアさんはそのままガブガブと紅茶を飲み始める。

「それにしてもみんな可愛い衣装だね！」

「でしょ！全部私の手作りなんだ！」

「手作り!?すごいね！」

「へえ・・・本当に凄いですね」

「そんなに凄いいんか？私から見たら普通の魔法服にしか見えないけど」

「あれは色々な機能があるから違う系統で凄いいけど、これはコスプレ衣装としてはトツプレベルの衣装だわ。ただ可愛いだけじゃなくて、通気性とか機能性とか着る人のために考えられている衣装だわ」

「へ、へえ・・・く、詳しいんやな、アリシアちゃん（汗）」

「これどうやって作ったのから教えてくれる？」

「いいよ！泊めてもらったお礼だよ」

～～（翌日）～～

『じゃあ私の相手は龍可さんですね』

「よろしくお願いします」

昨日はお茶会の後、そのまま話し込んで夕ご飯を食べて、みんなゆつくりと部屋で寝た。そして今日はせっつかくの異世界のデュエリストなのでデュエルしようという話になり、先陣を切ってこちら側からはまず私、そして向こうからは龍可さんが出てきた。

「龍可はどんなデッキかな？」

「やけにデッキ枚数が分厚い気がするが回るのか？」

「まあ見てたらわかりますよ……」

『デュエルをする前に……』

私はデュエルディスクをセットした後に胸のボタンを押して服を黒の袖なし、膝丈のスカートへと変える。

「何ですか……それ？」

『本気を出す時って思ってくれたらいいです』

「な、なるほど……」

『それじゃ、始めましょうか』

「はい」

「デュエル!!?」      「デュエル!!?」

龍可	LP	4000	アインス	LP	4000
----	----	------	------	----	------

異世界の人……確か龍可さんはアニメのキャラだったよね。デュエル回数は少ないけど、確か妖精を主軸にしたデッキだったはずです。

「先行は龍可ちゃんね」

「私のターン、ド「龍可!この世界のルールは先行ドロローなしだ!」あつ、そうだった……」

そう言えは龍可さんの世界はまだ先行ドロローがあつた時ですね、戸惑っても仕方ない

です。

「えっと、魔法カード、隣の芝刈り」

「隣の芝刈り？どんな効果？」

「お互いのデッキの枚数を数えて、もし私の方がデッキ枚数が多い場合、私は相手と同じデッキ枚数になるようにデッキの上からカードを墓地に送ります」

「……エツ？」

「デッキ枚数教えてください。私は55枚です」

「……35枚」

「じゃあ上から20枚を墓地に送ります」

「そう言って龍可さんのデッキの上から20枚のカードが飛び出して墓地に送られて行く。」

「すごい墓地肥やしのカードだな……」

「決まったら大変なことになりそうぞ」

「墓地に落ちたライトロード・ビースト ウォルフ、Em トリック・クラウン、ライトロード・メイデン ミネルバ、エクリスプス・ワイバーン、ジャツジメント・ロードの効果発動！」

「!?ラ、ライトロード!?しかもたくさん!？」

「エクリスプス・ワイバーンの効果でデツキから裁きの龍をゲームから除外！ミネルバの効果でデツキの上から1枚を墓地に！」

・ライトロードの裁き

「そしてトリック・クラウンは墓地に送られた時、ウォルフはデツキから墓地に送られた時、特殊召喚できる！」

E m トリック・クラウン 攻1600↓0

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100

「トリック・クラウンはこの効果で特殊召喚した場合、攻撃力と守備力は0になって、私は1000ポイントのダメージを受ける」

龍可 LP 4000↓3000

「そしてフィールド魔法のジャッジメント・ロードはデツキから墓地に送られた場合、発動する！」

龍可さんのフィールドに2体のモンスターが並び、さらにフィールドに天空から光が差し込んで、龍可さんが神秘的に輝く。

「そして私がダメージを受けたので墓地のH・C サウザンド・ブレードとライトロードのモンスター効果で墓地に送られたライトロードの裁きの効果！ライトロードの裁きの効果でデツキから2枚目の裁きの龍を手札に加えて、サウザンド・ブレードは私がダ

メッセージを受けた時、攻撃表示で特殊召喚する！」

H・C サウザンド・ブレード 攻1300

「・・・おいユート、あの子確か1枚の魔法カードを発動しただけだよな？」

「あ、ああ・・・確かにそうだが」

『相変わらず龍可のドロー力と墓地落とす力は異常だぜ。何でもかんでも都合の良い方向に持っていくぜ』

「ライトロード・アサシン ライデンを召喚！」

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700

「ライデンの効果！デツキの上からカードを2枚墓地に送ります！」

・カオスソルジャー〜開闢の使者〜

・ブレイクスルー・スキル

「レベル4のライトロード・アサシン ライデンとトリック・クラウンでオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！ライトロード・セイント ミネルバ！」

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000



「ファイールド魔法、ジャステイス・ロードの効果！手札の《ライトロード》モンスターを墓地に送って、デッキから《ライトロード》モンスターを墓地に送ります！手札のライラをコストにして、デッキからライトロード・シャーク スファールスを墓地へ！そしてデッキから墓地に送られたスハアルスはウォルフと同じく特殊召喚できます！」

ライトロード・シャーク スハアルス 攻300

「Lv4のライトロード・ビースト ウォルフにLv3のライトロード・シャーク スハアルスをチューニング！」

☆4 + ☆3 Ⅱ ☆7

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる！シンクロ召喚！降誕せよ！エンシエント・フェアリー・ドラゴン！」

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 守3000

ウォルフとスファールスがシンクロ素材とされて、エンシエント・フェアリー・ドラゴンが現れる。確かあれが龍可さんのエースモンスターだったわね・・・つて、冷静に見ているけどかなりやばい状況だよな、これ！

「ライトロード・セイント ミネルバの効果！デッキの上から3枚を墓地に送ります、その中の《ライトロード》の数だけ、カードをドロウします！」

ライトロード・セイント ミネルバ OVR 2↓1

・ライトロード・アーチャー フェリス

・死者蘇生

・光の援軍

「墓地に落ちたのは1枚、よつて1枚ドロー！さらに墓地に落ちたライトロード・アーチャー フェリスは《ライトロード》モンスターの効果でデッキから墓地に送られた時、特殊召喚する！」

ライトロード・アーチャー フェリス 守2000

「エンシエント・フェアリー・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度、フィールド魔法を破壊して、1000ポイントライフを回復する！プレイン・バック！」

龍可 LP 3000↓4000

エンシエント・フェアリー・ドラゴンの効果によって龍可さんのフィールド魔法が破壊されて、龍可さんのライフが元に戻った。

「そしてデッキから新しいフィールド魔法を手札に加える！2枚目のジャステイス・ロードを手札に加えて、破壊されたジャステイス・ロードの効果！デッキの上から2枚を墓地に送ります！」

・ソーラー・エクステンジ

・ライトロード・アサシン ライデン

「Lv4のH・C サウザンド・ブレードにLv4のライトロード・アーチャー フェリスをチューニング！」

☆4

+

☆4

||

☆8

「聖なる古の超能力者 今交わりてこの地に蘇る！シンクロ召喚！PSYフレームロード・Ω！」

PSYフレームロード・Ω

攻2800

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

龍可 手札 5枚

LP 4000

デッキ残り枚数 22枚

【モンスターゾーン】

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 守3000

PSYフレーム・ロード Ω 攻2800

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚

「な、長い1ターンやったな・・・いつまでも続くかと」

「いつものことです・・・」

「い、いつもあんな感じなのか?」

「むしろ少し調子悪い方です」

「けど・・・リインフォースのデッキも大概やし・・・」

「私のターン!ドロー!」

アインス 手札 6枚

「スタンバイフェイズ、墓地の仁王立ちの効果!墓地のこのカードを除外して、PSYフレームロード Ωを対象にして発動する!このターン、相手は選択したモンスターしか攻撃できない!」

仁王立ちが墓地にあつたのね。PSYフレームロード・Ωを対象にして私の攻撃を完全にシャットダウンするというわけね、でも私のデッキには関係ないです。

「メインフェイズ、手札からトレード・インを発動。手札の大天使クリステアを捨てて、2枚ドローします」

「く、クリステア!」

「さらに魔法カード、手札断殺!互いのプレイヤーは手札を2枚捨てて、2枚ドローする!」

「だ、断殺!?私は・・・ソーラー・エクステンジとライデンを捨てる」

「私はアテナと墮天使アスモディウスを墓地に送ります。そして魔法カード、墮天使の追放！デツキから《墮天使》カードを手札に加えます！デツキから墮天使イシユタムを加えて、墮天使イシユタムの効果発動！このカードと手札の墮天使スペルビアを捨てて2枚ドローします！」

「(こ、この感じ・・・まさか終世?!)」

「手札のヘカテリスの効果、このカードを捨てて、デツキから神の居住くヴアルハラくを手札に加えて、発動！その効果により手札からアテナを特殊召喚！」

アテナ 攻2600

「そして通常召喚！墮天使ユコバック！」

墮天使ユコバック 攻1200

「アテナの効果、そしてチェーンしてユコバックの効果発動！」

「ちえ、チェーンでリバースカードオープン！罫カード、ブレイクスルー！スキル！アテナを対象にしてこのターン、アテナの効果は無効になる！」

「では墮天使ユコバックの効果でデツキから2枚目のスペルビアを墓地に、アテナの効果で効果ダメージを与える予定でしたがブレイクスルー！スキルの効果で無効です」

「(た、助かった・・・ブレイクスルー！スキルがなかったら私負けていた・・・)」

「カードを1枚伏せてターンエンドです」

アインス 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

アテナ 攻2600

堕天使ユコバツク 攻1200

【魔法・罨ゾーン】

神の居住くヴァルハラく

伏せカード 1枚

「ア、アインスのデッキって終世か……こわつ……」

「どっちのデッキも1ターンで決めるに行くデッキね。ほんの少しでも隙を見せたらそれでジ・エンドね」

「(た、確かに……早めに勝負を決めないと) 私のターン! ドロー!」

龍可 手札 6枚

「手札からフィールド魔法、ジャステイス・ロードを発動して効果発動! 手札のライトロード・マジシャン ライラをコストにして、デッキからライトロード・バタフライ ファルファアツラを墓地に送ってる! ファルファアツラもデッキから墓地に送られた場合、

特殊召喚する！」

ライトロード・バタフライ ファルファツラ 攻0

龍可さんの頭の上に小さな光り輝く蝶が舞って龍可さんの頭の上に乗る。

「エンシエント・フェアリー・ドラゴンの効果！プレイン・バック！」

龍可 LP 4000↓5000

再びエンシエント・フェアリー・ドラゴンがフィールド魔法を破壊して龍可さんのライフが回復する。

「デッキからサーチするフィールド魔法はもうないわ。破壊されたジャステイス・ロードの効果！デッキの上からカードを2枚墓地に送る！」

・超電磁タートル

・光の援軍

「Lv7のエンシエント・フェアリー・ドラゴンにLv1のライトロード・バタフライファルファツラをチューニング！」

「えっ!?!」

「エ、エンシエント・フェアリーをシンクロ素材やて!?!」

☆7

+

☆1

||

☆8

シンクロ素材となったエンシエント・フェアリーはファルファツラが作った緑色の輪

の中に入って宇宙で駆け上がって行く。

「古の妖精龍が星の力を授かる時、永遠の宇宙を駆け抜ける流れ星に変わる。希望の弧を描く彗星となれ！シンクロ召喚！流れ行け！エンシエント・コメット・ドラゴン！」

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻0

上空から彗星が流れてきて、フィールドに眩しい光が照らさせる。その光が消える  
と、魔法使いのような三角帽子を被り、周りに沢山の星が存在するエンシエント・フェアリーがフィールドにいた。

「き、綺麗・・・」

「美しいモンスターだわ・・・」

「エンシエント・コメットの効果発動！1ターンに1度、相手フィールドのカード1枚を対象にして破壊する！私はアテナを破壊する！スター・ブレイク！」

エンシエント・コメットの周りにいた星たちがアテナに向かって降り注ぐ。アテナは何もできずにそのまま破壊されてしまった。

「そしてエンシエント・コメットは自身の効果でモンスターカードを破壊した時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分、攻撃力がアップする！」

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻0↓2600

「これでバトル！ライトロード・セイント ミネルバで堕天使ユコバックを攻撃！」



「リバースカードオープン！攻撃の無力化！」

「!?そ、そんな!？」

「この攻撃を無効にしてバトルを終了させます！」

ミネルバがユコバックに攻撃を仕掛けて来たけど、私が発動した攻撃の無力化によって攻撃は無効になった。

「(このターンに決めれなかったのは痛い……ここはライフを温存しておきましょう) タ、ターンエンド。エンドフェイズ、エンシエント・コメットは攻撃力が0に戻って、守備表示になるわ」

龍可 手札 4枚 LP 5000 デッキ残り枚数 16枚

【モンスターゾーン】

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻2600 ↓守4000

PSYフレームロード Ω 攻2800

【魔法・罨ゾーン】

なし

「では、私のターン！ドロー！」

アインス 手札 3枚

「スタンバイフェイズ、PSYフレイムロード Ωの効果！除外されている仁王立ちを墓地へ！そして墓地の仁王立ちの効果でPSYフレイムロード Ωを対象にとって発動！」

「なら攻撃以外の方法で倒せばいいだけです！魔法カード、ソウル・チャージ！自分の墓地のモンスターを任意の枚数選択して、墓地から特殊召喚します！私はアテナ2枚を選択！」

「!?」

「アテナ2体を特殊召喚！その後、特殊召喚したモンスターの数×1000ポイントのダメージを受けて私はこのターン、攻撃できません！」

アインス LP 4000↓2000

「アテナ1体目の効果発動！フィールドの堕天使ユコバックをリリースして、墓地から堕天使スペルビアを特殊召喚！」

堕天使スペルビア 攻2000

「チェーンでアテナ1体目、アテナ2体目、堕天使スペルビアの順で効果発動！堕天使スペルビアの効果で墓地から堕天使アスモディウスを特殊召喚！」

墮天使アスモディウス 攻3000

「さらにアテナ2体の効果！まずはスペルビアが出た600×2の1200ダメージ！さらにアスモディウスが出た分も追加で合計2400のダメージ！」

龍可 LP 5000↓3800↓2600

「さらにアテナ2体目の効果！フィールドのスペルビアをリリースして墓地から2体目のスペルビアを特殊召喚！スペルビアの効果で墓地から墮天使ユコバックを特殊召喚！アテナ2体の効果で合計2400のダメージ！」

龍可 LP 2600↓200

「ぐう!!で、でも私のライフはまだ残っています！」

「まずはユコバックの特殊召喚成功時の効果で3枚目のスペルビアを墓地へ、そしてユコバックとスペルビアをリリース！3体目のアテナを召喚！」

「・・・えっ?」

「すでにフィールドにいるアテナ2体の効果で1200ポイントのダメージです！」

龍可 LP 200↓0

WIN      アインス      LOS      龍可

「だ、大丈夫か龍可!？」

「だ、大丈夫よ」

「リ、ラインフォース・・・あんた・・・」

『お前、色んな意味で大物だな。身内以外でアテナのバーンだけで勝つなんて』

『・・・少し反省してます』

デュエルが終わって龍可さんの方にはアリアさんと遊輝さんが駆け寄り、私の方には引きつった笑みの主はやたと呆れ顔のナハトが近寄ってきた。

「い、いくら相手に攻撃できないとはいえ、ちよつとはやり方を考えて」

『し、しかしあれしか勝つ手段が』

『じゃあ負けろよ』

『ナ、ナハト!!』

「まっ、龍可ちゃんがアテナを無警戒で相手にターンを渡したのが間違いね」

「そうですね・・・少しは警戒しておけばよかったです」

「それじゃ次は私がやるわよ。相手は・・・」

「私だよアリアさん」

1戦目が終わり、すぐに2戦目に入る。こちら側からはアリスア、向こうからはアリアさんがでるみたいだ。

「いや、こんな風に異世界の人とデュエルするなんて思ってもいなかったよ」  
「私もです。それじゃ・・・」

アリシアの方も起動させて、ネクタイをつけたチアガールへと変わる。

「へえ、可愛い衣装ね」

「ありがとうございます。私も非常に楽しみです」

「じゃあ行くわよ！」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

# コラボ～遊戯王ARC-V 夜天の来訪者～ 中編

アリア side

「デュエル!!?」 「デュエル!!?」

アリア LP 4000 アリシア LP 4000

「先行は私つと！まずは魔法カード、螺旋のストライクバースト！デツキからLv7の《オッドアイズ》Pモンスターを手札に加える！」

「オ、オッドアイズだ?!」

「私はオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンを手札に！そしてEM ドクロバット・ジョーカーを召喚！」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

「ドクロバット・ジョーカーは召喚成功時、デツキから《オッドアイズ》《EM》《魔術師》Pモンスターの中から1体を手札に加える！私はオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンを手札に加えて、ライト・Pゾーンにスケール8のオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンをレフト・Pゾーンにスケール1のオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンをセットイ

ング！」

私の両隣のPゾーンにオッドアイズ・アークペンデュラムとオッドアイズ・ペルソナの2体のオッドアイズがセッティングされた。

「これで2から7のモンスターが召喚可能か……」

「フィールド魔法、天空の虹彩を発動！この効果でレフト・Pゾーンのオッドアイズ・ペルソナを破壊！」

「自分からスケールを破壊!?!」

「その後、デッキから《オッドアイズ》カードを手札に加える！」

天空の虹彩によってレフト・Pゾーンのオッドアイズ・ペルソナが破壊されて、私のデッキから1枚のカードが飛び出してそれを手札に加える。

「私はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に！」

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンだど?!」

「それは神遊矢のカードじゃないのか?!」

『おいおい……2人とも、あいつらは異世界から来たんだぜ。それくらい持っていて不思議じゃないだろ』

「さらにライト・Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの効果！自分フィールドの《オッドアイズ》カードがフィールドから離れた場合、デッキ・手札・墓地から《オッ

ドアイズ』モンスターを特殊召喚する！デッキからEM オッドアイズ・デイゾルバーを特殊召喚！」

EM オッドアイズ・デイゾルバー 守2600

Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの咆哮で私のデッキからオッドアイズ・デイゾルバーがフィールドに現れる。

「オッドアイズ・デイゾルバーの効果発動！このカードとフィールドのモンスターで融合召喚を行う！私はドクロバット・ジョーカーとオッドアイズ・デイゾルバーで融合！」  
フィールドにいたオッドアイズ・デイゾルバーとドクロバット・ジョーカーが融合の渦に飲み込まれていき、私は両手を胸の前で合わせる

「二色の眼の龍よ！雷鳴の力を手にして天地を轟け！融合召喚！オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン！」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000

融合した渦の中から雷が鳴り響いて、オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴンがフィールドに現れた。

「さらにレフト・Pゾーンにスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンをセッティング！これでLv5から7までのモンスターを同時に召喚可能！Here we go!! It's show time!!振れる！輝きしペンデュラム！長き封印



から目覚め私に栄光よ！ペンデュラム召喚！現れよ！オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン！」

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

「カードを1枚伏せてターンエンド。エンドフェイズ時、オッドアイズ・ペンデュラムのペンデュラム効果でこのカードを破壊して、デッキから調弦の魔術師を手札に加える！」

アリア 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

【魔法・罫ゾーン】

天空の虹彩 (フィールド)

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

青：なし

「驚かされてばっかだけど、私だってやるんだから！私のターン！」

アリシア 手札 6枚

「まずはこの3枚の魔法カードを発動！フィールド魔法、六武院！永続魔法、六武の門！六武衆の結束！」

「んげっ!?!六武!?!まっず!?!六武の門発動時にオッドアイズ・ボルテックスの効果！エクストラデッキのドクロバット・ジョーカーをデッキに戻して、六武の門の発動を無効にして破壊する！」

「そんな!?!」

オッドアイズ・ボルテックスの効果が発動、エクストラにいたドクロバット・ジョーカーをデッキに戻して六武の門を破壊する。

「うう……仕方ないです。魔法カード、紫炎の狼煙！さらに魔法カード、増援！この2枚の魔法カードの効果で六武衆のご隠居と真六武衆ーキザンを手札に！」

……エツ!?!なにそれ!?!

「六武衆のご隠居は相手にモンスターがいて、自分にモンスターがない場合特殊召喚できる！」

六武衆のご隠居 攻400

「この時、六武院と六武衆の結束の効果により、それぞれに武士道カウンターを1個ずつ乗せる！そして六武院に武士道カウンターが乗っている時、相手のモンスターの攻撃力はカウンターの数×100ポイントダウンする！」

六武院 C 0↓1

六武衆の結束 C 0↓1

「さらに手札の真六武衆ーキザンはフィールドにキザン以外の《六武衆》が存在すると  
き、手札から特殊召喚できる！」

真六武衆ーキザン 攻1800

六武院 C 1↓2

六武衆の結束 C 1↓2

「永続魔法、六武衆の結束の効果！このカードを墓地に送って、このカードに乗っていた  
武士道カウンターの数だけドローします！」

アリシア 手札 1枚↓3枚

「(・・・ダメ、繋がらない)カードを2枚伏せてターンエンド！」

アリシア 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

六武衆のご隠居 攻400

真六武衆ーキザン 攻1800

【魔法・罨ゾーン】

六武院 (フィールド・武士道C 2)

伏せカード 2枚

「それじゃ私のターン！ドロー！」

アリア 手札 3枚

「魔法カード、壺の中の魔術書！互いのプレイヤーは3枚ドローする！」

アリア 手札 2枚↓5枚 アリシア 手札 1枚↓4枚

「霸王眷竜ダーク・ヴルムを召喚！」

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻1800↓1600

「霸王眷竜ダーク・ヴルムの効果発動！デッキから《霸王門》Pモンスターを手札に加える！」

「リバースカードオープン！罨カード、次元障壁！私が宣言するのはペンデュラム！私が宣言したモンスターカードは効果を発動できず、特殊召喚できません！」

「オッドアイズ・ボルテックスの効果発動！」

「手札のエフェクト・ヴェーラーの効果！このカードを手札から捨てて、オッドアイズ・ボルテックスの効果が無効にします！」

「いつ!?!」

オッドアイズ・ボルテックスが効果を発動しようとしたところにエフェクト・ヴェーラーが飛んできて、オッドアイズ・ボルテックスの効果が無効にした。これにより次元障壁の効果が適用されてダーク・ヴルムの効果は無効になってしまった。

「……仕方ない。オッドアイズ・ボルテックスを攻撃表示に変更！」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000↓攻2500↓2300

「これでバトル！オッドアイズ・ボルテックスで真六部衆ーキザンに攻撃！」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2300

真六部衆ーキザン 攻1800

アリシア LP 4000↓3500

「ぐっ!?!」

「(伏せはなし……諸刃の活人術とか?) 続いて霸王眷竜ダーク・ヴルムで六部衆のご隠居に攻撃！」

「リバースカードオープン！ガード・ブロック！」

ダーク・ヴルムの攻撃は通って六部衆のご隠居は破壊されたが、戦闘ダメージは0に

なってしまった。

アリシア 手札 3枚↓4枚

なんで六武衆であんなに手札増やすのかね・・・六武の門引きに行きたかったからな？にしてはガード・ブロックとかなくてもいいと思うけど・・・

「これでターンエンド！」

アリア 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2300

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻1600

【魔法・罨ゾーン】

天空の虹彩 (フィールド)

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

青：なし

「私のターン！ドロー！」

アリシア 手札 5枚

「(来た！でもその前に・・・)魔法カード、ブラックホール！」

「!?無理に決まってるでしょ!!オッドアイズ・ボルテックスの効果でエクストラデッキのオッドアイズ・ディゾルバーをデッキに戻してブラックホールを無効にする！」

「でもこれでオッドアイズ・ボルテックスの効果はもう使えない！永続魔法、六武の門と六武衆の結束を発動！」

「うっそ!?なんで!？」

「そして真六武衆ーカゲキを召喚！」

真六武衆ーカゲキ 攻200

六武院 C 2↓3

六武の門 C 0↓2

六武衆の結束 C 0↓1

「真六武衆ーカゲキの効果！手札から六武衆の影武者を特殊召喚！」

六武衆の影武者 攻400

六武院 C 3↓4

六武の門 C 2↓4

六武衆の結末 C 1↓2

「永続魔法、六武の門の効果！フィールドの武士道カウンターを4つ取り除くことで手札・デッキから《六武衆》を手札に加えます！私は六武院から2つと六武衆の結末から2つ取り除いて、墓地からキザンを手札に！」

六武院 C 4↓2

六武衆の結末 C 2↓0

「そして真六武衆ーキザンを特殊召喚！それぞれにカウンターが乗ります！さらにキザンは自身以外の《六武衆》モンスターが2体以上存在する場合、攻撃力が300ポイントアップ！」

真六部衆ーキザン 攻1800↓2100

六武院 C 2↓3

六武の門 C 4↓6

六武衆の結末 C 0↓1

あっ……これ、私にターンが永遠に回ってこないやつだ（汗）。何分1人回しが続くんだろう……

「六武の門の効果！今度は自身のカウンターを4つ取り除いてデッキから2枚目の真六



武衆ーキザンを手札に！そして特殊召喚！」

六武院 C 3↓4

六武の門 C 6↓2↓4

六武衆の結束 C 1↓2

「六武の門の効果で六武衆の結束のカウンター2つと自身のカウンター2つを取り除いて、六武衆の師範を手札に！」

六武の門 C 4↓2

六武衆の結束 C 2↓0

「Lv4の真六武衆ーキザン2体でオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！六武衆の影ー紫炎！」

六武衆の影ー紫炎 攻2500

六武院 C 4↓5

六武の門 C 2↓4

六武衆の結束 C 0↓1

「六武衆の影ーシエンの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、六武衆の影武

者を選択！攻撃力を2000にする！」

六武衆の影ー紫炎 OVR 2↓1

六武衆の影武者 攻400↓2000

「Lv3の真六武衆ーカゲキにLv2の六武衆の影武者をチューニング！」

☆3 + ☆2 || ☆5

「シンクロ召喚！真六武衆ーシエン！」

真六武衆ーシエン 攻2500

六武院 C 5↓6

六武の門 C 4↓6

六武衆の結束 C 1↓2

はい終わった!!あんなモンスター出されたらペンデュラムデッキ終了のお知らせだ

よー！

「まずは六武の門の効果！六武衆の結束から2つと自身から2つ取り除いて墓地から真

六武衆ーキザンを手札に！」

六武の門 C 6↓4

六武衆の結束 C 2↓0

「そして手札から真六武衆ーキザンと六武衆の師範を特殊召喚！」

六武衆の師範 攻2100

六武院 C 6↓7↓8

六武の門 C 4↓6↓8

六武衆の結束 C 0↓1↓2

「六武の門の効果！自身から2つと六武衆の結束から2つ取り除いてデッキから3枚目の真六武衆ーキザンを加えて特殊召喚！Lv4のキザン2体でオーバーレイ！六武衆の影ー紫炎を特殊召喚！」

六武院 C 8↓9↓10

六武の門 C 6↓4↓6↓8

六武衆の結束 C 2↓0↓1↓2

「永続魔法、六武衆の結束の効果！自身を墓地に送って2枚ドロー！」

「・・・なあ、いつまでアリシアのターンが続くんだけ？」

「さ、さあ・・・アリシアちゃんの手札次第やし（汗）」

「・・・引きつった笑みをしているぞ（汗）」

「魔法カード、セブンスストア！オーバーレイ・ユニットが2つある紫炎を墓地に送って3枚ドロー！さらにもう一枚のセブンスストアでオーバーレイ・ユニットが1つの紫炎を墓地に送って2枚ドロー！」

アリシア 手札 0枚↓2枚↓4枚↓5枚

「永続魔法、六武の門と六武衆の結束を発動！」

「・・・それ、3枚目(汗)」

「六武の門の効果！自身から4つ取り除いて墓地からキザン手札に！これを2回繰り返してキザン2体を特殊召喚！」

六武院 C 10↓11↓12

六武の門 C 8↓4↓0↓2↓4

六武の門 C 0↓2↓4

六武衆の結束 C 0↓1↓2

「六武衆の結束の効果！自身を墓地に送って2枚ドロ！」

アリシア 手札 3枚↓5枚

「そして魔法カード、二重召喚！もう一度通常召喚を行なう！私は真六武衆ーキザン2体と六武衆の師範をリリース！」

「・・・えっ!?3体リリース!?!」

「顕れよ！オシリスの天空竜！」

オシリスの天空竜 攻?

キザン2体と師範がリリースされて、上空に雷雲が集まり、雷鳴が轟く。アリシアの

上空の雲が渦巻いていき、オシリスの天空竜がフィールドに現れた。

「・・・は、ハアアア!? オシリス?!?!?」

「な、なんで神のカードを持つてるのですか!?」

「私たちには当たり前のカードだよ。六武の門の効果! 六武の門から4つ取り除いて墓地からキザンを加える!」

六武の門 C 4↓0

「そして魔法カード、融合!」

「ゆ、融合!」

「手札の大將軍 紫炎と真六武衆ーキザンで融合! 表の鬼武者よ! 戦場を駆け抜ける兵士よ! 今一つとなつて舞疾走れ! 融合召喚!」

大將軍 紫炎と手札に戻ったキザンが融合召喚の渦に巻き込まれていく。

「現れる私!! 六武衆の舞姫 アリシア!!」

六武衆の舞姫 アリシア 攻?

六武院 C 12↓13

六武の門 C 0↓2

六武の門 C 4↓6

融合召喚した渦の中から私がデュエルしている相手と同じ姿をしたモンスターが

フィールドに現れた。

「えっ!?まさかあなた!？」

「そうよ!このモンスターは私自身でもあるの!私の攻撃力はフィールドの武士道カウ  
ンターの数×1000ポイントアップする!」

六武衆の舞姫 アリシア 攻?↓2100

「さらに六武の門の効果!六武の門から4つ取り除いて、キザンを手札に!これをもう  
一回!」

六武の門 C 6↓0

六武の門 C 2↓0

「真六武衆ーキザン2体を特殊召喚!この2体でオーバーレイ!3体目の六武衆の影ー  
紫炎を特殊召喚!」

六武院 C 13↓14↓15↓16

六武の門 ×2 C 0↓2↓4↓6

「六武の門の効果発動!自身の武士道カウターを6つ取り除いて、墓地から六武衆の  
影ー紫炎を特殊召喚!」

六武院 C 16↓17

六武の門 C 6↓0↓2

六武の門 C 6↓8

「さらに六武の門の効果！4つ取り除いて墓地からキザンを回収！もう一回使ってデッキから六武衆の影武者を手札に！」

六武の門 C 8↓0

六武衆の舞姫 アリシア 攻 1900

「六武衆の影―紫炎の効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、攻撃力2000未満のアリシアを選択！アリシアの元々の攻撃力を2000にする！」

六武衆の影―紫炎 OVR 2↓1

六武衆の舞姫 アリシア 攻1900↓3900

・・・終わった？盤面どうなったの？

アリシア 手札 3枚 LP 3500

【モンスターゾーン】

真六武衆―シエン 攻2500

オシリスの天空竜 攻3000

六武衆の舞姫 アリシア 攻3900

六武衆の影―紫炎 攻2500

六武衆の影―紫炎 攻2500

【魔法・罨ゾーン】

六武衆 (フィールド・武士道C 17)

六武の門 (武士道C 2)

六武の門 (武士道C 0)

アリア 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻800

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻0

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

青：なし



「……なぐにこれ？」

「お〜いアリア、現実逃避するな〜」

「ゆ、遊輝……いくらなんでも……」

「ア、アリシアちゃん……やりすぎや……」

観戦組は全員、アリシアの盤面に顔を引きつっている。いや……私の心も諦めかけているんだけど……アリシアの効果強すぎ……(汗)

「バトル！」

「待った！メインフェイズ終了時、オッドアイズ・ペルソナの効果発動！相手のエクストラデツキから特殊召喚したモンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にする！私は六武衆の舞姫ーアリシアを選択！」

「そんな!？」

六武衆の舞姫ーアリシア 攻3900↓攻2000

オッドアイズ・ペルソナがアリシアに向かって咆哮を放ち、アリシアの効果が無効になった。

「でも攻撃は止められません！真六武衆ーシエンでオッドアイズ・ボルテックスに攻撃！」

「リバースカードオープン！カウンター罠、攻撃の無力化！」

「嘘っ!？」

「カウンタ―罫だからシエンの効果も通らないわよ！」

シエンがオッドアイズ・ボルテックスに攻撃を仕掛けたが、攻撃の無力化によつてその攻撃は無効になる。

「くう……仕方ありません。これでターンエンドです。エンドフェイズ時、六武衆の影―紫炎の効果を受けたアリシアの攻撃力は元に戻り、さらにアリシアは自身の維持のため、墓地から《六武衆》モンスターをゲームから除外します。六部衆のご隠居をゲームから除外します」

アリシア 手札 3枚 LP 3500

【モンスターゾーン】

真六武衆―シエン 攻2500

オシリスの天空竜 攻3000

六武衆の舞姫 アリシア 攻3900↓1900

六武衆の影―紫炎 攻2500

六武衆の影―紫炎 攻2500

【魔法・罫ゾーン】

六武衆 (フィールド・武士道C 17)

六武の門 (武士道C 2)

六武の門 (武士道C 0)

さて・・・これで防いだから私のこのターンで決めるわよ！

「私のターン！ドロー！」

アリア 手札 5枚

「フィールド魔法、天空の虹彩の効果！これはカードの発動じゃなくて効果の発動だからシエンの効果をすり抜けるわよ！ライト・Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムを破壊してデッキから超天新龍オッドアイズ・レボリユーション・ドラゴンを手札に加えて、このカードのモンスター効果を発動！手札のカードを捨てて、ライフを500払うことで、デッキからLv8以下のドラゴン族Pモンスターを手札に加える！」

アリア LP 4000↓3500

「この効果で私は2枚目の霸王眷竜ダーク・ヴルムを手札に！そしてフィールドのオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンと霸王眷竜ダーク・ヴルムで融合！」

「ゆ、融合カード無しで融合!？」

「2体の閻属性Pモンスターで融合召喚！霸王の名を持つ毒龍よ！フィールドに降臨して全てを犯せ！融合召喚！霸王眷竜 スターヴ・ヴェノム！」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓1100

『……グギャアアア!!』

私の場にいたダーク・ヴェノムとオッドアイズ・ペルソナが融合素材となつて渦に巻き込まれていき、霸王眷竜スターヴ・ヴェノムがフィールドに現れた。

「いくらモンスターを出しても攻撃表示なら意味がありません！オシリスの天空龍の効果！相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力を2000ポイント下げ、この効果で0になった時そのモンスターを破壊します！」

「でもそれは効果の発動でしょ!?オッドアイズ・ボルテックスの効果発動！」

「!?し、しまった!!オシリスの効果は強制効果だから止められない!!」

「エクストラデッキのオッドアイズ・アークペンデュラムをデッキに戻してオシリスの天空龍の効果を無効にして破壊する！」

オシリスの天空龍の第二の口が開いて召雷弾を放とうとしたが、オッドアイズ・ボルテックスがエクストラデッキのカード1枚をデッキに戻して、オシリスの天空龍の効果を無効にして破壊した。

「お、オシリスの天空龍が……」

「あ、あんな簡単に……」

「霸王眷竜スターヴ・ヴェノムの効果！1ターンに1度、自分または相手のフィールドか

墓地のモンスター1体を選択して、そのモンスターと同じカード名と効果を得る！私は墓地の超天新龍オッドアイズ・レボリユーション・ドラゴンを選択！」

『ギアアアア!!』

スターヴ・ヴェノムが咆哮を上げて、墓地に眠っていたオッドアイズ・レボリユーションの魂を吸収した。

「オッドアイズ・レボリユーションは相手のライフの半分の数値だけ、このモンスターの攻撃力をアップさせる」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻1100↓2850

「そ、それでも私のモンスターの攻撃力を上回っただけです！」

「それだけじゃないわ！オッドアイズ・レボリユーションのもう一つの効果！ライフを半分支払うことで、このカード以外のフィールドのカードと墓地のカードを全てデッキに戻す!!」

「なっ!？」

「す、全てをデッキに戻すだど!？」

「吹き荒れる嵐!!轟け雷鳴!!そして起こせ革命!!タイフーン・レボリユーション!!」

『ギアアアアアアア!!』

アリア LP 3500↓1750

オッドアイズ・レボリューションの効果を得たスターヴ・ヴェノムが翼を羽ばたかせ  
て飛び上がり、空に向かつて咆哮をあげる。フィールドに大きな雷鳴が何本も鳴り響  
き、そして嵐が吹き荒れる。私の場のカードと墓地のカード、そしてアリシアの場の  
カードと墓地のカードが全て吹き飛ばされていく。嵐が止むと、フィールドはスター  
ヴ・ヴェノム以外全てでなくなった。

「う、嘘やろ……」

「あ、あれだけ固めたアリシアの場が……」

「い、一瞬で無くなっただと……」

「六武院が無くなったことによりスターヴ・ヴェノムの攻撃力も元に戻る！」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2850↓4550

「バトル！スターヴ・ヴェノムでダイレクトアタック！猛撃のヴェノムショット！」

スターヴ・ヴェノムの翼が触手のようになって、そのままアリシアの身体に直撃した。

アリシア LP 3500↓0

WIN      アリア                      LOS      アリシア

「ふう……疲れた」

「お疲れ、やつぱりレボリューションが入っていたのか」

「当たり前じゃない、つと大丈夫？」

「ええ大丈夫よ。まさかあそこから返されるとは思ひもしなかったわ」

デュエルが終わって遊輝ちゃん近づいてレボリューション・ドラゴンのことを話してきたけど、今はアリスアの方を心配しないとね。本人は大丈夫そうみたい。

「完全に油断したわ・・・まさかオシリスもシエンも私自身も突破されるなんて」

「どんなカードだつて弱点はあつて突破方法はあるんだの、私も遊輝ちゃんから教えてもらったわ」

「そうね・・・私の慢心が今回の敗因だわ」

「さて！次は大トリよ！こっちは魔法少女遊輝ちゃん！」

「だからそれで呼ぶな!!」

「こっちははやてよ。はやても強いから」

「そりやそうでしょう、そちら側の大將なんだから、さあ私たちはベンチに戻りましょう」

「そうね」

次に対戦する遊輝とはやてがフィールドに対峙して私たちはみんながいるベンチの方に向かう。

# コラボく遊戯王ARC-V 夜天の来訪者く 後編

遊輝 side

「何だかんだ、1勝1敗で大将で決着つけるんやな」

「いつの間に団体戦になってるのですか？まあこちらも負けるつもりはありませんが」

今までのところ、龍可が負けてアリアが勝ったので五分五分、確かにこれに勝ったら勝ち越しなんだが、いつからそんな勝負していたんだ？そんなことを思いつつ、俺はデュエルディスクを起動させる。

「さて、私も本気で挑まないとな」

そう言うつてはやてさんが何かのスイッチを押して、服が変わる。今までの普通の女の子の服から白い長袖に黒いマントを羽織り、白と黒の羽をつけて、前に開いたロングスカート姿になる。

「……気になるんだけど、なんでその姿？」

「前にいた世界ではこれが戦闘服やったからや」

「遊輝ちゃんも龍可ちゃんも今度からデュエルするときはそんな風に魔法少女姿でやる



「？」

「絶対に嫌だ（です）!!!」

誰がこんな恥ずかしい格好の姿でデュエルしなくちやいけないんだよ!! 恥晒しにもほどがある!!

「あはは・・・じゃあいくで！」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

遊輝            LP    4000            はやて            LP    4000

「先行は私や！私のターン！まずは星因子デネブを召喚！」

星因子デネブ    攻1500

「テラナイト、か・・・」

「どうやらその様子だとよく知っているようやな」

「ナハトは知っていると思うけど、俺が鍛えたテラナイト使いがいるんだよ」

『ああ、あいつか。確かに強かったな』

「へえくじゃあどうやって私たちに勝てるのか見ものやね、星因子デネブの効果でデッキから《テラナイト》モンスター1体を手札に加える！私は星因子アルタイルを手札に加える！カードを2枚伏せてターンエンドや！」

はやて 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

星因子デネブ 攻1500

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

「俺のターン！ドロロー！」

遊輝 手札 6枚

「・・・遊輝ちゃんが「俺」っていうのは違和感ある」

「でしょ〜」

「外野!!聴こえているぞ!!レフト・Pゾーンにスケール5の慧眼の魔術師をセッティングして、魔法カード、デュエリスト・アドベント!互いのどちらかのPゾーンにPカードが存在する場合、デツキから《ペンデュラム》カードを手札に加える!俺は虹彩の魔術師を手札に!」

「えっ!?!そのカードのどこにペンデュラムって書いてあるんや!?!」

「このカードのカード名はルール上、ペンデュラム・ドラゴンとして扱うことができる!そしてライト・Pゾーンにスケール8の虹彩の魔術師をセッティング!慧眼の魔術師の

P効果！もう片方のPゾーンに《EM》または《魔術師》カードが存在する場合、このカードを破壊してデッキから《魔術師》PモンスターをPゾーンにセッティングする！俺はスケール2の賤竜の魔術師をセッティング！

Pゾーンにいた慧眼の魔術師が破壊され、賤竜の魔術師が代わりにPゾーンにセットされた。

「賤竜の魔術師のP効果！もう片方のPゾーンに《魔術師》カードが存在する場合、エクストラデッキの《魔術師》Pモンスターを手札に戻す！俺は慧眼の魔術師を手札に！そして俺はLv3から7までのモンスターを同時に召喚可能！」

「来るか、ペンデュラム召喚・・・」

「揺れる魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！現れろ！俺のモンスターたち!!」

虹彩の魔術師と賤竜の魔術師の間に大きな振り子が現れて、それが揺れ動き円を描く。その中から1つの光が飛び出してきた。

「EMペンデュラム・マジシャンを特殊召喚！」

EM ペンデュラム・マジシャン 攻1500

「ペンデュラム・マジシャン・・・ってことは・・・」

「ペンデュラム・マジシャンの効果！このカードが特殊召喚成功した場合、自分フィールド

ドのカード2枚までを破壊して、デッキからペンデュラム・マジシャン以外の名前の異なる《EM》モンスターを手札に加える！俺は虹彩の魔術師と賤竜の魔術師を破壊して、EM ドクロバット・ジョーカーとEM リザードローを手札に！」

ペンデュラム・マジシャンが振り子を振り回して、Pゾーンの2枚のカードを破壊、そして振り子には2枚のカードが存在してそれが俺の手札に来た。

「そして破壊された虹彩の魔術師の効果！デッキから《ペンデュラムグラフ》魔法か罫を手札に加える！俺は時空のペンデュラムグラフを手札に！そしてEM ドクロバット・ジョーカーを通常召喚！」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

「ドクロバット・ジョーカーの効果により俺はEM ギタートルを加える」

「EMに魔術師……ここまでは遊矢と一緒だけど、明らかに使い方もポテンシャルも段違いやね」

「俺だつてこのデッキを何十回と回しているんだ。バトル！ドクロバット・ジョーカーで星因子デネブに攻撃！」

「リバースカードオープン！速攻魔法、天架ける星因子！フィールドのデネブを対象にして、デッキから星因子ウヌクを特殊召喚！」

星因子ウヌク 攻1800

フィールドに天の川がかけられて、その川の流れに流れるようにウヌクが現れる。

「そしてデネブはデツキに戻る。ウヌクは特殊召喚成功時、デツキから《セラナイト》モンスターを墓地に送る！私はデネブを墓地に送る」

「バトルは終了する。メイン2に入ってペンデュラム・マジシャンとドクロバット・ジョーカーでオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！No, 41 泥眠魔獣バグースカ！」

No, 41

泥眠魔獣バグースカ

守2000

フィールドに現れたブラックホールにペンデュラム・マジシャンとドクロバット・ジョーカーが吸い込まれていき、爆発。その中からバグースカが現れて、居眠りの体制に入る。そのあくびで出たシャボン玉のような気泡はフィールドに蔓延してウヌクも居眠りを始めた。

星因子ウヌク

攻1800 ↓ 守1000

「うそっ!?!なんでや!?!」

「バグースカの効果！このカードが守備表示で存在する限り、表側のモンスターは全て守備表示になり、守備表示のモンスターは効果を発動できない！」

「な、なんやて!？」

「さらにレフト・Pゾーンにスケール6のEM ギタートル、ライト・Pゾーンにスケール6のEM リザードローをセッティング! ギタートルはもう片方のPゾーンに《EM》カードが発動した時、リザードローはもう片方のPゾーンに《EM》カードが存在する場合、自身を破壊してそれぞれ1枚ドロウする!」

遊輝

5枚↓6枚↓7枚

「ライト・Pゾーンにスケール1の紫毒の魔術師をセッティング! カードを1枚伏せてターンエンド!」

遊輝

手札

5枚

LP

4000

【モンスターゾーン】

No, 41

泥眠魔獣バグスカ

守2000

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード

1枚

【Pゾーン】

赤：紫毒の魔術師

(スケール1)

青：EM

ギタートル

(スケール6)

「ペンデュラムしたのに手札が全く減ってないってのは不気味だな．．．私のターン！ドロー！」

はやて 手札 4枚

「悪いけどバグースカの居眠りに付き合ってる暇はないんやで！リバースカードオープン！罫カード、強制脱出装置！バグースカはエクストラに戻ってもらうで！」

「まあそうだな．．．ここは通す」

「(通す？ってことはあの伏せは何かのカウンターか？) 星因子アルタイルを召喚！」

星因子アルタイル 攻1700

「アルタイルの効果発動！墓地から《テラナイト》モンスター1体を守備表示で特殊召喚する！墓地に落ちた星因子デネブを特殊召喚！」

星因子デネブ 守1000

「デネブの効果で今度は星因子アルゴラを手札に加えるで」

アルゴラ？聞いたことないテラナイトだな．．．この世界でのオリカか？つとその前に．．．

「いくで!!Lv4のウヌク、デネ」待った！永続罫、時空のペンデュラムグラフを発動！」

!?!このタイミングやと!?!」

「このカードは自分フィールドの《魔術師》Pカードとフィールドのカード1枚を対象にして破壊する！俺は紫毒の魔術師とアルタイルを選択！」

「ならチェーンや！手札から速攻魔法、天架ける星因子！」

「に、2枚目!？」

「この効果をアルタイルを対象にして発動！デッキから星因子シヤムを特殊召喚！」

星因子シヤム 攻1400

時空のペンデュラムグラフが紫毒の魔術師とアルタイルを破壊しようとしたが、アルタイルは天架ける星因子の効果で交わされてしまい、代わりにアルタイルがいたフィールドにはシヤムが現れる。

「そしてアルタイルはデッキに戻る！」

「チェーン解決で紫毒の魔術師とアルタイルは破壊されるが、アルタイルは不発と……」  
「モンスター除去を狙ったようだけど、無意味やで！」

「いいやまだだ！時空のペンデュラムグラフは自身の効果でカードを破壊できなかった場合、フィールドのカード1枚を対象にしてそのカードを墓地に送る！」

「な、なんやて!？」

「俺は星因子ウヌクを墓地に！」

アルタイルの破壊が不発に終わった時空のペンデュラムグラフ、今度はウヌクを対象



にして起動、ウヌクの足元に巨大な穴を開けてウヌクを奈落の底に沈み込んだ。

「ぐ……ならば特殊召喚されたシャムの効果！相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「チェーンで破壊された紫毒の魔術師の効果！相手の表側のカード1枚を対象にとって破壊する！俺はデネブを選択！」

破壊された紫毒の魔術師の霊がデネブの前に現れて、デネブを破壊する。一方、隣にいたシャムは俺に向かって攻撃をしてきた。

遊輝 LP 4000↓3000

「くう……（相手を妨害して展開するはずのテラナイトが逆に妨害されてしまっている。

これはまずいで……）バトル！星因子シャムでダイレクトアタック！」

遊輝 LP 3000↓1600

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

はやて 手札 1枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

星因子 シャム 攻1400

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

「ライト・Pゾーンにスケール2のEM ダグ・ダガーマンをセッティング！ギタートルのペンデュラム効果で1枚ドロー！」

「この瞬間、リバースカードオープン！罨カード、逆転の名札！相手がドローフェイズ以外でカードをドローした時、私は相手の手札と同じ枚数になるようにドローする！」

遊輝 手札 5枚↓6枚

はやて 手札 1枚↓6枚

「あっちゃ・・仕方ない、ダグ・ダガーマンのペンデュラム効果発動！このカードをPゾーンに置いたターンのメインフェイズ、墓地の《EM》モンスターを手札に戻す！俺はEM ドクロバット・ジョーカーを手札に！そして通常召喚！ドクロバット・ジョーカー！」

フィールドに現れたドクロバット・ジョーカー、自身のハットを手にしてその中から1枚のカードを取り出した。

「ドクロバット・ジョーカーの効果で俺は調弦の魔術師を手札に加える。いくぜ！ペン

デュラム召喚！エクストラデッキから虹彩の魔術師！手札から調弦の魔術師を特殊召喚！」

「それを待つてたんや！リバーズカードオープン！神の通告！」

「はあ!？」

「ライフを1500ポイント払って、そのペンデュラム召喚は無効にして破壊する！」

はやて LP 4000↓2500

はやてのライフが削られて、フィールドに白い羽衣を着たおっさんが表れて俺の場の調弦の魔術師と虹彩の魔術師を破壊した。

「ペンデュラムは散々見てきたから対処法も分かってるんやで」

「ぐうう・・・破壊された虹彩の魔術師の効果！今度はデッキから星霜のペンデュラムグライフを手札に加える！これでバトル！ドクロバット・ジョーカーでシヤムに攻撃！」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

星因子シヤム 攻1400

はやて LP 2500↓2100

「これくらいなら大丈夫や」

ペンデュラム止められるのは覚悟していたが神の通告で止められるとはな・・・流石に痛すぎる。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 5枚 LP 1600

【モンスターゾーン】

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

【魔法・罨ゾーン】

時空のペンデュラムグラフ

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：EM ダグ・ダガーマン (スケール2)

青：EM ギタートル (スケール6)

「私のターン！ドロー！」

はやて 手札 7枚

「さあいくで、手札から星因子ベガを召喚！」

星因子ベガ 攻1200

「星因子ベガの効果！手札から《テラナイト》モンスターを特殊召喚する！手札から星因

子アルゴラを特殊召喚！」

星因子アルゴラ 攻500

「出たな・・・俺の知らないテラナイト」

「知らない？じやあ聞いて驚いたらあかんで！アルゴラは特殊召喚成功時、デツキから《テラナイト》モンスター2体を特殊召喚する！」

「・・・はああ?!?!」

「ちよつ!?なにその爆アドの塊?!」

「私はデツキから星因子アルタイルと星因子デネブを特殊召喚！星因子デネブの効果をチェック！、星因子アルタイルの効果をチェック！、星因子デネブの効果で2枚目のアルゴラを手札に加えるで！」

「い、一気に盤面が5体のテラナイトに・・・」

「シヤムの効果で遊輝に1000ポイントのダメージや！」

「ぐううう!!!」

遊輝 LP 1600↓600

「Lv4のベガ、アルゴラ、アルタイル、デネブ、シヤムでオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 × ☆4 × ☆4 × ☆4

|| ★4

「5体のテラナイトモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！遠き夜を貫き、光の剣で我が道を記せ！エクシーズ召喚！現れや、我が新たな騎士！夜天<sup>テラナイト</sup>の聖輝士アルカディアス!!」

夜天の聖輝士 アルカディアス 攻2700

5体のテラナイトモンスターがブラックホールに吸い込まれて爆発、その中から現れたのは両手に剣を持ち、背中に翼が生えた黄金の鎧を身につけた騎士のモンスターだった。

「夜天の聖輝士 アルカディアスはエクシーズ召喚成功時、『夜天』または『テラナイト』以外の全てのモンスターを墓地に送る！」

「なっ!?!」

「そのかわり、特殊召喚したこのカードはこのターン、攻撃出来ないけど、な」

アルカディアスが両手に持っている2本の剣を振りぬく。それはレーザー光線のようになり、俺のフィールドのモンスターを殲滅した。

「そしてアルカディアスの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、デッキまたは墓地から『テラナイト』モンスターを手札に加える！」

夜天の聖輝士 アルカディアス OVR 5↓4

「私はオーバーレイ・ユニットで取り除いたベガを墓地から手札に加える。カードを

4枚伏せてターンエンド！」

「ぐうう・・・エンドフェイズ時、リバースカードオープン！罠カード、砂塵の大嵐！  
 フィールドの魔法・罠カードを2枚まで破壊する！俺は真ん中のカードと一番左側の  
 カードを破壊！」

フィールドに砂塵の大嵐が吹き溢れ、はやての2枚の伏せカードを破壊した。

はやて 手札 3枚 LP 2100

【モンスターゾーン】

夜天の聖輝士 アルカディアス 攻2700

【魔法・罠ゾーン】

伏せカード 2枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

「速攻魔法、揺れる眼差し！お互いのPゾーンのカードを全て破壊する！」

「自分からPゾーンのカードを破壊やって!？」

フィールドに大きな振り子が現れて、それが突然不規則に揺れ始め俺のPゾーンの

カードを破壊していった。

「この時、破壊した枚数によって効果を得る！1枚破壊した時は相手に500ポイントのダメージ！」

「うぐっ！」

はやて LP 2100↓1600

「2枚破壊した時はデツキからペンデュラムモンスター1枚を手札に加える！俺はアストログラフ・マジシャンを加えて、アストログラフ・マジシャンの効果！自分フィールドのカードが破壊された場合、手札から特殊召喚できる！」

アストログラフ・マジシャン 攻2500

俺のフィールドに全身が青く光った魔法使いがフィールドに現れる。

「その後、このターンに破壊されたカード1枚を選択してそのカードをデツキから手札に加える！俺はダグ・ダガーマンを選択して2枚目を手札に加える！そしてライト・Pゾーンにスケール2のEM ダグ・ダガーマンをレフト・Pゾーンにスケール5の慧眼の魔術師をセッティング！」

破壊されて何もなくなったPゾーンに新たなPスケールが貼られる。

「ダグ・ダガーマンのP効果！墓地のEM ペンデュラム・マジシャンを手札に加える！そして永続魔法、星霜のペンデュラムグラフを発動して慧眼の魔術師の効果発動！」



「リバースカードオープン！速攻魔法、サイクロン！慧眼の魔術師は破壊してもらおうで！」

フィールドに吹き荒れたサイクロンによって慧眼の魔術師は破壊されてしまった。

「これでペンデュラム召喚も出来へんやろ」

「ところがギッチョン、ちよつと計算は狂ったが大して問題ないぜ！星霜のペンデュラムグラフの効果！自分フィールドの《魔術師》Pカードがフィールドから離れた場合、デッキから《魔術師》Pモンスターを手札に加える！」

「なんやて!？」

「俺はこれで調弦の魔術師を手札に加えて、空いたPゾーンに黒牙の魔術師をセツティング！これでLv3から7までのモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！エクストラデッキから賤竜の魔術師と慧眼の魔術師！手札からペンデュラム・マジシャンとガガマジシャン！」

賤竜の魔術師 攻2100

慧眼の魔術師 攻1500

ガガマジシャン 攻1500

再び現れた大きな振り子、その中から 4つの光が飛び出して、4体のモンスターが現れる。

「ガ、ガガガマジシャン?!」

『あつ、あいつ遊輝の精霊だ』

『お久しぶりです、ナハトさん』

『おう、お前も元気にしてたんだな』

フィールドにガガガマジシャン、ダイヤが現れたことではやてさんの後ろからナハトさんが出てきて挨拶をする。

「悪いがダイヤ、後回しだ。ペンデュラム・マジシャンの効果! 黒牙の魔術師とダグ・ダグ・ダグを破壊して、リザードローとダグ・ダグ・ダグを手札に加える! Lv4のペンデュラム・マジシャンと慧眼の魔術師でオーバーレイ!」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築! 深海の奥深くに沈む箱舟よ! 魔の海域から浮上し、深淵の闇から目覚めよ!! エクシーズ召喚!! オーバーハンドレッツ・ナンバーズ!! No, 101!! S・H・Ark knight!!」

No, 101 S・H・Ark knight 攻2100

「ひゃ、101!?! 101はまずい!!」

「Ark knightの効果発動! オーバーレイ・ユニットを全て取り除いて、夜天の聖輝士 アルカディアスをこのカードに吸収する!」

No, 101 S・H・Ark knight OVR 2↓0↓1

Ark Knightがオーバーレイ・ユニットを全て使い、アルカディアスに向かって自身の身体の一部を変形させて吸収を始める。アルカディアスは抵抗しようとしたが、Ark Knightに吸収されてしまった。

「さらにガガガマジシャンの効果発動！このカードのLvを6にする！」

ガガガマジシャン ☆4↓☆6

「Lv6のガガガマジシャンと賤竜の魔術師でオーバーレイ！」

☆6 × ☆6 || ★6

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！白夜の地に輝く純白の太陽よ！天空の世界から降臨して、この世界の光の神となれ！エクシーズ召喚！輝け！ホワイト・サン・ドラゴン！」

ホワイト・サン・ドラゴン 攻2400

ブラックホールにダイヤと賤竜の魔術師が吸い込まれていき、爆発が起きる。その中から白い光を照らす太陽が現れて変形をしていき、ホワイト・サンが姿を表す。

「ホワイト・サン？」

『気をつける主、あれが遊輝のエースモンスターだ』

「バトル！ホワイト・サンでダイレクトアタック！サンシャイン・パティズム！」

「リバースカードオープン！罨カード、和睦の使者！」

ホワイト・サンがはやてさんにダイレクトアタックを仕掛けたが和睦の使者によつてはやてさんの前にバリアが貼られてダメージは無効になる。

「まだまだ勝負はこれからやで」

「そうですよね、魔法カード、ペンデュラム・ホルト！エクストラデッキに表側でペンデュラムモンスターが3種類以上存在する場合、2枚ドロウする！」

遊輝 手札 3枚↓5枚

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 4枚 LP 600

【モンスターゾーン】

アストログラフ・マジシャン 攻2500

No.101 S・H・Ark knight 攻2100

ホワイト・サン・ドラゴン 攻2400

【魔法・罨ゾーン】

時空のペンデュラムグラフ

星霜のペンデュラムグラフ

## 伏せカード 1枚

「私のターン！ドロー！」

はやて 手札 4枚

「そつちがエースモンスターを出すんならこつちもエースモンスターやで……星因子ベガを召喚！効果で手札から星因子アルゴラを特殊召喚！」

「また!? つてことは5体並べるのか!?!」

「アルゴラの効果発動！デツキから星因子アルタイルをと星因子ウヌクを特殊召喚！チェーン1、アルタイル、チェーン2、ウヌクで発動！ウヌクの効果でデツキから星因子シリウスを墓地に送り、アルタイルの効果で墓地からシヤムを特殊召喚！シヤムの効果発動！」

「手札からハネワタの効果発動！このカードを捨てて、このターンに受ける効果ダメージは0になる！」

シヤムが効果により俺にダメージを与えようとしたが手札から飛び出したハネワタがそのダメージを無効にした。

「へえ……ハネワタなんて入れてるんやな」

「仲間とやる時のメタカードとして入れてるんでね。このカードは必要なんだよ」

「けど関係あらへん！本命はこっちゃや！Lv4のベガ、アルゴラ、アルマイル、ウヌク、シヤムでオーバーレイ！」

「また5体素材!？」

☆4 × ☆4 × ☆4 × ☆4 × ☆4 || ★

4

「5体のテラナイトモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！悲しみという星の夜を越えて、今こそ夜天の主に祝福を！エクシーズ召喚！夜天<sup>メテラナイト</sup>の滅騎士 ナハト ヴァール!!」

夜天の滅騎士 ナハトヴァール 攻2500

ブラックホールに吸い込まれた5体のモンスターが一つになって爆発が起き、その中から白銀の髪をして、漆黒の翼と鎧を纏った騎士が現れた。

『いよいよ出陣だな』

「・・・ナハトさんか」

『そうだ、俺が出たということとは決めに行くってことだ』

「ナハトヴァールはオーバーレイ・ユニットの素材の数だけ効果を得る！1つの時はオーバーレイ・ユニットを取り除くことでこのカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分、ダメージステップ終了時までアップする！」

「なっ!?!」

「さらに4つある時、オーバーレイ・ユニットを一つ取り除くことで相手の全てのモンスターと戦闘を行います、5つある時、オーバーレイ・ユニットを取り除くことでこのターン、相手のモンスターの効果を全て無効にする!」

「なっ!?!全員に攻撃して無効だど!?!」

「ナハトヴァールの効果発動!オーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて、モンスター効果を無効にする!石化の槍 ミストラルティン!」

夜天の滅騎士 ナハトヴァール OVR 5↓4

ナハトヴァールがオーバーレイ・ユニットを一つ取り込んで、左手に大きな矢を持つ。その矢が放たれて、分散されて俺のフィールドのモンスターに突き刺さり、全員が石化してしまった。

「さらにもう一つ取り除いて、相手モンスター全てに攻撃する権利を得る!」

夜天の滅騎士 ナハトヴァール OVR 4↓3

「行くで遊輝!バトル!ナハトヴァールでホワイト・サン・ドラゴンに攻撃!この瞬間、ナハトヴァールの効果発動!」

夜天の滅騎士 ナハトヴァール OVR 3↓2 攻2500↓4900

「いっけえええ!!」

ナハトヴァールが石化したホワイト・サンに突っ込んで右手に作った闇の塊をホワイト・サンにぶつける。その塊は爆発してホワイト・サンを粉々にした。

「これで私の勝ちや!!」

「………そいつはどうかな?」

遊輝 LP 600

「!?な、なんでや!?なんでライフ減ってないんや!?」

「………速攻魔法、残留思念」

驚くはやてに俺は伏せていた1枚のカードをはやてに見せつけた。

「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のモンスター2枚をゲームから除外することでこのターンに受ける戦闘ダメージは全て0にする」

「!?そ、そんな!?」

「この効果で墓地の調弦の魔術師と慧眼の魔術師を除外して戦闘ダメージは0になったが、バトル自体は成立したからホワイト・サンは破壊された、つというわけだ。つまりこのターン、俺のモンスターは戦闘で破壊はされる。どうする?」

「(モンスターを残していたら間違はなく次のターンにやられる!)」ナハトヴァールでArk Knightとアストログラフ・マジシャンに攻撃!アストログラフ・マジシャンに攻撃した時、オーバーレイ・ユニットを一つ使う!」



夜天の滅騎士 ナハトヴァール OVR 2↓1

ホワイト・サンを攻撃したナハトヴァールは続けて石化したArk Knightとアストログラフ・マジシャンに攻撃。この2体のモンスターも何もできずに破壊されてしまった。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

はやて 手札 1枚 LP 1600

【モンスターゾーン】

夜天の滅騎士 ナハトヴァール 攻2500

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「んじやラストといくか・・・俺のターン！」

遊輝 手札 4枚

「まずは魔法カード、埋葬呪文の宝札！墓地から魔法カードを3枚除外して2枚ドロ―する！デュエリスト・アドベント、揺れる眼差し、残留思念の3枚を除外して2枚ドロ―！」

遊輝 手札 3枚↓5枚

「レフト・Pゾーンにスケール8の黒牙の魔術師をセッティング！永続罫、時空のペンデュラムグラフの効果発動！黒牙の魔術師とその伏せカードを破壊する！」

再び時空のペンデュラムグラフが起動して、俺のPゾーンの黒牙の魔術師とはやてさんの伏せカード1枚を破壊した。

「チェーン1、星霜のペンデュラムグラフ、チェーン2で黒牙の魔術師の効果発動！黒牙の魔術師はこのカードが破壊された場合、墓地の闇属性・魔法使い族モンスターを特殊召喚させる！ガガガマジシャンを特殊召喚！」

『ハアアア!!』

「そして星霜のペンデュラムグラフの効果でデッキから調弦の魔術師を手札に加える！ライト・Pゾーンにスケール6のEM リザードロー、レフト・Pゾーンにスケール2のEM ダグ・ダガーマンをセッティング！これでペンデュラム召喚！手札から調弦の魔術師をペンデュラム召喚！」

調弦の魔術師 攻0

「攻撃力……0？」

「調弦の魔術師は手札からペンデュラム召喚に成功した場合、デッキから《魔術師》Pモンスターを守備表示で特殊召喚する！慧眼の魔術師を特殊召喚！」

慧眼の魔術師 守1500

ペンデュラム召喚で現れた調弦の魔術師が手にしている大きな杖を振り回して輪を作る。その輪の中から慧眼の魔術師がフィールドに飛び出した。

「Lv4の慧眼の魔術師にLv4の調弦の魔術師をチューニング！」

☆4 + ☆4 || ☆8

「極夜の地に潜む漆黒の太陽よ！暗黒の世界から舞い降りて、この世界の闇の神となれ！シンクロ召喚！染まれ！ブラック・サン・ドラゴン！」

ブラック・サン・ドラゴン 攻1000

『・・・グオオオオ!!!』

調弦の魔術師が作った4つの輪の中に慧眼の魔術師が入ってひとつの光となる。その光はやがて黒く染まりながら大きくなっていき、黒い太陽へと変わる。その黒い太陽が変形をしてブラック・サンがフィールドに現れた。

「ブラック・サン!?まさかホワイトと対になるモンスターか?」

「その通り！ブラック・サンの効果！このカードの特殊召喚成功時、墓地のエクシーズモンスター1体をこのカードの装備カードとして装備する！俺は墓地のホワイト・サン・ドラゴンを選択！」

『ギャアアアアア!!!』

ブラック・サンがフィールドに轟く咆哮を上げて墓地にいたホワイト・サンが地面から現れて、ブラック・サンに吸収した。

「そしてブラック・サンはこの効果で装備したモンスターの攻撃力分、攻撃力がアップする！」

ブラック・サン・ドラゴン 攻1000↓3400

「・・・あくあ、私の負けや・・・遊輝！最後の攻撃を受け止めてみせるで！全力でかかって来てや！」

「バトル！ブラック・サンでナハトヴァールに攻撃！ダークネス・プラスト！」

ブラック・サンがエネルギーを貯めて、ナハトヴァールに向かって攻撃、ナハトヴァールも右手に闇の塊を作って、ブラック・サンの砲撃に立ち向かうが、徐々に押されていき、ブラック・サンの攻撃を受けてしまった。

ブラック・サン・ドラゴン 攻3400

夜天の滅騎士 ナハトヴァール 攻2500

はやて LP 1600↓700

「ラスト！ガガマジシャンでダイレクトアタック！ガガマジック！」

ダイヤが自前の鎖を振り回してはやてさんに攻撃をする。その攻撃をはやてさんは全身で受け止めた。

はやて LP 700↓0

WIN 遊輝 LOS はやて

「いや、遊輝君強かったわ。魔術師とEMのポテンシャルってまだまだ高いんやなく」  
「こつちだつてテラナイトの展開力にビックリしましたよ。あんな簡単に5体素材を揃うとは思いませんでした」

デュエルが終わった後、デュエルディスクを片付けて、はやてさんの方に行く。はやてさんもデュエルディスクを片付けてお互いに感想を言い始める。

「私もまだまだだな・・・もつともつと鍛えないと」

「それはお互い様ですよ。だからこそデュエルは楽しいんですよ」

「そうやね」

「ねえ、あの黒い物体のエネルギー溜まったわよ」

お互いに感想を述べていたところにアリアが例の黒い物体のエネルギーが溜まったことを教えてくれる。

「・・・お別れですね」

「そうやね。今度はもつとゆっくり話そうな」

『次来るときはあの腕輪をつけて来いよ。じゃないと異世界の迷子のままだからな』

「その前に自分たちの帰れるかどうか心配ですよ・・・」

「遊輝!!行くわよ!」

「わかった!!」

龍可に急かされて、俺は黒い物体の前にいるアリアと龍可のところまで走る。

「それじゃ皆さん、また機会があれば是非」

「ああ、今度は俺たちも相手にもしてもらいたい」

「アリア!衣装作りのお話また聴きたいわ」

「じゃあ次はサンプル持って来るね!」

『龍可さん、楽しいデュエルでした。またやりましょう』

「ええ、今度は負けないわよ」

「じゃあね遊輝!!また今度!!」

「ああ!!」

「行くわよ!」

そういつて、アリアが黒い物体に魔力を流す。俺たちはそのまま黒い物体と一緒にこの世界から姿を消した。

## コラボく遊戯王く伝説を受け継いだ兄妹く

## 前編

遊輝 side

「……ギユイン!!」

「着いた……のか?」

「ここは……ネオドミノシティ?」

「……確かにネオドミノシティね、私たちの世界かどうかは分からないけど」

謎の異世界転生装置によるランダムワープ2回目、今度は見慣れた街並みを見てネオドミノシティと判断した。着いた場所はビルとビルの間にある小さな空き地。日の当たる場所でもなく、人の通りは全くない。

「つてか本当に俺たちの世界か?元に戻るんだったら普通精霊世界だろ?」

「確かに……それになんか違和感が……」

「多分龍可ちゃんの違和感はあれね」

「アリアがビルの上にある広告に指を指す。そこには『WRGP開催決定』の看板が。

「私たちの世界はもうWRGP終わってるのよ。わざわざその看板を残したままにする

?」

「ああ確かに、つてことはここも違う世界か・・・」

「そうと分かれば泊まる場所を考えましょう。少なくともこの機械は何処かに隠さないと」

「壊されちゃ私たち、一生迷子のままだからね。アリアさんのこの空間に入れておくわよ」

そう言つてアリアは自身の横に謎の空間を作り、その中に転送装置を放り込んだ。

「よし！じゃあまずは街に出ようか！」

「・・・街に出る!?この格好で!」

「当たり前じゃない！街に出ないと情報を得られないよ！」

「ま、待つてアリアお姉さん！さ、流石にこの格好は」

「そんな恥じらいをしなくても堂々と歩けば良いのよ！じゃあ行くわよ！」

「こ、心の準 『魔法少女遊輝ちゃんと魔法少女龍可ちゃんは街を歩く』 ちよ!!」

「か、身体が勝手に!」

「じゃあ魔法少女3人組！街の探索をするわよ！」

「／／／／／お願いだから着替えさせて（ください）!!!」

遊輝

side out



駆  
side

「お兄ちゃん、本当に怪しい物があるの？とてもそんな風には見えないけど」

「ムーン・ライトとマハードが言うから間違いないと思うんだけど」

『間違いないです。この世界にはない明らかに異質の何かがこの街のどこかに現れました。ただ、突然それが消えてしまつて・・・』

『申し訳ありません、ただ、この辺りで消えたのは間違いないです』

部屋でゆっくり過ごしていた時に突如俺の精霊のムーン・ライト・ドラゴンと遙ちゃん  
の精霊のブラック・マジシャンが現れて、この世界にはない特異な物体を感じたと話  
し始めたので、遙ちゃんを連れて街の調査を始めた。

俺は山岸駆、妹の川上遙ちゃんとともにこの5D'sの世界に転生をした。この世界  
に転生した時に俺たちは伝説のデュエリスト、武藤遊戯さんと遊城十代さんに色々な事  
を教わり、頼もしい精霊も味方にしてこの世界を楽しく過ごしている。

「お兄ちゃん、どこかで休憩しよう。私喉乾いちゃった」

「ふう・・・確かに、今日は暑いし。どこかでお茶しよう」

「そうだ・・・？あれ何かな？」

「あれ？」

「ほら、あれ。なんかすごい男の人だから」

「……本当だ」

『すごい活気付いていますけど……この辺りってどちらかと言うと女性の人が多い通りでは？』

ムーン・ライトの言う通り、この通りは女性向けのアパレルメーカーやファッションアイテムを取り扱うお店が多いので、必然と女性の人が多い。男性もいることにはいるけど、あんな大勢が固まっているなんて滅多にない。

「何かイベントでもやってるのかな？」

「とりあえず行ってみよう！私気になる！」

「ちよつ!?! 遙ちゃん!?! 危ないよ!?!」

遙ちゃんが一人、飛び出して男の人の集団に飛び込んでしまう。俺も慌てて追いかけて、人だかりをかき分けて前が出る。

「えつと……いた！遙ちゃん！」

「……ねえ、お兄ちゃん、あれって龍可だよね？」

「えっ？龍可？でも龍可は今日、龍亞と天兵たちと一緒に遊びに行ってるよ」

「でもあのピンクの衣装を着ている人、龍可だよね？」

「ピンクの衣装?」

遙ちゃんが指を指すピンク色の特徴的な魔法少女っぽい衣装を着ている女の子、さらにその子と一緒にいる赤い同じような魔法少女の服を着た女の子、そしてその2人よりも積極的に色々と話している同じ衣装の水色の服を着た女性、ピンクの服を着ている女の子は確かに龍可そっくりの見た目をしている。

「……………まさか、違う人じゃないの?」

『……………ムーン・ライト殿』

『ええ……………駆、あの3人、うっすらとですが私が感じた違和感に似ています』

「えっ?」

「可愛い……………」

「手作りで作った割には完成度高い」

「決め台詞言ってくれ!!」

「決め台詞?決め台詞決め台詞……………ああ、あれね。コホン……………カフエラテ、カフエ

モカ、カプチーノ」

「……………「おおお!!」」

「可愛い!!!」

「声真似も良かったぞ!!」

「どうもありがとう！」

「後ろの子たちも言ってる!!」

「ほらほら二人とも!! 指名されたよ!!」

「／／／／う、うう・・・」

「／／／／は、恥ずかしい・・・」

「ほらほら・・・じゃないともっと恥ずかしいセリフ言ってもらおうよ? (ボソツ)」

「／／／／う、うう・・・カフェラテ、カフェモカ、カプチーノ・・・」

「二三「ワアアアアア!!!」

「／／／／か、カフェラテ、カフェモカ、カプチーノ・・・」

「二三「ワアアアアア!!!」

「／／／／ア、アリア・・・そ、そろそろ終わりたい・・・」

「んん・・・確かにそろそろ調査しないと。じゃあみんな、またね」

「二三「ええええ!!!」

「それじゃみんな! 行くわよ!」

「お、お兄ちゃん、このままじゃどこかに行ってしまうよ」

「そ、そうだ。追いかけないと」

ムーン・ライトが感じ取った違和感を信じ、俺たちは人混みをかき分けてこの集団の

通りから消えようとする3人組を追いかける。

「よかったね！少しばかりだけどチップ貰えたよ！」

「／／／／／う、ううう．．．」

「／／／／／は、恥ずかしかった．．．」

「あ、あの．．．そちらの3人組の方々？」

路地裏の方で話している3人組に俺は遙ちゃんを後ろにして声をかける。3人組のうちの水色の服を着た女性がこつちを振り向いた。

「ん？どうしたの？今日のパフォーマンスは終わりだよ」

「い、いえ、そうじゃなくて．．．」

「龍可！何してるの！？知らない人について行ったらダメって教わったでしょ！？」

「ちよ！？遙ちゃん！？」

後ろから飛び出した遙ちゃんがピンク色の服を着た女の子に声を掛ける。その子は少し顔が驚いた表情をしてこつちに振り向いた。

「え、えつと．．．ど、どちら様ですか？」

「忘れたの！？私だよ！遙！！」

「ひ、人違いでは？そ、それに私、本当に知らない「本当に知らないの？」えつ？」

「龍可、さつき一瞬ドキツとしたよね？自分の名前を呼ばれて、ドキツとして他人のフリ

なんて普通しないよ」

「あつ、えつと……」

「それとき、お姉さんたち、何者？そんな奇抜な衣装を着てさ」

「(ピクツ)」

「あんた達、もしかして「俺は……!!!!」はいい？」

「俺は……男だああああ!!!!」

「……えつ？」

!!!!!!

龍可の一瞬だけ驚いた表情、それを俺はピンクの服を着た女の子に着いて隙を作り、さらに遙ちゃんやんが畳み掛けるように正体について尋ねたら、突然赤い服をきた女の子が大声を出して男だと言ってきた。その言葉を聞いて俺と遙ちゃんは一度目を合わせてもう一度赤い服の女の子を見る。

「……え、えつと、男、ですか？」

「どう見ても……女の子、だよね？」

「だから「はいストップ遊輝ちゃん!!これ以上大声張り上げたら他の人来ちゃう!!」むぐぐぐつ!!!」

赤い服を着た女の子がこつちに向かって色々と言いたそうな表情をしているが、水色の服を着た女性が口を押さえて大人しくさせて、こつちに振り向いた。

「あの、ね、まあそんなに勘付かれたらこつちも不味いし、話をするから、さ」

そう言つて水色の服を着た女性は両手を挙げた。それを見て赤い服の上女の子と龍可に似たピンクの服を着た女の子も手を挙げる。

「とりあえずこつちの要望として、絶対に人が誰も来ない且つ広い場所でお話したいな。それこそ龍可ちゃん家みたいな」

「……怪しい人達を家にあげるようなことなどしませんよ。第一、なぜ龍可の家のことを知っているのですか？」

「そのことも含めて話すよ。じゃないと私たちの事情を詳しく話すことが出来ないからさ。縛るなり何なりしてくれて構わないから」

「……どうする？お兄ちゃん」

「(……ムーン・ライト。間違いないんだな?)」

『間違いありません。そちらの3人組から微々たる反応ですが明らかにこの世界にはない特異的な何かを持っています』

「そんな物騒な物じゃないよ、そこの名前の知らないドラゴンさん」

『!?わ、私が見えるのですか!?!』

「精霊なら私以外にもこの二人も見えているよ。それでしょ?」

「ま、まあそりやそうだが……」

「う、うん……」

『……駆、これはほぼ核心ですね。私の話を聞いて物と言いました。問いただす必要があります』

「そうだねムーン・ライト。悪いけど付いてきてもらおうよ」

「いいの？お兄ちゃん」

「下手に街で暴れられちゃ困るから、俺たちの見えるところで監視しておいた方が絶対がいい。あと、悪いけど両手だけは拘束させてもらおう。完全に信用したわけじゃないから」

「いいよ。こっちの条件を飲んでくれたんだし、それくらいだったら」

「マハード、少し手伝って」

『分かりました駆殿』

マハードを実体化させて、マハードがロープを作り出す。それを俺とマハード二人で3人組の両腕を後ろに回して両手を拘束した。

「じゃあ付いてきてもらいますよ」

「マハード、少しでも怪しい動きをしたら教えてね」

『分かりました』



~~~~~

「……つまりあなたはその奇妙な物体のせい、あなた達の世界から俺たちの世界にワープしてきた、と」

「その通りです……」

『間違い無いです。これがこの世界にはない奇妙な物体です』

龍亞と龍可の家に3人を連れ込んで、水色の服を着た女性が何処からか奇妙な黒い物体をベランダに出した。それを見て俺と遙ちゃんは驚いたが、3人は自分たちの自己紹介をして懇切丁寧に説明してくれた。

ムーン・ライトとマハードが感じ取った奇妙な物体とはこのことだったらしい。確かにこんなもの、この街に突然現れたらビックリするよ。

「これで身の潔白を証明したから解いてください。さすがにもう、こんな恥ずかしい格好で外にも出ませんから」

「……まあ、いいですよ。ただし変なことをしたらまた縛りますからね」

そう言つて3人の拘束を解く。水色の服を着た女性は腕を回して肩をほぐしている。

「とりあえず今日一晩だけ泊めてくれないかしら？これ壊されたら私たち帰れないと思うと、野宿も出来なくて出来なくて」

「俺たちじゃ返答に困りますので、龍亞と龍可に聞かなきゃいけないですけど、多分行けますよ」

「助かるわく、シャワー浴びないと臭くなるからね遊輝ちゃん」

「うるせえ……1日くらいなくても大丈夫だろ」

水色の服の女性、アリアさんは赤い服を着た女の子、遊輝さんに抱きつくように話しかける。遊輝さん、自己紹介の時に散々男だつて言っていたけど、そっちの方は全然信用していない。だつてどこからどう見ても女の子にしか見えない。

「この子は異世界の龍可か……それじゃ私がどれだけ呼びかけても知らないわけだよ」「ごめんなさい。本当に分からなくて……」

「いいよ。私が無理矢理問いただしたんだから」

遙ちゃんはピンクの服を着た女の子、異世界から来た龍可に話をかける。確かに異世界で全く見ず知らずの人から自分の名前を呼ばれたらビックリするよ。

「それよりも……あのお姉さん、本当に男の人？」

「え、ええ……私の彼氏」

「彼氏!?あの人が!?!」

「遙ちゃん。さすがに失礼だよ」

「だ、だつてお兄ちゃん!どこからどう見ても遊輝お姉さん女の子にしか見えないんだ

よ！身長も私とあんまり変わらないし！」

「たっただいま〜！」

「駆、帰ってきたわよ」

「見て見て!!今日買っ……る、龍可が二人いる!!」

「あっ………」

「?ちよつと龍亞、何言つて……えっ!?私!?」

遙ちゃんが遊輝さんに対して色々と言ってきた時に、家に帰ってきたこの家の住人である龍亞と龍可、その二人が魔法少女の服を着たもう一人の龍可を見て混乱し始めた。そうだった……3人のことで忘れていたけど、ここ龍可の家だった……

とりあえず俺と遙ちゃんで2人を落ち着かせて3人の自己紹介とベランダにある物を含めて事情を説明する。

「へえ……異世界の龍可か。それにしても身長がこっちの龍可より大きいような……」

「私、今中等部の1年だから」

「ちゆ、中等部1年!?駆と一緒!」

「つてか兄の俺より年上!?!い、違和感が」

「あれ?じゃあ遊輝さんつて今は?」

「中等部の3年だけど」

「ゆ、遊輝お姉さんの方がお兄ちゃんより年上……」

「何で驚くんだよ!？」

「だってどう見ても身長低すぎる」

グサツ!!!

「……………」

「あくあ、ダメだよ遙ちゃん。私の遊輝ちゃんは身長に物凄いコンプレックスを持って
るんだから」

「いくら何でもメンタル弱すぎるでしょ、遊輝さん」

遙ちゃんの言葉で不貞腐れた遊輝さん、アリアさんが弁明をしたが、流星に落ち込み
すぎる。そこまで身長のことを意識しなくていいのに。

「結構気にしているみたいですよ。劇の時も身体が一番低いという理由でこのコスプレ
しているキャラと同じキャラをやってみましたし」

「コスプレ!? それコスプレ衣装なの!？」

「えっ、あつ、うん……えっと、ごちうさのチノちゃんっていうキャラ」

「ごちうさ? ……ご注文はうさぎですか?」

「俺知らないなあ」

「私も……………」

「ええごちうさ知らない!?じゃあSAOとかこのすばとかプリキュアとかリゼロとか艦これとか「ストップストップストップ!!」お前その話したら止まらなくなる!!」ええ……」
急にアリアさんが前のめりに色々と言ってきて、それを遊輝さんが慌てて止めに入る。いや、正直どんなアニメなのか全く分からない(汗)

「ま、まあともかく……この衣装も含めて全部アリアの手作り」

「手作り!?じゃあ私が作って言ったら作ってくれる!?」

「もちろん!アリアさんに作れない物など無いんだから!」

「やった!じゃあまずは……これ!これ作れる!」

そう言つて遙ちゃんは自分のデツキからBMGのカードを取り出してアリアさんに見せる。

「そんなのお茶の子さいさいよ!ちよつと体の寸法測らせてもらうからね!」

そう言つてアリアさんは何処からか裁縫道具を取りだして遙ちゃんの身体の寸法を測り始めた。

2時間後、様子を見に行くと完璧にBMGに成りきつた遙ちゃんがいて、物凄く喜んでいた。

遙 side (翌日)

「多数決取ります！こちらの遊輝お姉さん、性別が男性だと思う人！」

「……」

「では、女性だと思う人！」

「は～い」

「僕も」

「どう考えても女の子だな」

「は～い!!」

「／／／／アリア!! テメエは知っている「遊輝ちゃん遊輝ちゃん、女の子がテメエとか汚い言葉を言っちゃダメだよ」ぐううう……」

昨日はアリアお姉さんに作ってもらったブラック・マジシャン・ガールの衣装がすごく気に入って、一日中それを着ていた。次の日、未だに遊輝お姉さんが男だと言っている。私はお兄ちゃんに頼んで留姫お姉さん達やマーク君にトビー君を呼んだ。みんなに3人の事情を説明した後、遊輝お姉さんの性別について尋ねたら全員、女の子だと手を挙げた。

「は、遙ちゃん。流石にかわいそうだからやめてあげなよ・・・」

「駆、この子本当に男？どう見ても女の子にしか見えないよ、ね、美菜、香澄」

「私は信じられないなく。この子、クラスに絶対にいる可愛い女の子だよ」

「この外見だけでは男の人だとは思えませんね」

「そうですね。僕もこれだけじゃ女の子にしか見えません」

「涼太に同感だな」

「トビーやマークもどう思う？」

「お、女の子にしか見えませんね・・・正直、僕たちと同年にしか見えなかつたです」

「僕も・・・」

「・・・み、みんな（汗）」

「もういいよ・・・どうせ俺はそんな風にしか見られないんだよ・・・」

「ゆ、遊輝さん。気を確かに・・・」

留姫お姉さんに美菜お姉さんや香澄お姉さん、涼太お兄さんに隆お兄さん、それとマーク君にトビー君も龍亞君の言葉に返すようにして意見を言った。ほら、みんな遊輝お姉さん、女の子だと思っているよ。

「まあまあ遊輝ちゃん。別にみんなに女の子だと思われても遊輝ちゃんのあそこが減るわけじゃないし」

「俺の精神が壊されていくんだよ……」

「んもう、頼りないわね。そんな風にやるから余計に女の子って思われていくのよ」

「……妙に説得力ある気がする」

「どう魔法少女龍可ちゃん？ エネルギー溜まった？」

「まだまだですわね……」

「……龍可が二人いると違和感あるわね」

留姫お姉さんが妙な物体を見つめる魔法少女姿の龍可と普通の私服を着た龍可を見て呟く。アリアお姉さんは私たちの龍可と異世界の龍可を間違えないように、あんな風に魔法少女つと前置きをつけて呼んでいる。

「暇だね……どうしようか遊輝ちゃん？ またチップ稼ぎに行く？」

「／／／絶対嫌だ！」

「ねえ、3人ともデュエルディスクあるのでしょ？ だったら私たちとデュエルしようよ！」

「えっ？」

「あつ、それいいですね。僕もやってみみたいです」

「俺も、異世界の人がどんな実力か試してみたい」

美菜お姉さんが3人にデュエルを申し込んだ。その美菜さんの発言で涼太お兄さん

や隆お兄さんたちも手を挙げた。

「えつと……まあいいんだけど、流石に一人につき一人までよ。そんな大勢デュエルするわけには行かないし」

「じゃあどうする?」

「んん……そうですね」

「遙ちゃんと駆さんは優先的にやらせていいんじゃないでしょうか? 駆さんたちのおかげであの3人は無事に過ぎていますから」

「いいの? みんな」

「いいわよいいわよ。じゃああと一人は……」

「留姫、やってみるか?」

「えつ? 私?」

「ちよ!?! 私じゃないの!?!」

「留姫はこういう時積極的じゃないだろ? だから留姫、やったらどうだ?」

「……そうね。せつかくの機会だし」

「こつちからは私とお兄ちゃん、それと留姫お姉さんの3人がデュエルすることになった。た。」

「じゃあこつちの一人目は……龍可ちゃん、行こうか」

「私ですか？分かりました」

「こっちは遙ちゃん、先にどうぞ」

「うん、わかった」

そう言って異世界の龍可はタブレットみたいなものと腕輪みたいなものを取り出して、腕輪を左腕にセットした後、タブレットに腕輪をセットする。すると、タブレットからソリッドビジョンが現れてデュエルディスクができた。

「変わったデュエルディスクですね」

「これ使う人はこっちでも限られてますよ」

涼太お兄さんの言葉に龍可はそう返す。私はその間にデュエルディスクをセットする。

「それじゃやろう！」

「はい」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

| | | | | | |
|----|----|------|---|----|------|
| 龍可 | LP | 4000 | 遙 | LP | 4000 |
|----|----|------|---|----|------|

「先行は私ね！ドロー！」

遙 手札 6枚

「私は手札のカードを1枚墓地に送って幻想の見習い魔導師を特殊召喚！」

幻想の見習い魔導師 攻2000

手札にある1枚のカードを墓地に送り、幻想の見習い魔導師を特殊召喚する。幻想の見習い魔導師は手にしている杖を振って、私のデッキから1枚のカードが飛び出る。

「幻想の見習い魔導師は特殊召喚成功時、デッキからブラック・マジシャンを手札に加える！そしてチョコ・マジシャン・ガールを召喚！」

チョコ・マジシャン・ガール 攻1600

「チョコ・マジシャン・ガールは手札の魔法使い族モンスター1枚を墓地に送って1枚ドロ―！カードを2枚伏せてターンエンド！」

遥 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

幻想の見習い魔導師 攻2000

チョコ・マジシャン・ガール 攻1600

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 2枚

「遥ちゃんは無難な立ち上がりね」

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

突然、私たちのフィールド中央にブラックホールみたいなのが現れて、その中に2体のモンスターが吸い込まれていき、爆発が起きる。そしてブラック・ホールの中から全く知らない新たなモンスターがフィールドに現れた。

「エ、エクシーズ召喚!?!」

「な、何その召喚方法!?!」

「えっ?あれっ?.....」

「龍可、多分知らないんだと.....」

「あっ.....」

「は、いい、じゃあこのアリアさんがエクシーズ召喚について説明しますね!」

全く知らない召喚方法にみんなが慌てていると、アリアお姉さんが眼鏡をかけてフィールドの中央に現れる。私たちはアリアお姉さんの説明を一生懸命聞いて理解した。

「.....以上かな?質問は?」

「私は大丈夫」

「僕も.....少し驚きましたけど」

「私たちの知らない召喚方法ってあるんですね.....」

「それじゃ魔法少女龍可ちゃん、続きをどうぞ」

「は、はい・・・魔法カード、隣の芝刈り！」

「あ、あれは留姫さんも使っているカード」

「隣の芝刈りって確か・・・」

「私のデツキ枚数が相手より多い場合、私は相手と同じ枚数になるようにデツキの上から墓地に送る。私のデツキ枚数は49枚」

「私は32枚」

「デツキの上から17枚を墓地へ・・・墓地に落ちたライトロード・ビースト ウォルフ、ライトロード・スネーク キラー、Em トリック・クラウン、エクリプス・ワイバーンの効果発動！エクリプス・ワイバーンの効果でデツキから裁きの龍をゲームから除外！Em トリック・クラウンは何処からでも墓地に送られた場合、攻撃力と守備力を0にして特殊召喚！ライトロード・ビースト ウォルフとライトロード・スネークはデツキから墓地に送られたので特殊召喚！」

Em トリック・クラウン 攻1600↓0

ライトロード・スネーク キラー 攻1100

「そして私はトリック・クラウンの特殊召喚条件として1000ポイントのダメージを受ける」

龍可 LP 4000 ↓ 3000

「ダメージを受けたことにより墓地のH・C サウザンド・ブレードの効果発動！このカードを墓地から特殊召喚する！」

H・C サウザンド・ブレード 攻1300

あ、あれっ？もしかして・・・私、ピンチ？

「Lv4のサウザンド・ブレードとトリック・クラウンでオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！

トルネード・ドラゴン
竜巻 竜！」

竜巻竜 攻2100

「竜巻竜の効果発動！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、フィールドの魔法・罫1枚を破壊する！」

竜巻竜 OVR 2 ↓ 1

「私は残りのカードを破壊する！」

「リバースカードオープン！マジシャンズ・ナビゲート！手札からブラック・マジシャンを特殊召喚！」

ブラック・マジシャン 攻2500

「そしてデッキから闇属性で魔法使い族のLv7以下のモンスターを特殊召喚する！ブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚！」

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000

マジシャンズ・ナビゲートにより手札にあったマハード、さらにデッキからマナがフィールドに現れた。

『イエエエエ!!! マナちゃん、参上!!!』

『マナ、落ち着きたまえ。遥殿、相手はあの異世界の龍可殿ですね』

「うん、なんかこっちの龍可よりもちよつと強そうだから警戒しないと」

「ライトロード・セイント ミネルバの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、デッキの上から3枚を墓地に送る！」

・ライトロード・マジシャン ライラ

・ライトロード・バタフライ ファルファツラ

・ライトロードの裁き

「その中の《ライトロード》の枚数だけカードをドローする！3枚落ちたから3枚ドロー！」

龍可 手札 4枚↓7枚

「……私、幻覚を見ているのかな？」

「み、美菜さん、落ち着いてください」

「さつきから……都合の良い落ち方しかしてませんか？」

「る、龍可って……こんな才能を」

「ちよつと龍亞!?なんでこつち見て引くの!？」

「ゆ、遊輝さん……いくらなんでも異常じゃ」

「日常茶飯事です。こつちの龍亞も同じようにして200敗以上してます」

「……に、200敗!?!」

な、なんかとんでもない数字が聞こえてきたのだけど……もしかして私、とんでもない人とデュエルしている? (汗)。

「墓地に落ちたライトロードの裁きとライトロード・バタフライ ファアルファツラの効果!ファアルファツラもデッキから墓地に送られた場合、特殊召喚!」

ライトロード・バタフライ ファアルファツラ 攻0

「ライトロードの裁きの効果でデッキから裁きの龍を手札に加える!魔法カード、セブ・ストア!エクシーズモンスターをリリースする事で1枚ドロウが出来て、さらにリリースしたモンスターのオーバレイ・ユニットにつき追加で1枚ドロウする!竜巻竜をリリース!2枚ドロウ!」

龍可 手札 7枚↓9枚

『お、お師匠様、私、すごい嫌な予感が・・・』

『少し静かにしなさい』

『い、いや、でもあれ、完全にやりすぎ』

「Lv4のライトロード・ビースト ウォルフにLv3のライトロード・スネーク キラーをチューニング！」

☆4

+

☆3

||

☆7

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる！シンクロ召喚！降誕せよ！エンシエント・フェアリー・ドラゴン！」

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 守3000

龍可の場にいたモンスターたちがシンクロ召喚されて、エンシエント・フェアリー・ドラゴンがフィールドに現れた。

「さらにLv7のエンシエント・フェアリー・ドラゴンにLv1のライトロード・バタフライ ファルファツラをチューニング！」

「エ、エンシエント・フェアリーをシンクロ!？」

☆7

+

☆1

||

☆8

シンクロ素材となったエンシエント・フェアリーはファルファツラが作った緑色の輪の中に入って宇宙で駆け上がって行き、彗星が流れてきた。

「古の妖精龍が星の力を授かる時、永遠の宇宙を駆け抜ける流れ星に変わる。希望の弧を描く彗星となれ！シンクロ召喚！流れ行け！エンシエント・コメット・ドラゴン！」

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻0

上空から彗星が流れてきて、フィールドに眩しい光が照らさせる。その光が消えると、魔法使いのような三角帽子を被ったエンシエント・フェアリーがフィールドにいた。エンシエント・フェアリーの周りには隕石みたいなものが宙に浮かんでいる。

「エ、エンシエント・フェアリーが……」

「き、綺麗……」

「エンシエント・コメットの効果発動！1ターンに1度、フィールドのカード1枚を対象にして破壊する！」

「えっ!?!」

「私はブラック・マジシャンを選択！スター・ブレイク！」

エンシエント・コメットの周りにあつた隕石がマハードに向かって降り注がれる。マハードは隕石を避けようとするが、一つ一つが大きく且つ量が多くて隕石に潰されて破壊されてしまった。

「マ、マハード!!」

「この効果でモンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの攻撃力分、アップする

！」

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻0↓2500

「マ、マナは墓地のブラック・マジシャン1枚につき攻撃力が300ポイントアップする！」

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000↓2300

「通常召喚！ライトロード・アサシン ライデンを召喚！」

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700

「そ、そういうえばまだ通常召喚していなかったな」

「ライトロード・アサシン ライデンの効果発動！デッキの上から2枚を墓地に送る！」

・超電磁タートル

・ライトロード・アーチャー フェリス

「この時に落ちた《ライトロード》1枚につき200ポイントアップする！」

ライトロード・アサシン ライデン 攻撃力1700↓1900

「墓地に落ちたフェリスの効果！このカードを特殊召喚！フェリスの効果！このカードをリリースすることで、相手フィールドのモンスター1体を破壊する！チョコ・マジシャン・ガールを破壊！」

ライトロード・アーチャー・フェリス自身がリリースして、私のフィールドのチョコ・

マジシャン・ガールが破壊された。

「チヨコ・マジシャン・ガール!!」

「その後、デツキの上から3枚を墓地に送る!」

・隣の芝刈り

・強欲で貪欲な壺

・妖精伝姫ーシラユキ

「墓地の妖精伝姫ーシラユキの効果!墓地からカードを7枚ゲームから除外して特殊召喚!」

妖精伝姫ーシラユキ 攻1850

龍可の墓地から7枚のカードがゲームから除外されて、墓地にいたピンクの服を着た女の子の狐が現れた。

「シラユキは特殊召喚成功時、フィールドのモンスター1体を裏側守備表示にする!私には幻想の見習い魔導師を選択!」

「そ、そんな!?!」

少しずつ私の場のカードが破壊されたり裏側にされたり壊滅に近づいてきている。

「さらに除外されたエクリップス・ワイバーンの効果!この効果で除外された裁きの龍を手札に加える!Lv4のシラユキにLv4のアサシンをチューニング!」

☆4

+

☆4

||

☆8

「聖なる古の超能力者 今交わりてこの地に蘇る！シンクロ召喚！PSYフレームロード・Ω！」

PSYフレームロード・Ω 攻2800

「さらに墓地に《ライトロード》と名のついたモンスターが4種類以上存在する時、手札から裁きの龍を2体特殊召喚！」

裁きの龍 攻3000 ×2

え、えっと・・・どうなったの？

遥 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

裏側守備モンスター (幻想の見習い魔導師)

ブラック・マジシャン・ガール 攻2300

【魔法・罠ゾーン】

なし

龍可 手札 7枚 LP 3000

【モンスターゾーン】

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

エンシエント・コメット・ドラゴン 攻2500

PSYフレーム・ロード Ω 攻2800

裁きの龍 攻3000 ×2

【魔法・罨ゾーン】

なし

「あ、あははは……（汗）」

『は、遙ちゃん……私、帰っていいかな？（汗）』

「こ、これ……本当に龍可？」

「あ、あの龍可ちゃんが涼しい顔で、オ、オーバーキルを」

「うくん……完全に龍可、事故ってるな」

「……事故ってる?!?!」

「バトル！裁きの龍2体でモンスター2体に攻撃！ジャッジメント・レーザー!!」

裁きの龍2体が私の場のモンスター2体に向かってレーザーを放って攻撃をする。

『いやっ!?!ちよっ!?!っ、強いよ!!キャアアアア!!』

裁きの龍 攻3000

ブラック・マジシャン・ガール 攻2300

遥 LP 4000↓3300

「全てのモンスターでダイレクトアタック！」

遥 LP 3300↓1300↓1500↓4000

WIN 龍可 LOS 遥

遥 side out

遊輝 side

「……2回負けてる」

「な、なんてオーバーキル……」

「あ、あれ、本当に龍可さんですか？」

「る、龍可さん怖い……」

「ちよつとみんな!? 何で少しずつ私から離れていくの!? 私関係ないよ!」

「あつちや・・・絶対対戦相手ミスった」

「何で私が悪いみたいになってるの!? 私いつも通りに回したただけだよ!」

いや、龍可のいつも通りは他人にとつちやオーバーキルなんだよ・・・龍亞なんか何回心折られたのやら・・・

「凄い!! 異世界にはこんなに強い人がいるんだ!! もう一回!! もう一回しよう!!」

「えっ!?! い、いや・・・つ、次あるし・・・(汗)」

・・・遙ちゃん、元氣だなく。でもあれが5敗くらいしたら悟り出して、10敗以上したら精魂尽きるんだよね(汗)

「あれ、いつも通りっていうのが・・・ねっ」

「俺たちには考えられないな」

「さてと!! じゃあ次は私がやるわよ!! 相手は誰かしら!？」

「私が相手だわ」

空気を変えようとアリアが大声を上げてデュエルの対戦相手を聞いてくる。その中で一人の女性が前に出た。

「えつと・・・留姫さんだっけ?」

「そうよ。アリアさんだったわね。よろしくお願ひするわ」

「こつちも、それじゃ・・・」

「デュエル!!？」

「デュエル!!？」

コラボ～遊戯王～伝説を受け継いだ兄妹～

中編

アリア side

「デュエル!!?」 「デュエル!!?」

アリア LP 4000

留姫 LP 4000

「先行は私ね、ドロロー」

留姫 手札 6枚

「(まずは下準備ね) ホワイトプリンセスを召喚」

ホワイトプリンセス 攻1600

「ホワイトプリンセスの効果発動、デツキから闇属性モンスターを墓地に送る。私はワイトプリンスを墓地に送るわ」

ふむふむ、相手はワイトデツキ……ワイト? あっ……

「ワ、ワワワワワ、ワイト?!?!」

「!?ど、どうしたのですか!?!い、いきなり声を張り上げて!?!」

「お、俺、部屋戻る!?!」

「えっ!?!遊輝!?!ちよっと遊輝!?!」

すっかり怯えた表情の遊輝ちゃんは逃げるようにベランダから部屋に戻った。あつちや……(汗)。

「……あれ、何?」

「あ、あく、ゴメンね。遊輝ちゃん、お化けとか幽霊とかダメで、その類でアンデット族モンスターもダメなんだよ」

「ゆ、遊輝……」

「お化けもダメダメって……今のところ、遊輝お姉さん何のいいところもないよ」

そんな事ないんだけど、単純にダメなことが続いているだけだから(汗)。

「あれはほつといていいから続けて」

「分かった。墓地に落ちたワイトプリンスの効果でデッキからワイトとワイト夫人を墓地に送る。カードを1枚伏せてターンエンド」

留姫 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

ワイトプリンセス 攻1600

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「それじゃ・・・私のターン！ドロー！」

アリア 手札 6枚

ふむふむ・・・この手札だったら・・・

「手札の超天新龍オッドアイズ・レボリューション・ドラゴンの効果！手札のこのカードを捨てて、ライフを500払うことでデッキからLv8以下のドラゴン族ペンデュラムモンスターを手札に加える！」

アリア LP 4000↓3500

「ペンデュラムモンスター？エクシーズと同じ、私たちには知らないカードのことかしら？」

「そう思ってくれたらいいよ。この効果で霸王眷竜ダーク・ヴルムを手札に加えてそのままこのカードを召喚！」

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻1800

「ダーク・ヴルムは召喚成功時、デッキから《霸王門》モンスターを手札に加える！霸王門零を手札に加えて、このままバトル！霸王眷竜ダーク・ヴルムで攻撃！何かある？」

「（・・・ここはスルーね）何も無いわ」

「ならダメージステップ時、手札のEM オッドアイズ・デイズルバーの効果発動！」

「て、手札から!？」

「自分のペンデュラムモンスターへの攻撃宣言時、このカードを手札から特殊召喚する！」

EM オッドアイズ・デイズルバー 攻2000

ダーク・ヴルムの攻撃時、手札にいたオッドアイズ・デイズルバーが飛び出して、私のフィールドに現れてダーク・ヴルムにバリアを張る。

「この効果の対象になったモンスターはこのバトルでは戦闘で破壊されない、が関係ない！」

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻1800

ワイト・プリンセス 攻1600

留姫 LP 4000↓3800

「ぐっ!？」

「さらにオッドアイズ・デイズルバーでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン!ガード・ブロック！」

オッドアイズ・デイズルバーの攻撃はガード・ブロックによって防がれる。

「この戦闘ダメージは0になって1枚ドロウするわ」

留姫 手札 4枚↓5枚

「そうこなくっちゃ。メインフェイズ2、オッドアイズ・デイズルバーの効果!このカー

ドを融合素材としてフィールドのモンスターで融合する！」

「融合なしで融合だど!?」

「オッドアイズ・ディゾルバーとダーク・ヴルムで融合!二色の眼の龍よ!雷鳴の力を手にして天地を轟け!融合召喚!オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン!」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000

フィールドにいたオッドアイズ・ディゾルバーとダーク・ヴルムの2体が融合されて、オッドアイズ・ボルテックスがフィールドに現れた。

「さらにライト・Pゾーンにスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン、レフト・Pゾーンにスケール8のオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンをセットイングー!」

「ペンデュラムゾーン?」

「お楽しみは次のターンよ。カードを1枚伏せてターンエンド。エンドフェイズ時、ライト・Pゾーンのオッドアイズ・ペンデュラムの効果!このカードを破壊してデッキから攻撃力1500以下のPモンスターを手札に加える!」

Pゾーンにセットされたオッドアイズ・ペンデュラムが自壊、そして私のデッキから1枚のカードが飛び出す。

「私は調弦の魔術師を加えて、レフト・Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの

効果！自分フィールドの《オッドアイズ》カードが破壊された場合、手札・デッキ・墓地から《オッドアイズ》モンスターを特殊召喚する！デッキからオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンを特殊召喚！

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

「これでエンドよ」

アリア 手札 3枚 LP 3500

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：なし

青：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン（スケール8）

「分からないことだらけだけど・・・まあいいわ。私のターン、ドロ」

留姫 手札 6枚

「魔法カード、闇の誘惑。カードを2枚ドロワーして手札の終末の騎士をゲームから除外。そして魔法カード、隣の芝刈り」

「それは通すわけにはいかないな・・・オッドアイズ・ボルテックスの効果発動！相手がカード効果を発動した時、エクストラデッキの表側のペンデュラムモンスターをデッキに戻すことで発動を無効にして破壊する！」

「エクストラデッキに表側？そんなカードあるの？」

「ふふくん、私はEM オッドアイズ・ディゾルバーをデッキに戻すわよ」

「!?そ、そのカードは融合素材にされて墓地に送られたはずじゃ!？」

「ペンデュラムモンスターの特徴、一つ目はフィールドから墓地に送られるペンデュラムモンスターは代わりにエクストラデッキに表側に行く!」

「つまり墓地にはいかずにエクストラデッキに溜まるのか・・・」

「しかしそれじゃ墓地から特殊召喚に対応しませんよ」

「きつと何かあるのですよ・・・そうじゃないとおかしいですよ」

「隣の芝刈りは無効よ。それで？次は？」

「(・・・火力が足りないが仕方ない)魔法カード、ワン・フォー・ワン。手札のワイトメアを墓地に送り、デッキからワイトキングを特殊召喚!」

ワイトキング 攻？

留姫さんが手札のカードを1枚墓地に送り、デッキからワイトキングが飛び出した。

「ワイトキングの攻撃力は墓地のワイトの数×1000ポイントアップする。私の墓地にワイトは合計5枚！」

ワイトキング 攻？↓5000

「そのドラゴンを残しておくわけにはいかないわ！バトル！ワイトキングでオッドアイズ・ボルテックス・ドラゴンに攻撃！」

「通すわよ！」

攻撃力が上昇したワイトキングの攻撃を守備表示のオッドアイズ・ボルテックスは受け止めて、破壊された。

「Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの効果！デッキからさつき戻したEM オッドアイズ・ディゾルバーを特殊召喚！」

EM オッドアイズ・ディゾルバー 守2600

「またそのモンスター!?これじゃ破壊した意味ないじゃない・・・私はカードを2枚伏せターンエンド」

留姫 手札 1枚 LP 3800

【モンスターゾーン】

ワイトキング 攻5000

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

「それじゃ、私のターン！」

アリア 手札 4枚

「まずはオッドアイズ・ディゾルバーの効果！このカードとオッドアイズ・ペルソナの2体で融合！再び現れる！オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン！」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2500

「またそのモンスター・・・でもワイトキングの前では無意味よ！」

「誰が上から殴るって言った？オッドアイズ・ボルテックスは特殊召喚成功時、相手の攻撃表示のモンスター1体を手札に戻す！」

「そんな!？」

オッドアイズ・ボルテックスの横に風が吹いて、その風がワイトキングを吹き飛ばしていった。

「ぐっ!？」

「ライト・Pゾーンにスケール0の霸王門零をセットイング！さあ見せてあげるよ！ペンデュラムの力を！私のフィールドにスケール0の霸王門零とスケール8のオッドアイズ・アークペンデュラムが存在！これでLv1から7までのモンスターが同時に召喚可能！」

「な、何ですかあの穴!？」

私の場にできた霸王門零とオッドアイズ・アークペンデュラムのペンデュラムスケール、それにより私の上空に大きな穴が開いた。

「Here we go!! It's show time!! 振れろ！輝きしペンデュラム！長き封印から目覚め私に栄光よ！ペンデュラム召喚！現れよ！私のモンスターたち！」

上空にできた穴から3つの光が飛び出してきた。

「エクストラデッキからオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン！霸王眷竜ダーク・ヴルム！手札から調弦の魔術師！」

調弦の魔術師 攻0

「い、一気に3体のモンスターを特殊召喚!？」

「しかもさつき破壊されたり融合素材にされたモンスターたちも!？」

「これがペンデュラム召喚よ！Pゾーンにセットしたペンデュラムモンスターのスケー

ルの間、この場合だったらLv1から7までのモンスターを手札とエクストラデッキの表側から同時に特殊召喚できる！」

「それでさっきからエクストラデッキにモンスターを貯めていたのか・・・」

「エクストラデッキに貯まれば貯まるほど手札が無くても大量展開が一度にできる・・・なんて怖い召喚方法」

「チェーン1、調弦の魔術師！チェーン2、霸王眷竜ダーク・ウルムの効果！逆順処理でダーク・ウルムから解決！効果で2枚目の霸王門零を手札に！調弦の魔術師の効果！デッキから《魔術師》Pモンスターを守備表示で特殊召喚する！紫毒の魔術師を特殊召喚！」

紫毒の魔術師 守2100

「い、一気に盤面が埋まった！」

「Lv4の調弦の魔術師にLv4の紫毒の魔術師をチューニング！調弦の魔術師の効果で特殊召喚されたモンスターはゲームから除外される！」

☆4 + ☆4 || ☆8

「振り子の力を得て爆熱の心が燃える！この地で暴れ回れ！シンクロ召喚！爆竜剣士イグニスターP！」

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

調弦の魔術師が作った4つの輪の中に紫毒の魔術師が入って4つの星となって、一つの光となる。その中からイグニスターPが現れる。

「イグニスターPの効果！自分フィールドのペンデュラムカード1枚を対象として発動！そのカードを破壊した後、フィールドのカード1枚を選んでデッキに戻す！対象はオッドアイズ・ペルソナ！」

「このタイミングで発動しなくちゃいけないのね！リバースカードオープン！和睦の使者！」

「忘れちゃいけないよ！オッドアイズ・ボルテックスの効果発動！」

「リバースカードオープン！速攻魔法、エフェクト・シャット！相手効果モンスターが発動した効果を無効にして破壊する！」

「いつ!?!」

オッドアイズ・ボルテックスの効果に反応して発動したエフェクト・シャットにより、オッドアイズ・ボルテックスの周りに檻が現れて、電撃を食らって破壊される。和睦の使者は有効となってしまった。

「計算狂ったわね・・・イグニスターの効果でオッドアイズ・ペルソナを破壊！そして私はダーク・ヴルムをデッキに戻す！そしてオッドアイズ・アークペンデュラムの効果！墓地からオッドアイズ・ボルテックスを守備表示で特殊召喚！」

「また!？」

「とはいえこのターン、攻撃しても意味がないからこれでターンエンド!」

アリア 手札 3枚 LP 3500

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：霸王門零 (スケール0)

青：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

「私のターン、ドロロー!」

留姫 手札 3枚

「留姫が押されつばなし……」

「ワイトキングとかでているもの……主導権を握れてない状況が続いてるな」

「……………ここは）バトル！ワイトキングでイグニスターPを攻撃！」

「その攻撃は通す！」

ワイトキング 攻5000

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

アリア LP 3500↓1350

「ぐううう!!」

「魔法カード、一時休戦」

「……………通す」

「(通してくれた?) お互いに1枚ドロウして、次の相手のターンまでお互いのダメージ

を0にする」

アリア 手札 3枚↓4枚 留姫 手札 1枚↓2枚

「これでターンエンド」

留姫 手札 2枚 LP 3800

【モンスターゾーン】

ワイトキング 攻5000

【魔法・罨ゾーン】

なし

うーん、次があると思つて通したけど何もなかったみたいだね、まあいいか。

「私のターン！ドロー！」

アリア

手札

5枚

さてと……こうなつてくると私のやることはあのワイトキングを除去しつつ、さらに強固な布陣を作ることね。幸いにもドローカードは強かつたわ。

「魔法カード、テラ・フォーミング！デツキからフィールド魔法を手札に加える！天空の虹彩を手札に加えて発動！私はPゾーンの霸王門零を破壊！その後、デツキから《オツドアイズ》カードを手札に加える！2枚目のオツドアイズ・レボリユーションを手札に加えて、空いたPゾーンにスケール12のこのカードをセッティング！」

「これでまたペンデュラム召喚が……」

「いや、スケール12とスケール8じゃLv9から11のモンスターしかできない。でも、今のアリアさんにそんなモンスターはいない」

「そうなる……狙いは別に」

「オツドアイズ・レボリユーションのP効果！自分の墓地のドラゴン族の融合・シンクロ・エクシーズモンスター1体を特殊召喚してこのカードを破壊する！私は墓地から爆

竜剣士イグニスターPを特殊召喚！」

Pゾーンにセットされたオッドアイズ・レボリユーション・ドラゴンが破壊されて、墓地に眠っていたイグニスターPが復活する。

「ま、またそのモンスター!?!」

「さらにオッドアイズ・アークペンデュラムのペンデュラム効果!墓地からオッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン2体目を特殊召喚!効果発動!ワイトキングを再び手札に戻すわよ!」

「ぐっ!?!」

「空いたPゾーンにスケール1の紫毒の魔術師をセット!カードを1枚伏せてこれでターンエンド!」

アリア 手札 2枚 LP 1350

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 守3000 ×2

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 2枚

【Pゾーン】

赤：紫毒の魔術師（スケール1）

青：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン（スケール8）

「こ、これは……」

「留姫、突破できるの？」

「手札が少ないし、1枚はワイトキングで確定だけど……攻撃が通れば」

「私のターン！ドロー！」

留姫 手札 4枚

「……勝つには耐性を持ったあのカードしかない）ワイト夫人を守備表示で召喚！」

ワイト夫人 守2200

ワイト夫人？（ここ）で？

「魔法カード、儀式の下準備」

「（儀式の下準備？サクリファイスとか）まあいいわ。通す」

「デツキから儀式魔法を加えた後、その儀式魔法に書かれている儀式モンスターをデツキから手札に加える。餓者髑髏の復活を手札に加えて餓者髑髏を手札に加える」

「餓者髑髏？聞いたことないモンスターね……それが切り札？」

「ええそうよ。だからこそこのカードを出すのよ！儀式魔法、餓者髑髏の復活！」

「通してあげる！それを倒してこそ倒し甲斐があるわ！」

「手札のジャンク・シンクロンを儀式素材として、餓者髑髏を儀式召喚！」

餓者髑髏 攻10000

『ケケケ……なかなかの上玉じゃねえか、留姫』

「ええそうよ……私よりも格が数段にも上よ」

「へえ……そのカード、精霊なんだ」

「そうよ……そして私の切り札よ！餓者髑髏はこのカード以外にアンデット族モンスターが存在するとき、戦闘・効果で破壊も除外もされず、カード効果の対象にならない！」

「それとワイト夫人で二重に貼ったというわけね……」

「そしてこのカードの攻撃力も墓地に存在する《ワイト》と名のつくモンスター1体につき10000ポイントアップする！」

餓者髑髏 攻10000↓60000

「これが通れば留姫お姉さんの勝ちだ！」

「やっっちゃえ留姫!!」

「バトル！餓者髑髏でイグニスターPに攻撃！ダーク・ソニック・ウエーブ!!」

『ケケケッ！食らいやがれ!!』

「……甘いわね。リバースカードオープン！永続罫、時空のペンデュラムグラフ！自分フィールドの《魔術師》Pカードとフィールドのカード1枚を対象にして破壊する！」
「忘れたの？餓者髑髏には無意味なのよ！」

「ええそうね！だから私は紫毒の魔術師とワイト夫人を選択！」
「なんですつて!!？」

時空のペンデュラムグラフの効果が発動して、私の場の紫毒の魔術師と相手のワイト夫人にレーザーが発射されて破壊した。

「ぐっ!!？」

「これでもう餓者髑髏は無敵じゃない！破壊された紫毒の魔術師の効果発動！相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象にして破壊する！」

「!?そんな!？」

『ケケケッ!!このやろう!』

時空のペンデュラムグラフの効果で破壊された紫毒の魔術師の亡霊が餓者髑髏に飛び移り、そのまま道連れのように破壊した。

「そ、そんな……」

「る、留姫さんの餓者髑髏がああも簡単に……」

「どうする？続ける？その1枚、ワイトキングだけでしょ？」

「……負けたわ、サレンダーするわ」

そう言つて留姫さんはデッキの上に手をおいた。

WIN

アリア

LOS

留姫

「完璧な敗北ね。オッドアイズ・ボルテックスの効果も使わせてないのに」

「いや、このカード、ペンデュラムカード無くなつたらただの壁にしかないから考へて使わないと行けないんだよね」

「それでもよ、私もまだまだね」

デュエルが終わつた後、デュエルディスクを片付けた留姫さんがこつちに近づいて感想戦を始める。まあ止めようと思えば止めれたけど、それじゃ面白くないし。ただ、やっぱ一時休戦は止めるべきだったかな？

「さてと……魔法少女龍可ちゃん。部屋で怯えている魔法少女遊輝ちゃんを連れ戻してきて」

「は、は、は」

「あつ……遊輝さんのこと忘れてました」

「ぼ、僕も……」

全く……遊輝ちゃんのお化け嫌いはいつ克服するの？今度お化け屋敷も連れて行って鍛えてあげようかしら？そう思っている間に龍可ちゃんが遊輝ちゃんを連れてペランダに戻ってきた。遊輝ちゃんは……まだ膝が少し震えているわね。

「だから遊輝……もう大丈夫だって」

「お、お化けは嫌だ……お化けは嫌だ……」

「ほら魔法少女遊輝ちゃん!!トりの出番よ!!シャキッと構えなさい!!」

「……本当に女の子ね」

「そうでしょ？一応、あれでも息子は付いているから」

「そう、じゃあ駆、頼むわ」

「任せておいて」

こっちからは遊輝ちゃん、向こうからは駆さんが対峙する。

コラボ～遊戯王～伝説を受け継いだ兄妹～

後編

遊輝

side

「お化け嫌だ・・・お化け嫌だ・・・」

「い、いつまで言ってるのですか？（汗）」

俺とデュエルする駆さんがデュエルディスクをセットしながらそんな事言ってきた。だってお化けだよ!? 何するか分からない得体の知れない物だよ!? 何でみんな怖くないの!?

「遊輝ちゃんが異常に怖がりすぎるのよ」

「それは思う」

「何で俺の考えわかるの!？」

「めっちゃ顔に出ていた」

「私も見てわかる」

「こういう時こそポーカーフェイスでしょ」

「あ、それは無理ね。遊輝ちゃん、ポーカーフェイスなんて無理だから」

「失礼だなお前ら！」

「ハハハッ（汗）．．．じゃあ、やりましょうか」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

遊輝 LP 4000 駆 LP 4000

「先行は俺！ドロー！」

遊輝 手札 6枚

うゝん．．．回りが良くないな。次のターンのことを考えるか。

「EM ドクロバット・ジョーカーを召喚！」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

「ドクロバット・ジョーカーの効果、召喚成功時、デッキから《魔術師》Pモンスター、《オッドアイズ》モンスター、《EM》モンスターのいずれかを手札に加える！俺は慧眼の魔術師を手札に！」

「魔術師にオッドアイズ．．．っていうことは．．．」

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 5枚 LP 4000

「モンスターゾーン」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「ああそうそう！遊輝ちゃん！ペンデュラムの説明はしたから！」

「おkおk、つてかお前も使ったんか」

「俺のターン！ドロー！」

駆 手札 6枚

「（動かなかったということとは手札の噛み合わせが悪かったのかな）魔法カード、E―エマージエンシーコール！デッキからLv4以下の《E・HERO》1体を手札に加える！エアーマンを手札に加えて、召喚！」

E・HERO エアーマン 攻1800

フィールドに風のHERO、エアーマンが現れる。

「エアーマンは召喚時、デッキから《HERO》と名のついたモンスター1枚を手札に加える！俺はE・HERO バーストレディを手札に加える」

「……HEROか」

「さらに魔法カード、融合徴兵！エクストラデッキの融合モンスター1枚を相手に見せ

て、その素材となるモンスター1体をデッキから手札に加える！俺はE・HERO フレイム・ウイングマンを見せ、E・HERO フェザーマンを手札に加える。そして融合を発動！」

「いきなりか！」

「手札のバーストレディとフェザーマンで融合！融合召喚！E・HERO フレイム・ウイングマン！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100

駆さんの手札にいたフェザーマンとバーストレディの2体が融合され、フレイム・ウイングマンが現れる。

「バトル！フレイム・ウイングマンでドクロバット・ジョーカーに攻撃！フレイム・シユート！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

遊輝 LP 4000↓3700

フレイム・ウイングマンが高く飛び上がり、ドクロバット・ジョーカーに向かって突進をしてドクロバット・ジョーカーは破壊される。

「フレイム・ウイングマンの効果発動！」

「残念ながらドクロバット・ジョーカーはペンデュラムモンスター！墓地に送られる代わりにエクストラデッキにいく！」

「?どういう事？」

「フレイルム・ウィングマンは相手モンスターを戦闘で破壊して墓地に送られた時発動する効果だからよ。ドクロバット・ジョーカーは墓地には送られずエクストラデッキに送られた。つまりフレイルム・ウィングマンの効果は発動しないのよ」

「へえ、ありがとうアリアお姉さん」

「エアーマンでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！ガード・ブロック！」

エアーマンの攻撃はガード・ブロックで防ぎ、俺はカードを1枚ドロウした。

遊輝 手札 5枚↓6枚

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

駆 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

E・HERO エアーマン 攻1800

E・HERO フレイルム・ウィングマン 攻2100

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 7枚

「永続魔法、星霜のペンデュラムグラフを発動！そしてライト・Pゾーンにスケール5の慧眼の魔術師をレフト・Pゾーンにスケール8の虹彩の魔術師をセッティング！」

俺の両隣にPスケールとして慧眼の魔術師と虹彩の魔術師の2体のモンスターが現れる。

「これでLv6と7のモンスターが・・・」

「慧眼の魔術師のペンデュラム効果！もう片方のPゾーンに《魔術師》または《EM》が存在する場合、このカードを破壊してデッキから《魔術師》PカードをPゾーンにセツトする！」

「なっ!?!」

「俺はデッキからスケール1の紫毒の魔術師をセッティング！さらに星霜のペンデュラムグラフの効果！自分フィールドの《魔術師》Pカードがフィールドから離れた場合、デッキから《魔術師》Pモンスター1体を手札に加える！俺は調弦の魔術師を選択！さあ

て・・・いくぜー！」

「くるか・・・ペンデュラム召喚！」

「俺の場にはスケール1の紫毒の魔術師とスケール8の虹彩の魔術師が存在！これによりLv2から7までのモンスターが同時に召喚可能！揺れる魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！現れる！俺のモンスターたち!!」

Pゾーンの間大きな振り子が現れて、その振り子が描く軌跡によって円が描かれ、その円の中から3つの光が飛び出してきた。

「エクストラデッキからEM ドクロバット・ジョーカー！慧眼の魔術師！手札から調弦の魔術師！」

慧眼の魔術師 攻1500

調弦の魔術師 攻0

「調弦の魔術師の効果！このカードが手札からのペンデュラム召喚に成功した場合、デッキから《魔術師》Pモンスターを守備表示で特殊召喚する！黒牙の魔術師を特殊召喚！」

黒牙の魔術師 守800

「Lv4の調弦の魔術師と黒牙の魔術師でオーバーレイ！」

☆4

×

☆4

||

★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！星刻の魔術師！」

星刻の魔術師 攻2400

「星刻の魔術師の効果発動！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、デッキから魔法使い族・闇属性モンスター1体を手札に加える！」

星刻の魔術師 OVR 2↓1

「俺は2枚目の調弦の魔術師を手札に！」

「これで次のターンも展開が可能に……」

「さらにLv4のドクロバット・ジョーカーと慧眼の魔術師でオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ☆4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！超越の名を持つ龍よ！反逆の牙を持ち、世界に轟かせ！エクシーズ召喚！ランク4！降臨せよ！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン 攻2500

ドクロバット・ジョーカーと慧眼の魔術師がブラックホールに吸い込まれていき、その中から黒い触手みたいなものが出てきて、ダーク・リベリオンがフィールドに現れる。「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを2つ取り除いて、相手モン

スター1体の攻撃力を半分にして、その数値分、このカードの攻撃力を加算する！対象はフレイム・ウイングマン！トリーズン・デイスチャージ！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン OVR 2↓0

ダーク・リベリオンがオーバーレイ・ユニットを全て吸収して、フレイム・ウイングマンに向かって自身の身体の一部を変形させて、触手のように絡ませる。そこからフレイム・ウイングマンのパワーを吸収して自身の攻撃力を高めた。

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100↓1050

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン 攻2500↓3550

「バトル！まずは星刻の魔術師でエアーマンに攻撃！」

星刻の魔術師 攻2400

E・HERO エアーマン 攻1800

駆 LP 4000↓3400

「ぐっ!?!」

「そしてダーク・リベリオンでフレイム・ウイングマンに攻撃！反撃のライトニング・デイスオバイ！」

「リバースカードオープン！ヒーロー・バリア！自分フィールドに《E・HERO》が存在する場合、攻撃を一度だけ無効にする！」

ダーク・リベリオンの攻撃はフレイム・ウィングマンに届く前にヒーロー・バリアによつて防がれてしまった。

「さすがに通らんか・・・メイン2、カードを1枚伏せてターンエンド!」

遊輝 手札 4枚 LP 3700

【モンスターゾーン】

星刻の魔術師 攻2400

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン 攻3550

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚

星霜のペンデュラムグラフ

【Pゾーン】

赤：虹彩の魔術師 (スケール8)

青：紫毒の魔術師 (スケール1)

「俺のターン! ドロー!」

駆 手札 3枚

「E・HERO　マジカル・ウィッチを召喚！」

E・HERO　マジカル・ウィッチ　攻1400

「あつ！出たぶつ壊れ！」

「ア、アリアさん・・・少し言葉をオブラートに・・・(汗)」

「だつておかしいでしょ!?好きな魔法サーチだよ!?!」

「・・・まあ否定はしないわ」

「魔法カードサーチはダメだよね」

「(・・・なんか、すみません(汗))マジカル・ウィッチは召喚成功時、このカード以外に《HERO》がいる場合、デッキから魔法カード1枚を手札に加える！」

おい外野、余計なこと言ったせいで駆さんが苦笑いしているぞ。どうするんだよこの空気。

「俺は融合準備を手札に加えて、このカードを発動！エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せて、その素材となるモンスター1体をデッキから手札に加え、その後、墓地の融合を手札に戻す！俺が見せるのはE・HERO　シャイニング・フレア・ウィングマン！」

「まんま出すつもりか・・・」

「この効果でデッキからスパークマンを手札に加えて、さらに墓地の融合を手札に！そ

して発動！手札のスパークマンとフィールドのフレイム・ウィングマンで融合！現れる
マイフェイバリットヒーロー!! E・HERO シャイニング・フレアウィングマン！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻2500

フュージョン・リカバリ

「さらに魔法カード、融合回収！墓地から融合とスパークマンを手札に戻して、再び
発動！フィールドのマジカル・ウィッチと手札のスパークマンで融合！E・HERO
ライトニング・プリンセスを融合召喚！」

E・HERO ライトニング・プリンセス 攻2500

さらに融合回収によって回収されたスパークマンとフィールドのマジカル・ウィッチ
が融合されて、ヒーローとは言えない、王女様のようなモンスターが現れた。

『あら、駆。見たことないデュエリストと見たこともないカードたちですね』

「そうだよ、俺の相手とそこにいる2人のデュエリストは異世界から来たんだ」

「………精霊？」

「そうですよ遊輝さん、ライトニング・プリンセス、全員めちやくちや強いよ。現に遙
ちゃんと留姫は完敗だったんだから」

『あら、それは気合入れないといけませんね。それにしても……みんな可愛い女の子
ですね』

「(ピクッ)」

「あつ!? プ、プリンセス!」

『?どうかしま「俺は男だああああ!!!」……えっ?』

「あ、あくあ……(汗)。プリンセス、ああいう格好だけど、遊輝さんの性別は男性だから……」

『……えっ!? 男の人!? 嘘っ!? ご、ごめんなさい!? とてもそんな風に見えなくて!?』
「わかるよ、分かるよプリンセス。だから私が英才教育で女の「余計なこと言うなアリア!!!」

本気で勘違いしたプリンセスが頭を下げて平謝りする。それにアリアは腕を組んでうなづいて余計なことを言ってきたので大声で怒鳴る。

「と、とりあえず……ライトニング・プリンセスの効果! 手札のカードを1枚捨て、相手の魔法・罠カードを破壊する! 俺は星霜のペンデュラムグラフを破壊! ライトニング・クラッシュ!」

駆さんの最期の手札1枚が墓地に送られて、ライトニング・プリンセスのロッドにエネルギーが溜められて星霜のペンデュラムグラフが破壊された。

「そして、手札から墓地に送られた代償の宝札の効果! このカードが手札から墓地に送られた場合、2枚ドローする!」

駆 手札 0枚↓2枚

「フィールド魔法、摩天楼3ミラーージュ・タウンを発動！効果で墓地のバースト・レディをゲームから除外して1枚ドロ！フレイム・ウイングマンは墓地の《E・HERO》の枚数×300ポイント攻撃力がアップする！俺の墓地には5体のE・HEROがいるー！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻2500↓4000

「攻撃力4000！」

「これなら駆が勝てる！」

「これでバトル！シャイニング・フレア・ウイングマンでダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴンに攻撃！」

「リバースカードオープン！永続罫、時空のペンデュラムグラフ！」

「あれは私がやられたカード!？」

「しかも遊輝のPゾーンに紫毒の魔術師が!？」

「どうやら効果は知っているみたいだね。俺はPゾーンの紫毒の魔術師とシャイニング・フレア・ウイングマンを選択！」

俺が発動した時空のペンデュラムグラフの効果で紫毒の魔術師とシャイニング・フレア・ウイングマンに照準を合わせ、2体のモンスターを破壊した。

「くっ!？」

「さらに破壊された紫毒の魔術師の効果！ライトニング・プリンセスを破壊する！」
 『くっ！きやあああ!!』

破壊された紫毒の魔術師の霊がライトニング・プリンセスにくっついて、自身諸々、ライトニング・プリンセスを破壊した。

「くっ……ライトニング・プリンセスは破壊された時、1枚ドローする！」

駆 手札 2枚↓3枚

「い、一気に壊滅……」

「（一筋縄ではいかないか……）魔法カード、逆境の宝札！相手フィールドに特殊召喚したモンスターがいて自分フィールドにモンスターがいない時、2枚ドローする！」

駆 手札 2枚↓4枚

「カードを3枚伏せてターンエンド！」

駆 手札 1枚 LP 3400

【モンスターゾーン】

なし

【魔法・罨ゾーン】

摩天楼3ーミラージュ・タウン (フィールド)

伏せカード 3枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 5枚

「永続罫、時空のペンデュラムグラフの効果！虹彩の魔術師と左側の伏せカードを破壊する！」

時空のペンデュラムグラフが再び起動して今度は虹彩の魔術師と1枚の伏せカードを破壊した。

「破壊されたのはスイッチ・フュージョン！このカードは相手によって破壊された場合、デッキから融合素材モンスターを墓地に送り融合召喚できる！」

「ハア!？」

「俺はデッキからE・HERO エンジェル・アルドとE・HERO エンジェル・ウイングを墓地に送って墓地に送ってE・HERO エンジェル・スプリングを融合召喚！」

E・HERO エンジェル・スプリング 守2000

駆さんの破壊されたスイッチ・ヒーローの効果でデッキのモンスターが墓地に送られて新たな融合モンスターが守備表示で現れる。

「ええ・・・参ったな。虹彩の魔術師の効果があるけどもうデッキにないから使わない」

と。ライト・PゾーンにEM ダグ・ダガーマンをセッティング!」

空いたPゾーンにダグ・ダガーマンがセッティング、そのままダグ・ダガーマンは墓地にあるドクロバット・ジョーカーのカードを手にした。

「ダグ・ダガーマンのP効果!このカードを発動したメインフェイズに墓地の《EM》を手札に戻す!ドクロバット・ジョーカーを手札に加えて、召喚!効果でデッキから2枚目の慧眼の魔術師を手札に!さらに魔法カード、デュエリスト・アドベント!Pゾーンにカードが存在する場合、デッキから《ペンデュラム》カードを手札に加える!俺はEM ペンデュラム・マジシャンを手札へ!」

「サーチカード多すぎるよ・・・」

「何枚デッキからカードを手札に加えるのですか・・・」

「駆はドローカード多すぎるけど」

「星刻の魔術師の効果!オーバレイ・ユニットを取り除いて、デッキの紫毒の魔術師を手札に加える!」

星刻の魔術師 OVR 1↓0

「レフト・Pゾーンに慧眼の魔術師をセッティング!慧眼の魔術師のP効果!このカードを破壊して、デッキから虹彩の魔術師をセッティング!これでLv3から7までのモンスターまでのモンスターが同時に召喚可能!ペンデュラム召喚!エクストラデッキ

から慧眼の魔術師と手札からEM ペンデュラム・マジシャン！」

EM ペンデュラム・マジシャン 攻1500

再び現れた大きな穴、その中から2つの光が飛び出して慧眼の魔術師とペンデュラム・マジシャンが現れる。

「ペンデュラム・マジシャンの効果発動！特殊召喚成功時、自分フィールドのカード2枚まで破壊して、破壊した枚数だけペンデュラム・マジシャン以外の《EM》モンスターを手札に加える！Pゾーンのダグ・ダガーマンを破壊してEM ギタートルとEM リザードローを手札に！」

「ゆ、遊輝さんの手札、一向に減らないですよ」

「なんて安定感のあるデッキなんだ……」

「Lv4の慧眼の魔術師とドクロバット・ジョーカーでオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！Em トラピーズ・マジシャン！」

Em トラピーズ・マジシャン 攻2500

ブラックホールに吸い込まれたドクロバット・ジョーカーと慧眼の魔術師、そしてブラックホールの中から現れたのはサーカスにいるピエロのような格好したトラピーズ・

マジシャンだ。

「トラピース・マジシャンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを取り除いて、このカード以外の自分フィールドのモンスター1体はこのターン2回攻撃できる！ただし、バトルフェイズ終了時に破壊されるけど」

Em トラピース・マジシャン OVR 2↓1

「俺はペンデュラム・マジシャンを選択！」

「？何で攻撃力の低いペンデュラム・マジシャンなの？」

「恐らく、ペンデュラム・マジシャンを破壊してエクストラデッキに行きたいのかと…ペンデュラム・マジシャンの効果は非常に強力ですから」

「成る程、それならペンデュラム・マジシャンを自分から破壊する理由があるな」

「バトル！ダーク・リベリオンでエンジェル・スプリングに攻撃！反撃のライトニング・デイスオベイ！」

ダーク・リベリオンがエンジェル・スプリングに突撃、自慢の顎でエンジェル・スプリングを破壊する。

「くっ！エンジェル・スプリング！」

「ペンデュラム・マジシャンで2回攻撃！」

駆 LP 3400↓1900↓400

「ぐっ!!」

「星刻の魔術師でダイレクトアタック!」

「リバースカードオーブン! 罠カード、ヒーロー見参!」

「ヒ、ヒーロー見参!」

「相手の攻撃宣言時、相手は自分の手札をランダムに1枚選び、そのモンスターを特殊召喚する!」

「・・・手札1枚」

「俺が特殊召喚するのはE・HERO　ネオス!」

『ブラスター、見参!!』

E・HERO　ネオス　攻2500

ヒーロー見参によって現れたのはネオスだった。

「・・・ネオス? しかも声が聞こえる・・・」

『・・・駆殿、あの女の子は一体誰ですか?』

「あっ!」

『!? あつてな「だから俺は男だああ!!!」ふえっ?』

「どいつもこいつも俺のことを女だと思いやがって!!!」

「そりゃそんな格好して、そんなスタイルじゃ女の子にしか見えないよ」

「お前が原因だろ!!服返せ!!」

「いやだ」

『あれで男ですか?にわかに信じがたいのですが……』

「……事情は後で話すよ。遊輝さん、すみません。続けてください」

「くそう……帰ったら覚えておけよ……」

にしてもネオオスカ……殴る順番間違えたな……ダリベ残しておくべきだった。

「バトルは終了、この時ペンデュラム・マジシャンは破壊される」

「リバースカードオープン!シヨック・ドロー!このターンに受けたダメージ1000ポイントにつき1枚ドローする!3000ポイントのダメージを受けたから3枚ドロー!」

駆 手札 0枚↓3枚

なぐるほど、それだペンデュラム・マジシャンの攻撃を受けたのか、それだったら余計に殴る順番間違えたな。

「レフト・Pゾーンにスケール6のEM ギタートルを、ライト・Pゾーンにスケール6のEM リザードローをセッティング!」

「同じスケールのモンスター?」

「それじゃペンデュラム召喚は……」

「ギタートルのペンデュラム効果!もう片方のPゾーンに《EM》カードがセットされた

時1枚ドロー！リザードローのペンデュラム効果！もう片方のPゾーンに《EM》がある時、自身を破壊して1枚ドロー！」

「手札交換になるのか……」

「ライト・Pゾーンに紫毒の魔術師をセッティング！カード3枚伏せてこれでターンエンド！」

遊輝 手札 3枚 LP 3700

【モンスターゾーン】

星刻の魔術師 攻2400

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン 攻3550

Em トラピーズ・マジシャン 攻2500

【魔法・罨ゾーン】

時空のペンデュラムグラフ

伏せカード 3枚

【Pゾーン】

赤：EM ギタートル (スケール6)

青：紫毒の魔術師 (スケール1)

「俺のターン！ドロー！」

駆 手札 4枚

「魔法カード、聖なる呪印の宝札！墓地から3枚の罨カードをゲームから除外して2枚ドローする！ヒーロー・バリア、シヨック・ドロー、ヒーロー見参の3枚を除外して2枚ドロー！さらに摩天楼3ーミラージュ・タウンの効果！スパークマンをゲームから除外して1枚ドロー！」

駆 手札 3枚↓5枚↓6枚

「（・・・あの時空のペンデュラムグラフを何とかしないと）E・HERO エンジエル・シャイアを特殊召喚！」

E・HERO エンジエル・シャイア 攻100

『やつほう駆！誰とデュエルしているの!?!』

「異世界から来た人だよシャイア。結構強いから用心して、あと、あの人男の人だから」

『ふんふんわか・・・えっ!?!男!?!』

「・・・精霊何人いるんですか？」

「えっと・・・いっぱい（汗）」

いっぱいって（汗）。俺もあまり人のこと言えないけど・・・

「さらに魔法カード、兄弟の絆！自分フィールドにE・HERO ネオスが存在する時、デッキからE・HERO ネオス・ガールを守備表示で特殊召喚する！」

『イエエエエ!!サキちゃん、登場!』

E・HERO ネオス・ガール 守1700

『サキちゃんサキちゃん』

『ん?どうしたのシャイア?』

『駆の対戦相手、男だって』

『へえ、そうなの? 男おお!? あれで!?』

『こらっサキ!!相手に失礼だろ!!』

「……もういいよ、俺はどう頑張っても見た目は変わらないんだ(涙)」

「す、すみません遊輝さん……Lv7のE・HERO ネオスにLv1のE・HERO

O エンジェル・シャイアをチューニング!」

☆7 + ☆1 || ☆8

「偉大なる戦士が進化して、今戦場の中心に立つ!シンクロ召喚!立ち上がれ!E・HERO ネオス・リベレイター!」

E・HERO ネオス・リベレイター 攻2500

「シンクロ素材となったエンジェル・シャイアの効果!このカードの他のシンクロ素材

となったモンスターのLv×100ポイントライフを回復する！」

『受け取って駆！』

駆 LP 400↓1100

「さらにネオス・リベレイターはシンクロ召喚成功時、デツキから《HERO》と名のついたモンスターを墓地に送り、相手フィールドのカード1枚を破壊する！」

「げっ!？」

「俺はデツキからネクロ・ダークマンとクレイマンを墓地に送り、右側の伏せカードを破壊！」

『ハアアア!!!』

駆さんのデツキから2枚のHEROが墓地に送られて、ネオス・リベレイターが手にしている剣で俺の伏せカード1枚を一刀両断して破壊する。

「ぐううう!!!」

「ネオス・リベレイターは自分の墓地、そして除外ゾーンの《HERO》の数×100ポイントアップする！」

「はっ!?!除外ゾーンもカウント!?!」

E・HERO ネオス・リベレイター 攻2500↓4000

「さらに魔法カード、死者蘇生!墓地からE・HERO エンジェル・アルドを特殊召喚

「！」

E・HERO エンジェル・アルド 攻800

『……嘘でしょ!?あれが男!?シャイアちゃんの言った通り!?』

『信じられる!?あんな可愛い子が!?』

『サキさん……私たち、女子力負けている』

『アルド、サキ……そ、そこまでにしないと』

『……お前ら、後でポッコボコにしてやる』

『『ひっ?!』』

「……れ、Lv6のネオス・ガールにLv3のエンジェル・アルドをチューニング!」

☆6 + ☆3 = ☆9

「月より舞い降りる龍がその光で大地を照らす!暗闇を照らす光となれ!シンクロ召喚!輝け!ムーン・ライト・ドラゴン!」

ムーン・ライト・ドラゴン 攻2700

シンクロ素材となったエンジェル・アルドとネオス・ガール、一つの光となったその光は満月へと変わり、その満月から1体のドラゴンがフィールドに現れた。

『駆……相当苦戦しているようですね』

「そうだね……未知の召喚ついでのもあるけど、なかなか強いよ……あと、遊

「輝さんにすごく申し訳ない気持ちでいっぱい」

『……………私が後で叱っておきます』

「頼むよ……………」

「……………昨日見たドラゴン、それに痣が……………」

「痣……………つまり遊輝さんもシグナーですか」

「それが駆さんのシグナーの龍か……………どこかの娘達と違ってしつかりと人格が出来ている」

『(す、凄い根に持っています……………(汗))』

「ムーン・ライトの素材となったエンジェル・アルドの効果！墓地から魔法カードと罫カード1枚ずつデッキに戻して1枚ドロウする！墓地のショック・ドロウと融合準備を戻して1枚ドロウ！」

駆 手札 3枚↓4枚

「そしてムーン・ライト・ドラゴンはシンクロ召喚に成功した時、墓地の《HERO》と名のついた融合モンスターをこのカードに装備する！俺はE・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンを選択！テイク・オーバー・シャイン！」

ムーン・ライト・ドラゴンが照らす地面からシャイニング・フレア・ウィングマンが現れて、ムーン・ライトに吸収された。

「そしてムーン・ライトは装備モンスターと同じ効果を得る！」
「えっ!？」

「ムーン・ライトの攻撃力は墓地の《E・HERO》1体につき300ポイントアップする!墓地の《E・HERO》は13枚!」

ムーン・ライト・ドラゴン 攻2700↓6600

「そして魔法カード、ミラクル・フュージョン!墓地からエンジェル・シャイア、エンジェル・アルド、エンジェル・ウイングの3体のモンスターをゲームから除外してクロスフュージョン!E・HERO エンジェル・ハイロウを融合召喚!」

E・HERO エンジェル・ハイロウ 攻3000

ムーン・ライト・ドラゴン 攻6600↓5700

墓地に眠っていたエンジェル・シャイア、エンジェル・アルド、エンジェル・ウイングの3体のモンスターが除外されて、天使のHEROが天空から降臨した。

「エンジェル・ハイロウはエンジェル・シャイア、エンジェル・アルド、エンジェル・ウイングの3体を融合素材として融合召喚した場合、3つの効果を得る!」

「3つ!？」

「そのうちの1つ、このターン、3回の攻撃を行うことができる!」

「げっ!?!マジで言ってるの!？」

「これで今度こそ駆の勝ちだ！」

「……美菜さん、あなたもしかしてフラグ建てている？」

「えっ？」

「バトル！ムーン・ライトで星刻の魔術師に攻撃！ムーン・ライト・ウェーブ！」

「攻撃宣言時、時空のペンデュラムグラフの効果発動！」

「速攻魔法、サイクロン！時空のペンデュラムグラフを破壊する！」

「本命はこれだ！！リバースカードオープン！！罨カード、攻撃の無敵化！このターン、俺が受ける戦闘ダメージは0になる！」

「なっ!？」

ムーン・ライト・ドラゴンが星刻の魔術師に向かって攻撃、星刻の魔術師は破壊されてしまったが、攻撃の無敵化の効果により戦闘ダメージは0になる。

「シャイニング・フレア・ウィングマンを装備したムーン・ライトの効果発動！星刻の魔術師の攻撃力のダメージを与える！」

「ぐううう!!!」

遊輝 LP 3700 ↓ 1300

「ダメージを与えたけど……」

「このターンでは決め切れない」

「……やっぱり美菜さん、わざとフラグ建てているでしょ?」

「ち、違うよアリアさん!!わざとじゃない!!たまたまだって!」

「だって前のターンも美菜さんが勝つ発言をして防がれて……」

「違うから!!たまたまだから!!」

「仕方ない……エンジェル・ハイロウとネオス・リベレイターで残りの2体のモンスターを攻撃!」

ネオス・リベレイター、エンジェル・ハイロウの2体のモンスターによって俺の場のモンスターは全て破壊されてしまった。

「ターンエンド!」

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン!永続罫、連成する振動!自分のPゾーンのカードを破壊して1枚ドロウする!紫毒の魔術師を破壊!」

「?!しまった!!」

遊輝 手札 3枚↓4枚

「そして破壊された紫毒の魔術師の効果!エンジェル・ハイロウを破壊する!」

連成する振動の効果で紫毒の魔術師が破壊、破壊された紫毒の魔術師が霊状態となり、エンジェル・ハイロウを道連れにする。

「ぐっ!エンジェル・ハイロウはフィールドから離れた時、墓地または除外ゾーンのエン

ジェル・シャイア、エンジェル・アルド、エンジェル・ウイングの3体を特殊召喚する！この3体を守備表示で特殊召喚する！」

E・HERO エンジェル・シャイア 守1000

E・HERO エンジェル・アルド 守1100

E・HERO エンジェル・ウイング 守700

破壊されたエンジェル・ハイロウの残骸から先ほど融合素材となった3体のモンスターが現れた。

「……ねっ、あれ男」

『嘘だ!?あれが男!?』

「……私、あの人に、女子力負けている」

「……おい、3人で何話しているんだ? (汗)」

『『な、なんでも無いよ!!』』

「……モンスターの数が変わったことにより、ネオス・リベレイターとムーン・ライトの攻撃力も変化する」

駆 手札 2枚 LP 1100

【モンスターゾーン】

E・HERO ネオス・リベレイター 攻4000↓3800

ムーン・ライト・ドラゴン 攻5700↓6000

E・HERO エンジェル・シャイア 守1000

E・HERO エンジェル・アルド 守1100

E・HERO エンジェル・ウイング 守700

【魔法・罨ゾーン】

なし

・・・あの3人、今俺を侮辱するような発言したような・・・後で問い詰めてやる！

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 5枚

「魔法カード、貪欲な壺！墓地のモンスター5体を戻して2枚ドローする！」

・調弦の魔術師

・慧眼の魔術師

・慧眼の魔術師

・黒牙の魔術師

・ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン

「この5枚をデッキに戻して、2枚ドロロー！」

遊輝 手札 4枚↓6枚

「ライト・Pゾーンにスケール2のEM ダグ・ダガーマンをセッティング！EMギター
トルのペンデュラム効果で1枚ドロロー！ダグ・ダガーマンのペンデュラム効果発動！墓
地のドクロバット・ジョーカーを手札に加えて、召喚！」

3度目の召喚、ドクロバット・ジョーカー、ペンデュラム・マジシャン、慧眼の魔術師と並ぶこのデッキのエンジンのため、少々ばかり疲れた様子をしている。

「ドクロバット・ジョーカーの効果で慧眼の魔術師を手札に加える！永続罫、連成なる振
動の効果！EM ギタートルを破壊して1枚ドロロー！」

遊輝 手札 7枚↓8枚

「レフト・Pゾーンに慧眼の魔術師をセッティング！効果発動！このカードを破壊して、
デッキから黒牙の魔術師をセッティング！これで再びLv3から7までのモンスター
が同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！手札から調弦の魔術師！エクストラデッキか
ら虹彩の魔術師と紫毒の魔術師！」

虹彩の魔術師 攻1500

紫毒の魔術師 攻1200

「また盤面があつという間に・・・」

「調弦の魔術師の効果発動！デツキから3体目の虹彩の魔術師を特殊召喚！Lv4の虹彩の魔術師にLv4の調弦の魔術師をチューニング！虹彩の魔術師はゲームから除外される！」

☆4 + ☆4 || ☆8

「霸王に付く四龍の1体よ！同調の力を持って、フィールドを拭き荒らせ！シンクロ召喚！霸王眷竜クリア・ウイング！」

霸王眷竜クリア・ウイング 攻2500

調弦の魔術師と虹彩の魔術師がシンクロ素材となつてできた一つの光から黒い風がフィールドに吹き荒れ、霸王眷竜の名を持ったクリア・ウイングがフィールドに現れた。

「ぐうううう!!!」

『な、なんだこの強い風は?!』

『ふ、吹き飛ばされる!!!』

「霸王眷竜クリア・ウイングはシンクロ召喚成功時、相手フィールドの表側表示のモンスターを全て破壊する！」

「なっ?!ぐうううう!!!」

『きゃあああ!!!』

『ぐっ!! 駆……申し訳ありません……』

フィールドを包み込んだ黒い風は駆さんのフィールドの全てのモンスターを飛ばし、上空の彼方に飛んで行った。ただし、1体だけフィールドに残った。

「か、駆のモンスターたちが……」

「い、一瞬で壊滅に……」

「ぐっ……ネオス・リベレイターは効果で破壊されない!そして墓地にHEROが増えたことで攻撃力もアップ!」

E・HERO ネオス・リベレイター 攻3800↓4200

「まだだ!Lv4のドクロバット・ジョーカーと紫毒の魔術師でオーバーレイ!」

☆4 × ☆4 ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!霸王に付く四龍の1体よ!超越の力を得て、敵を殲滅せよ!エクシズ召喚!ランク4!霸王眷竜ダーク・リベリオン!」

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500

ブラックホールにドクロバット・ジョーカーと紫毒の魔術師が吸い込まれていき、そのブラックホールの中からダーク・リベリオンよりも緑色のラインが増えている。

「これでバトル!霸王眷竜ダーク・リベリオンでネオス・リベレイターに攻撃!」

「攻撃力の低いダーク・リベリオンで攻撃だど!?!」

「霸王眷竜ダーク・リベリオンの効果発動! このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前、このカードのオーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで0にして、その元々の攻撃力分、このカードに加える!」

「なっ!?!」

霸王眷竜ダーク・リベリオン OVR 2↓1

ダーク・リベリオンがオーバーレイ・ユニットを一つ使って、攻撃前に自身の一部を翼のように変形して、その翼から黒い電撃をネオス・リベレイターに拘束するように巻きつける。拘束されたネオス・リベレイターは膝まづいて何もできない状態になった。

『ち、力が……抜ける……』

E・HERO ネオス・リベレイター 攻4200↓0

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500↓5000

「いつけええ!! 反撃のライトニング・デイスオベイ!!」

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻5000

E・HERO ネオス・リベレイター 攻0

駆 LP 1100↓0

WIN 遊輝 LOS 駆

遊輝 side out

龍可 side

「さあちよつとはな《ベシツ!!》いったああ!!」

「やり過ぎよ!!何オーバーキルしてるのよ!!普通に考えてクリア・ウイング出す必要なかったでしょ!!」

「あのバカ3人娘にお仕置きあたえるためになあ!!」

「それがやりすぎだつて言ってるのよ!!」

「・・・な、何あれ?」

「何か二人とも凄い形相ですけど・・・」

「気にしないでください。たまにあることなので」

デュエルが終わって遊輝が駆さんの精霊に文句を言いに行こうとした時、真っ先にアリアお姉さんが飛びだして頭を叩く。そこから遊輝とアリアお姉さんの口喧嘩が始まった。

「だいたい元を辿ればお前がこんな服着せたのが原因だろ！」

「遊輝ちゃんがデュエルに負けたから悪いのよ！」

「異世界の龍可、あれほつといていいの？」

「ええ、最後はいつもアリアお姉さんが勝つから」

遊輝がアリアさんに口喧嘩で勝ったこと一度もないんだよね、女は強しって言うけど、こーこういうことかな。

「何だったら遊輝ちゃんの精霊世界の話してあげようか!？」

「やめろおとおお!!それはマジで黒歴史だ!!!」

「じゃあ黙りなさい!!!」

「ぐぬぬぬぬ………」

「あつ、終わった」

「……あの二人の力関係がよく分かるわね」

「遊輝さん……その、すみませんでした」

「ほら遊輝ちゃん!!向こうが謝っているんだから!!」

「わ、分かったよ。水に流すから……」

駆さんが遊輝さんに謝り、アリアお姉さんが遊輝の背中を叩いて遊輝は今回のことを水に流すと言った。でも第一印象は変わらないままなんだよね、きつと。

・・・ギューン!

「みんな!後ろの物体が起動したよ!」

「およっ?・・・うん、もう動くみたいだね。魔法少女遊輝ちゃん、魔法少女龍可ちゃん、行くわよ」

「分かりました」

今まで眠っていた異世界転送装置が再び起動した。私と遊輝はアリアお姉さんの近くに移動して、みんなの方に振り向く。

「じゃあなみんな!」

「また会いましょう」

「楽しかったよ!異世界の龍可ちゃんと話して凄く勉強になった!」

「今度は負けないわよ」

「次は私たちもやってよね!」

「行くわよ!」

アリアお姉さんが異世界転送装置に自分自身の魔力を送り込み、装置が起動した。

コラボ　　＼遊戯王GX＋＼　　前編

遊輝　　s i d e

・・・ギユイン!!

「着いたわね・・・さてここは・・・」

異世界転生装置によるランダムワープ、3回目となる場所はすぐ近くに森があり、さらにその奥には大きな建物がある。森と反対側には断崖絶壁の壁、そして海が見える。

「・・・あれ、デュエルアカデミアか?」

「そうだけど・・・あんな校舎だったっけ?」

「あくそうか、龍可、教科書でデュエルアカデミアの本校って見たことないか?」

「えっ?本校?」

「つてなるとここも異世界か・・・感じ的にはGX?」

「かもな」

「GX?」

「前にアニメの話をしただろ?龍可たちが活躍する前にやったアニメの舞台なんだ。ほら、スバルの爺さん、遊城十代が学生の頃の」

「へえ．．．デュエルアカデミアの本校ってこんな小さな島にあつたんだ」

「さて、そうなるかと少々問題ね。ここは小さな小さな島。この転送装置を隠すことはできても、私たち自身は言い逃れできないくらいに怪しい人物だわ」

そう言つてアリアはエネルギー切れの転送装置を自身のスキマの中に隠す。アリアと言ひ、紫さんと言ひ、あのスキマ便利だよな．．．

「さてと．．．どうする？ここ隠れるとそろ少ないわよ？」

「あそこの森で隠れることできないのですか？」

「あんまりおススメしないんだよね。怪しい研究施設がいっぱいあるし、見回りも多いし」

「事情が分かる人なら良いんだが都合良く行かないだろうしなあ．．．」

「あ、あの．．．」

「?どうしたの龍可ちゃん？」

「あ、あそこに人が．．．」

「えっ!?!」

龍可が指を指す方向に俺とアリアは慌てて振り向くとそこにはGX時代のアカデミアの制服を着た3人組の男女が立っていた。

真二 s i d e

「本当なのか幽鬼？」

『間違いないです！この近くで異質なエネルギーを感じ取りました！』

「信じようよ真二、エンシエント・フェアリーも言ってるんだし」

『ええ、ただ、何故か私には親近感が湧いてくるのです』

「何で異質なエネルギーに親近感を湧くの？おかしいでしょ？」

『そうなんです、何故か親近感を湧くのです』

「エンシエント・フェアリーが言うくらいだから何かあるんだろう」

「そうだよね〜拓磨！」

「うわっ!？」

「……異常事態だっけ言うのにイチャイチャするなよ」

俺の後ろで拓磨に飛びついてイチャイチャする藍を見てため息を出す。俺の名前は遊闇 真二、幼馴染の遊坂 藍と遊蔵 拓磨と一緒にこのデュエルアカデミアで高校生活を送っている普通の……いや、少し変わった高校生だ。

『真一！この先です！この先で異質なエネルギーを感じました！』

さつきから俺の横で浮いているうさぎのモンスターは俺の精霊の幽鬼うさぎ、名前は幽鬼。小学校を卒業する前に手にした俺の精霊だ。

『藍、楽しんでいるところ申し訳ないですがここから先は何が起こるのか分からないので気を引き締めてください』

「うう……分かったよ……」

「……おい、見えたぞ。あいつらだな」

藍と離れた拓磨が森の先にいる怪しい服を着た女の子3人組に指を指す。服はなんというか……魔法少女っぽい服を着て、三角帽子を被り、マントを羽織っている。

「すごい分かりやすいね。あれだったらすぐにバレちゃうよ」

「どうする？様子見る？」

『……あの子』

「ちよ!?エンシエント・フェアリー!?」

「お、おい藍！茂みから出たら！」

「えっ!?!」

茂みに隠れて3人の様子を伺おうとしていたらエンシエント・フェアリーが飛び出して、それに慌てるように藍が飛び出したので俺と拓磨も飛び出す。するとピンク色の子

がこつちに指をさし、残りの二人もビックリしたようにこつちを振り向く。

「……………」

「……………」

中途半端な入り方をしたためお互いに微妙な空気が流れる。そんな中、エンシエント・フェアリーだけがピンク色の子の近くに移動する。

「エンシエント・フェアリー！何「エ、エンシエント・フェアリー!?な、何でそこにいるの!?」……………えっ?」

「エンシエント・フェアリーを知っている!?っというより精霊が見えている!?」

ピンク色の子はエンシエント・フェアリーを見てすごく驚いていた。俺たち3人はピンク色の子がエンシエント・フェアリーを見て驚いた。

「何で!?このカードは『落ちて着いてください藍』ど、どういふことエンシエント・フェアリー!?」

『この少女はシグナーであり、私、エンシエント・フェアリー・ドラゴンの所有者です。あなた達、シグナーの補佐が託すシグナーの一人です』

「えっ?……………」

「……………」

!?!?!?!?!

~~~~~

「……つまり君達はその奇妙な物体の誤作動でこの世界に来た、と」

「まあそんなところですよ……」

「そんな事起こるんだね拓磨……」

「現に闇のデュエルとかあるんだし、不思議ではないが……実感は湧かないな」

エンシエント・フェアリーの爆弾発言から落ち着いた俺たちはとりあえず、3人組の事情を聞いた。何でも後ろの奇妙な物体の調査をしていたところ、誤作動でその機械が作動して自分たちの世界とは異なる全く別の異世界に飛ばされたらしい。異世界から異世界への移動は完全なるランダムでこれで3回目の移動らしい。

『まさか未来の、それも異世界のシグナーと会うとは思いませんでした』

『私もです。前の世界でも所有者はいたのですが実際にはこうして合わなかったですから』

「なんかエンシエント・フェアリーが2体いるのに違和感が」

「とりあえず3人の事情は分かった。少なくとも1日はどこか安全な場所に泊まりたいんだな？」

「そうなのよ、ここ確か関係者以外立ち入り禁止でしょ？ 私たち見かけたら間違いない」

アウトだからさ」

「どうする拓磨？さすがにシグナーの子をほって置くわけには行かないし」

「難しいな……とりあえず校長に掛け合ってみよう。あの校長なら今日一日くらいなら問題ないだろう」

「そうだね拓磨。じゃあ3人共、女子寮の私の部屋に連れて行ってあげるよ」

「(ピクツ)」

「あっ……(汗)」

「俺は拓磨といっ「俺は男だあああ!!!」……えっ?」

「何でどいつもこいつも俺のことを女は!しか見ないんだ!!」

「そんな格好しているからでしょ」

「なんかアリアさんが遊輝さんに突っ込んでいるがそんなことはどうでもいい。えつと……男の子?この人が?」

「……藍、拓磨」

「あゝ、うん、言いたいことわかる」

「……本当に男?」

「疑うな!!俺は男だ!!」

「なんだったら証拠見る?男の子の証」

「／／／ア、アリアさん!!ここでそんな話は!？」

「いやでも・・・手っ取り早いし、流石の私も男の子を女子寮に連れて行くわけには、それはそれで面白そうだけど」

「／／／俺は面白くともなんともない!」

「真面目にさ、男子が女子寮入ったらどうなる?」

「下手したら覗きで退学処分、君たちの場合は警察送りだろうな」

「さすがにそれは私も不味いと思って」

「じゃあ遊輝は俺の部屋で止まってもらおう。オベリスク・ブルーの寮は無駄に広いからな」

「そうだね、俺の部屋よりスペースが確保できるだろう」

これで3人の寝床は大丈夫、あとは校長先生に拓磨が上手いこと言ってくれるだけだ。

～～(翌日)～～

校長先生に拓磨が事情を話して3人は無事、一日だけ寮で暮らすことができた。拓磨曰く、「ブルーの男子の視線が凄すぎた」らしいけど、そんなわけで今は昨日、3人を見



つけた同じ場所にいる。

「とりあえず3人とも、無事に帰れそうなの？」

「あれのエネルギーが溜まり次第……ってところ」

「溜まったところで無事に帰れるかもわからないし、このまま一生、異世界で迷子つてこともあり得るわ」

「それは嫌だな……」

自分たちの世界に帰れないはちよつと……

「龍可ちゃん、エネルギーの様子は？」

「まだまだですね……時間がかかりそうです」

「暇だねく……どうしようか」

「じゃ、じゃあデュエルしましょう！」

「えっ？」

アリアさんが暇と言った時、拓磨の隣にいた藍がデュエルしようと言い出した。

「私、未来のデュエリストとデュエルしたいです！どんなデュエルなのか見てみたいですよー！」

「それは俺も気になるな……やってみたいな」

「ちよ、ちよつと藍に拓磨!?いきなりそんな事言っても」

「うくん……まあいいわよ、ね？」

「私は大丈夫ですよ」

「別に構わないが……」

あれ？割とあっさりとした反応……まあ相手が良いならやらない理由はないよね。

「最初は私が行くわ！」

「藍さんか……じゃあ龍可ちゃん行ったら？エンシエント・フェアリーの持主として」  
「分かりました」

藍がデュエルディスクを取り出し、同じく向こうからは転送装置を見ていた龍可さんがタブレットみたいなものを取り出して、それを左手につけてあった大きなブレスレットに取り付けてデュエルディスクとなる。

「へえ、変わったデュエルディスクだね」

「これ使っている人は私たちの周りでもないです。訳ありで使っているだけで」

「そうなんだ。それじゃやろう！」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

龍可	LP	4000	藍	LP	4000
----	----	------	---	----	------

「先行は私！私のターン！ドロロー！」

藍 手札 6枚

「よし！」手札からハカテリスの効果！このカードを手札から捨てて、神の居城くヴァルハラを手札に加える！」

「ヴァルハラ……っっていうことは天使族デッキ」

「永続魔法、神の居城くヴァルハラを発動！」

藍の後ろに大きな祭殿が現れる。そして、崩れた天井の一部に天空から光が照らさせた。

「神の居城くヴァルハラは自分フィールドにモンスターがいない時、手札から天使族モンスターを特殊召喚できる！光神テテユスを特殊召喚！」

光神テテユス 攻2400

ヴァルハラが照らされた光から光神テテユスが上空からゆっくりと舞い降りてきた。これは順当なスタートだな。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

藍 手札 3枚 LP

【モンスターゾーン】

光神テテユス 攻2400

【魔法・罨ゾーン】

神の居城くヴァルハラ

伏せカード 1枚

「私のターン！ドロー！」

龍可

手札

6枚

「（・・・使いたくないけど手札が悪いから使わないといけないわね）魔法カード、手札抹殺！互いのプレイヤーは手札を全て捨てて、その後、捨てた枚数だけドローする！」  
手札抹殺？なんか苦い顔していたけどもしかして手札悪かったのかな？

「光神テテユスの効果！私がドローしたカードが天使族モンスターだった場合、そのカードを相手に見せることでもう一枚ドローできる！大天使ゼラートを相手を見せて1枚ドロー！引いたカードはメンタルカウンセラー・リリー！さらに1枚ドロー！これ以上は無理でした」

「（・・・あつ、強い）魔法カード、隣の芝刈り！」

「隣の・・・芝刈り？」

「何・・・そのカード？」

「自分のデッキ枚数が相手より多い場合、自分は相手のデッキ枚数と同じになるようにデッキの上からカードを墓地に送ります」

「……えっ?」

「デッキ枚数教えてください。私49枚」

「え、えつと……28枚」

「じゃあ上から21枚のカードを墓地に送ります」

そう言つて龍可さんはデュエルディスクの機能で飛び出した21枚のカードを確認しながら墓地に送つて行く。え、えつと……たった1枚のカードで21枚もカードが……(汗)

「墓地に落ちたライトロード・ビースト ウォルフ、ライトロード・スネーク キラー、Em トリック・クラウン、エクリップス・ワイバーン、ジャツジメント・ロードの効果発動!」

「ラ、ライトロード!?!」

「エクリップス・ワイバーンの効果により私はデッキから裁きの龍をゲームから除外! ウォルフ、キラーはデッキから墓地に送られた時に特殊召喚! トリック・クラウンは何処からでも墓地に送られた場合、攻守を0にして私が1000ポイントダメージを受けて特殊召喚!」

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100

ライトロード・スネーク キラー 攻600

E m トリック・クラウン 攻1600↓0

龍可 LP 4000↓3000

「そしてジャッジメント・ロードはデッキから墓地に送られた場合、このカードを発動する！」

フィールドに3対のモンスターが並び、さらに二人の中央に天空から差す光がもう一つ現れた。

「私がダメージを受けたので、墓地にいるH・C サウザンド・ブレードの効果発動！このカードを攻撃表示で特殊召喚する！」

H・C サウザンド ブレード 攻1300

「……おい真二、あの子確か1枚のカードを発動しただけだよな？なんでモンスターが4体も並ぶんだ？」

「い、いや……僕に言われても……(汗)」

「Lv4のライトロード・ビースト ウォルフにLv3のライトロード・スネーク キラーをチューニング！」

☆4 + ☆3 Ⅱ ☆7

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる！シンクロ召喚！降誕せよ！エンシェント・フェアリー・ドラゴン！」

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 守3000

フィールドにいたウオルフとキラールが飛び上がり、一つの光となってその中からエンシエント・フェアリー・ドラゴンがフィールドに現れる。

「フィールド魔法、ジャステイス・ロードの効果発動！手札の《ライトロード》と名のついたモンスター1枚を墓地に送って、デッキから《ライトロード》と名のついたモンスター1体を墓地に送る！私は手札のライトロード・アーチャー フェリスを墓地に捨て、デッキから2体目のライトロード・ビースト ウオルフを墓地に！そしてウオルフを特殊召喚！墓地のグローアアップ ・バルブの効果！デッキの上から1枚を墓地に送り、特殊召喚！」

・妖精伝姫ーシラユキ

グローアアップ ・バルブ 攻100

「Lv4のライトロード・ビースト ウオルフ2体にLv1のグローアアップ・バルブをチューニング！」

☆4 + ☆4 + ☆1 Ⅱ ☆9

「聖なる氷の龍、今封印から目覚め地上を凍りつかせ！シンクロ召喚！氷結界の龍 トリシューラー！」

氷結界の龍 トリシューラー 攻2700

「うっわ!? トリシューラ!?」

「何でそんなレアカード持つてるの龍可ちゃん!?」

「いや……この前当てたから(汗)」

「……そんなに強いカードなのですか?」

「トリシューラの効果発動! シンクロ召喚成功時、相手の手札・フィールド・墓地のカード一枚をそれぞれ除外する!」

「はっ!?」

「えっ!?」

な、なにその効果!? フィールドだけじゃなくて墓地と手札のカードも除外!?

「おおい、そのカード対象取らんから伏せカード発動するなら今のうちだぞ」

「あっ!? えっ!? ……えっと、リバースカードオープン! 和睦の使者!」

「あつ……仕方ない。じゃあ墓地からヘカテリス、フィールドは……ヴァルハラ、手札は一番左端」

トリシューラと呼ばれるモンスターが3つ首から咆哮が放たれて、藍の墓地、フィールド、手札のカード一枚ずつをゲームから除外された。

「う、うわ……あんなカードあるのか……未来には」

「いや……まああれは特別凶悪なカードです」



「うくん……仕方ない。Lv4のトリック・クラウンとサウザンド・ブレードでオーバレイ！」

「……えっ？」

突如、龍可さんが訳の分からないことをいって俺と拓磨と藍は混乱する。するとフィールドの中央にブラックホールみたいなものができて、2体のモンスターが吸い込まれていった。

「2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！ライトロード・セイント ミネルバ！」

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

そのブラックホールに吸い込まれたモンスターの代わりに全く別の新しいモンスターが出て来た。

「な、なんだ……このモンスター」

「……あれ？」

「龍可ちゃん……前の時もエクシーズモンスターの事言ったでしょ」

「……あつ」

「……遊輝ちゃん、いつから龍可ちゃんにポンコツ属性を付けたの？遊輝ちゃんのせいでしょ？」

「俺!?俺が悪いの!?!いや、確かにちよつと自覚あるけども!?!」

「ちよつと待て!?!まるで私がダメ人間みたいじゃない!?!」

「今のところ100%ポンコツ」

「……………うろうろ」

「あ、あの……………何これ?」

なんか…………遊輝さんとアリアさんで色々言い合つて、龍可さんが膝をついて肩を落としている、この状況に俺たちはついていけない。

「遊輝ちゃん」

「は、はあ…………エクシーズ召喚っていうのは、同じLvのモンスターを2体以上使つて行うシンクロ召喚とは別の召喚方法だ」

「シンクロとは別の…………」

「特徴は何と言つてもこのオーバーレイ・ユニット、エクシーズ素材となったモンスターは墓地に送られず、このオーバーレイ・ユニットとなる。エクシーズモンスターはこの前オーバーレイ・ユニットを一定数使う事で効果を使うことができる」

「つまり効果に限りがあるのか…………」

「まあそれも色々あるんだが…………実際に見てもらつた方が早いかな」

「ライトロード・セイント ミネルバの効果!オーバーレイ・ユニットを一つ取り除い

て、デッキの上から3枚を墓地に送る！」

・ライトロードの裁き

・ライトロード アサシン ライデン

・超電磁タートル

「その中の《ライトロード》と名のついたカード1枚につき1枚ドローする！2枚ドロー！そしてライトロードの裁きの効果でデッキから裁きの龍を手札に加える！」

龍可 手札 3枚↓5枚↓6枚

「て、手札が……」

「カードを2枚伏せて、これでターンエンド」

龍可 手札 4枚 LP 3000 デッキ残り枚数 19枚

【モンスターゾーン】

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 守3000

氷結界の龍 トリシューラ 攻2700

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

【魔法・罨ゾーン】

ジャッジメント・ロード (フィールド)

伏せカード 2枚

「………拓磨、これ藍、積んでない？」

「ま、まだ分かんねえが……少々キツイな」

「わ、私のターン！ドロー！」

藍 手札 7枚

「(え、えつと……確か手札に裁きの龍が……ってことはこのターンに決めないと)へカテリスの効果は使わない！ゼラの戦士を召喚！」

ゼラの戦士 攻1600

「さらに手札のこのカードはフィールドに天空の聖域が存在している時、フィールドのゼラの戦士をリリースして特殊召喚する！大天使ゼラートを特殊召喚！」

大天使ゼラート 攻2800

「(あつ……確かあのカード、除去能力を持っていた)」

「大天使ゼラートの効果発動！手札のマシユマロンを捨てて、相手フィールドのモンスター全てを破壊します！」

「リバースカードオープン！罨カード、ブレイクスルー！スキル！相手の効果モンスター効果を無効にします！」

「そ、そんな!？」

藍が大天使ゼラートの効果を使おうとしたけど、龍可さんが発動したブレイクスルー・スキルにより効果が無効にされてしまう。

「し、仕方ないです・・・バトル!光神テテユスでライトロード・セイント ミネルバを攻撃!」

「あつ、バカ・・・」

「えっ?今なんて?」

光神テテユス 攻2400

ライトロード・セイント ミネルバ 攻2000

龍可 LP 4000↓3600

大天使ゼラートがミネルバに向かって剣を振る。ミネルバはそのまま破壊される。

「ライトロード・セイント ミネルバの効果!このカードが破壊された場合、デッキの上から3枚を墓地に送ってその中の《ライトロード》の数までフィールドのカードを選んで破壊する!」

「そんな!？」

・ライトロード・アーチャー                      フェリス

・光の援軍

・ライトロード・マジシャン ライラ

「2枚のカードが落ちたから2枚まで破壊する！大天使ゼラートとフィールド魔法、天空の聖域を選択！」

破壊されたはずのミネルバが杖を振り、光の球が放たれてそれが大天使ゼラートと天空の聖域にあたり破壊される。

「さらに《ライトロード》モンスターの効果でデッキから墓地に送られたことで、ライトロード・アーチャー フェリスを特殊召喚！さらに墓地に送られたのでEmトリック・クラウンも特殊召喚！」

ライトロード・アーチャー フェリス 守2000

Em トリック・クラウン 守1200↓0

龍可 LP 3000↓2000

「も、モンスター減ってねえ……」

「う、うう……仕方ないです。光神テテユスでトリック・クラウンに攻撃！カードを2枚伏せてターンエンドです」

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！罠カード、砂塵の大嵐！フィールドの魔法・罠を2枚まで破壊する！その伏せカード2枚を破壊！」

龍可さんが発動した砂塵の大嵐によって藍の最後の望みの伏せカードも破壊されて

しまった。

藍 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

光神テテユス 攻2400

【魔法・罨ゾーン】

なし

「私のターン！ドロー！」

龍可 手札 5枚

「(ま、まだ！まだ手札にオネストがあります！)」

「墓地の妖精伝姫ーシラユキの効果発動！墓地のエクリプス・ワイバーンと6枚の魔法カードをゲームから除外して特殊召喚！」

妖精伝姫ーシラユキ 攻1850

「シラユキの効果発動！特殊召喚成功時、相手のモンスター1体を裏側守備表示にします！」

「えっ？」

龍可さんの墓地から特殊召喚されたシラクキによつて光神テテユスは裏側守備表示になった。

「さらに除外されたエクリップスワイバーンの効果で裁きの龍を手札に！裁きの龍を特殊召喚！」

裁きの龍 攻3000

「Lv4のライトロード・アーチャー フェリスとシラクキでオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！2体目のライトロード・セイント ミネルバ！エンシエント・フェアリーを攻撃表示にして、バトル！ミネルバで裏側守備モンスターを攻撃！」

再び現れたミネルバ、そのまま効果を使うこともせず、すぐにバトルフェイズに入つて攻撃、裏側のテテユスは破壊されてしまった。

「裁きの龍、氷結界の龍 トリシューラ、そしてエンシエント・フェアリー・ドラゴンでダイレクトアタック！」

藍 LP 4000↓0

WIN 龍可 LOS 藍



「……ア、アハハハ……タ、タクマ……ワタシワルイユメデモミテルノカナ？」

「し、しっかりしろ藍!! オーバーキル食らったって大丈夫だろ!？」

「オーバーキルじゃないぞ……完全に死体蹴りだった」

デュエルが終わって藍は精神崩壊状態、何もできず、オーバーキルを食らって完全にダメだ。

「あれ全然オーバーキルになってない……ってか龍可の調子悪かった」

「あれのどこが調子悪いんだ!？」

「いつもなら10000以上のオーバーキルかますわよ」

「う、うわあ………」

アリアさんの言葉を聞いて俺と拓磨はドン引きした。死体蹴りもそこまでやるともう……

「じゃあ次! 私が相手になるわ! 因みに私もあなた達の知らない召喚方法を使うわよ」

「ほう……じゃあ俺がやろう」

龍可さんと藍が抜けて、次にアリアさんと拓磨がスタンバイする。

「さて……私はね、一応この中で一番強いと自負しているつもりなんだよ、そう簡

単に負けるわけにはいかないわ」

「ほう・・・俺もこの中では強い。その天狗の鼻を折ってやるぜ」

「デュエル!!？」 「デュエル!!？」

# コラボ

## 〈遊戯王GX〉

### 中編

アリア side

「デュエル!!?」 「デュエル!!?」

アリア LP 4000 拓磨 LP 4000

「先行は俺だな、ドロー」

拓磨 手札 6枚

「手札からマンジュ・ゴッドを召喚」

マンジュ・ゴット 攻1400

「マンジュ・ゴッドの効果! デツキから儀式魔法または儀式モンスターを手札に加える! 俺は超戦士の萌芽を手札に! カードを1枚伏せてターンエンド!」

拓磨 手札 5枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

マンジュ・ゴッド 攻1400

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

ふむふむ、相手のデッキは《カオス・ソルジャー》ね。下手に時間をかけたら効果が強力になっちゃうわね。

「私のターン！ドロー！」

アリア 手札 6枚

うん……この手札だったらこれが最善ね。

「魔法カード、おろかな埋葬！デッキからモンスター1体を墓地に送る！霸王眷竜ダーク・ブルムを墓地に送り、墓地のこのモンスターの効果！フィールドにモンスターが存在しない場合、墓地から特殊召喚できる！」

霸王眷竜ダーク・ブルム 攻1800

「ダーク・ブルムは特殊召喚成功時、デッキから《霸王門》モンスター1体を手札に加える！私は霸王門零を手札に加えるわ。さらに魔法カード、螺旋のストライクバースト！デッキからLv7の《オッドアイズ》モンスターを手札に加える！私はオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンを手札に！さあ、あなた達の知らないカードを使ってあげるわよ」

「ほう……そいつは楽しみだ」

「ライト・Pゾーンにスケール8のオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンを、レ

フト・Pゾーンにスケール1のオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンをセッティング！  
私の両隣に2体のオッドアイズモンスターが天空から舞い降りてくる。

「なんだ……これは？」

「モンスター……だよな？なんでモンスターゾーン以外に」

「フィールド魔法、天空の虹彩を発動！その効果でレフト・Pゾーンのオッドアイズ・ペルソナを破壊！そしてデッキから《オッドアイズ》カードを手札に加える！」

フィールドに貼られた天空の虹彩の効果でオッドアイズ・ペルソナが破壊され、私の手札に1枚のカードが加わる。

「私はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に、そしてライト・Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの効果！フィールドの《オッドアイズ》カードが破壊された場合、デッキ・手札・墓地から《オッドアイズ》モンスターを1体特殊召喚する！EM オッドアイズ・デイズルバーを特殊召喚！」

EM オッドアイズ・デイズルバー 守2600

反対側のPゾーンにいたオッドアイズ・アークペンデュラムが咆哮を上げて私のデッキからオッドアイズ・デイズルバーが現れる。

「EM オッドアイズ・デイズルバーの効果！このカードを含むフィールドのモンスターで融合召喚を行う！」

「何だと!？」

「フィールドのオッドアイズ・ディゾルバーとダーク・ヴルムの2体で融合!融合召喚!オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン!」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2500

フィールドにいたオッドアイズ・ディゾルバーとダーク・ヴルムの2体のモンスターが融合されて、オッドアイズ・ボルテックスがフィールドに現れる。

「さて・・・オッドアイズ・ボルテックスは特殊召喚成功時に相手の攻撃表示モンスターを戻せるんだけど、その効果は使わない」

「戻してくれた方がこっちとしては嬉しかったけどな」

「かといってちよつと攻め手に欠いているんだね・・・このままバトル!オッドアイズ・ボルテックスでマンジユ・ゴッドに攻撃!」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2500

マンジユ・ゴッド 攻1400

拓磨 LP 4000↓2900

オッドアイズ・ボルテックスの体から放たれた電撃がマンジユ・ゴッドにあたり、マンジユ・ゴッドは黒焦げになって破壊された。

「ぐうう!!」

「メイン2、レフト・Pゾーンにスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンをセッティング！さあ見せてあげるよ！ペンデュラムの力を！私の場にはスケール4のオッドアイズ・ペンデュラムとスケール8のオッドアイズ・アークペンデュラム、2体のドラゴンがセッティングされている！これでLv5から7までのモンスターが同時に召喚可能！」

「な、なにこれ!?!」

「何だ!?!何が起きてるんだ!?!」

「Here we go!! It's show time!! 振れろ！輝きしペンデュラム！長き封印から目覚め私に栄光よ！ペンデュラム召喚！現れよ！私のモンスターー！」

オッドアイズ・ペンデュラムとオッドアイズ・アークペンデュラムの間にできた輪の中から1つの光が出てきて、オッドアイズ・ペルソナがフィールドに現れる。

「オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン！」

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

「な、なんだ・・・何だこれ・・・」

「これがペンデュラムモンスター最大の特徴・・・ペンデュラム召喚、ペンデュラムモンスターにあるペンデュラムスケールの間のレベルのモンスター、この場合はスケール

4とスケール8だからLv5から7までのモンスターが手札・エクストラデッキから特殊召喚できる」

「……破壊されたオッドアイズ・ペルソナが特殊召喚、エクストラデッキ……ペンデュラムモンスターはエクストラデッキに行ったのか？」

「その通り、ペンデュラムモンスターはフィールドから墓地に送られた場合、墓地に行く代わりにエクストラデッキに表側に行く」

「なるほど……一種のゾンビテーマだな」

「まっ、そういうところね。カードを1枚伏せてターンエンド！ エンドフェイズ時、レベル・Pゾーンのオッドアイズ・ペンデュラムの効果！ このカードを破壊して、デッキから攻撃力1500以下のペンデュラムモンスターを手札に加える！ 調弦の魔術師を手札に！」

アリア 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2500

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 1枚



天空の虹彩 (フィールド)

【Pゾーン】

赤：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

青：なし

「俺のターン！ドロー！」

拓磨 手札 6枚

「魔法カード、テラ・フォーミング！この効果で混沌カオス・フィールドの場を手札に加えて、そのまま発動  
！」

天空の交際で虹がかかっていたフィールドに眩しい光が灯される。

「……ん？何でそっちのフィールド魔法が破壊されないんだ？」

「えっ？……ああ、そういうええはまだだったわね。私たちの時代のルールではフィールド魔法は自分と相手、それぞれ発動出来るのよ」

「そうなのか？」

「このデュエルデイスクはそのルールに対応しちゃってるからね……どうする？」  
「せっかくだ。そっちのルールに乗ろう。そっちもフィールド魔法があった方が良さ  
ろ？」

「そりやそうよ。まあ、ありがとう」

「では再開しよう。このカードの発動時の処理として《カオス・ソルジャー》儀式モンスターを手札に加える。俺は超戦士カオス・ソルジャーを手札に、そして儀式魔法、超戦士の萌芽を発動！」

「はいダメ〜！オッドアイズ・ボルテックスの効果！1ターンに1度、エクストラデッキの表側のペンデュラムカードを1枚デッキに戻すことで相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にして破壊する！」

「なっ!？」

「私はオッドアイズ・デイズルバーをデッキに戻して超戦士の萌芽を破壊！」

相手が発動したカードはオッドアイズ・ボルテックスが口から電撃の玉を吐き出して効果を無効にする。

「そ、そんな……拓磨」

「まずい……あのモンスターがいる限り何かしらを無効にされてしまう」

「くそ……仕方ない。魔法カード、トレードイン！手札の超戦士カオス・ソルジャーを捨て、2枚ドロ〜！モンスターが墓地に送られたことによりフィールド魔法、混沌の場に魔力カウンターを1つ置く！」

混沌の場

魔力C

0↓1

「モンスターをセット！カードを2枚伏せてターンエンド！」

拓磨 手札 2枚 LP 2900

【モンスターゾーン】

伏せモンスター 1体

【魔法・罨ゾーン】

混沌の場 (フィールド)

伏せカード 3枚

「私のターン！ドロー！」

アリア 手札 4枚

ふむ……困ったわね、後続が微妙すぎる。まあいいか。

「レフト・Pゾーンにスケール0の霸王門零をセットイング！」

「リバーズカードオープン！速攻魔法、サイクロン！今ペンデュラムスケールとして置いた霸王門零を破壊する！」

「へえ……なかなか良い感じしてるじゃない。だけど甘いわね！オッドアイズ・ボルテックスの効果！エクストラデッキのオッドアイズ・ペンデュラムをデッキに戻して無効に

する!」

相手が発動したサイクロンは再びオッドアイズ・ボルテックスの効果で無効にする。ふむ……弾丸を切らしたことに意味があるのかね？

「これでオッドアイズ・ボルテックスの効果はもう使えない」

「そうね……困ったもんよ。というわけで……フィールド魔法、天空の虹彩の効果

!オッドアイズ・ボルテックスを破壊する!」

「なっ!?!自分からそのモンスターを!」

「そしてデッキから超天新龍オッドアイズ・レポルーション・ドラゴンを手札に!」

「だがモンスターが墓地に送られたことで混沌の場にカウンターが一つ乗る!」

混沌の場 魔力C 1↓2

「ライト・Pゾーンのオッドアイズ・アークペンデュラムの効果!デッキから再びEM

オッドアイズ・ディゾルバーを特殊召喚!」

EM オッドアイズ・ディゾルバー 攻2000

「そ、そのモンスターって融合素材になる!?!」

「オッドアイズ・ディゾルバーの効果発動!このカードとオッドアイズ・ペルソナで再び

融合!オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン!」

再びオッドアイズ・ディゾルバーとオッドアイズ・ペルソナの2体のモンスターが融

合の渦に巻き込まれていきオッドアイズ・ボルテックスが現れる。

「ぐっ……またそいつか……」

「ああでも、もう無効効果は使えないわよ。この効果は名称ターナーだから」

「そ、それならまだ」

「いや……状況はさらに不味くなったよ」

「えっ？ どういう事真二？」

「オッドアイズ・アークペンデュラムの効果を忘れたの藍？」

「……あああ!!! 墓地からオッドアイズを特殊召喚！」

「そう……つまりあのオッドアイズ・ボルテックスを破壊したら墓地にいる別のオツ

ドアイズ・ボルテックスが蘇る」

「そ、それじゃ拓磨、ピンチじゃない！」

「そして再びペンデュラム召喚！ エクストラデツキの霸王眷竜ダーク・ヴルムとオツ

アイズ・ペルソナ！ 手札から調弦の魔術師！」

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

調弦の魔術師

攻0

再び空に描かれた円の軌跡、その中から2つの光が飛び出してダーク・ヴルムと調弦の魔術師が現れる。

「チェーン1、調弦の魔術師、チェーン2でダーク・ヴルムの効果！ダーク・ヴルムの効果で霸王門零を手札に！調弦の魔術師は手札からのペンデュラム召喚成功時、デッキから《魔術師》ペンデュラムモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！紫毒の魔術師を特殊召喚！」

紫毒の魔術師

守2100

調弦の魔術師が手にしている大きなチューナーが鳴り響き、紫毒の魔術師がフィールドに現れる。

「Lv4の紫毒の魔術師にLv4の調弦の魔術師をチューニング！調弦の魔術師の効果で特殊召喚された紫毒の魔術師はゲームから除外される！」

☆4

+

☆4

||

☆8

「振り子の力を得て爆熱の心が燃える！この地で暴れ回れ！シンクロ召喚！爆竜剣士イグニスターP！」

爆竜剣士イグニスターP

攻2850

シンクロ召喚して現れたイグニスターPはフィールドに舞い降りて剣を構える。

「イグニスターPの効果発動！デッキから《竜剣士》ペンデュラムモンスターを守備表示で特殊召喚する！竜剣士ラスターPを特殊召喚！」

竜剣士ラスターP

守0

「そしてイグニスターPの効果！自分フィールドのペンデュラムカードを対象として、そのカードを破壊、その後フィールドのカード1枚を選んでデッキに戻す！私はラストPを選択！」

「ならチェーンだ！まずは1枚目！罫カード、和睦の使者！次に2枚目！天地開闢！デッキから《カオス・ソルジャー》または《暗黒騎士ガイア》モンスターを1体以上含む3体の戦士族モンスターを選択！」

相手は2枚の伏せカードを発動、その内の1枚、天地開闢の効果で3枚のカードを私に見せてきてシャッフルする。

「俺は開闢の騎士、混沌の使者、覚醒の暗黒騎士ガイアを選択。相手はその中からランダムに1枚を選んで、それが《カオス・ソルジャー》か《暗黒騎士ガイア》ならそのカードを手札に加えて残りを墓地、それ以外なら全て墓地だ。さあ、どれか一枚を選べ」

ふむ……墓地に闇属性モンスターなし、ここは覚醒の暗黒騎士ガイアを当てたところだけ1/3ね。

「右のカードを選択」

「選択したカードは……混沌の使者、全てのカードを墓地に！」

あっちゃ、外したのね。まあ仕方ない。

「そして和睦の使者の効果でこのターン、俺は戦闘ダメージを受けない！」

「イグニスターPの効果でラスターPを破壊してその伏せモンスターをデッキに戻す！」

全ての効果が解決され、天地開闢により相手の墓地に3枚のカードが送られ、和睦の使者で戦闘ダメージ0、イグニスターPでラスターPが破壊されて伏せモンスターを遠くに飛ばした。

「さて……このターンにダメージを与えられないなら無意味に動く必要はないわね。これでターンエンド！」

「エンドフェイズ時、墓地の混沌の使者の効果発動！俺の墓地の光属性モンスター、開闢の使者と闇属性モンスター、覚醒の暗黒騎士ガイアをゲームから除外してこのカードを手札に戻す！そして除外された開闢の使者の効果！デッキから儀式魔法を手札に加える！2枚目の超戦士の萌芽を手札に加える！」

アリア 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン 攻2500

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

霸王眷竜ダーク・ヴルム 攻1800



オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン 守2400

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

天空の虹彩 (フィールド)

【Pゾーン】

赤：オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン (スケール8)

青：霸王門零 (スケール0)

「俺のターン！ドロー！」

拓磨 手札 5枚

「(さて・・・まずはオッドアイズ・ボルテックスを何とかしよう) 魔法カード、ライティング・ボルテックス！手札のコストとして混沌の使者を墓地に送る！」

「!?オッドアイズ・ボルテックスの効果発動！オッドアイズ・ディゾルバーを戻してブ  
ラック・ホールを無効にする！」

相手がライティング・ボルテックスをおおうとしてきたので私はオッドアイズ・ボル  
テックスの効果をすぐに発動、ライティング・ボルテックスは無効になる。

「あ、危ないわね・・・そんなカード握ってたのね」

「だがこれでもうそのドラゴンは効果を使えない。混沌の場の効果で魔力カウンターを一つ乗せる！」

混沌の場 魔力C 2↓3

「魔法カード、強欲な壺！カードを2枚ドロウする！」

拓磨 手札 2枚↓4枚

「そして儀式魔法、超戦士の萌芽！俺は手札から光属性モンスターのマンジユ・ゴッド、デツキから闇属性モンスター、宵闇の騎士をリリースして墓地から儀式召喚！超戦士カオス・ソルジャー！」

超戦士カオス・ソルジャー 攻3000

手札にいたマンジユ・ゴッドとデツキの宵闇の騎士がリリースされて墓地に眠っていた超戦士カオス・ソルジャーが現れる。

「混沌の場に魔力カウンターが一つ乗る」

混沌の場 魔力C 3↓4

「そして《カオス・ソルジャー》儀式モンスターの儀式素材になった宵闇の騎士の効果！《カオス・ソルジャー》儀式モンスターに効果を付与する！まずは相手の手札をランダムに除外する効果だ！」

「リバースカードオープン！罨カード、無限泡影！超戦士カオス・ソルジャーの効果をエ

ンドフェイズまで無効にする！」

「何だと!？」

相手のカオス・ソルジャーが効果を使用したところで私は伏せカードを使う。無限泡影の効果によりカオス・ソルジャーの上に穴が開いてそこからカオス・ソルジャーのエネルギーを吸収し始める。カオス・ソルジャーは膝まづいて効果を使えなくなってしまう。

「さあどうする? まだまだ私は元気よ?」

「まだだ! 魔法カード、埋葬呪文の宝札! 墓地の強欲な壺、サイクロン、テラ・フォーミングの3枚の魔法カードを除外して2枚ドロ―!」

拓磨 手札 1枚↓3枚

「(・・・来た!) 俺は墓地の光属性モンスター、マンジュ・ゴッドと闇属性モンスター、宵闇の騎士をゲームから除外! 出でよ! カオス・ソルジャー! 開闢の使者!」

カオス・ソルジャー 開闢の使者 攻3000

相手の墓地にいたマンジュ・ゴッドと宵闇の騎士がゲームから除外されて、開闢の使者が現れる。

「うっそ?! そこでそれを引く?!」

「除外された宵闇の騎士の効果! デツキから儀式モンスターを手札に加える! 超戦士カ

オス・ソルジャーを加えて、さらに混沌の場の効果！魔力カウンターを3つ取り除いて、デッキから儀式魔法を手札に加える！」

混沌の場 魔力C 4↓1

「超戦士の儀式を手札に！開闢の使者の効果を発動！このターン、このカードの攻撃を放棄することで、フィールドのモンスター1体をゲームから除外する！オッドアイズ・ボルテックスをゲームから除外！」

開闢の使者がオッドアイズ・ボルテックスに駆け寄り、自身の件をオッドアイズ・ボルテックスに突き刺す。オッドアイズ・ボルテックスは悲鳴をあげながらゲームから除外された。

「ぐっ!?!」

「よっし！これでオッドアイズ・アークペンデュラムの効果は気にならない！」

「これでバトル！超戦士カオス・ソルジャーで爆竜剣士イグニスターPに攻撃！カオスブレード改！」

超戦士カオス・ソルジャー 攻3000

爆竜剣士イグニスターP 攻2850

アリア LP 4000↓3850

混沌の場 魔力C 1↓2

膝まづいたカオス・ソルジャーが剣を持って立ち上がり、イグニスターPを切りつける。イグニスターPも対抗して立ち向かうが、剣を吹っ飛ばされて、カオス・ソルジャーに斬り付けられ破壊されてしまった。

「ぐううう!!!」

「アリアさんの強力なモンスターを倒すことができました!」

「やっっちゃえ拓磨!」

「カードを1枚伏せてターンエンド!」

拓磨      手札      3枚      LP      2900

【モンスターゾーン】

超戦士カオス・ソルジャー      攻3000

カオス・ソルジャー      〳開闢の使者〵      攻3000

【魔法・罨ゾーン】

混沌の場      (フィールド)

伏せカード      1枚

「(この2体の攻撃力を超えるモンスターが出てきてもミラフォで対処、手札にはカオ

ス・ソルジャーと超戦士の儀式がある。後続もバツチりだ」

「さすがにあれひっくり返されるのはキツイわね……じゃあこのターンで終わりにするわよ！」

「なっ!？」

「私のターン!ドロー!」

アリア 手札 5枚

「手札にある超天新龍オッドアイズ・レボリューション・ドラゴンの効果!手札のこのカードを捨て、500ポイント払うことでデッキからLv8以下のドラゴン族ペンデュラムモンスターを手札に加える!」

アリア LP 3850↓3350

「私は2枚目のオッドアイズ・アークペンデュラムを手札に、そしてフィールドのダーク・ヴルムとオッドアイズ・アークペンデュラムで融合!」

「なっ!?!融合なしで融合だと!？」

「しかも今度は何の効果も使わずに!？」

「このカードはフィールドの融合素材モンスターをリリースすることで融合召喚出来る!素材の条件は闇属性ペンデュラムモンスター2体!霸王の名を持つ毒龍よ!フィールドに降臨して全てを犯せ!融合召喚!霸王眷竜 スターヴ・ヴェノム!」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム

攻2800

『……グギャアアアア!!』

私の場にいたダーク・ヴェノムとオッドアイズ・ペルソナが融合素材となつて渦に巻き込まれていき、霸王眷竜スターヴ・ヴェノムがフィールドに現れる。口が開いて唾液が垂れて、獲物を見るように相手の2体のカオス・ソルジャーを見つめる。

「ぐうう!!な、なんだこのプレッシャーは?」

「霸王眷竜スターヴ・ヴェノムの効果!お互いのフィールド、または墓地のモンスター1体を対象にして、そのモンスターと同名カードそして同じ効果を得る!私は超天新龍オッドアイズ・レボルーションを選択!」

『ギャアアアアア!!』

スターヴ・ヴェノムの咆哮で地面が大きく揺れて、墓地に眠っていたオッドアイズ・レボルーションの魂がスターヴ・ヴェノムに吸収された。

「オッドアイズ・レボルーションの効果は相手のライフの半分の数値分だけ、このカードの攻撃力をアップさせる!」

「何だ?!」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム

攻2800↓4250

「い、一気にカオス・ソルジャーの攻撃力を超えた!」

「まだよ！オッドアイズ・レボリューションの第二の効果！ライフを半分払うことで、このカード以外のお互いのフィールド、墓地のカードを全てデッキに戻す！」

「なっ!?」

「す、全てデッキ!?」

「吹き荒れる嵐!!轟け雷鳴!!そして起こせ革命!!タイフーン・レボリユーション!!」

『ギヤアアアアアアアア!!!』

アリア LP 3350↓1675

スターヴ・ヴェノムが翼を羽ばたかせて空に舞い上がり、天に向かって咆哮をあげる。フィールド上空に雷雲が発生、さらに風が強くなりフィールドに嵐と雷が交差する。お互いの墓地のカード全てとスターヴ・ヴェノム以外のフィールドのカードが嵐に飲み込まれ、飛ばされていった。嵐が止むと、お互いのフィールドは綺麗な更地になっていた。「そ、そんな……拓磨のフィールドがあつという間に……」

「バトル!スターヴ・ヴェノムでダイレクトアタック!猛撃のヴェノム・ショット!」

拓磨 LP 2900↓0

WIN アリア LOS 拓磨



「た、拓磨!？」

「大丈夫!？」

「大丈夫だ……タハハ、完敗だ」

デュエルに負けた拓磨は後ろに倒れ込んだ。それを見て、2人が駆け寄るけど拓磨は笑って答えた。

「久々に身内以外でやられたな……未知のカードがあるとはいえ、何も出来なかった」  
「私も危なかったわよ。無限泡影でカオス・ソルジャーを止めてなかったら死んでいたんだし」

「それを警戒しなかった俺はダメだったことだ。ふうう……あとは真二に託す。流石に3連敗は情けないから勝ってくれよ」

「ああ、もちろんだ」

「魔法少女遊輝ちゃん! 出番よ!」

「だからその魔法少女って付けるのやめてくれ……」

向こうが準備を始めたので、私は転生装置を見守っていた遊輝ちゃんを呼ぶ。遊輝ちゃんもデュエルディスクを手にした。

コラボ  
 〈遊戯王GX+〉  
 後編

遊輝 side

「デュエル!!?」 「デュエル!!?」

遊輝 LP 4000 真二 LP 4000

「先行は俺!ドロー!」

遊輝 手札 6枚

さて……うっわ!?私の手札悪過ぎ!?なんじゃこれ!?マジで何も出来んぞ!?

「……モンスター裏守備でセット。カード1枚伏せてターンエンド」

遊輝 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

裏守備モンスター

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

「遊輝ちゃんどうしたのよ!?!いつもの展開は!?!」

「手札事故なんだよ!察してくれよ!」

「ありますよね、そういう時、俺のターン!ドロー!」

真二 手札 6枚

「こっちは遠慮なく行かしてもらいますよ。破壊剣士の伴竜を守備表示で召喚!」

破壊剣士の伴竜 守300

相手のフィールドに破壊剣士の伴竜が現れて飛び回る。破壊剣士の伴竜の上空が一瞬ピカッと光り、一枚のカードが落ちて来て真二さんの手札に加わった。

「このカードの召喚時、デッキからこのカード以外の《破壊剣》カードを手札に加えられる。俺はこの効果で破壊剣ードラゴンバスターブレイドを手札に加える」

「……バスターブレイダーか」

しかも手札に加えたカードはエクストラデッキの特殊召喚封じる奴だな……面倒つたらありやしない。

「魔法カード、竜破壊の証!デッキからバスター・ブレイダーを手札に加える!」

「おいおいおい!!パーツが揃ってるじゃないかよ!?!」

「破壊剣士の伴竜の効果!このカードをリリースして、手札のバスター・ブレイダーを特殊召喚!」

バスター・ブレイダー 攻2600

フィールドの破壊剣士の伴竜がリリースされ、その中からバスター・ブレイダーがフィールドに現れて剣を振り回す。

「バトル！バスター・ブレイダーで裏守備モンスターに攻撃！破壊剣一閃！」

バスター・ブレイダーが駆け抜けて俺の裏守備のモンスターを斬りつけた。そのカードが反転して、フィールドに姿を表す。

「破壊されたのは紫毒の魔術師！モンスター効果発動！このカードが破壊された場合、フィールドの表側のカード1枚を破壊する！」

「なっ!?!」

「対象はバスター・ブレイダー！」

破壊された紫毒の魔術師の霊がバスター・ブレイダーに取り付いて肩を噛み付く。そこからバスター・ブレイダーは苦しみ破壊された。

「そして紫毒の魔術師はペンデュラムモンスター、墓地に行く代わりにエクストラデッキに行く！」

「ペンデュラムか・・・ドラゴンバスターブレイドを手札に加えたけど意味ない・・・カードを1枚伏せてターンエンド！」

真二 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

なし

【魔法・罠ゾーン】

伏せカード 1枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 5枚

「（……よし！）ライト・Pゾーンにスケール6のEM ギタートル、レフト・Pゾーンにスケール6のEM リザードローをセッティング！」

「同じスケールを？それじゃペンデュラム召喚は」

「ギタートルのペンデュラム効果！もう片方のPゾーンに《EM》カードがセッティングされた時、1枚ドロー！リザードローのペンデュラム効果！もう片方のPゾーンに《EM》カードがある場合、このカードを破壊して1枚ドロー！」

遊輝 手札 3枚↓4枚↓5枚

「ドロー効果持ちか・手札を入れ替えてデッキを掘るわけか」

「魔法カード、デュエリスト・アドベント！Pゾーンにカードが存在する場合、デッキか

ら《ペンデュラム》カードを手札に加える！俺はEM ペンデュラム・マジシャンを選択！そしてレフト・Pゾーンにペンデュラム・マジシャンをセッティング！これでLv3から5までのモンスターが同時に召喚可能！揺れる！魂のペンデュラム！天空に描けた光のアーク！ペンデュラム召喚！現れる！俺のモンスター達！

ギタートルとペンデュラム・マジシャンの間に現れた大きな振り子、その振り子の軌跡によって円が描かれて、その中から2枚のモンスターが現れる。

「エクストラデッキから紫毒の魔術師！手札から調弦の魔術師を特殊召喚！」

紫毒の魔術師 攻1200

調弦の魔術師 守0

「調弦の魔術師の効果発動！このカードを手札からペンデュラム召喚した場合、デッキから《魔術師》Pモンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！黒牙の魔術師を特殊召喚！」

黒牙の魔術師 守800

「Lv4の調弦の魔術師と黒牙の魔術師でオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 Ⅱ ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！星刻の魔術師！」

星刻の魔術師 攻2400

調弦の魔術師と黒牙の魔術師がブラックホールに吸い込まれていき、爆発が起きて星刻の魔術師がフィールドに現れる。

「星刻の魔術師の効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、デツキから闇属性・魔法使い族モンスター1体を手札に加える！」

星刻の魔術師 OVR 2↓1

「俺はEM ドクロバット・ジョーカーを手札に加えて、そのまま召喚！」

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

「ドクロバット・ジョーカーは召喚成功時、デツキから《EM》、《オッドアイズ》、《魔術師》モンスターのいずれか1枚を手札に加える！俺は慧眼の魔術師を手札に加える！バトル！紫毒の魔術師でダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！罨カード、破壊剣士の揺籃！デツキから破壊剣の追憶と破壊剣の使い手バスター・ブレイダーを墓地に送り、エクストラデツキからこのモンスターを特殊召喚する！」

真二さんが発動した一枚の罨カードにより、デツキの破壊剣の追憶と破壊剣の使い手バスター・ブレイダーの2枚のカードが墓地に送られて、エクストラデツキが光り輝く。

「破戒を行いし蛮竜よ、今ここに姿を見せ、真の力を指し示せ！降誕せよ！破戒蛮竜ーバスター・ドラゴン！」

破戒蛮竜ーバスター・ドラゴン 守2800

エクストラデッキから現れたバスター・ドラゴンは守備表示で特殊召喚され、真二さんを守るように前に居座る。

「この効果で特殊召喚されたこのモンスターは次のエンドフェイズに破壊されてしまう。けど、守備力2800のモンスターは突破できないでしょ？」

うーん困った・・・あいつとあの融合体並ぶとめんどくさいしな・・・

「そしてこのモンスターがフィールドにいる限り、相手フィールドのモンスターは全てドラゴン族になる！」

「バトルフェイズは終了、メインフェイズ2、Lv4のドクロバット・ジョーカーと紫毒の魔術師でオーバーレイ！」

☆4 × ☆4 || ★4

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシース召喚！No, 41 泥眠魔獣バグースカ！」

No, 41 泥眠魔獣バグースカ 守2000

フィールドのドクロバット・ジョーカーと紫毒の魔術師がブラックホールに吸い込ま



れて、今度はバグースカが現れる。バグースカは欠伸をして、フィールドに泡みみたいなものを飛ばし、星刻の魔術師を守備表示にしてフィールドの全てのモンスターがウトウトとし始めた。

星刻の魔術師 攻2400↓守1200

「!?バスター・ドラゴン!?どうしたんだよ!?!」

「バグースカが守備表示で存在する限り、フィールドの表側のモンスターは全て守備表示となり、効果は無効化される!」

「!?そ、そんな!?!」

「次のターンの展開なんてさせませんよ!これでターンエンド!」

遊輝 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

星刻の魔術師 守1200

No, 41 泥眠魔獣バグースカ 守2000

【魔法・罨ゾーン】

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：EM ギタートル (スケール6)

青：EM ペンデュラム・マジシャン (スケール2)

「くっ……俺のターン！ドロー！」

真二 手札 5枚

「(……あのバグースカをどうにかしないと) 魔法カード、天使の施し！カードを3枚ドロローして、その後2枚捨てる！」

「でったあああ!!!ぶっ壊れカード!!!何でそんなカードこの世界では使えるんですかね!?ほら龍可もアリアも驚愕しているよ！」

「(……よし!) 速攻魔法、月の書！バグースカを裏側守備表示に変更する！」

「くっ……通す」

月の書の効果によってバグースカは裏守備に変わってしまった。

「破戒蛮竜ーバスター・ドラゴンの効果発動！自分フィールドにバスター・ブレイダーがない場合、1ターンに1度、墓地のバスター・ブレイダーを特殊召喚を特殊召喚する！墓地の破壊剣の使い手バスター・ブレイダーはフィールド、墓地に存在する場合、バスター・ブレイダーとしても扱う！よってこのカードを特殊召喚する！」

破壊剣の使い手バスター・ブレイダー 攻2600

バスター・ドラゴンが飛び上がり、大きな咆哮を天空に向かって放つ。雲を切り裂き、その中からバスター・ブレイダーがフィールドに舞い降りてきた。

「バトル！破壊剣の使い手ーバスター・ブレイダーで裏側守備のバグースカに攻撃！破壊剣一閃・改！」

バスター・ブレイダーが剣を振り上げて裏側守備のモンスターに切り裂く。反転されてバグースカが破壊される。

「破壊剣の使い手ーバスター・ブレイダーの効果は使用しない！メインフェイズ2、金華猫を召喚！」

金華猫 攻100

き、金華猫!?!とんでもなく厄介なモンスターを引いていたよこんちくしょう!!

「金華猫の効果！召喚成功時、墓地のLv1のモンスター1体を特殊召喚する！チューナーモンスター、破壊剣ードラゴンバスターブレードを特殊召喚！」

破壊剣ードラゴンバスターブレード 攻400

「Lv7の破壊剣の使い手ーバスター・ブレイダーにLv1の破壊剣ードラゴンバスターブレードをチューニング！」

☆7

+

☆1

||

☆8

「破戒を行いし蛮竜よ、今ここに姿を見せ、真の力を指し示せ！シンクロ召喚！降誕せよ

！破戒蛮竜ーバスター・ドラゴン！」

2体目のバスター・ドラゴンがフィールドに守備表示で特殊召喚される。

「2体目の破戒蛮竜ーバスター・ドラゴンの効果！再び破壊剣の使い手ーバスター・ブレイダーを特殊召喚！カードを2枚伏せてターンエンド！エンドフェイズ時、破壊剣の揺籃で特殊召喚されてバスター・ドラゴンは破壊され、金華猫はスピリットモンスターのため手札に戻る！」

真二 手札 2枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

破戒蛮竜ーバスター・ドラゴン 守2800

破壊剣の使い手ーバスター・ブレイダー 攻2600

【魔法・罫ゾーン】

伏せカード 2枚

まっずいなあ・・・これで次のターンにエクストラは封じられるのか。

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 5枚

「スタンバイフェイズ時、破戒蛮竜ーバスター・ドラゴンの効果発動！相手ターンに1

度、墓地の《破壊剣》モンスターを自分フィールドの《バスター・ブレイダー》モンスターに装備する！破壊剣ードラゴンバスターブレードをバスター・ブレイダーに装備！」

バスター・ドラゴンの効果によって墓地にいたドラゴンバスターブレードがフィールドに現れて、バスター・ブレイダーに装備される。

「これで遊輝さん、貴方はエクストラデッキから特殊召喚ができません」

マジ困ったもんだよな・・・とりあえずサーチとドロローだな。

「星刻の魔術師の効果！オーバレイ・ユニットを一つ取り除いて、今度は調弦の魔術師を手札に加える！」

星刻の魔術師 OVR 1↓0

「魔法カード、天の落とし物！互いのプレイヤーは3枚ドローして、その後手札を2枚捨てる！」

遊輝 手札 8枚↓6枚 真二 手札 5枚↓3枚

・・・うん、まあ全力で行けるところまで行こうか。

「速攻魔法、揺れる眼差し！互いのPゾーンのカードを全て破壊する！」

「!?自分で自分のカードを破壊?!」

揺れる眼差しの効果で俺のPゾーンにいたギタートルとペンデュラム・マジシャンが

破壊される。

「その後、このカードは破壊した枚数によって効果を得る！1枚破壊した場合、相手に500ポイントのダメージ！」

「ぐっ!？」

真二 LP 4000↓3500

「2枚破壊した場合、デッキから好きなペンデュラムモンスターを手札に加える！俺はEM ダグ・ダガーマンを手札に加える！ライト・Pゾーンにスケール1の紫毒の魔術師をセッティング！リバースカードオープン！永続罫、時空のペンデュラムグラフ！自分フィールドの《魔術師》Pカードとフィールドのカード1枚を破壊する！俺は紫毒の魔術師と破壊剣の使い手バスター・ブレイダーを選択する！」

時空のペンデュラムグラフの効果で照準が紫毒の魔術師とバスター・ブレイダーに向けられて、レーザーが発射される。2体のモンスターは何の抵抗もできずに破壊された。

「ぐっ!？」

「さらに破壊された紫毒の魔術師の効果！相手フィールドの表側のカード1枚を破壊する！バスター・ドラゴンを破壊！」

「なっ!？」

破壊された紫毒の魔術師もバスター・ドラゴンに取り憑いて破壊、これで真二さんのモンスターは全て全滅となった。

「し、真二のあの強固な盤面を一瞬で……」

「っ、強い……」

「ライト・Pゾーンにスケール2のEM　ダグ・ダガーマンをセッティング！ダグ・ダガーマンのペンデュラム効果！このカードを発動したターンに1度だけ、墓地の《EM》モンスター1体を手札に戻す！ドクロバット・ジョーカーを手札に！レフト・Pゾーンにスケール5の慧眼の魔術師をセッティング！慧眼の魔術師のペンデュラム効果！もう片方のPゾーンに《魔術師》または《EM》が存在する場合、このカードを破壊して、デッキから《魔術師》ペンデュラムモンスターをPゾーンに置く！」

「……1つ確認よろしいですか？」

「？何でしょう？」

「そのPゾーンに置かれたペンデュラムモンスターつて永続魔法扱いで、今発動した効果はすでにフィールドで発動した扱いになるんですか？」

「……そうだけど、まさか……」

「手札の幽鬼うさぎの効果発動！フィールドのモンスター効果、またはすでに発動している永続魔法・永続罫が発動した場合、手札のこのカードを捨てることで、そのカード

を破壊する！」

「うええええい!??!?」

『出番です!!』

真二さんの手札から幽鬼うさぎが飛び出し、Pゾーンの慧眼の魔術師に取り憑いて破壊する。

「ええ……計算狂うなあ……ドクロバット・ジョーカーを召喚！効果発動！デッキから虹彩の魔術師を選択！」

さて……どうしたものか、打点は足りているんだからここは大人しく攻撃するか……  
「バトル！ドクロバット・ジョーカーでダイレクトアタック！」

「ぐううう!!!」

真二 LP 4000↓2200

「続いて星刻の魔術師でダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！罨カード、ガード・ブロック！この戦闘ダメージを0にして1枚ドロ！」

真二 手札 2枚↓3枚

ううむ……決め切れなかったか、激流葬とか警戒してやらなかったけど失敗だったか。こりゃ下手なことできないな……



「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊輝 手札 3枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

星刻の魔術師 攻2400

EM ドクロバット・ジョーカー 攻1800

【魔法・罨ゾーン】

時空のペンデュラムグラフ

伏せカード 1枚

【Pゾーン】

赤：EM ダグ・ダガーマン (スケール2)

青：なし

「俺のターン！ドロー！」

真二 手札 4枚

「(…………このターンに決めにいくつもりで行かないとダメだな) 魔法カード、強欲な壺！カードを2枚ドロー！そして墓地の破壊剣の追憶の効果！墓地のこのカードを

ゲームから除外して墓地の破壊剣の使い手・バスター・ブレイダーと召喚条件を満たしていない破戒蛮竜・バスター・ドラゴンを除く！このモンスターを融合召喚する！」

墓地に眠っていたバスター・ブレイダーとバスター・ドラゴンが融合の渦に巻き込まれる。

「融合召喚！・竜破壊の剣士・バスター・ブレイダー！」

竜破壊の剣士・バスター・ブレイダー 攻2800

2体のモンスターが巻き込まれてフィールドに現れたのは稲妻のように白く輝いた鎧を身につけ、ガラスのような刃を手にしたバスター・ブレイダーだ。

「さーらにリバー・スカード・オー・プーン！・リビング・デッドの呼び声！墓地から破戒蛮竜・バスター・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚！」

破戒蛮竜・バスター・ドラゴン 攻1200

おい、お前何度目の登場だよ。

「破戒蛮竜・バスター・ドラゴンの効果で相手のフィールド・墓地のモンスターは全てドラゴン族となり、竜破壊の剣士・バスター・ブレイダーは相手の墓地・フィールドのドラゴン族モンスター1体につき1000ポイント攻撃力が上がる！」

竜破壊の剣士・バスター・ブレイダー 攻2800↓6800

「さーらに竜破壊の剣士・バスター・ブレイダーの効果！このカードがフィールドに存在



だけは)魔法カード、弱者の贈り物!手札のLv3以下のモンスター1体をゲームから除外して2枚ドロウする!金華猫を除外して2枚ドロウ!」

真二 手札 3枚↓5枚

「・・・速攻魔法、サイクロン!時空のペンデュラムグラフを破壊する!」  
「なっ!?!」

フィールドに現れたサイクロン、俺の後ろにあつた時空のペンデュラムグラフを巻き込んで破壊する。これは・・・不味いな・・・

「カードを1枚伏せてターンエンド!」

真二 手札 3枚 LP2200

【モンスターゾーン】

竜破壊の剣士・バスター・ブレイダー 攻6800

破戒蛮竜・バスター・ドラゴン 攻1200

【魔法・罨ゾーン】

リビングデッドの呼び声 (バスター・ドラゴン)

伏せカード 1枚

「俺のターン！ドロー！」

遊輝 手札 5枚

「スタンバイフェイズ、破戒蛮竜ーバスター・ドラゴンの効果！墓地から破壊剣ードラゴンバスターブレードを竜破壊の剣士ーバスター・ブレイダーに装備！」

そうなんだよなあ・・・墓地にあればあるからなあ・・・紫毒の魔術師も2枚使ってしまったしなあ・・・前のターンは防げたけど万事休すか・・・

「・・・モンスターセット、ターンエンド」

遊輝 手札 4枚 LP 4000

【モンスターゾーン】

裏側守備モンスター 1体

【魔法・罨ゾーン】

なし

【Pゾーン】

赤：EM ダグ・ダガーマン (スケール2)

青：なし

「俺のターン！ドロー！」

真二 手札 4枚

「バトルフェイズ！竜破壊の剣士・バスター・ブレイダーで裏側守備モンスターに攻撃！」

竜破壊の剣士・バスター・ブレイダー 攻6800

裏側守備モンスター↓黒牙の魔術師 守800

バスター・ブレイダーが裏側でセットした黒牙の魔術師を斬りつけ、その超越ダメージが俺を襲う。

遊輝 LP 4000↓0

WIN 真二 LOS 遊輝

「物の見事に惨敗ね」

「事故つた上に唯一の逆転の策も尽く潰されたんだから仕方ないよ」

「やったな真二!!」

「かつこよかつたよ！」

「ありがとう……今回はデッキが上手く回ったよ」

デュエルが終わり、こつちにはアリアと龍可が、真二さんには拓磨さんと藍さんが付く。

こつちが事故でバスター・ブレイダー側が完璧な立ち回りだったからな……どうしようにも出来なかった。

「いやあ……参った参った、やつばまだまだだなあ……」

「それは俺たちもです。一歩間違えたら俺も負けてました」

「遊輝、アリアお姉さん、装置が」

龍可が俺たちの後ろにある次元装置が起動したことを教えてくれる。

「……お別れですね」

「また出会う時が来るのかな？」

「なかなか難しいだろ藍、異世界の住民だけ」

「タハハ……」

「遊輝ちゃん遊輝ちゃん、こういう時こそいつものセリフ」

「いつもってそんなに言っていないぞ、全く……はあ、また会いましょう」

「……はい！」

遊輝さんが右手を差し伸べてくれたので、俺も右手を差し出して握手をする。その後、俺たち3人は次元装置の前まで移動する。

「じゃあな！」

「お邪魔しました！またゆっくり話しましょう！」

「またね!!」

光に包まれて、手を振る真二さんたちが視界から消えていった。



# エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の物語

それは、あり得たかもしれないパラレルワールドの世界……

もし、前世で孤児院暮らしをしていたアリアが遊輝と一緒にいたら、もし二人が亡くならず転生していなかったら……

『ご覧ください!!バンドメンバーのRed SHINEが5年ぶりの凱旋公演のために日本に帰ってきました!!』

『きゃあああ!!!渡辺さ〜ん!!!』

『長谷部さ〜ん!!!』

『ファンの声援に応えよるようにメンバーでヴォーカルの奏さんは手を振ります!!Red SHINEの日本凱旋ツアーは来月から福岡のYahoo!ドームで……』

ここは世界のどこかの家……のどかな平野の中にある小さな田舎町の家、ここに住んでいるのは女性一人と女性と見間違えるような男性一人。男性はソファに寝っ転がってテレビを見て、女性はそんなことを見ている暇ないとパソコンに向かって必死に

タイプングしている。

「おうおう……すげえ人気なこと、んで、次のターゲットってこいつらなのか、アリア？」

「依頼人の情報だとねえ、依頼人の狙いは彼等が持っているフランス14世が婚約指輪として使った、当時はどうやって入手したかも分からない、レッド・ベリルと呼ばれるダイヤモンドの指輪」

「おつ、すげえ。現在相場1カラット300万超えているじゃねえか」

「後にアメリカのユタ州でしか採掘出来ないことが分かったけど、段々と採れなくなってきたから希少性が出てきたのよ」

アリアと呼ばれた女性は相変わらずテレビに目もくれずパソコンに向かって何かの作業をしていて、画面には「PASSWORD CLEAR」の文字が出た後、何かしらの設計図みたいなものが現れる。

遊輝と呼ばれた男性はテーブルの上に置かれたタブレットを手にしてレッド・ベリルについて検索、そして彼の横には漆黒の刀が3本あった。

彼等は世界に名の轟く怪盗コンビ、アリアと遊輝。

数年前、突如現れた怪盗コンビに世界は激震した。有名絵画や歴史的秘宝、世界一安全と言われるホワイトハウスや世界一強固と言われたシンガポールの銀行から数兆ド

ルとも呼ばれる大金を盗み出した。ただ盗むだけではない、地味と言われる強盗をマジックショーのように見せつけた。

やがて彼等は全世界の警察の敵となるが、一般市民にとっては架空の存在、いや、ヒーローと呼ばれるようになった。

彼等がヒーローと呼ばれる所以、それはいついかなる時も華麗に盗み出していたことだ。

そして彼等は奪ったものの内、7割以上を貧しい貧困層や大衆に寄付、果てには「気に入らなかつたから」「思っていたのと違つたから」と言う理由で持ち主、警察署に返却していた。

さらに彼等の盗み出しているのは財宝やお金だけではない。大企業や有名政治家などが隠し持っているスキヤンダルや賄賂、違法性のあるデータを盗み出し、世間に大々的に報道する。しまいにはとある国の警察組織と巨大なマフィアの裏関係も暴き、二つの組織を潰した記録まである。

彼等の華麗なる盗み、そして富裕層を潰し、貧しい人や一般市民に救いの手を述べる彼等はまさしく世界中のヒーローとなり、彼等が予告状一枚を出すだけで世界中からファンがやってくるほどだった。

「にしてもお前にしては珍しいなあ、昔はともかく、こんな安っぽい物盗る依頼なんて断

るだろう？確かに歴史的価値はあるけど」

「まあね、この前も大したことなかったけどマヤ文明に隠された財宝探したし」

「お前の口から出てくる大したことないは大抵嘘だけだな、あれだけで人間1000人くらいの一生涯を養ってもまだ余裕あるんだぜ」

「だってさ、頭使って謎解きして出てきた特大の秘宝がこゝろんな小さい小さい野菜の種類だよ!!」

「昔は食い物が貴重だったからなく、だいたいお前は周りを見ないからだろ、周りには金銀の宝石に昔の硬貨とか歴史的な骨董品とかあったつていうのに」

「遊輝ちゃんはおまんがないわね!!そんな物なんて所詮それっぽちのものよ!!」

「へいへい……で、お前はこの依頼をどう見てるんだ?」

「依頼者の偽名なんて良くあることだからね、情報屋には通してみたら、私達から化けの皮を奪われた大富豪の息子だったわよ」

「大富豪?」

「2年前、ロスのカジノを裏で仕切っていたスネラー・ブライソン、あのオーナーよ」

エリアはそう言ってパソコンを操作して一人の男の写真を映し出した。遊輝はソファから立ち上がってパソコンの前行き、パソコンに映し出された写真の男を見て深く頷いた。

「ああ、あいつか。チョロかったなアレ。簡単にパスワード解けて出てくるは出てくるは不正の数、ミサイルなんかも開発しちゃって」

「結局、有り金は全部私達が頂いて、ロス警察が捕まえちゃったからね……っしやあ!!銀行の電子パスワード解いたわよ!!活動資金活動資金♪」

「んで何だ?そのバカ息子が俺たちに復讐か?」

「そうみたいよ。あの事件、バカ息子は関わってなかったからお咎めなしになったけど資産はほぼ全部私たちが持っていったからね」

「んで、お前はこの罠をわざと乗ると」

「あつたり前よ。なんせ私達は世界最強の怪盗コンビ……盗めない物は無い、レッツド・ベリルはその次いでよ」

「するとお前の本命は?」

「フランス14世の王妃、マリー・テレーズ・ドートリツシュが愛用した世界一豪華なティーセット、クイーンズ・テッセ」

「クイーンズ・テッセ」

「そうよ、情報屋の筋によるとその息子がクイーンズ・テッセをどうしても欲しがっているみたい。そしてその鍵となるのがレッド・ベリルの指輪、というわけよ」

「OK、じゃあまたあのバカ息子から奪ってやるか」

「それじゃまず着替えようか♪」

パソコンの電源を落としたエリアは立ち上がり、クローゼットの扉を開く。そこにはたくさんのお洋服が並び、その中から黒いマントと黒い目隠しマスクを手にした。

「……相変わらずお前の感性が分からね」

「何言ってるの!? 怪盗の華といえはこのマントと黒い目隠しマスクでしょ!!」

「そんな物アニメの世界だと……」

「じゃあ遊輝ちゃんも着替えて」

「嫌だ!!! 何でわざわざ女物の服を着なくちゃいけないんだ!!!」

「だって世間のイメージは大切だよ♪ 『噂の怪盗は上品なお姉さんと頭の回転が速い妹』  
だって」

「嫌だ!!! 誰がそんなイメージを作ったんだ!!! 捏造だ!!!」

「捏造でも噂が大きくなればそれが真実になるのよ。さあ着替えて♪」

「嫌だああああ!!!」

「それじゃ……!!!」  
ミッシェル・スター  
「……作戦開始」

~~~~~


ス、新聞、ネットは一気に盛り上がり、世界中からこの怪盗コンビをみようとして Red SHINE が止まっているこのホテルに集まってきたのだ。ホテルの周りは嚴重警備な上、戦車や対弾道用ミサイル、空には4台のヘリコプターが飛び回っている。

「それで、Red SHINEの皆さんは今どうしてますか？」

「まもなく練習から帰ってきます。もちろん裏通路を使つて」

ホテルを見つめながら話しているこの二人の刑事、名を遠藤桜、氷川絢、遠藤桜は若くから出世したエリート刑事だが5年前から怪盗コンビを捕まえる専門の刑事として配属された。そしてその先輩刑事となるのが氷川絢、彼女は刑事になる前、この怪盗コンビに助けられた過去があるがそれはまた後日。

「本当に肌身離さずに持ち歩いてるんですか？」

「ええ、どうしても離したくないとのことだ」

「そうですか・・・まあ銀行や美術館の警備システムを抜け出す彼らのことです。下手に預けるより本人たちに持たせる方が良いでしょう」

「そうね、それにしても引つかかるわね・・・」

「ええ、何故こんなに時間を掛けた割には普通なのでしょうか？」

「これくらいの事ならここまで大きく予告状を出す必要がない、その上何故わざわざこんなにも間を空けるのかしら？いつもの彼等ならすぐ盗みに来るはず」

「まるで誰かの為に発表したようなもの……」

「桜、レッド・ベリルの事は調べたかしら？」

「今調べている途中です。何せ情報が少ないものですから」

「そうね……ん？」

「どうしました？」

「今あのビルから光ったように見えたけど」

「?……いえ、私には見えませんが」

「……あのビルは確かこのホテルがよく見えるんだったわね」

「ええ……ああ、すぐに車を手配します」

「お願いするわ」

「ヘックション!!」

「あつ、バレた」

「うるせえ!! いったもいったも俺のクシャミを基準に考えるな!! 第一寒いんだよこの衣

装!! (ズズ)

「鼻すすらない!!遊輝ちゃんのクシヤミは噂のクシヤミだからね。このクシヤミは……あの女刑事2組つてところかしら?」

クシヤミをして顔をしかめるピンクのフリルのスカートを履き、ピンクのフリルのYシャツにノースリーブのピンクのベストを着て黒のマントを羽織つて変装用の黒マスクを着けている遊輝、そして同じく淡いブルーの履いて、白いYシャツを着て淡いブルーのYシャツを着て白いマントを羽織つたエリア。もう一度言おう、遊輝は男だ。

二人の女刑事が見たビルの先、そこには仕事着の怪盗用の衣装に着替えたエリアと遊輝のコンビが寝そべってスコープを使って目的のお宝が眠っているホテルを見つめている。

「んで、中はどんな状況かしら?」

「お前も見てるだろ?」

「私は中の様子だけよ、遊輝ちゃんは中の電子情報でしょ?」

「パスワードは複雑、しかも五重のロックか……蟻すら通さないつもりかって、しかも不正アクセスのプログラムまで付けてやがる、さすが自称安全大国日本」

「日本の安全性は世界でも有数だからね、で、出来るの?」

「俺を誰だと思ってる?俺に解けないパスワードと斬れない物は何一つない」

「不正アクセスの侵入は？」

「そっちの方が余裕、カップラーメンにお湯入れる前に解ける」

「なら行動開始としましょう。あの女刑事たち来たわよ。遊輝ちゃんのカシヤミ便利ね」

「うるせえ!!」

二人はスコープを外して片目用のメガネ、モノクルに付け替える。フレームに着けている小さな赤いボタンを押してメガネが動き出す。

「まずは潜入ね。Red SHINEのメンバーは最上階のスイートルームに集められているから下から登っていくわよ。失敗したらエッチイ罰よ」

「骨がかかるし、上司は。パワハラにセクハラかよ」

2人は立ち上がり、マントをヒラリとはらう。その数秒後、二人の女刑事2人がこのビルの屋上にやって来た。

「……いませんね」

「いや、逃げられたわね。ここ触って」

「……暖かい。体温程度の温度がある」

「つまりここから見ていたわけね。しかもこの暖かさからついさつきよ」

「……相変わらず神出鬼没」

「急ぎましょう。既にホテルに向かっているわ」

「はい」

「まずは地下の従業員さん、ご苦勞様でありまゝす」

「……」

あのビルからホテルの地下駐車場まで来た怪盗の二人組は下で警備していた警察たちを催眠ガスで眠らせて、入り口の鍵を解除作業を始めた。

「……うっし、簡単簡単」

カチャ

「さあいくわよ……」

二人はコソコソと潜入、そのまま従業員用の階段や排気口の通路を伝って最上階へ目指し始める。

「・・・・・・・・ねえ」

「分かっているわよ・・・・・・・・あと30分」

「・・・・・・・・周りの警察官が俺たちを見て回っているけど」

「た、確か予告だと10時に」

「怖いと言わないでよ!」

d そのホテルの最上階、スイートルーム。この部屋に集められたバンドメンバーのRe
d SHINEは不安そうな表情をしていた。

「これに・・・・・・・・これにどんな秘密が隠されているのかな?」

そしてメンバーの一人である渡辺は手にしている宝石の箱を開ける。その中には彼らが予告状で盗むといったレッド・ベリルの指輪が存在した。

「・・・・・・・・これは私たちを繋げてくれた大切な物、だけど」

「ああ・・・・・・・・今はこいつは俺たちを付き纏う悪魔だ・・・・・・・・」

「あいつが・・・・・・・・あいつがいなければ・・・・・・・・」

なぜか指輪を見つめて不安そうな表情をしている5人。

・・・・・・・・カチャ!!

「な、何!?!」

「て、停電!?!」

「いや、驚かせてごめんね。今ちよくと野暮中でね、あと30秒ほど待ってくれるかしら。」

「……………パン!!」

突然の停電で5人は一斉に辺りを見渡し、何処からか声が聞こえてきた。30秒後、部屋の電気が点いた。そしてリビングには怪盗コンビがマントを持って優雅に立っていた。

「なっ!?!」

「あ、あなたたち!?!」

「は、い、世界最強と言われる怪盗コンビ、アリアさんと遊輝ちゃんの参上よ。」

「け、警察!?!警察は!?!」

「無駄無駄、日本人は働きすぎだからなく。少し休みを取ってもらった。」

「あ、あああ……………」

「じゃあそういうわけでこのレッド・ベリルの指輪、戴いていくわね。」

「……………あっ!?!いい、いつの間に!?!」

怪盗アリアの手には既にレッド・ベリルの指輪が存在していた。慌てた渡辺は自分の手元を見たが、宝石箱の中はもぬけの殻だった。

「それじゃ、少し早かったけどおさらばね。良い歌聴かせてよ。」

「……ま、待つてください!!!」

「わ、私たちを……私たちを助けてください!!」

「ん?」

「助ける?」

全ての用事が終わった二人は色々と言いたそうな5人に目もくれず立ち去ろうとしたが、突如聞こえてきたすつきよんとんな答えに二人は固まり後ろに振り返る。そこには頭を下げている5人がいた。

「あ、貴方達!!世界を股にかける泥棒なんですすよね!」

「泥棒って言い方は気に入らないわね。怪盗よ怪盗」

「わ、私たちの……私たちの背後にいる人を盗んでください!!」

「……どういうこつちや?」

訳がわからず返事をしてしまった遊輝、そしてメンバーの一人である奏が口を開けた。

「そ、その宝石の指輪はこのバンドを結成したとき、みんなでなければなしのお金を払って骨董市で買った、私たちの絆の宝石です。まともに売れずに、努力してもお客さんは目にくれず、明日も見えない日々を送っていた私たちにとって、その宝石の輝きはどれよりも輝いて見えました」

「私たちはヴォーカルの渡辺が右手の人差し指につけてもらいました。『いつか必ず、この宝石のように輝いて、右手の人差し指を高く突き上げる』と」

「その宝石が今ぐらいの価値をついたのはそれから1ヶ月後でした……そして同時に……奴が、あいつがやってきた」

「あいつ?」

「ブライソン Jr……あなた達がかつて暴露した大富豪の息子です」

「何?」

「そいつはいきなり『俺とプロモーション契約を結んでもらう』とか言い出した。こつちの意見も聞かずに」

「だけどそこから生活は一変した。売れなかった曲が突然売れ始めた。それも数万程度じゃない、数百万程度に……」

「信じられなかった……今までの俺たちの努力はなんだったのかと……」

「それじゃずいぶん幸せな生活を送れたじゃない」

「そんな事はない……待っていたのは地獄の日々だった……毎日毎日缶詰の毎日、新曲を毎日作らせて、失敗した時は暴力も振るわれて」

「それだけじゃねえ!!!あいつ、メンバーの身体を台無しにしてきやがった!!俺がその事に怒って殴り込みをかけたら銃で足をやりやがって……」

「私たちの意見なんて聞いてもらえなかった!! 私たちの作りたいた音楽を!! 私たちの奏でたい音楽をあいつは全部無茶苦茶にしやがった!!」

「それだけじゃない．．．あいつは3ヶ月前、私たちの大切にしているこの宝石を寄越せと言ってきた。それだけは出来ないと思つたら『誰のために売れたと思つている』つて．．．．．」

「私たちはもう．．．引き返せないところまで戻つてしまった．．．．．だけどその指輪だけは．．．．．どうしても譲れなかつた」

「あの男は執拗に指輪を迫ってきた．．．．．もうダメだと思つていた時にあなた達が現れた．．．．．」

「あなた達がこの指輪を盗みに来る．．．不安と同時に安心感が生まれた。もしかしたらあの男の魔の手から離れられるかもしれないって．．．．．」

「あなた達に指輪を奪われて決心したわ．．．．．お願い!! 私たちを助けて!!」

「もう懲り懲りなの．．．．．あの男が背後で操つているのは．．．．．」

「俺たちは疲れているんだ．．．．．暫くは休みたい」

「お金は幾らでも払う．．．．．私たちの全財産をつぎ込んでもいい。だから．．．．．だからあの男を私たちから盗んで!!」

5人の思いを聞いた2人、その内遊輝はマスクをグイッとあげて5人に向かった。

「なるほどな……. だけどそれは出来ねえ相談だ。俺たちは怪盗、盗むのはモノだ。人を誘拐するポリシーは持たない」

「そ、そんな」その代わり……. 「!?」

今度は遊輝の横にアリアが立ち、遊輝の肩を持つ。

「その代わり、その男の裏情報を盗んできてあげるわよ」

「!?ほ、ほんとですか!?!」

「安心して、私たちは世界最強の怪盗コンビよ、私たちに盗めない物はないわ」

「じゃ、じゃあ…….」

5人はお互いの顔を見合わせた。アリアと遊輝は窓ガラス付近まで歩き、5人の方に振り向いて、アリアは右手を突き出してレッド・ベリルを見せつける。

「このレッド・ベリルの指輪もクイーンズ・テッセも貴方達を後ろから操る人の情報もぜんぶ、私たちが盗んであげるわ♪」

アリアのその一言、その一言を聞いた5人はお互いの顔を見て、膝をつき、頭を下げる。

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

「任せてちょうだい、だから今はゆっくりとお休み…….」

そう言つてアリアは左手に持っていた催眠ガス入りの手榴弾を5人の目の前に投げ

る。煙が部屋に充満して5人はバタバタと倒れていき、眠っていった。

一方、アリアと遊輝は屋上まで登り、最後の大詰めの準備をしていた。

「お前、全部分かってて早めに盗んだんだろ？やけに急かすと思ったら」

「Red SHINEは突然売れたからね。裏の存在も調べるわよ。でも、それは5人の大切な幸せを奪っていた……。それじゃ遊輝ちゃん、今年最大のショー、皆様の前で見せてあげましょう」

「ああ……俺たちの真骨頂を披露してやるぜ」

『ギャギャギャギャ……』

『おい、そろそろ10時だよな……』

『あと2分よ……』

『二人は来るのかな……』

『桜!!状況は!?!』

「ダメです!!最上階から連絡がありません!!」

一方その頃、地上では騒ぎが段々と大きくなっていった。約束の時間まであと少しとなり、野次馬達は早く怪盗コンビが出てくることを願ひ、警察達は一向に連絡がないホテル班に苛立ちを募らせていた。

「ひ、氷川刑事!! 地下駐車場の班、裏通路の班全員が眠らされて縛られています!!」
「な、何だと!?!」

「不味い……あと3秒……!!」

「……カシヤツ!!!」

『オオオオオ!!!』

『来たぞ!!!』

ホテルの屋上、その角にヘリコプターがライトを当てる。そこには膝を建物の角に立てて構える怪盗アリアと横にグライダーを持った怪盗遊輝の二人組みがいた。

「今晩は日本の皆さん、元氣にお過ごしですか?」

「約束通り、午後10時、確かにレッド・ベリルの指輪を頂戴しました♪」

『ワアアアア!!!』

怪盗アリアの右手には月光に照らされて赤く光る。双眼鏡を手にしているものは怪盗アリアの右手を見て、レッド・ベリルの指輪が輝いているのを確認、瞬く間に観客からは大喝采が巻き起こった。

「な、何だど!? 10時になってから1秒も経たないうちに盗み出すだど!? 一体どんな手を使って!？」

「ひ、氷川さん!! そんなこと言っている場合じゃないです!! あの二人直ぐに逃げ出しますよ!!」

「本日はせっかくお集まりいただいたのに、非常に短いショーとなつて誠に申し訳ありません」

「その為、皆様には1ヶ月以内に何かしらのサプライズをすることを約束いたしましたしよ
う」

『ワアアアアア!!!』

「では、さらば!」

「ひ、氷川さん!! 二人がグライダーで」

「へり班!!! 直ぐに追跡せよ!!!」

氷川刑事の指示で上空に待機して二人を見つめていた4台のへり、そんなこと御構い無しに怪盗遊輝はグライダーの角度を調整してアリアを手にして空へと飛んでいった。直ぐに4台のへりが二人を追いかけ始める。

「遊輝ちゃん!!!」

「舵は任せたぞ!! 俺に斬れないものは・・・何一つない!!」

怪盗アリアと遊輝は空中で華麗にポジションを変え、アリアが舵席に移動する。その間に遊輝はグライダーの羽の上に移動、直ぐにジャンプして手前のヘリコプターの上に立つ。

「なっ!? き、貴様!?!」

「あばよ、下にはクッション敷いてあるから死にやせんよ!!」

怪盗遊輝の手には2本の刀があり、それを目に見えぬ速さで斬りつける。すぐさま遊輝は次のヘリコプターへと飛び移り、最初のヘリコプターは空中で解体されて操縦士諸々、下に落ちていった。

『ワアアアアア!!』

「おくらよ!! 仲間が待ってるぜ!!」

1台目のヘリコプターが無残にも斬り付けられて解体させられる様子を見た2台目の操縦士達、だが直ぐに遊輝が斬りつけて自分たちも同じ目にあう。同様に3台目、4台目も斬りつけていき、遊輝は大きくジャンプしてアリアの左手に手にした。

地上でパトカーに乗って追いかけていた氷川刑事と桜刑事だったがそこから先は海へととなり、二人は遠く海の彼方へ消えていく。

「じゃあね〜氷川刑事に桜刑事〜、私たち直ぐに別の仕事があるから〜」

「ま、待ちなさい!!」

そのまま二人は海の地平線へと消えていった。

「く、くっそ……. またしても、またしても逃してしまった!!」

「ひ、氷川さん!! 見つけました!! レッド・ベリルの指輪の謎!!」

「何!?!」

氷川刑事は桜刑事が持ってきた資料を奪い取るように取り、資料を簡単に見る。

「こ、これは……. まさか本当に」

~~~~~

「うくん……. 対して輝いているように見えないわね」

「お前の目はくすんでいるのか? ちゃんと光が透き通っているだろ?」

「頭悪いね、遊輝ちゃん。この宝石の中が透き通ってないのよ。年代物だから若干ヒビが入っちゃってるわね」

アジトに戻ったアリアと遊輝、遊輝はパソコンの前に座り、カタカタとキーボードを鳴らす。アリアは盗んだ宝石を拡大鏡で見つめ、宝石の中身を調べていた。

「それでどうなんだ?」

「宝石自体は本物ね。中に細工とか仕込まれていないわ。となるとこの宝石は鍵となる

可能性が高いわね」

「ふうん」

「そつちは？」

「もうすぐだ……おつ、行けたかなあ」

遊輝がEnterキーを押す。ダウンロードの読み込み時間とパーセントが画面に現れて100%になった瞬間、画面には大量に保管されていたPDFの書類が次々と画面に映し出された。エリアはソファから立ち上がり、遊輝と一緒にパソコンの画面を見る。

「上手いこといったぞ。やっぱ蛙の子は蛙だな、色んなことに手を出してやがる。ご丁寧に署名と写真付き」

「暴行に恐喝、賄賂と性行為、おまけに薬物の売買までライブの裏でしちゃってるよ。遊輝ちゃん」

「大丈夫、直ぐにダウンロードした」

「さつすが！」

「しかし肝心の雇用契約書が見つからないなあ……あの5人が書面でやったって言ってたけど、パソコンには保存してなかったか」

「まあそれも盗み出せば良いでしょ、蛙の子は蛙ならどうせ金庫の中に隠しているわ。」



時期に向こうからお誘いが来るわよ」

・・・ピロン

次々と映し出されるPDFの途中、パソコンから音が聞こえてきた。遊輝はPDFの解凍作業を一度中断し、メールボックスを開いた。

「おつ、噂をすれば、どれどれ・・・」

『「苦労だった、次はフランスで王が恨んだ城で会おう」これは・・・」

「王つてことはこの宝石の持ち主つてことか？ルイ14世が恨んだ城？あいつ宮殿暮らしで城なんか興味持たねえんじゃないかね？」

「馬鹿だねく遊輝ちゃん。ルイ14世が生きていた時代はまだ戦争が起きていた中世ヨーロッパ史、フランスも領土拡大中の戦争を続け、まだまだ城がその国の象徴だった時よ」

「でもよ、ルイ14世は太陽王つて言われたくらいだろ？そんな奴が嫉妬するような城なんてあるか？」

「あるわ、ヨーロッパ史、特にこのルイ14世のことを深く掘り下げないと出てこないマインナーな城が・・・さて、色々と準備してから行きましょう」

「そうだな。備品を買い揃えるか」

「それとこのアジトもそろそろおさらばね」

「えっ?」

『怪盗アリアと遊輝!!!お前たちはすでに包囲されている!!!素直に捕まってもらわよ!!!』

遊輝のすつきよんとんな返事に答えるように外から拡張器を使って声を張り上げてきた。遊輝が少し驚いた表情をして外をチラツと見ると現地の警察のパトカーに囲まれて、先導には氷川刑事と桜刑事がいた。

「……何故ばれた?」

「さあ? 時期的にはもうそろそろかな〜と思ったけど。やっぱりズボラかまして銀行強盗はバレやすいかな〜?」

「ええ〜……お前新しい家探すの大変だぞ」

「大丈夫大丈夫、手伝ってあげるから。それじゃ……Go!」

会話を挟んでいるうちに二人は最低限の荷物だけを手にして、アリアが何かを投げると家中から白い煙に覆われて、それは外にいる警察官をも覆った。

「え、煙幕!」

「上は!?!後ろは!?!」

「後ろからは出てないです!!」

「う、上に登った形跡もないです!!」

．．．．．ブオオオン  
!!!!!!!  
「なっ!?!」

煙が舞って見えない中、何かしらのエンジンの爆音が聞こえ、家の中から1台の大型バイクが飛び出し、パトカーの上をジャンプして乗り越えた。

「に、逃げた!!追いかけるわよ!!」

「は、はい!!」

「行け行け遊輝ちゃん!!!!そのままフランスまでドライブよ!!!!」

「その前に後ろにいる鼠を払いたいもんだな!!」

ピーポーピーポーピーポー!!!

家を捨ててバイクで逃走したアリアと遊輝、警察に追われているのに日常茶飯事みたいなことで何の緊張感も得ていない。それくらい二人は警察に追われることに慣れてしまったのだ、そして、警察への対処法も．．．．

「じゃあアリア」

「OK、今度は私の番ね!! 『アイスコフィン』」

二人乗りの後ろに座っていたエリアは右手を口の前に持つてきて、何かをゴソゴソと呟く。すると二人が乗っているバイクの後ろから道がカチコチに凍ってしまった。

キューーーー!!!ドカン!!!キューーーー!!!

全速力で二人を追いかけていたパトカーは突然地面が凍ったことに対応出来ず、タイヤがスリップしてしまい、そのまま横転、追突を繰り返してあつという間にパトカーのスクラップができてしまった。それを見たエリアは満面の笑みを浮かべる。

「こちら、タネも仕掛けもないマジックでございま〜す♪」

「そりゃそうだろうな、お前は本物の魔法使いなんだから」

「遊輝ちゃんもいい加減魔法習おうよ〜」

「生憎だがそこまで人外になろうとは思ってないんでね!」

「つまらないわね〜、じゃあこのままフランスへGo!!」

「おう!!」

遊輝がアクセルをさらに回し、バイクはさらにスピードを上げて道を駆け抜けていく。二人は目指すゴールはまだまだ先だ。

．．．コツ、コツ、コツ

夜のフランス、パリから百数十キロ離れたところにあるヴォー・ル・ヴィコント城。かつてこの城はかつてルイ14世の側近の一人、ニコラ・フーケによって建てられた城、あまりの豪華さにルイ14世から嫉妬を買い、嫌がらせを受けたとも言われている。

そんな城の近くに一人の男が足を鳴らしながら待つていた。彼は待ち合わせをしていた。その為にこの暗い時間、不気味な場所で待機していた。

．．．．．

「待たせたな」

「．．．．．静かなる岩」

「川の流れ、そして海へと」

「間違いないな」

そんな男の前にマントを羽織って全身が黒づくめの男が現れる。待つていた男は何かを呟き、男はそれに応えるように返答した。約束の合言葉が帰ってきたので男はニヤ

りと笑った。

「例のブツは？」

「ご覧の通り……」

マントの男は懐を漁り、宝石箱を取り出して開ける。その中にはこの前盗んだレット・ベリルの指輪があつた。男は宝石箱から指輪だけを取り出し、手に取って高らかに笑う。

「フ、フハハハハ!!!よくやったぞ!!!やはりお前たちは最高の泥棒だ!!!これでこの地図と合わせてクイーンズ・テッセを「おりやつ!!」なっ!？」

高らかに笑つてポケットから取り出した一枚の紙、男は両手を築き上げて喜んでいたがその両手にあるものはどこから飛んできたのか、ロープによつて結ばれて男の手から離れてしまった。

「な、ど、どういふ事だ貴様!？」

「お前言ったよな……最高の泥棒だつて……だから俺たちはお前からそいつらを盗んだ、それだけだ」

「き、貴様!!!」

バーン!!!

男は懐から銃を取り出してマントの男に発砲、銃弾は男に当たつたがその直後爆発し

てしまう。煙が晴れるとそこには誰もいなかった。

「な、何!？」

「残念だったな、本物はこっちだよ」

「!?き、貴様ら!!」

男は声が出た方に振り向く。そこで目にしたのは大きな木の上に登っていた白いマントに白いYシャツとピンクのベストを着て、白いマスクを持った怪盗アリアと黒いマントに黒い中世貴族のような服に黒ズボンの上からスカートのように羽を腰に巻き、黒マスクを手にした怪盗遊輝だった。

「いや、本当単純な罠に引っかかってくれて助かるわ、ブライソンJr」

「なっ!?な、なぜ俺の名前を!？」

「怪盗として依頼人を調べるのは当たり前じゃない♪もちろん、あなたの裏情報も……」

そう言ってアリアはUSBと1枚の紙を取り出した。男はそれを暗い中じつと見て、顔を真っ青にした。

「そ、そそそそそ、それは!？」

「そう、あなたが違法に結んだRed SHINEの労働契約書、そしてこのUSBにはあなたの悪事がわんさかと乗っているわ。いや、あなたの家に侵入するの大変だったし、金庫は無駄に頑丈で手間取ったわ」

「まつ、あれくらい俺たちには余裕だったけど」

「き、貴様ら!! そいつを返してもらおうぞ!!」

「別に構わんけど、もう世界中にばら撒いたぞ」

「なっ!?!」

「今頃あんたの家にはマスメディアと警察官による家宅捜査がはいつているんじゃないかしらね〜? ほら、ネットニュースにも乗っているわよ」

「おお、すげえ反響だな。トップニュースの項目全てしめたぞ。よかつたなお前、有名人になれたじゃねえか」

「き、貴様ら．．．私の父親だけじゃなく私までもコケにするとは．．．許さんぞ!!」

バン!!バン!!

頭に血が上った男は手にしていた銃を乱射する。しかし二人は余裕の表情で飛び上がり、弾を避ける。

バン!!バン!!

「クソツ!!クソツ!!」

バン!!バン!!カチャツ、カチャツ、

「ちっ!?!」



男はそのまま撃ちまくったが銃が弾切れを起こして銃を投げ捨てた。その間にアリアが男の目の前までやってきた。

「ひっ!?!」

「人を不幸にした罪は重<sup>い</sup>わよ……『ギルティ・クラウン』」

「う、うわあああああ!!!」

アリアは男の顔の近く<sup>で</sup>で魔法の呪文を詠唱、すると男はいきなり騒ぎ出して頭を押さえ始めた。

「う、うわあああああ!!!あ、悪魔が!?悪魔がああああ!!!!!!」

「遊輝ちゃん!!!」

「俺に解けないパスワードと斬れない物は……何一つない!!!」

ズバツ!!!

男が狼狽えている間に遊輝は刀を二つ取り出し、円状に太刀を描いて男に向かつて走り、斬りつける。最後に刀を鞘に収めると、男の突然静かになり、バタツと倒れてしまった。

「さて、こいつはもうすぐ来る警察官に引き渡すとして、私達は仕事を続けましょう」  
「さて、このお城の何処に目的のものがあるかな」

二人は何事もなかったようにして、アリアはレッド・ベリルと指輪と男が持っていた

古い地図をポケットから取り出して城の中に入っていった。そして二人がお城に入つてすぐにパトカーのサイレンの音が響き渡る。

「……ピーポーピーポーピーポー!!!」

パトカーは気絶した男の周りを囲み、1人の警察官がパトカーから降りて男の様子を確認する。その後、桜刑事と氷川刑事がパトカーから降りてきた。

「氷川刑事!! ブライソン Jr を見つけました!! どうやら気絶しているようです!!」

「……これは」

「え、ええ……昏睡状態に近い状態。この状態はあの二人に嵌められた容疑者全員と同じ症状です」

「となるとあのお宝はここに……するとアリアと遊輝も」

「私達2人で行きましょう。みんな!! このお城を取り囲んで!! アリアと遊輝は間違いなくこのお城にいる!! 絶対に取り逃がしてはダメよ!!」

『はっ!!!』

コツ、コツ、コツ、コツ……

「怖ええ……」

「相変わらずビビりね、これくらいどうってことないでしょ!! だらしのない少女怪盗さん!!」

「うるせえ!! 怖いもんは怖いんだよ!! それと少女怪盗とか言うな!!」

「もうすぐよ……ここね」

白の奥深くまで進んだアリアと遊輝は地図で目印が付いた部屋に入った。古い城で管理されているので物などはあまり置かれてなく、本棚やテーブルぐらいしかない

「ここは……普通の部屋か？」

「うくん、ちよつと違うわね。客を招き入れる部屋だから少し豪華なはずだけど、塗装が剥げちやつてるわね」

「さて……何処にヒントがあるかな？」

「地図的には……この辺だけ……うん？ テーブルのこれ……」

アリアはテーブルの上に置かれていた置物を一つ手にした。いや、置物のように見えた四角い物体だった。

「……これ、ここに穴があるわね」

「じゃあそこに……」

「そうね、それと多分地図の場所は……」

アリアはレッド・ベリルの指輪を穴の中に嵌めて、本棚の方に向かう。少し様子を見て、不自然な隙間を見つけ、その隙間に先ほどの置物を入れて時計回りに90度回す。

・・・ゴゴゴゴ

「おつ、動いた動いた」

「こんなのアリアさんにとつては朝飯前よ♪」

壁の仕掛けが動き、壁が後ろに弾いた後に横にスライドする。その壁の向こうには戸棚が隠れてあり、その中にティーセットが飾られていた。

「ほえ、こんなに種類あるのか。これは驚きだ」

「クイーンズ・テッセは一つのポットに数種類のティーカップ、ソーサーが付けられていた記録が残っているのよ。お客に合わせてティーカップとソーサーは変えていたけどこの大きなポットだけはこれ一つで使っていたのよ」

「へえ、しかしこれどうやって持ち運ぶんだ？ちと数が多すぎるだろう？」

「心配しなくても大丈夫♪」

そう言つてアリアは少し大きめのアタッシュケースを2つ取り出して中を開ける。その中はクッションが敷いてあった。

「じゃあこれに入れて・・・・・・OKOK」

「よつと・・・・・・食器は重いな」

「じゃあ帰りましょ「動くな!!」……へえ、すり足上手くなったわね、刑事さんたち」

「……全く気づかなかったわ」

全てのティーセットを入れ終えた段階でアリアと遊輝は脱出を図ろうとしたが部屋の扉の方から声が聞こえ、振り向くと氷川刑事も桜刑事が二人の頭に銃を構えてこちらを見ている。

「御託はいいからそのアタツシユケースを置きなさい」

「それと、あなた達が持っている武器も全て出しなさい」

「武器なんて物騒な物なんか持つてねえぞ」

「嘘つくのはやめなさい。あなた達のことは調べ上げています。アリアさん、あなたは銃と杖をこちらに差し出しなさい」

「遊輝さん、あなたは日本刀3本です」

「h u r r ……流石に長い付き合いだけあるわね」

アリアと遊輝は前に振り向いてアタツシユケースを置き、懐から銃や杖、そして3本の刀を手にして前に突き出す。刑事たちは銃を突きつけたまま、2人から武器を奪い取った。

「2人とも、後ろ向いて両腕を回しなさい。手錠をかけるわよ」

「大人しくしてなさい」

「はいはい」

アリアと遊輝は大人しく後ろに振り向いて両手を後ろの背中の方で組む。桜刑事と水川刑事は手錠を取り出して二人に手錠をかけ、腰縄をかける。

「ようやく捕まえたわよ・・・長かったわ」

「本当に捕まえたかしら？これからまた長くなるかもよ」

「負け惜しみ？そんなこと言つてないで付いて来なさい」

「へいへい・・・んんん鬱陶しいなあ。この縄外してくれよ。歩き辛えよ」

「ダメです。あなた達は手錠すり抜けの名人ですしいつ逃げ出すか分かりませんから」

「きつちいこと言うなあ、お前らは鬼かよ」

刑事たちはアリアと遊輝の頭に拳銃を突きつけ腰縄を持って二人を部屋から連れ出し、外へと誘導させる。

「いやくまさか忍び足身につけられるとは思わなかったわよ、お宝に夢中で全然気づかなかったわ」

「本当、危機センサーが無反応だったな」

「うるさいです。お喋りなら牢屋の中でしてください」

「無愛想だなく、別に話すことくらい許してくださいよ。どうせこの後暇なんだから」

「……………何故、泥棒を続けるのですか？」

「ひ、氷川さん？」

ペチャクチャと話し続けるアリアと遊輝に桜刑事は黙るように話す。しかし、一向に話が終わる様子がなく、さらに氷川刑事が話を始めてしまった。

「ん？怪盗を続ける理由？そうね……………私たちのプライドとかかしらね」

「そうかもなく。俺たち2人、孤児院育ちで大したことも出来なかったけど、ガキの頃からこう言うことが得意だったし」

「……………悪いことしている自覚なんて無かったのですか？」

「自覚？そんな物感じなかったわよ。最初はそうしないと生きていけなかったし」

「それにこれを仕事として続けたら誇りとか名誉とか手に入れちゃったからな。俺たちも満足しているし、この生活は楽しい」

「……………私はね、貴方達二人に助けられたのよ」

「ん？」

「へっ？」

突然訳の分からない事を言われて立ち止まり、後ろを振り向いてしまうアリアと遊輝。しかし隣にいる桜刑事が拳銃を突きつけて目で「早く行け」と訴えてきたので二人はそのまま前を向いて歩き出す。

「私の家はシングルマザーで、すごい貧乏だった。母が体を壊しながらも私を高校に入學させてくれたけど、高校の授業料なんて払えるか払えないかの状況だった。だから私もバイトはした。けれど、授業料に手一杯で自分の食料とか文房具とか買えない日々、友達の色とりどりのお弁当と沢山の文房具を買っていたけど私には出来なかった。一度、文房具屋の前で立ち止まり、万引きしようかと頭によぎったわ」

「すれば良いじゃない」

「それでも食料とか文房具は盗もうと思わなかった。常々母から『悪いことだけは絶対にしないで』って言われて来たから。私も捕まりたくなかったし、こんな事して物を入れたら罪悪感しか残らないと思ったからやらなかった。でもそんな時、家に戻って来た母が涙を流して私にこう言ったわ。『今まで苦労をかけてごめんね、でもこれからは普通の暮らしができるようになるから』って」

「ひ、氷川さん？それはどういう意味でしょうか？」

「……私の家の前に大量のお金があった。それだけじゃない、私たちの近所にもお金が置かれていた。目撃情報もあって確信的な情報が町中に広まったわ。『怪盗エリアと遊輝がこの街にお金を恵んでくれた』って」

「覚えてないわね、。どんだけ世界中に寄付したのか、1000回超えるあたりで数えるのやめちゃったわ。遊輝ちゃんは？」



「俺に聞かなくても分かるだろ、そんなこと一々覚えてやしない」

「……私の心は葛藤したわ、確かに私の家はそのおかげで普通の暮らしを得ることが出来、私は高校を卒業してこうやって刑事の道に進むことが出来た。だけどそのお金は盗まれたお金だという事実に変わりはない。母はこれからの生活が楽になると延々と泣いていたが、そのお金は悪い人たちが盗んだお金だと分かっていたはずなのにそれでもそのお金に手を付けた」

「……別に良いんじゃない？ 私たちはね、さつきも言っただけと孤児院暮らしで貧乏生活をしてきた。ろくに食事なんか取れずに野菜すら贅沢品だったわ」

「あんな経験は俺たち二人だけで充分だ。俺たちは勉強すらろくにさせてもらえなかった。だから俺たちは怪盗になって盗んだお金を貧しい人たちや普通の人たちに寄付しまくった。俺たちのような苦しい経験をこれから先の子供達には絶対にさせない」

「だから私たちは怪盗という職業にプライドと誇りを持ってやっているのよ」

「……なるほど、それがあなた達の答えですか。では私も言わせてもらいます。私はあなた達の事を命の恩人だとは思っています。ですが、あなた達の行いを許すわけには行きません。私の正義があなた達を必ず裁きます」

「へえ、言ってくれるじゃない。だけどそれはいつになるかね……」

「……!? なっ!？」

「よっと、ああ、肩凝った」

話に夢中になっていた桜刑事と氷川刑事はいつのまにか二人の手首から手錠がなくなっていて、縄から抜け出していることに気がついた。アリアと遊輝は二人の刑事から距離を取り、肩を回したり、手首を回したりする。

「い、いつの間に!?!」

「私たち、手錠されてもいいように色々仕込んであるんでね〜♪」

「この（ガチャ）!?!」

「その手錠と縄は返しておくんで二人仲良くランデブーを過ごすんだな」

アリアと遊輝を縛っていた手錠はいつの間にか二人の刑事の両手を交差するように付けられていて、縄で縛られていた。二人が持っていた拳銃や刀等はアリアと遊輝が奪い返していた。

「じゃあ刑事さん、いいお話ありがとう、またね〜♪」

「ま、待ちなさい!!」

アリアと遊輝はそのまま手を振り、アタッシュケースを置いた部屋へと戻る。刑事たちも二人を追いかけようとするが手錠をかけられてしまい、うまく走れなかった。

「く、くそ……」

「お、覚えていなさい……必ず捕まえてやるから!!」

~~~~~

「んんん!!美味しい!!やっぱインドのダーズリンは別格ね!!」

「……お前の価値観ほんと良くわかんねえわ。クイーンズ・テッセを何のために盗ったと思えば紅茶を飲むだけに……」

「あつたりまえじゃない!!これはこのためにあるんだからね!!」

「ティーセットなんかそこら辺にあるんだからそれで飲めば良いんだろ」

「何言ってるのよ!!これで飲むから美味しいのよ!!」

世界のどこか、海が見える高級住宅街、新しいアジトを手に入れたアリアと遊輝は今
はベランダに出てティータイムの時間をしている。

「それより遊輝ちゃん、あれは返したの?」

「ああ、ちゃんと本人達の前で返してきたさ。みんな泣きながら喜んでいたよ」
「良かったわね、これで心置きなく自分たちの音楽を奏でられるわよ」

二人は机の上に置かれたタブレットを見る。そこには楽しそうな表情をしている
Red SHINEのメンバーの写真が撮られていた。

あの後、部屋に戻った二人はレッド・ベリルの指輪も戻し、遊輝が単身、Red S

H I N E に指輪を返しにきた。「この指輪のおかげでお宝が手に入った、俺たちはこの指輪いらないから返してやる」と言い、レッド・ベリルの指輪を返したのだ。

「5人の様子はどうだった？」

「写真の通り、凄いい晴れ晴れとしていたよ。日本でのドームツアーが終わったらしばらくは休みみたいってさ」

「3年近く休まずに作らされてきたからね、どこかで休息は必要よね」

「ドームツアーだけは意地でもやるってさ、『例えお客さんが一人しか来なくても、私たちはその一人のために自分たちの最高の音楽を奏でる』って」

「あの5人ならすぐにまた駆け上がっていくわよ」

「そうだな」

「ところでところで遊輝ちゃん、今度の耳寄りな情報なんだけどね」

「ん？何だ？」

ティーカップを置いたエリアは遊輝に耳打ちをする。それを聞いた遊輝は口元の口角を上げる。

「どう？盗みがいがあるでしょ？」

「良いねえ・・・やってやろうじゃん」

ティーカップに入った紅茶を飲み終えた二人は次の仕事のために準備を始める。

今宵、世界のどこかに眠るお宝やお金は怪盗エリアと遊輝によって盗まれるかもしれない……

「私たちに盗めないものは何一つ無いわよ♪」

「全く……無駄な時間^{ロツク}かけても全部同じなのに、俺が全部解除して斬ってやる！」

番外編 バレンタイン

遊輝 side

「おい桜、何処にいるんだ？」

「車椅子を腕で動かし、部屋の中を駆け回る。リビングとかの細かい段差は勢いとブレーキの技術を使つて乗り越えていく。」

「桜く……あつ、そう言えば奏の店に行くって言つてたな」

「リビングを1周して見当たらないと考えていたら、今朝言われたことを思い出した。確か『奏の店に行く』つて……」

「昨日病院行くから手伝つてくれつて言ったのに……しようがねえか。えつとスマフォつと……アリアも用事があつて無理つて言つてたし、奏も店だろ、響は助っ人でレミと茜は仕事、となると……」

~~~~~

「で、俺に頼んだわけか」

「悪いな、本当ならアリアか桜に頼んでるんだけど」

「気にするなよ。まだ両足完治してないんだろ？それに今日は俺も休みだったし」

俺の家に来てくれたスバルが俺に乗っている車椅子を押し、一緒に玄関を出る。これからリハビリのために病院に行かなくちゃならない。一人でいけなくもないけど、時間がどうしてもかかってしまう。なのでサポートをお願いした。

「まったく・・・桜は何で奏の店に行くんだろ・・・」

「アレじゃねえか？明日バレンタインって言っていたし」

「んあ？ああ・・・そういえばそんな時期か」

もうそんな時期なのか、早いなあ・・・それでスーパードでチョコの特売とかやっていたのか。そんな事思いつつ、エレベーターに乗って下に降りる。

「つてことはアレか？今チョコでも作っているのか？」

「そうじゃね？奏の店で」

「良いのかそんな事して、店営業中だろ」

「俺に聞かれても知るかよ。よつと、じゃあ病院まで行くぞ」

「頼むから走らないでくれよ。この状態で走られたらマジでビビるから」

そんなたわいもない会話をしつつ、俺とスバルは病院に向かう。とりあえずそうだな・・・明日はアリア辺りの付き合いが大変になりそうだ。

（翌日 放課後）

「うつす」

「お疲れ〜遊輝」

今日も授業が終わって放課後、いつもの部室に向かう。足はまだ治ってないが、手は動かせるのでギターの練習だけはしておこうと思う。こういうの1回離れたらすぐに忘れるから。

「そうそう、これ全部遊輝宛〜」

「ん・・・!? な、何だこの量!？」

レミが俺の後ろの方を指差してきたので車椅子を回転させる。そこに飛び込んできたのは大量に積み上げ・・・いや、さすがに大量ではないな。机いっぱい積み上げられた小袋の山だった。

「何コレ!?! どういう事!?!」

「それ全部遊輝のチョコ」

「いや、多すぎ!?! 何で!?! アカデミアの生徒から!?!」

「違う違う、遊輝のファンが郵送で私の会社を送ってそれを今日、アカデミアに持ってきてくれたわけ。私たちの分もあるけど遊輝が一番多かった」



「何で!? 奏とかの方が人気あるだろ!？」

「あれだよ。『早く元気な姿を見たいです』とか『一日も早く治してください』とかそういう事」

あ、ああ……励ましの言葉ね。ありがたいんだけど、俺、こんなにチョコいらな  
いぞ……

「つていうかどうやって持って帰ろう……さすがに運びきれんぞ」  
「後ろの鞆は？」

「無理、いっぱいいっぱいだし、なんならギターケース背負ってる」

「ああ、じゃあ桜ちゃん辺りに連絡したら」

「……しゃあないけどそうするか、桜に電話しよう」

ガラガラ

ブレザーのポケットからスマホを取り出して桜に電話をかける。それと同じタイ  
ミングで部室の扉が開き、スバルや響達が入ってきた。

「おっす」

「つつかれたら、今日も授業終わったよ」

「そこに皆宛にチョコ来ているから持って帰って」

「えっ!? チョコ!? マジ!？」

「あく本当だ。誰から？」

「フアンの方々から」

「へえ、ありがたいな」

「私はちよつと……」

「?どうしたの?」

「いや……昨日チョコケーキの試作をたくさん……(汗)」

ああ、そういえば試作の時期か。いつもは俺と一緒にだけどいるけど、こんな状態だから試食もいけないし。

「とりあえず各自で持ち帰ってね、手紙とか付いているのもあるから」

「よつと。リュックの中に詰め込めるかな?」

「袋持つてくるべきだったわ」

「じゃあ練習入るわよ。えつと、遊輝行ける?」

「まあ何とか感覚は戻った。ただ、下半身が不安定だから激しいスライドとかカッティングは無理」

「そんな物そんな状態で求めないわよ。基礎さえできていれば良いわ。じゃあ久しぶりに合わせてみましょうか。響、3番の新曲」

「はいはい」

荷物を置いて、奏や茜はギターをかけ、スバルはドラムの前に座り、響はシンセサイザーに立つ。そのままシンセサイザーの設定をしてBGMが流れる。そのBGM途中でギター音を入れる。

♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

「う〜ん……何かなあ……」

「ごめんストップ」

音を合わせている途中、レミがすぐにストップをかけて俺の方を見てくる。

「どうしたの遊輝、何か音迷ってるけど」

「いや〜……なんか違うな〜って、何だろう、こう……最初にやった時とこの曲のイメージが違う気が」

「アア……そう思ったら沼にハマるわよ。深い沼にハマって抜け出せなくなるわよ」  
「ええ〜……」

音合わせに感じた違和感をレミにそのまま伝えたと、沼にハマったと言われた。いや、まあ……2ヶ月近く離れていたからそう思っても仕方ない部分はあるかもしれないけど。

「けどなあ……じゃあこのモヤモヤを今取り除けるかっていうと」

「まあ良いわ、この曲はまだアルバムに入れるつもりないしお蔵入りしておくわよ。」

何か思いついたらまた教えて」

「悪い」

「じゃあ気分転換にカバーの練習でもしましょう。ほうねく……歌える?」

「まあ歌えるけど」

「桜会」

「それなら大丈夫」

「じゃあギターつと」

奏がエレキギターからアコースティックギターに持ち変える。俺もエレキギターを外してつと……

「……ごめん、アコースティックギター貸して」

「持ってきてないのね……はい」

「悪い」

お気に入りのブルーフラワーを外して茜からアコースティックギターを手に取る。軽くチューニングをして音と弦を確認する。

「……よし」

「良いわよ」

「じゃあ桜会から」

♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~♪♪♪~~~~

バン!!!

「遊輝ちゃん!!!」

「!?な、なに!?」

「ア、アリア!?ビックリした!!!」

桜会の伴奏が始まってまもなく、突如部室の扉がバンツ!!と大きく音を立てて開く。俺たちはビックリして扉の方を見るとアリアが立っていた。

「ってか何でお前ここにいるんだよ!?アカデミアの来客は許可してるんだぞ!?」

「許可なら校長から顔パスで通ったわ!私はツアースタッフですって言って!」

「平気で嘘つくな!」

「嘘じゃないもん!!私次のツアーから衣装アーティストとしてスタッフ入りするから!!」

「校長先生……」

アリアの言葉を聞いたレミは頭を抱えている。こういう奴を一人でも通すと次から次へと雪崩やのように人がやってくる(主にマスコミ)ので、レミは校長に誰にも通さないように話を通しているのだが、相手が悪かった。

「つで、何できたんだ?」

「そうそう〜！はいこれ！バレンタイン！」

アリアは鞆の中からピンク色の包装紙を取り出して俺に渡してきた。俺はそれを受け取る。

「バ、バレンタインって・・・わぎわぎここまで来て渡すものか？別に帰る時でも家でも良いじゃねえか」

「良くないよ！帰るときは遊輝ちゃん囲まれるし、家には桜ちゃんがいるから！私のチャンスはここしか無いの！」

「ここしか無いって・・・あのな、俺一応遠距離恋愛の彼女がいるんだが」

「関係ないね！私は遊輝ちゃんを振り向かすから!!じゃあね!!」

そう言ったアリアは部屋から出て行った。なんだあの嵐みたいな去り方は・・・

「もう〜ビツクリした〜」

「心臓に悪いぞ・・・ああ・・・」

「集中力切れた〜、ちよつと休もう〜」

「そうね・・・合わせは後にして個人練習にしましょうか」

レミのその掛け声で響は「やったー！」と声を出してキーボードから離れた。個人練習ねえ・・・どうせアコースティックギターかりたんだからそのまま適当に練習して何か詞でも考えるか。そう思った俺は鞆を取るため車椅子を動かす。

「よつと……ほつと」

「ところで遊輝の足つて今どんな状況？」

「ん？えつと……もう1週間くらいしたら松葉杖に変わるかな？」

「ほへへ、あんな大怪我で両足切断だったかもしれないのに、相変わらず遊輝つちの回復力は異常ね」

「これでも今回は大分参った。生命力自体が弱まったから回復するのに時間がかかってしまった」

いつもの感じで考えたら1週間〜10日ぐらいだけだなあ……まあ医者から焦らないうようにって言われて、ライブも何もないから俺自身もゆつくりしようと考えたし。

ガラガラ

「……お兄ちゃん」

「?……桜？」

鞆からノートと筆箱を取り出したタイミングで再び扉が開く音が聞こえる。そつちの方に振り向くと今度は桜が立っていた。

「どうしたんだ？」

「これ、プレゼント」

桜がトコトコとやってきて俺の膝の上に白い包装紙を置く。

「……これは？」

「バレンタインのチョコ。お姉ちゃんが『好きな男の人に愛しているという気持ちを入れて渡すもの』って言ってた」

「……はっ？えっ？」

「私にとつてお兄ちゃんは大切な人。だからチョコ渡す」

それだけを言つて桜は部屋から出て行つた。

「……」

「hu〜hu〜!!モテる男は違うね〜!!」

「遊輝を本命と思つている人が3人もいるなんて羨ましいわね〜」

「……いや、桜は絶対意味分かつてないだろ？」

「そうか〜? 案外本気かもしれないぞ〜」

後ろでからかつてくる響は置いて、俺は率直なことを言つたらスバルにそんな事を返された。

「いや、でもなく……あいつのことだからホワイトデーの時に倍返し要求されそう……」

「そんなこと言つてないで早く桜ちゃんの開けてみたら？」

「えっ? ここで？」

「良いじゃん良いじゃん! 早く中をみよう!」



レミと響に急かされる形で俺は桜から貰った白い包装紙を解く。上に結ばれた白いリボンを取り外すと中にはチョコのカップケーキが入っていた。

「へえ、桜ちゃん良いセンスしているわね。これ、奏が手伝ったの?」

「そうよ。最初はぎこちなさそうだったけど」

「良いねえ良いねえ!」

「お前は何様だよ、ん?」

カップケーキの横に白い小さな紙があつたのでそれを手に取る。チョコのケーキで少し汚れた紙を広げる。

「.....」

「何!?何書いているの遊輝っち!」

「いや.....お前らには見せねえよ」

「ええ!?何で!」

後ろから茜が覗き込みようとしたが俺はそそくさに紙を畳んでポケットに突っ込んだ。

「見せてよ」

「うるせえ!!さつさと練習に戻るぞ!!」

「お前が練習つて口にするあたり、よっほどのことが書かれいたんだろうなあ」

「うるせえスバル!!」

ニヤついた顔で俺に向かって言ってくるスバルに俺は喝を入れた。

お兄ちゃん、今までありがとう。これからもよろしく

そして……………好きです。

桜より

## エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の物語

p a

r t 2

それは、あり得たかもしれないパラレルワールドの世界……

もし、前世で孤児院暮らしをしていたアリアが遊輝と一緒にいたら、もし二人が亡くならず転生していなかったら……

ここはアメリカのネバダ州、ラスベガス、世界有数の繁華街でありカジノの街としても有名である。しかし、今の時間は深夜の4時、ネオン街で有名なこの街も街頭以外のライトは全て消えている。

そんな街のカジノ場の建物から2人、建物の外からロープを使って降りている。それぞれの両手にはパンパンに詰め込んだ布袋を持ち、首にも同じ布袋を巻いている。

……カーンカーンカーン  
!!!!

2人がロープから降りたタイミングでカジノ場から警報音が鳴り響き、サーチライトが照らし出す。そんなことを無視して二人は逃げるように走り出す。

「うっひよおお!! さすがカジノはお金の量が違うなああ!!」

「そんな事言つてないでさっさと逃げるわよ!! ほら車!!」

二人は楽しそうに話していた。そう、二人はたった今、このカジノ場から大量のお金を盗み出した強盗犯だ。警察や警備員の厳重な警戒をすり抜けて、カジノの金庫にあつたお金を全て盗つてしまったのだ。

2人はそのまま逃走用の車に乗り込んで急発進、後ろから走ってきた警察官もパトカーに乗り込んで二人を追いかけようとする。しかし、エンジンを入れたら車のボンネットが爆発したり、タイヤが外れたり、しまいには車がバラバラに解体されていた。

「アハハハハ!! バツカじゃねえの!! 全部俺が改造してやったぜ!!」

「やったね遊輝ちゃん!! 国営カジノから50億ドルだよ!! これでしばらくは休めるよ!!」

「ああ!! ここんところずつと仕事ばつかだから暫くはリフレッシュしたいな!! 何処行くこ  
うか!?!」

「ヨーロッパでゆつくりしようよ!! あそこでバカンス!!」

二人は計画が上手くいったことに笑いが止まらない様子だ、盗んだお金を使って今後

の計画を立てている。だが、そんな二人に後ろから水を差す車が1台、猛スピードで追いかけてくる。

ピーポーピーポーピーポー!!

「ん？警察？変だな、全部壊したんだけどなあ・・・」

運転席で運転していた男はルームミラー越しで後ろに迫ってくるパトカーを見る。そこに乗っていたのは2人の若い女刑事だった。

『怪盗アリアと遊輝!!! 止まりなさい!!! 今度こそ捕まえるわよ!!!』

「あゝ！誰かと思えば氷川刑事と桜刑事!! ひっさしぶり!!」

『今すぐ止まりなさい!!! 撃ちますよ!!!』

「だつてさ遊輝ちゃん」

「そんなじゃ今からレースでも始めるか!」

遊輝と呼ばれた男はミッションのギアを入れ替えてスピードを上げる。その後ろを1台のパトカーが追いかける。

彼らは怪盗アリアと遊輝、数年前に突如現れた世界を駆ける大泥棒、本人たちは泥棒と言わずに怪盗と言い張るが、実力は本物でこれまで数多くの施設や遺跡から絵画や歴史的秘宝、お金を盗み出した世界中の警察官の敵でもあり、全世界のヒーローでもある。

そんな二人を追いかける若き女刑事。運転しているのは期待の若手、遠藤桜刑事、そ

して銃を構えているのは先輩刑事、氷川絢刑事だ。

「桜ー！」

「大丈夫ですー！」

桜刑事はアクセルをさらに蒸し、アリアと遊輝の車に近づく。そして氷川刑事は身を乗り出してアリアと遊輝の車に向けて発砲する。

バーン!!バーン!!

「うつひよ〜!!!当てにきてやがる!!タイヤ当てられたら機動力負けるぞアリア」

「まっかせなさい。私も銃は鍛えているんだから、それに今日の弾は一味違うよ」

アリアは懐から銃を取り出し、弾を一発入れる。その間にも後ろのパトカーから弾の嵐が飛んでくる。そんなこと御構い無しにアリアは車のセンターボックスにあるスイッチを押し、車の天井部分が開いていった。

「オープンカーってこういう時便利よね」

オープンカーが開ききったところでアリアは椅子から立ち上がり後ろを振り向く。今、氷川刑事は弾を込めている。

「狙いは・・・タイヤ!!」

バーン!!ドーン!!

「やったああああ!!!」

アリアが構えて撃った銃は、パトカーの左前タイヤにあたり、タイヤが破裂、そのままバランスを崩してビルの中に突っ込んでしまった。

「さつすがあの情報屋が仕入れた弾は一味違うね！遊輝ちゃん、褒めて褒めて〜」

「ああ、あとでなんか欲しいもの買ってやるよ。さあて、空港まで走っていくか」

パトカーを退けた二人は後ろにある大量のお金を抱えてホクホク顔でラスベガスの街を後にする。

~~~~~

ヨーロッパにある小さな国、バチカン市国。

この国はキリスト教カトリック教会と東方礼典カトリック教会の総本山となる世界でも珍しい宗教国家だ。この国は長らく、キリスト教の行方を決めておりその先導者は世界的な政治力も持っている。

しかし、先導者は今ベッドの上で寝たきりの状態だ。周りには重役が囲み、ベッドの近くにある心電図の動きはゆっくりと、今にも息を引き取りそうだ。

「お、おお………」

「ドミンゴ様………」

「わ、わしはもう……終わりだ……あ、新たな先導者はいつも通り選挙で」
「わかつております」

「そ、そして……あの秘密も……」

「はっ……」

……ピーパー

○月×日、午後11:26分、バチカン市国の先導者、ドミンゴは静かに息を引き取った……

~~~~~

「うーん!!なんて気持ちいい天気なんですよ!!こんな日はビーチに出てゆつくりと過ごするのが一番ね!!」

「よっ、ジュース買ってきたぞ」

「サンキュー遊輝ちゃん」

イタリア南部の街、ナポリ。この街にエリアと遊輝の二人がいる。目的は休息だ。ナポリのビーチでビーチ傘をさしてのんびりと過ごしている。

「いや……ここ最近はずっと仕事ばっかだったし半年近くは休んでもいいよね?」



「大丈夫大丈夫、それくらいの金は稼いだし、休憩後は簡単な依頼から感を戻していこうぜ」

ビーチチエアの横にあるテーブルにジュース2本とラジオを置いた遊輝、そのままビーチチエアに横になりラジオを起動した。

『続いてのニュースです。昨夜1時ごろ、バチカン市国の先導者にしてローマ教皇、ドミンゴ氏が崩御しました。これにより、バチカン市国はそのしきたりに従い、2週間後に新たなローマ教皇を決める選挙、ならびに新ローマ教皇の即位式を開催すると発表しました』

「ありやく、あのローマ教皇亡くなったのか。色々な噂があつて面白い人だったんだけどな」

『なお、この即位式は伝統に従い、イエス・キリストの時代から伝わる賢者の杖と代々即位式に新たなローマ教皇が被るゴールド・クラウンが身につけられる予定です』

「……いいこと聞いたあゝ」

「えっ?」

「遊輝ちゃん、休み終わりよ。バチカン市国に行くわよ」

「ええ……休暇」

「仕事出来たわよ!賢者の杖とゴールド・クラウンを盗りに行くわよ! Let's G

「おー」

「しようがねえな……行くか」

砂浜から立ち上がったアリアは意気揚々とビーチから引き上げる。それを見て遊輝はやれやれと肩で息をしてアリアの後を追いかける。

彼らの物語がまた始まる……

あれから5日が立ち、場所は変わりイタリアの首都、ローマ。そしてここはバチカン市国との国境付近、ヨーロッパはEU内にあるシェンゲン協定によりパスポート・ビザが不要となり、多くの観光客がローマ観光のついでにバチカン市国へと訪れる。この観光名所の一つであるバチカン博物館には長蛇の列が並んでいる。そんな観光客に紛れて、帽子を被った男女のペアがいる。

「……流石に人多いな」

「戴冠式行われるのは一週間も後なのにね……まあしばらくは観光しながら中の警備体制と噂を確かめましょう」

「観光ねえ……荷物チェックどうするよ?」

「物騒なものに入れてないし通れるでしょ。第一、そんな所通らないわよ」

男女のペアは遊輝とアリアだった。普段の怪盗姿からとても思いもしない普通のTシャツにジーンズ、アリアは清楚なワンピースを着ている。

「さてこの長蛇の列、並ぶのは面倒くさいわね」

「……裏口か?」

「あつたり〜」

「いけるか?警備員馬鹿みたいにいるからちよつと変なことすればすぐ来るぞ」

「なくに……従業員のように暗証番号を打ち込めばいいのよ、遊輝ちゃん」

アリアはゴソゴソとポケットを探り、モノクルを取り出して左目に付ける。遊輝も同じくポケットの中からモノクルを取り出し左目に付けた後、二人は人混みから外れて裏通りに入る。そのままゆっくりと歩いて行き裏口の前に着く。

「建物は古いのに警備は最新設備なんだね」

「こういう所で無駄な金を使うなっていうの。キリスト教信者が悲しむぞ……侵入ツール起動」

遊輝がボソツと呟く。彼のモノクルがクルクルと回転して動き出す。数秒後、彼らの目の前にあるセンサーのランプが赤から緑に変わり、扉のロックが開いた。

「それじゃゆつくりと物色しましょうか」

「へいへい、仰せのままに」

ゆつくりと扉は閉じられ、扉には再びロックがかかった。従業員用扉から入った二人は物静かに従業員用通路を歩いていき、一般エリアに入る。

「従業員用通路の地図は写真撮ったし、まずは本命を狙う前のお宝を物色しましょうか」

「うん．．．しかしデケエ絵ばつかな。まあここ、裏に図書館あるし本でもいいか」

「何言ってるのよ。私たちは世界一の怪盗コンビよ。狙うのは有名作品よ、例えば．．．」

「このラファエルの『キリストの変容』と『聖母の戴冠』とか」

「ぼへえ．．．骨が折れそうだ」

2人の目の前には大勢のお客さんがお目当てである絵画を観るために列をなしている。1枚の絵画を観るために30分近くかかり、僅か十数秒で終わるため、2人は列に並ばずにそそくさと離れる。

「うん．．．しかししめぼしいものは見当たらないわね。絵画以外にもなんかあれば良いのだけど」

「そういう訳にはいかんだろ。ここ、言って美術館だし」

「まあ手始めにあの2枚を頂戴しますか。なんか見て回りたいところある?」

「いんや、だいたい構造を把握した。他の場所行こうぜ」

「それじゃおさらばしましょうか。ご飯食べてから本命の大聖堂に迎いましょう」

「おkおk」

お目当てのものを決めた二人は帽子を深くかぶり直し、アリアは1枚のハガキサイズの紙を懐から取り出す。右手に持った紙をスナップを効かせて投げる。紙は宙を待つて警備員の前に落ちた。

「?誰だよポイ捨てした奴は・・・ったく・・・た、大変だ!!!」

露骨に嫌な顔をした警備員は腰を落として紙を拾う。だが、その紙の中身を見て、驚愕の表情、すぐに守衛室に走っていく。

『ご機嫌ようバチカンのスイス傭兵さん』

本日夜12時、この博物館にある『キリストの変容』と『聖母の戴冠』を頂戴しに参ります』

怪盗アリアと遊輝』

~~~~~

ゴゴゴゴゴゴ!!!

『見てください!!上空にはヘリコプターが10台飛んでいます!!まもなくバチカン市国で行われる新たな指導者を決める選挙、その前夜祭みたいな雰囲気醸し出しています!!今夜、怪盗アリアと遊輝がこの美術館に現れます!!』

『ワアアアアアアア!!!』

時刻は同日の夜、博物館の周りは異様な雰囲気になっていた。博物館を中心とした半径200mは警察官・イタリヤ部隊そして関係者以外は立ち入り禁止となり嚴重な警備が敷かれている。

そしてその周りには沢山のマスコミと野次馬が博物館を囲んでいる。彼らの目的は一つ、突如予告してきた怪盗アリアと遊輝を見るためだ。

「ラスのカジノの次はバチカンの絵・・・相変わらずやることなす事が早いんだから」「氷川刑事、博物館内の警備システムは大丈夫です」

「ありがとう、ただ警戒は怠らないでね」

バチカン美術館の入り口には彼ら二人を捕まえることに専属した刑事、氷川刑事と桜刑事がいる。今日こそは捕まえると熱く燃えている。

「中々足跡が見つかからないと思つていたがまさかイタリアに潜んでいたとは……」
「アジトも見つかからないですし……それにしてもこの時期に行動を起こすとなると……」

「桜刑事も感じますか……恐らく二人の狙いは2枚の絵画ではなく……」

「賢者の杖とゴールド・クラウンですか……」

「かなり高いと思います」

「今日、バチカン市国の教王補佐には？」

「話しておきました、可能性があるとは伝えていきます。全く信用していませんでしたが」
「何も起こらないことを祈りましょう。そして我々は目の前の仕事に集中しましょう」

「ふええ……やばいよ、警備多いよ」

「何あの警備、マジやってられないんですけど」

バチカン市国内の地下、下水管の排水溝に仕事姿に着替えた怪盗エリアと遊輝がい

る。遊輝はパソコンを使い、現在の生中継とバチカン博物館の警備システムを見ている。

「いや、マジなんなの？数時間でこんなに上がるの？」

「骨折れるわね。時間ずらせばよかったかも。現状は？」

「3割はロック解除と10割のフェイクのシステム完成」

「じゃあ後はモノクロに任せましょう。行きましようか、ここのくさいし」

「へいへい」

遊輝はパソコンをたたみ、懐に戻す。アリアと遊輝はそのままモノクロを取り出して右目に取り付ける。

「さて……行こうか。遊輝ちゃん」

「OK」

アリアの言葉を聞いた遊輝は壁にある階段を上り、その上にある小さなマンホールをゆつくりと開ける。そのまま二人は上に登り、小さな路地裏に着く。路地裏に上がったアリアと遊輝は颯爽と移動する。そして、昼間侵入した裏口まで来た。裏口は警察官一人が立っている。

「おやおや、電子警備は凄いのになアナログの方は全然じゃないですか」

「それじゃあいつを襲って1つ……中にも一人いるな。それで2つだ」

「分かったわ……スリープ」

アリアが小言で何かを呟く。裏口の警察官は一瞬だけアリアと遊輝のいる方に目を向けたがやがて目がウトウトとして倒れてしまった。その間に二人は裏口の入り口前に着く。遊輝は電子ロックの前に立ち、アリアは警察官を動かして服を奪う。

「夜中に働いたら健康に悪いわよ。風邪引かないように寝ててね」

「……OK」

ピロリン

遊輝が電子ロックを解除した後、何故か二人はすぐに入らずに扉の横に立つ。数秒後、中から扉が開いた。

「おいどうした、電子ロックを解除するなん「はいはい♪」うぐつ……」

中から出てきた警察官一人に向けてアリアは警察官の脳天に持っている銃の持ち手部分行き良いよくぶつける。警察官はすぐに倒れて気絶してしまった。

「ご苦労様……後はゆっくり寝んねしてね」

「……よし、こつちも服奪った」

「じゃあ中に入ってお着替えしてからいきましようか」

警察官二人の服を奪ったアリアと遊輝はそそくさに博物館の中に侵入した。すぐに死角となる物陰に隠れ、自分たちの服装から警察官の服装へ変装して帽子を被る。

「それじゃ……行こうか」

「OK」

「け、刑事さん!!絵は本当に奪われないんでしょうか!？」

「大丈夫です。私たちが二人を捕まえますから」

「桜刑事!!11時50分になりました!!今のところ、異常はありません!!」

「よし、もうすぐ時間になる。決して気を抜かないように」

「「「はっ!!!」」」

一方、こちらは美術室。アリアと遊輝が狙う2枚の絵画が展示されている部屋である。普段から保存のために壁に埋れている。現在は二人に狙われているため、2枚の絵画の周りには銃を持った警察官が10人、待機している。

「一体どんな手で……」

「10分前を切りましたから恐らく中に入るかと……」

「ひええええ?!?!」

「もしもの話です。これだけ頑丈な警備をしていますから早々に侵入されないでしょうけど」

「しかし遊輝さんの刀は非常に厄介です。あの刀は本当に何でも切ってしまいます」「だけど遊輝「氷川刑事!!大変です!!」?!い、いきなり耳元で騒ぐな!!」

「し、失礼いたしました!2階の廊下で怪しいものを見たという情報が入りました!!」「何!?!」

「桜!!すぐに5人ほど部下をつけて行きなさい!!」

「はっ!!」

慌てて入ってきた警察官一人の様子を見て、ただ事ではないと感じた氷川刑事はすぐに桜刑事と警察官数人を2階の方に向くように命令する。

「もしかしたら2人かもしれないわ・・・警戒を怠らないように」

「・・・そうね、その二人は今ここにいるから」

「えっ!?!」

「そうりゃ!!!」

突如、一人の警察官がポケットから2つの丸い何かを取り出して床に投げつける。すぐに丸いものは破裂してあたり一面が黒い煙に覆われる。

「な、何だ!？」

「ま、前が見えない!!」

「ぐっ!?ゴホッ!!ゴホッ!!か、換気だ!!空調を挙げろ!!」

「ダ、ダメです!!前が見えなくてどこにスイッチがあるか!!」

黒い煙に覆われた部屋は混乱状態となる。だが、誰かが窓を開けたのだろうか、黒い煙はそつちに向かつてゆっくりと動いていく。数分ぐらい経つただろうか、やがて黒い煙は全て無くなった。

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・」

「け、刑事!!だ、大丈夫ですか!？」

「馬鹿野郎!!私の心配よりも絵画の心配を「絵なら私たちがちゃんと頂戴しているよ」なっ!？」

咳き込む氷川刑事を心配した警察官だが、すぐ絵画の方に指を刺す。そこには2枚の絵画をそれぞれ1枚ずつ持った怪盗アリアと遊輝の姿がいた。

「いや、超初歩的な畏に引つかかってくれて助かったよ♪」

「おかげで壁から外すのに余裕を持てたな」

「動くな!!!今すぐ絵画を置いて手をあげろ!!」

二人の会話を耳にせず、氷川刑事が大声で叫ぶ。すぐに二人の周りに銃を構えた多く

の警察官が二人を狙う。

「おお怖い怖い。か弱い二人の乙女にそんな物騒なものを向けないでよね」

「だから俺は男だつて言つてるだろうが!!!」

「さつさというこゝと聞かんか!!!」

「まあそんなことしてゐる暇ないんですけどね〜」

フン!!!.....ガタン

突如、何かが切れる音が聞こえた。その音に僅かに全員首を傾けた。その間に部屋の中央にある柱がゆっくりと滑り始めた。

!!!お、おい!!!柱が倒れてきてるぞ!?!」

「なっ!?!」

「に、逃げろ!!!逃げろ!!!」

「ちよっ!?!ま、待ちなさい!!」

「さつすが遊輝ちゃん!!」

「んじやねえ〜」

気付いたら遊輝の手には一本の刀が握られていた。だが、それに気付いた時は遅かった。辺りは先ほどと比べようがないくらいに混乱している。氷川刑事が色々と叫ぶが、我先にと逃げ出す警察官。その間にも柱は滑り、やがて傾き出した。そのどさくさにア

リアと遊輝は逃げ出した。

「ま、待ちなさい!!」

「あつ、それ以上来ない方がいいよ」

ポチツ、グイーーン

逃げていく怪盗コンビを追いかける氷川刑事、だが怪盗コンビを追いかけると突如何かが押した音が聞こえ、二人の四方から網が出てロープが上に上がる。網の中央にいた氷川刑事はそのまま網に囚われてしまった。

「んな!？」

「んもう、言うこと聞かないから」

「んじゃまたなく、すぐ会うことになるうけど」

「ま、待ちなさい!!!」

「いや、余裕だったわ!」

「ああも簡単に初歩的な罠に引っかかるなんて相変わらず馬鹿だなく。んで、これどうするんだ？」

「んあ？ 適当に不味そうな孤児院の玄関にも置いときましょう。寄付してその孤児院の資金にしましょう」

「おつ、カメラがこっち向いてるぞ」

「おい!!!来たぞ!!!」

博物館から脱出したアリアと遊輝はそのまま博物館の屋根の一番上に登った。戦利品を手にしてアリアは満面の笑みを浮かべる。一方で遊輝は下の方に向けて、カメラがこっちを向けていることに気付いた。周りのガヤも二人が屋根の上に登っていることに気づき、ヘリコプターのライトとスポットライトが二人を照らす。

「バチカン市国の皆さん、今晚は♪約束通り、『キリストの変容』と『聖母の戴冠』は頂いたわよ♪」

「!!!」
「!!!」
「!!!」

「まあ俺たちの目当てはこれじゃないんで、これは近くの孤児院にも寄付するよ」

「何だと!？」 「俺にくれ!!!」

「押すな!!!これ以上の侵入はするな!!!」

アリアと遊輝がガヤ相手に盗んだ絵画を見せつけて、孤児院に寄付すると言った。こ

れを聞いたガヤたちは一斉に騒ぎ出し、二人に近づこうとする。警察官達は慌てて押さえ込もうとするがガヤは言うことを聞かず、今にも警察のバリヤードを突破しそうな勢いである。

「まあまあそう慌てない慌てない♪これはあくまでも前菜♪次は即位式の日に賢者の杖とゴールド・クラウンを頂戴するわね♪」

「おい聞いたか!?」「即位の日つてもうすぐじゃないか!?」「また二人を覗れるのか!?」「じゃあ今日はこれで帰るわ、みんなも夜更かしするなよ〜」

「いた!!動くな!!」

遊輝が締め付けの挨拶をして脱出を図ろうとした時、下の方から聞こえてきた。二人は一緒に下を覗き込む。そこにはペランダに氷川刑事と桜刑事がいて、2本の梯子を使い、屋根に乗り込もうとする警察官達がいた。

「あれ?もう来たの?偉く早く脱出したわね〜」

「しようがねえな。まあ後は逃げるだけだし、さっさと行くか」
「動くな!!お前たちは陸も空も包围されている」

氷川刑事は叫ぶ。確かに下からは警察官が登ってきて、例えそれを突破しても博物館の周りには多くの警察官とガヤがいる。そして上空には二人を照らす10台のヘリコプターが二人の動きを注意深く監視している。

「確かに、上も下もめんどくさいわね」

「じゃあ俺たちのすることは……」

「真ん中から逃げる!!」

上と下を見たアリアと遊輝はお互いの顔を見て笑顔になる。アリアは何処からか箒を一つ取り出して二人はそれに跨る。

「じゃあ行くよ!!」

「いっけえええ!!」

「なっ!?ま、待て!!」

アリアがジャンプする。すると二人を乗せた箒は空に浮き上がる。そのまま加速をして二人は空を駆け出す。10台のヘリコプターは二人を追いかけるがスピードが追いつかない。

「いやっほおおお!!」

「ヘリコプター何か目じゃないぜ!!」

「このまま目に入った孤児院に行くわよ!!」

「おうよ!!」

アリアと遊輝はそのまま箒に跨いだまま暗闇に消えていった。

『おはようございます。さて、今朝のトップニュースですが、今日深夜0時、怪盗アリアと遊輝がバチカン市国のバチカン博物館から『キリストの変容』と『聖母の戴冠』を盗み出しました。その数時間後、イタリアのローマ郊外にある孤児院から盗まれた2枚の絵画が見つかりました。なお、二人は、1週間後に行われるバチカン市国の即位式に犯行予告を出しています』

「いやだわ〜犯行予告って、私たちは物を頂戴するだけだよ。まるで人殺しみたいに」
「そんな物だろ、実際」

イタリアのローマ市街、中心部から少し離れた沢山のアパートが並ぶ建物の中の2階の部屋に二人はいた。しばらくはここを拠点として活動をしているみたいだ。

「まあどうでも良いけど、遊輝ちゃん」

「警備のレベルは上がってるけど、1週間も前からこんな厳戒態勢だったら当日疲れるな。第一、警備が急過ぎて間に合わない可能性もある」

「んじやいけるわね・・・ん？」

「?どうした?」

アリアが窓の外を覗き込み、路地を見る。その様子を見た遊輝も窓の方に見る。下の方には幼き子供が何かを持ちながら必死に走っている。

「?何だ?」

「待て盗つ人!商品を返せ!!」

「へえく……やるわね。露天から盗むとは」

「どうするんだ?」

「もちろん、助太刀♪。よつと」

アリアは窓を飛び越えて、そのまま下に着地する。そのまますぐ後ろの商店らしき大人の背後にピタリと付きながら走る。

「やれやれ……しようがねえな」

その様子を見て、遊輝も窓を飛び越える。既に子供の姿は見えなくなっているが、何処で曲がったのかは見えていたのでその方向に曲がる。そこには壁に追い詰められた少年と怒っている商店の大人がいた。

「ようやく追い詰めたぞ!店の物を勝手に盗み「お邪魔しま〜す♪」んぎゃ!!」

少年に対して怒っていた大人はアリアの存在に気付けなかった。背後にピタリといったアリアは大人の後頭部に持っていたピストルの持ち手をぶつける。

「う、うう……」

「もう大丈夫だよ」

「お前やるなく、露天から盗むとは大した根性じゃねえか」

アリアと遊輝は気絶した大人を無視して少年に近づく。露天から盗むんだ少年はその物を隠すようにしている。

「あつ・・・あつ・・・」

「あゝごめんごめん、心配しなくても大丈夫だよ。僕の物は盗まないよ」

「ほ、本当に？」

「ああ、何だったら俺たちもお前と一緒に盗つ人だから」

「それにしても僕どうしてこんな事しているよ？お父さんとお母さんは？」

「お父さんはいない。お母さんは・・・」

「ん？」

「お母さんは・・・まだ帰ってきてないんだ・・・」

「帰ってきてない？」

「お母さん、キリスト教の教会で働いて・・・前までは毎日帰ってきてたのに、半年前から帰ってきてなくて・・・」

少年は泣いていた。大事な母が居ない寂しさなのか、それとも孤独を味わった事なのだろうか、アリアと遊輝に見守られて少年は泣いていた。

「お母さん……お母さん……」

「ちなみにお母さんって何処の教会で働いていたの？」

「ヒグツ……バチカン市国の教会……お母さん、そこで頑張つて働いて……」
「ああもう、泣くなよ。綺麗な顔が台無しだぜ」

遊輝はポケットからハンカチを取り出して少年の顔を拭く。少年は盗んだ物を落として泣き続けた。

「お母さん……お母さん……」

「……分かったわ。私たちが君のお母さんを探してみるよ」

「!?ほ、本当に!?!」

「その代わり、必ず見つかるという保証は持てないわ。最悪の時は覚悟しておいて」

「う、うん……」

「とりあえず今は家に戻りましょう、僕もおいで。まともにご飯を食べてなかったの
でしょう?しばらくは私たちの家で過ごすと言いわ」

「あ、ありがとうございます!!」

アリアと遊輝は少年を家に連れて行くことにした。身寄りのない少年は何の疑いもなく二人について行く。

「お前運が良いな。俺たちじゃなかったら明らかに悪い大人にやられる所だったぞ」

「お兄さんとお姉さんは優しいからそんなことしなさそうだから」

「ハハッ、僕は人を見る目があるね〜」

少年はアリアと遊輝の間に入って一緒にアパートの中に入って行く。さながら親子のように見える。三人は家に帰って少年はソファに横になって眠り出した。

「やれやれ・・・子供が来るなんて思いもしなかったぞ」

「まあ仕方ないじゃない。あんな状態を放っておけるほど私達は子供に厳しくないし」

「そうだな。俺たちのような苦い経験はあんな子供にさせるわけにはいかないし・・・それよりアリア・・・さっきの話」

「ええ・・・嫌な予感がするわね。あの噂のこともあるしもしかしたらね」

「・・・じゃあ俺出かけるわ」

「OK、私も情報屋をつけるわ」

少年の母を探すために二人は動き出す。まずは遊輝が一人、部屋を出る。

「さて・・・まずは教会の中に侵入するか」

遊輝はアパートの裏道から商店が並ぶ表通りへと向かい、そこから人混みに紛れる。そのままゆつくりと前に進み、バチカン市国との国境近くまで来た。国境周りの警備は怪盗アリアと遊輝の犯行予告を受けて厳戒態勢となっており、荷物チェックから指紋認証をしている。遊輝は周りをチェックして、少し離れて携帯を取り出した。

「(……アリア、国境近くに着いた。国境の警備は前より少し厳しいくらいだ。変装したらいい)」

「(分かったわ。少年はゆっくり寝ているわ。ご飯食べたらもう少し落ち着きそうね)」

「(OK OK、じゃあこつちもバチカン市国に入る。中に入ったら連絡はそんなに取れなくなる)」

「(失敗しないでよ)」

「(もちろん)」

携帯の通話を切った遊輝は建物の中に入る。数分後、少し高貴な黒いハットを被り、黒い服を着たジェントルマンが現れた。その男性はそのまま国境の方へ歩いて行く。

「ボンジュール、キリスト教王の即位式を見に行くためにバチカン市国を訪れたのです。が何事ですか？こんな嚴重な警備で」

「怪盗アリアと遊輝がバチカン博物館の絵画を盗んだだけじゃなくて、即位式の日に行予告を送りつけてきた。そのために嚴重警備をしているわけだ」

「それはそれは……なんとも面倒な時期に来日することになりましたね」

「爺さんも気を付けろよ。ほらっ、爺さんは大丈夫だ」

「メルシー」

ジェントルマンは黒いハットを少し上げて、そのままバチカン市国に入国した。男性

はそのまま歩いていき、サン・ピエロ広場に到着する。ジエントルマンは広場から見える教会を見て、ニヤリと笑った。

「(ニヒヒヒ・・・馬鹿な奴め、さて、活動は夜からだな。それまでにあの教会の警備を確認しようじゃないか)」

ジエントルマンの状態は変装した遊輝だった。パスポートも偽造している、変装も完璧だった。遊輝の目的は一つ、アリアと合流する前に教会に忍び込み、お宝の場所の探索と教会にまつわる黒い噂の調査だった。

「(さくて・・・じっくり調べさせてもらいますよ)」

ジエントルマンの変装をした遊輝がそのまま人混みの中に隠れて行く。

~~~~~

「どうするんだ!?! 今日が即位式だと言うのに全く警備の問題は解決してないじゃないか!?!」

「し、しかしあの二人は神出鬼没でどこから侵入してくるか分からず・・・」

「だったら警備を増やせ!!」



サン・ピエロ広場にある大教会は混乱に満ちていた。今日は新たなローマ教王をお披露目する即位の日、だが1週間前に起きたバチカン博物館の強盗、その犯人である怪盗アリアと遊輝の犯行予告により、この教会に目を付けられた。

「し、新教王。ここは賢者の杖とゴールド・クラウンを身を付けずに」

「バカヤロ!!あれを身につけないと世界の政治家や資本家に権力を見せつけられない!!あれがあつてこそ、ローマ教王は世界最強の証となるんだ!!身に付けずに即位式なのありえん!!」

「で、では……」

「即位式は必ずやる!!ワシが世界最強を示す!!そして忌々しい怪盗を捕まえて処刑台に吊るす!!」

新教王、イワン教王は周りの部下に怒鳴り上げる。彼は何としてでも賢者の杖とゴールド・クラウンを身につけて即位式に望みたいみたいだ。

「クソ……下の様子を見てくる。誰一人入れるなよ!!」

「[[[[ハッ!!]]]]」

イワン教王は部下に命令を下し、自身はそのまま部屋を出る。長い廊下を歩く。そして廊下の突き当たりの部屋に入る。そこには白衣を着た研究員たちが3人ほど中にいて、部屋にあるパソコンを操作して、機械を制御している。

「おい、核弾頭とミサイルは？」

「はい、何の問題もありません」

「製造は？」

「目標の100発と2000発まで後2年と言うところでしょう」

「よしよし……この装備が完成して、軍が整えれば再びキリスト教は世界の覇権となる。そしてそのこの鍵がゴールド・クラウンと賢者の杖だ」

イワン教王は画面に移った大量のミサイルを見て、先程の怒り顔から笑みを浮かべる。

ゴールド・クラウンと賢者の杖……大昔からキリスト教王の証とされていたが、実は裏には大量の武器を収納している格納庫の鍵の役割をしていた。大昔、神聖ローマ帝国の時代に賢者の杖とゴールド・クラウンはこの時期に作られた格納庫の鍵となっていた。昔は鍵を開けて教王自らが確認をしていたが、最新の技術により、鍵を開けなくてもこのように管理している。そしてそれは、格納庫に収納されている武器も進化していた。そしてそのスイッチもこの2つだ。

「ここ数百年はアメリカに奪われた世界の覇権……あと数年、あと数年持ち堪えたら我々の時代へと変わる!! 既に国際連合の爺婆供には我々の兵器を見せつけて怯えたいる!! フハハハハ!!」

イワン教王は笑いながら部屋から出た。一方、部屋に残った研究員達は変わらずにパソコンを動かしている。

「ふう〜……次の新教王は横暴な性格だな」

「前教王も野心化だったけどそれでも良心はあったからな〜」

「全く、毎日毎日研究させられて大変だよ」

「だな。おい新入り、お前も大変な時期に入ったな。まあ仲良くしようぜ」

「……………」

「?おい新入り、どうした?」

2人の研究員はたわいもなく話していたが、もう一人の研究員は話を聞いているか聞いていないか分からない状態でした

「……………」

「どうしたんだよ? 昨日まではあんなに気さくに話しかけていたのに」

「……………(ニヤリ)」

研究室から出たイワン教王は再び廊下を渡り、今度は石造りの薄暗い廊下の端にたどり着く。突き当たりには二人の兵士が牢屋を守っていた。

「おい、中に通せ」

「はっ！」

兵士の一人が鍵を開け、イワン教王は牢屋の中に入る。その中には数十の痩せ細った女性が裸のまま、鎖に繋がれていた。

「へへへッ……いつまで経っても女を抱くのは心地よいのお〜」

いやらしい顔つきになったイワン教王は舌を出して舐めずり回す。それを見て、数人の女性が「ヒッ」と声を出して後ろずさむ。

「さて……まずはお前か「教王、申し訳ありません。怪盗コンビを選任するFBIの刑事2人が来ました」ツチ、良い時に……しょうがねえ」

牢屋の外にいる見張りの兵士の知らせを聞いたイワン教王は舌打ちをしてこの教会

に來た刑事を恨む。しかし、教王としての責務を果たさないといけない。それにここで無視していれば、この場所の事もバレル可能性がある。

「どこで待つてやがる」

「応接室です。FBIの捜査官とイタリアの警察官、およそ1000人ほど連れて來ています」

「ふん、手薄な警備の増強にはなるか。分かつてやがる」

牢屋を出た教王は見張りの兵士の話を聞いて足早に応接室へと向かつて行く。長い廊下を歩き続け、再び大理石の廊下へと出て、そのまま部下が立っている応接室の入り口に立つ。部下たちは教王が來たことを見て、応接室の扉を開き、教王は中に入る。教王が入つて來たのを見て、ソファに座つていた刑事2人が立ち上がった。

「こんな大変忙しい中、面会を申し入れて申し訳ありません。私、怪盗アリアと遊輝の選任刑事をしています氷川と言います。こちら部下の桜です」

「よろしく願います」

「わざわざどうも、座つてくれて結構」

教王は少し上から目線の口調で二人の刑事に行つた。面倒くさい面会と思つていた彼の目にはとても美しい女が二人、ノコノコとこの教会にやつて來た、そう感じていた。「いい身体しているじゃねえか……あの怪盜をとつ捕まえるがてら、この女二人も

捕らえるか)して、二人は予告をしてきた怪盗エリアと遊輝の選任刑事とお耳したが?」

「はい、我々は怪盗エリアと遊輝を捕まえる事を任されたFBIの刑事です」

「君たち二人の実力がいかはなな物か分からないが、5年近く捉えられていないあの二人を捕らえられるのか?」

「もちろんです。我々にお任せください」

「(……信用ならんがこの二人を捕らえる為にもここは任せるか、失敗すればその口実を使つて二人を捕らえたら良い) 分かった。FBIに協力しよう」

「ありがとうございます」

協力を得たイワン教王と氷川刑事、桜刑事は立ち上がり握手を交わす。

「失礼します。新教王、そろそろ準備の方を」

「分かった。ではワシは言ってくる。晴れ舞台を邪魔させるなよ」

「もちろんです」

応接室に入ってきた部下に連れられて教王は部屋から出て行く。その後を追うように二人の刑事も部屋から出て、自分たちの本陣へと戻る。

「(……桜、あの教王、裏があるぞ)」

「(ええ、バチカン市国のキリスト教会本陣は黒い噂を絶えません)」

「(調査、お願いできる?)」

「もちろんです」

~~~~~

『もうまもなく、新教王になれるイワン教王があちらのサン・ピエトロ大聖堂に姿を現し、就任後、初めてのミサが行われます!!既に教会では先日亡くなった前ドミンゴ教王との引き継ぎ式は終わったと見られています』

『ワアアアアアア!!』

『こちらの広場には大勢の見物客がおります!新たなローマ教王のミサをご覧になれる方もいらっしやいますが、中には先日犯行予告を出した怪盗アリアと遊輝を一目見ようとする見物客もいらっしやいます』

『新教王!!早くお姿を!!』

『アリアと遊輝!!早くゴールド・クラウンと賢者の杖を奪ってしまえ!!』

即位式、広場は大勢の人の声が響き渡った。それだけ今回の新教王の就任には関心が寄せられている。もっとも、それは神教王に対する物ではなく、怪盗アリアと遊輝によ

る犯行予告を期待してのものだ……

『あつ！扉が開かれました!!いよいよ新教王、イワン教王が姿を現します!!』
『ワアアアアアア!!』

いよいよその時が来た。前任のドミンゴ教王が死して2週間、新たな教王となったイワン教王が広場に姿を見せた。その様子を見た見物客は割れんばかりの歓声を上げる。教王は笑顔で手を振る。彼の頭の上にはゴールド・クラウン、そして右手には賢者の杖が握られていた。教王はマイクの前に立ち、賢者の杖を高く天に突き上げた。それを見た見物客は一斉に黙る。

「この度はキリスト教の新たな教王となった私のミサに来てくれてありがとう。私が新教王、イワンだ。我々は先祖キリストの教えを大事に守り、世界の平和を願う」

パチパチパチパチパチパチ!!!

「そして我々は先日、世界的怪盗から犯行予告を受けた。一部の物はこの賢者の杖とゴールド・クラウンをこの場にお披露目せずにミサと言っておつたが、私が却下した。このように来てくれた世界中の信者をガツカリさせる訳にもいかない。そして我々はあのにつき怪盗コンビから逃げるつもりはない!」

『ワアアアアアア!!!』

「このように天高く賢者の杖を突き上げる。我々は卑劣な怪盗コンビを断じて許さない

!!キリストの名に誓って!!」

「へえ〜、大層な事を。世界平和を願う奴が物騒な武器を作っているくせによく言うわね〜」

「なっ!?!」

「お、おい今の声……」

教王のミサの途中、突然女性の声が何処からか聞こえた。広場の見物客にも聞こえるようにマイクを通しているみたいだ。この声を聞いた見物客は先ほどまで沈黙していたのにザワザワと騒ぎ出した。一方、教王側も慌しくなってきた。

「だ、誰だ!!ワシのミサの途中にガヤを入れたのは!!」

「わ、私ではないです教王!あの声は怪盗コンビです!」

「クソツ!!何処にいやがる!!姿を表せ!!」

「そんじゃ……お言葉に甘えて……そりやつ!!」

バン!!

「なっ!!!ゴ、ゴールド・クラウンが!!」

「う、上だ!!」

何処からか音が聞こえた。その音が鳴つてすぐに教王が被っていたゴールド・クラウンが無くなっていた。周りの部下は辺りを見渡し、一人の部下がすぐ上の屋根を指差

す。そこにはゴールド・クラウンを持った怪盗エリアの姿があった。

『ワアアアアアア!!!』

『怪盗エリアだ!!!』

『ほ、本当に現れた!!』

「ご機嫌よう皆さま、まずは約束通り、ゴールド・クラウンを頂戴いたしました」

「き、貴様!!!それを返せ!!」

「返すんだつたら最初っからここに来ないわよ。さて、もう一つの物も頂戴させて貰うわよ」

「お、おい!!この賢者の杖をすぐに保管庫へ!!」

「はっ!!」

教王はすぐに賢者の杖を近くにいた部下に渡し、保管庫に戻すように指示する。そして、エリアを睨み付ける。

「よ、よくもゴールド・クラウンを……そこで待つてろ!!すぐに貴様を捕らえて処刑台に行かせてやる!!」

「んもう、か弱い女の子に物騒な言葉を掛けないでよね。それより教王、あんた馬鹿なの?」

「な、何だと!?!」

「私たちは世界最強の怪盗コンビよ」

『おい!!もう一人は何処にいるんだよ!?!』

『遊輝さんがいねえじゃねえか!!!』

「……!!!そ、そうだ!!もう一人いたんだ!!すぐにそいつを「おいアリア、こいつ本物か?めちやくちや朽ちとるぞ。すぐに補強しないと折れちまう」なっ!!!」

「まあでも中身は本物だから問題ないけど」

教王から保管を頼まれた一人の部下は受け取った賢者の杖を右手で振って左手をパンパンさせて、品物を確認する。その様子を見ていた教王と他の部下は呆気に取られた。

「しかしこいつの素材はマツだろ?よく数千年も保つてられるよな」

「そ、そいつを捕えろ!!」

「……よつと、ハハーン、さては杖の素材だけ変えたな。この中身の宝石は変えずに」

「くっ!!このっ!!」

「ほつと!!」

杖を持った部下は次々と捕らえようとする兵士たちを軽やかな身のこなしで避けていく。そして、倒れた兵士の背中を踏み台としてジャンプ、そのまま高く飛び上がり、自

身の服を脱ぎ捨てて屋根に到達した。教王の部下として変装していた遊輝だ。

「ようつと、じゃあ約束どおり。賢者の杖も頂きましたよ」

『ワアアアアアア!!!』

『アリアさあああん!!』『遊輝さああああん!!』

「き、きききききき貴様ら!!!よ、よくもよくもよくも!!!」

「そんなに怒っていたら脳内の血管がプツツンしてぶっ倒れるよ新教王。後、私たち、あんな達から盗んだものももう一つあるのよ」

「なっ、何だと!？」

「遊輝ちゃん」

「は〜い号外だよ号外!!!見れない人はそこら辺のテレビを見て!!」

遊輝は賢者の杖をアリアに渡し、何処からか新聞みたいなものを取り出す。そして教会の屋根から走り出し、広場の周りの建物の屋根に飛び移りながら、それを広場の見物客に向けて投げまくる。広場の見物客はその新聞を手にして、中身を見る。

『.....な、何だこれ!？』

『か、核兵器にミサイルだと!？』

『おい裏面見てみるよ!!歴代の教王達が街の女性を捕まえてレイプだと!？』

「なっ!?!なっ!？」

『どうなってるんだ教王!』

『世界平和の為に祈りを捧げているんじゃないの?!』

広場の見物客達は新聞の内容を、また近くのテレビを見ていた人たちは臨時のニュースを見て教王達に怒号を浴びせた。イワン教王は焦った顔をした。今までトップシュークレットにしていたことがここにいる見物客の目に止まってしまった。それだけではない、今日の即位式の為に世界各地のテレビ局が生中継をしている。ここにローマ教王最大の秘密が明かされると各局のテレビクルーは教王を移す。

「なっ……なっ……」

「いや〜あんだ達の黒い噂は絶えなかったからね〜。調べさせてもらったよ、『世界平和を望みます』だって、笑っちゃう」

「お、おい!!今すぐ武器庫を隠せ!!」

「無駄無駄、この教会のコンピュータシステム、全部俺が書き換えて乗っ取った」
「なっ!?!」

武器庫を隠すように指示をしたが変装していた遊輝が乗っ取った宣言をしてしまった。さらに公然の場で武器庫を隠すように指示、これが全世界中に中継されてしまった。

「いや〜、変装して侵入して研究員になりすまして地道に書き換えて良かったよ〜。あ

んな物騒な物飛ばされたら地球が滅んじゃう。まあそもそも、スイッチとなる物が無いから武器庫は今じゃ誰もが閲覧可能な物になってしまったけど」

『どういう事だ教王!!!』

『戦争を起こすつもりなの!?!そんなゴメンだわ!!』

「あつ、あと、今頃FBI辺りがこの中に入って家宅捜索しているんじゃない? 誘拐と強制性交等罪辺りで? そっちは私たち関係ないけど」

「じゃあ俺たちは帰るから、後は警察達とゆっくりお話をしているね」

既に大混乱となつている教会内と広場。もうアリアと遊輝を捕らえようする者はいなかった。二人はこの大混乱に紛れてパラグライダーを取り出して教会から飛び立った。

『女性をさらってレイプって貴方それでも教王なの!?!』

『しかも歴代の教王のほとんどがヤツているじゃねえか!!!』

広場の見物客の怒りは収まる気配がない。広場から唯一、教会に繋がる扉の前には兵士がいたが、すでに兵士としての機能はしておらず、見物客が今にも流れこもうとしている。

「ま、不味い……不味い……」

「教王!! 大変です!! 世界各地のキリスト教指導者達達がローマ教王の指示を止めると宣

言っています!!」

「きよ、教王!! FBIの捜査官が武器庫と牢屋の捜査に入ってしまった!!」

「あ、あわわわわわわ……」

「教王、強姦罪の罪で署まで同行願いますでしょうか?」

「貴方達ですよ」

慌てふためき、固まってしまった新教王の前に氷川刑事と桜刑事の二人が自分たちの部下を連れてやってきた。

ローマ教会最大のスキヤンダルは新教王、イワン教王とその側近、関係者の逮捕という形で終わってしまった。

格納庫にあった核兵器やミサイルはFBIによって取り押さえ、厳重保管となり、囚われた女性達はイタリヤ警察が保護に当たった。世界中のキリスト教会信者が今回のスキヤンダルにガツカリし、世界各地のキリスト教会は今後しばらく、ローマ総本山とは関わらないことを決意表明した。

「……かつて、イエス・キリストは貧しい民衆を救う為にヨーロッパを歩き渡り、神様として崇められた。そしてイエス・キリストは後世の人達も同じように貧しい民衆を救うことを望んだ」

「その為の賢者の杖、そして栄光を示すためのゴールド・クラウンだったのに、結局、人間の欲を満たす道具に成り下がったな」

即位式の翌日、二人はローマ郊外のアパートにいた。奪ったゴールド・クラウンと賢者の杖は品定めが終わったのか、壁に飾られていた。

「にしてもこの新聞社面白い記事書くなり、あれだけ俺たちの事を叩いていたのに、今日の記事じゃ俺たち英雄扱いだけ。確かここってローマ教会の息の根が掛かっていたんだろ？」

「あんな情勢でローマ教王の指示を書くわけじゃない」

「んまあ関係ない事だけ……」

「あ、あの……」

二人は新聞のこと関係なしにたわいもない話をしている時、少年が二人の間に割って

話してきた。

「あ、あの……二人つてあの怪盗アリアさんと遊輝さん……なのですか？」

「そうだよ。盗賊やつているつて言つてたでしょ？」

「す、凄いですね……ほんとうに賢者の杖とゴールド・クラウンを奪うなんて」

「それをするのが俺たちの仕事だから」

「つと、そろそろ時間ね。僕、一緒に出かけようか」

「えっ？」

アリアと遊輝は少年の着ぐるみを綺麗にして一緒に外に出かける。もちろん二人は帽子をかぶつてバレないようにしている。

「さて……ここだな」

「ここつて……警察署？」

「もう出てくる時間じゃねえか？」

「……ソル!!」

「!?!?!お、お母さん……」

二人を見ていた少年は懐かしの声が聞こえて振り返る。警察署の入り口から痩せ細った女性が一人出てきていた。少年は女性の姿を見て、駆け出した。

「お母さん……お母さん!!!」

「ソル……良かった、無事で」

「うん!!あの人達が助けてくれたんだ!!」

「あの人達?」

「奥さん、ちよつとこつちにきてもらいますか?」

アリアは少年の母を手招きして、アパート近くの路地裏へと戻った。

「さて……良かったな、お母さん帰ってきて」

「うん!!ありがとうございます!!お兄さん!!」

「あの、ありがとうございます……私がいない間、息子の面倒を見てくれたみたいで」「いえいえ、褒めるのは僕ですよ。僕は強い子ですよ。半年間、一人で生き抜いたんですから」

「……ソル、ありがとうございます。ずっと教会に囚われていたけど、貴方の事は一度たりとも忘れてた事はなかったわ」

「お母さん……」

「これ、二人の再出発の祝儀にどうぞ。しばらくは生活に困らないくらいはありますので」

遊輝は少年の母に厚めの封筒を渡した。少年の母は封筒の中身を見て、驚く。その中には500ユーロ紙幣が束となって入っていた。

「な、何ですかこれ!？」

「ざつと5万ユーロぐらい入ってます。これで暫くは生活できますよね」

「ご、5万!? 貰えません!! 確かに暫くの生活には困りますが、これだけでも必要は」

「良いの良いの。私たちからのご祝儀としてありがとうございますがたく受け取って」

「……す、すみません。何から何まで」

「じゃあね僕。今度会えるか分からないけど」

「んじゃあな〜」

「……あ、あの!!! ありがとうございます!!」

「ん?」

「ご祝儀を渡したアリアと遊輝はそのまま後にしようとしたが、少年が大きな声を出して二人にお礼をした。

「あ、貴方達は僕の憧れです!! 僕も貴方達のような存在になって、世界中の困っている人を助けます!!」

「……そうね、頑張りなさい。貴方ならできるわ」

「でも俺たちみたいに泥棒にはなるなよ」

その言葉だけをかけて、アリアと遊輝は少年と母から離れていった。

「……分かっています。僕は貴方達みたいな才能はありません。僕は僕のやり方で

人々を幸せにします」

「・・・ねえソル、あの人達って何者？これだけのお金と泥棒って」

「あの人達は怪盗アリアと遊輝だよ!!世界最強の怪盗コンビだよ!!」

「・・・・・・・・えっ!？」

「さくで遊輝ちゃん。ようやく仕事終わったわね」

「そうだな、ようやくと休みが取れるな」

バイクで二人乗りをしているアリアと遊輝、既にローマのアパートは売り払い、すべての荷物を持って、ローマから飛び出した。

「んで、次は何処に行くんだ？俺としては休みたいんだけど」

「そうね、ナポリは今警察がうるさいし、フランスはこの前のことがあるからね
・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ピーポーピーポーピーポー!!!」

「ん？警察？」

『止まりなさい怪盗アリアと遊輝!!! 貴方達の行動はすべて把握しているわよ!!』

「おお、氷川刑事に桜刑事か、ご苦労な事だな」

「そうね、とりあえず警察との鬼ごっこが終わってからバカンスとろう!!」

「おう!!!」

遊輝はバイクのアクセルを上げて加速、二人はイタリア北部へと走っていき、その後ろを1000台近くパトカーが二人を追いかけていく。

今宵、世界のどこかに眠るお宝やお金は怪盗アリアと遊輝によって盗まれるかもしれ

ない……

「私たちに盗めないものは何一つ無いわよ♪」

「全く……無駄な時間^{ロツク}かけても全部同じなのに、俺が全部解除して斬ってやる！」

エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の物語 part

3 前編

それは、あり得たかもしれないパラレルワールドの世界・・・

もし、前世で孤児院暮らしをしていたアリアが遊輝と一緒にいたら、もし二人が亡くならず転生していなかったら・・・

アメリカ、カリフォルニア州キングス郡にある刑務所。

ここには強盗や殺人などで凶悪な犯罪者が収監されている。その特徴は最新鋭のセキュリティを備えたアメリカでも優秀な警戒度・・・レベル5の刑務所だ。

ゴロゴロ・・・

時刻は夜の9時、集団監獄の入り口の扉が横に開く。こんな時間だが今日もまた、新

たな収監者がやってきた。制服を着た看守に囲まれて、猫背で身長が低い40〜50代の男のようだ。髪の毛は黒いがぶつきら棒にはやしている髭は少し白い。

「ほら、入れ」

看守たちに連れられて、男は自身の牢屋へと入る。看守は扉を閉め、セキュリティに電子ロックをかける。

「明日から仕事についてもらうからな」

「へいへい、看守さんや。トイレは何処だ？」

「その隅だ。シャワーは毎日5時からだ。まあ今日の分は終わっているが」

「へいへい」

「んじやな。つたく、爺があので銀行強盗でこの監獄とは、世間は狂ってるな」

看守たちはその男性との会話を軽く切り上げる。集団監獄の入り口の扉に鍵が掛けられる。看守たちが監獄が出ていったのを確認した男はニヤリと笑い、右耳に右手を当てる。

「・・・おう、アリア。潜入したぜ」

『センキュセンキュ。助かるわ、次のお宝は兎にも角にも情報が必要だから』

男は右耳に隠された通信機を使い、外にいる者と連絡を取る。

『どう？セキュリティのレベルは？』

「何の何の、俺を誰だと思ってる。これくらいのレベルは余裕だ。それより、あいつの居場所はわかるか？」

『残念ながら詳しい場所は分からなかったわ。ただ、独房に入れられていることは分かった』

「独房か、なら大丈夫だ。この監獄の独房はこの建物の上にはしかない。入所前に説明を聞いたからな」

『行ける?』

「今からだったら行ける。明日の夜にはまた連絡できる」

『了解』

通信を切った男は猫背の状態から背筋を伸ばす。そしてカツラを取り、トイレの手洗い場で顔を洗う。男の本来の姿に戻った。男の名は怪盗遊輝、彼はとある目的のため、この刑務所に犯罪人に偽装して侵入した。

「さて……やりますか」

牢屋に閉じ込められている彼は何の苦労もなく、牢屋の電子ロックに触れて解除する。忍足で歩き、周囲を観察して牢屋から出る。

「(目標は……屋上の独房、『善意の間』)」

刑務所の最上階、善意の間。

ここに一人の男が囚人として入れられている。彼は数年前、とあるタワーに侵入して捕まってしまった盗人のリーダーだ。彼はベッドの上で座禅を組み、精神を集中している。そんな彼の目の前に女性の姿が写った写真が写真立てに入れられている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰だ」

「さっすがアメリカのスパイダーマン、グール。俺の存在に一瞬で気づくとは」

瞑想中の男は目を開き、自身が囚われている部屋の入り口を見る。決して開けられないことのない扉には腕組みをして壁にもたれかかっている遊輝の姿がいた。

「フン・・・・・・・・新しく入ったと噂を聞きつけたらお前だけか。あの女は？」

「今回のお宝の情報を集めている。無論、俺もあんたに用事があつてここにきた」

「若造が老いばれに何のようだ」

「分かるだろ・・・・・・・・あんたが潜入したタワーと獲物についてだ」

「……ゲートタワーとコロンプスの航海日誌か」

「せいからい!!!」

遊輝はポケットから超小型の記憶媒体プレイヤーを取り出し、それを壁に映し出す。そこに映し出されたのは数百メートルまで貫くタワーの地図だ。

「あの日、『仮面の斥候』はコロンプスの日誌を盗むため、リーダーのあんたがゲートタワーに潜入。外から操作するセキュリティピルにも潜入してゲートタワーを登り詰めた。そう、何もかも完璧な計画だった。だが、屋上の一步手前、あんたは待ち構えられていた警備兵に捕まってしまった……俺が聞きたいのはここだ。完璧だった計画、あの日、何があった？」

「……フン、つまらないミスだ。口にしたくもない」

遊輝は真剣な表情で男に問いたしたが、男は軽く鼻息を拭いて顔を背ける。その表情、仕草を見た遊輝は複数の考えを頭に浮かぶ。

「(……内部の裏切りか) 良いぜ、俺もそういう人に言えないミスは沢山してきたんだ。あんたのその答えだけで充分だ。これは礼だ」

記憶媒体プレイヤーの電源を切った遊輝はポケットに入れ、かわりに紙を取り出して男に渡す。

「……」

「ここから出た時に銀行に行ってくれ。最低限の金は用意した」

「そうか……なら俺もお前に対価を渡そう」

男は立ち上がり、写真立ての前まで移動する。写真立てを手にとり、裏側のロックを解除して一枚の紙を取り出し、遊輝に渡す。

「……これは？」

「弱者の館に行ってみろ。全てわかる」

男は写真立てを元に戻し、扉の方を見る。そこに遊輝の姿は既にいなくなった。男は写真立てに写った女性を見る。

「……お前は、まだ操り人形のままなのか？」

「アリア、情報を得た。今から脱出する」

『OK、道具は？』

「現地調達。そんな事しなくてもなんとかなりそうだけど」

『警備全てを電子ロックに頼るなんて馬鹿だよね。人間がいなくなったら終わりだよ』

「それじゃ……3時間後」

『了解』

情報を得た翌日の夜、遊輝はアリアとの通信を終えて牢屋の入り口の電子ロックに手をかける。時刻は深夜0時を過ぎたところ、見張りの警察官はいなくなり、このエリアは防犯カメラと電子システムによる警備に変わっていた。

「さて……赤外線センサーは無し、廊下あたりで出そうだな」

赤外線センターが見えるゴーグルをかけ、遊輝は電子ロックのかかった牢屋の扉を開ける。そのまますり足で牢屋を出る。

「(この時間のザルは……警備棟の真下、旧ゴミ焼却炉だ)」

ここに潜入する前にこの刑務所の地図、また刑務所の時間や警察官の一人一人の習性を徹底的にたたき込んだ遊輝は己の記憶だけを武器に脱獄にかかる。多くの囚人が寝ているエリアを抜け、囚人達と廊下を繋ぐ扉の電子ロックも解除、廊下へ抜ける。

「(……赤外線センターは無し、防犯カメラに頼りつきりか。これで世界最高峰の刑務所か、聞いて呆れるぜ)」

不適な笑みを浮かべた遊輝は少し駆け足で駆けていく。防犯カメラの位置も頭に入っているのか時々走る場所を変えながら走り抜けていく。そして、牢屋練と外の境界の扉が目に入る位置に入る。曲がり角の角に立ち、扉と近くにある防犯カメラを見る。

「……確かここが最難関だったな。普段はなんて事ない暗証番号だが、警備がザルのこの時間だけ指紋認証に変わるって、結局、その指紋が誰か分からないままだったか……」まあここまで来れば駆け抜けたらいいか

そう呟いた遊輝は軽い身のこなしで扉の前まで移動、すぐにポケットに入れている小さなタブレット端末を取り出し、コードを取り出して扉横の暗証番号を打ち込む機会に差し込む。タブレット端末に緑色の画面が映り、様々なコードが読み込まれ、扉のロックが解除された。

「ニシシシ、チョロいチョロい。さて、30秒後に警報機が鳴るな」

「……ウィーン!!ウィーン!!」

そう言った遊輝はそそくさと扉から出る。その数十秒後、刑務所に警報機が鳴り響く。暗く染まった刑務所が一気に明かりが着き、当直していた刑務官が慌ただしく廊下を走る。

「一体どうした!?!」

「おい!!南門の扉が突破されている!!」

「大変だ!!昨日収監した爺が脱走しやがった!!」

「何だと!?すぐに探し出せ!!」

ウイーン!!ウイーン!!

刑務所内、そして外にも鳴り響く警報機。刑務官が慌ただしくなる。牢屋にいる囚人たちも何事だと起き出し、騒ぎだす。

「うるせえ!!!」

「眠れねえじゃねえか!!」

「テメエらは黙つてろ!!全員黙つて座つてろ!!」

一部の刑務官は騒ぎ出した囚人を大人しくさせる。残りの刑務官は逃げ出した囚人を探し出す。日付を跨いだ深夜0時、多くの照明が照らし出す。その様子を警備棟の屋上から見ている奴がいる。

「クソ!!どこに逃げやがったあの爺!!」

「向ここの倉庫は!?」

「いねえ!!グラウンドは!!」

「……馬鹿だな。俺はもうここにいるんだよ。さて、それじゃここから出ますか」
そう言つて遊輝は簡易的のカイトを手取る。二、三歩下がった後、走り出して、壊して台と化したフェンスから飛び出す。その飛び出したタイミングで刑務所のライト

が彼を当てる。

「ヒヤッハー!!!」

「おい!!!あれ見ろ!!!」

「あれは・・・怪盗遊輝!!!」

「じゃあな税金無駄遣い者!!!お前ら良い夢見ろよ!!!」

そう言った遊輝はポケットから取り出し、何かを投げつける。それが地面に着いた瞬間、爆発を起こして煙が上がる。

「ゴホッ!!ゴホッ!!」

「く、くそ・・・目、目が見え・・・」

「な、何だ・・・急に眠気が・・・」

煙を浴びた刑務官がバタツ、バタツと倒れていった。

『おはようございます。さて、本日のトップニュースです。今日深夜0時過ぎ、カリフォルニア州キングスのコーコランの刑務所から囚人一人が脱走する事件が発生しました。当局の発表によりますと、脱走した犯人は捕まった当時、ダーレル・クリムゾン容疑者53歳としていましたが、一部の刑務官の話によりますと脱走したのは変装した怪盗遊輝だと話しており、混乱を極めております。カリフォルニア州警察は……』

「ふわぁ……」

「おはよう遊輝ちゃん。朝飯作ったわよ」

「センキュセンキュ。いや、拘束時間27時間はブラック企業だわ。」

カリフォルニア州サンフランシスコ、郊外の住宅街が並ぶエリア、ここに豪邸とも呼べる一軒家に二人の若い男女が住んでいる。歳不相応の若さで過ごす二人は一見普通の夫婦にしか見えない。男性の方は白Yシャツにネクタイをして、少しグリーンの入った会社の制服っぽいズボンを履いている。一方、女性の方はジーンズに白のシャツを着て赤いライダージャケットを着ている。

彼らは怪盗アリアと遊輝。世界中を跨ぐ怪盗コンビとして世間に知られること早10年近く経つ。彼らの実績は本物、ある時はホワイトハウスの金庫から、ある時は世界一の警備と言われる銀行から、ある時は悪徳成金から美術品と悪行を盗み出したりと、

折り紙付きだ。

「それで、弱者の館だったっけ？」

「そう、隠語だと思うんだけどな、そこに行つてこの紙の暗号を解けてよ。弱者つてどういう立場なのか」

「ふくむ……弱者……負け組つてことかしらね……社会的負け組……」
「社会的負け組だとしたらアレか？この辺だと貧困層が多いイーストエリアとかあるが」

「あの辺でそんな怪しいものは無いわよ。負け組……社会的負け組……孤児……」

「孤児？何で孤児なんだよ？」

「いや……私たちの奇遇を考えたらそうじゃない。孤児の私たちは社会的弱者でしょ？それにこの近くにそれっぽいものがあるじゃ無い、孤児院が」

「……確かに、そう言えばそのオーナーつて」

『続いてのニュースです。世界一の警備会社、キング・オブ・セキュリティのゲート・セキュリティが所有している世界一の警備タワー、ゲートタワーに世界的大富豪、ハリソン財閥のオーナー、ハリソン・ポーター Jr 氏が飛行船で到着、チャリティオークションに向けての準備を始めました』

遊輝とアリアは何気なく流れている朝のニュース番組を見る。そこには年老いた白髪の穏やかなお爺さんがガタイが良い、パツパツのスーツ姿で金髪のおじさんと握手をしている。

『ハリソン氏は石油王として石油売買で多額の富を産んでいて、ゲート・セキュリティのオーナー、アンドリユー・ゲート氏とは友好関係を築いており、ハリソン氏の数々のコレクションをこのタワーに保管しています。今回はそんなハリソン氏の一部のコレクションがチャリティオークションとして出品されるということで非常に注目を集めています』

『今回、このようなチャリティオークションをするようになったきっかけとは？』

『私ももう70を超える歳だ。下手したらもう手で数えるほどしか生きていられない。今までは自分のためにお金を稼いできたが、これからは子供達の未来に投資しようと思った。数年前から色々な場所に寄付してきたが、今回のオークションを通じて、多くの子供たちに夢と未来を持ってもらいたいと思ってな、それでオークションをすることにした』

『ハリソン氏はこのように発言しております。中でもこのオークションで目玉とされているコロンプスの航海日誌は既に一千万ドルを超える価値が付いており、ハリソン氏はこの金額全てを自身が経営する孤児院に寄付することです』

ニュース番組にはオークションの目玉とされているコロンプスの航海日誌が映し出されている。中央には光り輝く透明な鉱石がエンブレムがある。

「コロンプスの日誌、ね……そのマークとこのマークが一体どんな関係を持っているか……」

そう言つて遊輝は一つの新聞を取り出す。日付は今より一月前の新聞、その新聞のトップは衝撃的なものだった。アメリカのホワイトハウスの地下にある原爆をも耐える核シエルターが謎のドリル付きミサイルによつて粉々に破壊されて、貫通された写真だった。よく見ると、そのミサイルのマークと今回のコロンプスの日誌のマークが同じになっている。

「……ハリソンハウス、石油王、ハリソン・ポーターJrが運営する孤児院の一つだったな。なるほど、秘密が隠されていてもおかしくなさそうだ」

テレビを見て、ハムエッグを食べた遊輝はそう言い、コーヒーで流し込む。アリアはサラダを食べながら遊輝と話を続ける。

「可能性は高いでしょうね。実際、あの事件の前、ハリソンハウスにはグールの部下が侵入したって形跡があつたしね」

「おっしや、じゃあ次はハリソンハウスつて事だな」

「ハリソンハウスには私が行くわよ。遊輝ちゃんはこのつちお願いね」

「ええ．．．またあの何ちやつてセキユリティ会社のコントロールセンターに会社勤めかよ」

「頑張つてねサラリーマン♪。それじゃ、私は先に行くから」

先に朝飯を食べ終えたアリアは食器をキッチンのシンクに持っていき、洗い物をして乾燥機に入れる。

「さて．．．お仕事を始めますか」

「ここがハリソンハウスね．．．また随分豪華な孤児院ことね」

サンフランシスコ郊外にある大きな建物、ハリソンハウスの駐車場に一台のオープンカーが入る。その運転席から出た女性、アリアはサングラスを外して、孤児院とは思え

ない豪華な建物に舌を巻いた。車から降り、長い駐車場を歩いて建物の入り口へと入る。大きく明るい受付には沢山のソファがあり、数人の大人が座っている。奥のエリアには多くの子供が走り回り、彼・彼女らを世話するスタッフが慌てるように追いかける。「私たちもこんなに立派なところだったら人生変わってたんだろうな……」

「ハリソンハウスへようこそ。里親になられるのは初めてですか？」

入り口に入り、ポツリとつぶやくアリア。そんなアリアに事務員のような服を着た女性スタッフがアリアのところに近寄ってくる。

「ええそうよ。私も昔は孤児でね、今はお金があるから私のように苦勞をかけさせないようにしようと思ってね」

「なるほど」

「その前にこの施設見学して良い？どんな子がいるのか見てみたいわ」

「かしこまりました。では初めにこちらの建物のご紹介をさせていただきます」

事務スタッフの事務的な言葉にアリアはうなづき、孤児院の中へと入っていく。

「こちらハリソンハウスは孤児院ですが、それだけではなく、病院や子供預かり施設を併せ持つ総合福祉施設であります。オーナーであるハリソン氏の『子供たちに苦勞をかけさせない』という思いから、家庭を持つ子供から孤児の子まで多くの子供たちの家になることを目指しています」

「へえ〜」

「きやつ!!」

「こら!!走らないでよ!!」

元気な子供達はスタツフを困らせながら遊んでいる。その様子を見てアリアの表情はとて穏やかになる。

「良いわね。子供達が苦勞を掛けずに大人になるっていうのは分かるわ。あんな苦勞、私たち二人だけで充分だし」

「……と、このようになっております」

「ふうくん、凄いわねこの施設。じゃあ、見学させてもらいますね」

「はい、ぜひ、里親になっていただくのを心待ちにしております」

事務員は45度の角度で頭を下げて私から去っていった。

「……さあて、仕事しますか。グールちゃんのメモと……」

アリアはライダースジャケットに入れた小さな紙切れを取り出し、開く。そこにか書かれていた内容を頭の中で何度も復唱する。

「(エデンの園に禁断とされる果実あり……か、エデンの園に禁断の果実と聞けば間違いないくアダムとイブね。エデンの園か……)」

アリアはキョロキョロしながら近くにあるこの孤児院の地図を見る。大きな平家の

「ここね．．．あとは禁断の果実か．．．床がガタガタとしていて言うけど、この広い施設の中探すのは苦勞するわね．．．誰か詳しい人はいないかしら？」

「あくめんどくせえな床掃除．．．他の奴らは遊んでいるのに何で俺だけなんだよ．．．」
立ち上がったアリアは中庭に入ってくる一人の男の子を見つめる。ブツブツと呟くその男の子は凄く不満そうな表情をしている。アリアはその男の子の服を見つめる。

「(あの服はこの施設の寝巻きね．．．ってことはこの施設のことを詳しく知ってそうね)」

「ったく．．．床汚したのは俺のせいじゃねえつうつの．．．」

「ねえ僕、良かったらお姉さんが床掃除してあげるよ」

「えっ？」

「その代わり条件があるんだけど良いかしら？」

アリアはその男の子に近づき、代わりに掃除をしてあげると言った。普通、こう言う怪しい言葉には誘わないのが常識だが、この男の子はアリアの言葉に簡単に乗ってしまった。

「条件って何？」

「簡単な話よ。この施設に不自然にグラつく床が一箇所あるって聞いてね。その場所を教えて欲しいんだ」

「それだけ？それだけだったら良いよ。はい、これ雑巾とバケツ。床のぐらつく場所は西側の奥の方、遊具が入っている倉庫室の近くだよ」

「ありがとう、じゃあみんなと遊んでおいで」

「うん!!」

男の子はアリアにバケツと雑巾、そして情報を教えて笑顔で中庭から出ていった。アリアは入ったバケツと雑巾を中庭に置いた。

「西側の奥の遊具倉庫の近くね・・・」

「ここね。確かに不自然にグラついてるわね。よつと・・・」

男の子に言われた場所にたどり着いたアリアは不自然にグラつく床を見つけた。その場所の床を外す。その中にリングゴのマークがついた鍵が見つかった。

「これが禁断の果実ね。さて、エデンの園に向かいますようか」

鍵を手にしたアリアは床を戻し、中庭へと戻る。中庭に入り、誰もいないことを確認したアリアは、先程の鍵穴の場所に鍵を入れる。カチツと音が鳴った鍵を時計回りに9

0度回し、壁を開く。その中に古くなっている紙を1枚があった。アリアはその神を手にして広げる。そこには巨大タワーの大きな見取り図があった。

「へえ、ゲートタワーの地図ね。こんなものこんなところに隠していたのね。グールちゃんやるわね、うん？」

広げた紙を見て感心したアリアは広げた紙から落ちる一枚の小さな紙を見る。そこにはシユバインタワーの入り口の小さな建物に赤字で丸がされていた。

「ははあ……ここが入り口ね。こりや想像以上の収穫だわ」

ホクホク顔のアリアはその紙をジャケットのポケットに入れる。目的の物を手にしたアリアはそのままこの施設から離れることを決意、すぐに施設の入り口に戻る。その受付は多くの警備員が立っていた。

「(……あれってゲート・セキュリティの警備員じゃない。何でこんなところに来たのよ?)」

「来た……キャサリン令嬢よ」

「令嬢？」

入り口から一人の若い女性が入ってきた。施設の職員が女性に頭を下げて、そのまま施設の中に入っていく。女性が奥に入っていくにつれて、警備員もついていく。やがて警備員が全ていなくなり、受付はいつもの通りになる。

「凄い綺麗ね・・・さすがハリソン氏の令嬢だわ」

「ねえ、あの人って誰？」

「えっ、ああ、初めての里親の人ですね。あの人はキャサリン・ハリソンであのハリソン氏の令嬢何ですの。ハリソン氏以上に孤児を大切にする人でとても優しいお方ですわ」

「ふん・・・」

「ところでお客様、里親の件は・・・」

「すみません、施設を見学しましたが、私にはまだ子供を育てる自信が「そうですね。まずは罪を償うところから始めないと行けないですから」そう、まず罪を償うところ・・・えっ?」

シュツ!!バシン!!

「捕まえましたよ怪盗アリア!!」

施設の職員と話していたアリアだが、途中で第三者からの声に驚く。次の瞬間、アリアの右手に手錠が掛かった。その先を見つめると黒スーツの服を着た女性二人組がアリアを睨みつけていた。周りはこの事態に追いつける野次馬が集まってきている。

「あれま、氷川刑事に桜刑事じゃない」

「ようやく見つけましたよ。犯罪者がこんな所で何をしていますか?」

「何って里親になるかを考えていたからここにいるんじゃない。私何も悪いことしてな

「よっ。」

「よくもまあそんなことが言えますね。ここであなたの罪状言つてあげましょうか？」

「おい！あの女、怪盗アリアらしいぞ!!」

「マジかよ!?!じゃあアイツら警察か!?!」

「んもう、折角良いことしていたのに・・・」

「大人しくしなさい!!貴方には署で聞きたいことがあるのよ!!」

「はいは〜い!!それじゃここにいる皆さんに特別ショーを見せてあげるよ!!」

『おおおう!!!』

「ここにただの木の杖があります!これをこうして振ると・・・」

「!?桜!!」

「はい!!」

「えい!!」

アリアが左手に出現させた木の杖を横に振る。二人の刑事は私が何かすると感じ、桜刑事が走り出したが時すでに遅かった。

「!?ワアアアアアア!!」

「!?桜!?!」

『おおおう!!消えた!!』

『どこに行つたんだ?!』

「きやああああ!!!」

「?!さくく」

ドオオオオンンン!!!

杖を振つたことで走り出した桜刑事の足元に黒い穴が開いて、その中に落ちる。みんなが驚いた表情をして、氷川刑事だけが悲鳴を聞いて上を向ける。上には足元に開いたのと同じ黒い穴が開き、そこから桜刑事が落ちてくる。二人は頭から激突して倒れてしまい、桜刑事は気絶してしまう。

「で、この繋がっているロープ外して……こうやつて投げると……」

アリアは右手首に挟まった手錠を左手に持っていた木の杖で鍵穴にさして外し、それに繋がっていたロープを回し、二人に向けて投げる。ロープは不思議な動きをして二人まとめてぐるぐる巻き、マミイケーションにしてしまった。

「ちよ?!こ、これは?!」

『おおう!!!』

「じゃあ今日のマジックショーはこれまでね」

『ワアアアアア!!!』

「ま、待ちなさい!!」

アリアは笑顔で子供達に手を振り、施設から出てしまった。子供達は拍手と歓声を上げる。氷川刑事は声を上げるだけで何も出来なかった。

「はくい遊輝ちゃん♪そっちの調子はどう?」

『昼休憩中に電話かけてくるな。折角の昼飯の時間を台無しにするな』

孤児院から車に乗って逃げ出したアリアは運転しながら遊輝に電話する。

『まあほぼセキュリティセンターの構造やゲートタワーに繋がるシステムは把握した。後は起動時に誰もいないようにするだけだな。ザル警備で助かるぞ、パスワードは副社長の不倫相手だし、サボりばっかでパスワードの解読法盗めるし』

「こっちと違って順調そうね」

『ん？何かあったのか？』

「働きの刑事が孤児院まで来てね、お陰で無賃でマジックショーしなくちゃいけないようになった」

『あく、それは確かに大変だな』

「その代わりちやんと目的の物は手に入ったわよ」

『ああそうだ、思い出した。目的のものといえば、ゲートタワーに侵入するときにはセキュリティカードが必要なんだけど、そのカード、こつちでは手に入らなくてさ』

「ええ、それが本当の目的なのに空振りなんて」

『その代わり、朝出社する前にグールの部下を捕まえて聞き込みした。グールのアジトにセキュリティカードを残しているらしい』

「おつ、ナイス遊輝ちゃん」

『イーストの低所得者が住む地域の廃屋がグールの元アジトでそこにセキュリティカードが隠されているらしい、ヒントは祝福の鐘だよ』

「祝福の鐘、ね。了解」

『そんじや俺は昼飯に戻るぞ』

「ありがとうね」

ピツとボタンを押し、電話を切ったアリアはそのまま急ハンドルを切り、車を180

度回転、反対車線に入り、エンジン音を鳴らして走り出す。

ギユルルルルルル!!!!!!

「ここが元アジトね、完全に廃墟だけど建物はまだまだ綺麗ね」

ウエスト地区の外れ、人々がいない木々の中にポツンと建てられた木屋の建物。ここに車が停車、アリアは運転席から降りた。

「さて……何処から探そ、ん？」

人の気配がする。そう感じたアリアはすぐに物陰に隠れ入り口を見つめる。廃墟の門の扉が開き、そこに一人の女性が花束を持って入ってきた。アリアはその女性を見てすぐに頭を巡らせる。

「(あれは……キャサリン令嬢？何でこんなところに?)」

「……………」

廃墟に入ってきた女性、キャサリン令嬢は何も語らず、寡黙に廃墟の中央にある何か

のモニUMENTまで歩き、膝を折る。そのまま花束を置いて祈り始める。

「(こんな汚いところに何で……ん?)」

ササササ

何か、足音の忍足の音が聞こえた。キャサリン令嬢が振り向くと、謎の武装集団6人が大型銃をキャサリン令嬢に構えていた。キャサリン令嬢はそれを驚いたような表情をした後、何かを悟ったように顔を下に向ける。

「裏切り者には制裁を……」

ドドドドドドドドドド

武装集団は無防備なキャサリン令嬢に銃を乱射する。辺りは土埃と煙で見えなくなる。風が吹き、煙と土埃が晴れる。そこにいたのは驚いた表情をしたキャサリン令嬢と目の前に立っているアリアだった。

「なっ!?!」

「レディ一人に向けて何やってるのよ、『仮面の斥候』」

「き、貴様……」

「さくて……ちよいとお仕置きしないとイケないね!」

右手にピストルを持ったアリアはそのまま近くにいた武装集団の一人にツツコミ、腹に右足で蹴りを入れ、反対側の武装した人に銃を二発放ち、右足と右手に命中させる。

「ゴホツ!!」

「ガハツ!!」

「くそっ!!この女も始末しろ!!」

「フリージングブレス!」

アリアは左手に現れた木の杖を持ち、振る。武装集団の二人の足元から氷付き、やがて氷の像が出来上がる。

バン!バン!

バババババン!!!!

「はあ!!!」

「グハツ!!」

アリアは二発放ち、正確にその氷の像の左手の銃を破壊する。その間に残りの武装集団二人がアリアに向けて銃を乱射するがアリアはすぐに駆け抜けて銃を回避、そのまま一人の頭を殴りつける。男はすぐに倒れ、アリアはその男から大型銃を盗み、残りの男に照準を合わせて銃を乱射する。

ババババババ!!!!

「グハツ!!」

銃を乱射された男は右手を損傷、銃を離してしまう。すぐにアリアはその銃を奪う。

これで、相手は丸腰になってしまった。

「クソツ……撤退だ!!」

最後に攻撃を受けた男は撤退を命令、生き残った4人はすぐに撤退、凍りついた像はそのまま取り残されてしまう。アリアは木の杖を振り、その氷の像を遠くに放り投げてしまった。

「大丈夫でしたか?」

「はい……ありがとうございます」

「まさかここでハリソン財閥の令嬢と再会できるとはね……それにしても何でハリソン財閥の令嬢が何故ここに? 貴方みたいな高貴な人には関係ない所でしょ?」

「……私はこの孤児院の育ちです」

「はっ?」

「……ここは昔孤児院でした。ただ、経営が上手くいかず、潰れそうなところを養父が引き受けてハリソンハウスに引き取ってもらったのです」

「……そうか、貴方はラッキーね。今では裕福に暮らせるんだから」

「……確かにそうです。ですが、私みたいな子供には世界に大勢いらつしやいます。そう思うと……胸が痛くて……」

キュルルル

キャサリン令嬢と話すアリア、目の前の道路に高級車が一台到着、門が開かれ、ゲート・セキュリティの警備員が廃墟の庭に入ってくる。

「お嬢様、お時間です」

「迎えが来たみたいよ」

「……はい、そう言えば貴方は何故ここへ？」

「ん？ああ、ちよつと探し物をね。ここに祝福の鐘があるって聞いてきたの」

「祝福の鐘？……あつ、もしかしたら教会の鐘のことかしら？」

「教会の鐘、ね。情報をありがとう」

「いえ……これくらい先程の」

「大丈夫大丈夫。ほら、行きなさい」

「はい……」

キャサリン令嬢はアリアに頭を下げ、門から出て高級車に乗り込む。警備員は運転席と助手席に乗り込み、車は動き出した。それを見たアリアは廃墟の方を見る。

「さて……祝福の鐘を見ますか」

キャサリン令嬢を見送ったアリアは早速廃墟の中へと入る。中は荷物が散乱として蜘蛛の巣が貼っているが人は簡単に通れるくらいにある程度は整っていた。アリアは何の苦勞もなく奥にある教会へと行き、鐘の前に着く。

「こいつね……とりあえず鳴らしてみましようか」

……カーン、カーン……

廃墟に鐘の音が鳴り響く。すると金の反対側の壁が動き出し、機械のスイッチが現れる。アリアはそのスイッチのところまで歩き、ボタンを押す。

……ゴゴゴ

スイッチを押すと上から天井が降りてくる。そこには上に行く秘密の階段があった。アリアはその階段を登る。階段を登った先には6畳ほどの小さな部屋があり、ボードには多くの紙が貼り付けられ、机の上には本が置いてある。

「なるほど、グールちゃんの隠し部屋ね……おつ、セキュリティカードみつけ」

アリアは机の上に置いてあるカードを手にする。それはグールが作ったであろうゲートタワーの偽セキュリティカードだ。

「これで必要な物は揃った……オークション日は5日後、その3前に再びハリソンJrの飛行船がくる。決行日は3日後ね」

「ただいま、あゝ疲れた・・・」

「お帰り遊輝ちゃん」

時刻は夜7時、制服姿の遊輝はビジネスバッグを置いて冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出す。

「必要。パーツは全部揃ったわよ。3日後に決行するわ」

「OK OK、じゃあ上手くやって主要な従業員以外は来ないようにする」

「センキュー」

「それとアリア、気になるもの見つけたぞ」

「気になるもの？」

ペットボトルのお茶を飲んだ遊輝はビジネスバッグから一つの書類を取り出す。アリアはその書類を手に取り、一枚一枚を目に通す。

「・・・これは？」

「オークションの参加者だ。一部は反アメリカ国家の軍人や政府役人、ほとんどは武器

密輸商人に極悪犯罪者、反政府組織などだ」

「これ、本当なの？ 今回のオークションって歴史的遺産の物ばかりでしょ？」

「そんなの一部だ。ハッキングしたらオークションするのは武器や重要機関の施設の地

図だ」

「……………」

「チャリテイオークションだと思ったけど、どうやらハリソン財閥とゲート・セキユリティ、ゲートタワーぐるみで何か隠しているぞ」

「……………なるほどね。そうなると目玉のコロンブスの日記も何かあるわね」

「そういう事。グールが捕まったのもゲートタワーの秘密を知ったからかもしれない」

「ふむ……………まあ関係ないわ。予告上してくるね」

遊輝との話を終えたアリアはクルツと足を返し、リビングから出た。

次の日の新聞、全ての新聞のトップニュースはとあるニュースで飾った。

『ごきげんよう、ハリソン財閥とゲート・セキュリティ様。

去る△月○日、チャリテイオークションに出品するコロンプスの日記を頂戴しに参ります。

怪盗アリアと遊輝』

エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の物語 part

3 中編

ゴゴゴゴゴ!!!

『ご覧ください!! 私たちの目の前にある建物は世界一と言われる警備会社、ゲート・セキュリティが所有するゲートタワーです!! この世界一の警備タワーと言われるビルにあの怪盗アリアと遊輝が予告状を出しました!! 地上では多くの警察官が警備をしています!!』

「良いわね!! 必ず怪盗アリアと遊輝を捕まえるのよ!!」

『はい!!!』

怪盗アリアと遊輝が予告状を出してから2日後、舞台となるゲートタワーは物凄い雰囲気醸し出していた。周りを飛ぶヘリコプター、地上の周りにもカメラマンやマスクミが群がる。ゲートタワーの入り口には1000人近くの警察官がいて、それを指揮する氷川刑事と桜刑事にも気合が入る。氷川刑事は反対側に向き、ゲート・セキュリティの警備員を両側につけたキャサリン令嬢に目を向ける。

「必ず私たちが二人を捕まえます」

「お願いします……」

会釈をして簡単に挨拶をしたキャサリン令嬢はそのまま入り口へと入っていく。その様子を物影から見ている一人の女性がいた。その女性はその様子を見た後、ゲートタワー近くにある電気室に入り、とある所で床を蹴る。すると電気室の床が自動で動き出し、下に続く階段が見えた。

「……遊輝ちゃん、行くわよ」

『OK、こっちも大丈夫だ』

電気室に入った女性、マスクをつけ、マントをつけ、怪盗服を着たアリアは無線をつけセキュリティ会社に侵入している遊輝と連絡を取り、ゲートタワーに侵入する。

「いよいよ世界最強の警備会社との激突ね……どっちが勝つか、やってやろうじやない」

アリアは電気室の地下に続く階段を駆け降りる。世界一の怪盗コンビと世界一の警備会社による長い一日が始まる。

ゲートタワー30階、事前に仕入れていたゲートタワーの女性制服に着替えたアリアは順調に潜入していた。アリアは現在、中央の吹き抜けエリアに到達している。

「……遊輝ちゃん」

『中央管理室だ。一部の役人しか入れない極秘の部屋で、屋上にある飛行船に行くにはそこから行くしかない、その研究室を動かすのには90階にある研究室からカードキーを入手しないとイケない』

「90階ね、了解」

通信を終えたアリアは職員のフリをしながら廊下を歩いていく。

「確か50階で立体認証装置で登録しないと、上にいけなかったわね。職員から話を聞いたって良かったわ」

「ご苦労様」

「ご苦労様です」

「そっちは警察官が多いから気をつけてね」

「ええ、ありがとう」

深く考えながらも途中すれ違う職員とは普通に挨拶をするアリア。上に行くエレベーターに乗り、50階のボタンを押す。エレベーターはすぐに動き出した。

「……………とにかく慎重に行きましょう。何を仕掛けているか分からない物騒な所だ

わ」

エレベーターは高速で進み、すぐに50階に到達。エレベーターが開くと、すでに数人の警察官が見回りをしていた。一人の警察官はエレベーターから降りたアリアを見て近づく。アリアは職員フリをして警察官に話す。

「ご苦勞様です」

「ご苦勞様です。どのようなご用件で？」

「資料を取りに上に行ってるの。大丈夫かしら？」

「はっ、大丈夫でございます」

「ありがとう」

右手を上げて挨拶をして笑みを浮かべるアリア、警察官も軽く頭を下げて素通りしてしまう。そのままアリアは何事もなく進み、50階の立体認証装置の認証も登録、すぐにエレベーターに乗り、90階へと目指す。

エレベーターは数分間上昇、90階へと到達。エレベーターが開き、廊下を歩くアリア。不気味なくらいに人はいない。

「(……認証装置があるくらいだし、ここは一部の人間にしか使われていないのかしら……) 何これ？」

廊下を歩き、突き当たりの部屋に入ったアリア、その部屋は今までの部屋とは全く

違っていた。研究室のような見た目をして、中央部分にはミサイルの模型が飾ってあり、壁の電子ボードには設計図が映し出されていた。

「はあく、物騒な研究をしてるわね。世界最強の警備会社は世界最大の武器製造組織かしら？おっと・・・カードキーみつけ。遊輝ちゃん」

『聞こえている。そのまま30階まで降りてくれ。その間に俺も中央管理室を動かせるようにしておく』

「センキュセンキュ」

『それと、50階の警備が一気に強くなった。あの二人もいるみたいだぞ』

「面倒ね・・・しょうがない。裏道を使って行きましょう。着いたら連絡するわ」
『了解』

無線を切ったアリアはそのまま研究室の天井を見つめ、換気扇を見つめる。机に立ち、換気扇を外し、換気口を見つめる。

「ここからなら行けるわね」

アリアはそのまま換気口の中へと入っていった。

ゲートタワーから数km離れたオフィス街。多くのビル群がならぶこの街にある5階建ての建物。この建物はゲートタワーを外部から管理しているセキュリティ会社である。そんな会社の1階に一人の眼鏡をかけた社員がビニール袋を持ってぶつぶつと何かを呟きながら歩いている。

「さて、いよいよ俺の本領発揮だな。中央管理室を動かせるのは3階だったな」

彼は遊輝、現在進行形で侵入しているエリアを手助けするため、数ヶ月前から単身でこのセキュリティ会社に偽名を使い、サラリーマンとして侵入していた。彼の頭にはゲートタワーのセキュリティがどこの担当なのかハッキリと分かっている。

彼はすぐにエレベーターに乗り、1階から3階へと移動、近くにある部屋に入った。部屋は中規模の大ききさで目の前に大きな画面が映り出されている。そんな画面を一人の職員が管理していた。遊輝はその職員の近くまで移動して肩を叩く。

「いようお疲れ!」

「ん? ああお疲れギラン。お前も休日出勤か」

「そうなんだよ。つたく、折角社長が気前よく休みを配ったのに」

「俺たちついてないな」

「全くだよ」と遊輝は一言言って、彼の隣に座った。実はこの休みというのは予め遊輝が仕組んでいたものだ。予め社長と副社長に偽の出張話を入れて出張させて、重役たちがいないタイミングでほとんどの社員に休みを申告していたのだ。

「ほらよ、コーラとポテチだ。これ飲んであと数時間頑張ろうぜ」
「おっ、分かってやがるな」

遊輝は手にしていた袋から500mlのペットボトルのコーラ2本とポテトチップスを取り出す。社員は気前よく受け取り、ペットボトルを開けて、豪快に飲む。

「・・・ぷはあ！喉が渴いていたから一気に飲んでしまった」

「豪快だなお前」

「ふわあ・・・なんか眠くなってきたな・・・」

「おやつ後の昼寝か？別に良いぜ。俺が見ておくし」

「そうか・・・サンキュー」

豪快にコーラを飲んだ社員は欠伸をしまい、自分が座っていた椅子から立ち上がり、部屋の隅にある休憩ソファに寝っ転がってしまう。そのまま欠伸を立てて寝てしまった。その様子を見た遊輝はニヤリと顔を笑い、パソコンを操作する。

「(ニヒヒヒ・・・あのコーラ、睡眠薬仕込んでおいたのさ。パスワードは複数あるが予め副社長から全部聞いて、どれがどのパスワードか検討付いている。ここは・・・こ

れだな)」

カタカタとキーボードを操作してパスワードを打ち込む遊輝。画面には「OK」の文字が出て、30階の中央管理室の電源が入る。

「……アリア、中央管理室の電源が入った。近くにある壁のスイッチを押せば入れはらずだ」

『OK、ちょうど着いたところよ。いや、氷川刑事とか桜刑事がいて焦ったわ……これね』

「そのまま中央管理室から100階に行ってくれ、そしたら110階に行くエレベーターがあつて、そこに重役室がある。その部屋に飛行船の展示室の鍵となるカードキーがある」

『了解、何かあつたら連絡するわ』

無線を切った遊輝、彼はそのままパソコンを操作する。

「……この会社でかかるセキュリティはこれで全部のはず。後は……ん？」

パソコンを操作している途中、遊輝は画面に映っている一人の女性を目にした。先ほど、アリアがいた90階の研究室にその女性が入ってきたのだ。

「(ハリソン財閥の令嬢がなんでそんな所にいるんだ? ……まあ良いか)」

彼は少し悩みながらもすぐにこの部屋から出る。そして部屋の横にあるパスワード

に自信の端末から伸びたコードを繋げ、部屋のパスワードを変更、誰もこの部屋から入れない、出られないようにした。

「これでよし……さて、俺も本丸へと目指しますか」

中央管理室に乗り込んだアリアは壁にあるカードリーダーにカードキーを挿入する。そのまま管理室ごと上に上昇していく。この管理室ごとエレベーターになっている仕組みのようだ。ここから先には一部の役人しか入らない秘密のエリアとなっている。ゲートタワーの制服も役に立たないと判断したアリアは制服を捨て、怪盗服に着替え直した。そのまま管理室は100階に到達。入った時とは反対側の扉が開くと目の前にあった物に目を開いた。

「うわぁ……セイントにドリル型装甲、核弾頭つて……なんて物を開発しているのよこの警備会社」

中央管理室から抜けた研究室は武器開発研究室となっていた。先ほど見たミサイルとは比にならない。核弾頭など様々なものが研究、開発されているのが目に入った。ア

リアはじっくりと研究室の中を見て、持ってきたタブレットに写真を撮る。そして一つの武器を目にする。

「(……1ヶ月前にホワイトハウスの核シエルターをペチャンコにしたドリルね。ましますこの会社黒じゃない)」

ため息をついたアリアはその模型と設計図を盗み、自身のカバンの中に入れたタブレットを取り出し、写真を撮る。そのまま操作してネットの世界にアップした。

「さて……お仕事の続きといきましょうか。110階の重役室に置いてあるカードキーを取らないといけなかったわね」

アリアは研究室を抜けてエレベーターに乗り込んだ。エレベーターは先程までとは違い、ゆっくりと上に上昇していき110階に到達、エレベーターの扉が開き、アリアはそのフロアを見る。先ほどまでの社員が通るような廊下ではない、大理石が詰められた高級感のある廊下となっている。その廊下を歩き、一つの部屋の前に立ち、部屋に入る。目の前に大きな机がある。目的の重役室に着いたようだ。壁の四方に等間隔で人間の絵が飾られている。

「(……随分多く絵が飾ってあるわね。逆に不自然だわ)」

アリアは壁に近づき、1枚1枚絵を叩く。4枚目の目を叩いた時、空洞のような響く音が聞こえ、アリアはその絵を壁から外す。目論見通り、そこにはカードキーがあった。

「これ……ん？」

パツ、バババババ

「わわわわわ!!!」

突如、重役室に入ってきた謎の武装集団、彼らは一斉にアリアに目掛けて銃を乱射、アリアは慌てながらも回避して机に隠れる。アリアは懐から銃を取り出し、安全引き金を抜く。

「いててて……危ないじゃないの仮面の斥候！何してくれるのよ!!」

「そのカードキーをこちらによこせ、そうすれば危害は加えない」

「あいにく、天気予報と悪党の言葉は信じない主義でね！」

バン!!バン!!

机から身を乗り出したアリアは懐から取り出した銃を二発撃つ。その弾を武装集団は避けてアリアが隠れる机に接近する。

「?!いない!!何処だ!?!」

「ここよ!!セイ!!」

「グホツ!?!」

武装集団は机に潜んでいるアリアに向けて銃を向けたつもりだったが、誰もいなかった。そのアリアは後ろに周り込み、襲ってきた二人の頭を殴りつける。

「この野郎！」

バババババ!!!バン!!

やられた二人を見て、残りの一人がアリアに向けて銃を乱射、それをアリアは部屋を駆け抜けて回避、そのまま男の右手に銃を一発撃つ。

ガン!!

「ぐっ!?!」

「この武器は貰っておくわよ！」

「チツ……撤退だ！」

右手に持っていた銃に当たり、男は反動と痛みで手放してしまう。それをアリアは奪い、逆に男に向ける。男は舌打ちをして起き上がった二人に撤退命令を出し、武装集団は逃げていった。

「ふう……」

アリアは奪った銃を捨て、カードキーを懐に入れて重役室から出る。そのままぶつくと文句を言いながら角を曲がる。

「どうなっているのよこの会社……変な集団は出てくるし、物騒な研究はしているし、警察は多いし……ん?」

文句を言い続けるアリアは曲がり角を曲がったところで足と意識が止まってしまう。

その対面には警官を引き連れた桜刑事がいて、彼らも角を曲がったところで足が止まった。

「……アリア!!逮捕よ!!」

『わあああああ!!』

「今度は桜刑事!?!」

桜刑事は引き連れた刑事に大声を出す。アリアは襲ってくる警官の一人に顔面に蹴りを入れて、もう一人にもう一人に顔面でグーでパンチを入れる。蹴りを入れた警官の頭を踏み台にしてジャンプ、そのまま逃げ始める。

「待ちなさい!!」

「待ってって言われて待つバカはいないでしょ!!」

アリアはそう叫び、そのまま廊下を走って逃げ始める。桜刑事や複数の警察官も廊下を走りアリアを追いかける。

「止まらないなら撃つわよ!!」

バン!!バン!!

「ひいひい!!!暴力反対!!暴力反対!!」

「だったら止まって両手を上げなさい!!」

後ろから聞こえてくる銃声、横をすり抜ける大量の鉛弾、アリアは必死になって逃げ

る。そして目の前に扉が閉じかけているエレベーターが目に見えた。

「チャンス!!」

アリアはそのエレベーターに飛び乗る。エレベーターは閉まり、上へ上昇し始めた。

「くっ!!半分は階段を使って上に行きなさい!!残りは私と一緒に待ちなさい!!」

「はっ!!」

「はあく!!死ぬうう!!・・・うぐっ?」

バン!!

エレベーターで130階に到達したアリア、すぐにエレベーターから降りて道なりの廊下を進み、そのまま角を曲がる。だが、運悪く曲がった先は扉が開いていて、その扉にぶつかってしまった。

「?・・・はっ!?!ご、ごめんなさい!!」

「い・・・いいのいいのこれくらい!!」

「あ、あれ・・・あなた・・・」

「んあ?・・・ああ、キヤサリン令嬢!？」

「アリア!!」

「あつ、まず・・・じゃあ時間だから、またね!!」

「あ、あの・・・」

「ん?」

「アリア!!何処にいるの!？」

桜刑事が130階に到達、逃げたアリアを探す。角を曲がった先にソファに座っているキヤサリン令嬢を見つけた。

「つとと・・・すみませんキヤサリンさん。怪盗アリアを見つけませんでしたか?」

「怪盗アリアですか?・・・そう言えばさつき変な服にマントをつけた人があつちに逃げた」

「あつちよ!!すぐに追いかけてください!!」協力感謝します!!」

「い、いえ・・・」

「怪盗アリア!!待ちなさい!!」

桜刑事はすぐに部下に指示、キャサリン令嬢にお礼を言って自身もすぐに追いかける。桜刑事が出て行つてしばらく、キャサリン令嬢は誰もいなくなったことを確認して、ソファの座椅子の部分を上上げる。

「……もう大丈夫ですよ」

「ふいふ、助かった助かった。ありがとう」

座椅子の中にアリアが隠れていた。アリアはソファの中から立ち上がり、軽く背伸びをする。

「それにしても何で私の手助けをしたの?あなた、私の敵でしょ?」

「……」

「キャサリン令嬢?」

「……コロンプスの日記はハリソン号の2階の展示室です。これ以上は何も言いません」

「ちよ、ちよつと!?!」

キャサリン令嬢はそう言い残し、この場から走つて去つてしまった。アリアは手を伸ばして捕まえようとしたが、逃げられてしまった。

「(……何かあるわね。8割9割は罠、そして彼女自身も何かを抱えているわね……)」

まあ良いや、さっさとお宝を盗りましようか」

アリアは去つてしまつたキャサリン令嬢とは別の、そして桜刑事とは違う道を走り出す。すぐに屋上への階段を見つけ、その階段を登り出す。そして、屋上へと辿り着いた。目の前には目的のお宝が眠っている超巨大飛行船、ハリソン号が停泊していた。

「……着いたわ、ハリソン号。一体、どんな罠を仕掛けているのか、楽しみだわ」
アリアは屋上で停泊しているハリソン号の中へと侵入していく。

ハリソン号の中に潜入したアリア、エントランスは飛行船とは思えない豪華な作りとなつており、高級ホテルのロビーを漂わせる。

「あの爺さん、金だけは本当に持つてるわね。次いでだから色々盗んで寄付してあげましょうか。確か、令嬢の話では2階の展示室だったわね。目の前に地図があるわ……登つて左ね」

アリアはハリソン号に入つてすぐ見えた地図のところまで歩き、目的の部屋を確認する。そのまま忍足で階段を登り、展示室へ向かう。

「……人の気配なすぎ、明らかに誘つてるわね」

階段を登り、左側の部屋に入り、廊下を歩く。不自然なくらいに人がいないこの雰囲気にはアリアは確実に何かがあると睨んでいる。だが、当の本人は関係ないとどんと廊下の突き当たりまで進む。そして、大きな扉と横にカードリーダーがある部屋に突き当たる。

「……ね……」

アリアは懐からカードキーを取り出し、カードリーダーにカードキーを差し込む。カードリーダーは反応して、扉がオープンされる。アリアは展示室の中に入る。飛行船の中の展示室はこじんまりとしており、所々に古代の貴重な物がある程度だ。アリアはそんな物を一才目にくれず、真っ直ぐ歩き目の前に目的のものが見つめる。

「……これがコロンプスの日誌ね」

アリアは目の前にある古い日記と綺麗に光り輝く透明な宝石のエンブレムを見る。目的のコロンプスの航海日誌だ。アリアはそれに手をかけようとした次の瞬間、上から防弾ガラスでできた侵入者を捕らえるガラスケースが落ちてきた。

「……！！」

アリアはすぐに体を回転して回避、そのガラスケースから脱出、ケースの中からは黄色い煙が出てきた。

「うわー．．．見るからに身体に悪い煙ね」

「そんな余裕、いつまで持つてられるかな？」

ヒュルルル!!バシ!!

「!?チツ．．．」

目の前に飛んできた物をアリアは木の杖を取り出して受け止める。木の杖はロープを絡んでしまう。展示室の入り口にはキャサリン令嬢とキング・セキュリティの社長、アンドリユー・ゲートがいた。さらにその二人の後を追うようにゲート・セキュリティの警備員がアリアを囲む。アリアとアンドリユー氏は杖を使って綱引きを続けている。

「さすがキャサリン令嬢、そしてさすが怪盗アリアだよ。この罠も簡単に避けてしまうなんて」

「これがグールちゃんが言っていたつまらんミスね．．．」

「さあ大人しくお縄についてもらおうか、君は我が社の秘密も嗅ぎつけそうだから生かしてはおけない」

「物騒な研究をしている悪党が何をほざいているのよ。それにしてもこんな崇高な偽物まで用意しておいて、本物は一体何処かしら？」

「本物のコロンブスの日誌は上の展示室に展示されている。だが、君には関係のない話だ。君はここで捕まるんだから」

「……ありがとうね、遊輝ちゃん!!」

「合点承知の介!!」

バン!!!

「なにっ?!!」

突如、横の壁が斬られ、崩れる音がした。そこにいたのは両手に一本ずつの黒い日本刀を持ち、アリアと同じ怪盗服にマント、そしてマスクをつけた怪盗遊輝だ。

「な、仲間が来たぞ!! そいつも捕らえろ!!」

「アリア!! 左前方に二発!!」

「了解!!」

バン!! バン!!

アンドリユー氏の命令で警備員はアリアと遊輝を囲むようにする。その前に遊輝は時計回りで走り出し、アリアに指示をする。アリアは左手で懐から銃を取り出し、二発放つ。その鉛弾に遊輝は狙いを定めて、手にしている左手の日本刀で一発、そして右手の日本刀でもう一発打ち返す。その弾き返された弾は天井にあるスプリンクラー、そして壁にある消火栓に当たる。

プー!! プー!!

部屋にあるスプリンクラーと消火栓は爆発と誤作動を起こし、消火栓の煙とスプリン

アリアは上から落ちてきたペンダントを手にする。緑色の紋章が入った少し大きいペンダントだった。

「おい、そんな事より行くぞ」

「は〜い」

「きゃあ!!」

「キャサリン令嬢!!ここは危険です!!非難を!!」

「ま、待って!!わ、私の・・・きゃああ!!」

「ガハツ!!誰だ私を殴っているのは!?!」

「桜!!スプリンクラーを止めて窓を開けるんだ!!」

「はい!!」

桜刑事が部屋の周りを歩き、窓を開けてスプリンクラーのスイッチを止める。水の放出は止み、消火栓の煙も全て消えた。そこに怪盗アリアと遊輝の姿はいなかった。彼らは床に開けられた穴から脱出してしまった。その様子を見て、ゲート・セキュリティの

警備員と警察官たちは互いに身内同士を攻撃していたことに気づき、手を止めた。「くっ……また逃げられてしまった!! 覚えておきなさい!! 怪盗アリアと遊輝!!」
氷川刑事の声だけが偽展示室の中に響き渡る。

エイプリルフール 怪盗アリアと遊輝の物語

p a r

t 3

後編

『臨時ニュースです！ たった今入りました情報によりますと怪盗アリアと遊輝のコンビがゲートタワーに潜入したとの事です！ 繰り返しお伝えします！ 怪盗アリアと遊輝がゲートタワーに潜入しました！ 現場のジエファニーさん！』

『はい！ 私は今、ゲートタワーの入り口前にいます。現場は怪盗アリアと遊輝のコンビが出現したと情報が流れていますが、ゲートタワーからは何も発表がありません！ こちらは非常に混乱しております！ 見てください！ ゲートタワーの入り口ですが、何故かゲート・セキュリティの警備員が警察官を入れさせないようにしております!! どうしてこのような状況になったのか、こちらには何も情報が入ってきません!!』

ピッ………

「………どういう事かな？」

とある部屋………部屋の電気がつけられおらず、薄暗い部屋だが、ガラスケースにだけ照明が照らされていた。そのガラスケースにゲート・セキュリティ社の社長、アンドリユー・ゲートが囚われていた。足元には先程、展示室で放出した黄色い煙が出てき

た同じ換気口がある。アンドリユー・ゲートは土下座をして目の前の人物に謝罪している。

「も、申し訳ありません!!すでに奴らの足取りは捕らえています!!セキュリティ会社に侵入した形式も、奴らの今後の狙いもわかっています!それと、我々の秘密を知り過ぎた者にも制裁を加えます!!も、もう一度!!もう一度チャンスを下さい!!絶対に失望はさせません!!」

「.....」

椅子に座る人物は少しだけ考え、机のボタンを押す。ガラスケースは上に上がり、アンドリユー・ゲートは自由の身になる。

「あ、ありがとうございます!!必ず奴らを捕まえてみせます!!」

アンドリユー・ゲートは頭を下げ、すぐに部屋を出た。

「ほくん、つまりグールは偽の展示室で偽物のコロンプスの日記に掴まされて捕まったと」

「多分だけどね。他にも可能性はあるでしょうし、その前に捕まった可能性もあるでしょうけど、何処かで情報に踊らされたのでしょうか。実際、この飛行船の情報は極端に少なかったし」

飛行船、ハリソン号の1階、コントロール室。ここに怪盗アリアと遊輝は身を潜み、次なる作戦会議をしている。アリアは座り込み、逃げ出した時に落ちてきたペンダントを見つめる。

「このペンダント、何処かで見たんだけどなあ……」

「あの時に落ちたんだろ？あそこにいる誰かの持ち物だろ？」

「そうなんだけど……何処だっけなあ……」

「それよりその物騒な計画書と模型はどうするんだよ？」

「んあ？これ？これはもうネットにアップさせて拡散させているわ。今頃ネット住民が一斉に叩いている頃よ」

「物騒なこと考えてやがるとは思っていたが、想定外の斜め上をいつてやがったな……アリア」

「……ええ」

二人は何かの気配に気づき、それぞれ武器を構える。コントロール室の入り口が開く。

「いたぞー！」

ゲート・セキュリティの警備員達が声をあげ、銃を持ってコントロール室にやつてきた。アリアと遊輝はそれぞれ銃と日本刀を構える。

「またえらく早いお仕事ね……」

「アリア、ここは俺がやる。お前はさっさと物を盗ってこい」

「下手こいたら罰だからね！」

「お前が下手こいたからこんなことになったんだろ……」

アリアはすぐに反対側の扉から脱出。一方、遊輝は3本の日本刀を構え、ゲート・セキュリティに目を向ける。

「さくて……お遊びに付き合ってもらおうぞ！」

「とうりや!!」

「ぐほっ!!」

「ガハッ!!」

カラン!!カラン!!

ハリソン号のコントロール室から脱出したエリアは広い広い廊下を抜け、最初に入ってきたエントランスに戻る。2階の廊下にいる警備員を後ろから殴り倒し、再び展示室へと向かう。先ほど通った展示室の扉の前に立つ。だが、自動扉は空かない。

「あれ?・・・ああ、ロックかかっているわね。面倒くさいことしやがって、遊輝ちゃんがいればすぐにロック解除出来るけど」

『おうりや!!』

『グホッ!!』

「・・・お仕事で忙しそうね。仕方ない。確か一階に動力エリアがあったはずだからそっちから回りましょうか」

自動扉が開かないのですぐに反転したエリア。目的地をこのハリソン号にある動力エリアへと向かうことにした。エントランスの階段を降り、右側の自動扉に入る。曲が

り角を少し覗くと、ハリソン号の私兵達が銃を構えていた。

「へえく……やる気ね。ならこつちも答えてあげましょうか」

私兵を見つけ、通常の突破は困難だと判断したアリアは木の杖を取り出す。

「フアイア・イリユージョン」

「グアアアアアア!!!」

アリアはつぶやく。すると、廊下にいたハリソン号の私兵から大量の悲鳴が聞こえた。やがて悲鳴は消え、アリアは廊下に目を向ける。ハリソン号の私兵は服を真っ黒に焦げて気絶していた。

「さて、動力エリアに向かって展示室に戻るわよ」

「……ない……ない」

時は少し経ち、展示室。

先程、嵐があつたとは思えないくらい静かになっていた。そんな展示室にただ一人、キャサリン令嬢が床に目を向けて何かを探していた。

「可笑しい……この辺りに落ちているはずなのに……」

必死に探すキャサリン令嬢。その時、展示室の扉が開く。何事かと思い、キャサリン令嬢は目を向ける。

「はっ!」

「グール総帥を裏切った女狐には制裁を加える」

そこにいたのは3日前、廃墟で彼女を襲った仮面の斥候だった。彼らはキャサリン令嬢を取り囲み、銃を向ける。キャサリン令嬢は全てを悟り、目を摘りながら立ち上がった。

「……………」

「覚「女の子一人相手にやることじゃないって言ってるでしょ、仮面の斥候」になっ!?!」
何処からか別の者の声が聞こえた。仮面の斥候の舞台は展示室を見渡す。やがて、一人が左奥に動く人の影を見つけた。

「そこか!!」

ババババババババババ!!!!

その掛け声で仮面の斥候全員がその場所に銃を乱射する。だが、人の気配はしない。
「こつちよー！」

「きやあ!!」

すると、誰かがキャサリン令嬢の腕を引っ張った。

「そこだー！」

ババババババババババ!!!

仮面の斥候はキャサリン令嬢が隠れた柱に向けて銃を乱射する。柱から人が一人駆け抜けていた。右手に銃を持ち、左手に木の杖を持った女性、怪盗アリアだった。アリアは走りながら右手に持った銃を正確に構え二発放つ。

バン!!バン!!

「グホッ!!」

「ガハッ!!」

弾は全て仮面の斥候の二人の右太ももと左の腕に命中、出血多量となり戦闘不能となる。そんなことお構いなしに今度はアリアは木の杖を振る。仮面の斥候全員の足元に黒い穴が開く。

「ダークホール！」

「ギヤアアアア!!!」

傷を負った者も含め、仮面の斥候全員はその穴の中に落ち、完全に消えてしまった。アリアは銃を懐に直し、木の杖を消してキャサリン令嬢のところまで近寄る。

「ふう〜……グールちゃんの部下は何を考えているのよ全く……」

「……あの、なんで……私はあなたを」

「あつ、そうだ。はい、これ。探していた物でしょ?」

「えっ?」

アリアは銃を直し、ポケットの中から先程拾ったペンダントを取り出しキャサリン令嬢に渡そうとした。一瞬、キャサリン令嬢は受け取ろうとしたが、すぐに手を引き、顔を向けた。

「あなたが……持っていてください。本当なら仮面の斥候に渡すつもりでしたが、あの様子なので……」

「……貴方と彼らの関係は?」

「……仮面の斥候の目的を知っていますか?」

「表では窃盗集団だけど、本来の目的は大量破壊兵器の撲滅、だったかしら。そういえばこの会社、セイントの研究をしていたわね」

「!!さすがです……あのセイントは超合金ミサイルのドリルとなり、売られる予定なのです。そのデモンストラーションが1ヶ月前に……」

「あの大統領官邸の核シエルターもペチャンコにした事件ね」

「そうです．．．あれから裏組織が超合金の鉋物を買ってくれと押し付けるようになりました。あの超合金に使われる鉋石はコロンブスの日記にある航海地図を読み解かないと手に入られない代物です」

「つまりこのオークションの目的は．．．」

「．．．．．鉋物、クリストファーXです」

「なるほどね、それでオークションの連中は悪党ばかりな訳だ。これで私たちもチャリティー品を盗むっていう罪悪感がなくなるわ」

「あの．．．私は．．．」

「あなたはもう大丈夫。良くやったわ、安全な所に逃げてちょうだい」

「はい．．．あの、本物の展示室に行くには宝石が必要です！それは130階の社長室に隠されています」

「OK」

その返事を受け取ったキャサリン令嬢はアリアに頭を下げて、展示室から出て行った。アリアはすぐに無線に連絡する。

「遊輝ちゃん」

『ああ、聞いた。こつちも片付いた』

「私一人で社長室に行くわ。遊輝ちゃんは影からキャサリン令嬢を見守って」
『了解』

アリアは無線を切る。右手で指を鳴らし、足を屈伸させて軽くストレッチをする。
「さあて……もう一踏ん張り頑張りますか!!」

走り出すアリア、そのまま展示室を抜け、ハリソン号から一度出て、ゲートタワーに向かう。ゲートタワーは警察官もゲート・セキュリティの警備員も居なくなり、もぬけの殻と化していた。アリアはなんの苦勞もなく130階の社長室へ到達した。壁に取り付けられた液晶テレビに応接対応のソファと机、その奥に社長机、さらに隣にはセメントでできた像が置いてある。

「(……このボタンね)」

アリアは社長机に置いてあるボタンを押す。するとセメントの像の後ろにある壁が動き、その像が中に入る。象の口が開いて、口の中からエメラルドの宝石が出てきた。

「趣味悪いわね……まあいいわ。これで鍵もゲット出来たわ」

『おいアリア!!大変だ!!』

「!?どうしたの!?!」

『キャサリン令嬢がハリソン号の私兵に捕まった!!』

「何だって!?!」

『怪盗アリア、聞こえているな。そこにいるのは分かっている』

無線から飛んできた遊輝の焦る声、突如、社長室につけられていた液晶テレビに電源が付き、アンドリユー・ゲートとガラスケースに囚われたキャサリン令嬢が映し出された。

「アンドリユー・ゲート・・・!!」

『この裏切り者を助けたければ屋上に来い。お前だけじゃないぞ、もう一人の奴も一緒にだ』

アンドリユー・ゲートはそれだけを伝え、テレビを切った。アリアはエメラルドを握った右手の拳を力強くする。

「（・・・必ず、助けてあげるから!!）」

アリアは急いで屋上へと目指す。

時刻はもう夕方になっていた。アリアと遊輝の戦いは半日以上経過している。

ハリソン号が停泊している屋上、その四隅には超合金ミサイルが取り付けられた発射装置がセットされ、業務用のカメラ、大型テレビも付けられている。アンドリュー・ゲートはキャサリン令嬢が囚われたガラスケースにもたれかかっている。キャサリン令嬢はガラスケースに手をかざし、不安そうに見ている。

「……来たか」

ゲートはゲートタワーと屋上を繋ぐ入り口を見る。ミサイルの発射装置に隠れていた入り口からアリアがゆつくりと歩き、ヘリポートのマークの中央部分で足を止めた。

「喜べ、お前はこのタワーに侵入した滞在記録を更新した」

「あら、嬉しいわね。記念に手形でも取っておく？」

「結構だ、それよりもう一人はどうした？」

「もう時期来るわよ……ん？」

アリアは囚われたキャサリン令嬢とは反対側に付けられたガラスケースを見る。そこには氷川刑事と桜刑事、二人の刑事も囚われてガラスケースを叩いていた。

「ええ……なんで二人も……」

「仕事熱心でね、我が社の秘密まで嗅ぎつける勢いだつた」

「よつと・・・」

呆れた表情をしているアリア、その説明をゲートが終えたところで、遊輝がやってきた。いつも通りのカイトを使い、空からゲートタワーの屋上に到達。そのままアリアの隣まで歩く。

「何してるのよ」

「しようがねえだろ。敵に囲まれて少し目を離れた隙に囚われたんだから」

「帰ったら罰だからね」

「はいはい、分かりましたよ」

「最期のお話はお終いかね？」

「ええ、それで用件は何かしら？」

「これからセイントの威力をお客様に披露する。その的になれ」

「分かった分かった」

「その代わり、そこにいる3人は解放してあげなさいよ。腐っても取引相手の大事な令嬢でしょ？それに、あんた達もFBIに喧嘩を売るほどの馬鹿じゃないでしょ？」

「もちろん」

用件を飲んだ二人を見て、ゲートは手元にあるボタンを押す。キャサリン令嬢と氷川

刑事と桜刑事のガラスケースが解放される。三人はガラスケースから飛び出し、アリアと遊輝を見る。

「アリアさん!!」

「アリア!!遊輝!!」

「心配しなくていいよキャサリン令嬢、こっちは大丈夫だから隠れていなさい」

「刑事さん達もそこで動かないでくれよ。変なこととして刺激を与えたら何しでかすか分からないから」

キャサリン令嬢と二人にそう言ったアリアと遊輝は互いの背中を押し付ける。キャサリン令嬢は物陰に隠れ、二人の刑事は何も動けないでいた。

「あくあ、最後に遊輝ちゃんに背中を預けたのっていつ以来かしら?」

「ここん所、自分の背中では自分で守ってきたからな……なんか新鮮だぜ……」

ギョルルルルル!!!

二人が空を向いてそんな会話している。四隅にあるミサイルの内一台がエンジンに唸りをあげ、ドリルは回転を始める。屋上につけられた画面にはクリストファーXのエンジンが付けられたコロンプスの航海日誌が映し出された。

「皆さん……これより、クリストファーX製のドリルの破壊力をお見せします! 実験台は世界の大泥棒、怪盗アリアと遊輝です!」

ゲートの紹介により、大型テレビには背中をつけた怪盗アリアと遊輝の姿が映し出される。

ドリユリユリユ!!!

その直後、ミサイルが発射された。ミサイルは屋上の床を抉りながら最短で二人に向かう。そのままミサイルは二人に当たり、爆発する。

「い……いやあああああ!!!」

「!? ……」

あまりにも悲惨な出来事にキャサリン令嬢は悲鳴をあげ、二人の刑事は膝を折って下を向いてしまう。

「……あつけない最後、何?!」

「……へっ、大したことねえな」

「本当に爪が甘いわね、ゲート……」

煙が晴れる。その姿にゲートは驚き、キャサリン令嬢、氷川刑事、桜刑事は喜んだ。二人は無事だった。

「くそっ!!」

慌てたゲートは追加で二発、ミサイルを発射、ミサイルは再び屋上の床を抉りながら二人に目掛けて進むが、アリアは落ち着いて手に隠し持っていたリモコンを発射装置に

向け直す。二発のミサイル起動は二人からずれて、対向にある発射装置を爆発、破壊した。

「ば、馬鹿な!?!」

「ヒュ〜・・・やるね〜」

「キャサリン令嬢に感謝しなくちゃ」

アリアの右手にはキャサリン令嬢から受け取ったペンダント、そしてそのペンダントが開かれてミサイルのスイッチが握られていた。そして、アリアはそのスイッチを持ち、4発目をゲートの額に向ける。

「4発目は貴方に向かうわよ」

「!?!アリア!?!」

「!!チツ!!」

ババババババ!!!

何かを感じた遊輝がアリアを抱えて飛び込む。アリアは持っていたスイッチを手放して避ける。弾は二人を避けるが、アリアが持っていたスイッチは破壊された。

「ホツホツホツ・・・やはりダメでしたか・・・」

「でやがったな・・・」

「ようやく黒幕の登場ね・・・」

アリアと遊輝は自分自身に撃たれた先を見つめる。ハリソン号の入り口、ハリソン号の私兵が銃を構え、スーツ姿の禿げ頭のボディガード二人に守られたお爺さん……ハリソン財閥のトップ、ハリソン・ポーターJrが現れた。

「役に立たない人間はいりません……デモを続けましょう」

ハリソンJrは手に持っていたスイッチを押す。最後に残された超合金ミサイルが発射がされる。その標的は……ゲートだ。

「ヒツ!?うわああああ!!!」

ゲートは動けなかった。そのままミサイルに衝突、爆発してしまった。その様子を近くで見ていたキャサリン嬢と二人の刑事は口を開けて見ることしかできなかった。

「さて……知りすぎたあなた達もご退場願いますよう……この世から」

ハリソンJrがボディガードと共にハリソン号に戻る。ハリソン号の私兵は二人に向けて銃を乱射しながら、ヘリポートに走り出す。

ババババ!!!

「遊輝ちゃん!!!」

「OK!!」

アリアと遊輝はそれぞれ銃と日本刀を取り出し、鉛玉が飛び交うこの場を駆け抜ける。遠距離攻撃のできるアリアが的確に銃を撃ち、ハリソン号の私兵の銃を弾き飛ば

す。近くまで到達したら遊輝が日本刀を使い、ハリソン号の私兵をノックアウトしていき。

「ひ、ひいい!!!」

「に、逃げろ!!!」

二人の戦闘能力で完全にびびってしまったハリソン号の私兵達は銃を捨てて逃げってしまう。そして、ハリソン号のエンジンが動き出した。

「乗り込むわよ!」

「任せろ!!!」

『ウオオオ!!!』

ハリソン号の飛行船からは追加でゲート・セキュリティの警備員とハリソン号の私兵が出てくる。二人は駆け出し、飛びかかってくる敵達を殴りつけたり、蹴りを入れたり、受け流したりして、飛行船に乗り込んだ。

「桜!!! 私たちも行くわよ!!!」

「はい!!!」

一方、アリアと遊輝が乗り込んでいるときに氷川刑事と桜刑事も銃を取り出し、ゲート・セキュリティの警備員とハリソン号の私兵を叩き飛ばす。そのまま二人の刑事も飛行船の中へと飛び込んだ。

「退け!!」

「ぐはっ!!」

「邪魔しないでおねんねしてなさい!!」

「ゴホッ!!」

ハリソン号に乗り込んだアリアと遊輝は飛行船を止めるため、動力エリアへと向かう。途中、出てくるハリソン号の私兵を次々と蹴散らしていき、目的となる動力室に入る。

「.....」

「!!キャサリン令嬢!!」

「!!アリアさん!!」

銃を構えて部屋に入るアリア。中には逃げたはずのキャサリン令嬢が動力室のパコソンを動かしていた。

「何でまた危険なことに．．．逃げなさいって言ったでしょ．．．」

「養父を止めたいんです．．．今の養父はお金儲けなんて目にも暮れてません。自分が世界を動かすことしか頭にありません。そんな養父をもう見てられません」

「全く．．．」

「こつちを手伝ってください」

「分かったよ．．．」

「．．．!!」

バン!!!

「なっ!?!」

銃声が聞こえた。その瞬間、キャサリン令嬢は倒れる。アリアは飛び込んでキャサリン令嬢が地面に着く前に抱え込む。

「大丈夫!?! ねえ!?!」

「う．．．うぐ．．．」

「デメエ．．．ハリソンJr!!」

遊輝は日本刀を構えて銃声が聞こえた方向に目を向ける。そこには銃を構えたハリソンJrがボデイガード一人を連れて立っていた。

「飼い犬との別れはいつも淋しいものです．．．こいつらの始末は任せます」

「待ちやがれ!!」

遊輝は声をあげる。だがハリソンJrは別の出口から出てしまった。突如、そのボディガードの身体が光りだす。

「ぐ、・・・ぐああああ!!!」

「!?!」

「ぎ、サイボーグ!?!」

天に向け、咆哮を上げる。上着のスーツが破れ、身体が電気で帯び、体から電気コードの回線が見える。サイボーグは右手につけられた電気に帯びた鉄球を二人に向けて放つ。

「チツ!!」

「遊輝ちゃん!!」

遊輝がアリアの前に立ち、日本刀で斬りつけて防御する。

「ここは俺に任せろ!!お前はここから離れてその子の応急処置を頼む!!」

「頼んだわよ!!」

アリアはキャサリン令嬢を抱え込み、動力室から出る。動力室の入り口で緊急警報装置のボタンを押しながら部屋を出た。動力エリアに緊急装置が鳴り、動力室の扉が固く閉じられる。

「時間はねえ．．．さっさと片付けるぞ!!」

「ぎゃあああああ!!!」

日本刀を両手に持ち、構えた遊輝とサイボーグはお互いに駆け出してそれぞれ日本刀と鉄球をぶつける。反動で互いに吹き飛ばされるが、重量が軽い遊輝が少し飛ばされ、壁際に追い込まれる。

「(力任せじゃダメだな。あいつ、素早さは無さそうだし．．．)」

「ぐぎゃああああ!!!」

「敵に向かって突進かよ．．．筋肉バカめ!!」

遊輝は突進してきたサイボーグをギリギリまで引きつけてジャンプ、サイボーグは壁に激突して左手の部品が取れる。

「ぎゃ．．．ぎゃあああ」

「案外脆いな。だったらあまり時間をかけずにすみそうだ!!炎舞―蝶の舞!!」

サイボーグは左手が取れたことお構いなしに、遊輝に向けて電気を帯びた鉄球を飛ばす。遊輝は左に素早く避けて日本の日本刀を優雅にまわし、サイボーグの右手と鉄球を繋げているワイヤーを斬る。

「ぎゃ!?ぎゃあああ!!!」

「へっ、攻撃手段失つて自暴自棄か!!じゃあさっさとトドメ刺してやるよ!!!炎舞―龍の

舞!!」

両手を失い、当たり構わず攻撃をするサイボーグ。そんなサイボーグに目掛けて遊輝は走り出し、サイボーグの首元を掴み上に投げる。そのまま自身も大きくジャンプしてサイボーグが落ちないよう高速で斬り続ける。十数秒後、体を切り刻まれ、回路の線が全て切られたサイボーグは地面に大きな音を立てて背中から落ち、そのまま爆発した。地面に着地した遊輝はその様子を見ようとせず、背を向ける。

「へっ、大したことともねえな……ん?」

余裕そうな笑みを浮かべている遊輝だが、足元に妙な熱を感じた。足元を見ると、ズボンの裾とマントが爆発した衝撃で火を纏っていた。

「くそっ!!最後の最後まで可愛げのないやつめ!!服がダメになったらあのクソ上司の罰が重くなるんだよ!!あっちゃん!!!」

慌てて火を消そうとするがなかなか消えない。さらに先程の戦闘のせいで動力エリアのエンジンがおかしくなり、今にも崩れそうな雰囲気をしている。

「畜生!!一旦撤退だ!!」

慌てて火を消しながら遊輝は動力室から抜け出す。

遊輝が動力室でサイボーグと戦っている時、撃たれたキャサリン令嬢を介護したアリアはハリソン号の客室にいた。キャサリン令嬢をソファに寝かせ、隣にあつた医務室から包帯を取り、応急処置をする。

「う．．．．う．．．．」

「大丈夫、もう動かなくていいから」

「ご、ごめんなさい．．．私．．．何も役に立てなくて．．．」

「そんな事ないよ。あなたがくれたこのペンダントのお陰で私たちは助かったんだから。ほら」

アリアは握りしめていたペンダントをキャサリン令嬢の右手に返し、握りしめるように渡した。

「う．．．お願い．．．です。養父を．．．止めて．．．」

「分かつてるよ」

「私．．．．仮面の斥候の一員だったの．．．」

「えっ?」

「3年前・・・グールに誘拐されて・・・そのときに初めて養父の目的を知って・・・私は仮面の斥候の一員となった・・・だけど、それが・・・養父にバレて・・・グールを裏切らないと・・・子供たちの命が無いと・・・」

「・・・」

「お願い・・・養父を・・・日記を・・・処分して・・・」

「・・・心配しなくていいわ。コロンブスの日記は予告通り、私たちが頂く。あんたの養父の罪は警察がしっかりと暴いてみせるわよ。ね、氷川刑事」

「・・・」

ソファに寝転び、今にも息が絶えそうなキャサリン令嬢にアリアは額に手をかけて優しく声をかける。そして、客室の入り口に目を向ける。そこには全ての事情を知った氷川刑事と桜刑事がいた。

「・・・」

「氷川さん・・・」

ゴゴゴゴゴゴ!!!

「わわわ!!!ちっ!!船を出すつもりね!!刑事さん!!」

「桜!!キャサリン令嬢を頼む!!ドクターへりを屋上に呼んだわ!!私はアリアと一緒にハリソンJrの所に行く!!」

「はい!!」

桜は急いでキャサリン令嬢を抱え込み、客室から部屋を出る。氷川刑事は銃を取り出し、弾を装填する。アリアは氷川刑事の横に立ち、同じく銃に弾を装填する。

「おたく、銃の腕前は？」

「心配しなくても日本時代に射的選手権で5連覇してます」

「弾は？」

「18発」

「へえ、じゃあ一時休戦としますか」

「盗みは許しませんからね」

お互いに確認とつて笑みを浮かべたアリアと氷川刑事はハリソンJrがいるであろう展示室へと駆け出す。

一方、キャサリン令嬢を抱え込んだ桜刑事はハリソン号のエントランスからゲートタワーに移ろうとする。

「!? まずい・・・」

だが、ハリソン号はすでに動き出し、少し間が空いていた。この距離を飛ばないとキャサリン令嬢が助からない。意を決した桜刑事は二、三步下がり、大きくジャンプする。

「そうりゃ!!」

「捕まれ!!」

ジャンプした桜刑事の身体にゲートタワーの飛行船乗り場にいた遊輝がワイヤーを飛ばす。ワイヤーは桜刑事の身体に纏わり付き、遊輝はワイヤーを思いつきり引っ張り、二人を抱き抱える。

「大丈夫か!？」

「今は大丈夫です!!もうすぐドクターヘリが来ます!!」

「よし……あとは任せたぞ、アリア」

「やっと戻ってきたわ……こいつね」

展示室にたどり着いたアリアと氷川刑事。アリアは展示室に飾られていた宝石箱を見つめる。その展示品の横にあるボタンを押し、ガラスケースをオープン、宝石箱にゲートタワーの社長室から盗んだエメラルドの宝石をはめ込む。展示室に少し地響きが起こり、天井から螺旋階段が降りてきた。

「ここから本物の展示室に行くのね……」

「と……その前に……」

氷川刑事は銃を構え、階段に登ろうとしたがアリアは宝石箱と反対側に飾られていた望遠鏡を手にして鞆の中に入れる。

「また勝手に盗み出して……」

「良いじゃん。どうせ直ぐに所有者はいなくなるし」

「後でキツチリお灸をすえます。覚悟してください」

「分かってるよ……行くわよ」

アリアを戦闘に二人は螺旋階段を駆け上がる。すぐに上にある本物の展示室に入り、アリアは辺りを見渡す。偽物のコロンブスの航海日誌があった場所とちよūd真上の同じ場所にそれらしき場所があった。アリアは笑みを浮かべ、その場所に駆け寄る。

「……!!チツ」

バン!!

だが、その場所に日誌は無かった。アリアは舌打ちをして、すぐに銃声が聞こえる。その場所に目を向けるとハリソンJrがコロンブスの航海日誌が入っているであろう手提げ鞆を抱え込み、アリアに向けて銃を撃っていた。

「ハリソン!!」

「やはり来ましたね……」

バン!!バン!!

ハリソンJrはこうなることを予感していたようだ。すぐに二発目、三発目と撃つが照準を合わせてないせいか動いていないアリアに弾が当たらない。

バン!!バン!!カチャ、カチャ

「チツ!!」

弾切れを起こした銃にハリソンJrは苛立ちを隠さず、銃を投げ捨てて逃げ始める。アリアと氷川刑事はハリソンJrの後を追う。ハリソンJrは廊下を走り、扉を開けて逃げる。アリアと氷川刑事もその扉を開け、顔を押さえつける。

「くっ……風が強いわね。マントは直しましょう」

時刻は夜、既に飛行船は動き出し、街を抜けて海上を飛んでいる。アリアはマントを外して鞆の中に直し、非常用梯子を使いハリソンJrを追いかける。上空を飛んでいるため、風の抵抗が凄まじく走っているようではなかなかスピードが出ない。やがてアリア

と氷川刑事は数台のヘリコプターが並ぶ簡易の飛行場の場に辿り着き、ハリソンJrを追いかける。

「貴方はコロンプスの最大の発見をご存知でしょうか？」

「知らん」

「くだらない話に付き合いません」

「クリストファーXですよ。最も、コロンプスは旅の記念にエンブレムを作っただけですがね、なんせ水に溶けてしまう役立たずの鉱石なんですから。ですが熱を加え、加工することでダイヤよりも硬く、鉄よりも強度で、熱にも強い合金になることを発見したのですよ」

「興味ないわ」

「どうでも良い話ね」

「クリストファーXは戦争を変えます。私はこの鉱石で世界のトップになるのです」

ゆつくりと歩き、ジリジリと追い詰めるアリアと氷川刑事。だがハリソンJrの後ろにヘリコプターがあることを二人の目に入っている。どうにかして詰めようとするが、なかなか前に進まない。やがて、ハリソンJrがヘリコプターの扉に手をかざそうとする。

……ドカーーン
!!!!!!

「良いでしょう。と」とん相手にしてあげます!!」

「グワアアアアア!!」

アリアと氷川刑事は銃を取り出し、それぞれ反対方向から大回り走り出す。サイボーグを挟み撃ちにする。その間にアリアは木の杖も取り出す。

「フン!!」

バン!!バン!!

開幕の狼煙にアリアが銃を二発、サイボーグに向けて撃つ。サイボーグは自身が撃たれる前に青色のバリアを貼り、アリアの攻撃を防ぐ。

バン!!

「ギヤアアアア!!」

「背中がガラ空きですよ!」

サイボーグが前を守っているとき、氷川刑事が後ろからサイボーグの背中目掛けて一発放つ。サイボーグは前しか見ていない。アリアの攻撃は簡単に防いだが、氷川刑事の攻撃はいとも容易く受けてしまう。

「グキヤアアア!!」

サイボーグは自身に展開していたバリアを解除、後ろを向いて口を大きく開き、レーザー光線を放つ。氷川刑事は走りながらそのレーザー光線を横にかわし、崩れた鉄屑を

壁にしてガラ空きとなつてゐる口に銃を放つ。

バン!!ゴン!!

「ギャアアアア!!!」

「筋肉バカじゃなくて能無しサイボーグね!!」

氷川刑事の銃がサイボーグの左手に当たり、また後方からアリアが木の杖を降り出したファイアボールをサイボーグの後頭部にぶつける。

「な、何をしておる!! さっさとあいつらを倒せ!!」

防戦一方のサイボーグにハリソン Jr は慌て始める。だが、サイボーグの回路が後頭に攻撃を加えられたことで可笑しくなり、挙動がままならない。何とか右腕からレーザーで出来た剣を作り、アリアに向かって高速移動する。だが、アリアは木の杖に乗り、その攻撃も難なくかわす。

「遊んでゐる時間はありません!! さっさとトドメを刺します!!」

「これで………終わりよ!!」

バン!!バン!!

アリアと氷川刑事が撃つた鉛弾はそれぞれサイボーグの胸と頭を貫通する。回路とエンジンを撃ち抜かれたサイボーグは完全に動きが止まってしまふ。

「アツ……アツ……」

バコーーーン!!!!

電気回路がショートしてそのまま背中から倒れる。そして地面についた所で爆発して粉々になってしまった。

「ひ、ひいいい!!!」

ハリソンJrは日誌を入れた鞆を抱え込み、爆風に耐える。顔を上げるとアリアと氷川刑事の二人が近くにいた。

「パ、パートナーになりませんか？私と一緒に世界を制しましょう」

「興味ないね……こいつ以外は」

「ひっ!？」

アリアはハリソンJrから鞆を引つたくる。氷川刑事は手錠を取り出してハリソンJrに近づく。

「ハリソンJr、大統領官邸襲撃事件の容疑で緊急逮捕します」

「あ、ああ……」

バコン!!

「あれ!？」

氷川刑事が手錠をかけようとしたとき、再び飛行船の動力エリアで爆発が起き、飛行船が大きく揺れる。アリアと氷川刑事はその衝撃でバランスを崩してしまい、そのタイ

ミングを見てハリソンJrがアリアが引ったくた手提げ鞆の手提げの片方の部分を引つ張る。

「が、返せー！！！！」

「ぐっ！！返すんだったらはなっから盗ったりしないわよ！！！！」

「がえ、ぜー！！！！」

ビリッ！！

「ひっ!?!」

力が強すぎたのか、はたまた鞆の手提げ部分が弱っていたのか、ハリソンJrが持つていた手提げ部分が鞆から外れた。ハリソンJrはその反動を止めることは出来ず、飛行船から落ちてしまう。

「ああああああああ！！！！」

ハリソンJrの悲鳴は段々と聞こえなくなった。その様子をアリアと氷川刑事は真顔で見守っていた。

「……………小悪党に相応しい情けない最期ね」

「ええ……………」

バーー！！！！

「ちっ!?!もう持たないわよ!!どうするのアリア!!」

「ここは危ない!!前に避難しましょう!!」

アリアと氷川刑事はここで待つのは危険と判断、すぐに走り出し、まだ安全地帯となっている飛行船の前方部分へと走り出す。爆発して炎が辺りに舞い上がっている中、炎をかき分けて前方部分に到達する。

バーバーン!!!!

「チツ・・・」

「不味いわね・・・もう数分も持たないわよ」

「アリア!!!」

「!?遊輝ちゃん!!」

海上を飛んでいる飛行船、暗い夜空の中に声が響く。アリアと氷川刑事は声が聞こえた方向に目を向ける。そこにはドクターヘリを運転する遊輝とドクターヘリの扉からロープを垂らした桜刑事がいた。

「二人とも!!ロープに捕まってください!!」

「くっ!」

「はっ!!」

桜刑事の言葉に従い、二人はロープに捕まる。それを見た桜刑事はボタンを押し、ロープを引き上げる。その状態のまま、遊輝は墜落を始めている飛行船から離れる。

バーーーーーン!!!バーーーーーン!!!

飛行船はそのまま爆発を繰り返し、ゆっくりと海面に到達、最後に大きな爆発をしてハリソン号は海の藻屑へと化した。

「これがコロンブスの航海日誌、でこれがコロンブスの望遠鏡、さらにこれがクリストファーXよ」

「へえ、望遠鏡もあの爺が持っていたのか」

「そうよ、全く。どこを探しても見つからないわけね」

ハリソン号から脱出したアリアは後部席からドクターへりを運転する遊輝の間に入り、戦利品をマジマジと見る。下を見るとまだまだ海上が広がる。相当遠くまで来たよ

うだ。

「これでようやくコロンプスの財産を探しにいけるな」

「そうだね。ところで遊輝ちゃん、私、いっぱい質問あるけど良い？」

「何だ？」

「何でドクターヘリなんて運転してるのよ？」

「キャサリン令嬢を運んだヘリをちよつと借りたんだ。キャサリン令嬢は無事だぞ」

「それなら良かった。それと、その焦げた服は？」

「サイボーグと戦っている時に焦げた」

「・・・罰ゲーム追加ね、それと、これはどういう状況かしら？」

「しようがねえだろ。ヘリコプター借りた時にこいつも一緒に乗ってきたんだからさ

」

「文句言っていないでさっさと操縦してください」

アリアは遊輝の運転席の隣の運転席に目を向ける。そこには桜刑事が拳銃を持って片手で操縦バーを握り、遊輝の運転をアシストしている。さらによく見ると、遊輝の両手は手錠が嵌められて、シートベルトは抜けないように特殊な鍵がかけられている。

「つてかよくその状態で運転できたわね。上のボタンの操縦、どうやって触っているの

よ」

「私が操作してますよ。彼ほどではありませんが私もヘリコプターの操縦免許を持っていますので」

「へえ……それでこのヘリはどこに向かっているのかしら?」

「近くの警察署よ。変な真似しないで貴方もさっさと盗んだものを鞆に直して両手をこちらに向けなさい」

アリアの後頭部に銃が向けられる。一緒に戦った氷川刑事は既に停戦協定を外し、二人を捕まえることに頭をシフトしている。

「その両手の物とシートベルトの鍵、どうして外さないの?」

「ヘリコプター運転しながらそんな器用なこと出来ねえよ。ドクターヘリはいつものヘリと違って大きいし操縦方法も複雑なんだから」

「じゃあ私が運転したら外せるっこと?」

「あつたり前「ダメです。遊輝さんがそのまま運転してください」……」

「貴方も良い加減両手を差し出しなさい」

「……じゃあこれで手を打ちましようよ」

アリアは頭を運転席から氷川刑事の方に目を向け、コロンブスの航海日誌にあつたクリストファーXのエンブレムを氷川刑事に渡す。

「……」

「それ、世界中の軍事国が涎を垂らしながら欲しがってるわよ」

「・・・・・・・・・・フン」

「あつ・・・・・・・・」

氷川刑事はピンとクリストファーXを弾く。ドクターヘリの窓は空いていて、クリストファーXは海へと落ちていった。

「あくあ、もつたいない・・・・」

「私たちの仕事は貴方達を捕まえることよ。軍部を喜ばすためにここにいるんじゃないの」

「さっすが、クリストファーX以上の堅物ね」

「さっさと鞆に直して両手を出しなさい。次何か言ったら足撃つわよ」

「こ、こわ・・・・・・・・わ、分かりましたよ。言うこと聞きますから・・・・」

氷川刑事に銃を突きつけ威嚇を浴びて、アリアは萎縮してしまった。観念したアリアはコーンブスの航海日誌を奪った鞆に入れて両手を出す。すぐに氷川刑事から手錠をかけられる。手錠をかけた後、氷川刑事はアリアが盗んだ品を手元に引き寄せた。アリアは手錠を見つめて、溜め息を吐いた。

「はあく・・・・・・・・せっかく苦勞して手に入れたのに、これじゃ水の泡だよ」

「苦勞をかけるところを間違えてるんです。そのまま何もせずじっとしていなさい」

「……はい」

「お〜い、街見えてきたぞ。どっち行けば良いんだ？」

「今見てる方角から左に30度に機体を向けてください。15分飛んだら警察署が見えます」

「へいへい」

氷川刑事に拳銃を突きつけられ、アリアは肩を落とす。ヘリコプターは海上から陸地へ移動、遊輝は何処に向かうのか問い、桜がすぐに答え方向転換する。遊輝は桜に言われた指示通りにヘリを動かす。しばらく飛んでいると目の前にスポットライトが当てられているヘリコプター場が目に見え、近くに警察署が見える。

「もうすぐ警察署です。すでにFBIと地元警察が囲んでいますので無駄な抵抗はやめてください」

「いよいよ貴方達も年貢の納め時よ」

「あくあ、嫌だな〜」

「ん〜……どうしたものか」

「余計なこと言っただけさつさと……なっ!？」

「?桜、どうし!?!な、何これ!?!」

二人の刑事は驚いた。アリアと遊輝にかけた手錠がいつのまにか自分たちに嵌めら

れていた。それだけではない、アリアと氷川刑事を助けるために使った昇降用のロープが破壊されていて、二人を座席で縛り付けていた。

「じゃあ俺たち、ここで帰るから!!後の運転よろしく!!」

「遊輝ちゃん!!」

「おうよ!!」

バン!!

「ま、待ちなさい!!」

アリアはドクターヘリの扉を開ける。盗んだものを入れた鞆を手にして遊輝とアリアは飛行中のドクターヘリから飛び降り、すぐにカイトを広げて闇に消えてしまった。

「うくん……ここがこれで……これが西インド諸島のカリブ海だから……その近くかしらね」

数日後、サンフランシスコの郊外、アジトに戻ったアリアは手にしたコロンブスの航海日誌に挟まれた航海地図と望遠鏡、日記に残されたメモを頼りにコロンブスの財宝の隠された島を探している。

「もう少しで分かりそう……あつ、3時だ。遊輝ちやくん、コーヒーとおやつ頂戴」

壁に飾つてある時計が3時を過ぎているのを見て、アリアは航海地図と望遠鏡を机に置き、遊輝の名を呼ぶ。そんなアリアの所にメイド服を着た見た目が小学生か中学生に見えるメイドが一人、顔を真っ赤にしてコーヒーとモンブランを2つずつお盆に乗せて持ってきた。

「／／／お、お嬢様……本日のコーヒーとモンブランです」

「センキュセンキュ、じゃあ一旦休憩に入りましょうか。遊輝ちゃんも一緒に食べましょうか」

「／／／畜生……何でこんな目に……」

「キャサリン令嬢を相手の手にやった罰、刑事さんを連れてきた罰、そして何よりも重罪がアリアさんの服を黒焦げにした罰」

「お前だつてミスしたじゃん」

「お嬢様をお前発言と馬鹿にした罪、ー20点」

「うわああああ!!!」

指を折りながらアリアはメイドに手を突き出す。メイド服を着たメイドは遊輝であつた。彼は男である、もう一度言おう、彼は男である。だが、見た目はそこら辺にいる小中学生のメイドにしか見えない。発狂して顔を机に伏せている遊輝を置いて、アリアはフォークを手にしてモンブランを崩し、一口食べる。

「んく!!美味しい!!やっぱ遊輝ちゃんの手作りケーキは世界一ね!!+2点」

「な、なあアリア・・・そろそろ着替えたいんだけど・・・」

「あつ、お嬢様抜いた。文句も言った、ー5点ね」

「うがああああ!!!」

「下品な言葉、ー10点ね」

アリアはこの前の遊輝への罰として、メイド服を来て、メイドとしてアリアをご主人様にするよう奉仕する罰を受けた。最初は0点から始まり、30点になれば罰ゲーム終了だが、現在の彼の点数はー53点である。この前の件から数日経つて、まだ罰ゲームは続いているのだ。

フォークをお皿に乗せ、コーヒーを一口飲んだアリアは再び航海地図と望遠鏡を手

して島探しを続ける。

「それより遊輝ちゃん、グールちゃんって特赦状で刑務所から出るんだっけ？」

「／／／／は、はい・・・ハリソン財閥とゲート・セキュリティの非合同の研究が世間に知れ、それを暴こうとしたグールは特赦として釈放されると」

「それにキャサリン令嬢ももうすぐ退院だったわね・・・ここね」

望遠鏡を持ったアリアはコロンブスの航海地図を持って、ある部分を見つげニヤリと笑みを浮かべた。

数ヶ月後、西インド諸島のとある無人島。東西に少し山形に盛っており、海岸線の砂浜と少しの草原、そしてヤシの木しか見えない小さな無人島、ここに一組の男女のペアがいた。

「確か……この辺りのはず」

「グール〜」

「おっと、どうしたんだ」

「なんか……こんな無人島に二人でいれるなんて……嬉しくて……」

彼らの名はグールとキャサリン、彼らはとある人物からの手紙を受け取り、この未開の地にたつた二人だけで足を踏み入れたのだ。グールとキャサリンは手にした地図だけを頼りに砂浜の海岸線を進んでいく。二人はいつしか沈んでいく太陽を見つめている。

「……綺麗な夕陽ね」

「ああ……まさか夕陽でこんなに感動するなんて……キャサリン!!」

「……はっ!!」

体を反転させたグールはキャサリンを呼ぶ。その先に見える洞窟には水色に輝く、大きな鉱石が大量に地面から生えていた。

「……クリストファーXの洞窟」

「グール!!見て!!」

キャサリンが指を指す。洞窟の少し奥に黄金に輝く財宝が大量に隠されていたのだ。金の延棒から始まり、大量の宝石に当時から使われていたであろう金貨……彼らはコロンブスのお宝を見つけたのだ。キャサリンは地図と一緒にもらった手紙を手にする。

『グールちゃんの特赦祝いとキャサリン令嬢の退院祝いにささやかなプレゼントを送る。』

怪盗アリアと遊輝』

「全く……この何処がささやかなプレゼントだよ、あいつら」

「……これで、不幸な子供達を救える」

「ああ……」

グールはキャサリンの肩を組み、二人はそのお宝を見つめていた。一方、この幸せな二人を見ている二人組がいた。彼らは双眼鏡で幸せな二人を見て喜んだ表情をしている。

「……良かったな」

「ええ、これで私たちがみたいな子を少なくできるわ」

彼らは怪盗アリアと遊輝。二人よりも先にこの島に到達して、わずかばかりの金貨だけを手にして残りを全て二人に渡したのだ。二人は双眼鏡を外し、体を反転して流れ落ちる滝を見つめる。

「……………綺麗だな」

「そうね……船乗りのコロンブスにとつて、水はどんな宝石にも変えがたい貴重なものだったはず。あの航海地図と日記は本当はそのためのものだったはずよ」

「そうだな……………」

「もう……………この地図もいらさないわね」

そう呟いたアリアは苦勞して手にしたコロンブスの航海地図を手放す。航海地図は風に流されて海へ辿り着き、そのまま漂流した。

「ところで遊輝ちゃん」

「何だ？」

「次の仕事なんだけど……………」

アリアは遊輝の耳元を耳打ちする。それを耳した遊輝は口元をニヤリとする。

「良いねえ……………腕がなるぜ」

「じゃあ、行きましようか!!」

「ああ!!」

遊輝の返事を聞いて、二人は滝から離れカイトに乗りこの島から離れた。

今宵、世界のどこかに眠るお宝やお金は怪盗アリアと遊輝によって盗まれるかもしれない……

「私たちに盗めないものは何一つ無いわよ♪」

「全く……無駄な時間^{ロツク}かけても全部同じなのに、俺が全部解除して斬ってやる！」